

四街道市小屋ノ内遺跡(2)

縄文時代～中・近世編

— 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ —

[第2分冊]

平成18年10月

独立行政法人 都市再生機構

財団法人 千葉県教育振興財団

よつ かい どう こ や の うち
四街道市小屋ノ内遺跡(2)

縄文時代～中・近世編

— 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ —

[第2分冊]



第2分冊目次

本文目次

(第2分冊)

第4章 奈良・平安時代	225
第1節 竪穴住居跡	235

(第2分冊)

第165図 SI-001 (1)	226	第199図 SI-028 (2)	266
第166図 SI-001 (2)	227	第200図 SI-029	268
第167図 SI-002 (1)	228	第201図 SI-030	269
第168図 SI-002 (2)	229	第202図 SI-031	270
第169図 SI-002 (3)	230	第203図 SI-032	272
第170図 SI-002 (4)	231	第204図 SI-035	273
第171図 SI-004 (1)	233	第205図 SI-036	275
第172図 SI-004 (2)	234	第206図 SI-037	275
第173図 SI-004 (3)	236	第207図 SI-038	277
第174図 SI-004 (4)	237	第208図 SI-039	278
第175図 SI-004 (5)	238	第209図 SI-040	279
第176図 SI-004 (6)	239	第210図 SI-041	280
第177図 SI-004 (7)	240	第211図 SI-042	281
第178図 SI-005	242	第212図 SI-043 (1)	282
第179図 SI-008	243	第213図 SI-043 (2)	283
第180図 SI-009	243	第214図 SI-044 (1)	284
第181図 SI-010	244	第215図 SI-044 (2)	285
第182図 SI-011	245	第216図 SI-044 (3)・045	287
第183図 SI-013 (1)	246	第217図 SI-047A (1)	288
第184図 SI-013 (2)	247	第218図 SI-047A (2)	289
第185図 SI-013 (3)	248	第219図 SI-047B	291
第186図 SI-013 (4)	250	第220図 SI-048	292
第187図 SI-013 (5)	251	第221図 SI-050 (1)	293
第188図 SI-014 (1)	252	第222図 SI-050 (2)	294
第189図 SI-014 (2)	254	第223図 SI-051	296
第190図 SI-014 (3)	255	第224図 SI-052	297
第191図 SI-015 (1)	257	第225図 SI-053 (1)	298
第192図 SI-015 (2)	258	第226図 SI-053 (2)	300
第193図 SI-015 (3)	259	第227図 SI-054 (1)	302
第194図 SI-016	260	第228図 SI-054 (2)	303
第195図 SI-018	262	第229図 SI-055	303
第196図 SI-019	263	第230図 SI-056 (1)	305
第197図 SI-025	264	第231図 SI-056 (2)	306
第198図 SI-028 (1)	265	第232図 SI-057・058	307
		第233図 SI-059	308

第234図	SI-060	309	第277図	SI-098 (2)	365
第235図	SI-061	311	第278図	SI-099	366
第236図	SI-062	312	第279図	SI-100	367
第237図	SI-063 (1)	313	第280図	SI-102	369
第238図	SI-063 (2)	314	第281図	SI-104	371
第239図	SI-064・SK-072	316	第282図	SI-105	372
第240図	SI-067 (1)	318	第283図	SI-106	373
第241図	SI-067 (2)	319	第284図	SI-107	374
第242図	SI-069	320	第285図	SI-108	375
第243図	SI-071	321	第286図	SI-109	376
第244図	SI-072 (1)	323	第287図	SI-110	378
第245図	SI-072 (2)	325	第288図	SI-111	380
第246図	SI-072 (3)	326	第289図	SI-113	381
第247図	SI-073	327	第290図	SI-115	383
第248図	SI-075 (1)	329	第291図	SI-117 (1)	384
第249図	SI-075 (2)	330	第292図	SI-117 (2)	385
第250図	SI-077	332	第293図	SI-118 (1)	387
第251図	SI-079	332	第294図	SI-118 (2)	388
第252図	SI-080	334	第295図	SI-119	390
第253図	SI-080及び周辺の奈良・平安時代遺物 出土状況	335	第296図	SI-120	392
第254図	SI-017等SI-080周辺の奈良・平安時 代遺物	336	第297図	SI-121	393
第255図	SI-081	337	第298図	SI-122	394
第256図	SI-082 (1)	338	第299図	SI-123 (1)	395
第257図	SI-082 (2)	339	第300図	SI-123 (2)	397
第258図	SI-083 (1)	341	第301図	SI-123 (3)	398
第259図	SI-083 (2)	342	第302図	SI-124	399
第260図	SI-085	344	第303図	SI-126	400
第261図	SI-086 (1)	345	第304図	SI-127	402
第262図	SI-086 (2)	346	第305図	SI-128 (1)	404
第263図	SI-087	347	第306図	SI-128 (2)	405
第264図	SI-088 (1)	348	第307図	SI-128 (3)	406
第265図	SI-088 (2)	349	第308図	SI-128 (4)	407
第266図	SI-089 (1)	351	第309図	SI-129A・SI-129B	409
第267図	SI-089 (2)	352	第310図	SI-130	411
第268図	SI-090	354	第311図	SI-131	413
第269図	SI-091	355	第312図	SI-132 (1)	416
第270図	SI-092	357	第313図	SI-132 (2)	417
第271図	SI-093	358	第314図	SI-133	419
第272図	SI-094	359	第315図	SI-134	420
第273図	SI-095	360	第316図	SI-135	421
第274図	SI-096	362	第317図	SI-137 (1)	423
第275図	SI-097	363	第318図	SI-137 (2)	424
第276図	SI-098 (1)	364	第319図	SI-137 (3)	425
			第320図	SI-138	426
			第321図	SI-139	428

第322号	SI-140	429	第367号	SI-199 (1)	481
第323号	SI-141	430	第368号	SI-199 (2)	482
第324号	SI-142	431	第369号	SI-200	484
第325号	SI-143	432	第370号	SI-201	485
第326号	SI-144	434	第371号	SI-202 (1)	487
第327号	SI-147 (1)	436	第372号	SI-202 (2)	488
第328号	SI-147 (2)	437	第373号	SI-207	489
第329号	SI-148	438	第374号	SI-208	490
第330号	SI-149	439	第375号	SI-209	492
第331号	SI-150A	440	第376号	SI-300	493
第332号	SI-150B	441	第377号	SI-301	494
第333号	SI-151	443	第378号	SI-302	495
第334号	SI-152	445	第379号	SI-303	496
第335号	SI-153	446	第380号	SI-304	497
第336号	SI-154 (1)	447	第381号	SI-305	499
第337号	SI-154 (2)	448	第382号	SI-306	500
第338号	SI-155	449	第383号	SI-307 (1)	503
第339号	SI-156	451	第384号	SI-307 (2)	504
第340号	SI-157	451	第385号	SI-307 (3)	505
第341号	SI-158	452	第386号	SI-307 (4)	506
第342号	SI-159	453	第387号	SI-307 (5)	507
第343号	SI-160	453	第388号	SI-308	509
第344号	SI-161	454	第389号	SI-309	510
第345号	SI-162	454	第390号	SI-310	512
第346号	SI-163	455	第391号	SI-311	514
第347号	SI-164	456	第392号	SI-312	515
第348号	SI-165	457	第393号	SI-313 (1)	517
第349号	SI-166	459	第394号	SI-313 (2)	518
第350号	SI-167	460	第395号	SI-314	519
第351号	SI-169	461	第396号	SI-315	519
第352号	SI-174	462	第397号	SI-316	520
第353号	SI-178	463	第398号	SI-317	521
第354号	SI-179	465	第399号	SI-318	522
第355号	SI-180	466	第400号	SI-319	523
第356号	SI-188	468	第401号	SI-320 (1)	525
第357号	SI-189	469	第402号	SI-320 (2)	526
第358号	SI-190	470	第403号	SI-321	527
第359号	SI-191	471	第404号	SI-322	538
第360号	SI-192	472	第405号	SI-323	530
第361号	SI-193	473	第406号	SI-324	531
第362号	SI-194	475	第407号	SI-325	532
第363号	SI-195	476	第408号	SI-326	534
第364号	SI-196	478	第409号	SI-327	536
第365号	SI-197	479	第410号	SI-328	538
第366号	SI-198	480	第411号	SI-329	540

第412回	SI-330	541	第452回	SI-365	590
第413回	SI-331	542	第453回	SI-366	591
第414回	SI-332	543	第454回	SI-367	592
第415回	SI-333A (1)	544	第455回	SI-371	594
第416回	SI-333A (2)	545	第456回	SI-372	595
第417回	SI-334 (1)	547	第457回	SI-373	597
第418回	SI-334 (2)	548	第458回	SI-374	598
第419回	SI-335 (1)	550	第459回	SI-375	600
第420回	SI-335 (2)	551	第460回	SI-377	601
第421回	SI-336	552	第461回	SI-378	603
第422回	SI-337 (1)	553	第462回	SI-379	604
第423回	SI-337 (2)	554	第463回	SI-380	606
第424回	SI-338	555	第464回	SI-381	607
第425回	SI-339	556	第465回	奈良・平安時代懸穴住居跡遺物分布 状況 (1)	608
第426回	SI-340	557	第466回	奈良・平安時代懸穴住居跡遺物分布 状況 (2)	609
第427回	SI-341	558	第467回	奈良・平安時代懸穴住居跡遺物分布 状況 (3)	610
第428回	SI-342	560	第468回	奈良・平安時代懸穴住居跡遺物分布 状況 (4)	611
第429回	SI-343	561	第469回	奈良・平安時代懸穴住居跡遺物分布 状況 (5)	612
第430回	SI-344	563	第470回	奈良・平安時代懸穴住居跡遺物分布 状況 (6)	613
第431回	SI-345 (1)	564	第471回	奈良・平安時代懸穴住居跡遺物分布 状況 (7)	614
第432回	SI-345 (2)	565	第472回	奈良・平安時代懸穴住居跡遺物分布 状況 (8)	615
第433回	SI-346	566	第473回	奈良・平安時代懸穴住居跡遺物分布 状況 (9)	616
第434回	SI-347	567	第474回	奈良・平安時代懸穴住居跡遺物分布 状況 (10)	617
第435回	SI-348	568	第475回	奈良・平安時代懸穴住居跡遺物分布 状況 (11)	618
第436回	SI-349	569	第476回	奈良・平安時代懸穴住居跡遺物分布 状況 (12)	619
第437回	SI-350	570	第477回	奈良・平安時代懸穴住居跡遺物分布 状況 (13)	620
第438回	SI-351	571			
第439回	SI-352	572			
第440回	SI-353	574			
第441回	SI-354	575			
第442回	SI-355	577			
第443回	SI-356	578			
第444回	SI-357 (1)	579			
第445回	SI-357 (2)	580			
第446回	SI-358	581			
第447回	SI-360 (1)	583			
第448回	SI-360 (2)	584			
第449回	SI-361	587			
第450回	SI-362	589			
第451回	SI-363	589			

第1章 奈良・平安時代

第1節 竪穴住居跡

今回、報告する奈良・平安時代の竪穴住居跡数は、236棟である。この数は、平成元年度から平成10年度までに調査された数である。次回に報告する予定の平成12・14・15年度分を加えると、273棟となる。

個々の竪穴住居跡の記載について、若干の用例を記述する。竪穴住居跡の規模の記載においては、確認面における主軸方向の上端の長さ(m)×副軸方向の上端の長さ(m)で記載している。規模については、竪穴中央部付近での計測を基本とするが、主軸方向については、方形プランからのカマドの突出部を避けている。主軸は原則としてカマドに対面する辺からカマドに直交する方向とし、副軸は主軸に直交する方向とする。なお、カマドが位置不明で、出入口ピットの位置が判明している場合、出入口側の辺から対面する辺への方向を主軸方位とする。なお、隅カマドで出入口ピットが検出されない場合が少数あるが、主軸と副軸の区別が難しい遺構である。このような竪穴住居については、個々の状態に即して検討したい。

壁・辺については、出入り口側を前壁(辺)側、出入り口側に対向する側を奥壁(辺)側、出入り口側からみて、また、多くの場合、カマドに向かって、左側を左壁(辺)側、右側を右壁(辺)側と記載する場合がある。カマドの設置壁に付け替えがある場合には、原則として、新カマドを図の上部とした。

ピットの脇に明朝体の数字を記したものがあがるが、この数字は床面からの深さを表す。単位はセンチメートルである。

SI-001 (第165・166・465図、図版17・239)

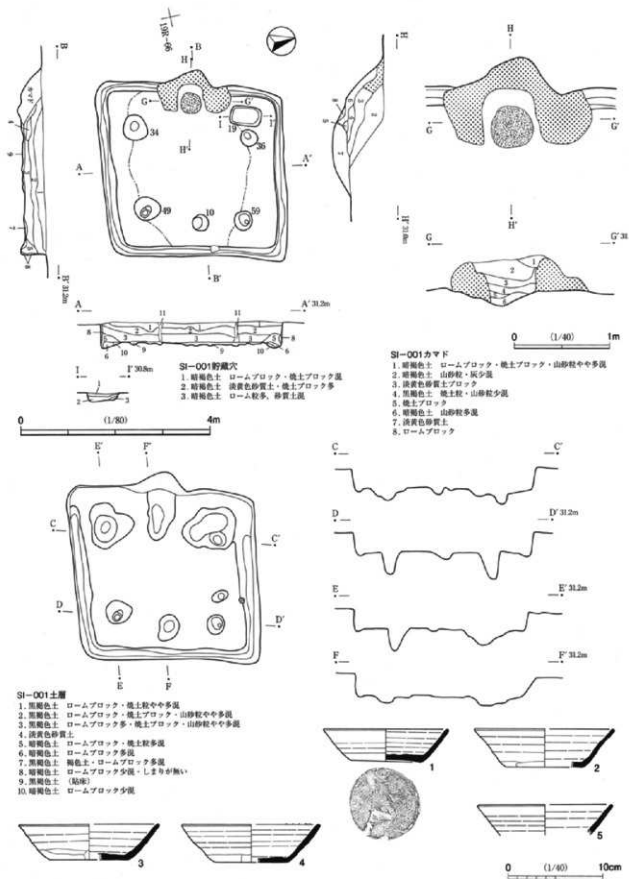
遺跡中央部南西寄りの19R区に位置する。3.6m×3.9mの方形をなし、深さは0.4mである。西辺にカマドをもち、東壁御中央に出入口ピットをもつ。主軸方位はN-82°-Wである。喉溝は全周する。主柱穴4か所と北西(右奥)隅部寄りに貯蔵穴をもつ。床面は平坦で、主柱穴間を中心として、硬化面が広くみられる。また、全体的に黒褐色土の貼り床が検出されている。

図示した遺物は16点であるが、16は中・近世の陶器壺であり、混入品である。16を除く15点は、奈良・平安時代の遺物である。1～8は新治窯産の須恵器杯である。1は遺存度が80%と、残りの良好な土器であるが、1以外は遺存がよくない。9はロクロ成形の土師器杯である。10～13は常規型の土師器甕である。14は新治窯産の須恵器甕である。胴部外面は横位の平行タキが施されている。15は新治窯産の須恵器甕である。五孔をもつ甕で、底部外面には「子」とみえるへら書きがある。なお、図示した須恵器はすべて新治窯産である。

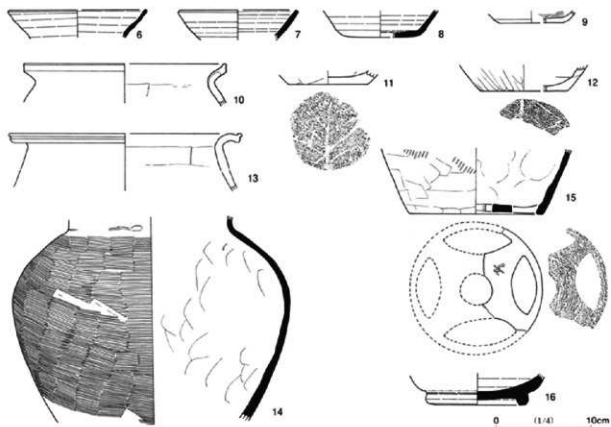
1は中央から南西隅寄りにかけて分布し、覆土中下層からの出土である。図示しない土器片の点数は135点、重さは1.7kgである。出土遺物は全体に竪穴内から満遍なく出土し、層的には下層もあるが、中層からの出土がやや多い。

SI-002 (第167～170図、図版17・239・307・309・310・314・318・321)

遺跡南部南寄りの19U区に位置する。7.8m×7.6mの方形をなし、深さは0.48mである。奈良・平安時代の竪穴住居跡の中では大型の竪穴である。主軸方位はN-11°-Wである。北辺にカマドをもつ。通常の4本柱に伴う主柱穴の他、竪穴中央に同様の規模のピットがある。プランの中心点に位置することからも、



第165図 SI-001 (1)



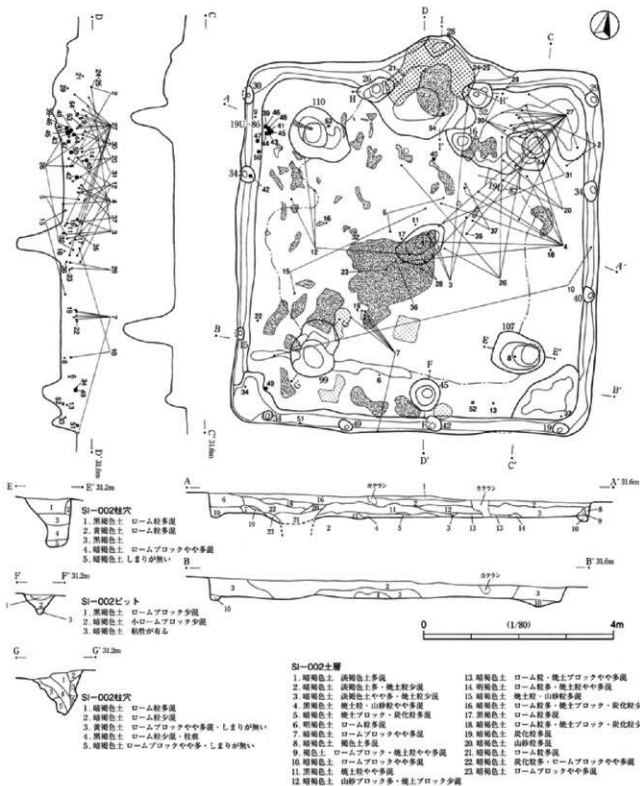
第166図 SI-001 (2)

本堅穴に伴うピットと思われる。堅穴内での人の動きに制約が生じるが、棟を直接支える柱の掘りかたであろうか。出入口部の小穴は南壁際中央にある。壁溝は全周する。東西南の3壁の壁溝に、3~4か所のピットがあり、壁柱穴と考えられる。床面は、カマド前から4本柱の主柱穴間にかけて、広く硬化している。北東隅・南東隅の床面が窪み、南西隅部の壁溝も広がっているが、堅穴の掘りかたの一部が露呈しているものと思われる。掘りかたは四隅でやや深く、若干黒色味の強い土を充填して床面を作っているため、堆積土と床面の区別が難しい。壁際がやや軟質であることも影響している。

カマド構築材は山砂主体で、ロームを含む。両袖の外側に小ピットがあるが、カマド部分の上屋構造に関わるピットであろうか。カマド下は淡褐色土や暗褐色土が堆積し、カマドはその上に作られている。カマド下の土層については、作り替えによる整地土か、掘りかた充填土のどちらかの可能性が考えられる。

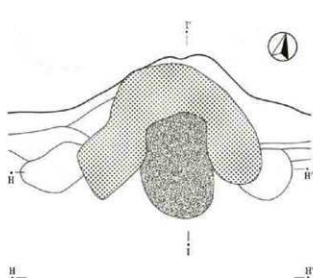
床面上や堆積土中には、焼土粒・ブロック、炭化粒・炭化材が多く堆積している。比較的多くの破損した土器が出土しており、火を受けているものも多いことから、本堅穴の焼土・炭化材については、不慮の火災によるものではなく、上屋が焼却されたことによるものと考えられる。炭化材の中には、カヤと思われるものもみられる。屋根材等の一部であろう。堆積土は複雑で、少なくとも下部は人為的堆積である。

図示した遺物は54点で、多量である。1・2はロクロ成形の土師器杯で、1は内外面とも赤彩されている。図示した須恵器はすべて新治窯産である。3~22は杯、24は蓋である。この中では、4と5の遺存が比較的よく、3・7・20は底部および体部下部の多くが遺存する個体である。23は有台の器種で、観察表では杯としたが、3~22とは異なる大型のものである。高台は全体に突出しており、円盤状の形状である。



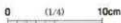
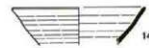
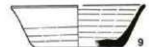
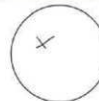
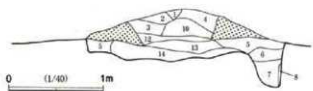
第167図 SI-002 (1)

底部内面中央付近は周囲よりなだらかに低くなっており、器壁の厚さは体部とあまり変わらない。26も杯としたが、大型のものであり、椀または鉢とした方が適切かもしれない。底部の形態の違いがあるが、大きさは23と似通うものである。

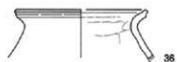
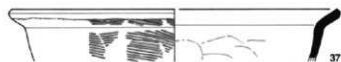
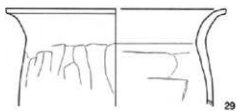
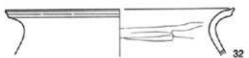
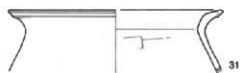
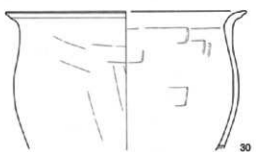
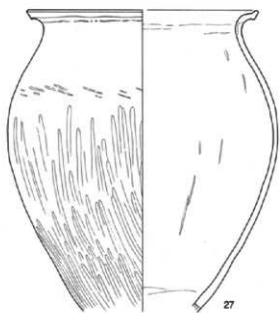
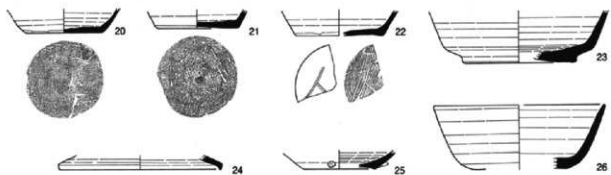


SI-002カマド

1. 赤褐色土 ローム殻・焼土粒やや多量
2. 赤褐色土 焼土ブロック少量
3. 赤褐色土 ローム殻・山砂粒多・焼土ブロック少量・しまり有る
4. 赤褐色土 ロームブロック・山砂粒やや多量・しまり有る
5. 赤褐色土 ロームブロック多量
6. 赤褐色土 ロームブロック・焼土ブロック・山砂粒やや多量・しまりが無い
7. 赤褐色土 ローム殻・ロームブロック・山砂粒やや多量・しまりが無い
8. 赤褐色土 ロームブロック・焼土ブロック・山砂粒やや多量
9. 赤褐色土 ローム殻・焼土粒やや多量
10. 赤褐色土 焼土粒・山砂粒多量
11. 灰土ブロック 炭化粒やや多量
12. 灰褐色土 焼土粒・炭多量
13. 灰褐色土 山砂粒多量
14. 赤褐色土 ローム殻・焼土ブロックやや多量・しまりが無い

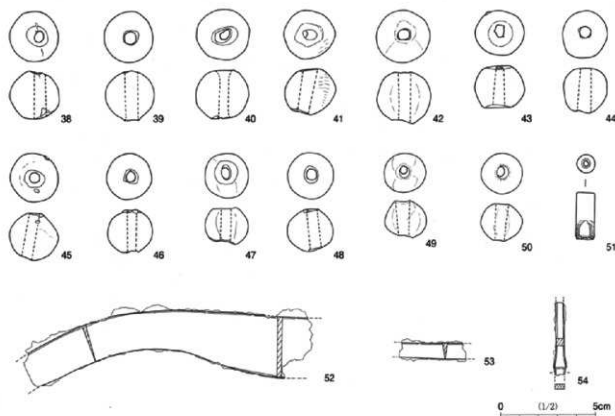


第168図 SI-002 (2)



0 (1/4) 10cm

第169图 SI-002 (3)



第170図 SI-002 (4)

5は体部外面と底部外面に線刻があり、体部外面のものは4条線の交差線、底部外面のものは「+」である。火を受けて器面が磨耗し、ヘラ書きとの区別がやや不明瞭であるが、線刻と考える。22は底部外面に「人」状のヘラ書きがある。「人」と見た場合、書き順が逆である。文字の可能性もあるが、記号とした方が無難である。10も底部外面にヘラ書きがある。底部周縁に2条の平行線がみられるが、部分的な遺存であり、どのように続くのか不明である。5・9は被熱により褐色化の著しい部分がある。

27～36は土師器甕である。27は口縁部から胴部下部分までの一部が遺存し、この中では比較的遺存のよい土器である。カマド右側、北東隅付近から多く出土している。27以外は遺存が悪い。29を除いてすべて常総型の甕である。29は胴部外面にヘラケズリが施され、在地的な胎土をもつものである。古墳時代後期以来の在地の伝統を引く甕と思われる。本書ではこのような甕を、便宜的に「房総」型の甕と記述する。

37は須恵器甕または甕である。バケツ形の形態で、新治窯産である。

25は中・近世の陶器で、後世に流入したものである。

38～50は土玉である。39・41～48・50の10点は西壁際北側、北西隅近くの覆土下層・中層からまともに出土している。40はカマド前上層、49は南西隅上層からの出土である。38は出土位置不明である。

51は石製管玉である。石材は細粒緑色凝灰岩である。図示した下部の一部が欠損している。南壁際南西隅近くの上層から出土した。

52～54は鉄製品である。52は鎌で、やや小型の製品である。切先および基部側を若干欠く。刃部中央は研ぎ減りしている。裏面には、木質が切先側から基部側まで所々に付着している。南壁際東寄り床面から出土した。53は刀子で、刃部の一部である。54は鉄鎌である。棒状部下部分から茎上部までの破片で、茎は

わずかな遺存である。突起部は方形がくずれて楕円となり、四面間に作り出されている。

なお、モモと思われる炭化した種子が1点出土している。これについては、第6章で取り上げているので参照されたい。また、図示していないが、軽石が2点出土している。

図示しない土器片の点数は1,430点、重さは11.1kgと多量である。図示したものと合わせ、多くが麻材とともに廃棄されたものである。遺存の良いものは少なく、図示した遺物でも完形に近いものは1点もない。遺物は堅穴全体から出土しているが、北東隅側の出土がやや多い。出土層位は床面から上層にわたるが、中・上層からの出土が多い。

SI-004 (第171～177図、図版18・239～241・308・310・314・318・321・335)

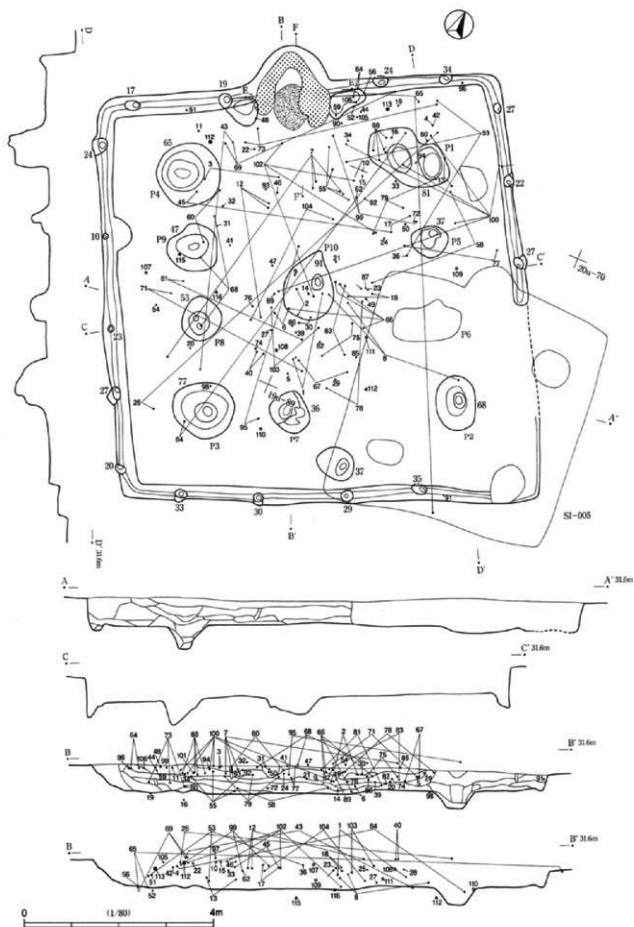
遺跡南部南寄りの19U区に位置する。9.1m×8.9mの方形をなし、深さは0.57mである。大型の堅穴で、主軸方位はN-35°-Wである。南東側でSI-005に切られ、一部を失っている。北西辺にカマドをもつ。出入口部の小穴が、カマドに対向する南東壁際中央に位置する。堅穴内に多くの柱穴が存在し、建て替えられた住居である。

まず、建て替え後の堅穴について記述する。通常の4本柱に伴う主柱穴(P1～P4)が存在するほかに、カマド側を除く主柱穴間に補助柱穴が5か所(P5～P9)配されている。補助柱穴は、カマドに向かって左壁側では、主柱穴間に2か所ある(P8・P9)。右壁側についても、P2寄りなもの(P6)がSI-005との重複のため不明瞭であるが、2か所あることは確実である。出入口側については、P3寄りに補助柱穴(P7)があるが、P2寄りにはみられない。これについては、SI-005に切られ、欠失したこと、出入口側であるため、当初から存在しなかったことのとおりの可能性が考えられる。また、プランの中心点にピットがあり、SI-002と同様に、棟を直接支える柱の柱穴と思われる。壁溝はSI-005に壊されて、右壁の南側のみみられないが、本来は全周するものであろう。壁溝内には、吸柱穴が1.3m～2m間隔程度の間隔で存在する。16か所遺存しているが、SI-005と重複する部分に3か所存在したと思われる。19か所に復元できる。床面は、ほぼ中央部が硬化している。

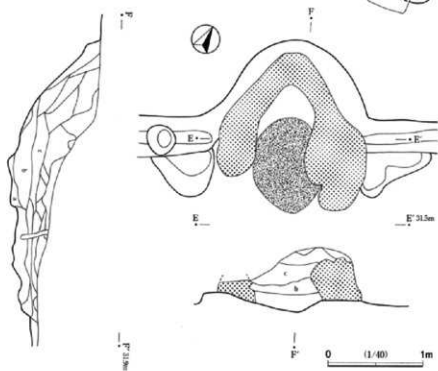
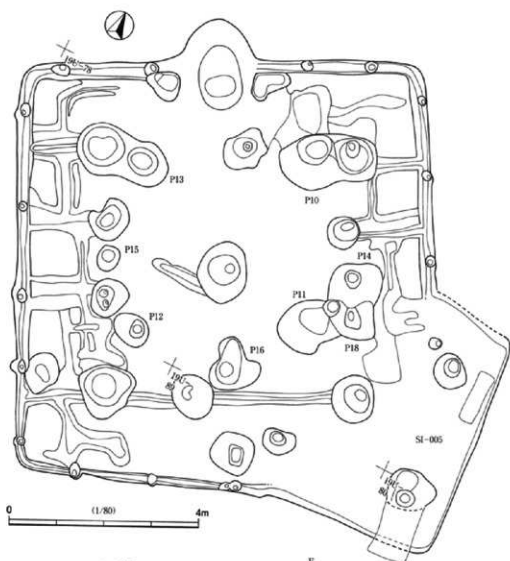
カマドは左側の袖部がかなり破壊されており、構築材が流出している。SI-002同様、両袖の外側に小ピットがあるが、カマド部分の上層構造に関わるピットと思われる。構築材は山砂主体であるが、下部はロームブロックを含む。遺存のよい右袖内壁は、熱を受けてかなり中の方まで赤色に変色している。火床部は床面よりも低い位置にあり、大きく窪んでいる。使用に伴う灰のかき出しによって低くなっていったものであろう。火床部には灰を含む暗灰白色の土が堆積し(a層)、その上部には赤色化した山砂ブロックを主体とする上層(b層)が堆積する。さらに、その上部は泥炭状の炭化物を主体とする黒褐色土層(c層)が堆積している。その上部は山砂や焼土などを含み、複雑な状態であるが、おおむね褐色の色調の土層が堆積している。

堆積土は非常に細かく分かれているが、大きくみれば、上層・中層・下層の3層に分けられる。上層はローム粒を多く含む暗褐色土、中層は黒褐色土、下層は褐色土である。壁側などの所々に、ローム粒・ブロック、焼土粒・塊を多く含む上層があるが、中央部中層にロームの少ない黒色土層が厚く堆積することから、自然堆積の可能性が高いと考える。

建て替え後の床面を除去したところ、新たにいくつかのピット(P10～P16)と床溝を検出した(第172図)。その状況から建て替えられたことは確実であるが、建て替え前後の堅穴の様相については、大きく二通りの可能性が考えられる。一つは大幅に拡張されたこととみる考えである。床溝の様相をみると、



第171图 SI-004 (1)



第172图 SI-004 (2)

P2・P7・P3間をつなぐようにあり、南東壁に対して平行である。左右壁側の床溝も、柱穴の外側で、左右壁に平行となるものがある。また、西隅部では、床溝がほぼ直角に曲がっている。これらの床溝は、建て替え前の壁穴の壁溝の可能性もある。また、P10～P13は、この壁穴住居跡に伴う支柱穴であり、P16は出入口部の小穴とみられる。建て替え前のプランはかなり小規模であるので、プラン中心のP10は建て替え後に設置された可能性がある。

一方、壁と平行的な床溝は、左右壁の場合、必ずしも一直線状ではない。左右両壁から垂直に延びる床溝とつながっていることから、それらと一体化したものとみることできる。P10・P13は建て替えに際して、柱抜き取りのために壁を掘ったものであり、P11はSI-005の支柱穴の影響を受けた結果とみることでもできよう。P12・P16はやや柱筋からずれるが、P14とともに補助柱穴の可能性もある。

以上、建て替え前後の壁穴の様相について二つの考えを示したが、前者は大胆に過ぎると思われる、後者の可能性を高く考えておく。なお、床溝については間仕切りという見方と、転根太の痕跡とする見方があるが、間仕切りとするには、左右壁側が狭くなりすぎると思われ、転根太と考える。

図示した遺物は116点で、非常に多い。1～9は土師器杯で、5はロクロ使用、5以外はロクロ未使用の土器である。4～9は内外面全面に赤彩が施されている。3も外面の一部に赤彩かと思われる部分があるが、確実ではないため、赤彩されていない土器として扱った。

10～39は須恵器杯で、すべて新治窯産である。19は底部外面に平行する2条線のヘラ書きがある。30は底部内面に3条の線が交差する焼成後の線刻がある。2条はV字状である。39は底部外面にカタカナの「キ」または「サ」に似た焼成前のヘラ書きがあり、3条の交差線による記号と理解する。37・38は体部外面に墨書があるが、遺存がわずかであり、判読できない。器壁は硬質なものもあるが、やや軟質で、磨耗しているものが多い。被熱により明らかに赤褐色・黄褐色に変色しているものとして、14・17・18・33・35の5個体を指摘できる。他にも火を受けた土器が存在する可能性がある。

土師器杯・須恵器杯の中には、11種・体部が打ち欠きされた可能性のあるものが存在する。それらを列挙すると、土師器杯6、須恵器杯16・17・19・20・22・23である。このうち、23は全周、他は一部の打ち欠きである。しかし、23は底部と体部の境に大きく接合箇所が亀裂が残ることから、体部については製作時の削り部分が割れたことも考えられる。断面は研磨されており、比較的平面的で、実用の器として再利用された可能性がある。他の遺物も個々にみると、19は欠損部以外に割れないが、欠損部は小さく、単なる破損かもしれない。6・16・17・20・22も割れや欠損部があり、確定できない。以上の状況から、打ち欠きについてはいずれも断定しがたく、可能性の指摘にとどめる。

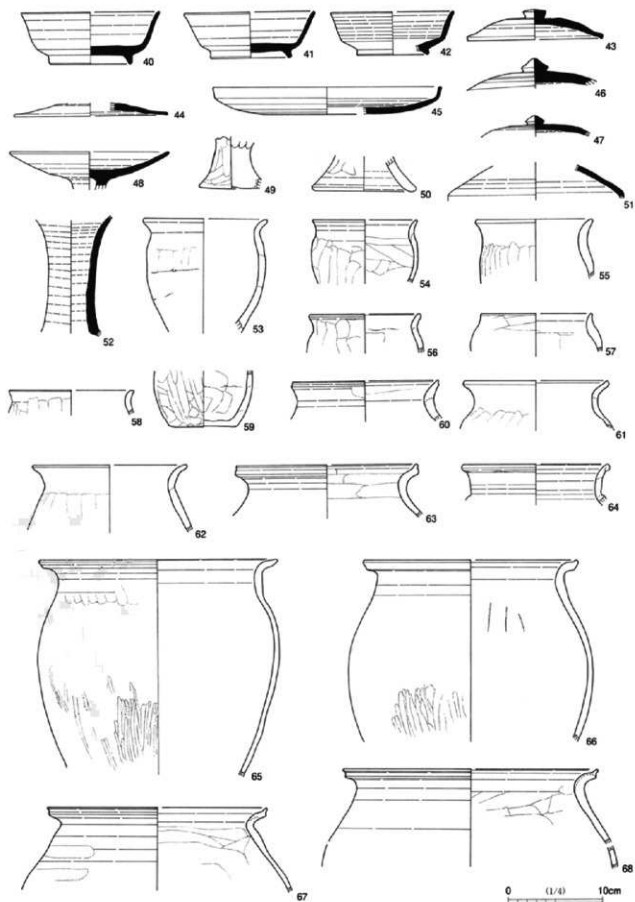
40～48・51・52も須恵器で、40～48は新治窯産である。51・52は東海産で、湖西窯産と思われる。40・41・42は高台付杯である。40は比較的遺存がよい。口縁・体部内面は焦げて黒ずんでいる。また、42も赤変しており、ともに被熱痕跡が明瞭である。43・44・46・47は壺である。45は無台の甕である。48は高杯である。51は長頸壺等の壺類の肩部で、肩部外面には淡黄緑色の自然釉がかかっている。52も長頸壺の口頸部で、外面の一部に自然釉がかかっている。

49は手捏土器である。上部は欠損しているが、下部は頸部の1/3程度が遺存しており、やや尖っている。高杯的な形態で、上部は杯状となるものかもしれない。良好な焼成であるが、指頭で成形されており、手捏土器とした。白色・黄色の小石を多く含み、常総型甕と同様の胎土である。

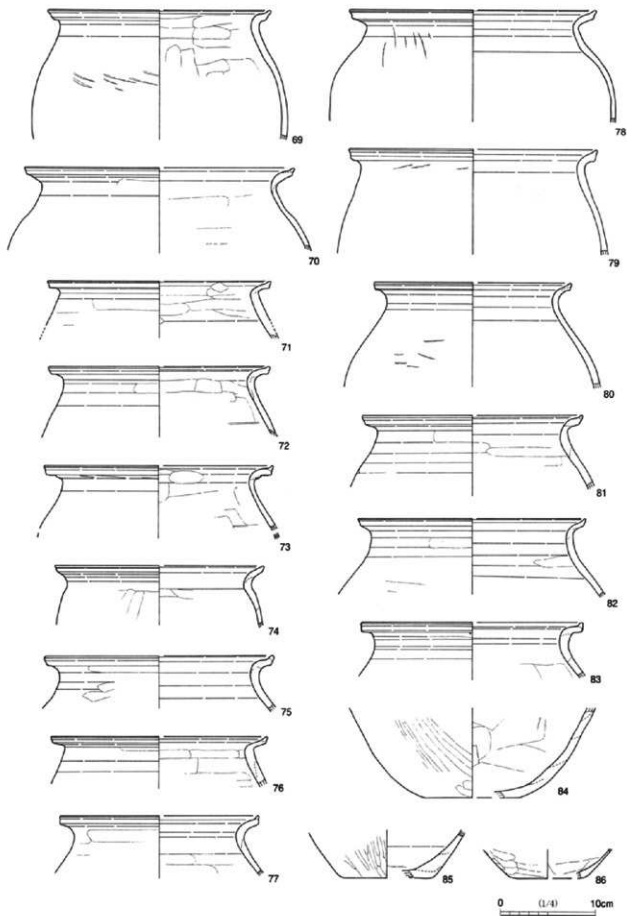
50は土師器高杯の脚部である。前代の土器の混入であろうか。



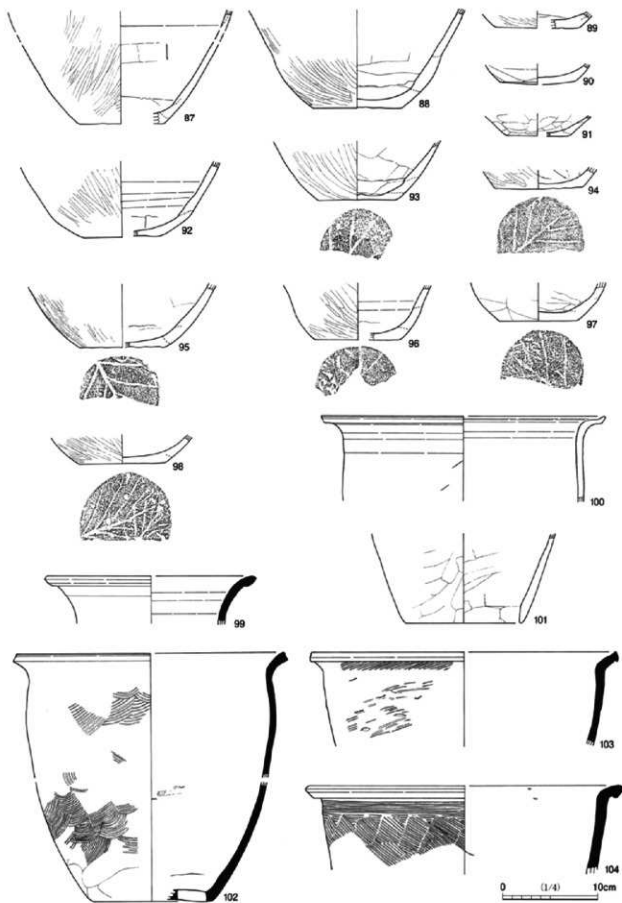
第173圖 SI-004 (3)



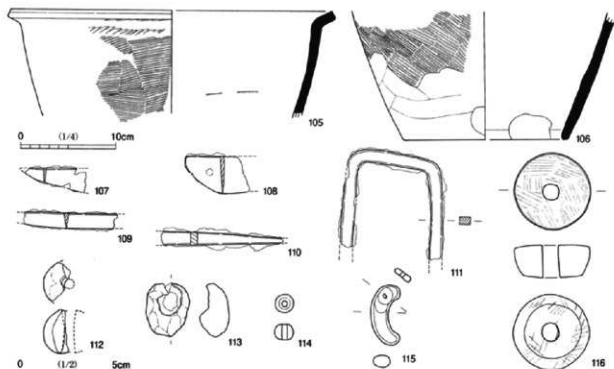
第174图 SI-004 (4)



第175图 SI-004 (5)



第176圖 SI-004 (6)



第177図 SI-004 (7)

53~98は土師器甕である。「房総」型の甕をあげると、53~59・60・61・62・64・86・90・91である。53~59は小型品である。57は口縁部が短く直立するタイプの器形である。60・61・62・64も若干小型である。本堅穴出土遺物の場合、「房総」型の甕は小型品およびやや小型の甕に多いといえる。86・90・91は底部破片である。底部外面の調整は、59の小型品とともに、手持ちヘラケズリが施されている。

上記以外の土師器甕は常総型の甕である。遺物番号を列挙すると、63・65~85・87~89・92~98である。底部の遺存しているものはすべて、外面に木葉痕がみられる。比較的残りのよいものを図示した(93~98)。土師器甕については、図示したものが多いが、遺存がよいものは65だけで、他は中小の破片である。65も胴部下部から底部を欠損し、口縁部周辺もやや多く欠損するが、胴部上・中部の残りはよい。

100・101は土師器甕で、ともに常総型の甕である。100は口縁部から胴部上部の破片で、口縁端部の遺存はかなりよい。器形から甕とした。101は胴部下部の破片で、底部は全て抜けている単孔の甕である。内面下端部は強くヘラケズリが施されている。

99・102~106は須恵器甕・甕類で、すべて新治窯産である。99は甕で、口頸部の長いタイプの器形である。頸部外面上位に1条の沈線が巡る。102・106は甕で、孔は中心部の円孔が1か所、周囲に4孔の五孔タイプである。103・104・105は甕または甕で、バケツ形の器形である。102は胴部外面に同心円文のタタキが、他は横位から斜位の平行タタキが施されている。

107~111は鉄製品である。107・109・110は刀子で、107・109は刃部、110は茎の破片である。107は切先付近の破片で、わずかに先端を欠く。110は鉄鎌の茎であることも考えられるが、刀子の可能性の方が高いと考える。中央で錆跡が著しい。折れて重なっているようにも思われるが、不明瞭である。108は穂摘み具の片側端部付近と思われる。錆で覆われているが、目釘孔と思われる小孔が確認できる。ただし、断定しがたいため、図では破線で示した。孔がなければ、外反りの鎌とも思われるが、穂摘み具の可能性

の方が高いと考える。111は凹金具と思われる。向先端部を欠く。

112・113は土製品で、112は土玉である。113は不整な形態で、大きなくぼみがある。貫通する孔はないが、上玉に近似する土製品としておく。

114はガラス製の丸玉で、コバルトブルーの色調をもつ。元は古墳の副葬品で、本竈穴に流入したものである。115は滑石製の勾玉である。孔部分は他よりも薄く、それ以外は扁平ではあるが、やや丸味をもつ。116は石製紡錘車で、石材は蛇紋岩である。表面は不定方向に多くの擦痕をもつ。

なお、モモと思われる炭化した種子が4点、北東隅最上層からまとまって出土している。これについては、第6章で取り上げているので参照されたい。また、図示していないが、軽石が2点出土している。

図示しない遺物の出土量も多量で、点数は6,117点、重さは59.3kgである。図示した遺物と合わせて竈穴内の平面分布をみると、壁際はやや少なく、中央部に多い傾向がうかがえる。壁際でもカマド周囲はやや多いが、左壁(南西壁)側は少なく、出入口側の壁もSI-005との重複はあるが、少ないといえよう。垂直位置をみると、床面から確認面までわたるが、上層からの出土が多い。以上の状況から、本竈穴の出土遺物については、壁側部分や下層がある程度埋まった段階で、他所から廃棄された遺物が多いといえよう。SI-005(第178図、図版18・241・307・321)

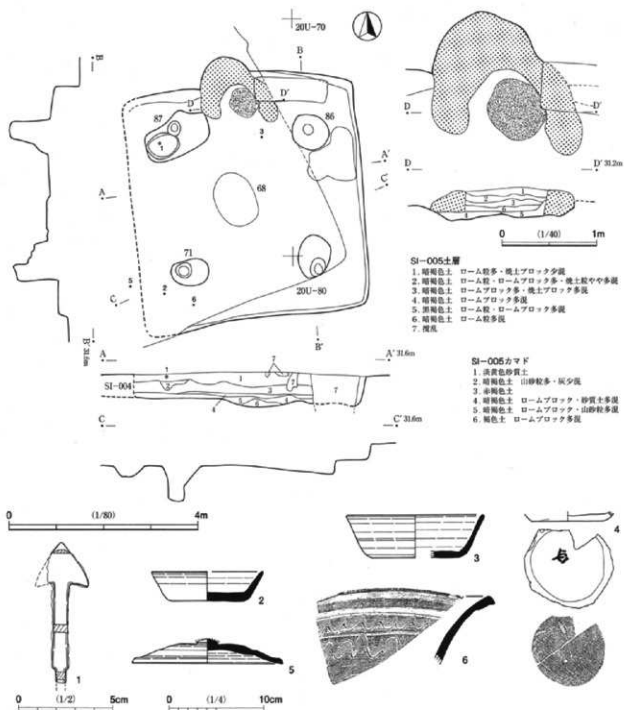
遺跡南部南寄りの19U区に位置する、5.2m×4.9mの方形をなし、深さは0.58mである。SI-004と大きく重複し、004を切っている。しかし、床面のレベルは004とほぼ同じであり、西壁については、断面で確認できるが、平面的には検出できなかった。主軸はN-6°-Wである。北西辺にカマドをもつ。支柱穴は4か所があるが、出入口部の小穴は004と重複する影響により、確認できなかった。床の硬化面もみられない。

図示した遺物は6点である。1は鉄錘で、刃部は広身の三角形である。逆刺は浅く、片側を欠損する。棒状部が短い短頸錘で、直線的な棒状部と茎の境は両側に作り出され、ほぼ直角に切り込まれている。茎は多くを欠いている。2・3は須恵器杯で、2は千葉産、3は新治窯産である。なお、本書では、千葉市域およびその周辺に所在する窯で焼かれた須恵器を「千葉産須恵器」とする。2は小片から図化したため、やや径が大振りになっている可能性がある。4はロクロ成形の上師器杯である。底部外面に「5」と思われる墨書がある。5は新治窯産の須恵器蓋である。6も新治窯産の須恵器で、大型の甕のL様部片である。外面に3条の横波状文が施され、上部波状文間には1条の浅い沈線が囲回している。図示した土器で遺存のよいものはない。1は覆し上層出土であるが、他の遺物については、高さの記録漏れにより、垂直位置が不明である。図示しない土器片の点数は1,350点、重さは14.2kgと多量である。しかし、SI-004と重複する影響で混在している可能性がある。その他、図示していないが、軽石が1点出土している。想定される本竈穴の構築時期は、8世紀後葉から9世紀前葉と幅をとって考えておく。

SI-008(第179図、図版20)

遺跡南部中央の19T区に位置する。規模・形態は3.2m×2.9mの不整な方形で、深さは0.18mである。主軸はN-85°-Eである。東辺中央にカマドをもつ。カマドの遺存は悪く、袖や火床部などの施設を確認できなかった。確認面から床面までは浅く、硬化面はみられない。壁溝や出入口ピットは検出されなかった。堆積土は、上・中層がやや多くローム粒を含む黒褐色土、下層がローム粒を多く含む暗黄褐色土である。複数の掘立柱建物(SB-025・026・043・044)と重複している。

図示できる遺物はない。出土した土器片は73点、重さは0.5kgで少量である。土器片の内訳は土師器杯・須恵器杯・須恵器甕の他、灰釉陶器片が1点出土している。須恵器杯・甕には千葉産と思われるものがあ

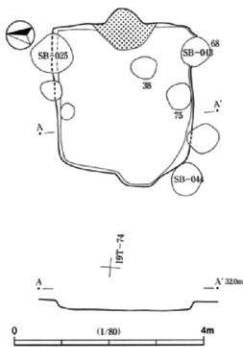


第178図 SI-005

る。また、須恵器杯に新治窯産がある。出土遺物の時期はおおむね9世紀代である。

SI-009 (第180図, 図版20・242・310)

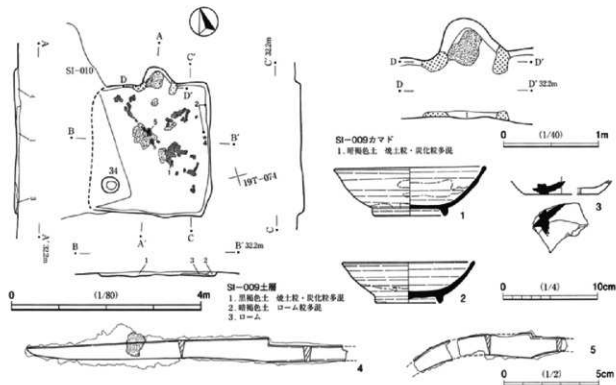
遺跡南部中央の19T区に位置する。2.8m×2.5mの方形をなし、深さは8cmである。床面近くしか遺存していない。主軸はN-14°-Eである。SI-010と重複し、西壁側を欠損する。010との新旧関係は不明である。北辺にカマドをもつ。床面上からは、焼土と炭化材が多量に検出され、家屋焼却または焼失によるものと考えられる。深さ34cmのピットが南西隅寄りの床面から検出され、位置的に柱穴の可能性はあるが、他の3か所が不明であり、断定できない。出入口部の小穴や塋溝は検出されず、床の硬化面も認められない。



第179図 SI-008

図示した遺物は5点である。1・2は灰釉陶器碗である。1は遺存がよく、2も1ほどではないが比較的遺存がよい。ともに横投産で、黒笹90号窯式のものと思われる。3はロクロ成形の上師器杯である。墨書のある土器で、墨書は体部外面からわずかに底部外面にかかっている。釈読は不明で、記号の可能性もある。4・5は鉄製の刀子である。4は茎尻側を欠くだけで、遺存良好な個体である。背間は直角に深く作り出されている。一方、刃側と茎の段差はほとんどないが、刃と茎の境は明瞭である。刃部中央は錆跡がいちじるしく、一部に木質が付着している。5は刃部と茎の破片で、切先・茎尻を欠いている。錆のため、遺存がよくないが、背間と刃間は明瞭である。

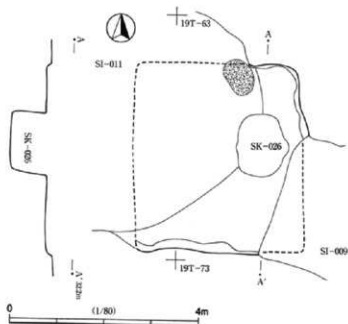
1は中央部やや東寄りから出土し、2は東壁際北寄りから出土した。1・2とも火を受け、煤けている。2の近くからは4も出土している。3の出土位置は不明である。図示できない土器片の点数は36点、重さは360gである。竪穴の遺存が悪いため少量である。



第180図 SI-009

SI-010 (第181図、図版20)

遺跡南部中央の19T区に位置する。形態はいくぶん縦長の方形になると思われるが、SI-009・SI-011と重複する影響で、不明瞭である。009・011との新旧関係は不明である。また、SK-026・027とも重複し、



第181図 SI-010

SI-011 (第182図, 図版20)

遺跡南部中央の19T区に位置する。形態は不整な楕円形で、規模は5.2m×4.3m、深さは0.28mである。南東側がSI-010と大きく重複する。新旧関係は不明である。また、東側でSK-027と重複し、027に切られている。東側は掘り込みが2段で、底面が10cm程度高まっている。遺構の状況から、奈良・平安時代の堅穴住居跡ではない可能性もあるが、出土遺物に他の時代のものはみられない。様相が不明瞭であるが、規模から奈良・平安時代の堅穴状遺構としておく。主軸は不明である。底面には5か所のピットがあるが、不整な位置関係であり、本遺構に伴うものか不明である。深さは12cmから33cmの間である。

東側に焼土の集中範囲があるが、先述したようにSI-010のカマドの残存と思われる。壁溝・出入口部の小穴は検出されず、硬化面もみられない。

図示した遺物はロクロ成形の土師器杯の小片1点である。口縁部の破片で、外面に正位の墨書がある。現状では「大」に見えるが、欠損している三方向につづくことと、口縁部端際からみられるので、「大」の下にも書かれている可能性があり、判読不明とする。

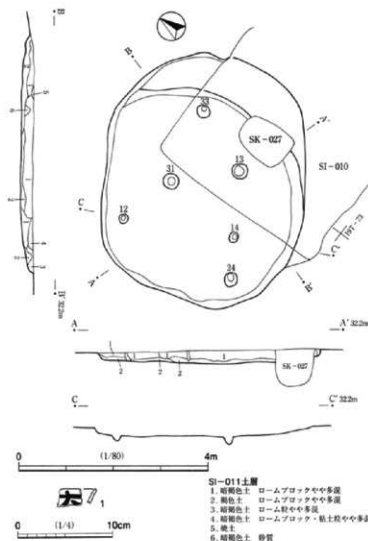
図示しない土器片の点数は114点、重さは0.8kgで少量となる。須恵器甕は千葉産と新治窯産があり、須恵器甕には千葉産のものがある。新治窯産の須恵器杯はほとんどみられない。口唇部が内傾する土師器甕や、底部無調整の土師器杯など、9世紀後半から10世紀代と思われる遺物を含む。また、灰軸陶器碗片が1点あるが、SI-009出土のものとは別個体である。

SI-013 (第183～187図, 図版21・22・241～244・307～311・314)

遺跡南部南寄りの19U区に位置する。7m×7.7mの方形をなし、深さは0.75mである。主軸はN-2°Wである。北辺にカマドをもつ。支柱穴4か所と出入口部の小穴をもつ。また、北西隅部に窪みがあり、貯蔵穴状に図示しているが、掘りかたの一部である可能性が高いと思われる。隅部の掘りかたは中央より深く、北東隅部・南東隅部周辺はその底面を露呈している。南西隅部も掘りかたの段差がそれほど明瞭ではないが、中央より深い。隅部の床面は、中央よりも厚い掘りかた充填土の上存在したものである。壁

これらに切られている。推定する規模は4.1m×3.6m、深さは0.16mである。北壁寄り中央近くの床面に、焼土の集中範囲がある。SI-011のカマドの可能性もあるが、位置的には本堅穴のカマドとする方が妥当である。北壁にカマドがあるとすれば、主軸方位は北からほとんどぶれないことになる。床面はSI-011と同レベルであり、平面的には確認できない。壁溝は検出されず、床の硬化面もみられない。支柱穴・出入口部の小穴も発見できなかった。

出土遺物は1点もなく、奈良・平安時代の堅穴住居跡か不明であるが、平面形態を考慮して本項で扱った。



第182図 SI-011

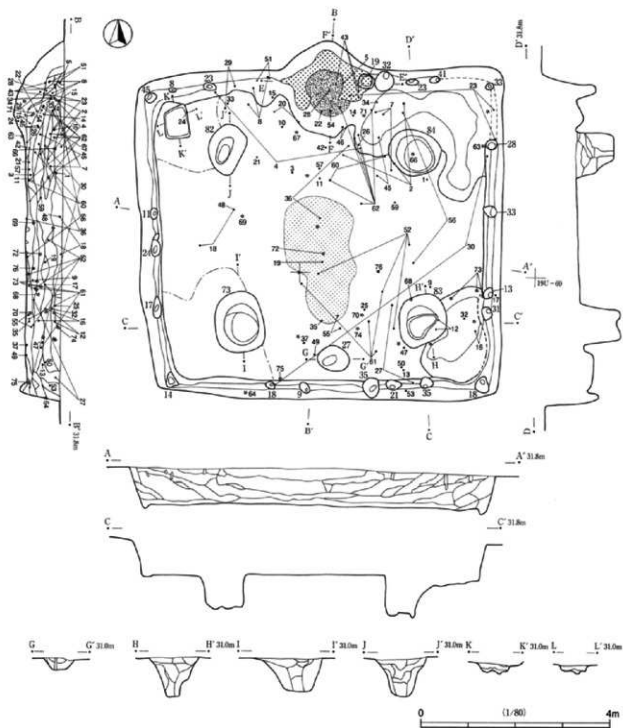
く掘り残されていた可能性がある。袖部内壁は火熱を受け、赤色化している。火床部下底面は床面よりも深く大きく窪んでおり、灰のかき出し等により深くなっていったものであろう。

堆積土は中央部中・上層を除いて、ローム粒・ロームブロックの含有が多い。同様に、焼土粒・焼土ブロックの含有も目立つ。全体的にロームが卓越する層と、黒色味のやや強い層が複雑に堆積している。中央上・中層はやや黒色味が強いので、自然堆積の可能性もあるが、それ以外は人為的に埋められた状況と思われる。また、床面中央部には、火を受けて赤色化している部分がある。上屋の焼却または焼失が考えられる。ただし、大きな炭化材の出土がないので、どちらにしても片付けられていると考える。柱穴部分の土層は、中・下部で柱状になっている。この柱状部分とその上部には、やや黒色味の強い層が堆積している。その周囲はローム粒・ブロックを多く含む土層が堆積する。柱穴部分の土層は、柱が抜き取られた後に黒色土が流入したか、柱穴の上方で柱が切断され、柱穴内の柱が立ち腐れ状態となったことのどちらかが考えられる。

図示した遺物は76点と多量である。1～8はロクロ成形の土器器杯である。すべての土器が全面に赤彩されている。切り離し技法については、3・6以外は静止糸切り痕が見える。3は手持ちヘラケズリによ

溝が巡り、その底面には壁柱穴がみられる。壁柱穴の間隔は長短あるが、1.3m～1.4m程度が標準的な間隔であると推定する。近接して存在するものは、どちらかが柱の取り替えまたは補強に伴う柱穴と考える。間隔の長い場合は、間の柱穴が見つからなかったのであろう。壁溝は、隅部床面の確認が難しいことにより、北東隅部で不明瞭であるが、壁柱穴の様相から全周することが確實である。床面はハードローム層中であり、四隅を除いて広く硬化している。

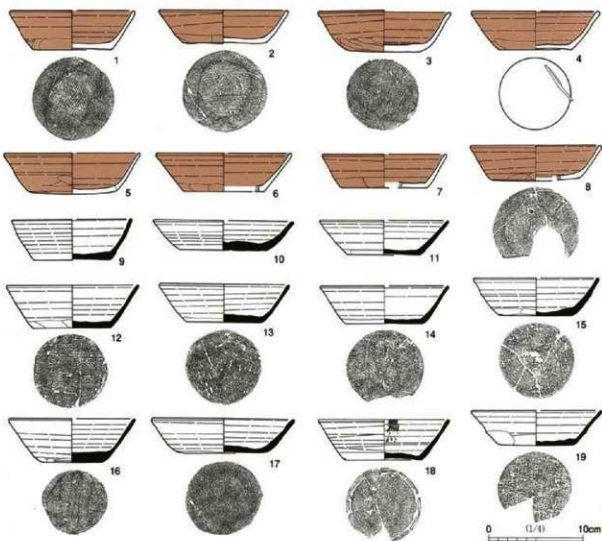
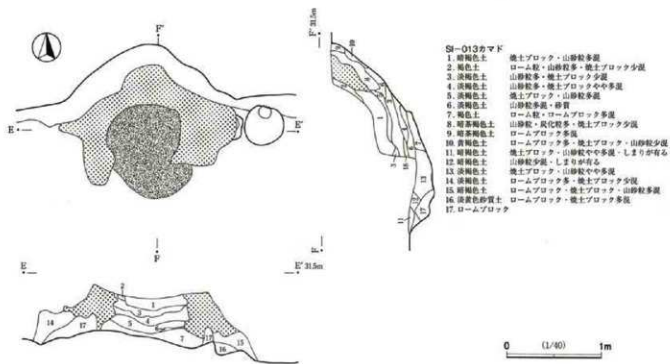
カマドは比較的遺存がよく、後天井部の一部が遺存している。右袖脇にピットがあり、カマド部分の上屋構造に関わるものと思われる。左袖脇部分についてはピットの存在が明瞭でないが、カマド周辺の底面が深いと思われる。床面・掘りかた底面の平面図の形状およびSI-002・004などの状況から、左袖脇にもピットが存在したものと推測する。構築材は山砂を主体とし、袖部は堅くしまっている。袖部下方はロームブロックがみられ、袖部分の底面が、当初から高



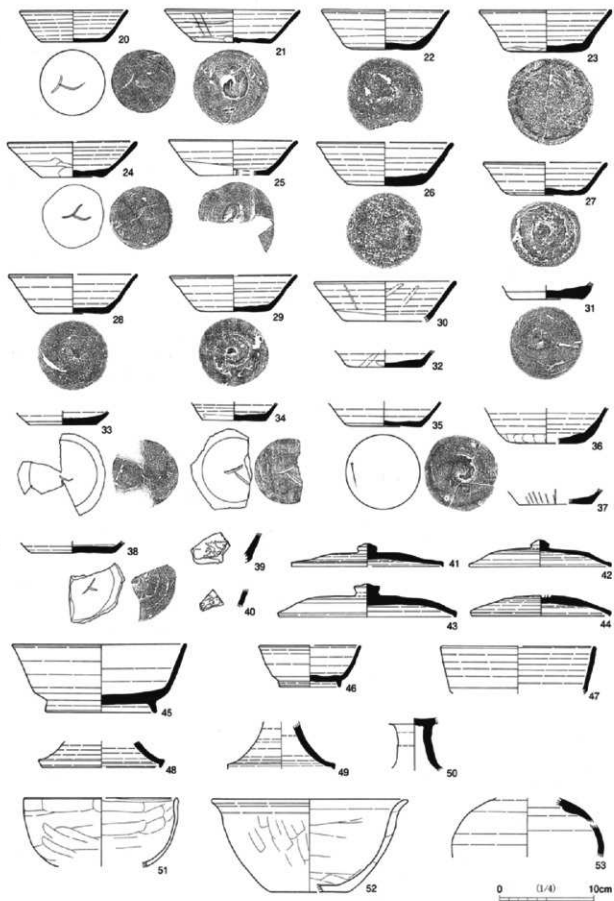
第183図 SI-013 (1)

り消されて見えず、6は遺存が悪いため、ともに不明であるが、静止糸切りの可能性が高いと考える。1・7は火熱を受けて内外面に黒ずむ部分があり、特に7の口縁部内面は顕著である。1も口縁部内面の一部は黒ずみが強い。

9～40は須恵器杯である。このうち、17は色調が暗灰褐色、黒灰色であり、南河原坂墓等の千葉産の須恵器と思われる。また、20・24・33・34の4点は小振りの土器で、暗灰色の暗い色調である。胎土は白色粒と若干の小石を含むが、白雲母はみられない。新治窯産の須恵器とは趣の異なる一群であり、常陸国信



第184図 SI-013 (2)



第185图 SI-013 (3)

太郎近辺で生産された須恵器と推定される¹。これらと17以外の杯は、新治窯産と思われる須恵器である。20以下の一群は、いずれも底部外面に「人」に似た形のヘラ書きがある。20・24・33の「人」は、34が不明である以外は、書き順も文字の「人」と同じであり、文字として扱える可能性もある。しかし、単純な2条の線の組み合わせであり、記号と理解する方が無難である。この「人」に似た記号は、38の底部内面にもみられるが、38の記号は線刻である。また、胎土に白雲母を多く含み、器形も4点の土器よりも大振りとなることから、4点の一群とは区別される土器である。文字・記号資料は他に21の体部外面に「井」状の線刻がある。九字切りの簡略形である。18は口縁部内面に油煙が付着しており、灯明器として使われた土器である。また、39・40も内面に黒色・褐色の物質が付着しているが、漆と思われる。

41~44は須恵器蓋である。42・43は新治窯産である。

45・46は須恵器高台付杯で、45は大型品、46は小型品である。ともに新治窯産である。

47も大型の須恵器杯で、底部を欠くが、高台が付く可能性が高い。これも新治窯産である。

48・49・50は須恵器高杯または高盤の脚部である。48・49は新治窯産である。50は湖西窯産と思われる。

50は外面の一部に灰黄緑色の自然釉が付着している。

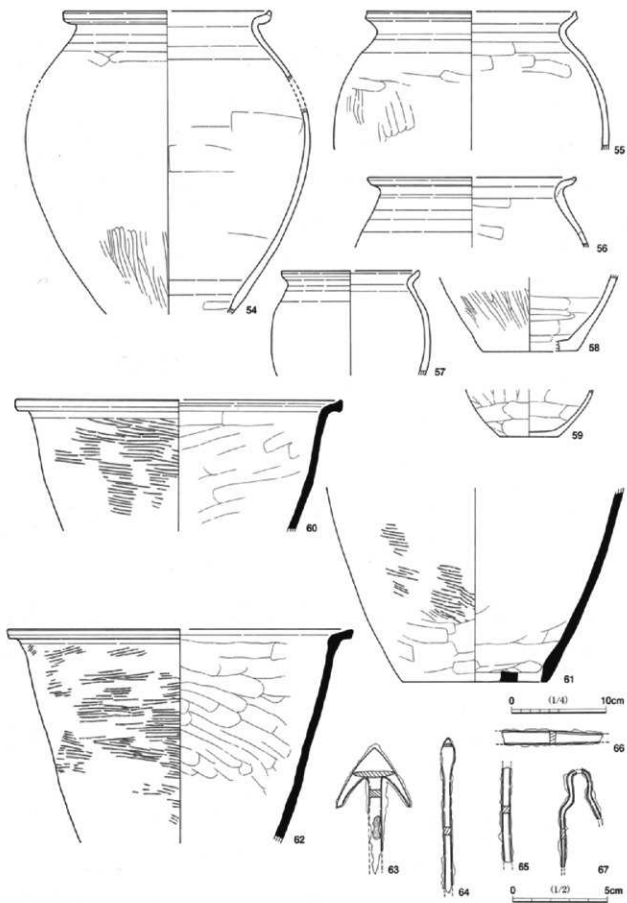
51・52は土師器鉢である。51は鉄鉢形土器といえようか。

53は須恵器長須壺である。胴部外面上位には暗灰緑色の自然釉がかかり、中位は黒褐色の色調である。東海産と思われる。

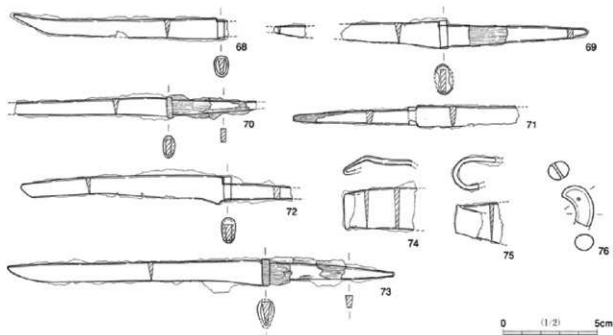
54~59は土師器甕である。54~58は常総型の甕で、57はやや小型品、他は大型品である。58は胴部下部から底部の破片であるが、54とは色調・器壁の厚さ等の質感が異なる。55・56も色調に違和感があるが、上部と下部の破片であることから、同一個体であることを全く否定することはできない。59はやや小型の甕で、「房総」型の甕である。60は須恵器甕または壺である。61・62は須恵器甕で、五孔式の甕である。61は底部遺存がかなりよい。中心孔の径は5.5cmである。62は胴部下部・底部の破片があるが、小片で上部と接合しないため、図示していない。

63~75は鉄製品である。63・64は鉄鍔である。63の刃部は広身の三角形で、深い逆刺をもついわゆる飛燕式の刃部である。棒状部が短い短頸鍔と思われるが、欠損のため、判然としない。茎は遺存しない。木質が棒状部の一部に付着している。64は細身の長頸鍔である。棒状部の下部から茎は遺存しない。刃部は鑿筋式である。65は棒状品で、鉄鍔の棒状部か、紡錘車の柄などが考えられる。66は刀子の茎部分の破片と思われる。実測の都合上、刃部側を右、茎尻側を左にして図化した。67は篩子で、毛抜きとされる製品である。環状に曲げた頭部と脚の上部が遺存するが、頭頂部で折れており、接合しない。脚は長脚と思われるが、下部は遺存しない。68~73は刀子である。いずれもかなり遺存がよいが、とくに73は鍔の一部を欠く程度で、ほぼ完形である。柄の木質もかなり付着している。68は刃部から鍔まで遺存するが、茎の多くを欠いている。切先部分は細身で、上に反っている。鍔の一部に、柄の木質が付着している。69は切先側が折れて接合しないが、茎は茎尻まで遺存し、鍔も部分的に遺存する。茎の一部に木質が付着している。切先側は細身の形態である。70は切先付近と茎尻付近を欠くほかは遺存する。茎には柄の木質が多く付着する。鍔がほぼ遺存するが、付着した木質のため、形をやや把握しにくい。71は切先側を欠く。鍔が図示した側にならずに遺存している。茎尻側に木質が付着している。72は茎尻側を欠くほかは遺存する。鍔の

注1 びたちなか市文化・スポーツ振興公社 佐々木義則氏および下妻市教育委員会 赤井博之氏のご指示による。



第186图 SI-013 (4)



第187図 SI-013 (5)

遺存も良好である。74・75は破損品が折れ曲がったものである。74は鎌、75は刀子または鎌と思われる。再利用するため、意図的に曲げられているものと思われる。

76は石製勾玉である。中央から下部は欠損している。石材は細粒緑色凝灰岩である。古墳時代遺物の混入と思われる。

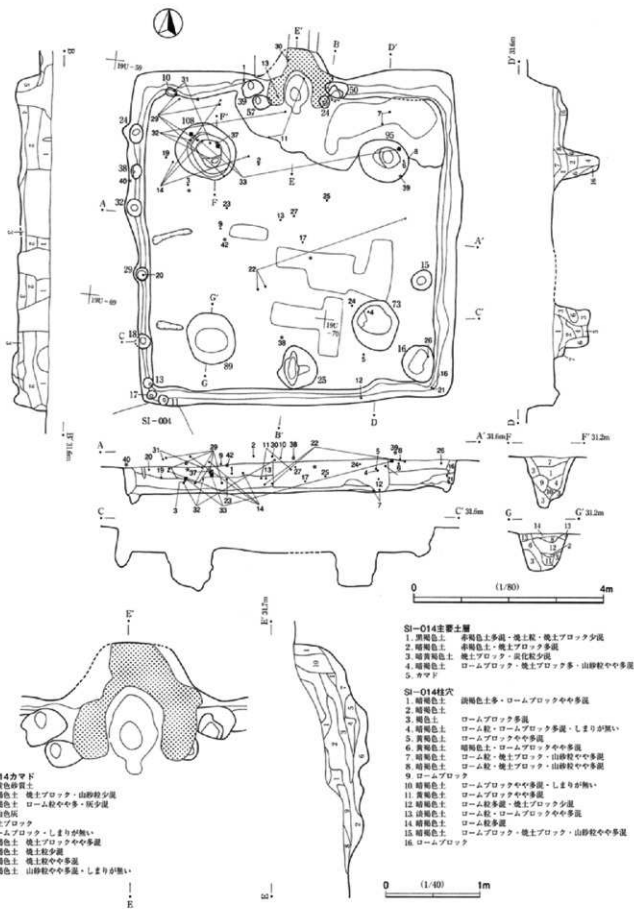
なお、モモと思われる炭化した種子が14点、南東隅中層からまとまって出土している。これについては、第6章で取り上げているので参照されたい。

図示しない土器片の点数は6,445点、重さは51kgであり、非常に多い。図示した遺物と合わせて平面分布をみると、カマド周辺が多く、中央から南東隅側にかけての部分もやや多い。しかし、西壁側は少ない。垂直位置をみると、床面から上層にわたって切れ目無く出土している。

SI-014 (第188図～190図、図版22・244・245・306・307・310・311・314・321)

遺跡南部南寄りの19U区に位置する。7m×7mの方形をなし、深さは0.6mである。主軸はN-5°-Wである。北辺にカマドをもつ。主柱穴4か所と出入口部の小穴をもつ。耕作による攪乱で、カマド周辺と床面の一部を損なっている。壁溝は全周する。西壁とその両隅の壁溝内には、壁柱穴が存在する。その間隔は75cm～1.6mであるが、1.4m程度が標準的な間隔といえよう。南西隅部に3か所あるのは、設置替えも考えられるが、隅部であることから、これで一対の可能性がある。床面は、カマド右袖脇から北東隅部にかけて不整形に窪んでおり、また、南東隅部にも浅い窪みが見られるが、掘りかたの一部を露呈したものである。他の隅部の床面も、中央部に比べて暗褐色土が多くみられ、隅部の掘りかたは中央よりも深い。また、東壁際や南寄りのところにも浅い窪みがあるが、柱穴とは思えない。西壁側の床面には、2条の床溝が見られる。わずかな凹みであり、根太の圧痕と思われる。床面はほぼ全面が堅い。

カマドはあまり遺存がよくない。両袖脇にあるピットは、カマド部分の上屋構造に関わるものと思われる。ピットは2か所ずつあるが、同時に存在した場合と、カマドの作り替えに伴うもの、ということおり



第188図 SI-014 (1)

の解釈がある。右袖脇のビットの一つが袖の下にあることから、後者の可能性が高いと思うが、遺存が悪いため、その推測にはやや不安が残る。構築材は山砂を主体とし、内壁は火熱を受け、赤色化している。火床部の被熱範囲は不明瞭であるが、カマド内堆積土4・5層が火床面上の十層といえよう。その下部は広く窪んでおり、灰のかき出しやカマドの作り替え等によるものであろう。

堆積土は主として下層に分かれる。上層(1層)はローム粒を含むが、黒色味の強い層である。中層(2層)はローム粒をやや多く含む。下層(3・4層)はローム粒を多く含む層である。また、全体に焼土粒の含有が目立つ。柱穴の堆積土は、全体にローム粒・ブロックの含有が多いが、中央は若干暗い色調である。竪穴の堆積土は、ローム粒の含有がやや多いが、自然堆積か埋め戻された土層か判然としない。

図示した遺物は42点と、多量である。1～6は土師器杯である。1～5はロクロ未使用、6はロクロ成形の土器である。6は口縁・体部の一部に整った半月形状の欠損部があり、打ち欠きされた可能性が高い。ただし、土器が1/2程度の遺存なので、可能性の指摘にとどめる。

7～18は須恵器杯である。まず、新地からみていく。新治窯産と思われるものが多く、列举すると8・9・11・12・15～17の7点である。次に、7・10・13・14の4点は、灰白色の色調で、内外面に火傷があり、器形も広い底部から丸味をもって立ち上がるやや器高の低いものという点で共通性がある。水田・不入窯産と思われる土器群である。最後に、18は暗灰色の色調であり、器面の質感からも千葉産の須恵器と思われる。

文字・記号資料では、15の体部内面に、3条の縦位線からなる線刻がある。横位の線があるようにも思われるが、不明瞭であるため、図のとおりと理解しておく。16の底部外面には、記号と思われるヘラ書きがある。これは製作時に偶然付いた可能性もあるが、やや不自然であり、ヘラ書きとしておく。また、18の底部外面にも「方」または「万」と思われるヘラ書きがある。

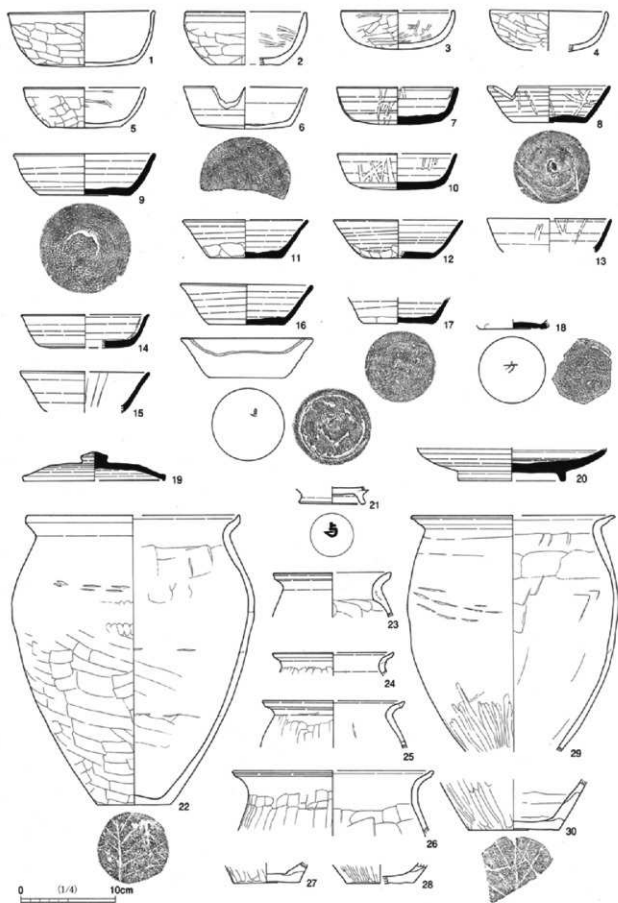
土器の遺存状態をみると、16は、口縁・体部の一部が逆台形状に欠損している。口縁部周は、1/3強で整った形状である。断面が振られているように思われるが、この点は断定できない。しかし、他には欠損・割れがないことから、打ち欠きされたものと考ええる。また、8も、図示した部分の三角形の欠損が、打ち欠きされた可能性がある。この土器は、他には口縁部部に小さな欠けがある程度で、遺存のよい土器である。ただし、口縁部から一部底部にかかって、1/3程度の部分に割れがある。口縁部・体部の割れという点では、9にもあるが、この土器の破損部分は接合していることと小さいことから、打ち欠きと断定しがたい。また、17は口縁部・体部の全周が打ち欠きされた可能性があるが、これも断定しがたい。9・17については、可能性の指摘にとどめる。

11・17は器面の一部が黒色に変色し、7もやや黒ずみがある。また、9は一部褐色化している。以上の土器は、二次的な被熱痕跡が明瞭であるが、他の土器も概して器面が荒れており、堆積土の状況からも、須恵器杯に限らず多くの土器が、火熱を受けたものと思われる。

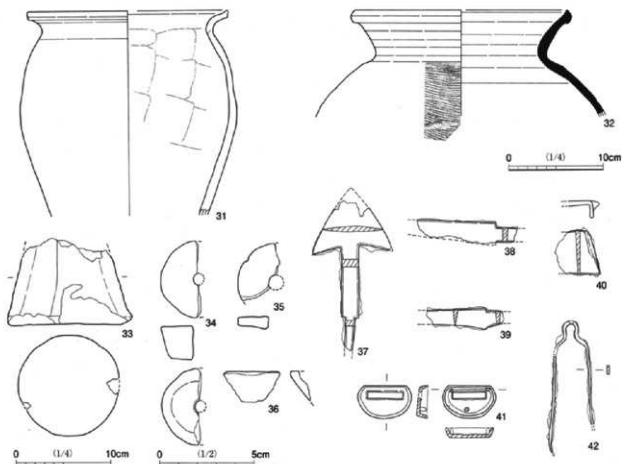
19は須恵器蓋、20は須恵器高台付盤である。ともに新治窯産である。20は被熱により、褐色、暗灰色に変色する部分がある。

21は土師器高台付杯である。底部外面に「与」の墨書がある。

22～31は土師器甕で、22・27～31は常総型である。22は胴部外面下半部に縦位のヘラミガキがみられないうが、器形および底部の本葉痕から、常総型とする。口縁部・胴部上部1/2程度の欠損であり、比較的遺存のよい土器である。胴部内面中位以下は黒ずんでいるが、黒ずみの一部は口縁部まで達している。27・



第189图 SI-014 (2)



第190図 SI-014 (3)

28・30は底部周辺の破片であるが、29・31と同一個体となるものがあるか判然としなない。23～25は小型の甕で、「房籠」型の甕である。26は中型の土器で、「房籠」型の甕である。

32は須恵器甕である。新治窯産で、小石と白色粒を多く含む。

33は土製支脚で、かなり大型のものである。破片のうち、何点かは上層から散って出土しているが、1点が北西隅側の柱穴から出土している。断定はしがたいが、堅穴廃絶にあたり、埋納された可能性が考えられる。ここで、打ち欠きされた可能性の高い土器の出土状況を見ると、土師器杯6・須恵器杯8がともに北東隅側の柱穴の上部から、須恵器杯16が南東隅の中層から、出土している。このような状況から、これらの遺物は堅穴住居跡廃絶にあたり、意図的に置かれた可能性も考えられる。なお、以上の記述は可能性を追求したものであり、確実な状況とは考えていない。

34・35は土製紡錘車である。35は図示した面が広い面（上面）である。裏面は欠損している。36は石製紡錘車で、側面の小破片である。石材は滑石である。

37～42は金属製品で、帯金具である41は銅製品であるが、他は鉄製品である。37は鉄鏃で、刃部先端と茎尻を欠損するほかは遺存する。刃部は広身の三角形で、逆刺をもつが、あまり深いものではない。棒状部が短い短頸鏃である。棒状部は直線的で、篋被の突起はみられない。38・39は刀子である。ともに切先側と茎尻側を欠いている。38は刃側の遺存が悪いが、刃間は浅い作りであろう。背間は深い。39の刃間は曲線状または鈍角の形態である。背間は直角の形態である。40は鎌である。折り曲げた基部付近の破片で

ある。41は完形品で、帯金具の丸軀である。長方形の透かし孔が空き、紙は3か所みられる。42は鬚子である。環状に曲げた頭部と脚の多くが遺存するが、薄作りのため数片に折れており、接合しない。片側は脚の先端が遺存していると思われる。

なお、モモと思われる炭化した種子が5点、南西側上層からまとまって出土している。これについては、第6章で取り上げているので参照されたい。また、図示していないが、軽石が2点出土している。

図示しない土器片の点数は5,360点、重さは46.2kgで、非常に多い。図示した遺物と合わせて平面位置をみると、南西側が希薄であるほかは散った状態で出土している。図示した遺物は、北西側での出土が多い。垂直位置をみると、7が床面から出土している以外は、中・上層からの出土である。出土遺物の多くが、かなり堅穴が埋まった段階で、廃棄されたものであろう。なお、ロームの含有量と遺物出土状況から、2層以下は埋められたことも考えられる。

SI-015 (第191～193図・第465図、図版22・23・245・246・307・308・310・311・317・321)

遺跡南部南寄りの19U区に位置する。6.1m×5.9mの方形をなし、深さは0.65mである。SB-013・030・031・SK-028・SD-001と重複し、SD-001に切られる。SK-028は、その位置から本堅穴の旧カマドであるように思われるが、別遺構で、本堅穴を切る可能性もある。掘立柱建物との新旧関係は不明である。主軸はN-2-Dである。北辺にカマドをもつ。主柱穴4か所と出入口部の小穴をもつ。壁溝は全周する。壁柱穴が東西壁下にくつかみられる。床硬化面の広がりも明瞭でないが、柱穴間がいくぶん硬化しているようである。カマド補部の構築土は山砂主体である。火床部はかなり窪んでいるが、灰のかきだしの結果と考える。カマドに5か所の小穴があり、ほぼ一列に並んでいる。カマド構築に伴うものの可能性もある。しかし、カマドが西辺から北辺に移動していると考えれば、これらは旧カマド使用時の壁柱穴である可能性も否定できない。

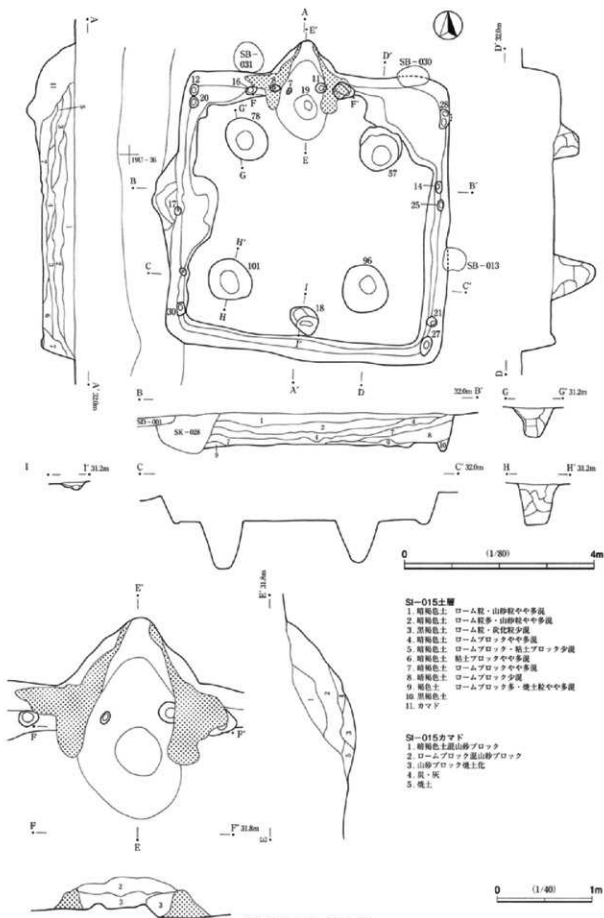
図示した遺物は28点である。1～7はロクロ成形の上師器杯である。3～7は線刻・ヘラ書きのある土器である。7だけは体部外面にあるが、他は底部外面に施される。5は「+」(×)の線刻、6は3条の線が交差するヘラ書きである。3は線刻と思われるが、4・7は器面の磨耗のため、線刻かヘラ書きか判然としない。土師器杯としたもののうち、6は千葉産、7は新治窯産の須恵器の可能性もある。

8は千葉産の須恵器蓋である。9～12は千葉産の須恵器杯である。12の底部外面は図示した線を境に色調の変化があるが、これは重ね焼きの痕跡である。14・15は千葉産の須恵器高台付杯で、14は大型、15は小型の土器である。15の底部外面には「+」(×)のヘラ書きがある。16はロクロ成形の上師器であり、香炉の脚部と思われる。

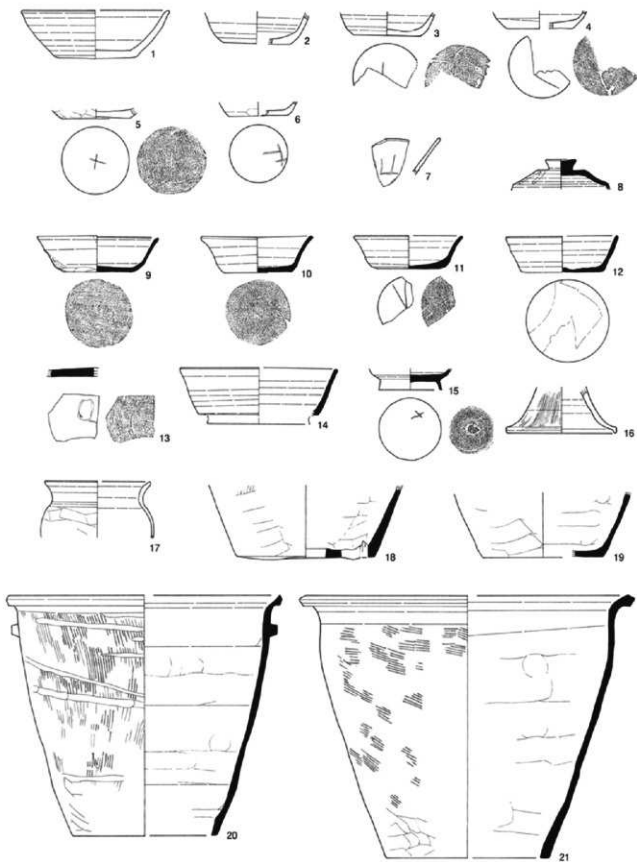
17は上師器甕で、小型品である。18・20・21は須恵器甕、13・19は須恵器甕である。13・18～20は千葉産である。13は底部外面にヘラ書きがある。不整な長方形の形態であるが、欠損部に続いていく。一部は線が二重である。文字ではなく、何らかの記号である。18の底部は五孔の中心孔が遺存し、周辺孔も一部が遺存する。21は新治窯産の須恵器で、色調に赤褐色・黒褐色の部分があるが、白雲母を多量に含む。胴部は横方向に平行タキが施されている。

図示した遺物が多いが、遺存のよい土器は9・10くらいで、その他は遺存があまりよくない。なお、図示した土器は全体に火を受けた影響がうかがえ、ほとんどのものの器面が磨耗しており、一部は赤褐色・灰白色に変色している。

22～27は鉄製品である。22・23は鉄鍔である。22は茎尻を欠損するほかには、刃部の一部を欠くだけで、

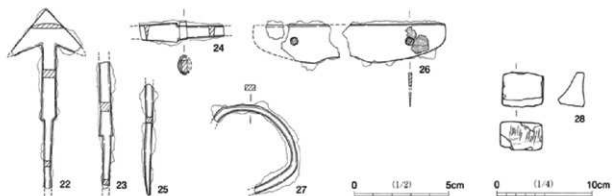


第191図 SI-015 (1)



0 (1/4) 10cm

第192图 SI-015 (2)



第193図 SI-015 (3)

遺存のよい個体である。23は棒状部と茎の破片で、刃部を欠く。茎はやや短いが、茎尻まで遺存していると思われる。22の刃部は広身の三角形で、逆刺は直線的な形態である。棒状部が短い短頸錐である。22・23の棒状部は直線的で、笠披の突起がみられないが、22は図示した左側がわずかに広がっている。24は刀子である。刃部の茎側と茎の刃部側の破片である。背側・刃側は直角に作り出され、錐が図示した片側に遺存している。25は棒状品である。やや判然としないが、上部は欠損していると思われる。図示した下端が尖っており、釘の可能性がもっとも高いと思われる。26は穂摘み具である。3片に割れて接合しない。中央部と図示した左側の端部が欠損している。両端側に円形の目釘孔が一対穿たれており、その中に角釘の一部が遺存している。右側の目釘および孔付近には握り部の木質が付着している。刃側は中央が磨り減っていると思われる。27は頭部をL字形に折り曲げた角釘である。頭部は錆で膨らんでいるが、遺存していると思われる。また、先端部も欠けているが、細くなってきており、先端近くまで遺存しているのであろう。頭部側と先端側は同じ方向に曲げられて、丸くなっている。使用に耐えない形状となったか、後に曲がった可能性もあるが、再利用に供するため、曲げられたことも考えられる。

28は砥石である。石材は流紋岩質凝灰岩である。

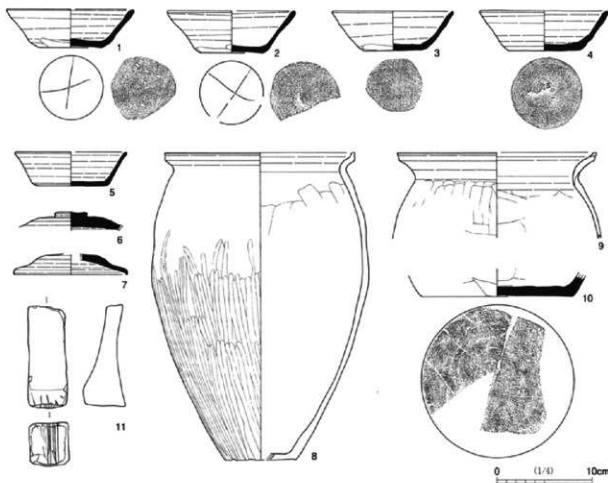
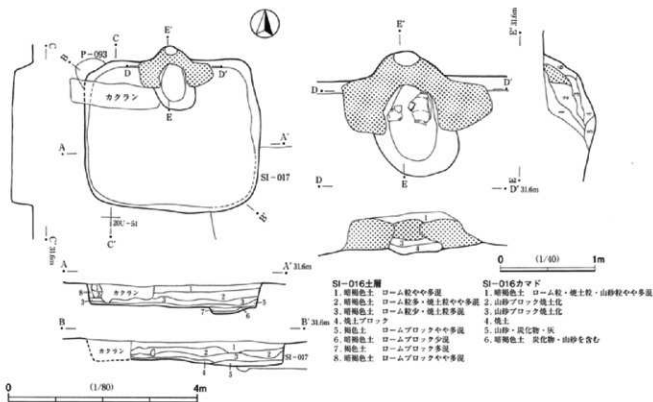
図示しない土器片の点数は2,816点、重さは22.8kgで、多量である。図示したものと合わせて遺物の出土状況を見ると、平面的には壑穴内から広く散って出土し、層位的には多くが覆土中・上層からの出土である。床面・下層から出土したものは、18と26および20の一部破片である。

SI-016 (第194・465図、図版23・246・317)

遺跡南部南東寄りの20U区に位置する。3.2m×3.8mの隅丸方形をなし、深さは0.47mである。主軸はN-1°-Wである。南東隅部付近でSI-017と重複し、017を切っている。北辺にカマドをもつ。壁溝は巡らない。支柱穴は存在せず、出入口部の小穴は検出されなかった。床面は平坦で、硬化面はみられない。カマドは後天井部の一部が遺存している。

図示した遺物は11点である。1～5は須恵器杯である。1～4は千葉産である。1・2の色調は暗灰色・黒灰色、3・4の色調は褐色味、黒色味を帯びている。5の胎土は白雲母を含み、新治窟産である。1・2は底部外面に「× (+)」のヘラ書きがある。6・7は須恵器蓋である。7は黒灰色の色調で、千葉産と思われるが、6の産地決定は難しい。

8は常輪型の土師器甕、9は「房総」型の土師器甕である。10は千葉産の須恵器甕である。底部外面に



第194図 SI-016

2条線の交差する線刻がある。色調は褐色味、黒色味を帯びている。

11は流紋岩質凝灰岩製の砥石である。

図示しない土器片の点数は1,662点、重さは11.6kgであり、かなり多い。図示した遺物と合わせて、竪穴全体から出土するが、北東隅部付近とカマド内がやや多い。8はまとまった破片がカマド内から出土しているが、一部の破片は北東隅部付近他に散っている。出土層位は中・上層のものもあるが、主体は下層である。カマド内からは、9・10も出土している。1～4は北東隅部付近から出土している。出土層位については、4がやや低い位置であるが、床面からは浮いている。1・2は中層、3は上層である。

SI-018 (第195・465図、図版24・247)

遺跡南部南寄り19C区に位置する。3.9m×3.7mのやや台形的な方形をなし、深さは0.58mである。主軸はN-2°-Wである。北辺にカマドをもつ。カマド部分でP-100と重複している。壁溝は全周する。出入口部の小穴があるが、4本柱の主柱穴はみられない。床面はハードローム層に造し、全体に堅緻であるが、中央部は周囲よりも硬化している。カマドの火床部分は使用に伴い、かなり窪んでいる。

図示した遺物は8点である。1・2はロクロ成形の上師器杯である。2の底部外面には墨書がある。「千」かとも思われるが、釈読不明とした方が妥当であろう。1は質感から須恵器の可能性もあるが、褐色の色調から土器とした。3～6は須恵器杯である。3・5は千葉産、4と小破片の6が新治産である。4と6は別個体と思われる。6は体部外面に1条の線刻があるが、ヘラズリによる条線と交差しており、「+ (×)」状に見える。意図したものと考え、3は接合の結果、完形となった土器である。接合部分は口縁・体部の一部で、打ち欠きされた可能性がある。他には割れていない、また、4も1縁部の3か所が欠けている。意図的なものかもしれないが、断定しがたい。1/2強の遺存で、火を受け、器面の磨耗が著しい。

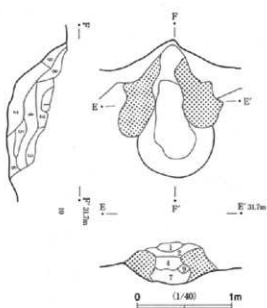
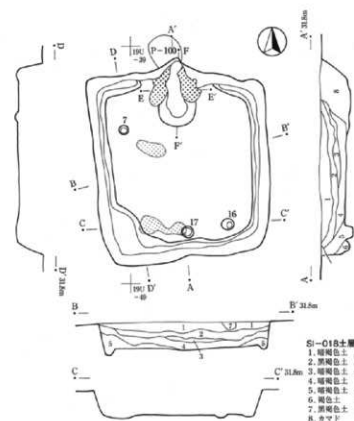
7・8は千葉産の須恵器である。色調はともに褐色・黒褐色味を帯びている。8は遺存が少なく、図はやや大振りになっている可能性がある。

3は中央部下層から出土した。壁際は廃棄・流入の時点である程度埋まっていた可能性があるが、土器の出土状況から、本堅穴に伴う遺物の可能性もある。4は中央部南寄り上層からの出土である。7はカマド内からの出土である。8は中央部やや南側、中・下層からの出土である。遺物の出土は壁際に少なく、中央部南側やカマド付近にやや多くみられる。図示しない土器片の点数は304点、重さは4.4kgである。

SI-019 (第196図、図版24・309・315)

遺跡南部南東寄りの20U区に位置する。3.4m×3.5mの方形をなし、深さは0.26mである。主軸はNである。北辺にカマドをもつ。SB-034と重複するが、本堅穴の方が新しい。壁溝は巡らない。主柱穴は存在せず、出入口部の小穴は検出されなかった。床面は全体に硬いが、特に南壁際中央からカマド前までの部分が硬化している。掘りかた底面は凹凸があるが、特に中央から南東側の凹凸が著しい。このうちの一部はSB-034柱穴の一部と思われる。硬化面はこの上部にあり、貼り床がかなり硬化していることがわかる。カマドは遺存がよい。構築材は山砂主体であるが、下部は暗褐色土の多い部分とローム粒・ロームブロックの多い部分がある。上部も暗褐色土が輪状に入る。カマド下底面は床面よりも深くえぐれている。

図示した遺物は5点である。1はロクロ成形の上師器杯である。底部外面に1条のヘラ書きがある。2は千葉産の須恵器杯である。3は土器器臺で小型品である。被熱により内面が黒く変色し、外面も剥落が著しい。4は土製支脚である。上部、下部ともに欠損している。5は鉄製の鎌である。柄部側を欠損し、

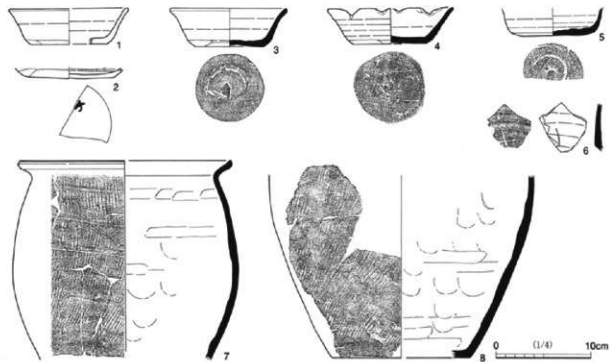


SI-018土層

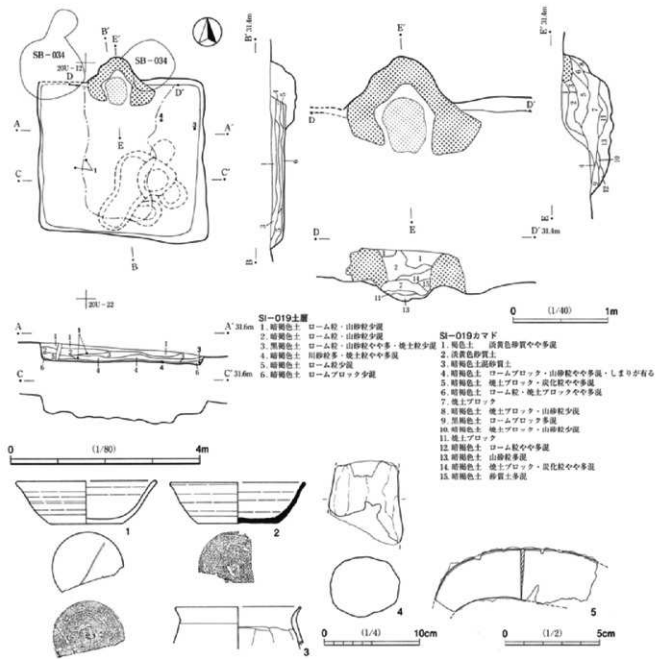
1. 暗褐色土 ロームブロックやや多量
2. 茶褐色土 ロームブロック多・焼土粒少
3. 暗褐色土 焼土粒・山砂粒多・ロームブロックやや多量
4. 暗褐色土 ローム粒やや多量
5. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックやや多量
6. 褐色土 ロームブロック多量
7. 茶褐色土 (細礫層)
8. R.V.F

SI-018カマド

1. 黒褐色土 ロームブロック多量
2. 山砂 ローム粒・焼土粒やや多量
3. 山砂ブロック
4. 黒褐色土 焼土粒・山砂ブロックやや多量
5. 黒褐色土 焼土粒・山砂ブロック・炭化粒やや多量
6. 焼土・炭化粒・灰多量
7. 焼土・焼土ブロック
8. 山砂
9. 焼土ブロック



第195図 SI-018



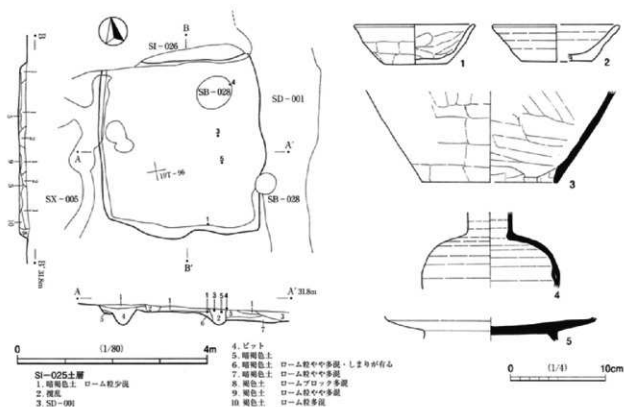
第196図 SI-019

切先もわずかに欠いている。

1は中央西寄り中層からの出土。4はカマド右袖前方の床面から出土した。図示しない土器片の点数は369点、重さは2.6kgである。概して出土遺物は少なく、散在的な出土状況である。

SI-025 (第197図、図版26・248)

遺跡南部中央の19T区に位置する。3.8m×3.4mの方形をなし、深さは0.25mである。主軸は不明である。他の複数遺構との重複もあって、遺存がよくない。重複遺構は、北側に所在するSI-026、東側のSD-001、西側のSX-005の他、SB-028がある。カマドの所在が不明で、出入口部の小穴も検出されなかったため、主軸方向は不明である。ただし、北辺にカマドがあると仮定すると、主軸方位は北からわずかに東に振れる程度の方向である。奈良・平安時代の竪穴住居跡か確実ではないが、出土遺物の多くが奈良・



第197図 SI-025

平安時代のものであるので、本項で扱う。

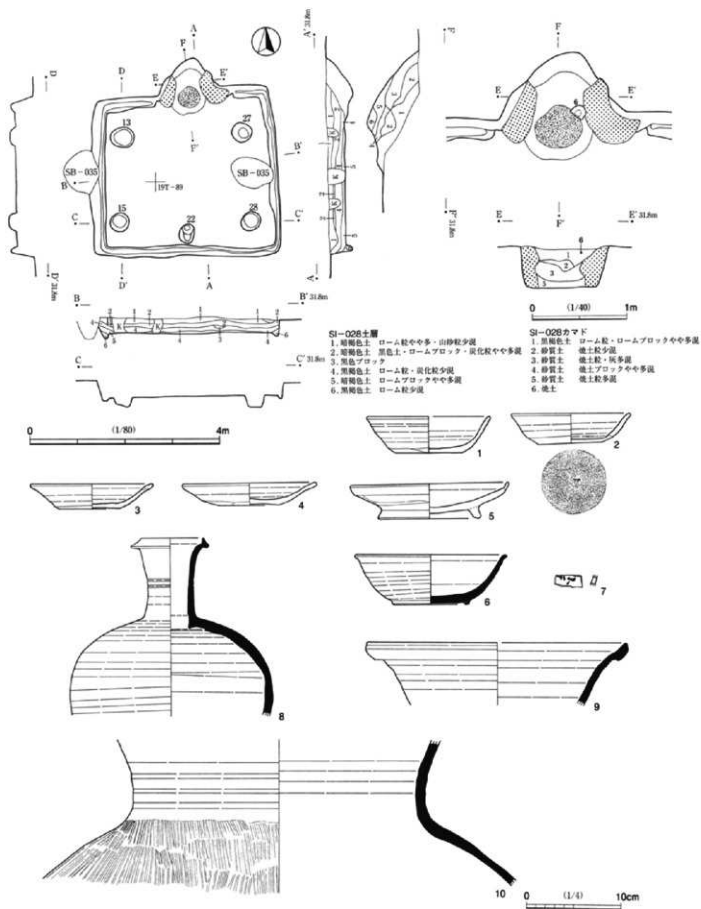
四壁のうちでは、西壁の遺存がよく、直線状である。南壁は一部が不整であるが、床面のラインはやや直線的で、西辺と直角となる。北壁と東壁は他遺構の影響もあり、本来のものか、やや疑問がある。規模については、若干不確定であるが、本遺構が方形の竪穴遺構であることはいえると思う。主柱穴は存在しない。確認面から床面まではやや浅く、床面は他遺構・攪乱の影響で一部に凹凸がある。硬化面も認められない。

図示した遺物は5点である。1は非ロクロの土師器杯、2はロクロ成形の土師器杯である。3は千葉産の須恵器甕である。4は灰軸陶器長頸甕である。胴部上位には灰緑色の釉が全面に掛かっている。釉の掛かっていない部分の外面の色調は褐色、内面の色調はやや黄色味のある灰色である。胎土には黒色粒が多くみられる。猿投産で、折戸10号窯式のものと思われる。5は新治窯産の須恵器高台付甕である。白色の砂粒を含むが、比較的緻密な胎土である。

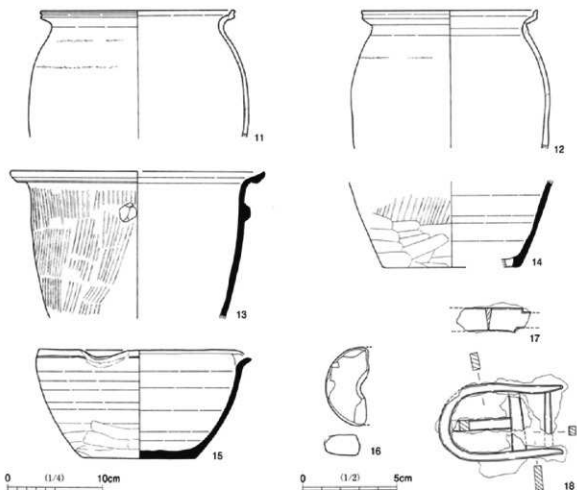
竪穴の遺存が悪いため、遺物量はあまり多くなく、散在的な出土である。堆積土が浅いため、出土遺物は下層からの出土としてよい。図示しない土器片の点数は309点、重さは2.6kgである。

SI-028 (第198・199・465図、図版27・249・306・311・314)

遺跡南部中央の19T区に位置する。3.5m×3.9mのやや横長の方形をなし、深さは0.37mである。SB-035と重複する。主軸はNである。北辺にカマドをもつ。火床部分が深く窪んでいる。壁溝は全周する。床面は全面に貼り床が施されている。貼り床は黒色土とロームブロックの混じったもので、床面上面は全体に堅くしまっている。主柱穴4か所と出入口部の小穴をもつ。竪穴の堆積土はローム粒・ロームブロックの含有が少なく、自然堆積と思われる。



第198図 SI-028 (1)



第199図 SI-028 (2)

図示した遺物は18点でやや多い。また、6や15など東国の集落にあっては、優品や類例の少ない遺物が出土している。1・2・7はロクロ成形の土師器杯、3・4はロクロ成形の土師器皿、5はロクロ成形の土師器高台付盤である。土師器杯皿類は概して遺存がよく、特に4はほぼ完形、2も90%の遺存である。5は器面がやや磨耗しており、火を受けた可能性がある。7は体部破片で、外面に横位で2文字の墨書がある。上の文字は「小」、下の文字は旁に「千」をもつ文字と思われるが、遺存が少なく判然としない。6は灰釉陶器碗である。口縁部が1/4周弱欠けているが、他は割れない器である。内面全面に施釉されている。猿投産で、黒笹14号窯式のものと思われる。

8は灰釉陶器長頸壺である。口頸部内外面から胴部上部外面に暗緑色の釉がかかっている。胴部内面は灰色で、胎土は黒色粒が目立つ。猿投産で鳴海32号窯式のものと思われる。9・10は須恵器甕、13・14は須恵器甎でいずれも千葉産である。10は大型の甎で内外面とも暗褐色、黒褐色に発色している。頸部外面は褐色味の強い部分が多い。砂粒は沈められており、作りのよい製品である。13・14は同一個体と思われる。

15は須恵器の片口鉢である。千葉産と思われる。底部外面は砂を敷いた台上で製作した質感である。色調は暗赤褐色であるが、奈良・平安時代の須恵器甕底部外面にみられる痕跡と同一であることから、須恵器とした。

11・12は常総型の上師器である。

16は土製紡錘車で孔を境にほぼ1/2の遺存である。

17・18は鉄製品である。17は刀子で刃部の茎側と茎の刃部側の破片であるが、茎の遺存はわずかである。背間は直角に、刃間はやや鈍角に作り出されている。18は鉸貝でベルトのバックル部分である。錆跡が著しく、所々で欠損するが、全体の遺存は良好である。刺金は長方形の断面であるが、刺金につづく部分はやや薄い。また、その部分に平行する部分も薄い作りである。周囲は「U」字状の形態で、薄いが幅広いの作りである。腰帯側がもっとも幅広である。

6はカマド内堆積土上層から正位で出土した。17・18は床面から出土し、10・13・14は下層から出土した。遺物は壁穴全体から出土しており、図示した遺物の位置も、特に偏った傾向はない。出土層位も、床面から上層にわたる。図示しない土器片の点数は322点、重さは2.6kgである。

SI-029 (第200・466図、図版28・249・311)

遺跡南部南東寄りの20U区に位置する、2.4m×2.6mの隅丸方形をなし、小規模な壁穴である。深さは0.4mである。主軸はN-26°-Eである。カマドは北東辺にあるが、東隅に寄っている。北東辺、カマドの左側でSB-017・034と重複している。また、カマド北側と北西辺の一部も擾乱を受けている。4本柱の主柱穴は存在せず、出入口部の小穴も検出されなかった。壁溝は巡らない。床面は全面に貼り床が施されている。貼り床は厚く、ローム粒・ロームブロックが主体で暗(黒)褐色土の混じった土である。床面は全体的に堅くしまっている。カマド部分は床面レベルよりも深く掘り込まれず、構築位置が当初から計画されていることがわかる。カマド右袖前方に、深さ40cm強のピットがあるが、貼り床下から検出されたものである。

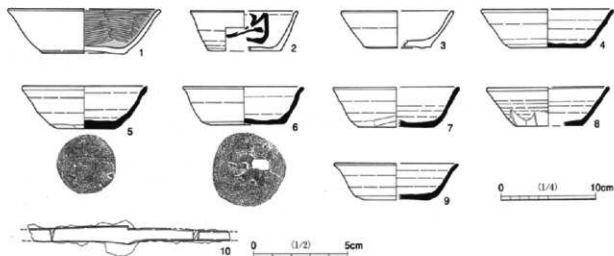
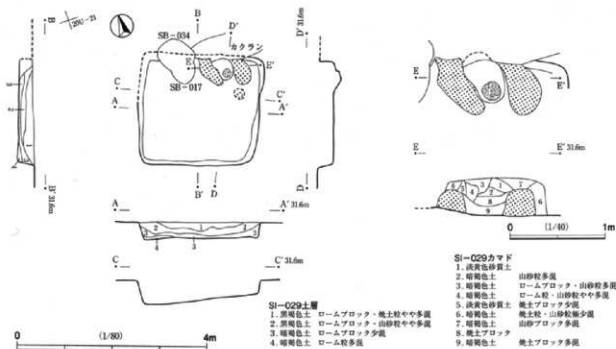
図示した遺物は10点である。1～3は口クロ成形の土師器杯である。2は「罎」と書かれた墨書が体部内面に正位でみられる。4～9は須臾器杯である。産地は、8がやや不明瞭であるが、他は千葉産である。ただし、5・7は褐色味のある色調で、土師器杯の可能性もある。8は口縁部・体部が割れているが、完形の土器である。本来は割れていなかったものと思われる。6も遺存がよい個体である。

10は鉄製品で切先側と茎尻側を欠損する刀子である。茎はかなり長く、背間は直角に作り出されている。刃間は錆跡のため、やや不明瞭であり、小さく角を作っているようにも思われる。

出土遺物は壁際にはあまり多くない。カマド周辺にやや集中しており、なかでも8はカマド左袖脇、北壁に近い位置の下層から、伏せた状態で出土した。6もカマド周辺からやや散って出土した。出土層位は下層～中層である。1もカマド部分から出土しているが、遺存は1/2弱で、上層の出土である。その他の遺物はあまり遺存がよくない。出土層位は下層から上層に及ぶが、下層出土のものでも、壁際は埋まっていた可能性がある。図示しない土器片の点数は412点、重さは2.6kgである。

SI-030 (第201・465図、図版29・249)

遺跡南部中央の19T区に位置する、4.4m×4.3mの隅丸方形をなし、深さは0.25mである。主軸はN-10°-Eである。北辺にカマドをもつ。北辺中央から東辺中央にかけて、SD-002によって切られており、壁と床面の一部を損なっている。また、南辺中央でもSI-012と重複するが、本遺構がSI-012を切っている。主柱穴は4か所あるが、出入り部の小穴は検出されなかった。SI-012との重複の影響も考えられる。壁溝は北東隅部でみられないが、本来は全周するものとする。確認面から床面まではやや浅い。床面の硬化面は、本来、柱穴間を中心とする広範囲に及ぶものである。南西隅部が不明瞭であるが、他の隅部はや



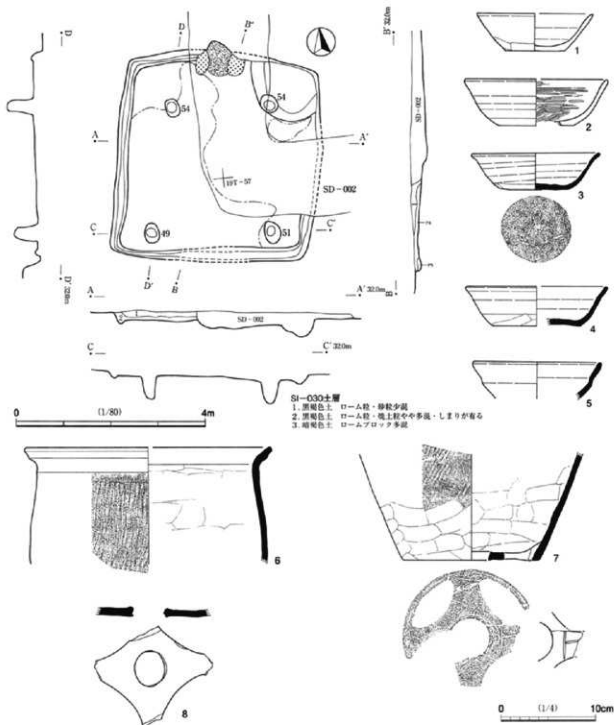
第200図 SI-029

や軟質である。北東隅部が深いが、やや軟質の貼り床を除去して、掘りかた底面に達したと思われる。SD-002による影響も受けているのであろう。カマドはSD-002によってほとんどこわされている。山砂の分布から、袖の位置を図のように推定した。火床部は焼けた面が検出された。

図示した遺物は8点である。1・2はロクロ成形の土師器杯である。3～5は千葉産の須恵器杯であるが、4は褐色味の強い色調であり、土師器の可能性もある。6～8は千葉産の須恵器瓶である。7・8は五孔をもつ底部の一部が遺存している。なお、6は7と同一個体の可能性がある。7は底部外面に「T」字形のヘラ書きがみられる。

図示した遺物のうち、3の遺存はよいが、他はあまり良好な遺存状態ではない。

3はカマド右側の床面から出土したもので、倒位の出土状況と思われる。遺物の出土は、堆積土が浅い

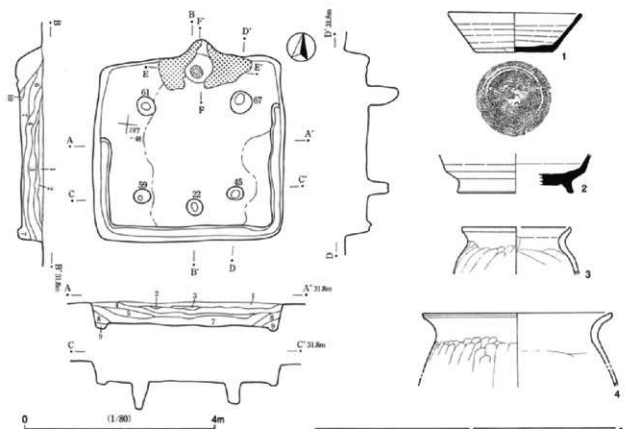


第201図 SI-030

こととSD-002の影響によりやや少ない。現状での遺物分布は、西辺側北寄りであり少ないが、それ以外は竪穴全体にみられる。カマド右側の北東隅部にやや多い。図示しない土器片の点数は302点、重さは2.2kgである。

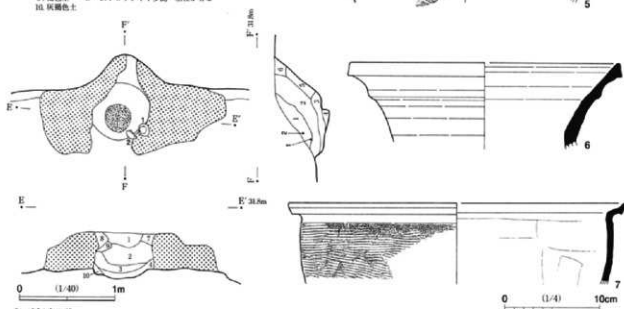
SI-031 (第202・466図, 図版29・249・311)

遺跡南部中央の19T区に位置する。3.9m×4mの方形をなし、深さは0.47mである。主軸はN-7°-Wである。北辺にカマドをもつ。主柱穴4か所と出入口部の小穴をもつ。壁溝は、カマドのある北壁を除く3



SI-031土層

1. 暗褐色土 ローム粒やや多・焼土粒少量
2. 暗褐色土 ロームブロックやや多
3. 暗褐色土 ロームブロック・山砂ブロック少量
4. 黒褐色土 ローム粒・粘土粒やや多
5. 黒褐色土 ローム粒・山砂粒・粘土粒やや多
6. 暗褐色土 粘土ブロック多
7. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒多
8. 黒褐色土 ローム粒少量
9. 褐色土 ロームブロックやや多・粘性がある
10. 灰褐色土



SI-031カマド

1. 暗褐色土 焼土粒・灰褐色砂質やや多
2. 淡黄色砂質土
3. 暗褐色土 焼土ブロック・山砂ブロック多
4. 焼土
5. 黒褐色土 炭化粒多
6. 黒褐色土 山砂粒多
7. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒やや多
8. 褐色土 焼土ブロック・山砂粒やや多
9. 暗褐色土 山砂粒やや多
10. 黒褐色土 山砂粒やや多・ローム粒少量

第202図 SI-031

壁で巡っている。東西壁の壁溝は北側で途切れる状況で図示しているが、詳細に検討すると浅くなるもの北側部分も続いているものと思われる。図は南壁から続く深い部分といえる。床面には、出入口から主柱穴間を主体に硬化面がみられる。床面には貼り床が施される。貼り床は柱穴部分が厚く、他は薄い。あるいは貼り床というよりも、柱の建て替えに伴う柱穴部分の掘り返し・修復とした方がよいかもれない。貼り床または柱穴部分掘り返しの上層は、ロームブロックを含む暗褐色土で、壓くしまっている。

図示した遺物は8点である。1は須恵器杯、2は須恵器高台付杯で、ともに新治窯産である。3・4は「房総」製の土師器甕で、3は小型品である。5・7は新治窯産の須恵器甕または甌でともに口縁部から胴部上位の一部の遺存である。6は人型の須恵器甕の口頸部である。緻密な胎土で灰白色の焼成である。湖西窯などの東海産の須恵器と思われる。

8は鉄製の刀子である。刃部の茎個と茎の刃部側の破片である。背間は直角に作り出されている。刃個は刃部と茎が直線的で不明瞭であるが、わずかに角が付くように思われる。

図示した遺物のうち、遺存のよいものは1だけである。

1はカマド内下層から、裏返し状態で出土した。1の近くでやや低い位置から2が倒位で出土しているが、遺存が悪い。他の遺物は下層から上層にかけて出土しており、中層での出土が多い。出土遺物は少量で散在的な出土である。図示しない土器片の点数は227点、重さは1.5kgである。

SI-032 (第203・466図、図版30・249)

遺跡南部中央の19T区に位置する。3.6m×3.4mの方形をなし、深さは0.15mである。主軸はN 5° Wである。北辺にカマドをもつ。主柱穴のうち北側の2か所を検出したほか、出入口部の小穴がある。南側2か所の主柱穴については、精査したもののその存在をうかがえない。規模が小さいため検出できなかったことと、逆に北側の主柱穴の把握が誤りであることとの可能性を考えておく。壁溝は巡らない。床面の硬化面は、中央部に顕著にみられる。カマド構築材は山砂を主体とするが、暗褐色土の含有も多い。また、基底部はローム粒・ブロックを多く含む。内壁は焼けた山砂ブロックを多く含む。

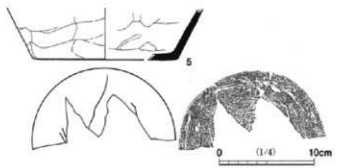
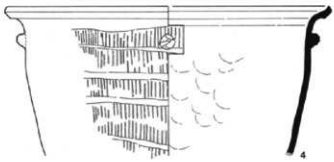
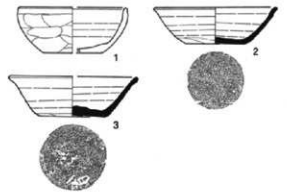
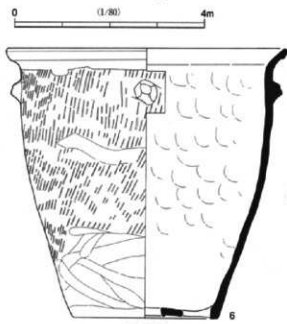
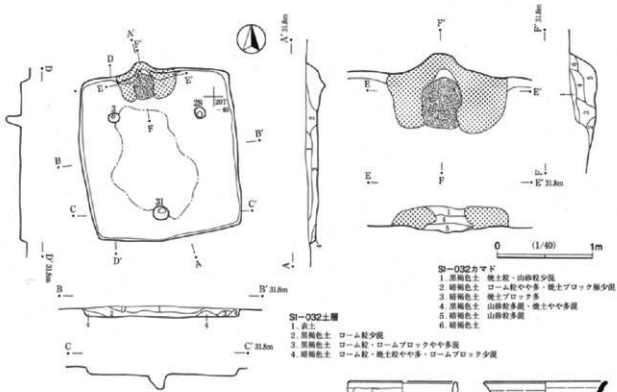
図示した遺物は6点である。1は非口クロ成形の土師器杯である。2・3は千葉産の須恵器杯である。2は接合により完形となった土器である。また、3も遺存のよい土器である。2は口縁・体部にかかる一部の破片が半月状で、打ち欠きされたものようにも思われるが、他に割れもあり断定しがたい。

4・6は千葉産の須恵器甌、5は千葉産の須恵器甕である。6は遺存のよい個体である。底部は五孔をもつ。5・6は底部外面にヘラ書きがある。6は「入」に似た形であるが、文字であるか断定しがたい。5のヘラ書きは欠損部にかかっている。何らかの記号であろう。

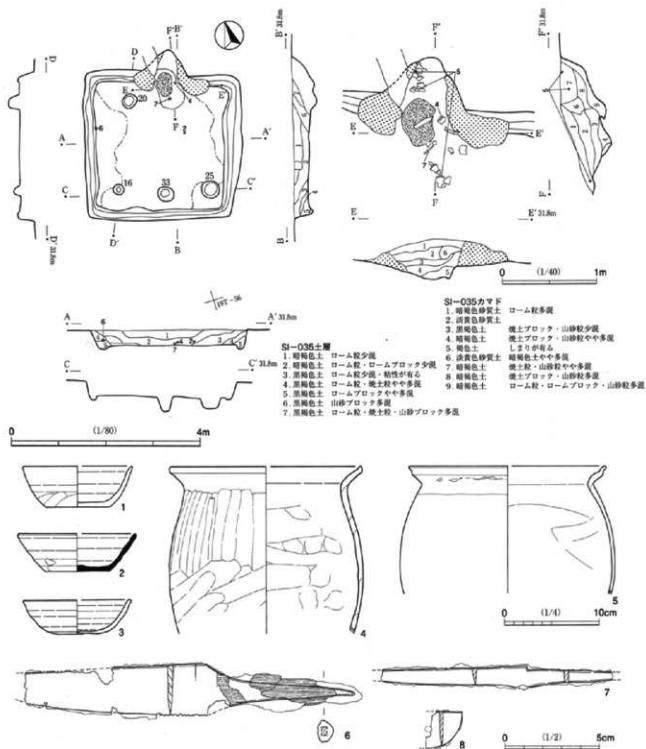
3はカマド左袖脇の下層から、正位で出土した。2は、主要部分が中央部やや南の下層から正位で出土し、一部の半月形の破片が3と同一地点から出土した。6は北西隅側や中央部南寄りのところなどから大形の破片が出土した。なお出土層位は床面から下層主体である。図示しない土器片の点数は37点、重さは300gである。本壁穴では、図示した遺物以外の破片の出土が非常に少ない。

SI-035 (第204図、図版31・32・250・311)

遺跡南部中央の19T区に位置する。3.1m×3.3mの方形をなし、深さは0.34mである。主軸はN-20° Eである。北辺にカマドをもつ。主柱穴4か所のうち、3か所と出入口部の小穴をもつ。主柱穴については、北東側に存在を想定できる1か所の検出ができなかった。これは柱穴の掘込みが浅いことに起因するものとも考えられる。壁溝は全周する。床面は全面に貼り床が施されている。貼り床はローム粒・ブロックと



第203図 SI-032



第204図 SI-035

黒褐色土の混じったもので、全体に厚く、底面の凹凸が著しい。床面は東西の壁際を除いて、硬化面が広がっている。

カマドはあまり遺存がよくない。特に左袖はかなり攪乱を受けている。構築材は山砂主体であるが、基底層はソフトロームを含む。袖内壁は火を受けて、赤色化している。火床部下は深く窪んでいる。

図示した遺物は8点である。1・3はロクロ成形の土器器杯である。2は須恵器杯である。色調が赤褐

色であるが、質感から干葉産と思われる。4は「房籠」型の土師器甕である。下部を欠くが、11線部から胴部中位まで遺存する個体である。5は常総型の土師器甕である。6・7・8は鉄製品である。6は鋸である。先端を欠くが、遺存のよい個体である。刃部の茎寄りの刃側は細かい刻みが連続しており、肉眼でも観察できる。また、切先側もX線写真では、わずかに刻み目がみられる。しかし、その間は錆および刃こぼれのためみられない。背間は角が作り出されず、莖は刃部からなだらかに幅を減じて莖尻にいたる。刃側部分は欠損しているが、同様であろう。莖は大ききのわりにやや短く、柄の木質の付着が良好である。編は遺存していないが、締め付けた際に生じた直線的な痕跡が残っているため、その部分を図化した。7は刀子である。刃部先端と莖尻を欠くが、比較的遺存のよい遺物である。背間は直角に作り出されているが、刃側は欠損のため、形状が不明瞭である。8は櫛柄み共である。片側端部の破片である。H釘孔の部分で破損しているように思われるが、遺存が少なく、判断としない。なお、4・6・7以外の遺物は、遺存がよくない。

4・7はカマド内下層から出土した。また、5もカマド内上層およびカマド前の床面から出土した。6は西壁際北寄りで、中層から出土した。カマド内・周辺からはやや多くの遺物が出土したが、その他はやや少量で、散在的な出土である。特に分布が希薄なのは、南東隅付近から東辺側と、西壁際の部分である。図示しない土器片の点数は331点、重量は3.4kgである。

なお、モモと思われる炭化した種子が1点出土している。これについては、第6章で取り上げているので参照されたい。

SI-036 (第205・466図、図版32・250)

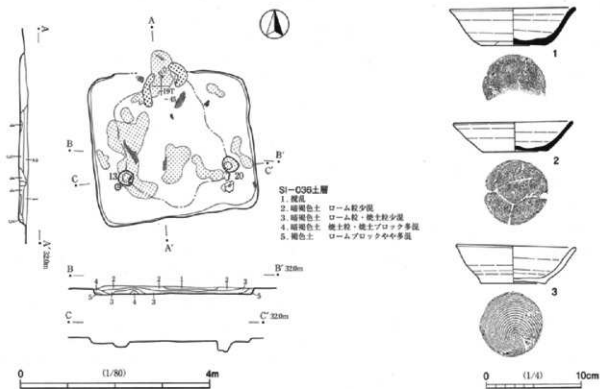
遺跡南部中央の19T区に位置する。3.2m×3.4mの方形をなし、深さは0.18mである。主軸はN²-Wである。北辺にカマドをもつ。溝跡は巡らない。主柱穴については、南側に2か所あるような図となっているが、暗褐色土の部分をもたまたま発掘した結果と思われ、存在しないものとする。出入口部の小穴も検出されなかった。床面は平坦で、硬化面が中央部に広くみられる。確認面から床面まではかなり浅い。床面上には、焼土粒・ブロックが広く堆積し、炭化材の出土も目立つ。土層が焼却された住居か、火災を受けた住居と考える。なお、カマド右袖前の炭化材には、長方形のはぞ穴がみられる。このはぞ穴の長辺側を縦にしてみた場合、短辺側の上下に穿孔があるように見える。一方ははぞ穴の近く、他方はやや離れて位置すると思われるが、炭化材であることから、穿孔の存在自体が確実とはいえない。カマドの遺存は悪く、特に左袖は痕跡を認める程度である。

図示した遺物は3点である。1・2は干葉産の須恵器杯、3はロクロ成形の土師器杯である。1・2は色調が褐色であり、土師器の可能性もある。3の底部痕跡は回転系切り無調整である。火を受けたことにより、1の器面は所々剥落している。

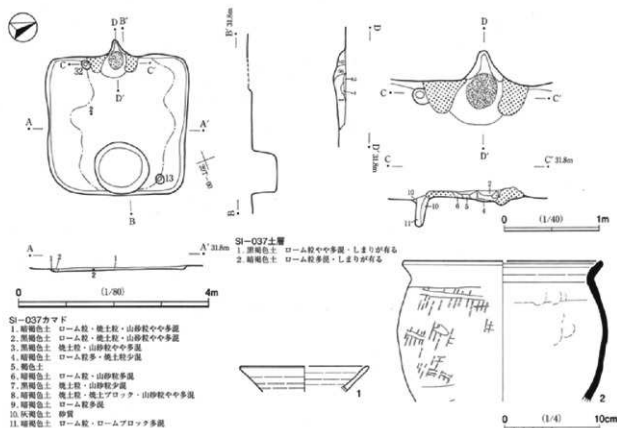
1はカマド内外の下層から、2もカマド左袖脇の下層から出土した。3は西辺側南寄りの床面から正位で出土した。図示しない土器片の点数は84点、重量は2.2kgであり、遺物量は少量である。

SI-037 (第206図、図版33)

遺跡南部東寄りの20T区に位置する。3m×3mのやや隅の丸い方形をなし、深さは6cmである。床面および四壁の下部がわずかに遺存している。主軸はN-65°-Wである。北西辺にカマドをもつ。土坑(遺構番号未付)が南東壁中央に接する状態で、壁穴内にある。木堅穴を切っており、別の遺構である。出入口部の小穴は検出されなかったが、あったとしても、この土坑により消滅している。主柱穴は存在しな



第205図 SI-036



第206図 SI-037

い。東隅部で、土坑脇に小穴があるが、本堅穴に伴うものとは思われない。壁溝は巡らない。床面の硬化面は、カマド前から土坑周囲にかけて広くみられる。カマドは袖部下部のみの遺存である。左軸脇に深さ30cmの小穴があるが、カマドに伴うものかわからない。

図示した遺物は2点である。1はロクロ成形の土師器杯、2は千葉産の須恵器甕である。ともに遺存は少ない。2は色調が褐色で土師器的な質感を有するが、胴部外面に平行タキが施されており須恵器である。中央部やや北西壁(左)側から出土した。図示しない土器片の点数は90点、重さは0.6kgである。堅穴の遺存が悪いので、出土遺物は少ない。

上坑の堆積土は黒褐色土主体で若干のローム粒・ブロックを含む土層である。最下層はロームを多く含む。少量の土師器片が出土しているが、混入した遺物である。

SI-038 (第207・466図、図版33・250・315・321)

遺跡南部北寄りの19S区に位置する。2.9m×3.1mの方形をなし、深さは0.24mである。主軸はN-10°Eである。北辺にカマドをもつ。出入口部の小穴をもつが、主柱穴はみられない。南西隅付近の小穴は、上柱穴とは思わず、本堅穴に伴うか不明である。壁溝は巡らない。床面は四壁の壁際を除いて、硬化面が広くみられる。堆積土は中位に黒色味の強い層(4層)が厚く堆積し、自然堆積と思われる。カマドの構築材は山砂を上として、暗褐色土・ロームを含む。火床部は床面よりもわずかに凹む程度である。図化されていないが、土製支脚(6)が火床部左袖寄りの奥部から使用されていた状態で出土している。

図示した遺物は6点である。1は千葉産の須恵器杯、2はロクロ成形の土師器高台付杯、3はロクロ成形の土師器皿である。3は完形であり、1も比較的遺存はよいが、2は遺存が少ない。3は火を受け、器面が赤色化する部分や黒ずむ部分があり、内面の磨耗も顕著である。また、口縁部が2か所小さく欠けている。被熱痕跡とあわせて、灯明器として使用されていたと思われる。2は器面の磨耗が著しい。

4は千葉産の須恵器甕、5も千葉産の須恵器甕である。4はほぼ完形であるが、5は遺存が少ない。4は外面の一部が灰白色に変色し、カマド内で長期に火を受けた痕跡が明瞭である。

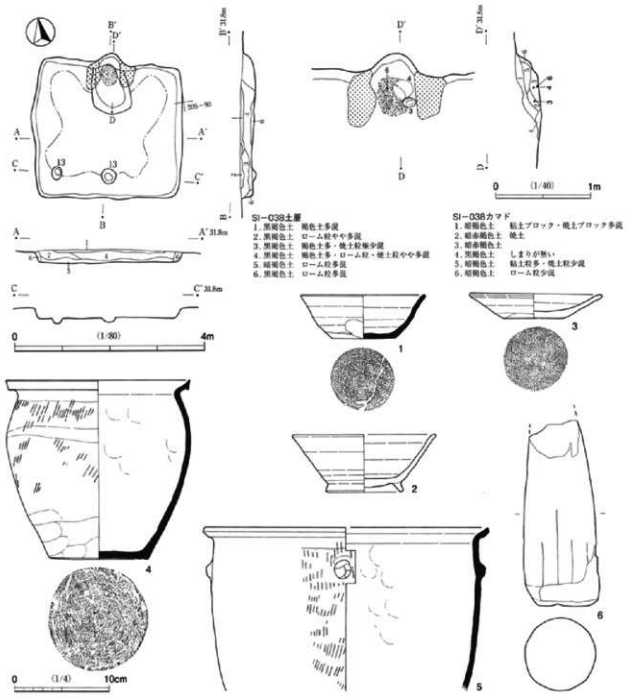
6は土製支脚である。上部の欠損が意図的である可能性があるが、単なる破損との区別が難しい。

3・4はカマド内下層から出土した。3は正位で出土し、4は横に傾いた状態での出土である。写真では、4は3の上部にあるように見えるが、4の底部の高さは、3とあまり変わらない。また、4の口縁部の一部は確認面よりも上部となるため、欠損しているが、本来はその部分も遺存していたと考える。3は土器や出土状況から、カマド廃絶儀礼に伴う遺物であろう。ほぼ完形の4もセットの遺物であると思われる。6については、出土位置が左側に寄っているが、正立の状態から原位置であったとも思われ、カマド祭祀に加わる遺物が断定しがたい。

その他の遺物は堅穴全体から出土しているが、中央部カマド寄りにやや集中する。1は中・上層からの出土である。図示しない土器片の点数は163点、重さは1.5kgであり、やや少量である。その他、図示していないが、緑石が1点出土している。

SI-039 (第208・466図、図版34・250)

遺跡南部北寄りの19S区に位置する。3.2m×3mの方形をなし、深さは0.43mである。北東隅にカマドの痕跡をもつが、近現代の炭焼窯と重複して壊されている。また、床面中央で土坑が検出されたが、土層断面には切り合いの確認ができなかった。掘りかたの一部である可能性もある。土坑周囲の床面からは4か所の小穴が検出されたが、南側のものと西側のもののどちらかは、出入口部の小穴である可能性がある。



- SI-038土層
1. 黒褐色土 褐色土多量
 2. 黒褐色土 ローム粒やや多量
 3. 黒褐色土 褐色土多・焼土粒極少量
 4. 黒褐色土 褐色土多・ローム粒・焼土粒やや多量
 5. 黒褐色土 ローム粒多量
 6. 黒褐色土 ローム粒多量

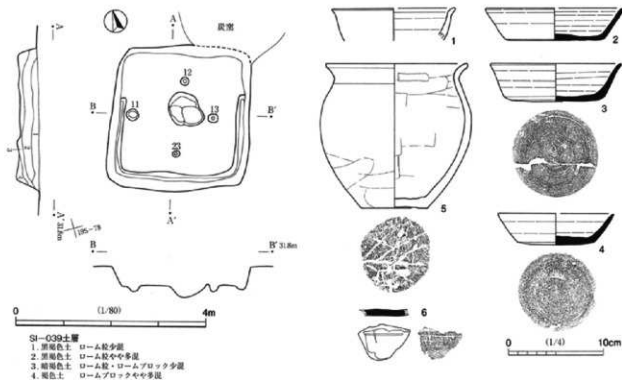
- SI-038カマド
1. 黒褐色土 粘土ブロック・焼土ブロック多量
 2. 黒赤褐色土 焼土
 3. 黒赤褐色土 しまり少ない
 4. 黒褐色土 しまり少ない
 5. 黒褐色土 焼土粒多・焼土粒少量
 6. 黒褐色土 ローム粒少量

第207図 SI-038

他の2か所は本壁穴に伴うものとは思われず、そうなると南および西のものも本壁穴に伴う可能性は低いかもしれない。主柱穴は存在しない。壁溝は南側1/2以上で巡る。床面は凹凸がありやや不整である。硬化面はみられない。堆積土は黒褐色土主体で、ロームの含有はあまり多くない。自然堆積と思われる。

図示した遺物は6点である。1はロクロ成形の土師器杯である。2～4・6は新治窯産の須恵器杯である。いずれも器面の磨耗が著しい。6は底部外面に「+ (×)」があり、ヘラ書きと思われるが、器面が磨耗しているため線刻の可能性もある。

5は常総型の土師器甕である。小型の甕で底部外面に木葉痕が残る。



第208図 SI-039

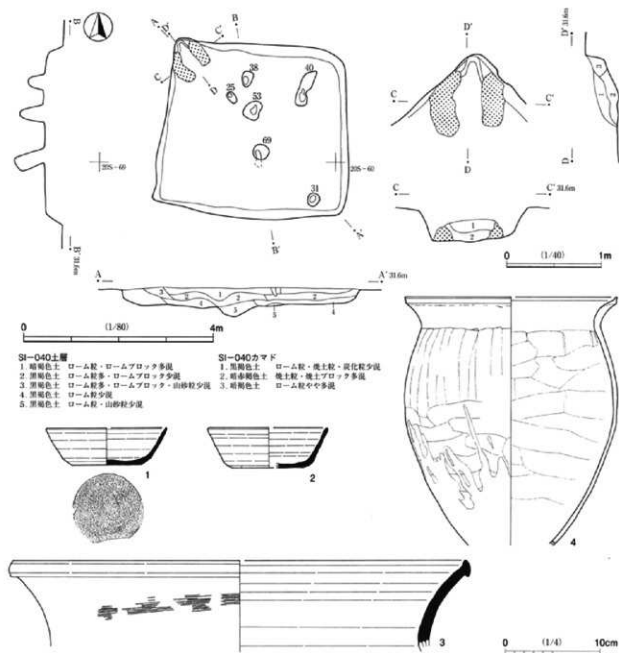
図示しない土器片の点数は45点、重さは300gと少ない。本堅穴では、図示した遺物が出土遺物の主体を占める。平面位置は概して中央部に多く壁際に少ない。出土層位は上層主体である。5は下層から上層にわたるが、主体は上層である。出土遺物は、かなり上部まで埋まった堅穴住居跡の窪地に廃棄されたものである。

SI-040 (第209・467図、図版34・250)

遺跡南部北寄りの19S区に位置する。3.7m×3.9mの方形をなし、深さは0.41mである。北西隅にカマドをもつ。壁溝は巡らない。床面にはいくつかのピットがあるが、南東隅際にあるものは、出入口用の小穴であろうか。深さは34cmである。ただし、隅カマドの堅穴でも出入口部の小穴は壁際中央に位置する場合があり、本道構に伴わない可能性もある。南壁から北壁に向かう方向を主軸と仮定すると、方位はN-4°-Eである。他のピットについては、支柱穴に相当するものはない。他時期の攪乱か、掘りかたの一部である。床面はやや凹凸がある。固化していないが、中央部とカマド前が硬化しているようである。カマドの遺存はあまりよくない。袖部の構築材は山砂主体であるが、上部は黒色土を多く含む。内壁はやや赤みがある。袖部底面は床面よりも高く、当初から隅カマドの堅穴住居構築が意図されていたことがわかる。

図示した遺物は4点である。1・2は、須恵器杯である。色調が黒褐色で、千葉産の須恵器である。3は須恵器大甕の口頸部破片である。色調が褐色で、胎土に白色針状物や小石を含み、南比企産と思われる。4は「房総」型の土師器甕である。かなり遺存がよいが、多数破片から接合した土器である。

出土遺物は少量で、その大半は覆土上層出土である。4は北辺側からまともに出て土しているが、4を除くと散在的な出土である。図示しない土器片の点数は102点、重さは1kgである。本堅穴の出土遺物については、堅穴がかなり埋まった段階で廃棄されたものといえる。

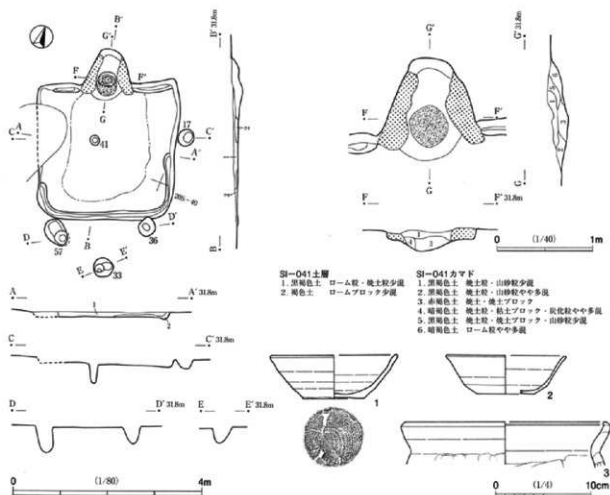


第209図 SI-040

SI-041 (第210・466図, 図版34・250)

遺跡南部北東寄りの20S区に位置する。2.9m×3mの方形をなし、深さは0.12mである。主軸はN-22°-Wである。北辺にカマドをもつ。西辺北側部分が攪乱により壊されている。壁溝はその部分と東壁北側にみられないが、確認面から床面まで浅い堅穴であり、本来は全周すると考える。堅穴内中央部に1か所ピットがあるが、柱穴かどうか不明である。また、堅穴外にも4か所のピットがあるが、本堅穴に伴うものか断定しがたい。出入口部の小穴は検出されなかった。床面の硬化面は顕著で、中央部中心に広がっている。カマドは、大部分が方形プランから突出している。両袖部の下部が遺存するが、山砂に加えて、暗褐色土やロームブロックの包含も多く、遺存が悪い。袖部底面は床面から連続し、壁溝はみられない。

図示した遺物は3点で、1・2はロクロ成形の土師器杯、3は土師器甕である。いずれもカマド内およ



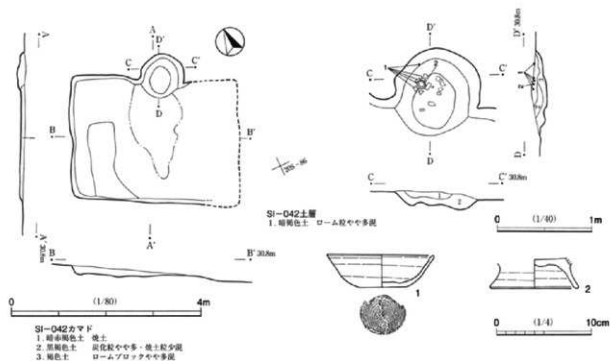
第210図 SI-041

び周辺から出土している。1は伏せた状態での出土である。被熱により、赤色化および器面が荒れており、特に内面の剥落が著しい。支脚の一部に転用されていた可能性がある。出土遺物は、堅穴の遺存が悪いため、少ない。主として北半部から出土し、特にカマド内がやや多い。図示しない土器片の点数は102点、重さは1kgである。

SI-042 (第211図, 図版35・314)

遺跡南部北東寄りの20S区に位置する。2.7m×3.6mの長方形をなし、深さは8cmである。主軸はN-27°-Eである。北東辺にカマドをもつ。確認面から床面まで非常に浅いため、遺存が悪く、南東壁側をかなり失っている。また、攪乱により、西側の一部も壊されている。壁溝はみられないが、有無は不明とする。支柱穴は存在せず、出入口部の小穴も検出されなかった。床の硬化面がカマド前から中央部にみられる。現状では狭い範囲であるが、本来はより広範囲に存在するものである。カマドの大部分は長方形プランの壁外に突出している。火床部分に若干の焼土が堆積しているが、構築材は遺存していない。

図示した遺物は2点で、1はロクロ成形の土師器杯、2はロクロ成形の土師器高台付杯である。2は高台部の破片で、足高タイプの高台である。1・2ともカマド内から出土した。2は火床部奥やや左側から正位の出土である。被熱により内外面の剥落・荒れが著しく、支脚に転用された土器と考える。杯部は転用に伴って除去されたものと思われるが、破損した土器を転用したものであろうか。1は2の周囲から出



第211図 SI-042

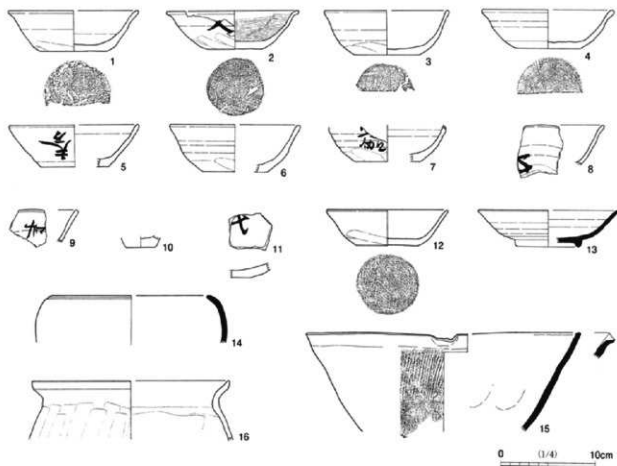
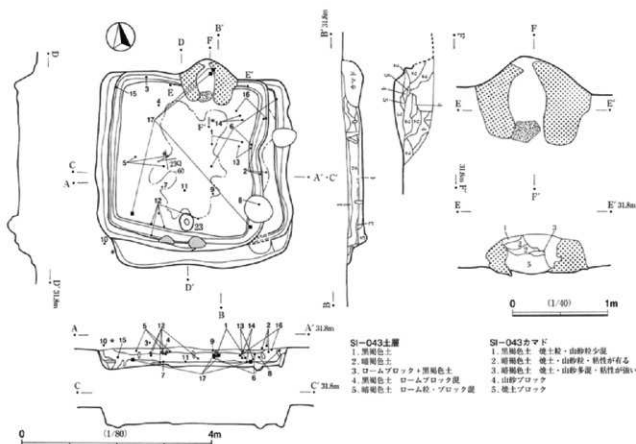
土した。器面は概して平滑であるが、一部は破断面も含めて擦れしており2とともに転用された支脚の一部であることも考えられる。1・2以外の出土遺物は少なく散在的な出土である。図示しない土器片の点数は24点、重さは400gである。

SI-043 (第212・213図、図版35・251・318)

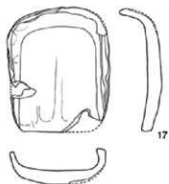
遺跡東部東寄りの23Q区に位置する。壁溝の状況から建て替えられた竪穴住居跡である。東西壁の内側で検出された壁溝が巡るプランを建て替え前、主として東西に拡張されたプランを建て替え後とする。さらに南側に別住居が重複しているように図示しているが、掘りすぎの可能性もあり、確実な遺構とは認めがたい。SB-053と重複し、東辺側にいくつかの欠損箇所がある。

建て替え前のプランは、3.55m×3.3mの方形で、深さは0.4mである。主軸はN-11°-Eである。北辺にカマドをもつ。出入口部の小穴をもつが、支柱穴はみられない。壁溝は全周する。カマド前から出入口にかけての床面が硬化している。建て替え後のプランはやや横長の方形で、規模は3.7m×4.1mである。東辺側の様相から、床面がやや浅くなった可能性もあるが、断定しがたい。壁溝は全周すると思われる。壁は北壁と南壁の一部で建て替え前と同じである。西壁から南西隅付近にかけては、若干の拡張であるが、東壁はやや大きく広げられている。北壁側の拡張がないので、建て替えの前後でカマド位置の大きな移動はない。カマドは一部に攪乱を受けている。構築材は山砂主体であるが、若干の暗褐色土を含む。内壁は焼けて赤色化している。

図示した遺物は17点である。1～12はロクロ成形の土師器杯である。そのうち、12は須恵器杯の可能性もあるが、土師器の可能性の方が高いと考えたい。墨書文字が2・5・7・8・9・11の6点にみられる。2・8は体部外面に正位で記されていると思われるが、判読できない。5は体部外面に倒位で「夫万」、7は体部外面に正位で「□加」、9も体部外面に正位で「加」と記されている。11は底部内面にみられるが、



第212図 SI-043 (1)



第213図 SI-043 (2)

判読できない。8・9・11は小破片であるが、他の土器とは同一個体とはならず、おのおのも別個体である。図示した土師器杯は概して器面が荒れており、特に1は内外面とも剥落が著しい。また、2も内面の所々に剥落がみられる。

13は灰釉陶器碗である。軸は上部のみで、また、残りも悪い。白色鉄物がやや目立つ。

14は須恵器鉄鉢形土器、15は須恵器片口鉢である。14・15とも色調は黒褐色であり、千葉産の須恵器である。なお、14は小破片からの復元実測である。15は脆くひび割れた部分が多く、火熱を受けたものと思われる。接合しない破片も多い。16は土師器甕である。

17は硯形の土製品で、手捏土器風の稚拙な作りである。カマド内、南東隅、南西隅近くと広く散って出土している。出土状況には祭祀的な様相がうかがえるが、出土層位は中層であり断定しがたい。底部外面にはあまり明瞭でないが、円形の剥離痕が4か所あり、脚が貼り付けられていたと思われる。内面はひび割れているが、表面は滑らかである。しかし、その作りから実用品ではないと考える。

遺物の出土はかなり多く、堅穴全体から出土している。しかし、遺存のよい遺物は少なく、破片主体である。出土層位は覆土下層から上層にわたるが、下層は少なく、中・上層からの出土が多い。図示しない土器片の点数は911点、重さは10.2kgである。

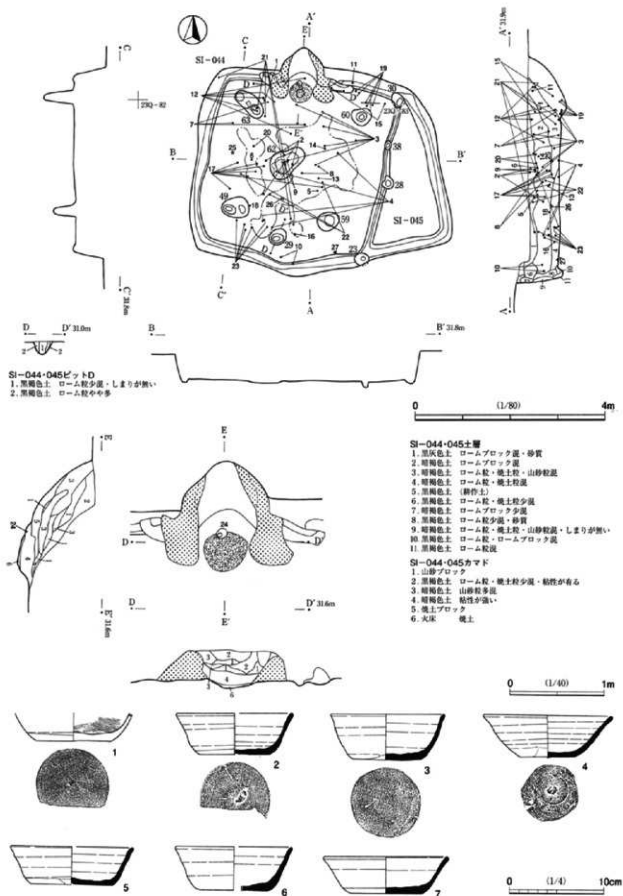
SI-044 (第214~216図、図版36・251・252・308・311・314・315)

遺跡東部東寄りの23Q区に位置する。4.1m×4.1mのやや不整な方形をなし、深さは0.6mである。主軸はN-8°-Eである。北辺にカマドをもつ。主柱穴4か所と出入口部の小穴をもつ。東側でSI-045と重複している。新旧関係は、土層断面および遺物からは決しがたいが、遺構プランの状況から、本堅穴が新しいことは確実と考える。プランは南辺がやや「く」の字状に屈曲している。亀甲形のプランにも似るがそれよりもSI-045の南辺の影響を受けているとみた方が妥当であろう。壁溝は全周する。東壁下の壁溝内には、壁柱穴がみられる。両隅部に2か所、その間に2か所、間隔は80cm~1.7mである。南東隅部のものと中央のものとの間は間隔が広いので、もう1か所存在する可能性がある。SI-045の堆積土が東壁であることから、壁面の強化のために設置されたものと考えられる。主柱穴はやや隅部に寄った位置にある。柱穴間の床面が硬化しているが、特に中央部は堅く踏みしめられている。床面のほぼ中央に浅い凹みと焼土の堆積がある。位置から判とも思われるが、時期的にみて、断定しがたい。なお、中央に深さ60cmのピットを図示したが、SI-045のP4である。

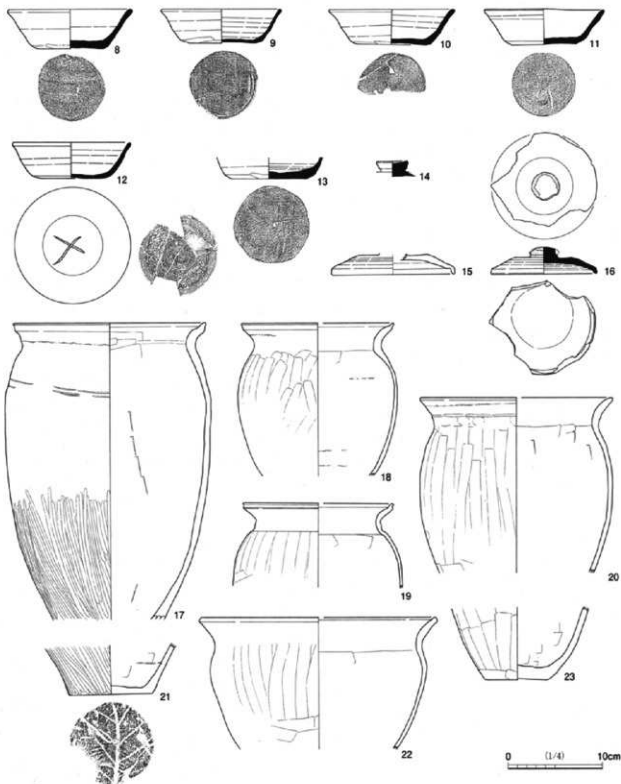
カマドは、堅穴の深さのわりに、遺存がやや悪い。構築材は山砂主体で、袖内壁は赤色化している。火床部も赤変しており、その範囲の最奥部に、土製支脚(24)が正立して遺存していた。原位置をとどめるものと考えられる。堆積土は若干のローム粒・ブロックが混入するが、主要土層は黒色味が強く、自然堆積と思われる。掘りかた底面は、四隅と東壁側が深く、中央から西壁際中央にかけては、ほとんど掘り込まれていない。なお、カマド両袖下は、床面から続いており掘り込まれていない。火床部の窪みは、灰のかき出しによるものであろう。

図示した遺物は27点でかなり多い。1はロクロ成形の土師器杯である。

2~13は須恵器杯である。このうち、7は褐色の色調であり、土師器の可能性もある。ただし、7の器



第214図 SI-044 (1)



第215図 SI-044 (2)

面は荒れていることもあるが、1と比べざらつきがある。7以外は確実に須恵器であり、すべて千葉産である。色調は暗灰色、黒色、褐色味を帯びるものとさまざまである。12は底部外面に「+ (×)」のヘラ書きがある。11は口縁・体部の一部が半月状に割れ、そのうちの一部の破片が接合し、一部が欠損している。打ち欠きされた可能性があると考え。他には割れない土器である。

14・16は須恵器蓋である。14はつまみ部分の破片で、色調は褐色味をもつ。16は灰色・暗灰色の色調であり、外面には火傷痕がある。ともに千葉産と思われる。16の内面は滑らかであり、硯に転用されている。

15は土師器蓋である。内面が滑らかであるが、ヘラミガキ調整がなされているためであろうか。硯に転用されたか断定しがたい。

17～23は土師器甕である。17・21は常総型の甕である。胎土・色調等の質感が異なるので、同一固体ではないと考える。18～23は「房総」型の甕である。18・19はやや小型、20は中型である。20は胴部外面の一部に山砂が付着している。22は口縁部がやや開く器形となると思われるが、遺存が少ないため、復元形に不安がある。23は器壁が厚く、18～20・22とは同一個体とならない。

24は上製支脚である。上部から基部まであり、非常に遺存がよい。側面は面取りされている。側面の上部は灰白色の色調である。

25・26は鉄製品である。25は刀子で、茎と刃部の茎側が遺存する。背側は直角に作り出されている。刃側はやや不明瞭であるが、とくに段差をもたず、屈曲して刃部と茎に分かれると思われる。背側は刃部から茎まで直線的であるが、刃側の半は草尻に向かって、幅を減している。26は門金具と思われる。両端部とも先端が欠損している。

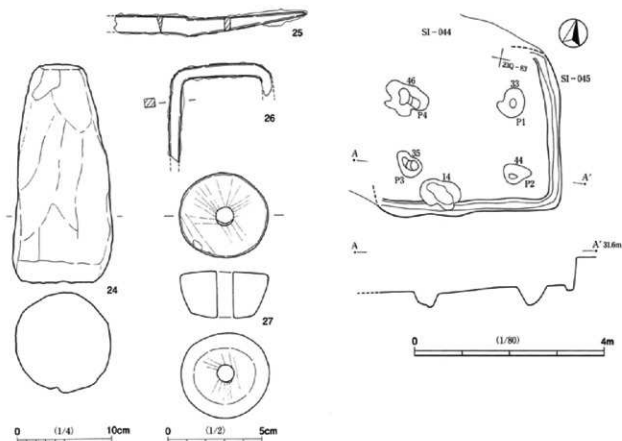
27は石製紡錘車である。滑石製である。

遺物の出土量はやや多く、広範に分布するものの壁際はやや少ない。図示した遺物の出土層位は床面から上層に及ぶが、中・上層から出土するものが多い。19はカマド右側の床面から出土しているが、遺存が悪い。また、27は南東隅近くの床面から出土している。その他、破片の一部が床面・下層から出土する遺物もあるが、それらは中・上層の破片と接合している。遺物は、本整穴の廃棄直後から廃棄されているが、ある程度埋まった段階で多く廃棄されたといえよう。図がしない土器片の点数は595点、重さは7.3kgである。

SI-045 (第216図、図版36)

遺跡東部東寄りの23Q区に位置する。東辺側から南辺側の一部を除いて、多くの部分をSI-044に切られている。平面形態は横長の方形と推定され、規模は3.4m×4.2m、深さは0.6mである。北辺にカマドをもつと思われるが、そうであるならば主軸方位はN-13°-Wである。SI-044および本整穴の掘りかた調査に伴って、主柱穴と思われる4か所のビットを検出した。掘りかた調査段階のビットのため、P3・P4の形態は不整である。なお、南側の柱穴P2・P3間で、P3寄りの南壁際にビットがあり、出入口部の柱穴とも思われるが、ややP3に寄り過ぎていることと、掘りかた段階での検出であるため、断定はせず、可能性の指摘にとどめる。壁溝は東壁・南壁下に存在する。全周する可能性があるが、SI-044に切られ、不明である。

出土遺物は少量の土器片で、図示したものはない。点数は18点、重さは230gである。遺物は散在的に出土しており、密度は低い。遺物の器種は土師器常総型甕・土師器「房総」型甕・須恵器蓋・手捏土器である。須恵器蓋は口縁部の破片が1点で、白雲母の含有が多いことから、新治窯産と思われる。手捏土器も1点で、小型の杯的な土器であるが、やや深い器形である。内面に油煙が付着し、灯明専用器として作られたものである。底部外面は軽いナデ程度の調整であるが、口縁部はヨコナデ、体部外面は手持ちヘラケズリが施され、焼成良好の土器である。



第216図 SI-044 (3)・045

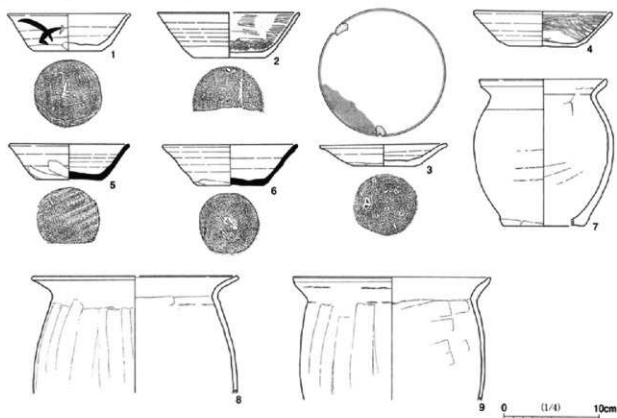
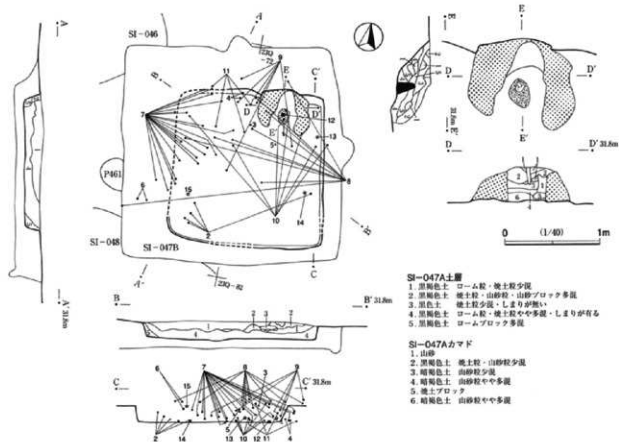
SI-047A (第217・218図, 図版37・252・308~310・315)

遺跡東部東寄りの23Q区に位置する。3.3m×3.3mの方形をなし、深さは0.35mである。主軸はN-10°-Wである。北辺にカマドをもつ。SI-047Bの中に全体が入っており、047Bを切つて構築されている。壁面・床面は047Bの堆積土であり、その影響で、西壁から北西隅周辺と南壁の一部が不明瞭である。出入口の小穴は検出されず、主柱穴の存在も不明である。壁溝も検出されなかったが、有無は不明とする。床の硬化範囲は不明瞭であるが、写真を見ると中央部が硬化しているようである。カマドは北東隅に寄っており、右袖脇がすぐ隅である。土製支脚(12)が火床部に正立して原位置のまま遺存しており、本カマドは天井部を欠くものの下半部の遺存は良好である。構築材は山砂主体で、内壁は被熱により赤色化している。火床部の支脚周囲は、ロームブロックが硬化している状態である。その部分はあまり赤変せず、周囲が赤色化している。

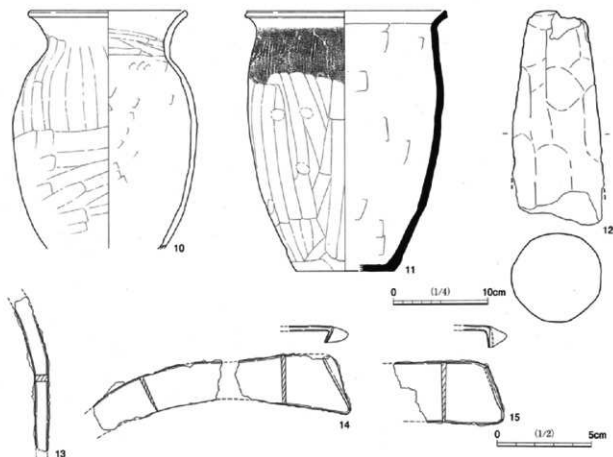
図示した遺物は15点である。1・2・4はロクロ成形による土師器杯である。1は体部外面に倒位で「又」と思われる墨書がある。遺存良好な土器である。2は内面に黒色処理が施されている。4は器面が荒れている。

3はロクロ成形の土師器皿で、ほぼ完形である。口縁端部に小さな打ち欠きが2か所あるが、その間の内面、片側の打ち欠きに接して油煙の付着がみられる。灯明器として使用されたものである。

5・6は須恵器杯である。ともに黒褐色の色調で、千葉産の須恵器である。5の色調はやや灰色味を帯びており、内面にややざらつきがある。6の器面はやや滑らかであるが、断面内部が灰色味を帯びる。底



第217図 SI-047A (1)



第218図 SI-047A (2)

胴外面はともに手持ちヘラケズリが施されているが、6は中央にヘラ切り難しと思われる痕跡を残す。

7～10は土師器甕、11は須恵器甕である。11は胴部外面の調整が、平行タタキ後ヘラケズリ、内面はヘラナデが施されて、ほぼ当て具の痕跡が消されており、須恵器甕と土師器甕の製作技法が混在している土器である。色調は褐色味が強く、胴部外面の一部は剥落が著しい。火にかけられたことが顕著な土器である。10は胴部外面にタタキがみられないため土師器甕としたが、口縁部の形態は須恵器的である。胴部内面下部に当て具痕かと思われる痕跡もあるが、ヘラナデにより、不明瞭である。千葉産の須恵器甕・甌は、煮炊具として使われるものが少なくないが、10・11の土器からは、須恵器・土師器の区分がより微妙になってきている様相がうかがえる。

7は小型の甕である。胴部外面にタタキ目かと思われる痕跡があり、底部も底径が広く、外面の様相がやや須恵器的である。胴部内面はヘラナデが施され、当て具の痕跡は不明である。色調は赤褐色である。この土器には須恵器的な雰囲気もあるが、不明瞭であることから、土師器としておく。8・9はやや大型の甕で、ともに胴部の器壁が薄い土器である。

12は土製支脚である。側面は面取りされ多角柱状である。

13・14・15は鉄製品である。13は棒状の製品で、断面は長方形である。用途は不明である。14・15は鎌である。14は小型の製品で、薄い作りである。中央で2片に折れているものの接合はしない。先端は欠損していると思われるが、使用中の磨耗の可能性もある。錆と肉薄のために断定はできない。基部の刃柄は基部の端から4cm程度刃つぶしされている。15は基部側の破片で、14よりもやや大型の製品である。

遺物の出土量は、小規模で若干浅い堅穴であることを考えると、非常に多いといえよう。遺物は堅穴全体から出土しているが、図示した遺物は北側からの出土が多い。垂直位置をみると、12以外で下層から出土するものは、4・10・11・14である。その他は、破片の一部が下層から出土するものはあるが、おおむね中層・上層から出土している。図示しない土器片の点数は1,862点、重さは16kgである。

なお、6は本堅穴の範囲外のSI-047B上から出土しているが、土器の時期が本堅穴に近いので、ここで取りあげた。

SI-047B (第219図、図版37・252)

遺跡東部東寄りの23Q区に位置する。4.6m×4.6mの方形をなし、深さは0.49mである。主軸はN-11°-Wである。北辺にカマドをもつ。主柱穴4か所と出入口部の小穴をもつ。SI-047Aにより、堅穴堆積上層の多くが切られている(SI-047Aのプラン輪郭を細線で図示)。逆に、北西隅側では弥生時代の堅穴住居跡SI-046を切っている。また、南西隅側でもSI-048と重複し、遺物の様相から切られていると思われるが、本堅穴の方が深いので、床面は遺存している。壁溝は全周する。主柱穴間の床面が硬化している。カマドは、東壁から北壁に移されている。東壁カマド部分の堆積土中に、若干の山砂が遺存している。北壁のカマドは、向袖部が遺存している。袖部内壁は焼けて赤色化している。堆積上はローム粒が多く含まれる層もあるが、全体的には黒色味が強く、自然堆積と思われる。

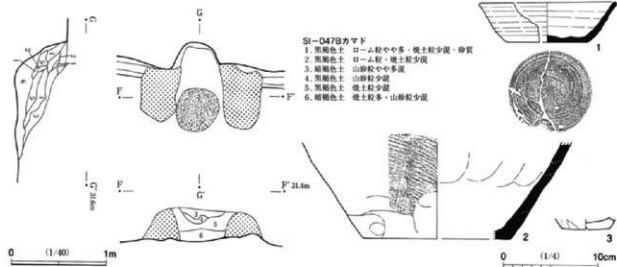
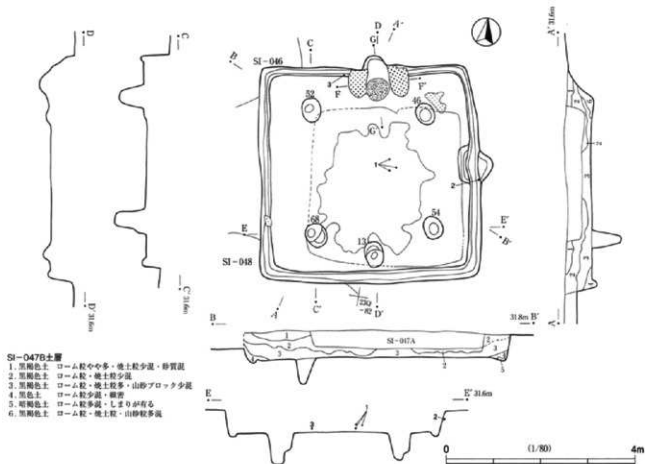
図示した遺物は3点である。1は新治窯産の須恵器杯で内外面の一部が、被熱によりやや褐色味を帯びている。2も新治窯産の須恵器甕である。3は土師器甕で小型品の底部である。

図示した遺物のうち、1は比較的遺存がよく中央部下層から出土している。遺物の出土量はやや少ないが、SI-047Aに切られていることにもよる。図示しない土器片の点数は304点、重さは2.6kgである。図示した遺物を含めた平面分布をみると、西側が希薄であるが、その他は全体的に出土している。

SI-048 (第220・467図、図版37・252・253・308・314・315)

遺跡東部東寄りの23Q区に位置する。3.6m×3.8mの方形をなし、深さは0.34mである。主軸はN-108°Eである。東辺にカマドをもつ。主柱穴4か所と出入口部の小穴をもつ。北側でSI-047B、南側でSI-360と重複し、SI-047Bを切っている。壁溝は重複部分で失われているが、全周するものと考えられる。主柱穴の配置をみると、北東隅側の柱穴(P4)が東壁寄りに位置し堅穴のプランに対してゆがんでいる。また、北西隅側の柱穴(P3)は南西隅側の柱穴(P2)に比べ、出入口部の小穴に近い位置にある。床面は平川で、出入口部からカマド前まで硬化している。カマド内には、土製支脚(10)が直立して遺存し、その下部には焼土塊を主体とする土層が堆積している。底面から高い位置であるが、焼土塊の土層は火床部であり、支脚は最終的な使用時のままとと思われる。構築材は山砂主体で、内壁は焼けて赤色化している。

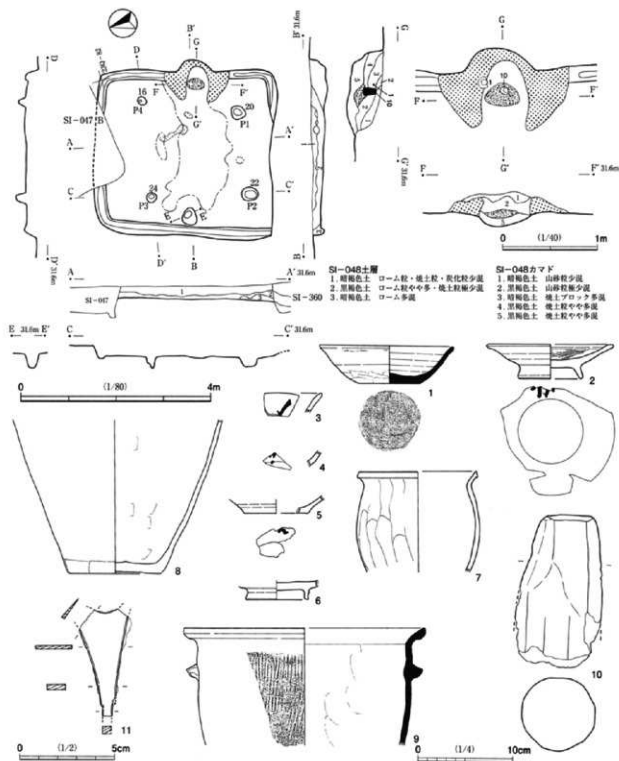
図示した遺物は11点である。1は千葉産の須恵器杯と思われるもので、比較的遺存のよい土器である。なお、色調は赤褐色、黒褐色であり、土師器の可能性もある。2はロクロ成形の土師器高台付皿で、やや遺存のよい土器である。割れ口に黒書が認められるが判読には至らない。3・4・5も黒書のあるロクロ成形の土師器杯であるが、小破片であり、判読できない。6はロクロ成形の土師器高台付皿または杯である。7は土師器甕で、小型の土器である。8は「房総」型の土師器甕である。口縁～胴部上位を欠くが、底部の遺存はよい。胴部外面はヘラケズリ後ナデ、底部外面もヘラケズリが施されている。底部内面周辺はかなり黒ずんでいる。胎土は比較的緻密である。9は須恵器甕で、千葉産である。10は土製支脚である。11は鉄鏝である。刃部の下部から、茎の上部まで遺存する。刃部は二股に分かれる雁又鏝であるが、多く



第219図 SI-047B

を欠損している。刃部と棒状部の境は明瞭でなく、広身の刃部から幅を減じて茎にいたる。茎は錆による破損のため曲がって接合しているが、本来は棒状部・刃部と一直線状になるものである。

出土遺物のうち、1はカマド内、左袖に接して、伏せた状態で出土した。支脚の左側の位置である。2も南壁際東寄り中層から出土した。その他の遺物は10を除いて、遺存がよくない。図示しないものも含めて、遺物は竪穴全体から出土している。なかでも、8は主としてカマド前から出土しているが、他にも広

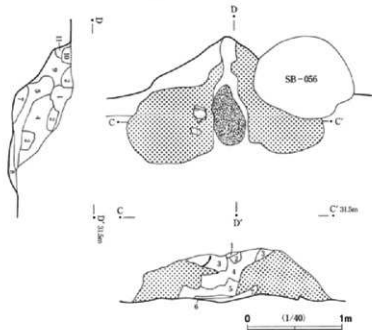
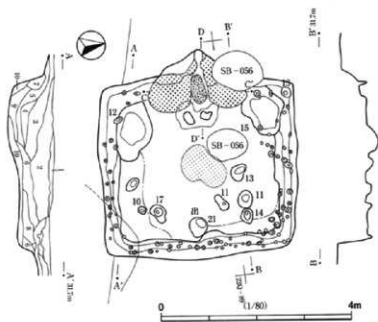


第220図 SI-048

く散っていた。出土層位は覆土下層～中層である。遺物は全体的に中層からの出土が多い。図示しない土器片の点数は854点、重さは8.2kgである。

SI-050 (第221・222・467図、図版38・253・309・311・314)

遺跡東部中央の22Q区に位置する。3.9m×4.1mの方形をなし、深さは0.61mである。西辺中央にカマドをもち、東壁際中央に出入口ピットをもつ。主軸方位はN-83°-Wである。SB-056と重複する。壁溝

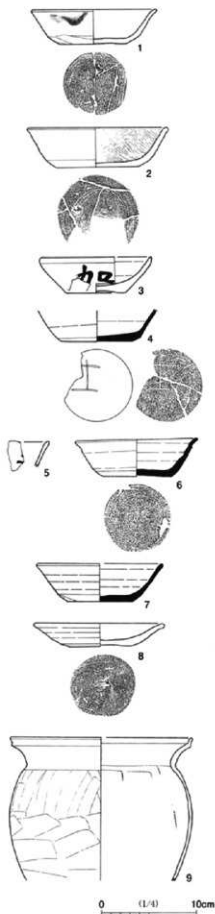


SI-050土層

1. 前期色土 ローム粒少混
2. 前期色土 ロームブロック、焼土ブロック混
3. 前期色土 ローム粒、ロームブロック、焼土粒混
4. 前期色土 ローム粒混、焼土粒少混
5. 前期色土 ローム粒混、焼土ブロック少混
6. 前期色土 ローム粒、ロームブロック混
7. 前期色土 ローム混
8. 前期色土 赤褐色土、焼土粒混
9. 前期色土 ローム粒多、焼土粒少混
10. 前期色土 ローム粒、ロームブロック混、しまりがある

SI-050カマド

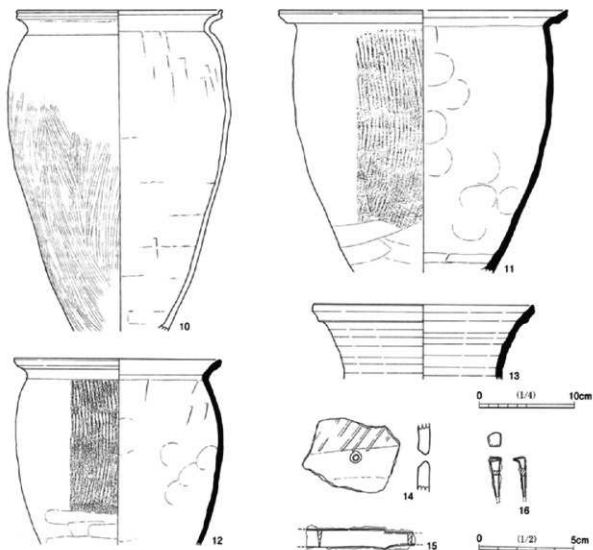
1. 前期色土 砂質土・焼土粒少混
2. 灰黄色砂質土
3. 灰黄色砂質土 ブロック混焼褐色土
4. 前期色土 ロームブロック、砂質土ブロック、焼土粒混
5. 前期色土 焼土化砂質土ブロック混
6. 焼土
7. 焼土化砂質土
8. 前期色土 砂質土多混、ローム粒、焼土粒混
9. 前期色砂質土 ローム粒、焼土ブロック少混
10. 前期色土 砂質土、焼土粒少混
11. ロームブロック



第221図 SI-050 (1)

は全周する。幅が広くなっているのは、壁際床面の黒色味が強いため、壁溝堆積土との差が少なく、掘りすぎたことによる。四隅や壁際は掘りかたが中央よりも深く、床面整形にあたり、黒色土が充填されている。壁溝には小ピットが多くみられる。壁柱穴の可能性もあるが、詳細にみると底面の細かい凹凸の可能性も否定できない。床面からは、大小さまざまなピットが検出されたが、出入口ピットを除いては、壁穴の掘りかたによるものとも思われる。4本柱の支柱穴は確認できなかった。床面の硬化範囲は広いが、中央部がより硬化している。また、床面中央に焼けた範囲がみられる。堆積土は下層の一部に褐色味の強い層が堆積するが、全体的には黒褐色土を主体とした自然堆積と思われる。

図示した遺物は16点である。1～3・5はロクロ成形の土師器杯である。1は外面のかなりの部分に油煙が付着しており、灯明器として使用されたものである。内面は口縁部の一部がわずかに黒ずんでいるが、器面が磨耗しているため、油煙はほとんど付着していない。2は焼成があまく、内面に多くの擦痕がみられる。3は体部外面に正位で「加」と思われる墨書がある。また、5の体部外面にも墨書がある。しかし、残りがわずかで判読できない。4・6・7は千葉産の須恵器杯である。4は底部外面に「土」と同じ書き順のヘラ書きがあるが、文字ではなく記号と理解する。8はロクロ成形の土師器皿で、内外面の一部



第222図 SI-050 (2)

に若干の剝離痕がみられる。

9・10は土師器甕である。9はやや小型の器形で「房総」型の甕である。10は常総型の甕で、底部周辺を若干欠くのみで、比較的遺存のよい個体である。胴部外面の所々に山砂が付着する。11・12・13は千葉産の須恵器甕である。

14は中央に孔がある土製品で、紡錘車であろうか。千葉産の須恵器甕または甕の破片を転用したものである。15・16は鉄製品である。15は刀子で、刃部と茎部の遺存である。背側は直角に作り出され、刃側も小さいが直角に段差をもつ。16は釘で、頭部をL字形に折り曲げた角釘である。小型の製品で先端をわずかに欠損する。

図示した遺物は、カマド周辺からの出土がやや多い。2はカマド内下層を主体に出土し、12もカマド内中层およびカマド上方から出土した。また、6はカマド右脇の下層から出土した。カマド周辺以外では、ほぼ完形の8が南壁際中央で、比較的低い位置から内側に傾いた正位で出土した。また、10は中央やや南寄りのほぼ床面を主体に、横につぶれた状態で出土した。なお、10は一部の破片が上層に散っている。図示しない土器片の点数は1,350点、重さは13.1kgである。図示した遺物と合わせて、竈穴全体から多く出土しているが、北側の分布密度がやや高い。出土層位は床面から上層にわたるが、下層よりも中・上層からの出土が多い。

SI-051 (第223・466図、図版39・253・310・311・317・320)

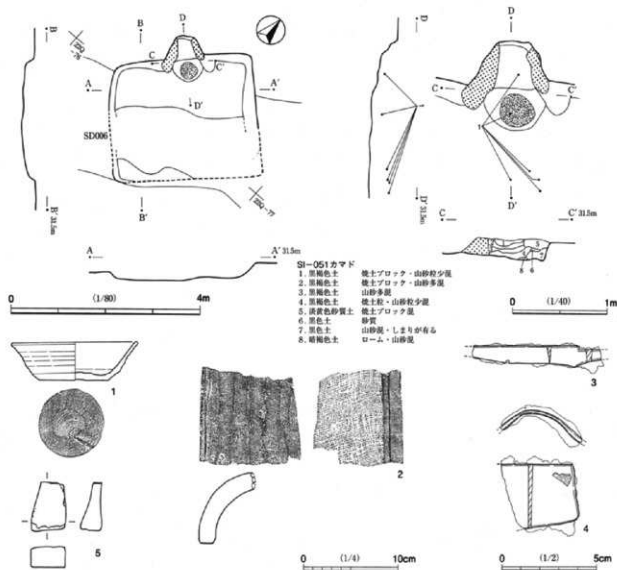
遺跡東部中央の22Q区に位置する。2.6m×3.1mの方形をなし、深さは0.33mである。主軸はN-44°-Wである。北西辺にカマドをもつ。南東側半分がSD-006によって壊されている。噴溝は巡らない。主柱穴および出入口部の小穴は検出されなかった。床の硬化面もみられない。カマドは竈穴の方形プランから外側へ大きく突出する。遺存は悪く、特に右袖部の残りが少ない。

図示した遺物は5点である。1はロクロ成形の土師器杯である。器面は所々剥落し、火熱を受けた様相がうかがえる。支脚に転用された可能性もあるが、剥落痕がそれほど顕著ではなく、あまり変色していないことからカマド祭祀に伴う遺物の可能性もある。2は丸瓦の破片である。凹面には布目痕がみられる。色調は灰色であるが、黄褐色部分もあり、カマド内での使用に転用されたことも考えられる。3・4は鉄製品で、3は刀子である。4は鎌の基部部分の破片が曲がったものと思われる。曲がっていることと錆跡のため、基部の折り返しの状態が不明瞭である。一部に木質が付着している。5は砥石である。石材は流紋岩質凝灰岩である。

遺物の出土はカマド内およびカマド前にやや集中する。その他からも広く出土するが、SD-006によって拡散した面もあると思われる。量的には少なく、土器で遺存のよいものは、1だけである。1は体部から底部にかけての主要部分がカマド内から、口縁部の小破片がカマド前から出土している。カマド内からは伏せた状態で出土した。本遺構は確認面から床面までやや浅いが、その他の遺物は堆積土上層から出土している。図示しない土器片の点数は139点、重さは2.3kgである。

SI-052 (第224図、図版39・253)

遺跡東部中央の22Q区に位置する。3.6m×3.4mの方形をなし、深さは0.12mである。主軸はN-23°-Eである。主柱穴のうち3か所を検出したほか、出入口部のビットも検出された。北東隅がSD-007により破壊されている。主柱穴の1か所はそれによって失われる。東辺側の床面に噴溝があり、東壁は作り直されている。SD-007の破壊により、不明瞭であるが、拡張されたものと思われる。拡張前の噴溝は全周



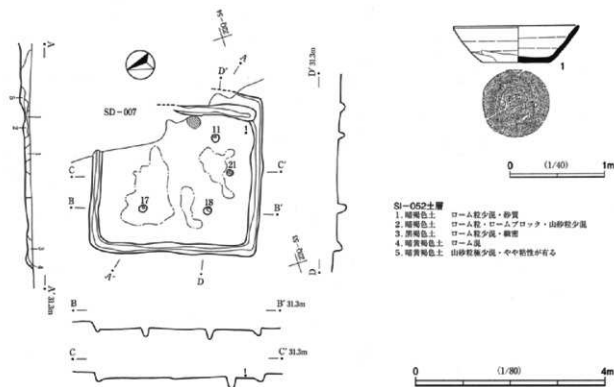
第223図 SI-051

する。拡張後の東壁については、壁溝の有無は明確ではない。カマド構築材の山砂ブロックが東壁中央の壁溝際に入り建て替え前のカマド位置の可能性がある。しかし、出入口部のピットが南壁側にあることから、建て替え後のカマドは、北壁側か北東隅部に存在するものと推測する。主柱穴は小規模で、床面からの掘り込みも浅い。むしろ、出入口部のピットの方が主柱穴よりも深い。確認面から床面まではかなり浅い。床面中央は硬化しているが、途切れる部分がある。しかし、それは本来のものではないだろう。

出土遺物は少ない。やや遺存のよい須恵器杯（1）が南東隅部から出土している。他に図示した遺物はない。図示しない土器片の点数は52点、重さは400gである。

SI-053（第225・226図、図版39・253・254・308・309・311・314・315・317）

遺跡東部中央の22Q区に位置する。3m×3.5mのやや横長の方形をなし、深さは0.49mである。主軸はN-2°-Wである。南東隅周辺部分がSI-054を切っている。また、北西隅部分で、SB-058と重複する。北辺にカマドがあり、南壁際中央には、出入口ピットをもつ。4本柱の主柱穴は検出されなかった。壁溝は全周する。床面は平坦で、中央部がかなり硬化している。カマドは堅穴のプランから大きく外へ突出して



第224図 SI-052

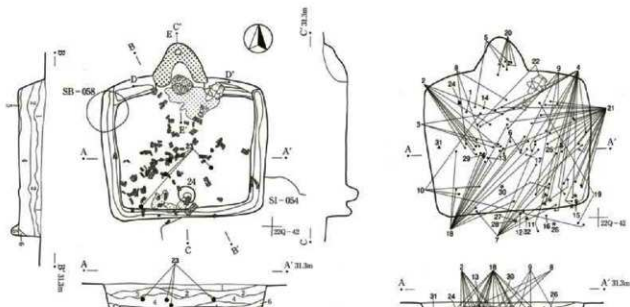
いる。火床部の奥に土製支脚(24)が正立して出土した。原位置をとどめるものであろう。また、煙道部の一部がみられ、全体に遺存のよいカマドである。構築材は山砂を主体としており、スサも混入しているようである。焼きしまつてかなり硬化している。内壁は赤色化が著しい。

床面上および下層中には多量の炭化材が堆積している。家屋解体に伴う焼却または火災にあったものである。床面中央から出土した炭化材は径の細いものが集合しており、カヤ等を使用した屋根材の一部と思われる。堆積土4層はローム粒をやや多く含み、この層までは埋め戻された可能性が考えられる。

図示した遺物は32点と多量である。1～5はロクロ成形の土器器杯である。1は底部外面に「+ (×)」のヘラ書きがある。3の内面は黒色処理が施されているが、外面も黒ずんでいる。ただし、火を受けて炭素が飛び、一部は黒色味が薄くなっている。4の底部は回転糸切り後、ほぼ無調整である。5は底部外面に山砂が付着し、器面の荒れ・剥離および灰白色に変色する部分があることから、支脚に転用された土器と考える。

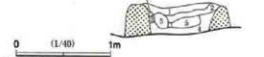
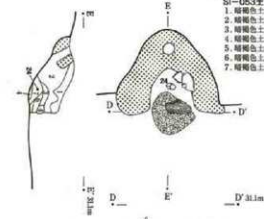
6～8は須恵器杯で、いずれも千葉産である。6は作りがやや粗雑で、口縁端部近くに1か所、焼成前の穿孔がある。この付近の口縁部が薄く、接合痕も残り、やや手捏土器的な作りである。また、口縁・体部の打ち欠きかと思われる弧状の割れが2か所あるが、ともに破片の一部が接合しており、意図的なものか断定しがたい。7は内外面とも色調が黒色である。8の底部外面には1条の凹線がある。製作時のものであり、ヘラ書きとしておく。

9は緑釉陶器稜碗である。若干の黄色味を帯びた素地の上に、黄緑色の釉が全面にかかっている。胎土は緻密であるが、細かい黒色粒がみられる。10は灰釉陶器碗である。高台断面はややずんぐりしているが、三日月状である。見込み部分には釉がかからない。口縁体部内外面の釉もはげている部分が多い。底部外



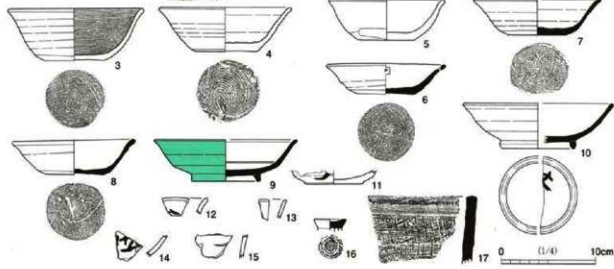
SI-053土層

1. 緑褐色土 ローム粒少・焼土粒極少量
2. 緑褐色土 ローム粒・焼土粒中々多量
3. 緑褐色土 ローム粒・焼土粒多量
4. 緑褐色土 ローム粒中々多・未焼多量
5. 緑褐色土 ローム粒・焼土・黄白色粘土多量
6. 緑褐色土 ローム粒・ロームブロック少量
7. 緑褐色土 焼土ブロック多量



SI-053カマド

1. 灰褐色土 焼土粒・山砂粒少量
2. 灰褐色土 焼土粒多・焼土ブロック少量
3. 灰褐色土 灰化粒・灰多量
4. 緑褐色土 焼土粒・山砂粒・炭化粒・灰多量
5. 山砂ブロック
6. 灰
7. 焼土ブロック



第225図 SI-053 (1)

面に墨書があるが、遺存が少なく判読できない。9・10は猿投産で、黒篋90号濼式のものと思われる。

11~14はロクロ成形の土師器杯の破片である。11・12・14は体外外面に墨書があるが、遺存が少なく、判読できない。11の底部はやや突出している。なお、12・14が1~5の一部となる可能性はないと考える。

15は土師器常総型甕の胴部破片である。外面に1条のヘラ書きがある。

16は須恵器蓋のつまみ部分である。剥離部分に渦巻き状の調整がみられる。千葉産である。

17は置カマドまたは羽釜と思われる。色調は褐色であるが、調整手法は須恵器製作に伴うものである。外面は平行タタキが施され、内面も端部際では当て具の痕跡が残る。内面下部(上部?)は、ヘラナデにより当て具痕が消去されている。内面端部際は接合痕も顕著に残る。器壁は厚く、肩部は方形状である。肩部の内面側は突出して、鋭く角張っている。置カマドの場合、図は逆で、端部が接地面となる。

18~21は土師器甕である。21は常総型で、ほかに「房縁」型の甕である。20・21はやや遺存がよい。18の器壁はやや薄いが、19・20は厚く、ずんぐりした作りである。19・20は口縁端部もやや角張っている。20は外面の剥離、内面の荒れが著しい。19の内外面もかなり荒れている。

22は須恵器甕で、かなり遺存のよい土器である。底部は五孔をもつ。胴部外面はナデおよびヘラケズリにより平行タタキがほぼ消される。内面もヘラナデにより当て具痕が消去されている。胴部外面上部に、小さな把手が一つ貼付されている。四面の面取りは粗雑で、上部が丸くなっている。反対側のものは、土器の欠損部となり、遺存しない。色調は黒色部分が多い。褐色の部分もあるが、火を受けた影響で褐色化した部分もある。千葉産の須恵器である。

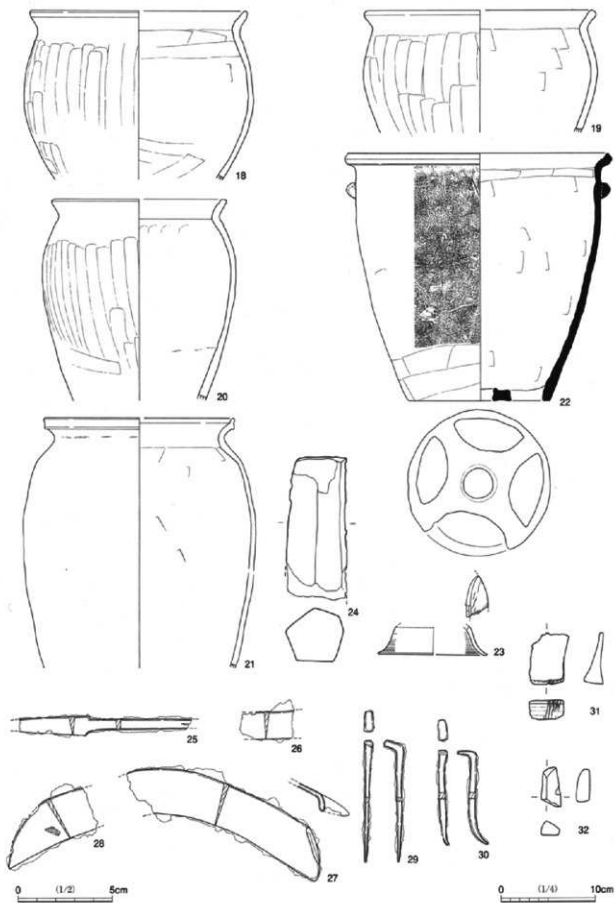
23は木製の高杯または高盤の脚部である。小片から復元したため器形および大きさは推定であるが、資料の重要性から図化した。炭化しているが、器壁の厚さは3mm~4mmで、明らかにロクロ採きされたことがわかる製品である。一部の破片は脚端部まで遺存している。出土地点を遺構プランの図の方に黒丸で図示した。4か所から出土しており、平面図で中央から出土しているものももっとも遺存のよいものである。ほかの3か所のものは細片である。接合はしないが、厚さは同様であり、同一個体と思われる。

24は土製支脚である。側面は広い面取りがなされ、六角柱状となっている。上部から下部まで、径があまり変わらない支脚である。

25~30は鉄製品である。25・26は刀子、27・28は鎌で、27・28は同一個体の可能性がある。27の基部の折り返し部分は一部欠損している。29・30は頭部がL字形に折れ曲がった角釘で2点ともに完形である。30は先端が曲がっている。

31・32は砥石である。石材は、ともに流紋岩質凝灰岩である。31はよく使用されて研ぎ減りし、本来の中央部が非常に薄くなっている。その部分で割れたか、折り取られたものである。厚い小口面には筋状の研ぎ痕が多くみられる部分がある。

図示した遺物のうち、遺存のよいもので、床面・下層から出土しているものをあげると、3・21・22の3点がある。22は割れてつぶれているが、主としてカマド右脇の床面・壁溝上から出土した。また、3もその近くの床面から破片の一部が伏せた状態で出土した。21は壁穴の東側を主体に、やや広く散って出土している。その他の遺物で下層から出土するものとしては、1・10・27・28・32がある。出土遺物は概して多く、壁穴全体から出土している。出土層位は床面から上層にわたるが、中層からの出土が多い。図示しない土器片の点数は790点、重さは7.2kgである。



第226图 SI-053 (2)

SI-054 (第227・228図、図版40・254・255・311)

遺跡東部中央の22Q-31・32・41・42区に位置する。4.6m×4.4mのやや縦長の方形をなし、深さは0.65mである。主軸はN 14° Wである。北側の一部が、SI 053に切られている。北辺にカマドをもつ。1柱穴4か所と出入口部の小穴をもつ。壁溝は全周する。柱穴間の床面が硬化しているが、中央に焼土範囲があり、その部分は軟質である。焼土範囲の土層は、焼けたロームに黒褐色土小ブロックが混じる土層で位置からかとも思われるが、時期的に断定しがたい。なお、鉄屑の出土がないので、小鍛冶炉の可能性は低い。四隅は貼り床が厚く、軟質である。また、本堅穴掘削の工程をみると、構築者は四隅を深く掘り下げてプランを決定し、次に、四隅隅を掘って概形を作っている。その後、床面レベルを決定して、掘り残した中央部をそのレベルまで掘り、床面レベルよりも掘り下げてある隅部には貼り床を施して、床面を形成している。貼り床を構成する土は、隅部では、ロームブロックに加えて暗褐色土を多く含む。

カマドはSI-053に切れ、左側の遺存が悪い。構築材は山砂主体で、袖の内壁は赤色化している。カマドの両側にピットがあるが、カマド部分の上壁にかかわるものであろうか。右側のピットは右袖の下に位置するが、構築材が流れたためであろう。堆積土は全体に黒色味が強く自然堆積と思われる。

図示した遺物は19点である。1～5・12はロクロ成形の土師器杯である。2は口縁・端部の一部をわずかに欠くだけで、割れていないほぼ完形の土器である。1も割れているが、遺存はよい。3の内面・4の全面は荒れて剥離している。4は焦げて黒ずむ部分もあり、被熱痕跡が明瞭である。5はやや大振りの土器で、内面は黒色処理されている。12は、底部の糸切痕を明瞭に残す杯である。全体的に火を受けて全面が磨耗し黒ずむ部分もある。

6～11・13～15は須恵器杯である。産地は、15が南比企産と思われるほかは、すべて千葉産である。色調の差でまとめると、7・10・13・15は灰色味が強く、8・14は黒色味が強い、6・9・11は褐色味が強いが、11はやや暗い色調である。10は一部に褐色の部分もある。15は回転糸切り難し後無調整で、底径が小さい。内外面に火傷痕が残る。13は回転ヘラ切り難しで、14も同様と思われる。その他の須恵器も回転ヘラ切りと思われるが、ヘラケズリに消され、痕跡が残っていない。6が完形であるほか、比較的遺存のよい土器が多い。4・9の内面は剥離が著しく火を受けていると思われる。

16は須恵器蓋または瓶の胴部片である。外面に墨痕のようなものがあるが、墨書か疑わしい。裾が扇状に付着したものであろうか。外面には平行タタキが施されている。色調は褐色である。

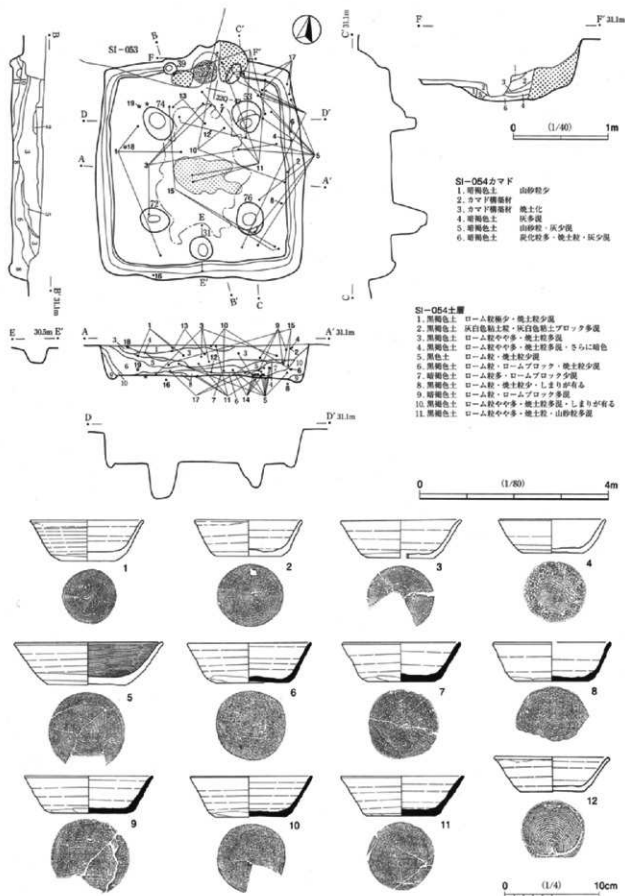
17は須恵器蓋である。底部はほぼ遺存している。暗灰黄色の色調で、千葉産の須恵器である。火を受けて、器面が荒れ胴部中位にあたる内面上部は剥離が著しい。

18・19は鉄製品で、ともに刀子である。

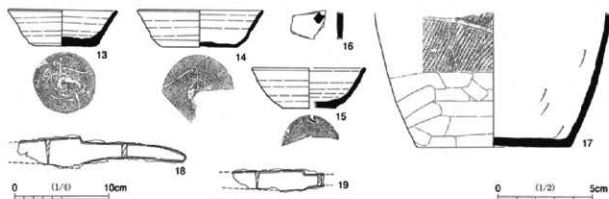
遺物の出土は多量である。堅穴全体から出土しているが、北側の方が南側よりも分布密度が高い。垂直位置は、床面から上層にわたり、11のように床面と上層出土の破片が接合する例もある。図示した遺物のうち細片を除いて、床面・下層から出土したものをあげると、7・8・12・14である。図示しない土器片の点数は1,371点、重さは9.8kgである。

SI-055 (第229・466図、図版40・255)

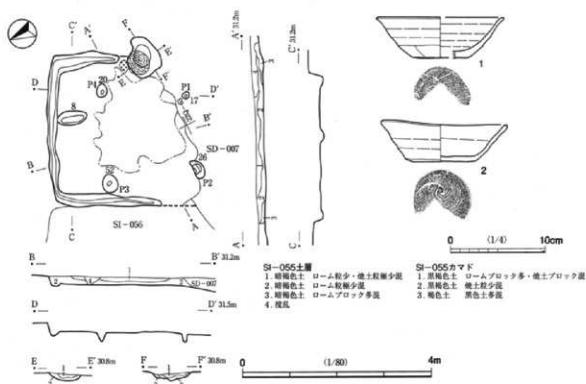
遺跡東部中央の22Q区に位置する。形態は方形で、主軸方向の長さは3.2mである。南側がSD-007に切れ、副軸方向の長さは不明である。深さは16cmである。また、西側でSI-056と重複し、本遺構がSI-056を切っている。主軸方位はN 120° Eである。南東辺にカマドをもつ。1柱穴は4か所存在するが、



第227図 SI-054 (1)



第228図 SI-054 (2)



第229図 SI-055

P3が壁際に寄っており、配置が壁穴のプランに対してゆがんでいる。出入口部の小穴は明瞭に確認できなかった。壁溝は北側約半分が遺存している。本来は全周すると思われる。北東側の床面には、壁溝に直交する形で床溝がある。遺存する床面は全体に堅緻であるが、中央部が硬化している。カマドの遺存は痕跡をとどめる程度で、構架材の山砂が左袖部分にわずかに残存している。火床部分も上部は削平されており、堆積土に含まれる焼土ブロックは濃密ではない。

図示した遺物は2点で、1・2ともロクロ成形の土器器杯である。ともに比較的遺存のよい土器である。また、双方とも割れて小破片がやや散っていたが、主要部分はまとまって出土している。主として1はP3右側から、2はP3左側の壁溝上から出土した。

出土遺物は、確認面から床面まで浅いために少量であるが、遺構全体から出土している。図示しない土器片の点数は183点、重さは1.5kgである。

遺跡東部中央の22Q区に位置する。建て替えられた住居で、拡張されたものと思われる。形態はやや縦長の方形で、建て替え後の規模は4.5m×4.2m、深さは0.21mである。東辺にカマドをもつ。カマドの設置壁は建て替え前後で変更がなく、主軸方位はN-75°-Eである。南東隅側でSI 055に切られ、北東隅側でSD-011に切られている。建て替え後の住居の壁溝はほぼ全周する。北東隅側で途切れているのは、SD-011の影響であろう。建て替え前の壁溝については、一部が北壁と南壁でみられる。建て替え後の壁溝のすぐ内側に位置し、南北壁が拡張されたことがわかる。

4本柱の主柱穴をもつが、カマドのある東壁側の主柱穴(P1a・P4a)は壁際にある。その内側に建て替え前の上柱穴(P1b・P4b)がある。西辺側の上柱穴(P2・P3)もおのおの2か所の柱穴が重なったものであり、建て替えに伴い、わずかに柱位置をずらしている。柱位置については、内側(P2b・P3b)から外側(P2a・P3a)へ移動させたものと推測できる。P2・P3間にはピットがある。P5aが建て替え後、P5bが建て替え前のものと思われる。このピットについては、その位置から補助柱穴とも思われるが、壁穴の規模があまり大きくないことから、出入り施設に関わる可能性が高いと考える。西壁際中央のピット(P6a・P6b)と対になるものと考えられる。なお、建て替え前のピットの深さは不明のものが多い。壁穴内には南東隅部と北西隅部にもピットがある。南東隅部のピットはSI-055の出入口側柱穴であるかもしれない。北西隅部のものは壁に関わるものであろうか。床面の硬化面が出入口側の下柱穴間にみられる。硬化面はあまり広い範囲ではないが、他の部分も比較的堅緻である。壁の拡張については、東南北の3壁で確実である。西壁側は、建て替え前の壁溝が検出されなかったが、ピットのあり方から、西壁も拡張されたものと思われる。カマドも壁拡張に伴い作り直されている。構築材は山砂土体で、内壁は焼けている。

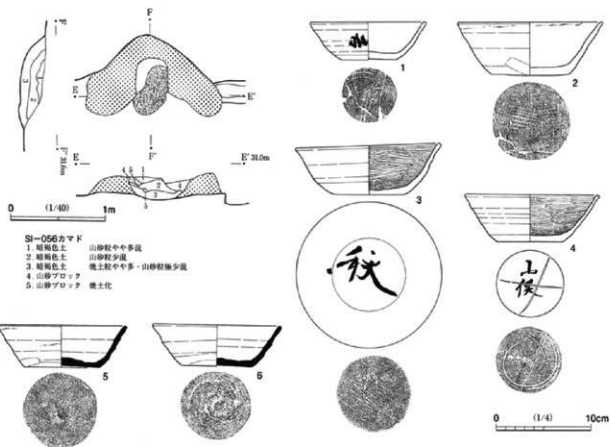
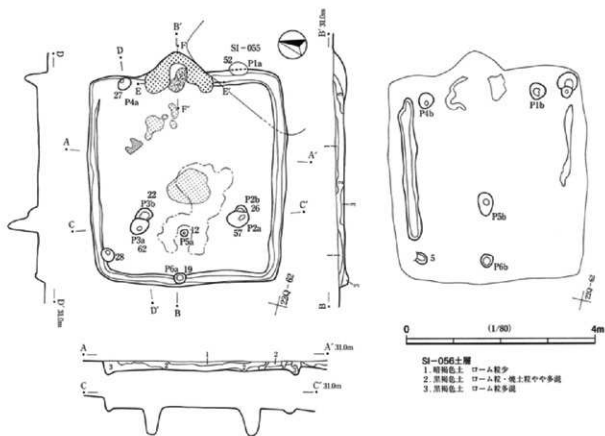
堆積土第2層は焼土粒を多く含み、また、中央部とカマド前の床面が焼けている。

図示した遺物は14点である。1～4はロクロ成形の上師器杯である。1～4は割れてはいるが、いずれも遺存がよく、2は接合して完形、1・3・4の欠損部はわずかである。1は体部に「吉」の墨書が横位で書かれている。3は底部外面に「秋」の墨書があり、4も底部外面に「×(+)」のヘラ書きの後、「小侯」の墨書がある。3は墨痕が薄く、4は濃い。また、4のヘラ書きは強く刻まれている。1の墨書部分は半月形状の破片部分にあり、打ち欠きされた可能性があると考え、しかし、2・3・4の割れ方は意図的か、破損か、区別がつかない。1は内面がやや荒れている。

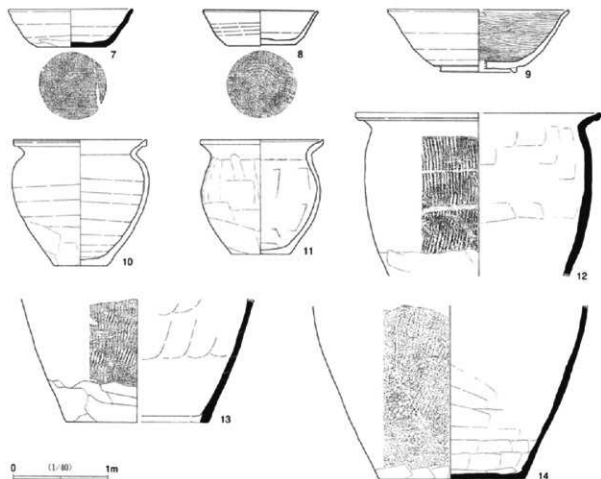
5～7は須恵器杯、8はロクロ成形の上師器杯である。5～7は千葉産である。5～8もかなり遺存のよい上器群である。5は口縁・体部の一部が三角形に欠損しているが、他は割れていない土器であり、打ち欠きされた可能性があると考え。6・7・8も口縁・体部の一部が欠損している。あまり整然とした割れ方ではないが、打ち欠きの可能性はあるものと思われる。8は器面が荒れており、特に内面が著しい。やや黒ずみもあり、火を受けたものと思われる。

9はロクロ成形の上師器高台付杯(碗)で、施釉陶器碗を模倣したような器形である。内面にひび割れ・剥落がみられ、火を受けたものと思われる。

10・11は小型の上師器甕で、10はロクロ成形の甕である。底部外面の調整がやや須恵器的であり、色調も暗い褐色であるため千葉産の須恵器とも思われるが、断定しがたい。10・11は比較的残りのよい遺物である。11は欠損部は少ないが、やや細かく割れている。



第230図 SI-056 (1)



第231図 SI-056 (2)

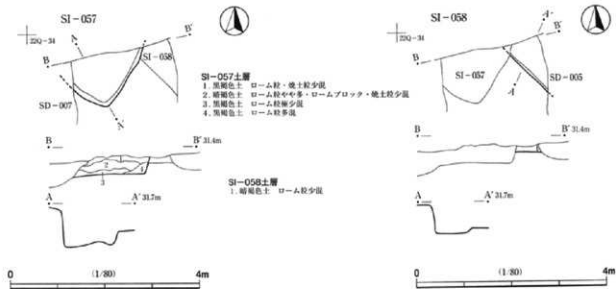
12・14は千葉産の須恵器甕である。14は底部・胴部下が遺存している。上部は確認面より上に位置しており、削平により失われたものであろう。13も千葉産の須恵器甕で、底部は五孔をもつ。

出土遺物は、平面的には中央部での出土が多く、西壁側は希薄である。層位は床面から中層におよぶ。10は主として床面から出土した。主要部分は割れてつぶれた出土状態である。5は確認面近くから出土している。その他の遺物は床面から6cm～8cm程度高い位置の出土が多い。堅穴内に若干の土が堆積した後、一括廃棄された可能性がある。2・3・5～8は正位の出土である。なお、1・4は細かく割れた状態で出土した。11の底部破片は正位の出土である。図示しない土器片の点数は385点、重さは2.9kgである。

SI-057 (第232図、図版41)

遺跡東部中央の22Q区に位置する。方形プランの南隅部周辺のみ調査で、大部分は調査区外に入っている。東側でSI-058を切り、西側でSD-007に切られている。平面規模は不明。確認面からの深さは40cmである。主軸方位は不明である。壁溝については、調査した部分は巡らない。支柱穴の有無は不明である。出入口部の小穴については、存在する場合、調査区外となる。カマドも未検出である。

出土遺物は少量であるが、調査部分が少ないので、堅穴全体の量はそれほど少なくないことが予想される。図示した遺物はない。出土遺物はすべて土器片で、点数は54点、重さは0.6kgである。器種の内訳は土師器杯・甕、須恵器杯・甕・甕である。須恵器はほとんどが千葉産と思われる。土師器杯の中には内外面赤彩の8世紀代のものがあるが、土器全体としては9世紀代の方が多い。



第232図 SI-057・058

SI-058 (第232図、図版41)

遺跡東部中央の22Q区に位置する。一部分の調査であり、西側はSI-057、東側はSD-005に切られている。北側は調査区外であるが、遺存している部分がそれほど多くないことが予想される。平面規模は不明、確認面からの深さは14cmである。主軸方位は不明である。壁溝については、調査した部分は巡らない。主柱穴の有無は不明である。出入口部の小穴については、存在する場合、調査区外となる。カマドも未検出である。

出土物は6点の土師器甕（1点は杯の可能性もある）、土製支脚片1点で、図示したものはない。重さは75gである。土師器は奈良・平安時代のもと思われるが、詳細な時期は不明である。

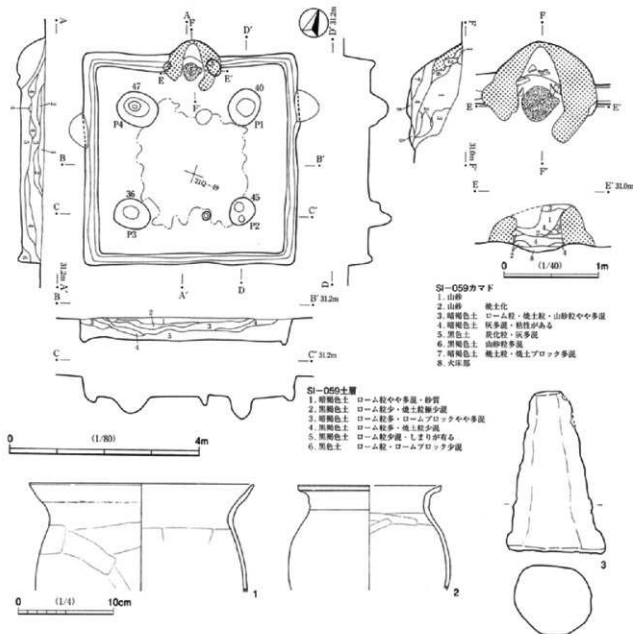
SI-059 (第233・467図、図版42・315)

遺跡中央部東寄りの21Q区に位置する。4.5m×4.5mの方形をなし、深さは0.46mである。主軸はN-19°-Wである。北辺にカマドをもつ。SB-059と重複するが、新旧関係は不明である。壁溝は全周する。主柱穴4か所と出入口部の小穴をもつ。主柱穴は堅穴プランのわりに規模が大きい。柱の抜き取りまたは建て替えによる規模の拡大が考えられる。出入口部の小穴は主柱穴P2・P3間で、P2に寄ったところに位置する。床面はハードローム層に連しており、全体に堅緻であるが、主柱穴間が特に硬化している。カマドの構築材は山砂主体であるが、上部は暗褐色土を含む。両袖内壁は焼けて赤色化・硬化している。火床部は床面よりやや低い位置にあり、焼土が堆積している。堆積土は下層にローム粒の少ない土層が厚く堆積し、自然堆積の可能性が高い。

遺物はそれほど多量ではないが、堅穴全体から出土している。図示した遺物は少なく、土師器甕2点（1・2）、土製支脚1点（3）である。1はカマド内から出土し、2は主としてカマド右側から出土した。2の出土層位は床面から上層にわたるが、下層からの出土が多い。3はP4の南側下層から横倒しで出土した。1は武蔵型の甕、2は常総型の甕である。図示しない土器片の点数は207点、重さは2.2kgである。

SI-060 (第234・467図、図版42・256・311・317)

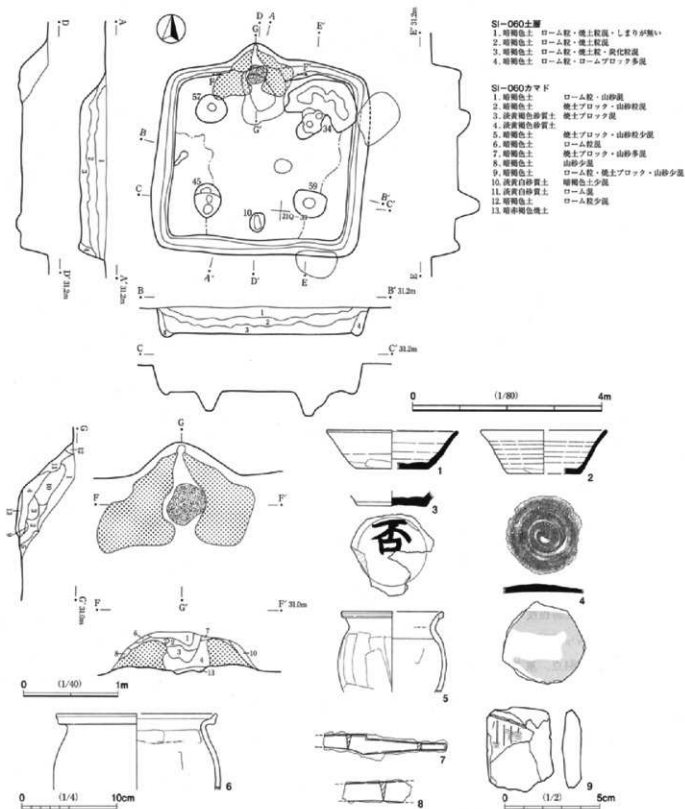
遺跡中央部東寄りの21Q区に位置する。4m×4.4mの方形をなし、深さは0.57mである。主軸はN-2°-



第233図 SI-059

Wである。北辺にカマドをもつ。SB-054・SB-059と重複する。壁溝は全周する。主柱穴4か所と出入口部の小穴をもつ。主柱穴はやや規模が大きく、段差をもつものがあり、柱の抜き取りや建て替えの実施などが考えられる。床面は平坦で、東西の壁際を除いて、広く硬化している。北東隅部に窪みがあり、図示しているが、掘りかた底面の一部であろう。この部分は黒みの強い土が充填され、その上面が床面と考える。カマド構築材は山砂主体であるが、下部はハードロームブロックを含む。両袖内側は火熱を受け、赤色化している。火床部は床面よりやや低い位置にある。その下部に、黒褐色土・山砂・ロームブロックの混合層が堆積しているが、灰のかき出しにより、底面がえぐれた結果か、または掘りかた上の充填土と思われる。堆積土は暗褐色土主体で、自然堆積の可能性が高い。

図示した遺物は9点である。遺存の良好なものは存在しない。1～4は須恵器杯で、いずれも新治窯産である。3は底部外面に「否」の墨書がある。4はいわゆる転用硯で、須恵器杯の底部破片を再利用した



第234図 SI-060

ものである。見込みの径は8.0cmである。底部内面は磨られて滑らかな部分がある。底部内面の色調はやや黄色味のある灰色であるが、外面の色調は黒灰色である。さらに外面には黒色物が附着している。煤の焦げ付きと思われる。5・6は土師器甕で、5は小型品である。6は常総型の甕である。7・8は鉄製の

刀子である、9は石製品である。図の上部と下部の一部に研磨された部分がある。石材は滑石である。性格は不明瞭であるが、砥石となろう。

遺物は堅穴全体から出土している。図示した遺物はすべて堆積上1・2層から出土している。遺物は堅穴がかなり埋まった段階で廃棄されたか、流入したものである。図示しない土器片の点数は490点、重さは4.4kgである。

SI-061 (第235・468図、図版43・256・306・309~311)

遺跡中央部東寄りの21Q区に位置する。調査は東壁側の1/2以下であり、中央から西側は調査区外に入っている。周囲の堅穴住居跡の様相から、カマドは調査区外の北壁に位置すると考える。主軸はN-16°-Wである。形態は方形をなし、主軸方向の長さは5m、東西方向は不明、深さは0.4mである。壁溝は調査範囲内では巡っており、全周すると思われる。かなり幅広く図示しているが、壁際の掘りかたが中央より深く、暗褐色色を含む床面を掘りすぎたためであり、本来は通常のあり方である。主柱穴のうち2か所を検出した。南東側の柱穴P2に接して、中央側に深さが19cmと、柱穴よりも浅いピットがあるが、性格不明である。そのピットとP1の間の床面に、焼土範囲がみられる。出入口ピットは検出されず、調査区外に位置すると思われる。堆積上は下層にややローム粒を多く含むが、全体的に黒褐色土主体であり、自然堆積と考える。

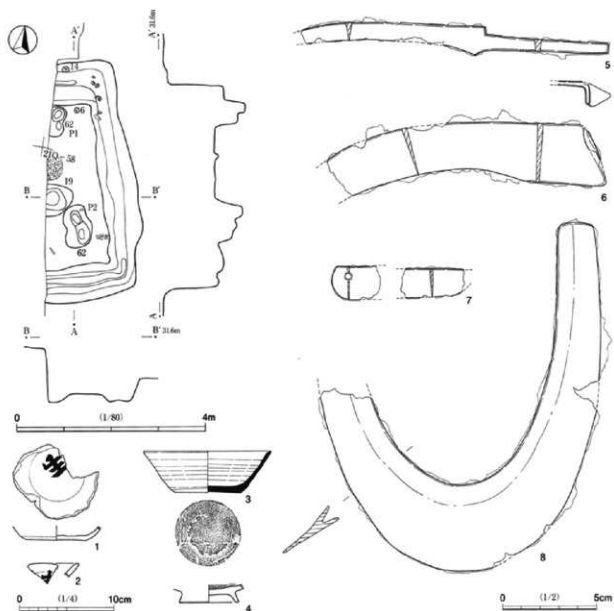
図示した遺物は8点である。1・2はロクロ成形の土師器杯である。1は底部内面に「生」の墨書がある。2も体部外面に正位と思われる墨書があるが、判読できない。3は千葉産の須恵器杯である。4は土師器高台付杯の底部片で杯部内面に黒色処理が施されている。5~8は鉄製品である。5は刀子である。柄には木質が若干付着している。6は鏃である。7は穂拵み具である。2片に割れた破片は接合しないが、同一個体と思われる。1片は片側端部の破片である。H釘孔は錆に覆われているが、X線写真により、明瞭にみることができる。8は鋸先である。平面がJ字形の形態をもつ大型の鉄製品である。片方の端部側を欠くが、比較的遺存のよい個体である。刃側が薄く、隙いた状態である。木質のスリッパ部分を装着する部分である櫛の遺存も良好である。

遺物の分布範囲は、東壁際中央に空門域があるが、それ以外は全体から出土しており、密度も高い。遺構面積の1/2弱程度の調査であるが、遺物量はかなり多い。ただし、土器破片の出土が多く、図示した遺物は少ない。図示した遺物の出土層位は、床面から上層に及ぶが、下層の出土が多い。図示しない土器片の点数は884点、重さは5.2kgである。

SI-062 (第236・468図、図版44・256)

遺跡南部東寄りの20T区に位置する。4.1m×3.8mの方形をなし、深さは0.32mである。主軸はN-24°-Eである。北辺にカマドをもつ。東壁の一部が溝状遺構SD-002に切られている。また、北西隅部でもSD-013と重複する。SD-013の方が新しいと思われるが、遺構の観察では不明である。出入口部の小穴をもつが、主柱穴はみられない。壁溝は、カマドのある北壁を除いて巡っている。北東・北西・南西の3隅部にピット状の落ち込みがある。南東隅部にはみられないため掘りかたの一部かとも思うが、明らかにピット状である。本堅穴に関係するものと考えが、性格は不明とする。ほかに2か所のピットがあるが、それらは本堅穴に属するものか不明である。床面は全面が堅緻であるが、中央部は周囲よりもさらに硬化している。

カマドはあまり遺存がよくなく、構築材の山砂が流れている、とくに両袖先端の遺存が悪い。火床部は

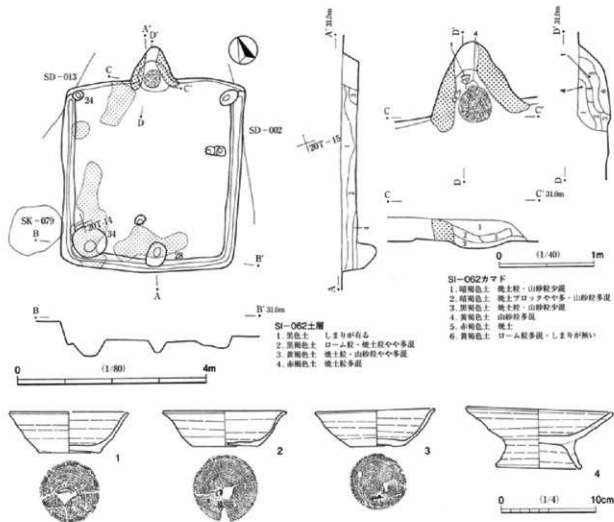


第235図 SI-061

よく焼けて硬くなり、両袖内壁も焼けている。

焼土・炭化物が、壁際を中心に堆積しており、とくにカマド左袖上周辺・西壁際・南壁際からは、まともに検出された。出土層位は床面上主体であり、上屋が焼却されたものであろう。ただし、焼土上部の堆積土は黒褐色土主体であり、焼却後に片付けがなされた後は、自然堆積と思われる。

図示した遺物は4点である。1～3はロクロ成形の土師器杯である。4はロクロ成形の土師器高台付杯である。1～4は、いずれも器面の磨耗や剥離痕など火を受けた痕跡がみられる。この点は、遺構の状況と整合している。ただし、1は山砂が付着すること、灰白色に変色することから支脚に転用され、長期に使われていたものである。また、3も色調が赤褐色で、内外面の剥離が著しいため一時的に火を受けただけではないかもしれない。4は足高高台の杯で、口縁部の1/3周弱が欠損しているほかは、遺存している。欠損部のほぼ反対側に、小さな半月形状の割れがあるが、こちらは接合している。出土位置を考慮すると、ともに打ち欠きされた可能性が考えられるが、断定はしがたい。



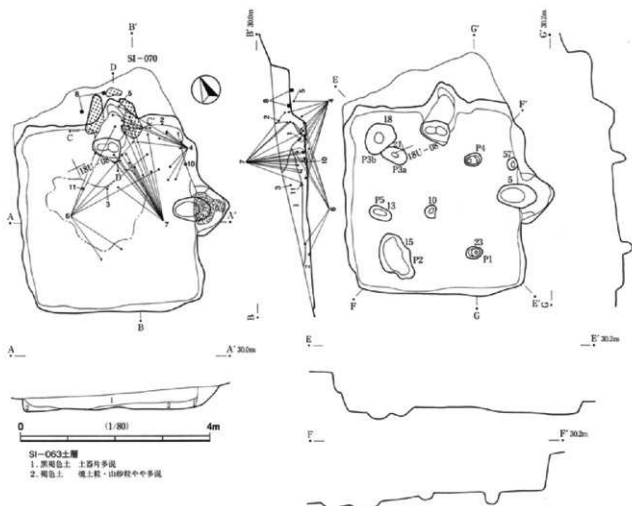
第236図 SI-062

4はカマド内中央から、倒位やや斜めの状態で出土した。この土器の近くからは1が出土し、また、2もカマド内下層から出土した。1の破片はカマド左袖輪周辺からも下層主体で出土している。カマド周辺以外の遺物では、3が南壁際東寄りの出入口ピット右脇の床面から正位で出土した。図示しない土器片の点数は504点、重さは3.1kgである。

SI-063 (第237・238図、図版44・256・257・307・311・315・319)

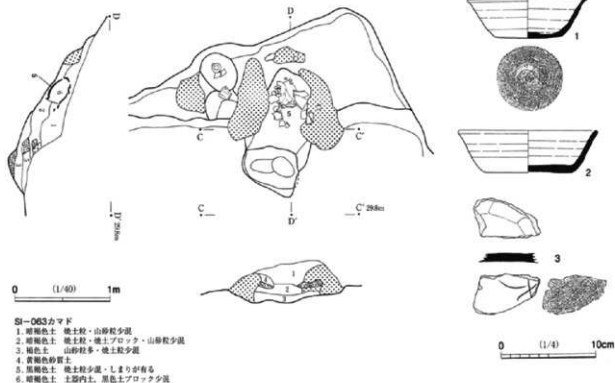
遺跡南部南西端斜面部の18T・18U区に位置する。4m×3.8mの方形をなし、深さは0.45mである。主軸はN-22°-Eである。SI-070と重複し、SI-070の多くの部分を切っている。北辺と東辺にカマドをもつ。山砂が遺存する北辺のカマドが新しく、遺存しない東辺のカマドが古い。壁溝は巡らない。床面は、台地方向の北側が高く、谷方向の南側が低い。中央部が硬化しているが、範囲はあまり狭くない。掘りかた底面は、四隅が深く、厚さ5cm程度の貼り床が施されている。中央部の床面は若干ならされた程度で、四隅部のように深く掘り込まれてはいない。

貼り床をはがした段階で、いくつかのピットを検出した。P1～P4が4か所の柱穴と思われるが、P2・P3はやや不整な形態である。P5は出入口ピットの可能性がある。中央のピットは柱穴かどうか不明である。ピットは不明のものを除いて、その様相から、東カマド段階の竪穴に伴うものと考えられる。



SI-063土層

1. 黒褐色土 土器片多量
2. 褐色土 焼土粒・山砂粒中多量



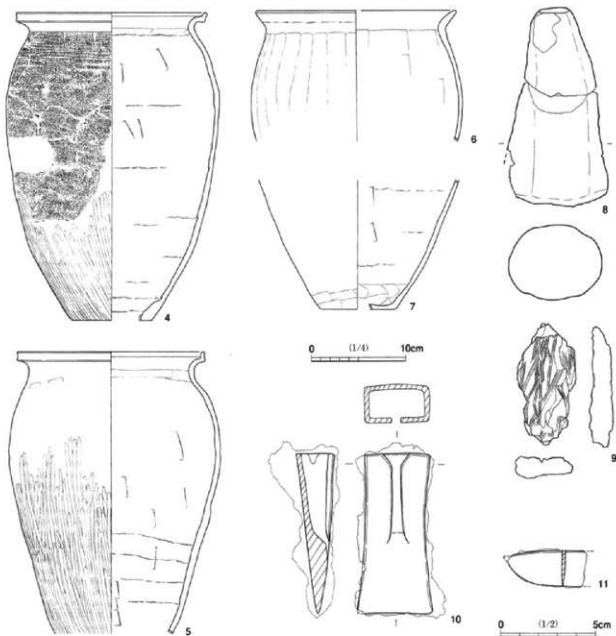
SI-063カマド

1. 暗褐色土 焼土粒・山砂粒少
2. 暗褐色土 焼土粒・焼土ブロック・山砂粒少
3. 褐色土 山砂粒多・焼土粒少
4. 黄褐色砂質土
5. 黒褐色土 焼土粒少、しまりがある
6. 暗褐色土 土器内土、黒色土ブロック多

第237図 SI-063 (1)

お、ピットは貼り床除去段階で検出されたものなので、北カマド段階の堅穴に伴うかどうかは不明とする。ピット上に貼り床が施されたとすると、カマドの移設にさいして、上屋も建て替えられたことになる。

北カマドは、両袖および後天井の一部が遺存している。構築材は山砂主体で、袖の内壁は焼けて赤色化している。カマド内からは、多量の遺物が出土した。とくに煙道部から出土した土師器瓶(巻転用?) (5)は遺存良好な土器である。この土器は口縁を火床部に向け、横位で出土したものである。この土器の解釈としては以下の3とおりを考える。①煙道の一部を構成するもの、②カマド廃棄儀礼に伴うもの、③北カマドに伴う土器であるが、特別な意図はなく、ただ廃棄されただけのもの。①・②も可能性はあるが、断定しがたく、他の土器の出土状況からも③としておく。北カマドの底面をみると、もっとも窪んでいる部分の両脇に袖がみられない。火床部がこの窪み部分とすると、袖前側は失われたことになる。また、袖があったとするとかなり長くなる。火床部は窪みの奥に位置するものであり、窪みはカマド手前で、灰のか



第238図 SI-063 (2)

き出しに伴うものかもしれない。

東カマドについては、袖はないが、掘込みがしっかりしており、煙道部底面上には、焼1ブロックを多量に含む赤褐色土層が厚く堆積している。火床部下底面は窪んでいるが、その上には貼り床が施されている。

図示した遺物は11点である。1・2は須恵器杯である。1は完形品である。暗褐色・黒褐色の色調で、工業産である。2はやや黄色味を帯びた灰色の色調で、胎土は白色粒を多く含む。新治窯産の須恵器である。底径が大きく、1よりも古い様相で、混入品であろう。

3は須恵器壺の底部片である。底部外面に記号と思われるヘラ書きがある。色調は、内面が暗灰色、外面が暗灰褐色で、断面も褐色味を帯びる。工業産の須恵器である。

4～7は土師器甕である。4・5は常総製の甕である。5は底部のみを欠き、ほかは割れているが、遺存している。甕としての使用が考えられるが、先述したように祭祀行為やほかの用途に転用するために、底部を抜かれた可能性もある。胴部外面には若干の山砂が付着しており、カマドにかけられていたことは確実である。甕として使用されたものであれば、ほぼ完形といってよい遺物である。内面下部を主体に接合痕が多く残るが、ヘラナデはていねいに施されている。4も比較的遺存がよい。胴部外面上・中位に横位・斜位の連続的なヘラの当たりがみられ、とくに胴部最上位に顕著である。胴部外面には、5以上に山砂が付着している。6は「房総」型の甕である。色調は赤褐色である。7は、外面が略淡褐色、内面が淡褐色の色調で、胎土は小石を多く含む。胴部外面下半は、幅広の横位・斜位のヘラズリが施されている。口縁部・胴部上位を欠くが、「房総」型の甕とは明らかに異なる質感の土器で、武蔵型の甕と思われる。

8は土製支脚であるが、出土位置から、本堅穴よりもSI-070の支脚である可能性が高いと考える。

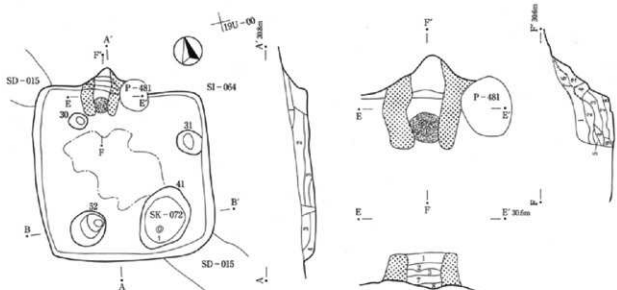
9は性格不明の上製品である。スサ等の植物繊維を多量に含む。屋根の上へのせた上が焼けて固まったものとも考えられる。

10・11は鉄製品である。10は袋状鉄釜で、錆跡が著しいが、完形品である。刃部はやや楕円の形態である。11は刀子と思われる。薄い製品で徳満み具の片断とも思われたが、X線写真でも孔が不明瞭であることから、刀子としておく。

5はカマド内底面から出土し、4もカマド内下層および北東隅周辺の床面・下層から出土した。また、1は北東隅部下層から、10はその近くの床面から出土した。遺物の平面分布は北側に多く、南側がやや少ない。北側に多いのは、堆積土が北側で厚いこともあるが、堅穴廃棄段階でのカマドが北壁にあることにもよる。図示しない土器片の点数は975点、重きは8.6kgである。

SI-064 (第239・468図、図版11・45・306・317)

SI 064は遺跡南部南西壁斜面部の18U区に位置する。3.7m×3.7mの方形をなし、深さは0.5mである。主軸はN-8°-Eである。北辺にカマドをもつ。北西隅から南東隅にかけて、溝状遺構SI-015に切られている。また、カマド右袖付近はP-481に切られ、南東隅側でSK-072と重複する。斜面部に位置するため堅穴の遺存が悪く、とくに南壁側が低い。壁溝は検出されなかった。床面にはSK-072以外に、3か所のビットがあるが、柱穴や出入口ビットではない。遺構番号を付けていないが、SK-072同様、土坑と扱った方が妥当であろう。床面中央部は硬化している。カマドは北壁西寄りに位置する。両袖の内側はよく焼けて赤色化が著しい。カマド内堆積土は焼土が多い。煙道部は段になっている。掘りかたは四隅・壁際が深い。堆積土は、ややローム粒を多く含む層もあるが、高いほうから低い方へと流れ込むように堆積して



118U-19

B' 30.6m



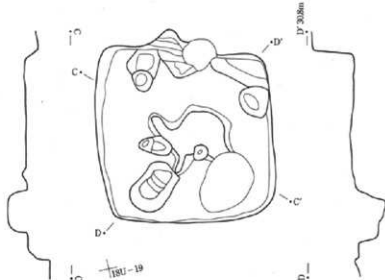
SI-064土層

1. 黒色土 ローム粒やや多量
2. 暗褐色土 ローム粒やや多量
3. 黒褐色土 焼土ブロック・山砂粒やや多量
4. 黄褐色土 ローム粒多量

SI-064カマド

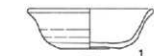
1. 暗褐色土 ローム粒多量
2. 暗褐色土 焼土粒少量
3. 褐色土 焼土粒・山砂粒やや多量
4. 赤褐色土 焼土ブロック
5. 黄褐色砂質土
6. 暗褐色土 焼土粒・山砂粒少量
7. 暗褐色土 焼土ブロック・山砂粒多量
8. 黄褐色土 焼土ブロック多量
9. 暗褐色土 焼土粒少量

0 (1/40) 1m

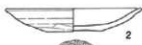


118U-19
0 (1/80) 4m

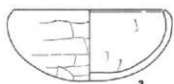
SI-064



1



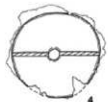
2



3



1



4

0 (1/2) 5cm



5

0 (1/4) 10cm

第239図 SI-064・SK-072

おり、自然堆積と思われる。

図示した遺物は5点である。1はロクロ成形の土師器杯、2はロクロ成形の土師器皿である。1・2とも器面が荒れ、黒ずむ部分がある。3は土師器鉢形土器で、ロクロ成形ではないと思われる。火を受けており、遺存する外面の多くが赤褐色に変色している。また、口縁部外面には剥離痕もみられる。4は鉄製紡錘車の紡輪である。5は砥石で、石材は流紋岩質凝灰岩である。

遺物の出土量はあまり多くない。平面位置は、堆積土の厚い北側に多く、堆積土の薄い南側に少ない。とくに南西側が希薄である。北側では、カマド周辺にやや多い。図示した遺物の垂直位置は下層であるが、床面に接してはいない。図示しない土器片の点数は513点、重きは5.2kgである。

なお、SK-072については、本章第5節で記述した。

SI-067 (第240・241・468図、図版46・258・308・314・317)

遺跡南部中央やや西寄りの18T区に位置する。4.3m×4.5mの方形をなし、深さは0.62mである。主軸は北である。北辺にカマドをもつ。南東側がSI-068を切っている。溝溝は全周する。主柱穴4か所をもつ。ほかに3か所のビットがあり、そのうち中央からやや南壁側、P2・P3の中間に位置するビットは、中央に寄り過ぎている点が疑問であるが、出入口部用の可能性があるビットである。東西壁際中央にある2か所のビットは、本壁穴に伴うものか不明である。深さは、東側が11cm、西側が8cmであり、補助柱穴としては、やや浅いように思われる。床面は、中央から東西壁際にかけて、硬化面が広がる。カマドは、両袖の残りがよい。構築材は山砂主体であるが、基部はローム粒を含み、上部は黒褐色土を含む部分がある。袖内壁はよく焼けて赤色化している。また、火床部も焼けて、硬質である。掘りかた底面は、四隅が深い。また、カマド前にも大きな堀込みがあり、その部分には貼り床が施されている。堆積土は焼土粒・炭化粒を多く含む層があり、他所からの焼土の廃棄または土屋の焼却・片付け等が考えられる。床面のほぼ中心に、焼土範囲があり、亦変し、硬質であるが、掘り込みはない。堆積土が焼土を含むことから、炉とするよりも、堆積土の焼土に関係するものと考ええる。

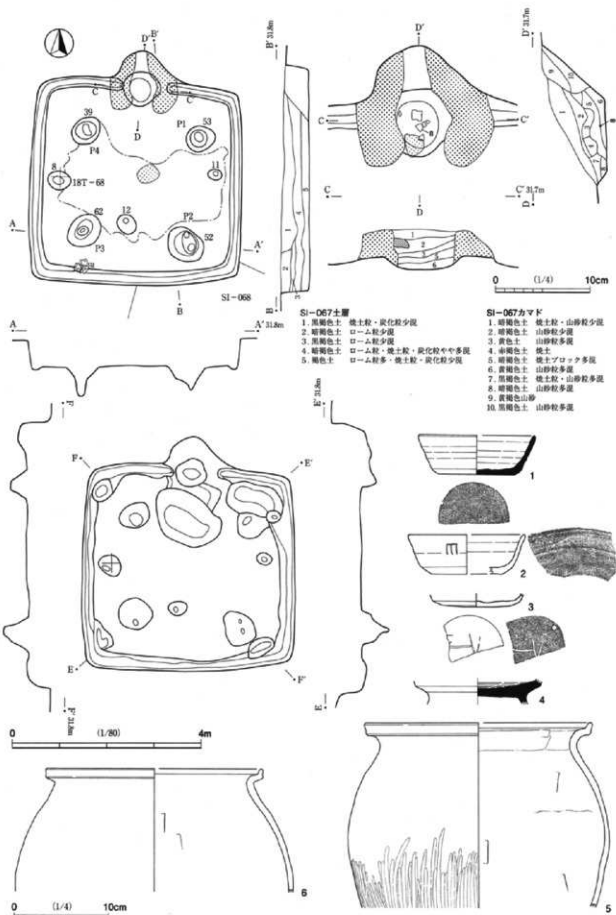
図示した遺物は12点である。1～3は杯である。いずれも(黄)褐色および黒色味をもつ色調である。1は内外面に火樽をもつことから、須恵器とする。2・3も須恵器の可能性はあるが、確実な根拠に乏しいため、土師器とする。2は体部外面に片假名の「ヨ」を横にしたような形の線刻がある。即天文字の「天」に似た形でもあり、平行する3か所の線が上から下に刻まれていることから正位の記号とする。3の底部外面にもへら書きの記号がある。4は新治窯産の須恵器高台付盤または杯である。長石等の白色粒・小石を多量に含む。

5～9は土師器甕である。5～8は常盤型、9は武蔵型の甕である。5・8は同一個体の可能性がある。

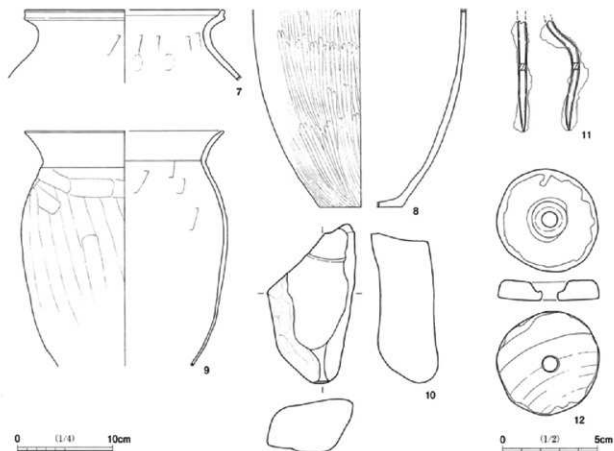
5は胴部外面に山砂が付着している。8の底部外面には木葉痕が残るが、ナデ調整により細部が消えている。9は外面の一部が剥離している。

10は砥石で、石材は砂岩である。おおまかにみて4面あるが、不整形な形で、一方の端部がやや細くなっている。反対側は斜めに直線的に割れている。滑らかになっている部分が多い。もともとは鉄床石であった可能性もある。

11は鉄製品で、角釘がやや曲がったものであろう。頭部は、錆のためやや不明瞭であるが、L字形に折れ曲がったものと思われる。12は土製紡錘車である。新治窯産のやや大型の須恵器杯・盤(有台を含む)底部を転用したものである。紡車を固定するため、孔の片側が径1.8cm、深さ5mmに掘り込まれている。



第240図 SI-067 (1)



第241図 SI-067 (2)

全体の径は挟り込みのある側がやや狭く、図の上部側が下面の可能性もある。図の下部側はやや広く、上面であろう。

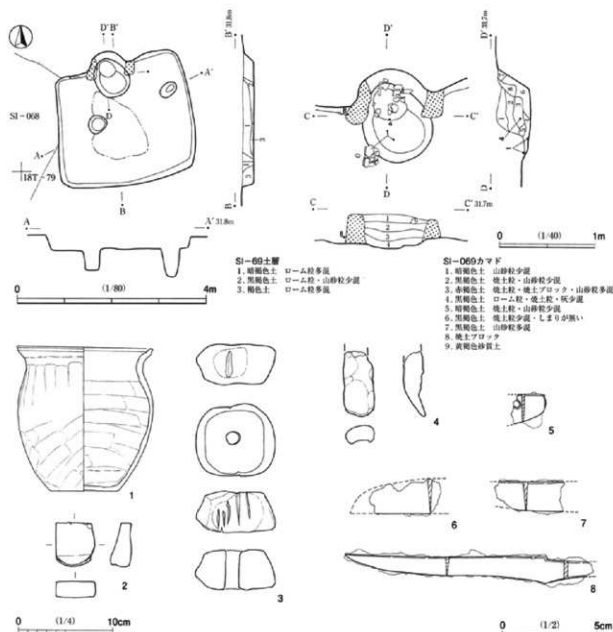
遺物は堅穴全体から多量に出土している。しかし、完形品は1個もなく、図示した遺物はあまり多くない。

出土層位は、床面から上層にわたる。床面・下層から出土したものは、土師器甕(6)・鉄製品(11)・土製紡錘車(12)で、12は南壁際中央から出土した。また、土師器甕(9)の多くが、南壁際西寄り下層からまとまって出土している。土師器甕(8)はカマド内外から出土しているが、出土層位は床面から上層に及ぶ。出土遺物は、概して廃棄されたものであろう。図示しない土器片の点数は789点、重さは9.6kgである。

SI-069 (第242・468図、図版47・258・309・310・311・314・317・319)

遺跡南部中央やや西寄りの18T区に位置する。2.6m×2.9mの隅丸方形をなし、深さは0.3mである。主軸はN-8°-Wである。北辺にカマドをもつ。西側にSI-068を切っている。壁溝・支柱穴はみられない。出入口ピットも確認できなかったが、木の根の攪乱による影響が考えられる。床面は、中央部が硬化している。また、2か所のピットが検出されたが、本堅穴に伴うものか不明である。カマドの遺存は悪く、両袖とも短い。構築材は山砂を主体とするが、一部に暗褐色土を含む。火床部下の掘込みは大きく、床面よりもやや深い。

図示した遺物は8点である。1は「房籠」型の土師器甕で、小型品である。ほぼ完形である。胴部上位



第242図 SI-069

の器面が荒れて、剥離が目立つ。また、その部分はやや黒ずんでいる。

2は砥石で、石材は流紋岩質凝灰岩である。厚い方の短側面は丸みをもち、筋状の研ぎ痕がある。また、薄くなった方の短側面も若干の擦痕がみられる。3は、もともとは土製紡錘車であるが、砥ぎ具に転用されたものである。側面は平滑面が4面あり、上から見て、隅丸方形の形態となっている。そのうちの隣り合わない2面に、筋状の研ぎ痕がみられる。上面・下面も若干使用されているが、側面ほどではなく、凹凸がある。4は性格不明の土製品である。手捏土器的な製品であるが、焼成は良好である。

5～8は鉄製品である。5は穂摘み具である。片側端部の破片で、目釘孔の部分で割れている。6は鎌と思われる。薄い作りの製品で穂摘み具とも思われたが、孔が不明瞭のため鎌とする。7・8は刀子である。8は遺存がよく、切先側はかなり失っている。茎は錆影れのため、厚さが不明瞭である。

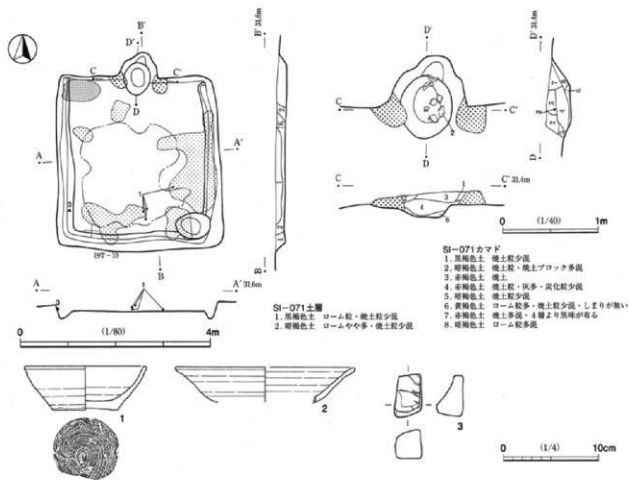
遺物の出土量は少ないが、1の主要部分が、カマド前床面からつぶれた状態で出土した。その近くのカ

マド左袖外側からは、8が床上5cmくらいの高さから横位で出土した。また、カマド内第3層中からは、4が出土している。その他の遺物では、鉄製品が中央部の床面からやや集中して出土し、そのうち、5と7を図示した。図示した遺物の多くが、床面・下層から出土している。図示しない遺物のうち、カマド内上・中層から、須恵器甕（または甌）片・土師器杯片等が出土している。その他、竪穴内の図示しない遺物の出土は散在的である。図示しない土器片の点数は54点、重さは1kgである。

SI-071 (第243図, 図版48・317)

遺跡南部中央の18T・19T区に位置する。3.7m×3.5mの方形をなし、深さは0.21mである。主軸はN-6°-Wである。北辺にカマドをもつ。壁溝は、北壁を除く三壁に巡っている。出入口ピットおよび支柱穴は検出されなかった。床の硬化面は、中央から南壁際・西壁際まで広がるが、とくに中央部の硬化が著しい。南東隅部にピットがあるが、本竪穴に伴うものか不明である。ほかの三隅部の床面には、ほとんど貼り床が施されていないため、この部分のみ、掘りかたが深いとは考えにくい。カマドの遺存は悪く、北東隅部に山砂がかなり流失している。火床部底面は床面よりも深く、上部には、焼土が厚く堆積している。堆積土中には、焼土を多く含む部分があり、とくに東壁側・南壁側に顕著である。家屋の焼却または焼失が考えられる。

図示した遺物は3点である。1はロクロ成形の土師器杯である。底部調整は、回転糸切り後無調整である。2もロクロ成形の土師器であるが、高台付杯となる可能性がある。高台部は足高高台かもしれない。



第243図 SI-071

器面はややざらつきがある。3は砥石で、石材は流紋岩質凝灰岩である。長断面のうち、狭い面の片方には、筋状の研ぎ痕がみられる。

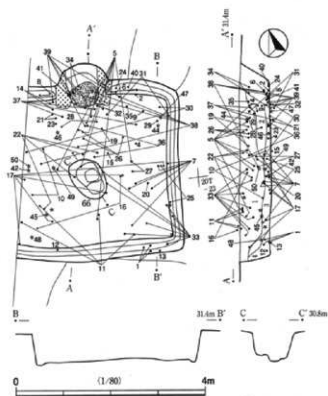
2はカマド内から出土したが、カマド内からは、その他に、5～6点の上器片が出土している。1・3は床面から浮いている。遺物の出土は概して少なく、散在的な出土状況である。図示しない上器片の点数は129点、重さは1.7kgである。

SI-072 (第244～246頁、図版48・258・306・309～311・315)

遺跡南部東寄りの20T区に位置する。形態は方形で、主軸方向の長さは3.8m、深さは0.62mである。主軸はN-6°-Eである。北辺にカマドをもつ。平成3年度の調査で、西壁部を除く大部分が調査され、その後、平成5年度に西壁部も調査されている。その時点で、再度プラン全景の写真撮影がされているが、手違いにより、西壁部部分の図面を記録していない。そのため、図は平成3年度調査時のものだけである。ただし、写真を見る限り、図化されていない西壁部部分はわずかで、プランはほぼ方形である。南側でSI-074と重複し、切っている。また、SD-013とも重複している。SD-013の方が新しいと思われるが、遺構の観察では不明である。壁溝は全周する。床面中央にピットがあるが、堆積土にはしまりがなく、平面形態はやや楕円形である。また、本遺構の周囲には、中・近世遺構と思われるSK-126やP-490等が存在する。以上の状況から、中央のピットは中・近世の土坑と思われる。4本柱の柱穴はなく、出入口ピットも検出されなかった。床面はハードルーム層に達しており、全体に硬質である。中央のピットの影響で、顕著な硬化範囲はみられない。

カマド内からは土製支脚2点が出土し、そのうちの1点は中央部から直立の状態で出土した。上部は遺存しないが、基部は残っており原位置をとどめるものである。なお、この支脚は非常に脆く、割れて崩壊してしまったため、実測図を作成できなかった。もう1点の支脚(41)は右袖にはば接して、横位の状態で出土した。底面からやや高い位置での出土である。火床部および袖内壁の一部が、よく焼けて赤色化している。両袖下部の底面はやや掘り残されて、床面よりも高くなっている。堆積土については、下層でやや多くローム粒を含むところもあるが、全体としては黒褐色土・暗褐色土主体であり、自然堆積と思われる。

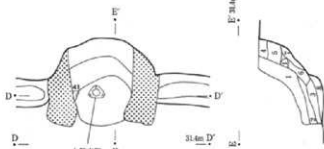
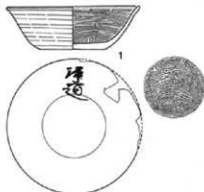
図示した遺物は50点と多いが、中小の破片を含む。図示した土器のうち、1・3～6・8～13・15・16はロクロ成形の土師器杯、2・7・14・17・18・19は須恵器杯である。1・6・12・15は内面に黒色処理が施されている。1は「津道」と書かれた墨書が、体部外面からわずかに底部にかかって正位でみられる。「津」のつくりの縦棒は上に突き抜けていると思われるが、黒色処理の影響で口縁部外面も黒ずんでいるため、判然としない。この墨書の近くの口縁・体部に逆三角形の割れがある。逆三角形部分は、口縁部周では1/4弱で、上の1文字目の墨書に接するほどの近きにあるが、墨書にはかかっていない。また、逆三角形の下頂部から、下の2文字目の「道」をかすめるように割れが延びており、逆三角形部分以外の本体を大小の2片に分割している。なお、逆三角形部分は、2片の破片が接合している。以上の割れ方のうち、逆三角形部分については、意図的な打ち欠きと思われる。また、三角形の頂点から延びる割れも墨書との関係から意図的な可能性も読み取れる。13も体部外面に墨書があるものの、遺存が少なく判読できない。6は火を受けていると思われ、内外面の器面の荒れが著しい。内面はヘラミガキが施されているが、部分的に認められるのみである。底部外面中央に回転糸切り痕がかすかに残っている。12は外面の色調も黒色である。3・11・16も器面が荒れている。11・16はやや黒ずみもあり、火を受けていると思われる。11は灯明器の可能性もある。



SI-072土層

1. 黒褐色土 ローム状少量
2. 黒褐色土 ローム状多・ロームブロック・山砂粒少量
3. 黒褐色土 ローム状多量
4. 黒褐色土 ローム状少量

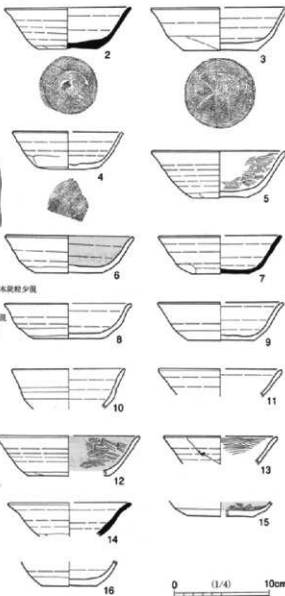
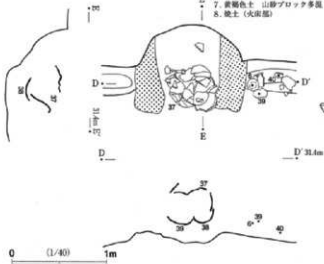
源道



土製支脚

SI-072カマド

1. 黄灰色砂質土
2. 赤褐色土 炭土ブロック多・木炭粒少量
3. 黒褐色土 炭土粒少量
4. 黒褐色土 山砂粒多量
5. 黒褐色土 炭土粒・山砂粒少量
6. 黒褐色土 炭土粒少量
7. 黒褐色土 山砂ブロック多量
8. 緑土 (火圍板)



第244図 SI-072 (1)

2は底部外面の切り離しがへら切りと思われること、内面のざらつきから須恵器としたが、色調は赤褐色であり、土師器との差が少ない。また、7も断面内部が暗灰色であるので、須恵器としたが、器表面は赤褐色であり、土師器的である。14も褐色味があるが、やや灰色を帯びる部分もあり、内外面がざらつくことから、須恵器でよいと考える。17は暗灰色で、もっとも須恵器らしい土器である。18・19はやや赤みがあるものの黒色味の方が強く、いわゆるくすべ焼成の須恵器である。以上、須恵器とした土器はいずれも千葉産である。

20～31はロクロ成形の上師器皿で、20～25は高台付皿、26～28・31は無台の皿である。29・30は有台か無台か不明である。なお、29の底部は突出するか、あるいは高台付の可能性が高い。26は高台付ではないが、底部が突出して、高台風になっている。また、21の底部も全体に突出しており、高台溝部の突出が少ない。以上の皿のうち、25・26はやや暗い赤褐色の色調から、須恵器になる可能性もあるが、断定しがたいため土師器としておく。21・22・23は器面の荒れ・剥離が著しい。21は黒ずみも強く、火を受けたものと思われる。

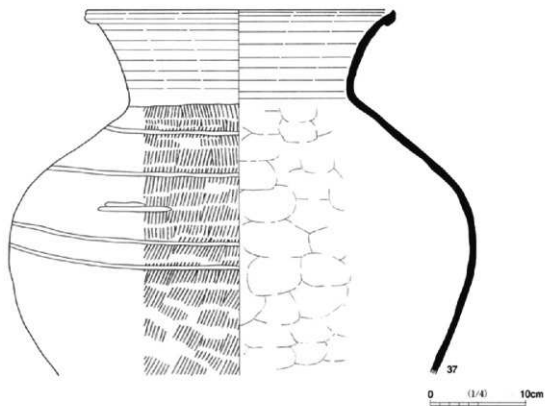
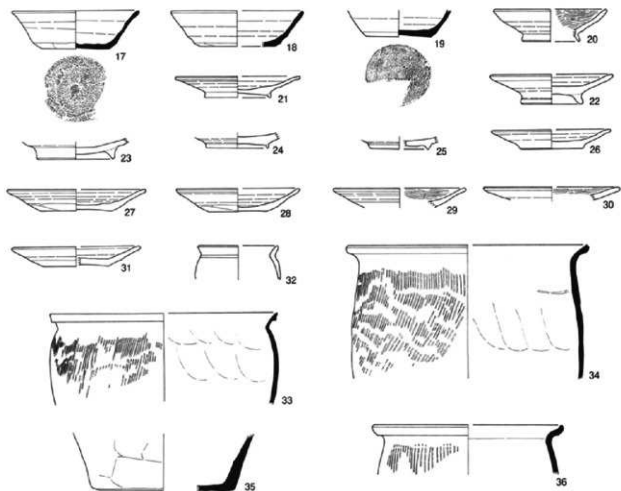
32は土師器甕である。小型品で、ロクロ成形の甕である。色調は黒褐色部分が多いが、赤褐色の部分もある。須恵器の可能性もあり断定しがたい。

33～39は須恵器甕、40は須恵器甗である。37は特大といえる大きさの土器である。37以外は通常の人さきの土器群である。39の色調はほぼ暗灰色である。また、37はやや褐色味を帯び、一部で褐色が強いが、全体としては灰色を基調とする色調である。38も灰色を基調とするが、一部で褐色味が強く、黒ずみ部分もある。器面は内外面とも磨耗し、火を受けていることが明瞭である。33～36・40については、程度の差があるが、褐色味をもつ色調である。33・34は黒褐色となる部分も多い。図示した須恵器甕・甗はすべて千葉産である。

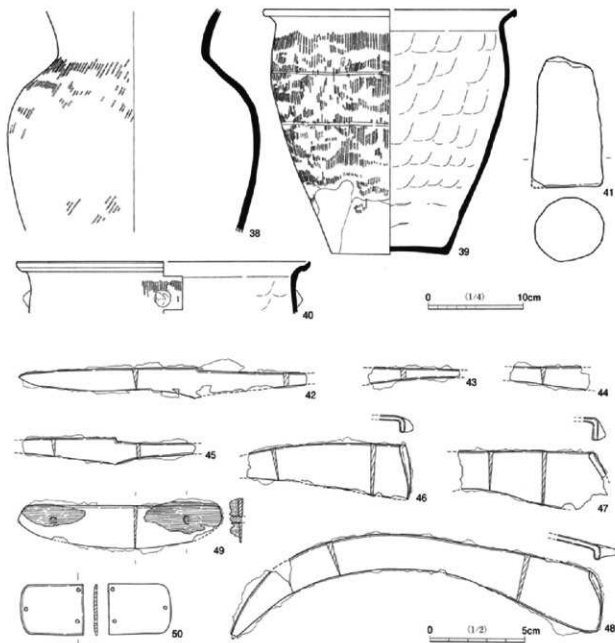
41は土製支脚である。基部は平坦で、側面は丸みをもつ。

42～50は金属製品で、50が金箔製である以外は、鉄製品である。42～45は刀子である。43は刃部が遺存している可能性もあるが、錆跡のため、不明瞭である。46～48は鎌で、48はほぼ完形品である。49は穂柄み具で、ほぼ完形品である。目釘は角釘で、一部が遺存している。釘頭は判然としない。目釘の周囲には柄の木質がよく遺存している。目釘孔は円孔で、X線写真により、一部をみることができる。50は帯金具の一つで、鉋尾である。帯先の金具で、裏金である。錆に覆われているが、銚を留める小円孔が3か所ある。遺存がよく、外側は鍍金による金色部分が多くみられる。

遺物の出土量はかなり多く、カマド内および周辺から、比較的遺存のよい遺物が出土している。カマド上からは、37がほぼ横位で出土した。胴部下位から底部を欠く土器である。出土層位が覆土上層ということもあり、比較的高位にあったため後世の耕作等によりその一部が失われたものと考えられよう。また、木椀穴での出土遺物は、概して土層からの出土が多いことも特徴の一つといえよう。遺物としては5・11・16・19の杯や23の甕などがこれに該当する。さらに37の下からは、38・39が出土した。38・39はカマド外からも下層主体で出土しているが、38の一部は、やや遠い西側中層からも出土している。また、39の底部破片の一部はカマド右袖壁から倒れて出土し、それに接するほどの近いところから、ほぼ完形の土師器杯6が、正位で出土した。このような状況から、以上の土器群は一部の破片を除き、カマド廃棄儀礼に伴ってカマド内外に置かれたものとする。なお、その近くから出土した2もやや遺存のよい土器で、床面から出土している。正位か倒位かは不明である。その他の土器では、1は接合してほぼ完形となったが、



第245图 SI-072 (2)



第246図 SI-072 (3)

南壁際南東隅寄りの下層から出土した。土器以外の遺物では、竪穴の西側部分で比較的遺存のよい金属製品が数点出土した。中央西寄りの下層からは49が横位で出土し、西側中央の堆積土中位から50が斜位で出土した。また、42はその近くから横位で出土している。48は南壁際西寄り下層から横位で出土し、その付近からは、45が48と同じ高さで出土した。図示しないものも含めた遺物分布については、竪穴全体に散っているが、若干南側の密度が低い。垂直分布は床面から上層にわたるが、中位での出土がやや少ないようである。図示しない土器片の点数は894点、重さは7.3kgである。

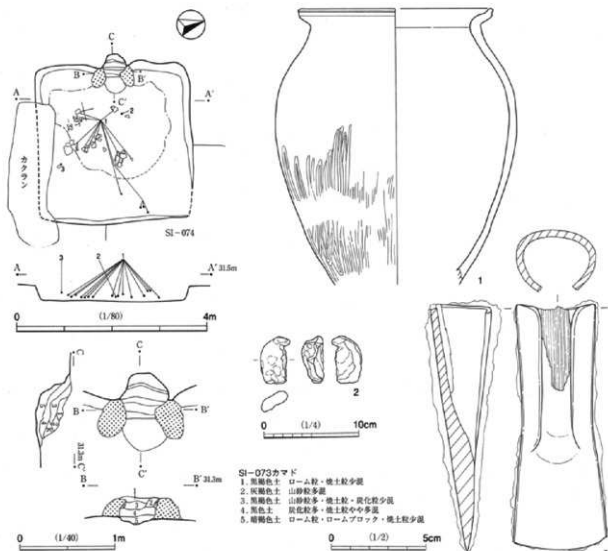
SI-073 (第247図、図版49・307・311・321)

遺跡南部東寄りの20T区に位置する。3.4m×3.3mの隅丸方形をなし、深さは0.36mである。主軸はN-78°-Wである。西辺にカマドをもつ。北東側の約1/4部分が、SI-074を切っている。また、南壁際の多く

が攪乱により壊されている。壁溝は明瞭でないため図示していないが、図版等を参考にすると北壁下は浅い壁溝が存在するようにも思われる。出入口ピットは検出されませんが、存在してもSI-074との重複部分に位置することが予想され、検出が難しかったものと思われる。主柱穴も検出されなかった。床の硬化面は、カマド前から中央部に広がる。北東側のSI-074と重複する部分の床面は、ソフトロームを多量に含み、貼り床が施されている。しかし、それほど踏み固められてはいない。また、南東側の床面も攪乱の影響を受け、硬化面の広がりが見られない。カマドの遺存は悪く、火床部の被熱範囲も明瞭でない。堆積土は黒褐色土・暗褐色土主体で、自然堆積と思われる。

図示した遺物は3点である。1は常総型の土師器甕で、遺存がよい。器壁が厚く、重量感のある土器である。胴部外面下半は山砂の付着する部分が多い。また、胴部上位の器面の一部に剥離がみられる。2は性格不明の土製品である。3は鉄製品で、袋状鉄斧である。やや大型で、重量感のある製品である。柄の装着部分は鉄板が丸みをもって折り返されており、折り返し間はやや広く隙間が空いている。袋部内部に木質が付着している。刃部表側は約1.2cm程度の幅で研ぎ出されていると思われる。裏側は鋳のため不明である。

遺物量は少ないが、1は主として中央部の床面からおしつぶされたような状態で、やや散って出土した。



第247図 SI-073

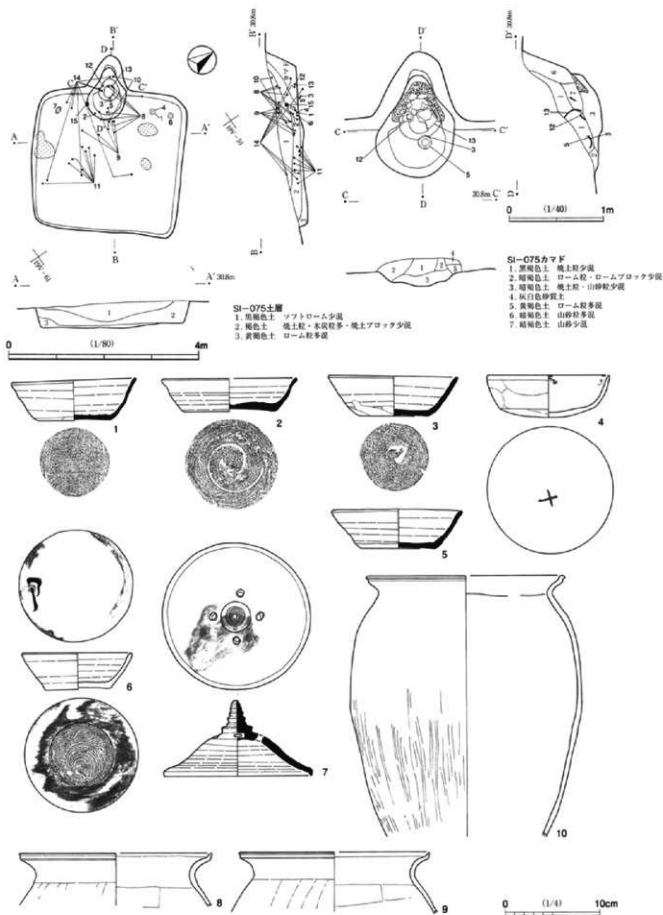
また、その近くの南側中央の下層から、3が横位で出土した。図示しない遺物は、南東側がほぼ空白であるほかは、散在的な出土である。図示しない土器片の点数は136点、重さは1.3kgである。

SI-075 (第248・249頁、図版49・50・258・319)

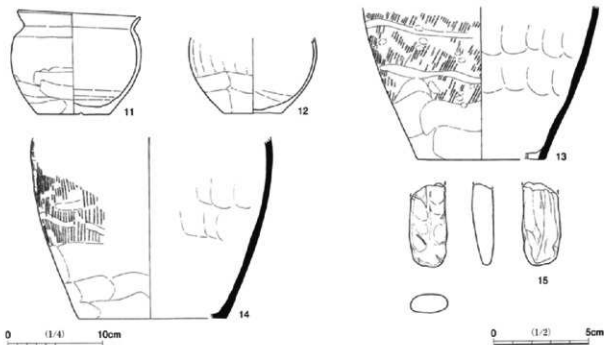
遺跡南南端斜面部の19V区に位置する。3.1m×3.2mの方形をなし、深さは0.49mである。主軸はN-51°-Wである。北西辺にカマドをもつ。支柱穴および出入口の小穴は検出されなかった。壁溝は巡らない。南東側壁が斜面であり、南側の床面は、北側よりもやや低い。また、壁の立ち上がりも、南側は短く、北側は長い。床面は、中央がやや硬化しているが、あまり顕著ではない。床面上には、いくつか焼土が集中する部分がある。カマドは、袖部等の構築材がほとんどない。構築材は、壁穴の廃棄時に除去されたものと思われる。煙道部の壁は高く、かなり急な傾斜で立ち上がる。カマド内堆積土は焼土粒・ブロックを含み、火床部奥側でやや多いが、全体としては、厚い堆積ではない。堆積土は、2層が褐色土で、新时期テフラ層と似ているため、壁・床面の検出に難しいところがあった。また、焼土粒・炭化物粒を多量に含み、埋め戻されていると思われる。1層は黒褐色土で、遺物の出土も少なく、自然堆積と思われる。

図示した遺物は15点である。この中には、遺存が良好なものや特徴的な割れ方をしているものが多い。出土状況のうえでも、明らかに意図して置かれたことを指摘できるものがある。結論から先に述べるならば、それらは、カマドおよび壁穴廃棄の祭祀にかかわるものであり、その祭祀行為には、カマド構築材の除去や埋積土の埋め戻しも含まれると考える。図示した遺物のうち、完形品は、須恵器香炉蓋7、須恵器杯3・5、土師器杯6で、これらはほとんど割れない土器群である。6の口縁部にわずかな割れがあるが、灯明器であるため、芯の固定にかかわるものかもしれない。しかし、この部分も接合しており、ただ割られただけとも思われる。6の体部内面には、正位の墨書「与」がある。この墨書は薄い墨痕と濃い墨痕があり、なぞり直しされている。1画目が2画目の中にあるように思われるが、墨痕が薄いために、判然としない。2画目上部が薄墨のままなので、薄い墨痕の後に濃い墨痕が付付け足されたと思われる。土師器杯4も灯明器で、底部外面に「上」または「+ (×)」の墨書がある。非ロクロの土器である。この土器は、完形に近いが、土器には割れがある。しかし、まとめて器の状態で出土しているため、割れが意図的なものか判断しがたい。また、口縁部に欠損があるが、小さいため、破損または灯明にかかわる打ち欠き、あるいは壁穴廃棄時の打ち欠きとさまざまに考えられる。須恵器杯1は口縁・体部の1か所が「U」字状に欠損しており、打ち欠きされたものと考えられる。その他の口縁・体部も接合はしているが、ぐりりと割れている。その一部は打ち欠きかと思えるところもあるが、出土状況を見ると、4と重なってその下から出土している。1の口縁部は、一部がまわった状態で出土しており、4と堆積土の圧力で割れたとも思われる。須恵器杯2は口縁・体部の多く、口縁部周りで5/6周程度が欠損しているが、底部は全体に遺存している。割れ1の部は連続して細かく弧状に割れており、欠損部は打ち欠きされたものと考えられる。

これらの土器群の出土状況を西側から北側への順序でみていく。まず、完形の須恵器香炉蓋7はカマドの左側、西隣近くの位置から、床面よりも5cmほどの高さで、口縁部を上やや斜めの状態で出土した。次に5/6周打ち欠きの須恵器杯2は、カマド前やや左側の下層から、正位で出土した。次に、完形の須恵器杯3・5がカマド火床部上、またはやや前側の床面同等レベルから、正位の2枚重ねの状態出土した。3が下、5が上である。次に、一部打ち欠きの須恵器杯1・灯明と墨書の土師器杯4が、カマド右側、北隣と右袖の中間的な位置の床面から、正位の2枚重ねの状態出土した。1が下、4が上である。最後に、灯明・墨書でほぼ完形の土師器杯6が、北隣の床面から正位で出土した。これら7点の土器群は、



第248図 SI-075 (1)



第249図 SI-075 (2)

5か所の位置から、わりあい規則的な間隔で出土している。3・5はややカマド内に入っているが、他の土器群は北西壁からの距離もほぼ一定で直線状に並んでいる。このような出土状況からも、以上の土器群が意図して置かれたことは確実と考える。

さらに、目をほかの土器群に転じると、カマド火床部上方から、横位で出土した須恵器甔13の状態が注目される。この土器は胴部下がが全周遺存するにもかかわらず、底部の五孔をつなぐ橋状部がほぼ欠損する。さらに、胴部の割れ口も杯ほど整然としていないが、細かい弧状の割れが連続するといつてよく、かなり不自然である。底部および胴部の割れの双方とも、意図的な打ち欠きの可能性がある。以上のことが認められるとするならば、この土器の近くから出土した小型の土器器甔11も、伏せて置かれた可能性が考えられる。口縁部周で1/2が欠損し、割れもあるが、全体的には比較的遺存のよい土器である。その他に意図的に置かれた遺物があるかどうかは即断できない。図示しない遺物を含めた分布についても、カマド周辺に集中する。中央部は散在的に分布するが、東側は空白域が多く、南西壁側も希薄である。垂直位置については、床面から上層にわたるが、2・3層が多く、1層は少ないと判断できる。遺物分布の濃淡については、南東側の堆積土が薄いことも影響しているが、東側は本来的に希薄であると考えられる。図示しない土器片の点数は169点、重さは1.6kgである。

図示した遺物の様相については、出土状況とともに記述した部分も多いので、以下そのような遺物については、補足的に記述する。4・6は土師器杯で、6はロクロ成形の土器、4はロクロ未使用で作られた土器である。6の底部外面は、回転糸切り痕がほぼ全面に残り、調整は、周縁がわずかに回転ヘラケズリされるのみである。器形もやや底径が小さく、調整とあわせて、伴出土器群よりも新しい様相がうかがえる。しかし、新相にみえるのは、当初から灯明専用器として製作されたためと思われる。油煙は内外面に多く付着し、底部内面の剥離が著しい。4も灯明器であり、油煙が口縁部内面を主体に、4か所ほどみられる。やや器壁が厚い。底部内面に1条の筋があり、線刻の可能性はあるが、断定しがたい。

1・2・3・5は須恵器杯である。2は底径が大きく、器高が低い器形で、6とは逆に古相をもつ上器である。胎土は白雲母を多く含み、新治窯産の須恵器である。1・3・5は「葉産」の須恵器である。1・3の色調は褐色味が強い。1の底部には重ね焼き痕がみられる。5の色調は暗灰色を基調とするが、やや黄色味を帯びている。

7は須恵器香が蓋である。色調は褐色で、上師器との差が少ないが、やや淡い色調であること、器面に若干のざらつきがあることから須恵器とした。つまみは複数段をもつ円錐状で、塔頂部の九輪を想起させるものである。つまみ近くの天井部には4か所の孔があいている。孔は器の内周を四分する位置に、内面から外面に向かってあけられている。孔部分を主とする外面が、火煙による熱を受けて磨耗し、一部赤褐色、暗褐色に変色している。特に2か所の孔周囲から口縁部に向かう一部分が顕著であり、火煙はその2孔から多く流れたことがわかる。しかし、内面側にはあまり荒れがみられない。また、淡黄色の付着物が、内外の器面全面にみられる。付着物は痕跡的な部分も多いが、口縁部外面の一部と口縁部内面にはやや顕著である。白土などの塗布物が全面に塗られたものと思われる。

8～12は土師器甕で、8～10は常総型の甕である。8・9は同一個体かもしれない。10はやや黒味があり、内面下位に剥離の著しい部分がある。11・12は小型品で、「房総」型の甕である。11はロクロ成形と思われる。12の器壁は薄い。

13・14は須恵器瓶である。13は黄灰褐色、14はぶい黄褐色の色調で、ともに「葉産」の須恵器である。15は性格不明の土製品である。上部を欠損する。

最後に、本竈穴には重複する遺構はないが、北側に3棟の掘立柱建物(SB-060・SB-061・SB-070)がある。これらは、仏堂群である。本竈穴も、仏堂に關係する建物であり、「僧侶」の住まいと考える。これらの建物は、小屋ノ内遺跡最南端に張り出す舌状台地の突端に立地し、建物群が機能している時点では、近接する位置にはかの遺構はない。なお、SB-061とSB-070は重複しているため、同時存在の建物ではない。集落を背後に控えながらも、閑静な環境がうかがえる点は、村落内の宗教空間にふさわしい内容である。想像をたくましくするならば、巡回する遊行僧が住まいを去るにあたり、竈穴・カマドの魔除祭祀を行ったのではないだろうか。ただし、カマド祭祀も含まれるので、民間信仰的な要素もあると考える。SI-077(第250図、図版51)

遺跡南部南寄りの19U区に位置する。3.1m×3mの方形をなし、深さは0.07mである。主軸はN-78°-Wである。西辺にカマドをもつ。確認面から床面まで非常に浅く、プランがあまり明瞭ではない。床面は、中央北寄りに一部硬化面が残るが、ほかはソフトローム層中に存在するため、軟質である。塹溝は巡らないが、不明とする方が妥当であろう。出入口ピット・主柱穴は検出されなかった。カマド部分は焼土が分布するのみで、袖は存在しなかった。また、火床部にあたる部分の底面も焼けていなかった。深さも床面より若干低い程度である。堆積上には焼土・炭化物を多く含む層があり、その集中範囲が南側にみられる。

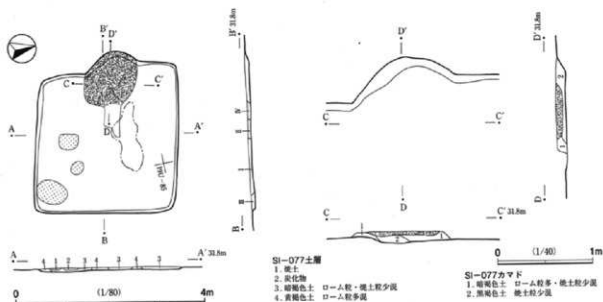
遺物の出土は少なく、散在的な分布である。図示したものはない。遺物はほとんどが奈良・平安時代の土器片で、点数は23点、重さは160gである。器種の内訳は、常総型の土師器甕、新治窯産の須恵器杯、ロクロ成形の土師器杯片等が出土している。細片ではあるが、遺物の様相と、小型のプランであることから、本竈穴は奈良・平安時代の竈穴住居跡と考える。

SI-079(第251図、図版52・307・314)

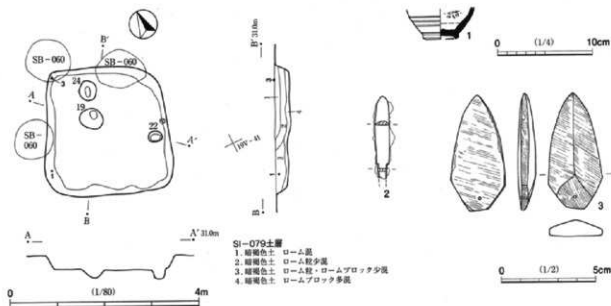
遺跡南部南端斜面部の19V区に位置する。2.7m×2.7mの方形をなし、深さは0.34mである。北東・南

西の隅部はやや丸みをもつ。カマドや炉は検出されず、住居として取り扱ったが、積極的な根拠はない。北側では掘立柱建物のSB-060と重複し、切っている。壁の立ち上がりはやや湾曲している。壁溝は巡らない。底面は凹凸があり、平坦でない。また、北側が南側よりやや深い。硬化面はみられない。底面内には、ピットが3か所検出されたが、主柱穴にならず、出入口の小穴も存在するか不明である。若干量の焼土が、東壁際中央層に堆積している。

出土遺物は少量で、図示した遺物は、近世陶器1点(1)、鉄鍔1点(2)、石製模造品1点(3)である。2は刃部付近の破片であるが、細身の長頭鍔と思われる。刃部は細長い剣形または柳葉形といった形態で、棒状部との境はほぼ直角の両側である。棒状部の遺存は少ない。断面はもう少し厚くなるかもしれないが、鋳影れにより不明瞭である。3の石材は滑石である。出土層位は、1が中層、3が確認面で、2は不明である。図示していない遺物は、奈良・平安時代の土器片で、常総型の土師器甕、千葉産の須恵器甕・杯等



第250図 SI-077



第251図 SI-079

が出土している。点数は30点、重さは260gである。

出土遺物には、古墳時代、奈良・平安時代、近世のものが混在している。SB-060を切っていることから、それ以降の時期であり、もっとも遺存のよい遺物を出土した近世の遺構とも考えられる。しかし、仏堂関係の特殊な掘立柱建物であるSB-060の直下に位置することから、平安時代の遺構の可能性が強い。ここに含めることとした。

SI-080 (第252・253図、図版52・261)

遺跡南部南東寄りの20U・20V区に位置する。3.4m×3.7mの方形をなし、深さは0.27mである。主軸はN-24°-Wである。北西辺にカマドをもつ。北側が高く、南側が低い緩斜面に立地する。北側にSD-017があり、南側ではSI-081・SI-094と重複している。床の硬化面や遺物の出土状況から、本堅穴が新しく、SI-081が古いと思われる。SI-094との新旧関係は不明である。なお、SI-081はSI-092・SI-094と大きく重複しており、斜面に位置することとあわせて、これらの遺構群の遺物はかなり混在していると思われる。遺物の様相から新旧関係を決定することは難しい。また、本堅穴は東側にある土坑と、西側にある掘乱に切られている。

壁溝はSI-081と重複する南側で不明であるが、本来はカマド両脇を除いて巡ると思われる。出入口ピットは、検出されなかったが、SI-081との重複による影響であろう。中央部の床面が硬化している。カマドは、右袖上部の遺存が無いが、両袖内側はよく焼けて、赤色化している。また、火床部も若干赤色化している。火床部前方の床面がえぐれているが、灰のかき出しに伴うものであろう。堆積土は黒褐色土・暗褐色土主体で、全体的にはローム粒の含有が少ない。下層は焼土粒・炭化物粒を若干含む。北側から南側に流れ込むように堆積しており、自然堆積と思われる。上層の一部にローム粒を多く含む層があるが、流れ込みと思われる。

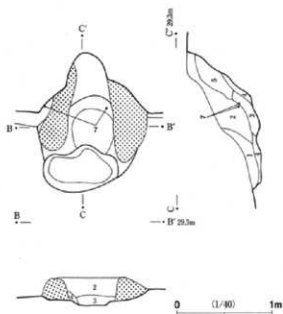
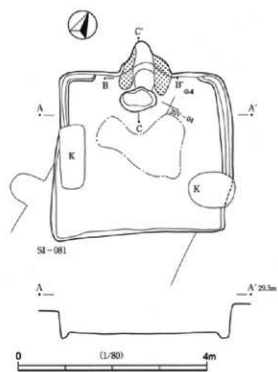
図示した遺物は10点である。1～3は千葉産の須恵器杯である。1・2は底部が遺存するが、11縁・底部の遺存は少ない。4は新治窯産の須恵器高台付杯で、小型の土器である。口縁部の一部を小さく三角形状に欠くが、ほかは遺存し、割れもない土器である。欠損部は打ち欠きされた可能性がある。5・6は非ロクロの上師器杯片である。外面の一部に黒色物質が付着する。油煙と思われるが、煤かもしれない。

7・8は上師器常態型甕である。7は底部外面に、木炭灰が残る。8は細片であるが、口縁部形態・色調の違いから、7とは別個体である。9は千葉産の須恵器甕または甕である。10も千葉産の須恵器甕である。外面の平行タタキは弱く、明瞭でない。

遺物は北隣付近でやや集中して出土しており、そのうち、4はカマド右袖脇の床面から正位で出土した。本堅穴に伴うと思われる遺物である。また、7はややまとまった破片が、カマドおよびカマドの左右から出土している。ただし、西隣付近の破片は上層出土である。なお、本遺構のプランからはずれないが、北側の近至近位置からも、奈良・平安時代の土器が多く出土している。その部分には、溝状遺構SD-017が東西に延びているが、土器片と溝状遺構の年代は離れていると思われる。それらの土器片のもとの帰属については、本堅穴も可能性があるが、緩斜面であることから、北方の遺構群に由来するものもあると考えられる。図示しない土器片の点数は547点、重さは6.4kgであるが、堅穴外の遺物を含んでいると思われる。

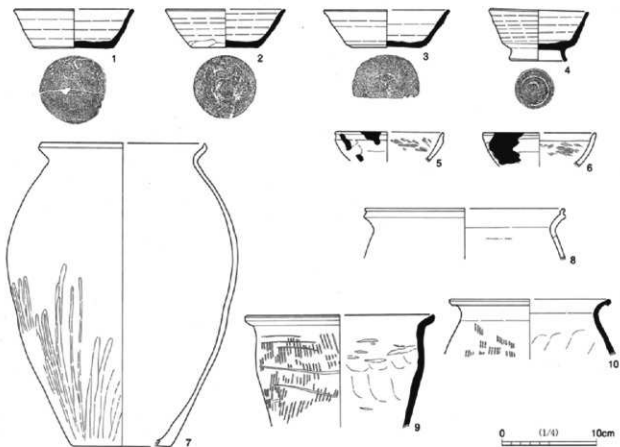
SD-017等SI-080周辺出土の奈良・平安時代遺物 (第253・254図)

①～④はいずれも千葉産の須恵器で、SI-080の北側、主としてSD-017上から出土した土器群である。遺存のよい個体はない。①・②は杯で、①の色調は暗灰色、②の色調は黒褐色・暗赤褐色である。③はや

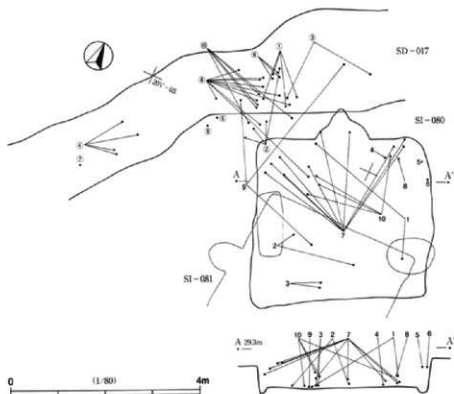


SI-080カマド

1. 暗褐色土 ローム粒ややち、ロームブロック少量
2. 褐色土 ロームブロックやや多、焼土粒少量
3. 暗赤褐色土 焼土ブロック・山砂粒多量
4. 深褐色土 焼土ブロック・山砂粒・炭化粒・灰多量
5. 灰白色砂質土



第252図 SI-080



第253図 SI-080及び周辺の奈良・平安時代遺物出土状況

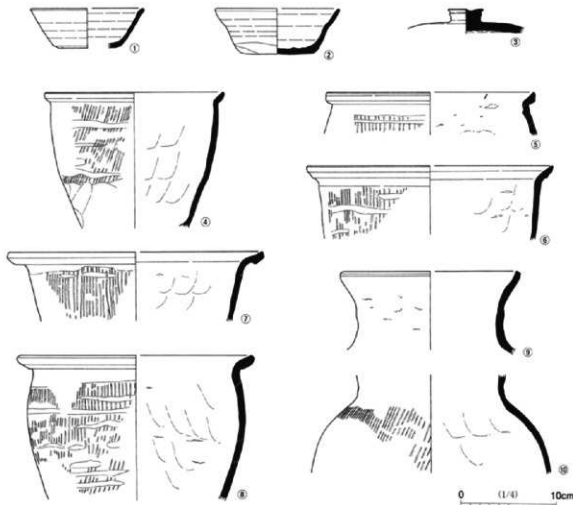
や大型の蓋で、つまみ周辺の破片である。外面は褐色と灰色が混ざったような色調、内面は黒灰色、断面は褐色に灰色がはさまれた色調である。④～⑧は甕または瓶である。④・⑦・⑧は黒色・黒褐色、⑤は赤褐色、⑧は灰色の色調である。⑨・⑩は甕で、口頭部が長く、胴部が丸みをもつタイプの器形である。⑨は淡黄褐色、⑩は黒色の色調である。

SI-081 (第255・468図, 図版52・53・261・311)

遺跡南部南東端斜面の20V区に位置する。3.5m×3.6mの方形をなし、深さは0.2mである。主軸はN-90°-Wである。西辺にカマドをもつ。北側でSI-080と重複する。本堅穴の方が古い可能性があるが、断定しがたい。南側はSI-092・SI-094に切られている。主柱穴4か所をもつと思われるが、想定されるプラン中でのバランスやカマドとの位置関係で違和感がある。しかし、深さが浅い南側の2穴でも、30cmを超えているので、主柱穴の可能性のあるビット群としておく。出入口ビットは検出されなかった。壁溝は比較的遺存している東壁下でも巡っていない。しかし、堅穴全体の遺存が悪いため、本来巡らないかどうか不明とする。床の硬化面は、カマド前にわずかに残っている。カマドは右袖の一部しか遺存していない。カマド内の底面に窪んだ部分があるが、灰のかき出しに伴うものと思われる。

図示した遺物は6点である。1～3は千葉産の須恵器杯で、いずれも小片である。4は常盤型の甕である。口縁部から胴部上位の遺存のよい土器である。内面はヘラの当たりが顕著である。5は「房総」型の土師器甕で、小型品である。底部外面にヘラケズリが施されている。6は千葉産の須恵器甕である。胴部外面下位の剥離が著しい。7は鉄製品で、刀子である。

4はカマド内から横位の状態で、押しつぶされたような形で出土した。本遺構に伴う可能性がある。4以外は他住居との重複により、帰属が不明瞭であり、上方から転落してきたことも考えられる。図示しな

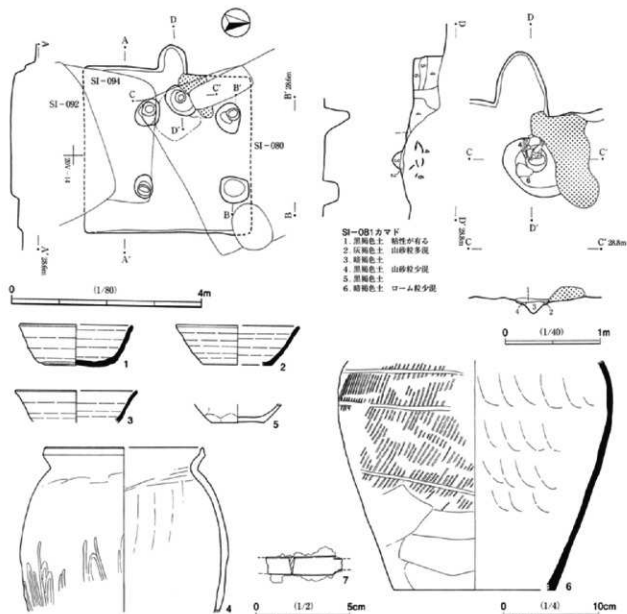


第254図 SD-017等SI-080周辺の奈良・平安時代遺物

い土器片の点数は272点、重さは2.5kgである。

SI-082 (第256・257・469図、図版53・261・307・311・314)

遺跡南部南東端斜面の20V区に位置する。北側から南側に向かって低くなっていく斜面部に立地する。3.8m×3.4mのやや不整形な方形をなし、深さは0.81mである。北西辺と南西辺にカマドをもつ。南西辺のカマドが新カマド、北西辺のカマドが旧カマドである。主軸は、新カマドの方向でN-121°-W、旧カマドの方向で、N-31°-Wである。北側上部はSD-018に切られ、西隅部は土坑SK-094・SK-096に切られている。出入口ピット・支柱穴は検出されなかった。西隅近くに深さが12cmのピットがあるが、本堅穴に伴うものか不明である。床面は平坦で、硬化面はみられない。壁溝も検出されなかったが、堆積土最下層が褐色土であるため、確認できなかった可能性がある。また、南東壁の検出も難しく、床面から追って検出する状態であった。新カマドの左袖内壁は被熱により赤色化している。カマドの前側からは、構築材の崩落による山砂の塊が出土した。煙道部付近には、焼土層が厚く堆積している。旧カマドは、方形プランから突出する部分に両袖下部の一部が残っている程度の遺存であり、前側は除去されたのであろう。突出部底面は焼けて赤くなっており、火床部はかなり奥にあることがわかる。しかし、煙道部壁がほぼ垂直に立ち上がり、急すぎるため、壁が一部未検出の可能性もある。両袖内壁も焼けて、赤色化している。堅穴の堆積土は、斜面部であるにもかかわらず、水平に堆積しているので、埋められた可能性がある。



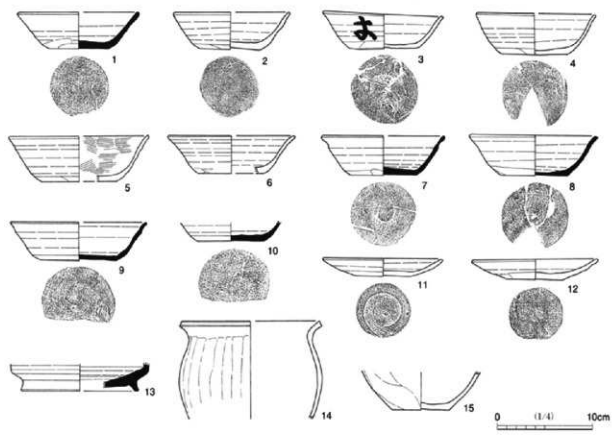
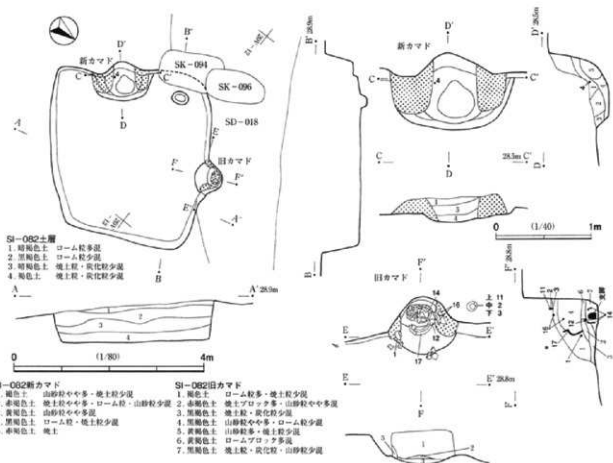
第255図 SI-081

図示した遺物は25点で、かなり多い。1～10は杯である。1・7～10は須恵器、2～6はロクロ成形の土師器とした。このうち、1は内外面に褐色の部分があり、土師器の可能性もあるが、内面に暗褐色・黒褐色の部分が多く、外面も黄灰色を帯びる部分があること、およびざらつく質感から、須恵器の可能性の方が高いと判断した。色調だけでみれば、ヘラ切りの痕跡をもつ7の方が1よりも褐色味が強い。5は外面の一部に黄色味を帯びる部分もあるが、全体としては灰白色であり、特異な色調である。千葉産の須恵器に同様の色調がないこと、内面にヘラミガキがみられることから、土師器と考える。

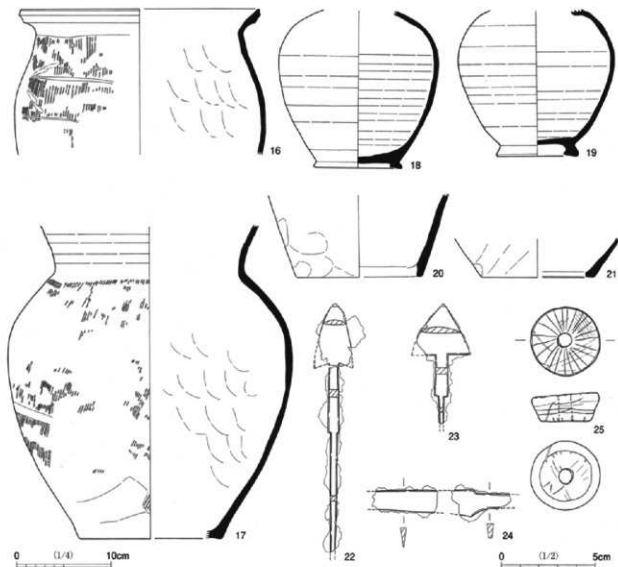
3は墨書部分を中心に複雑に破損している。ただし、この部分は接合している。断定はしがたいが、打ち欠きの可能性があると考えられる。2以外では、4・5の器面も荒れている。

1・7～10は、色調に黒色・褐色・灰色等の違いがあるが、すべて千葉産である。

11・12は土師器皿としたが、11は火樫と思われる痕跡があり、12はやや暗褐色の色調もみられることか



第256図 SI-082 (1)



第257図 SI-082 (2)

ら、須恵器の可能性もある。しかし、確定的でないため、土師器としておく。11の小片2片が接合している部分は、2・3以上に打ち欠きの可能性が高い。中央の小片外面に墨書があると思われるが、墨痕が薄く、判然としない。そのため、判読もできない。

13は須恵器高台付杯（または盤）である。白雲母はみられないが、白色粒の含有が多い。色調は暗灰色である。新治産と思われる。

14・15は「房総」型の土師器甕で、やや小型品である。同一個体の可能性が高い。

16・17は千葉産の須恵器甕である。17の胴部内面下位は被熱・使用により黒ずみ、器面の剥落が著しい。外面も中位から下位はやや赤黒く、器面が荒れている。20・21は千葉産の須恵器瓶である。20は五孔をもつ瓶である。21はブリッジの部分で割れていると思われるが、遺存が少なく、判然としない。

18・19は灰釉陶器長頸壺である。18の色調は灰白色、19は暗灰色で、ともに灰緑色の軸が付着している。19の軸は顕著で、底部まで流下している部分がある。また、底部内面にもみられる。18の軸は、胴部上位外面と底部内面に付着している。ともに猿投産で、18は折戸10号窯式、19は鳴海32号窯式のものと思われる。

22~24は鉄製品で、22・23は鉄鍔、24は刀子である。22は広身の短頸鍔であるが、茎が長い作りである。茎尻は欠損しており、まだ刃の下方につづく。刃部の形態は長三角形で、逆刺は欠損しているが、やや浅いと思われる。23も広身の短頸鍔で、棒状部は22以上に短い作りである。棒状部と茎の境は直角の向間に作り出されている。刃部の形態は三角形である。25は石製紡錘車である。石材は滑石である。上面に放射状の線刻がある。また、線刻は側面中位にもあり1周している。線刻を観察すると、溝は浅く、ふらついている。やや不明瞭であるが、意図的なものと思われる。

遺物量は多く、竪穴全体に分布している。とくに旧カマド内と新カマド左前方に多い。旧カマド火床部上からは底部の抜けた土師器壺14が正位で出土し、その中からは土製支脚が出土した。なお、この土製支脚は非常に脆く、崩れやすいため実測していない。14の上部には、土師器皿片12があり、その近く、14からは上部前面にずれた状態で、ほぼ底部の抜けた須恵器壺17が正位で出土した。また、土師器杯1は、左袖に接して横向きであるがやや伏せた状態で出土した。さらに、右袖の上方では、須恵器壺片16が出土した。

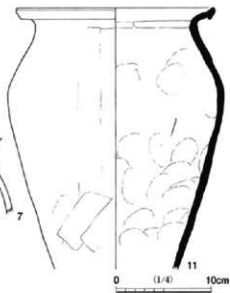
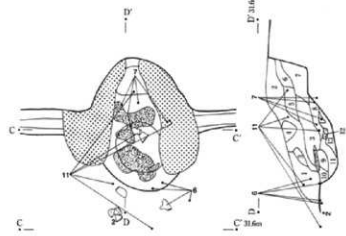
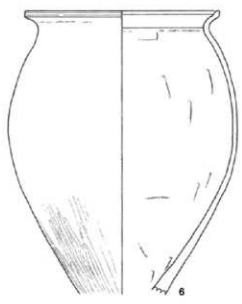
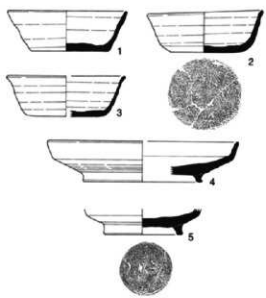
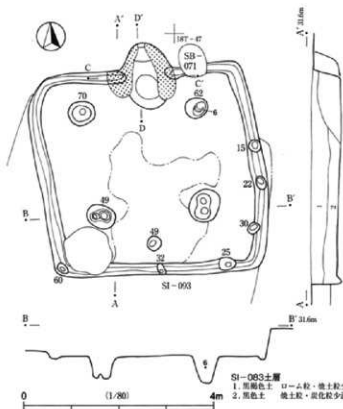
旧カマドの右外側の位置からの出土であるが、土師器杯皿が正位の3枚重ねの状態でも出土した。下が土師器杯3、中が土師器杯2、上が土師器皿11である。3・11は破片の一部が竪穴内からも出土している。3の破片の出土層位は床面と中層、11の破片の出土層位は中層である。3の体部外面には「丈」と思われる正位の墨書がある。この部分は接合しているが、意図的に割られた可能性がある。また、11も口縁・体部の一部が小さく弧状に割れている部分がある。この部分は接合して、実際の欠損部はわずかであるが、接合している小破片部の外面に墨書があると思われる。割れた部分は打ち欠きされた可能性がある。2の接合部分も打ち欠きされた可能性があり、また、被熱により、外面に黒ずみがあり、内外面の器面が荒れている。竪穴のプラン外ではあるが、旧カマドに近い位置であり、土層を考慮すると、本竪穴住居跡に伴う土器群としてよいと考える。出土状況からは、原位置を保っており、SD-018の影響を免れているといえよう。カマド外の棚状部分に置かれた可能性もある。以上の3点の土器と旧カマド内から出土した遺物の多くは、出土状況および土器の状態から、カマド座乗の祭祀行為に伴う遺物と考える。なお、カマドの左外側からも鉄鍔23が出土しており、これも本遺構に伴う可能性がある。ただし、やや離れて出土しているので、カマド座乗の祭祀に伴う遺物かどうかは断定しがたい。須恵器高台付杯(盤?)13と須恵器甗21も旧カマド外方からの出土であるが、小片で、上層から出土しており、SD-018によって移動している遺物と思われる。本来は本竪穴内に属する可能性があると考え、本項で掲載する。

その他に図示した遺物の出土層位は、床面から上層におよぶ。上層から出土した遺物もあるが、下層から出土した遺物の方がやや多い。石製紡錘車25と比較的遺存のよい須恵器杯8が、床面から出土した。

図示しない土器片の点数は1,320点、重さは8.1kgである。

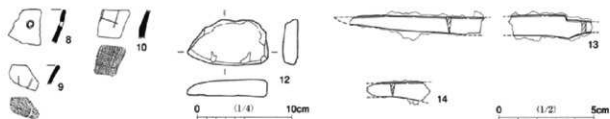
SI-083 (第258・259・469図、図版54・261・262・311・317・335)

遺跡南部中央やや西寄りの18T区に位置する。4.4m×4.8mの方形をなし、深さは0.59mである。主軸はN-E-Wである。北辺にカマドをもつ。北壁側を除いて大きくSI-093と重複し、本竪穴が切っている。逆に、SB-071によって、部分的に切られている。主柱穴4か所と出入口部の小穴をもつ。壁溝は全周する。壁柱穴が、東壁南半部に3か所、南壁に3か所みられる。間隔は東壁部分が密で、1m前後、南壁側は1.4mと2.1mである。SI-093の堆積土を壁としてもつ部分が軟弱であるため、壁を保護する板を支える必要から、壁柱穴が設置されたものと思われる。しかし、西壁側でみられない点が疑問である。床の硬化面は、中央から南壁側にかけて広がっている。カマド内は床面とはほぼ同じ高さのところが、被熱により赤



- SI-083カマド
1. 褐色土 ローム殻・焼土殻・山砂殻や中多
 2. 黒褐色土 山砂殻や中多・焼土殻・炭化殻少
 3. 灰白色砂質土
 4. 黄褐色土 山砂殻多
 5. 褐色土 山砂殻多・ロームブロック・焼土殻少
 6. 黄褐色土 山砂殻多
 7. 暗褐色土 ロームブロック・山砂殻少
 8. 黒褐色土 焼土殻・山砂殻や中多
 9. 黒褐色土 焼土殻や中多・山砂殻・炭化殻少
 10. 暗褐色土 ローム殻・山砂殻や中多・しまりが有る
 11. 暗褐色土 山砂殻多・焼土殻や中多
 12. 焼土ブロック
 13. 黄褐色土 山砂殻多量・しまりが有る

第258図 SI-083 (1)



第259図 SI-083 (2)

色化および硬化しており、その下部にも土層が堆積しているが、最終的な火床面と思われる。その下部の底面は床面よりもかなり深い。灰のかき出しによる結果が、当初の掘りかたのどちらか、または双方が考えられる。カマド内中位の山砂層（3層）は、天井部の崩落によるものである。掘りかたは四隅がとくに深く、貼り床が施されている。堆積土は黒色土・黒褐色土主体で、ローム粒が少なく、自然堆積と思われる。

図示した遺物は14点である。1～3・8～10は須恵器杯である。ただし、1は、色調が赤褐色の部分も多く、土師器の可能性もある。底部に重ね焼きと思われる痕跡があるが、色調の差が通常と逆の部分があり、二次的に火を受けていることから、重ね焼き痕が断定しがたい。器面は荒れている。2は口縁部周囲の1/2弱を欠くが、比較的遺存のよい土器である。2・3は千葉産の須恵器で、1が須恵器であるならば、これも千葉産である。8も千葉産の須恵器で、体部に焼成後の穿孔がある。9・10は新治窯産の須恵器で、9は体部外面に2条の線刻があり、10も体部外面に2条線と1条線が交差する線刻がある。10は欠損部にもう1条の交差線がある可能性があり、「井」状の記号になるかもしれない。器面は磨耗して、線刻のある部分は平坦である。

4は須恵器高台付盤、5は須恵器高台付杯で、ともに新治窯産である。5の底部外面に、記号と思われる線刻がある。浅く刻まれており、やや不明瞭であり、文字には見えない。拓影図の下側に位置する。

6・7は土師器甕で、6は常総型、7は「房総」型の甕である。6は胴部外面下位の一部分に、黒斑がある。また、胴部外面の中位からやや下った部分の器面は、剥離が著しい。7も器面が荒れている。

11は須恵器甕である。火を受けており、かなり赤みの強い色調であるが、当初から黄色味を帯びた褐色の色調と思われる。内外面とも荒れている。外面は、荒れとナデ・ヘラケズリにより、タタキ目はほとんど認められないが、内面に当て具痕がみられるため、タタキが施されたことがわかる。平行タタキと思われる。

12は砥石である。石材は砂岩である。ほぼ全面的に磨られているが、図示した右側の短側面は凹凸があって、あまり磨られていない。13・14は鉄製品で、刀子である。14は切先が遺存している可能性もあるが、錆による剥離のため判然としない。

遺物の出土量は多く、堅穴全体から出土している。出土層位は床面から上層にわたるが、中・上層から出土する遺物が多い。図示した遺物の中では、2がカマド前の床面から、3片に割れているが、正位で出土している。また、6は大型の破片が北東側の柱穴内下層から出土している。ただし、6は一部の破片が中・上層からも出土している。図示しない土器片の点数は2,032点、重さは16.6kgである。

SI-085 (第260・469図、図版55・263・311・317)

遺跡南部中央やや西寄りの18T区に位置する。3.2m×3.6mの隅丸方形をなし、深さは0.3mである。主

軸はN-12-Eである。北辺にカマドをもつ。SD-066と重複するが、新旧関係は不明である。確認面の upper 層に黒色味が強い部分があったため、北壁および南東隅・南西隅を掘り過ぎてしまった。確認面から床面までやや浅く、床面はソフトローム層中にある。掘りすぎたこともあって、不整形な形態であるが、階部はやや丸みをもつのであろう。出入口ピット・支柱穴は検出されなかった。壁溝がほぼ東半分を回り、西半分にはみられないため、本来存在しないものであったと思われる。東壁北側の壁溝内にピットが2か所ある。中央のピットの深さが11cm、北東隅のものが14cmと浅く、数も少ないため、壁柱穴かどうか不明とする。中央部の床面はかなり硬化している。カマドの遺存はあまりよくない。火床部は薄く赤くなっている程度である。火床部下底面は床面よりも深い。灰のかき出しにともなうものであろう。右袖脇に床面よりも17cm深いピットがあるが、本壁穴には伴わないピットと思われる。周囲に中・近世のピットがあるため、その時期のピットの可能性がある。炭化材・焼土が、中央部床面上から集中して出土した。建物が仮却されたものである。

図示した遺物は11点である。1～5はロクロ成形の土師器杯である。2はまったく割れていない完形の土器である。1は口縁・体部の一か所が口縁部間で2/5程度と大きく欠損し、また、その反対側の口縁部も小さく割れているが、こちらは接合している。ともに打ち欠きの可能性が高いと考える。5は何片かに割れており、欠損部もある。意図的な破損か即断できない。4は火を受けて、器面は著しく荒れ、ざらついている。2・5の器面も荒れており、5の底部外面は広く剥落する部分がある。6はロクロ成形の土師器高台付皿で、これも器面の荒れが著しい。

7は「房籠」型の土師器壺である。胴部外面は山砂が多く付着している。

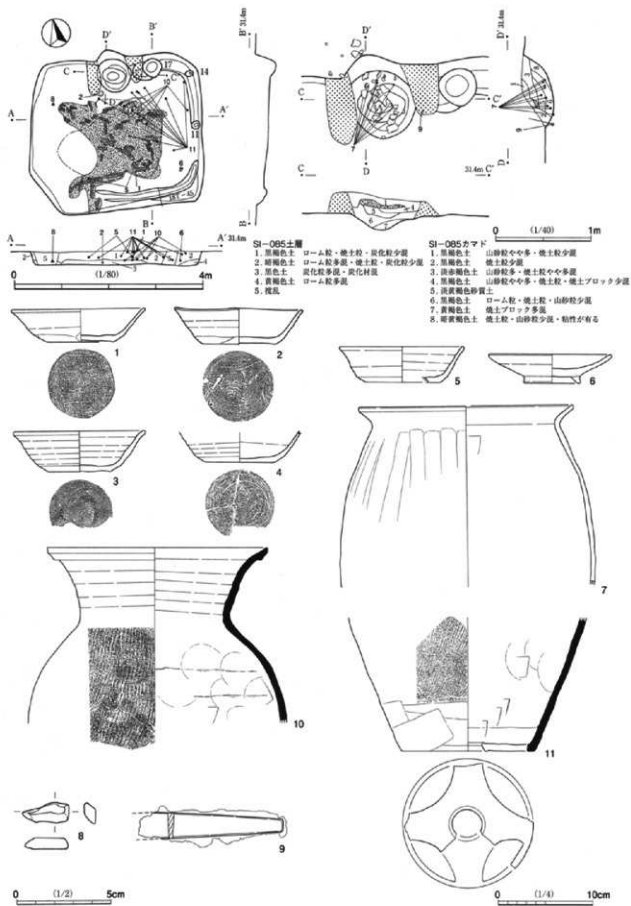
8は砥石で、石材は砂岩である。もとは、長さがあったと思われるが、割れて小片となっている。9は鉄製品で、刀子の茎である。かなり大型の製品である。

10は「葉産」の須恵器壺である。11頸部が長く、胴部がふくらむ器形である。色調は暗灰色と褐色が混在する。胴部外面上位が荒れている。11は「葉産」の須恵器瓶で、五孔式の底部である。色調はやや黄色味を帯びた灰色である。

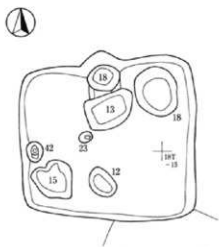
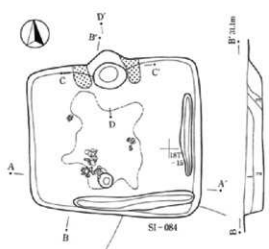
遺物は壁穴全体から出土しているが、西壁・南壁階がやや希薄であり、カマド内とカマド右前方に若干多い。出土層位は、床面から確認面までおおよそ、カマド内外の遺物を見ると、まず、2がカマド左袖前側の床面から倒れて出土した。一方、南壁側中央からは、5の主要部分と1が2枚重ねの正位で出土した。1が下、5が上である。1・5は床面よりもやや高い位置からの出土であるが、2とセットの可能性があると考える。その他、7がカマド内下層から出土し、10は中央やや奥側から下層を主体として出土した。また、11はカマド前方を主体に中層・上層から出土した。また、9はカマド右袖前の床面から出土した。さらに、右前側下層からは6が出土している。図示しない土器片の点数は383点、重さは1.3kgである

SI-086 (第261・262・469図、図版55・56・263・307)

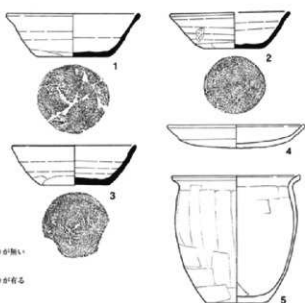
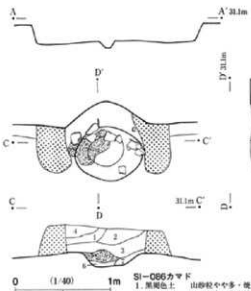
遺跡南部中央やや西寄りの18T区に位置する。3.4m×3.7mの方形をなし、深さは0.39mである。軸はN-2-Wである。北辺中央にカマドをもつ。南壁側やや左(西)寄りに出入口部の小穴をもつ。南東側で、SI-084を切っている。壁溝は、東壁中央付近と南西隅部を除く南壁でみられるが、北壁・西壁周辺は認められない。南壁東端はSI-084と重複する影響で、やや掘り過ぎていていると思われる。床面は、ハードローム層とソフトローム層の境付近まで掘り込まれて、作られている。床面中央部は硬化している。カマドは、南袖間が広いが、内壁の残りが悪いためであろう。火床部は、左袖間寄りに、焼土が厚く堆積し



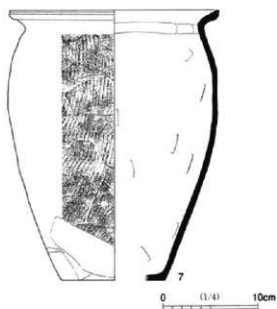
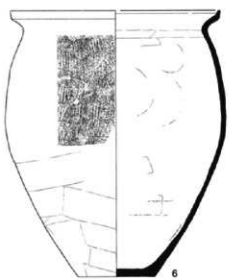
第260図 SI-085



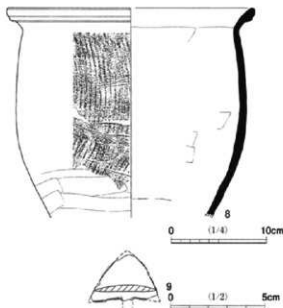
SI-065土層
 1. 黒褐色土 ローム粒・焼土粒少混
 2. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒・灰化粒少混
 3. 暗褐色土 山砂粒少混



SI-066より下
 1. 黒褐色土 山砂粒やや多・焼土粒少混・LとRが無い
 2. 暗褐色土 山砂粒多・焼土粒少混
 3. 灰白色砂質土
 4. 暗褐色土 山砂粒多・焼土粒やや多混・LとRがある
 5. 暗褐色土
 6. 黄褐色土 ローム粒多・山砂粒やや多混
 7. 灰白色砂質土
 8. 黒褐色土 ローム粒・山砂粒やや多・焼土粒少混



第261図 SI-086 (1)



第262図 SI-086 (2)

口縁部内面の器面が一部剥離している。

5は「房総」型の土師器甕で、小型品である。6～8は千葉産の須恵器甕である。6は胴部外面に平行タタキがみられるが、口縁部の立ち上がりや底部の小ささなど、器形が土師器甕に似ている。調整手法も、底部外面は手持ちヘラケズリが施され、胴部内面も当て具の痕跡を消すようにヘラナデが施されている。遺存が悪いため不明瞭であるが、ヘラナデは下位に顕著なようである。タタキ目もナデによってかなり消されている。胎土も黒雲母を多く含む点特徴的である。須恵器の焼成・技法に土師器的様相が混在する土器である。7は遺存のよい土器である。内面にヘラナデが施されている。色調はやや黄色味を帯びるものの灰色味がかなり強い。ただし、胴部外面には山砂が部分的に付着し、火を受けて、一部で褐色味が強くなっている。8は暗灰色・黒灰色の色調が卓越するが、胴部外面の一部は赤褐色の色調である。器面も胴部外面中・下位は荒れている。

9は鉄鏝で、刃部の破片である。広身の鉄鏝で、刃部の形態は幅広の三角形である。刃部からつづく棒状部がわずかに遺存している。短頭の鉄鏝と思われる。刃部と棒状部の境はわずかに挟れている。

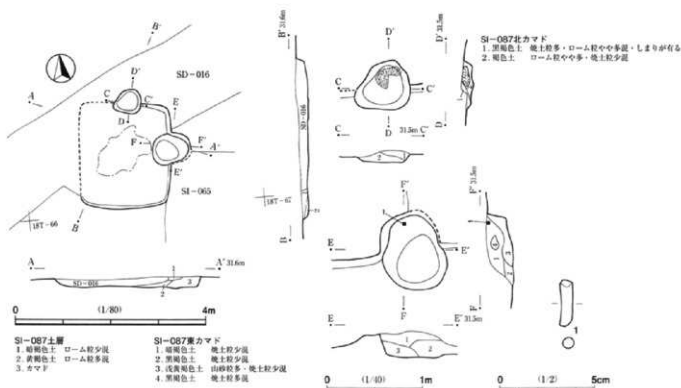
遺物の出土は中央部に多く、東壁側が少ない。7は中央部やや南寄りの床面からまとまって出土した。その近くからは6・8も出土している。6の破片の多くは出土層位がやや高く、8も一部は床面であるが、一部はやや高い位置からの出土である。5も一部は散っているが、まとまった破片が中央部床面から出土した。その他、2の主要部と3が床面から出土した。2の破片は高い位置からも出土している。その他に図示した1・4・9は、床面よりも高い位置での出土(第469図)である。図示しない土器片の点数は498点、重さは5kgである。

SI-087 (第263図、図版56・318)

遺跡南部中央やや西寄りの18T区に位置する。推定2m×2.2mの方形をなし、深さは0.19mである。主軸はN-97-Eである。北辺と東辺にカマドをもつ。北辺のカマドをこわした後に、東辺のカマドを造っている可能性があるが、ともに遺存が悪く、新旧は不明とする。なお、主軸方位は東カマドの方向で記述

ている。掘りかたは、北東隅部と南西隅部で深いが、北西隅・南東隅部はほとんど掘り込まれていない。カマド前にも窪みがあるが、灰のかき出しの結果と掘りかた底面の双方の可能性もある。堆積土は黒褐色土・暗褐色土主体であり、自然堆積と思われる。

図示した遺物は9点である。1～3は、千葉産の須恵器杯である。2は遺存がよいが、3はあまりよくない。3の器面はかなり荒れている。4は非ロクロの土師器皿で、畿内産と思われる。口縁部内面に沈線が施され、端部内面がふくらみをもつ。底部は大きく、体部との境が不明瞭である。底部外面には粘土紐巻き上げの様相が痕跡的にかがえ、作りがやや雑である。内面はナデが施されている。ヘラミガキ痕はみられない。橙褐色の色調で、焼成はややあまい。胎土は黒色粒・白色粒等の細砂粒を含むが、比較的緻密である。



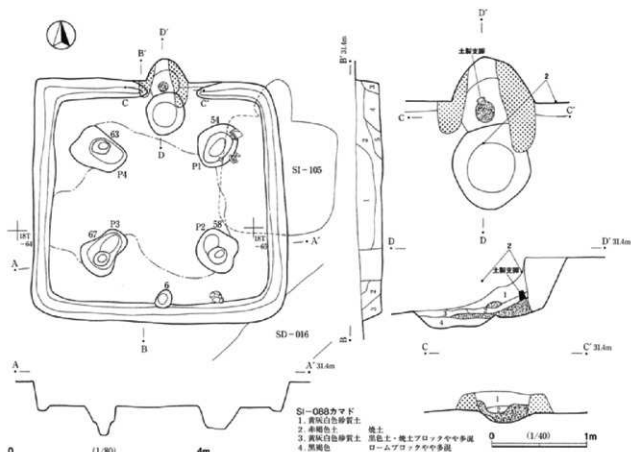
第263図 SI-087

した。東側で古墳時代中期の住居であるSI-065を切っているが、北西から南側にかけてSD-016に切られている。SD-016は西壁側および北壁側西寄りの壁・床面をこわしているが、あまり深くないため、中央部床面はかなり残っている。なお、床面の範囲はやや不明瞭である。確認面から床面までは浅く、壁溝は認められない。出入口ピットは検出されなかった。主柱穴は存在しないのであろう。床面は、中央部が硬化している。北カマドの構築材は遺存しないが、カマド内にやや厚い焼土の堆積がみられた。底面の焼けた痕跡は弱い。東カマドも構築材は遺存していない。カマド内の焼土の堆積はあまり多くないが、一部に集中的にみられた。

遺物は少量で、堅穴内に散在的に分布する。図示した遺物は土製品1点で、東カマド奥の確認面近くから出土した。棒状の土製品で、性格不明である。表面にひび割れがあり、脆く、火を受けていると思われる。図示しない遺物のなかに、ロクロ成形の土器器杯があるが、底径が小さく、口縁端部が開く形態のものであり、9世紀後葉以降のものと思われる。図示しない土器片の点数は146点、重さは1.3kgで、それほど多くはない。

SI-088 (第264・265・470図、図版56・57・263・307・309~311)

遺跡南部中央やや西寄りの18T区に位置する。5.2m×5.3mの方形をなし、深さは0.55mである。主軸はNである。北辺にカマドをもつ。主柱穴4か所と出入口部の小穴をもつ。東側北寄り部分で、SI-105に切られているが、本堅穴の方が深いため、床面・柱穴は残っている。ただし、本堅穴をSI-105に先行して調査したため、一部の遺物が混在している。また、南東隅部がSD-016に切られているが、本堅穴よりも浅く、壁の下部・床面は遺存する。壁溝は全周する。床面は、中央部を主体として硬化している。主柱穴はすべて内側から抜かれており、柱穴の規模が大きくなっている。P1の堆積土は、焼土と山砂が多量に入っていた。P2・P3間、出入口ピットから中央寄りの部分に、平面長方形の攪乱がある。掘りか

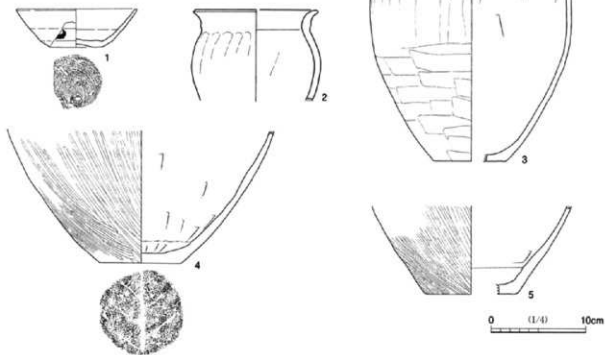


SI-068カマド

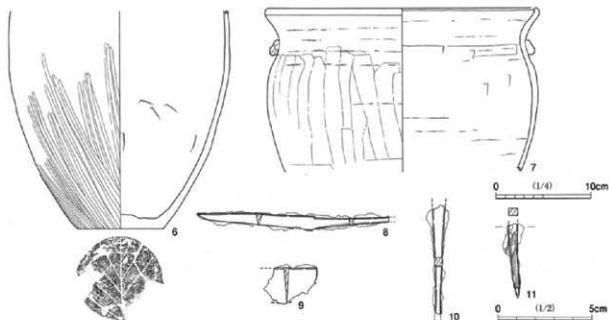
1. 黒褐色土 黄土
2. 赤褐色土 黄土
3. 黄褐色土 黄土・焼土ブロックやヤヤ多混
4. 黒褐色土 ロームブロックやヤヤ多混

SI-068土層

1. 黒褐色土 ロームブロック・焼土較少混
2. 赤褐色土 ローム較少混
3. 黄褐色土 ローム較少混
4. 黒褐色土 焼土多、山砂ブロック少混
5. 赤褐色土 山砂較少混



第264図 SI-088 (1)



第265図 SI-088 (2)

たは、四隅が深い。カマドは、全体に木の根が侵入しており、遺存状態はあまりよくない。しかし、底面は広く焼けており、赤色化している。また、右袖内側は焼けて、赤色化が著しい。土製支脚がカマド内に正立しているが、原位置をとどめるものと考ええる。その前側のとくに赤色化の強い部分が火床部である。カマドの前方が大きく窪んでいるが、灰のかき出しの結果であろう。堆積土は、黒褐色土・暗褐色土が主体で、ローム粒・ブロックの含有が少ない。自然堆積と思われる。

図示した遺物は11点である。1はロクロ成形の土師器杯で、体部外面に墨書があるが、遺存が悪く、判読できない。底径は小さく、底部調整は回転糸切り離し後無調整である。

2は「房総」型の土師器甕で、小型品である。3も「房総」型の土師器甕である。2と比較すれば、中型品といえよう。口縁部はほぼ遺存している。4～6は常総型の土師器甕である。4はやや大型の土器である。底部外面には、いずれも木葉痕がみられる。7は土師器甕である。甕としては大型の土器で、ずんぐりした作りである。口縁端部が内湾して、内面に稜がみられる。退化したボタン状の不整な把手が添付されている。1か所の遺存であるが、180度反対側にもう1つ存在すると思われる。新しい様相の土器である。

8～11は鉄製品である。8は刀子で、小型品である。茎尻を欠損するだけで遺存がよい製品である。9は穂摘み具の破片と思われるが、刃部が欠損しており、刀子の可能性もある。穂摘み具の場合、端部の破片であるが、孔の有無は判然としない。10・11は棒状の製品で、10・11は角釘または鉄鍔の茎などが考えられる。11は先端が遺存し、全体に木質が付着している。10は上部が太く、下部が細いことから釘と思われる。11は木質の付着状況から鉄鍔と思われるが、断定しがたい。

出土遺物は壑穴全体から出土している。SI-105内の遺物と混在しているため、遺物の分布は東壁際北寄りに多い。この点を割り引けば、むしろ壑穴は全体にやや希薄といえる。また、中央部もやや希薄である。図示した遺物もSI-105出土遺物と混在している。7は多くの破片がSI-105内に入り、土器の内容からもSI-105個の出土遺物といえよう。3もその可能性が高く、1もその可能性がある。

一方、6の破片のうちSI-105から遠い北西隅側のものは床面から出土しているが、北東側の破片はほぼ上層主体の出土である。6は本来、本竈穴内の遺物であるが、SI-105掘削のさい、北東側の破片が影響を受け、本来の位置よりも上方に移動したものと考える。2はカマド内からの出土である。4については、一部の破片がSI-105内から出土しているが、本竈穴から出土している破片の方が多い。また、5はSI-105に近いが、本竈穴内からの出土である。4・5は6とともに、常総型竈であり、本竈穴内に廃棄された遺物と考える。また、鉄製品4点についてはいずれも西壁側にあって、出土層位も床面・下層であるため、本竈穴出土遺物である。

以上をまとめると、2・4～6・8～11は本竈穴内の遺物であり、3・7はSI-105内に廃棄された遺物と理解できる。1については双方の可能性があるが、墨書をもつ土器である点から、SI-105と関わりが強いと考える。図示した本竈穴内の遺物の出土層位は、床面から上層におよぶが、床面・下層から出土する遺物が多い。図示しない土器片の点数は547点、重さは5.8kgである。

SI-089 (第266・267・469図、図版57・263・264・310)

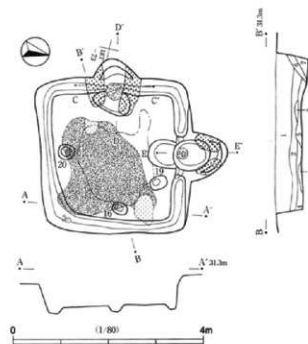
遺跡南部中央やや西寄りの18T区に位置する。3.2m×3.3mの方形をなし、深さは0.56mである。主軸はN-103°-Wである。北辺中央と西辺中央にカマドをもつ。西カマドは両袖が遺存するが、北カマドは方形プラン内に構築材が遺存しない。したがって、北カマドが古く、西カマドが新しい。出入口部の小穴が、南壁際中央、東壁際中央にあり、前者が北カマドに対応する古い小穴、後者が西カマドに対応する新しい小穴である。床面内には、北カマド右(東)側に深さ19cmのピットがあるが、本竈穴に伴うものか不明である。壁溝は全周する。床面中央部は硬化している。

西カマド両袖の構築材は山砂主体であるが、下部は暗褐色土とローム粒を含む。内壁は赤色化した部分がある。また、火床部も焼けて、赤色化している。北カマド廃棄後のカマドであるため、壁溝の上に造られている。火床部前方がやや窪んでいるのは、灰のかき出しに伴うものである。

北カマドは方形プランから、かなり突出しており、この部分に構築材が遺存している。火床部は赤く焼けて被熱部分が明瞭である。両側の壁溝を結ぶ一直線上に位置する点は、西カマドと同様である。火床部付近は、壁溝がなく、カマドが当初からこの位置に予定されたことがわかる。火床部前方の窪みは、西カマド同様、灰のかき出しに伴うものである。

掘りかたは、南西隅と南東隅で深い。また、北東隅もやや燻溝が広く、一部掘りかたであった可能性がある。床面上からは、広範囲に炭化物が出土し、焼土もブロック状にみられることから、家屋が焼却されたものと思われる。堆積土2層はローム粒が多く、それ以下は複雑に堆積することから、2層以下の土層については、焼却後に埋め戻されたものとする。1層については黒褐色土で、ローム粒の含有が少なく、自然堆積と思われる。

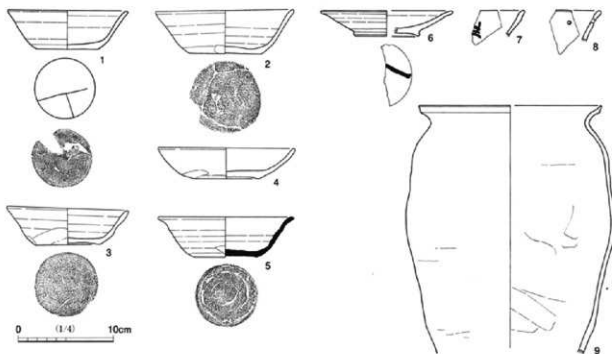
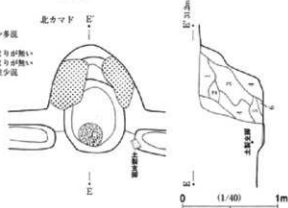
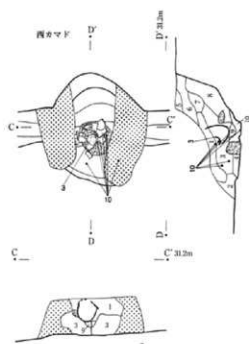
図示した遺物は14点である。1・2・3・4・7・8はロクロ成形の土器器杯である。なお、4は杯としたが、かなり浅く、杯と皿の中間的な器形である。また、3は外面は暗褐色の色調であり、内面もざらつくことから須恵器の可能性もある。しかし、断定しがたいため、可能性の指摘にとどめる。1の底部外面には、浅い線刻があり、2条線が「T」字状となっている。ただし、底部外面中央に、回転ヘラケズリの削り残しのわずかなふくらみがあり、1条がこのふくらみ部分にさえぎられて止まっている。よく見ると、ふくらみの上部にかすかに線刻がおよんでいるようにも思われる。やや判然としなが、「+」(×)を意図したものと考える。2は火を受けて、変色・荒れがいちじるしい土器である。支脚に転用された可



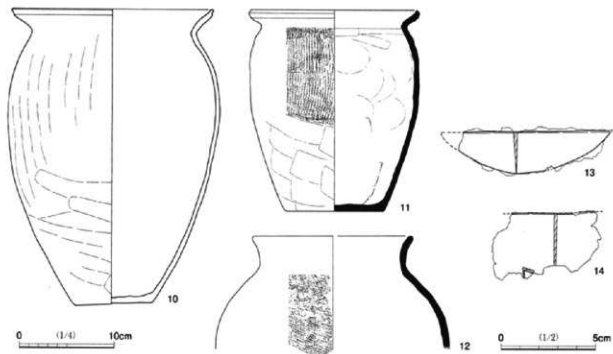
- SI-089 土曜
1. 黒褐色土 ローム粒・焼土粒・炭化粒少混
 2. 褐色土 ローム粒多混
 3. 灰褐色土 山砂粒多混
 4. 暗褐色土 ローム粒少混
 5. 暗色土 炭化粒多混
 6. 灰褐色土 ローム粒・山砂粒多混
 7. 暗褐色土 ローム粒少混

- SI-089 北カマド
1. 黒褐色土 ローム粒やや多混
 2. 褐色土 ローム粒多・炭化粒やや多混
 3. 黄灰白色砂質土
 4. 黒褐色土 焼土ブロック多混・しまりが無い
 5. 灰赤褐色土 焼土ブロック多混・しまりが無い
 6. 暗褐色土 山砂粒やや多・ローム粒少混

- SI-089 西カマド
1. 黄灰白砂質土
 2. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少混・しまりが無い
 3. 褐色土 焼土粒少混
 4. 黒褐色土 灰多・山砂粒やや多・焼土粒少混
 5. 黒褐色土 山砂粒少混
 6. 暗褐色土 ローム粒やや多混
 7. 暗褐色土 山砂粒多・焼土粒少
 8. 黒褐色土 焼土粒・山砂粒多混・しまりが無い
 9. 黒褐色土 焼土粒やや多・山砂粒少混
 10. 暗褐色土 山砂粒多・焼土粒少



第266図 SI-089 (1)



第267図 SI-089 (2)

能性がある。3は口縁・体部の一部が丸みのある三角形に欠損するが、その他は遺存し、割れもない土器である。欠損部は打ち欠きされたものと考え。割れ口断面の下部は磨滅しており、欠損部以外が割れないように、ていねいに打ち欠きされたものであろう。4はやや遺存のよい土器である。内面は荒れて、ややざらついている。7は口縁部片で、体部外面に正位の墨書がある。「任」・「生」・「主」・「住」等が考えられるが、遺存が悪く、判読不明とする。8も口縁部片で、体部に径4mm弱の穿孔がある。穿孔はていねいで、破損しないように注意深く行われている。

5は千葉産の須恵器杯である。底部外面には、粘土紐巻上げの痕跡が明瞭にみられる。6はロクロ成形の土師器皿である。底部が突出しており、また、中央がへこんでいることから、高台付皿と大差のない土器である。底部外面に墨書があるが、遺存が少ないため、判読できない。

9は常総型の土師器甕である。胴部下位に接合痕が7～8条残り、器面の凹凸が著しい。また、外面下位のヘラミガキは不明瞭で、ほぼナデ調整である。胴部外面上位に平行タタキかと思われる痕跡がかすかにみられるが、ヘラミガキとも思われ、断定しがたい。かなり雑な作りの土器である。10は「房総」型の土師器甕である。胴部から底部までの所々を欠損するだけで、甕としては非常に遺存がよい。胴部外面中位から下位にかけての一部が、灰白色に変色している。底部外面は手持ちヘラケズリが施されている。

11は千葉産の須恵器甕である。黒褐色・暗赤褐色の色調であるが、火を受けて赤みを帯びている部分がある。12は千葉産の須恵器甕である。色調はやや黄緑色を帯びた灰色である。

13・14は鉄製品である。13は徳摘み具で、やや小型の製品である。片側の端部を欠損するだけで、遺存がよい。孔がX線写真でもみえないが、小型品のため、存在しないのであろうか。背側端部が図示した面の向こう側に若干曲がっている。14は薄い板状の製品であるが、性格不明である。図示した上部端部は欠損していない。ほかは欠損していると思われるが、薄いため、やや不明瞭である。全体に凹凸があり、図

示した下脛はやや強く曲がっている。図示した面の下側に木質が付着しているが、その他の部分にも、繊維質の付着がわずかにみられる。

10は西カマドの火床部上から正位で出土した。西カマドの廃棄に伴って、使用されていた壺が遺棄されたものである。また、10の上部からは、3が正位で出土した。3と10はカマド廃棄の祭祀に伴う土器のセットと考える。なお、3・10の上部には、天井部等が崩れた山砂が堆積しており、天井部が破壊された可能性も考えられる。その他、西カマド周辺では、2の主要な破片が、右袖脇の下層から出土した。

北カマド内および前方からは、9が出土した。カマド内以外は下層～上層の出土である。11も北カマド前から中央部にかけて、ほぼ下層から出土している。また、土製支脚が北カマド右側の下層から、横倒しの状態で出土している。西カマドまたは北カマドで使用された土製支脚が、もとの位置からはずされて、旧カマド脇に置かれたものであろう。なお、この支脚については、脆く図示できなかった。カマド周辺以外では、4が南西隅部の床面から正位で出土した。

遺物量は多量で、堅穴全体に散っている。また、出土層位も、図示した遺物の様相をみると、床面から上層にわたっている。図示しない土器片の点数は813点、重さは7.2kgである。

SI-090 (第268・469図、図版58・312・314)

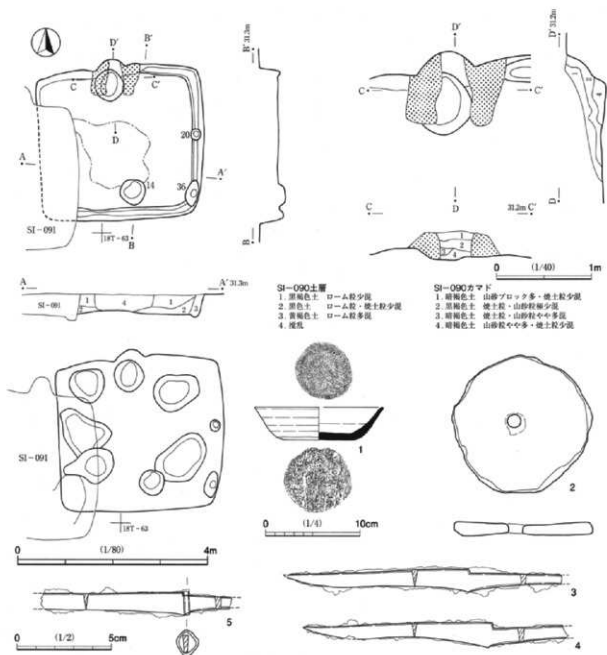
遺跡南部中央やや西寄りの18T区に位置する。3.2m×3.2mの方形をなし、深さは0.5mである。主軸は北である。北辺にカマドをもつ。西側は、SI-091に切られている。出入口部の小穴をもつ。壁溝はSI-091に近い北西隅で不明瞭であるが、他は重複部分を除いて、廻っている。本来は全周すると思われる。東壁の壁溝に2か所のビットがあるが、本堅穴に伴うものか、不明である。床面中央部が硬化している。カマドは、攪乱も入って、かなり崩れている。とくに左袖の遺存が悪い。しかし、遺存している両袖の内壁が、赤く焼け残っている部分もある。また、火床部も全体に若干赤色化している。火床部底面はやや深いが、灰のかき出しの結果か、掘りかた底面である。掘りかたは、壁側が中央部よりも掘り込まれ、とくに四隅はやや深い。堆積土は黒褐色土・暗褐色土主体で、ローム粒の含有が少なく、自然堆積と思われる。

図示した遺物は5点である。1は新治窯産の須恵器杯で、器面全面が磨滅している。また、一部赤みを帯びており、火を受けたものと思われる。底部内面に「+ (×)」の線刻があるが、交差部分が消えている。2は土製紡錘車である。土器片が転用されたものであるが、もとの器種がわかりにくい。新治窯産の須恵器杯の底部片かと思われるが、大型の土器常総型壺の胴部片であるようにも思われる。穿孔ははいで、図示した上面側の孔周囲に磨耗が認められる。この面はわずかに凹面となっており、紡錘車の上面と思われる。側面の一部は磨滅している。3～5は、いずれも鉄製の刀子である。5は切先と茎尻を欠くが、鋼が遺存している。

出土遺物は堅穴全体に散っているが、少量で分布密度は低い。図示した遺物の出土層位をみると、2が床面、4は下層、5が掘りかた底面から出土したが、3は中層、1は床面から上層におよんでいる。図示しない土器片の点数は154点、重さは1.2kgである。

SI-091 (第269図、図版58・264・310)

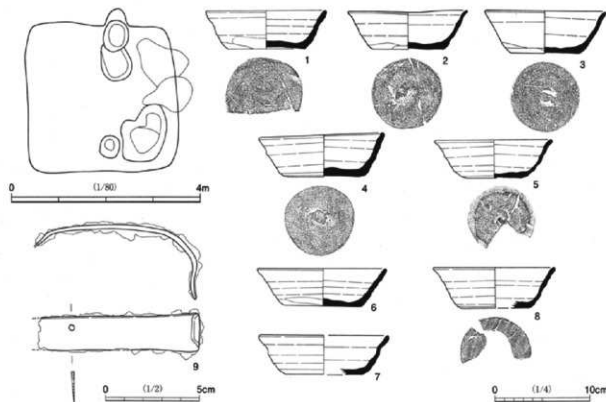
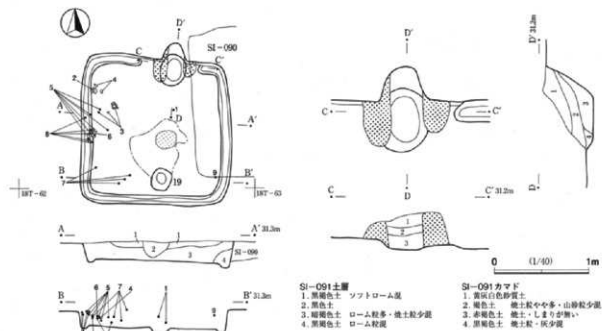
遺跡南部中央やや西寄りの18T区に位置する。3.1m×3.2mの方形をなし、深さは0.48mである。主軸は北である。北辺やや東寄りにカマドをもつ。出入口部の小穴をもつ。東側がSI-090を切っている。壁溝は全周する。床面はハードローム層まで掘り込まれ、硬化面が出入口ビットから中央にかけてみられる。また、ほぼ中央部に焼けた部分がある。カマドの構築材は山砂に暗褐色土が混じり、両袖内壁は焼けて、



第268図 SI-090

赤色化している部分がある。また、煙道部の壁も焼けて赤色化している。カマド前方には、若干の窪みがあり、ロームブロック・灰を含む黒褐色土が堆積している。窪みは、灰のかき出しによってできたものである。掘りかた底面は、南西隅部が深い。堆積土は、下層にローム粒の含有がやや多いが、自然堆積の可能性のほうが高いように思われる。

図示した遺物は9点である。1～8は千葉産の須恵器杯である。このうち、3の色調は褐色であり、底部にヘラ切りの痕跡が残ることから須恵器とわかるが、ヘラ切り痕がなければ、土師器と扱われる可能性の高い土器である。器面はやや荒れており、内面の一部にひび割れがみられる。かすれているが、口縁部内面に油煙と思われるところが、3か所あり、灯明器と思われる。2はほぼ完形、3・4も遺存良好である。8は底部外面に、1条の線刻がみられるが、底部の遺存が悪く、それ以上は不明である。



第269図 SI-091

9は鉄製品で、穂摘み具が曲げられたものである。片側に目釘孔が確認できる。もう一方の端部にも目釘孔があると思われるが、錆に覆われている。目釘の一部も残存していると思われる。

遺物の平面分布は、東西壁側・カマド前方にやや多い。図示した遺物の垂直位置をみると、床面から出土したものは無い。しかし、西壁際中央からやや北寄りのところで、遺存のよい個体を含む須恵器杯群が出土している。出土遺物の多くは、堆積土がある程度堆積した後に廃棄されたもので、とくに西側では、

まとまって廃棄されたのであろう。図示しない土器片の点数は256点、重さは2kgである。

SI-092 (第270・470図、図版59・264・265・309・318)

遺跡南部南東端斜面の20V区に位置する。3.2m×3.7mの方形をなし、深さは0.43mである。西辺にカマドをもち、主軸はN-111'-Wである。本竈穴の北側がSI 081・SI-094を切っている。出入口ピット・支柱穴は検出されなかった。壁溝は北・東・南の三壁で巡るが、カマドのある西壁と南西隅部が巡らない。緩斜面に位置するが、床面はほぼ平坦である。床の硬化面はあまり明瞭でないが、中央から南側にかけての床面が、やや硬化しているようである。カマド構築材は山砂を主体とし、左袖下部・右袖は硬質である。火床部底面は赤く焼けており、その上部にも焼土層が堆積している。堆積土下層は褐色味の強い土層であり、壁と床面の検出に手間取った。

図示した遺物は9点である。1・2は千葉産の須恵器杯である。色調は、1が黒色、2がおおむね灰色である。2の底部は褐色の色調が混じり、断面内部も褐色である。3は須恵器高杯(盤)である。焼成は良好、色調はやや暗い灰色である。胎土に粒径の大きな小石を多く含み、寛的な胎土である。また、器壁も厚い。脚部には、方形の透かしを意図した縦2条1セットの切り込みが二か所ある。この二か所の切り込みセットは正反対の位置からややずれている。切り込みの深さは2mm弱くらいで、かなり浅い。胎土・技法から新治窯産と考える。なお、透かし孔が認められないことは、退化した様相と理解でき、新治窯の須恵器高杯(盤)の中でも後出するものであろう。

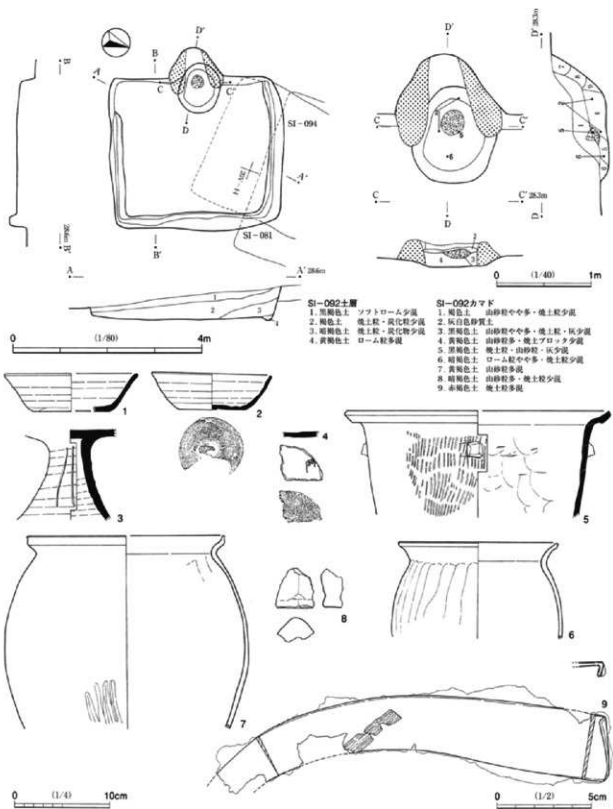
4は千葉産の須恵器甕の底部片である。外面に「門」と思われるへら書きがある。5は千葉産の須恵器甕である。方形の小突起が付く。器面は黒色、断面内部は褐色の色調である。6は「房総」型の土師器甕で、口縁部の遺存がよい。外面の一部に剥離がみられる。胴部下部・底部と思われる破片もあるが、小片のため図化していない。7は常総型の土師器甕である。

8は上製品である。平面図側の裏側は割れていると思われる。平面図の下の面は平坦であり、底面であろうか。平面図の左右の面は褐色の色調であるが、裏側と底面の大部分は赤褐色の色調である。瓦塔の茶垢の可能性があるかもしれないが、器壁が厚すぎるように思われ、断定しがたい。9は鉄製の鎌である。先端部を欠くが、遺存のよい製品である。一部に木質が付着している。切先側にも痕跡がみられ、裏面の基部側にも付着している。基部側は筋膨れが著しい。

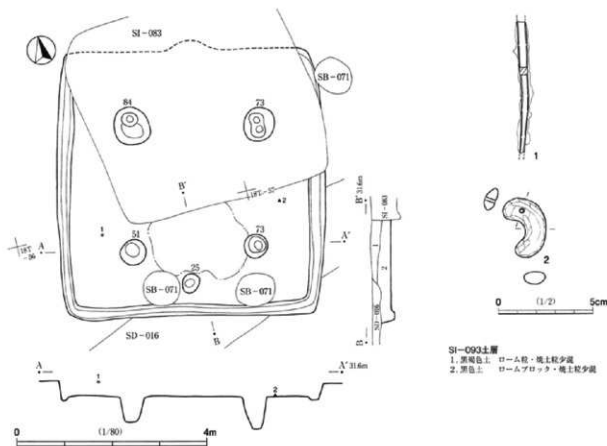
遺物は竈穴全体に分布し、とくにカマド内外に集中している。カマド内からは2・5が出土し、カマド前方からは6が出土している。また、中央部北寄りの床面からは9が出土した。図示した遺物の出土層位は、1を除いて、床面〜下層である。図示しない土器片の点数は789点、重さは5kgである。

SI-093 (第271図、図版59・60・308・314)

遺跡南部中央やや西寄りの18T区に位置する。5.7m×5.7mの方形をなし、深さは0.34mである。主軸はN-13'-Eである。支柱穴4か所と出入口部の小穴をもつ。北側半分程度を、SI-083に大きく切られている。しかし、支柱穴はSI 083床面よりも深いため、遺存している。また、南側はSD-016によって、壁の一部が切られ、SB-071にも部分的に切られている。北辺中央にカマドをもつと思われるが、遺存しない。壁溝はSI-083に切られる部分を除いて巡っており、本来全周するものとみられる。床面はハードローム層まで掘り込まれている。出入口ピットから中央部に向かって硬化しているが、硬化面は本来、支柱穴間に広がっていたものである。掘りかた底面は、南東隅・南西隅が中央よりも深く、四隅が深く掘り込まれたのであろう。堆積土は、黒褐色土・黒色土主体で、ローム粒・ブロックの含有が少なく、自然堆



第270図 SI-092



第271図 SI-093

積と思われる。

図示した遺物は2点だけで、少量である。1は棒状の鉄製品で、性格不明である。2は滑石製の勾玉である。扁平で、やや研磨が荒く、剣形模造品等の石製品と同種の製品である。

本竪穴出土物の大半は奈良・平安時代の土器片であるが、遺存のよいものがなく、図示できなかった。2は古墳時代の遺物であるが、土器破片のなかにも、わずかであるが古墳時代中期の土師器高杯脚部片や、内面にハケメをもつ土師器片がある。高杯脚部片は、輪に転用されたもので、近くに所在する古墳時代中期の小鍛冶工房であるSI-084から流入したものであると思われる。同様に、本竪穴の周囲には、古墳時代中期の竪穴住居跡SI-065や弥生時代～古墳時代前期の竪穴住居跡SI-068がある。ハケメをもつ土器片も、古い時代の竪穴住居跡の出土物が、本竪穴内に流入したのであろう。

一方で、数点ある古墳時代の遺物が本竪穴の時代を表すもので、奈良・平安時代の土器が、後に流入したものと見る見方もあり得る。しかし、本竪穴のプランは、周囲の弥生時代～古墳時代中期の竪穴住居跡とは、かなり異なっており、出入口ピットの存在からも、北辺にカマドをもつものと推測できる。遺物量の比からも、奈良・平安時代の竪穴住居跡とすることが妥当と考える。

遺物の出土量はあまり多くはないが、竪穴全体から散在的に出土した。土器片の点数は235点、重さは2.3kgである。

SI-094 (第272図、図版60)

遺跡南部南東端斜面の20V区に位置する。北側でSI-080・SI-081と重複し、SI-081を切っているが、

SI-080との新旧関係は不明である。また、南半部がSI-092に大きく切られている。そのため、南北の長さが不明である。東西は2.7mの長さで、小型の方形プランと思われる竪穴である。主軸は不明である。確認面から床面までは浅く、深さは25cmである。他の竪穴との重複が激しいため、カマド・出入口部の小穴は検出されず、主柱穴も検出できなかった。また、床の硬化面もみられない。

出土遺物は、少量の奈良・平安時代土器片で、内訳は千葉産の須恵器杯1点、千葉産の須恵器甕（または瓶）5～6点、新治窯産の甕（または瓶）1点、土師器常総型甕5～6点である。図示したものはない。

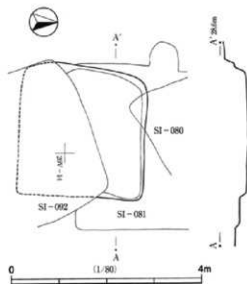
SI-095（第273・470図、図版60・265・308・312・315）

遺跡南部西端の17T区に位置する。5.3m×4.9mのやや縦長の方形をなし、深さは0.66mである。主軸はN-13°-Wである。北辺にカマドをもつが、やや右（東）寄りに位置する。壁溝は全周する。東壁に4か所の壁柱穴があるが、壁溝の底面から壁側に寄っており、壁も掘り込まれている。壁柱穴の深さは、いずれも壁溝底面から20cm前後と、ほぼ同じである。間隔は、中央に寄っている2穴（19cm・20cm）間が0.5m、北側の2穴（21cm・20cm）間・南側の2穴（19cm・18cm）間がともに1.45mで、規則性がある。周囲にも遺構があり、東壁側に特別な地盤の弱さほうがえない。壁柱穴と地盤の強度は無関係であり、上屋構造と関係するものであろう。主柱穴4か所と出入口部の小穴をもつ。竪穴の規模に対して、主柱穴間が広く、主柱穴と壁との空間が狭い。とくに北西側の柱穴P4は隅部に寄っており、主柱穴を結ぶ平面形は台形状である。主柱穴は規模が大きく、P3・P4近くの床面には、ロームブロックが堆積していた。竪穴の廃棄時に、柱が抜き取られたものとする。主柱穴・出入口ピット間の床面は硬化している。

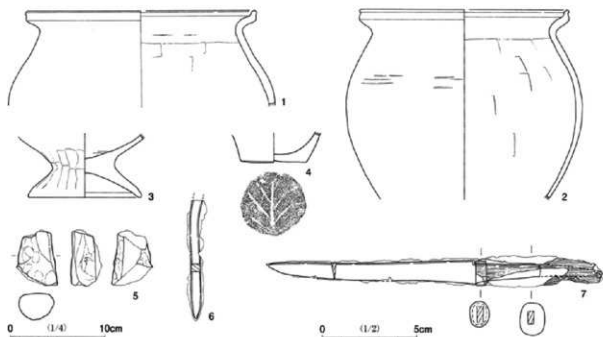
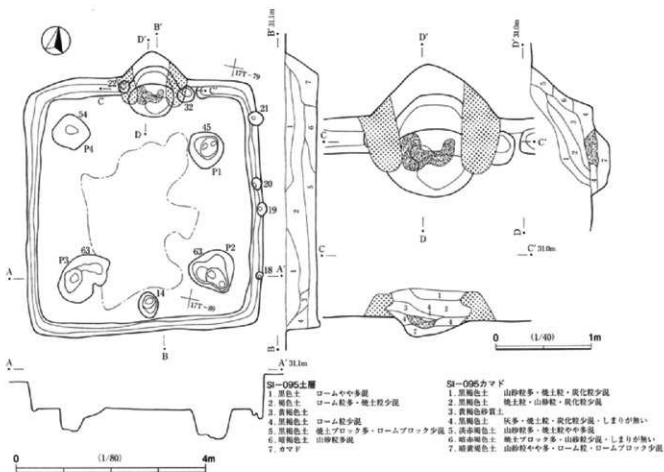
カマド構築材は山砂主体である。火床部上には、床面とほぼ同じ高さで、焼土が堆積し、その奥には炭化粒を多く含む層がみられる。煙道部の壁は焼けている。火床部下底面は、床面よりもかなり低い。灰のかき出しの結果、掘りかた底面である。両袖脇・下からピットが検出された。床面からの深さは、左袖側のピットが22cm、右袖側のピットが32cmである。右袖のピットは袖と半分弱の重なりであるが、左袖のピットはほぼ袖の下に位置する。カマド両袖脇のピットは、カマド部分の上屋構造に関わるものと思われるが、本竪穴の場合はやや疑問である。しかし、袖内壁・天井部がかなり崩れているとすると、この位置に柱が建つことが可能かもしれない。

図示した遺物は7点である。1・2・4は常総型の土師器甕である。4はやや小型の土器である。火を受けて赤色化が著しい。器面が荒れて、外面の調整は不明瞭である。3は土師器台付甕の底部破片である。内面はヘラナデが施され、ヘラの当たりが多く残る。器面は荒れており、外面の調整は不明瞭であるが、胴部外面にはヘラケズリによる稜がみられる。台部外面もヘラケズリが施されており、稜が認められるものの磨滅している。

5は性格不明の土製品である。図の上下は欠損しており、側面も一部、何かから剥がれたような部分が見られる（右図側面の白抜き部分）。それ以外の側面には、指頭痕が残り、手握ねの製品である。焼成は



第272図 SI-094



第273図 SI-095

照徹で、色調は褐色である。6・7は鉄製品である。6は断面方形の棒状品である。頭部を欠損するが、釘の可能性が高いと考える。7は刀子である。刃部から鉤、柄の木質まで、多くを遺存している。基尻側は欠損部分のみられるが、わずかに、基尻部分が遺存している。茎の欠損部分の周囲には、柄の木質が残っており、穴が開いた状態となっている。木質は穴の開いた部分で折れて接合しており、茎の欠損の影響を受けたものと思われる。

遺物の出土は多い。竪穴内から万遍なく出土し、層位も床面から上層にわたる。しかし、図示した遺物は少なく、遺存も悪い。出土遺物の多くは、周囲の建物から廃棄された破損品であろう。図示した遺物の出土層位をみると、7は床面から出土している。また、4が床面・下層から出土したが、その他は、上層出土のもの、または破片の一部が中・上層から出土するものである。図示しない土器片の点数は1,228点、重さは10kgである。

SI-096 (第274図、図版61・265・312)

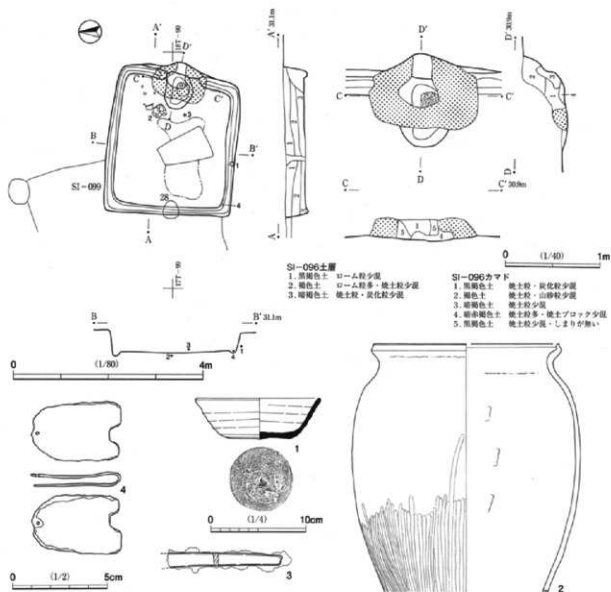
遺跡南部中央やや西寄り18T区に位置する。3.1m×2.7mのやや縦長の方形をなし、深さは0.46mである。主軸はN-100°Eである。東辺にカマドをもつ。西側でSI-099と重複しており、新旧関係については遺物の様相からは断定しがたい。重複により、床面中央部が攪乱されている。塋溝は全周する。床面からの深さ28cmのピットが、西壁の塋溝中央部分にある。壁に近すぎることが難点であるが、本竪穴の出入口ピットの可能性がある。しかし、このピットはSI-099の主柱穴の可能性もある。SI-099の主柱穴の様相が不明瞭であり、どちらか断定しがたい。壁は垂直に立ち上がり、床はハードローム層まで掘り込まれている。床面中央部に化粧面がある。カマドの前天井は直下に落ちており、構築材がよく遺存している。そのため、土器掛け口の位置が理解できる。構築材は山砂上体であるが、下部は暗褐色土を含む。内壁は、土油がやや崩れているが、土油と落下した前天井は、よく焼けて赤色化している。また、火床部も焼けて赤色化している。掘りかた底面は、北東隅と北西隅が深い。

図示した遺物は4点である。1は千葉産の須恵器杯である。色調は、外面の一部と断面内部が褐色であるが、他は黒色である。体部下端の回転ヘラケズリは、底部周縁に施されたともいえる。2は常総型の土師器甕で、底部を欠くが、口縁部はほぼ遺存する。色調は淡黄褐色であるが、胴部内面中位以下は、やや黒ずみがある。3は鉄製品で、刀子の茎である。基尻が遺存している。4は金銅製の帯金具で、鉤付である。

遺物は散在的な出土である。4は南西コーナー寄りの床面から出土した。1は南壁中央部の塋溝上下層から、かなり傾いた正位の状態で出土した。また、2はカマド左袖部の前方の床面から、つぶれた状態で、ほぼまとまって出土した。3はカマド前方の床面から出土した。図示しない土器片の点数は394点、重さは1.3kgである。

SI-097 (第275図、図版61)

遺跡南部南東寄り斜面の20U区に位置する。斜面に立地するため、検出は北側部分一部である。南側半分以上は、土砂の流失および耕作等により失われた。北辺一辺が5mの規模で、北壁部分の深さは0.45mである。形態は方形であるが、縦長横長等は不明である。カマド・出入口ピットは検出されなかった。周囲の竪穴住居跡の様相をみると、西カマドになる可能性が高いと思われるが、東方のやや離れたところに東カマドの竪穴住居跡もある。西カマドの場合、主軸方位はN-108°Wである。塋溝が北壁から北東隅にかけて走り、東壁につづく様相がうかがえる。西壁は巡っていないが、有無は不明とする。北東隅の塋溝



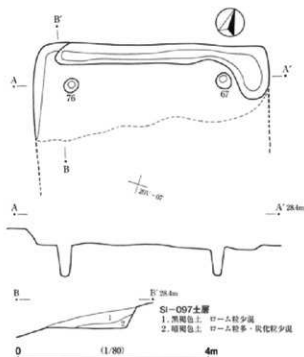
第274図 SI-096

の幅を広くとらえているが、この部分の掘りかたが深いことの影響を受けている。主柱穴があり、北側の2か所が遺存している。北東隅・北西隅に近い位置にあり、柱穴間が広い。堅穴の遺存は悪いが、中央部の床は平坦で、やや硬化しているように思われる。堆積土は黒褐色土主体で、下層にロームがやや多いが、上層は少ない。自然堆積と思われる。

出土遺物はごく少量の奈良・平安時代土器片で、図示したものはない。点数は18点、重さは100gである。土師器常総型甕、須恵器新治窯産の甕・杯、千葉産の須恵器杯、ロクロ成形の土師器杯と思われる土器片が出土している。

SI-098 (第276・277・470図、図版265・306・335)

遺跡南部南東端斜面の20V区に位置する。北側が高く、南側が低い斜面に立地する。3.5m×3.1mの縦長の方形をなし、深さは北壁側で1.05m、南壁側では6cmを計測する。壁・堆積土の遺存に著しい差がある。主軸はN-24°-Wである。北辺にカマドをもつ。出入口ピット・主柱穴は検出されなかった。主柱穴は存在しないのであろう。壁溝が北西隅から西壁の大部分に巡るが、他は巡っていない。床面も地形の影



第275図 SI-007

響を受け、北側が高く、南側が低い。中央部の床面には硬化面がみられる。南西隅部に、深さ81cmのやや大きなピットがある。奈良・平安時代の堅穴住居で、通常この位置に、貯蔵穴はみられない。深すぎる点からも、貯蔵穴とは異なるものであろう。本堅穴の東方に中・近世の遺構群があることから、このピットも、中・近世のものと考えられる。

カマドは、堅穴の方形プランから、ほとんど突出している。後天井が遺存しており、煙道部側の残りが非常によい。煙出口側の確認面から、後天井上面までの深さは40cmである。また、火床部底面から後天井上面までの高さは70cmである。構築材の流出を考慮すると、カマド構築部分の高さは70cm以上である。もし、この部分の構築材の流出が少ないならば、カマド構築部の高さがわかる好例といえる。内壁は焼けてやや赤色化している

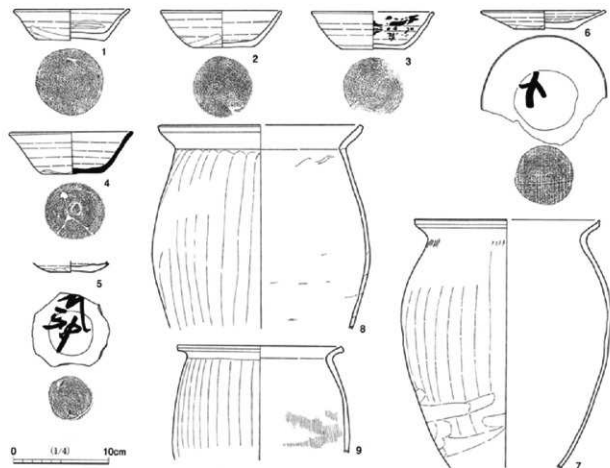
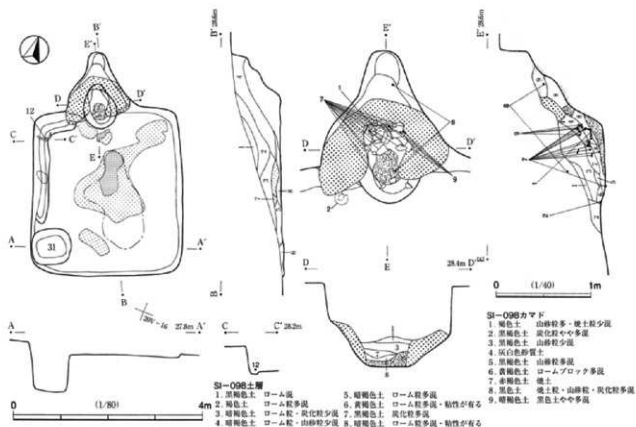
が、あまり強くない。火床部上には、焼土粒・ブロックが堆積しているが、底面の赤色化は弱い。前天井は遺存せず、カマド前方の下層には、流出した山砂が堆積している。

堅穴の堆積土をみると、焼土層や炭化粒、山砂を多く含む層が、中央部を主体として、床面上・下層に堆積している。他所からの廃棄または家屋の焼却・片付けが考えられる。ローム粒の含有は下層に多いが、上・中層は一部を除いて少ない。堆積土は、北側から流れ込むように堆積しており、上・中層は自然堆積と思われる。

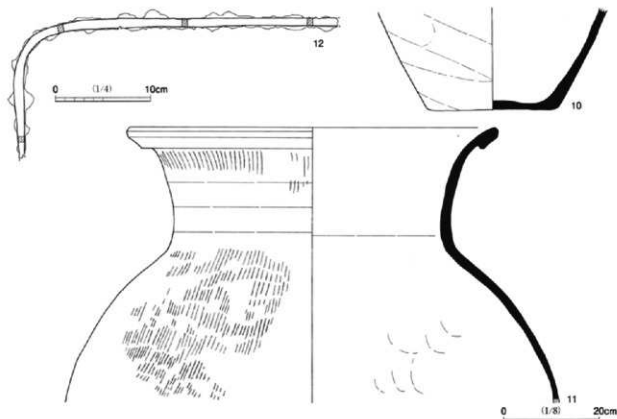
図示した遺物は12点である。1～3・5はロクロ成形の土師器杯である。1・2とも、底部には回転糸切り離し痕がみえる。1は完形で、2も口縁・体部の一部が欠損するだけで、遺存がよい。欠損部の割れ口は、整然としたものではなく、打ち欠きされているか断定しがたい。3は口縁・体部内面に漆が付着している。漆容器として使われた杯である。5は口縁・体部の多くが欠けている。体部外面から底部外面にかけて2字の墨書があるが、判読できない。底部外面の墨書は「成」の可能性はあるが、判然としない。底径は小さく、全面に細かい回転糸切り痕が残る。4は須恵器杯である。内面の色調はやや黒色味を帯びている。底部外面にヘラ切り痕が残る。6はロクロ成形の土師器皿としたが、須恵器の可能性もある。内外面の半分弱が黒色であるが、千葉産須恵器のくすべ状態か、野焼きによる黒斑か判然としない。器面はややざらつくが、どちらの可能性もある土器である。底部外面に墨書があるが、判読できない。矢印状の太い墨痕が、器面の黒ずんでいない部分にみられる。器面が黒色である部分にも存在するかもしれないが、赤外線写真でも不明瞭である。

7～9は土師器甕で、いずれも「房総」型の甕である。9の口縁部はやや須恵器的であるが、胴部外面には黒斑がみられる。

10は須恵器甕である。色調は黄褐色であるが、外面は赤みを帯びるところもあり、火を受けている。胴



第276図 SI-098 (1)



第277図 SI-098 (2)

部下部から底部の破片であり、胴部外面にタタキ目はみられない。胴部内面に当て具痕と思われるところもあるが、ヘラナデが全面に施されている。11は千葉産の須恵器甕で、大型品である。断面内部の色調は淡褐色であるが、器面は黄色味を帯びた灰色である。口頸部内面は剥離が著しい。

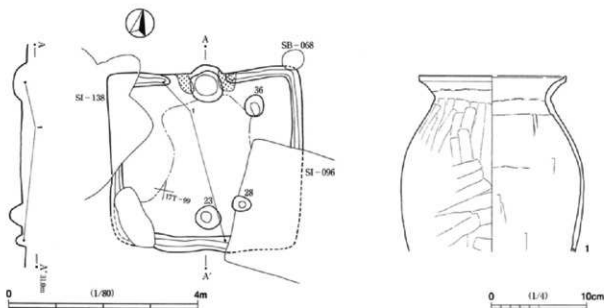
12は鉄製品で、くるる鎌である。先端部と茎尻を欠損するが、遺存がよく、かなり長大な製品である。先端部は屈曲する部分が欠損していると思われる。

なお、モモと思われる炭化した種子が1点出土している。これについては、第6章第3節で取り上げているので参照されたい。

遺物の出土はやや多く、とくにカマド内・周辺と竪穴の中央から西側にかけて集中している。カマド内からは、1が下層から正位で出土し、7・9がその周囲上層から出土した。また、カマド左袖前の床面からは、2が正位で出土している。8はカマド前方を主として、拡散した状態の出土であるが、床面からやや高い位置である。12は北西隅部の壁溝上から出土した。図示したその他の遺物の出土層位をみると、3・5・6・11は下層・床面からの出土、10はやや高い位置の出土である。図示しない土器片は少量で、点数は223点、重さは1.4kgである。

SI-099 (第278図、図版62)

遺跡南部西端の17T区に位置する。3.7m×4mの方形をなし、深さは0.21mである。主軸はN-12°-Wである。北辺にカマドをもつ。北西側でSI-138を切っている。南東側でSI-096と重複し、調査時には本竪穴が古いと考えられたが、遺物の様相からは断定しがたい。なお、図面作成前に、本竪穴よりも深いSI-138を掘り下げたため、図では切られたようになっている。確認面から床面までは浅く、床面はソフ



第278図 SI-099

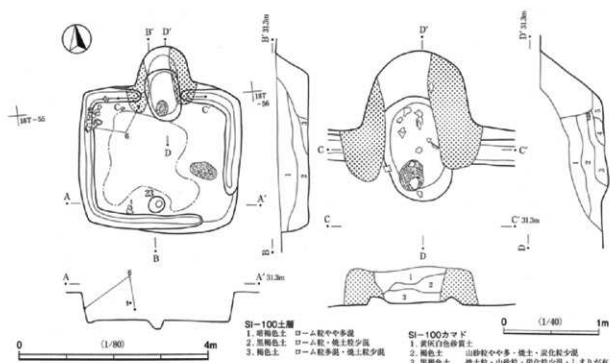
トローム層中で検出した。床面中央部に、硬化面がみられる。壁溝は重複部分を除いて巡る。本来全周するものと考え。南壁際中央に出入口部の小穴をもつ。堅穴内では、北東側と南東側にもピットがあり、主柱穴の可能性がある。ただし、南東側のピットはSI-096の出入口ピットの可能性もある。本堅穴の出入口ピットと位置が近く、柱穴とみるには、やや違和感もある。主柱穴の存在自体が不明瞭であるが、存在するとみれば、北西側の柱穴はSI-138の影響で未検出であり、南西側の柱穴は攪乱の影響で未検出といえよう。一方、柱穴が存在しない場合は、北東側の柱穴は誤認ということになる。カマドは、浅いことと耕作による攪乱を受け遺存が悪い。

図示した遺物は1点だけである。1は「房総」型の土師器甕であるが、遺存はよくない。胴部外面は黒ずんでいる。遺物は北半部主体に分布するが、カマド周辺にやや多い。量的には少なく、図示しない土器片の点数は92点、重さは1kgである。

SI-100 (第279・470図, 図版63・266・312)

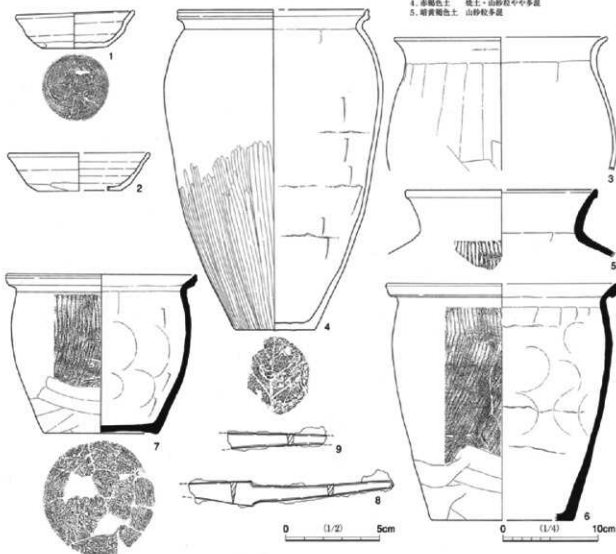
遺跡南中央やや西寄りの18T区に位置する。3m×3.5mの方形をなし、深さは0.69mである。主軸はN5°Eである。北辺にカマドをもつ。出入口部の小穴をもつ。掘り込みは深く、ハードルームまで達している。壁溝は、南東隅部を除いて巡る状況を図示しているが、南東隅部分の掘りかたが中央よりもわずかに深く掘られていることの影響を受けており、本来全周するものと考え。隅部の掘りかたは、南西隅・北東隅も中央よりもわずかに深い。主柱穴はみられず、床面中央は硬化面が広がっている。東壁側中央の床面に、焼けた部分があり、影響を受けて、硬化面がやや狭くなっている。

カマドは、方形プランから大きく突出している。煙道部分が攪乱を受けているが、底面までは、及んでいない。構築材は山砂主体である。火床部底面をみると、前面が焼けて赤くなっているが、中央よりやや奥にも、焼土が堆積している(4層)。火床の位置としては、奥側の方がふさわしいと思われる。カマドの造り替えによって、火床が前面から、奥に移動したことも考えられるが、あるいは、前面は、灰のかき出しに伴う被熱部分かもしれない。カマド周辺の写真を見ると、突出部両側に、棚状施設があるように思



SI-100カマド

1. 黒褐色土
2. 褐色土 山砂粒中や多・焼土・炭化粒少量
3. 黒褐色土 焼土粒・山砂粒・炭化粒少量・しまりが有る
4. 赤褐色土 焼土・山砂粒中や多量
5. 暗褐色土 山砂粒多量



第279図 SI-100

われるが、耕作等の攪乱とも思われ、不明瞭である。堆積土中のローム粒の含有については、床面上に多い。上層でもやや多いが、中・下層は少ない。自然堆積と思われる。

図示した遺物は9点である。1・2はロクロ成形の上師器杯と思われるが、ともに黒ずむ部分があり、千葉産の須恵器の可能性もある。しかし、断定しがたいため、上師器杯としておく。1はほぼ完形である。火を受けており、器面が荒れている。2はあまり遺存がよくない。

3は「房総」型の土師器甕、4は常総型の上師器甕である。4は胴部外面中位以下が、縦方向・横方向のヘラケズリの後、ヘラミガキが施されている。

5・7は須恵器甕、6は甕に転用された須恵器甕である。5は新治窯産、6・7は千葉産である。5は口頸部がやや長く、胴部が膨らむ器形、6・7はバケツ形の器形である。5の色調は黄灰色であるが、外面の器表面は褐色を帯びている。胎土は白雲母を多く含む。6の色調は暗黄褐色、7は暗灰色であるが、7の断面内部はセピア色である。6は底部中央が大きき破損している。底部の遺存は1/4であるが、破損部分は凹形を呈すると思われる。また、残っている部分の断面が擦れていることから、底部中央が削り抜かれ、甕にされたものと思われる。当初から五孔の甕であった様相はうかがえない。胴部内面は、上位から下位まで、剥離の著しい部分がある。7は6よりも小型の器形で、底部は細かく割れている。

8・9は鉄製品で、刀子である。

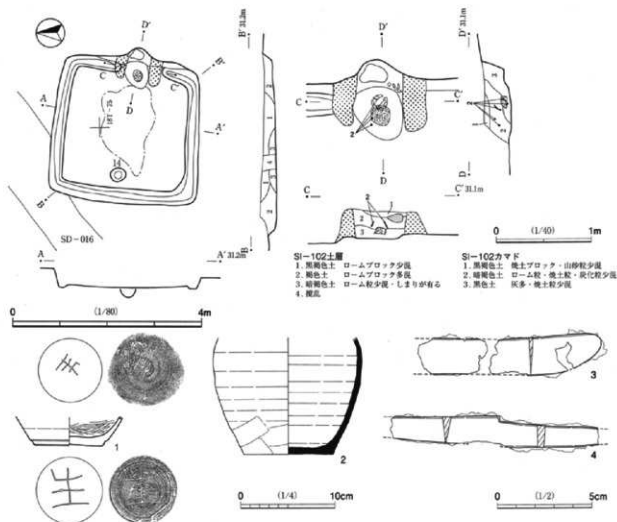
遺物の出土量は多く、全面に分布している。1は南壁際やや西寄り、床面から10cmくらいの高さから、やや斜めに傾いた正位で出土した。また、6はまとまった破片が北西隅、床面から5cm程度の高さから出土した。なお、一部の破片はカマド内から出土している。4・7は、カマドや竈穴内に広く散っている。ともに、下として中・下層からの出土である。その他の2・3・5・8は、中・上層からの出土である。図示した遺物で、出土層位が床面のものはなく、遺物の多くは、堆積土下層が堆積した後に喫棄されたものであろう。図示しない土器片の点数は707点、重量は5.7kgである。

SI-102 (第280・470図、図版64・266・310・312)

遺跡南部中央やや西寄りの18T区に位置する。3.3m×3mの方形をなし、深さは0.41mである。主軸はN-101°Eである。東辺にカマドをもつ。西壁壁際中央に出入り口ピットをもつ。SD-016によって、北西隅(出入口左側)付近上部が切られている。壁溝は全周する。床面はハードローム層まで掘り込まれ、中央部が硬化している。カマド袖部は山砂主体の部分と、黒色土やロームを多く含む部分が見られる。両袖内壁は赤く焼けている。また、火床部底面も、よく焼けて赤変した部分がある。範囲は小さく、火床中心の位置がわかる。火床部は、床面からはあまり低くなっていない。火床中心部の奥に、残りのよい須恵器甕2があり、甕の下には焼土がある。最後に使われた甕が遺棄されたものであろう。甕は破片が内側に傾いているが、底部が遺存しており、正位と思われる。煙道部は、若干の攪乱を受けている。掘りかた底面は、南西隅(出入口右側)が、やや広く窪んでいる。また、南東隅(カマド台側)も一部で深い。堆積土は黒褐色土・暗褐色土主体で、壁側を除いてローム粒・塊の含有が少なく、自然堆積と思われる。

図示した遺物は4点である。1はロクロ成形の上師器杯である。底部調整は回転糸切り難し後、無調整であるが底部周縁はやや擦れている。体部下端は強いヨコナデにより段をなし、底部全体が突出する高台状の器形をもつ。底部内外面に「生」の線刻がある。

2は須恵器甕である。やや小型の甕であるが、底径は大きい。底部外面は、砂目状の痕跡を残している。色調は赤褐色部分が多いが、内外面の一部に黒ずむ部分がある。被熱により赤みが強く、外面もかなりざ



第280図 SI-102

らつく部分がある。ただし、色調は本来褐色系であろう。色調から、土師器の可能性もあるが、底部の器形・製作技法から須恵器の製作技法が卓越すると考える。

3・4は鉄製品で、3は総柄み具、4は刀子である。3はX線写真の観察でも目釘孔が不明である。図示した右側は孔部分で欠損している可能性もある。しかし、左側にはみられない。遺存する破片には目釘孔がないことも考えられるため、孔がないタイプかもしれない。4は刃関付近が錆影れのため、不明瞭である。刃側はかなり磨り減っていると思われる。

遺物の出土は、カマド周辺と前方にやや集中しているが、全体量は少ない。カマド周辺以外は、まばらな出土である。2以外の1・3・4も、ほぼ床面からの出土である。図示しない土器片の点数は134点、重さは1.4kgである。

SI-104 (第281図、図版65・266・267・312・321)

遺跡南部中央やや西寄りの18T区に位置する。3m×2.9mの方形をなし、深さは0.39mである。主軸はN-19°-Wである。北辺中央にカマドをもつ。東壁およびカマドの一部が掘立柱建物のSB-063によって、切られている。また、南西隅部もSX-017との重複により損なっている。出入口ピットをもつが、4本柱の主柱穴はみられない。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁溝は全周する。出入口部から中央にかけての床が

硬化している。カマドは比較的遺存がよく、両袖ともしっかりしている。構築材は粘性のある山砂主体であるが、若干の暗褐色土・ローム粒・ロームブロックを含む。右袖下部はやや暗い色調である。内壁は焼けて赤色化し、焼土が厚く堆積している。掘りかた底面は、四隅が窪んでおり、暗褐色土とローム粒を充填して、床面が形成されている。中央は深く掘り込まれず、ややならされた程度である。扉積土は、黒色系の土層が主体であり、自然堆積と思われる。

図示した遺物は10点である。1は非ロクロの土師器杯である。底部内面には、剥離痕がめだち、体部内面にも擦痕がある。

2は須恵器蓋である。色調は、内面および外面口縁部が黒色。外面の多くが淡褐色で、千葉産である。

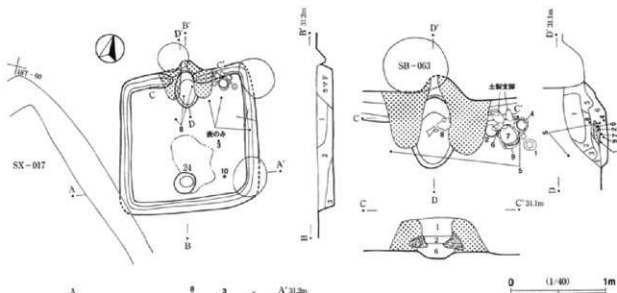
3は須恵器高台付杯である。色調はほぼ暗灰色であるが、底部内面の中央はやや赤味を帯びる。また、底部内面に火傷痕がある。千葉産の須恵器である。

4～9は土師器甕である。5は小型品、4・6・7もやや小型の上器である。7・8は常総型の甕、それ以外は房総型の甕である。7は唇壁が厚く、胴部下位には、ヘラミカキではなく、横位のヘラケズリが強く施されている。底部外面の本葉痕は認められない。白雲母・小石を多く含み、胎土・色調は大型の常総型甕と同様である。8は遺存が少なく、器面は磨耗し、とくに口縁部が顕著である。土師器甕は、器面が剥離または褐色・黒褐色に変色するなど、すべての個体に強い被熱痕跡がみられる。

10は鉄製品で、刀子である。

カマド右袖脇の床面から、遺物のよい遺物が集中して出土した。内訳は土師器杯1点(1)、須恵器蓋1点(2)、土師器甕5点(4・5・6・7・9)、土製支脚2点(実測図は非掲載)である。遺物群は、まず、底部・胴部下部のない甕が2点(4・9)正位で並んで出土した。9が手前、4は9のやや右斜め奥側からの出土である。9の上からは、7が横位でやや下向きに出土し、4の上からは、5が止位で重なって出土した。7・9とカマド右袖の間の床面からは、2が天井部を下にして出土した。2と7・9の奥、北壁際の床面では、土製支脚2点が出土した。2の奥の1点はかなり斜めに傾いて出土し、その右側のもう1点は横に倒れて出土した。また、底部破片の6は、2の斜め上、左側の土製支脚と7・9の間から正位で出土した。1は、4・5・7・9の右側、北東隅部の床面から正位で出土した。1は口縁・肩部の2か所(以上?)が欠損するが、欠損部が小さいことと、上器の使用痕跡が著しいため、意図的なものか断定しがたい。2・7はほぼ完形である。2も磨耗が著しく、土師器甕群も本堅穴で使用されたものであることは明瞭である。また、土製支脚がカマド内から抜き取りられて、土器群とともに置かれていることから、最終的にはカマド廃絶の祭祀に伴うあり方と考える。4・9の甕はすでに破損していたかもしれないが、カマド祭祀に伴い、破断面がほぼ水平に整えられたものとする。台になっている4・9を除いて、上器の向きをみると、1・5・6は正位、2は倒位であり、7も倒位といえようか。カマド祭祀における正位と倒位の上器のセットといえるかもしれない。以上、カマド右脇の集中出土器群を祭祀にかかわるものと考えたい。ただし、平常時にも土器等がカマド右脇に保管されていたものと思われるため、日常、似たような状態で保管されていた土器群が、堅穴・カマド廃絶にあたり、多少手を加えられて遺棄されたものであろう。

その他に図示した遺物のなかでは、土師器甕8がカマド内から出土した。図示しない土器片の点数は160点、重さは1.9kgである。量的にはやや少なく、散在的な出土である。北西隅周辺にやや集中する。その他、図示していないが、軽石小片が3点出土している。

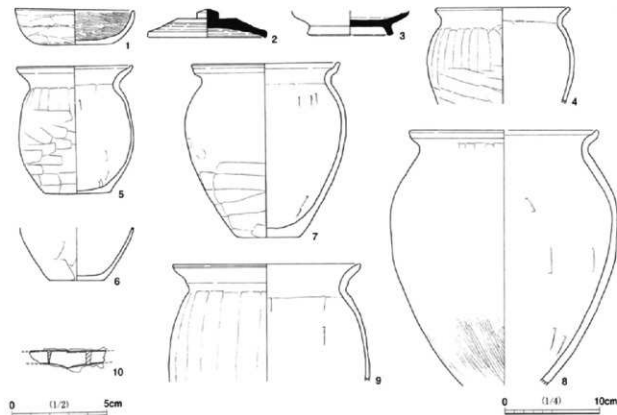


SI-104土層

1. 黒褐色土 ローム粒・焼土粒少混
2. 黒褐色土 焼土ブロック少混
3. 黒色土 ローム粒少混

SI-104カマド

1. 黄褐色砂質土
2. 黒褐色土 ローム粒・山砂粒少混・しまりが有る
3. 暗黄褐色砂質土
4. 黒褐色土 赤炭にしまりが有る
5. 黒褐色土 焼土粒少混
6. 黒褐色土 ローム粒・焼土粒少混

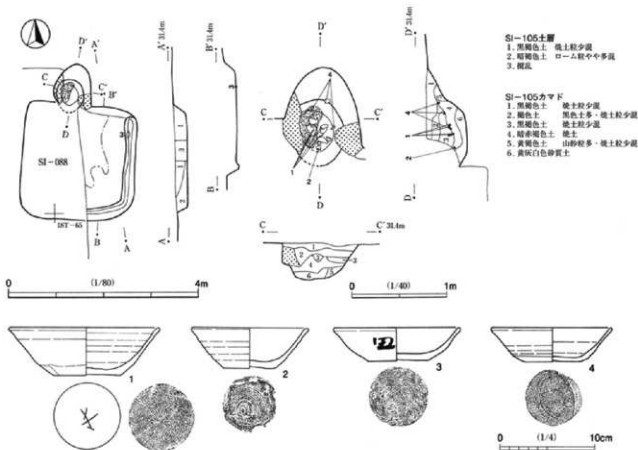


第281図 SI-104

SI-105 (第282・471図, 図版66・267)

遺跡南部中央やや西寄りの18T区に位置する。主軸方向(南北方向)2.4m、深さ0.27mである。西側でSI-088を切っている。ただし、平面プラン確認時に本堅穴の存在を認識していなかったため、SI-088の調査時に本堅穴の西半部を破壊してしまった。方形プランであるが、東西方向の規模は不明である。小規模な堅穴住居跡であり、南北方向と大差がないと推測する。主軸はN-S-Eである。北辺にカマドをもつ。出入口ピットは未検出である。支柱穴は存在しない。壁溝は東壁から南壁にかけて巡っている。カマドのある北壁下には存在しない可能性があるが、SI-088と重複する南壁から西壁にかけては巡るものと思われる。床面はハードローム層まで掘り込まれ、中央部は硬化している。カマドは、方形プランから大きく突出している。構築材の遺存はあまりよくないが、火床部は焼けて赤変している部分がある。堆積土は、黒褐色土・暗褐色土主体で、自然堆積と思われる。

図示した遺物はロクロ成形の土器器杯4点である。そのうち、3は口縁端部の一部がわずかに欠けるだけで、他には割れのないほぼ完形の土器である。底部が東壁に寄りかかるような横向きの状態で、壁溝中から出土した。体部外面に正位の墨書がある。やや判然としないが、「田」と思われる。器面は荒れている。口縁端部にわずかに黒ずむ部分があり、煤付着の残存であれば、灯明器であるが、断定しがたい。1・2・4の遺存度は、50%~70%程度である。主としてカマド内から出土しているが、1の一部はカマド右袖前の下層から出土し、2の一部は南壁際床面・壁溝上から出土した。1はやや大型の杯である。底部外面に線刻があるが、文字ではないと思われる。4は器面の荒れが著しく、一部に変色や黒ずみもみられる。2も4ほどではないが、同様な状況であり、底部内面に剝離がみられる。1の器面も荒れている。切り離し



第282図 SI-105

後の底部調整は、1が全面手持ちヘラケズリ、4が周縁の回転ヘラケズリであるが、2・3は無調整である。

遺物の出土はカマド内に集中しているが、他は散漫な分布であり、全体量は少ない。図示しない土器片の点数は111点、重さは1kgである。

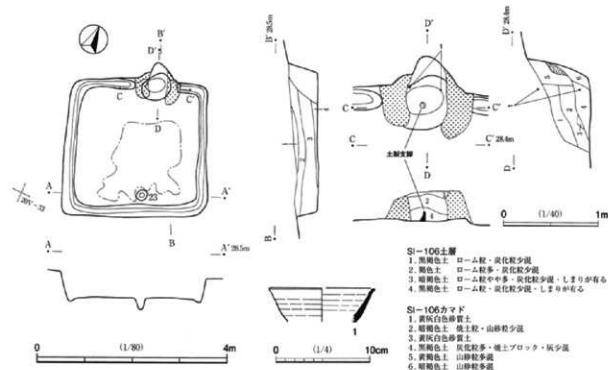
SI-106 (第283図、図版66)

遺跡南部南東端斜面の20V区に位置する。3m×3mの方形をなし、深さは0.53mである。南側に下る斜面部に位置し、北壁が高く、南壁が低い。主軸はN-23°-Wである。北辺にカマドをもつ。カマドは中央から東側に寄っており、右側が北東隅部である。南壁際に、出入口ピットがある。この位置はカマドほどではないが、中央からわずかに東に寄っている。壁溝は全周する。床面は、出入口ピット周辺から、中央部にかけて硬化している。カマドは、両袖とも壁を一度削ってから、粘性のある山砂を貼りつけて、構築されている。両袖内壁は焼けて、赤色化しており、煙道部の壁も、一部赤く焼けている。火床部中央には、土製支脚が立って残っていた。ただし、縦半分は破損している。カマド前の床面がやや窪んでいるが、最大5cm程度であり、灰のかき出しに伴うものであろう。火床部底面と床面の高さの差は、ほとんどない。

遺物の出土量は少なく、まばらな分布状況である。図示した遺物は、須恵器杯1点である。カマド上層から出土した。小片から図化したため、計測値にやや不安がある。白色粒を多く含み、やや硬質の焼成であるが、色調に若干褐色味を帯びる部分があり、千葉産と思われる。図示しない土器片の点数は123点、重さは0.7kgである。

SI-107 (第284図、図版66)

遺跡南部中央やや西寄りの18T区に位置する。2m×2mの方形をなし、深さは0.18mである。主軸はN-15°-Wである。SX-017との重複により北西隅付近を損なっている。また、掘立柱建物SB-063と重複し、東側中央付近を損なっている。新旧関係は不明である。さらに、耕作による攪乱が、南東側以外の各所にみられた。南壁際中央に、床面からの深さが12cmのピットがある。位置的に出入口ピットの可能性が



第283図 SI-106

あるが、長楕円形の形態で、規模もやや大きいため、断定しがたい。性格不明のピットとする。カマドは存在せず、住居であるか不明である。確認面から底面までは浅く、底面はソフトローム層中にとどまる。硬化面はみられない。出土遺物はごく少量の奈良・平安時代土器片で、図示したものはない。点数は36点、重さは200gである。内訳は、常総型の土師器甕、「房総」型の土師器甕、千葉産の須恵器杯・甕である。

本遺構は、何らかの堅穴建物である可能性はあるが、堅穴住居跡とは断定できない。他の時代に属する可能性もあるが、出土遺物が奈良・平安時代の土器であるため、ここに掲載した。

SI-108 (第285図, 図版7・267)

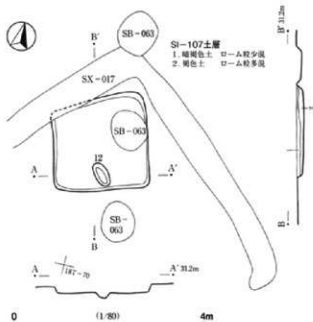
遺跡南部南端斜面部の19V区に位置する。2.5

m×2.5mの方形をなし、深さは0.68mである。主軸はN-52°-Wである。北西辺にカマドをもつ。SB-061によって、南東壁側の中央・両隅が切られている。その他、中央部などでも攪乱を受けている。南西壁側中央に、深さ31cmのピットがある。出入口ピットと思われるが、この部分が出入口と考えると、出入口側からみて、カマドの位置が左横側となり、奈良・平安時代の堅穴住居としては特異である。別の出入口ピットが、SB-061に切られる南東壁側中央に存在する可能性がある。なお、北東壁側にカマドが存在した痕跡はうかがえない。床面はハードローム層まで掘り込まれている。壁溝は巡っていない。床面は全体に堅緻であるが、とくに中央部とカマド左側の西隅周辺が硬化している。出入口とカマドの位置関係によるものかもしれない。

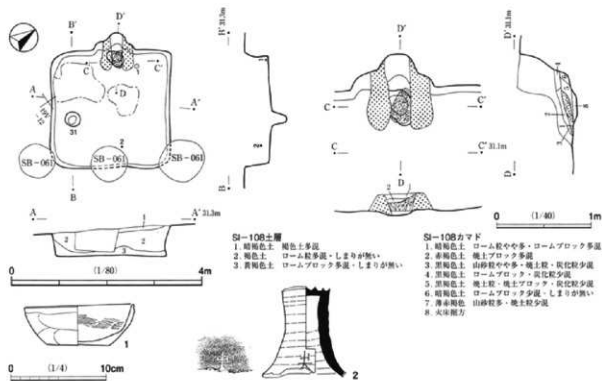
カマド両袖は、壁の高さに比べ、低い位置の遺存である。構築材は粘性のある山砂で、左袖内壁は、赤く焼けている。また、火床部も焼けて赤変している。カマド内下層には、焼土の厚い堆積がみられる。火床部底面は床面よりやや深く窪んでいる。両袖部の壁は、上から見て、奥に直角的に掘り込まれている。カマド壁の掘りかたは、煙道部分と袖部分で後をもつが、後は構築材で覆われる。これは、袖を長くするための工夫であり、その目的は火床部の位置をできるだけ奥側にすることであったと考える。このような掘削法は、本遺跡の他の堅穴住居にも何例かみられる。

堆積土は、いわゆる新期テフラ層と似た色調である。そのため、本堅穴は、当初、プランを確認できず、SB-061の調査中に検出された。堆積土は褐色味の強い色調であるが、台地先端部に立地することから、人為的堆積か自然堆積か断定しがたい。ただし、本堅穴の周囲に位置するSB-061・SB-070が本堅穴よりも新しく、時期が近い遺構であるならば、人為的に埋め戻された可能性が高いと考える。

遺物の出土量は非常に少なく、図示した遺物も2点であるが、1は完形の土器である。非ロクロの土師器杯である。口縁・体部の一部が弧状に割れて接合しているが、出土状況では口縁部が全周するような状態で出土しており、打ち欠きされたものと断定しがたい。体部内面と底部内面の境は不明瞭であるが、そのあたりの内面がドーナツ状にひび割れており、一部剥離している。火を受けたものと思われる。2は須



第284図 SI-107



第285図 SI-108

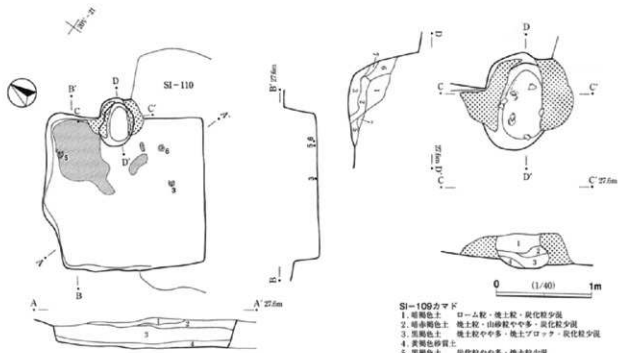
恵器高杯または高盤の脚部である。脚部外面に正位で「山大」の線刻がある。「大」は欠損部にかかっており、「本」または「本」となる可能性もある。色調は黄色味を帯びた灰色で、焼成はかなり軟質である。胎土は白色粒を多く含む。器面は軟質で、ざらついている。新治産産の須恵器と思われる。

1はカマド右袖廊の床面から、正位で出土し、2は南東側中央の中層から出土した。図示しない土器片の点数は8点、重さは45gで、まばらに出土した。

SI-109 (第286・471図, 図版67・267・317)

遺跡南部南東端斜面の20V区に位置する。3.4m×3.3mの方形をなし、深さは0.63mである。主軸はN-46°Eである。北東辺にカマドをもつ。SI-110を切っているが、カマドの対面からプランをみた場合、ほぼ右側半分がSI-110と重複している。出入口ピットは検出されなかった。主柱穴は存在しない。壁溝は廻らない。床面はSI-110の床面とほぼ同じ高さであり、重複の影響により、硬化面はみられない。カマド構築材は山砂主体であるが、部分的に暗褐色土を多く含む。また、下部はローム粒を若干含む。火床部中央から左袖寄りに、横に倒れた状態で土製支脚（未実測）が出土している。火床部底面は床面よりもやや窪んでいるが、灰のかき出しの結果であろう。堆積土は全体に粘性のやや高い土が堆積し、やや淡い色調である。下層でローム粒を含まず、比較的均一な土層であり、自然堆積と思われる。白色粘土が、カマド左側、左奥隅から中央にかけての床面上に堆積している。やや下った緩斜面に立地することから、一部に自然の粘土層が露出している可能性がある。そうでなければ、採取した粘土の一部が廃棄されたものであろう。

図示した遺物は14点である。1・2はロクロ成形の土師器杯である。2はやや小型で、口径と底径の差が少ない土器である。1・2の底部外面は回転ヘラケズリが施されている。1は器面が荒れており、やや不明瞭であるが、体部下部も回転ヘラケズリ調整と思われる。2の体部下部も回転ヘラケズリが施されて



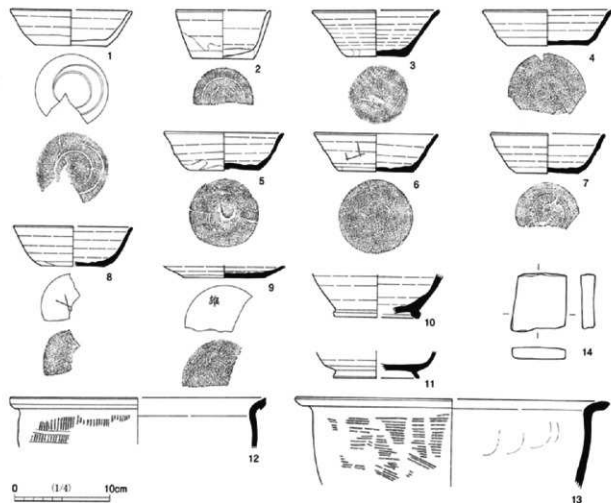
SI-109カマド

1. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒・炭化粒少混
2. 暗赤褐色土 焼土粒・山砂粒やや多・炭化粒少混
3. 黒褐色土 焼土粒やや多・焼土ブロッケ・炭化粒少混
4. 黄褐色砂質土
5. 黒褐色土 炭化粒やや多・焼土粒少混
6. 暗褐色土 山砂粒多混・黒色土ブロッケやや多混
7. 山砂

SI-109土層

1. 暗褐色土 褐色土多混
2. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少混
3. 暗褐色土 ローム粒やや多・焼土粒少混
4. 暗褐色土 炭化粒少混・粘性がある

0 (1/80) 4m



第286図 SI-109

いると思われるが、遺存が少ないことと、上部のケズリが弱いため判然としにくい。

4～8は千葉産の須恵器杯、3は新治窯産の須恵器杯である。5・6はとくに遺存のよい土器である。6は体部外面に縦2条線と横1条線が交差する線刻がある。正位に見て、カタカナの「サ」を逆にしたような形であるが、記号としておく。この線刻に接して、口縁・体部の一部が逆三角形に欠損している。逆三角形の頂点からひびが入って2片に割れるが、出土時点では分離していない。11縁部には、他にも小さな欠けがある。5も11縁・体部の一部が口縁部周りで1/4強欠損している。割れ目はゆるやかな弧状である。また、6同様、欠損部からひび割れが伸びてほぼ2等分されるが、出土時点では分離していない。5・6は、欠損部からひびが入ったため、廃棄された可能性もあるが、欠損部が打ち欠きされたことも考えられる。6については、線刻との関係から、後者の可能性の方が高いと考える。5も6とセットの可能性もある。なお、欠損部から伸びるひび割れも2片に分割する意図があったのかもしれないが、土層によるものとも思われ、意図的か断定しがたい。5は器面がかなり荒れている。8の底部外面には、「+ (×)」のヘラ書きがある。9は千葉産の須恵器甕である。底部外面のやや端近くに「隼」のヘラ書きがある。また、底部外面中央に「| (×)」と思われるヘラ書きがあるが、痕跡が弱く、断定しがたい。

10は須恵器長頸蓋の底部片である。底部内面に降灰雫の付着がみられる。小石をやや多く含み、器面はざらつくが、焼成良好であり、東海産と思われる。11は須恵器高台付杯である。少量の小石を含むが、緻密な胎上であり、焼成も硬質である。色調は黄色味のない暗灰色である。東海産と思われる。

12は千葉産の須恵器甕である。小片から固化したことを付記しておく。

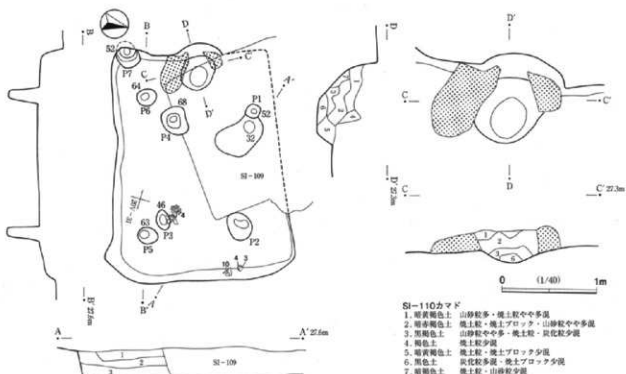
13は新治窯産の須恵器甕または甗である。白雲母を多量に含む。

14は瓦石である。石材は流紋岩質凝灰岩である。

遺存のよい5・6は、ともに床面近くから正位で出土している。平面位置は、6がカマド右袖斜め前方、5が左壁際左隅隅寄りである。5・6以外では、3も比較的遺存がよく、主要な破片は右壁側やや中央寄りの床面から出土している。3・5・6以外の図示した遺物を見ると、11と14が床面・土層からの出土である。その他の7点は、上・中層からの出土か、接合する破片が上・中層から出土するものである。遺物の総量は多量で、堅穴全体から出土している。出土層位は、床面から上層にわたるが、上・中層から出土する遺物の方が多い。出土遺物は、一部を除き、多くが本堅穴の穴みに廃棄されたか、または流入した遺物であろう。図示しない上器片の点数は906点、重さは10.2kgである。

SI-110 (第287・471図、図版68・267・268・317)

遺跡南部南東端斜面の20V区に位置する。4.9m×4mのやや不整な長方形をなし、深さは0.57mである。上軸はN-102°-Wである。西辺にカマドをもつ。SI-109にカマドから右壁側を大きく切られている。壁溝は巡らない。床面に、硬化面はみられない。床面はSI-109の床面とほぼ同じ程度の高さであるが、本堅穴の掘りかた上に、SI-109の床が貼られている部分がある。掘りかた底面は凹凸があり、一部で深くなっている。床面は、窪んだ部分に粘性のあるローム粒や暗褐色土・黒褐色土を充填して形成されている。貼り床除去の調査時に、7か所のピットが検出された。そのうち、中央寄りの4か所 (P1～P4) は上柱穴と思われる。また、左壁 (南壁) 向隅寄りの2か所 (P5・P6) は、対称的な位置にあり、補助柱穴と思われる。P5・P6の深さは60cm強で、ほとんど同規模である。また、左奥 (南西) 隅部にも、床面からの深さが52cmのピット (P7) がある。左前隅部にはピットがみられないが、位置から補助柱穴と思われる。本堅穴は南側斜面上に立地するため、南側部分の上縁は、北側よりも重厚な造りになる。P5～

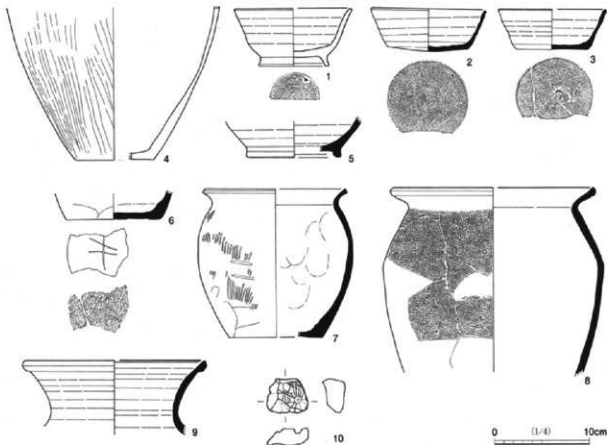


SI-110カマド

1. 暗黄褐色土 山砂较多・焼土粒やや多量
2. 暗赤褐色土 焼土粒・焼土ブロッカ・山砂粒やや多量
3. 厚褐色土 山砂粒やや多量・焼土粒・炭化粒少量
4. 褐色土 焼土粒少量
5. 暗黄褐色土 焼土粒・焼土ブロッカ少量
6. 黑色土 炭化粒多量・焼土ブロッカ少量
7. 暗褐色土 焼土粒・山砂粒少量

SI-110土層

1. 暗褐色土 しまりが強い
2. 褐色土 焼土粒・炭化粒少量
3. 暗褐色土 ロームが多・焼土粒・炭化粒少量



第287図 SI-110

P7は、重厚な造りの上層構造を支えるために設置されたものと考えられる。P7については、P6とともに、カマド部分の上層構造に関わることも考えられる。出入口ピットは検出されなかった。カマドは遺存が悪く、とくに右袖はSI-109に大きく切られている。火床部底面は深く抉れている。灰のかき出しの結果か、当初の掘りかたのどちらか、または双方が考えられる。

図示した遺物は10点である。1はロクロ成形の土師器高台付杯である。内面は体部下部和底部間が、ヨコナデによって沈線状となり、境が明瞭である。2・3は千葉産の須恵器杯である。2の遺存部分は割れていないが、欠損部が意図的なものか断定しがたい。

4は常総型の土師器甕である。器面は荒れており、とくに内面はかなりざらついている。

5は須恵器長頸壺である。SI-109の10と同一個体と思われる。

6・7・8・9は千葉産の須恵器甕である。6は底部の小片で、外面に「キ」状のヘラ書きがある。「キ」とみて、縦の1条線が平行する2条線を切っている。7はやや小型の器形である。胴部外面のタタキは、その後のナデにより、薄れて一部消える部分がある。しかし、内面の当て具痕は比較的明瞭で、一部は深く残る。色調は赤褐色である。8の胴部外面上位のタタキは、ナデ・ヘラケズリにより、ほとんど消されている。また、中位以下に、横方向のタタキ的な痕跡がみられる。胴部内面も当て具の痕跡が若干残るが、ヘラナデにより、かなり消されている。色調は黄味が強く、微妙であるが、やや灰色味を帯びており、須恵器窯で焼成されたものと考えられる。

10は性格不明の石鏡品で、石材は泥岩である。図示した上面に、直径7mm~8mm、深さ4mmの貫通していない孔がある。孔の周囲には、細かい筋状の痕跡が多く刻まれている。多条の平行線もみられ、それに直交する1~2条の線もある。また、孔を中心とした放射状の線もみられる。これらの線は尖ったもので、刻まれたものであるが、より細かい痕跡がみられる部分もある。孔のある反対側の面にも貫通していない窪みが2か所あるが、上面と同じ孔を意図したものと思われる。孔と線刻の存在により、祭祀的な遺物であるかもしれない。なお、孔径は紡錘車の径と同じ程度であり、孔周囲の線刻もしばしば紡錘車に存在するものがある。しかし、孔は未貫通であり、形態も隔たりが大きい。

遺物の出土量は多量である。竪穴全体に万遍なく分布し、出土層位も床面から上層にわたっている。図示した遺物は、すべて欠損しており、もっとも遺存のよい須恵器杯2で、70%の遺存である。2は東壁際やや北寄りの下層から、倒位で出土した。また、2に重なって、土師器高台付杯1が倒位で出土した。1は1/2割の遺存である。その他の図示した遺物の出土層位をみると、ほぼ下層から出土したものが、6・7・8・10、上・中層から出土したものが、3・4・5・9である。4は床面から上層にわたる。図示しない土器片の点数は1,134点、重さは9kgである。

なお、本竪穴は長方形の形態であるが、特異な様相はうかがえない。長方形プランであるのは、斜面に立地することの影響、たとえば掘削土量を少なくするための工夫であろうか。

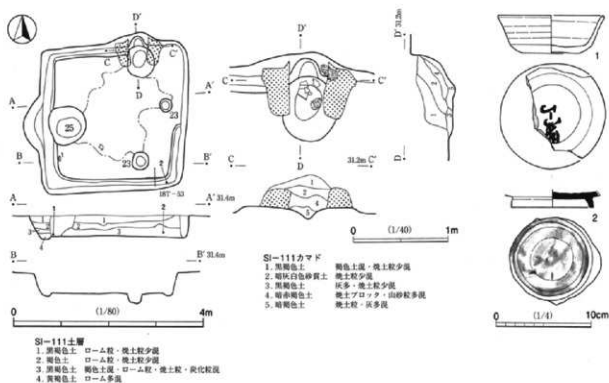
SI-111 (第288図、図版68)

遺跡南部中央やや西寄りの18T区に位置する。3.1m×3.2mの方形をなし、深さは0.44mである。主軸はN3°Eである。北辺東寄りと西辺にカマドをもち、建て替えられた竪穴住居跡である。遺存のよい北カマドが新しく、構架材を除去されている西カマドが古い。出入口ピットが2か所あるが、南壁際東寄りのものが新しく、東壁際中央のものが古い。壁溝は東壁北側でみられないが、他は巡っている。東壁側北寄りの床面は攪乱を受けているので、本来全周するものと考えられる。床面は、ハードルーム層まで掘り込んで形

成され、中央部を主体に硬化面がみられる。北カマドの右側は、すぐ北東隅である。両袖内壁は被熱により赤色化している。火床部底面は床面よりもやや窪んでいる。カマド内からは、土器片が少量出土したが、図化したものはない。西カマドは、構築材がほぼ除去されている。煙道部は方形プランからやや突き出しており、その部分の堆積土に少量の山砂がみられる。火床部底面は、最深で床面より25cm窪んでいる。掘りかたは四隅が深く、規模も大きい。また、四隅だけでなく、東壁側中央もやや窪んでいる。西カマド火床部底面は、床面よりもかなり深いため、灰のかき出しだけではなく、当初から掘りかたが深かったのかもしれない。堆積土は黒褐色土主体で、ローム粒の含有も少なく、自然堆積と思われる。

図示した遺物は2点である。1はロクロ成形の土師器杯である。底部は1/2以上遺存するが、口縁部の遺存は1/4である。底部外面に2文字の墨書がある。墨痕が薄く、上の文字は判読できない。下の文字は「山」である。2は千葉産と思われる須恵器高台付杯（壺または皿）の底部片を硯に転用したものである。口縁・体部は、ほぼ全周が除去されている。高台部のある底部外面を上にして、硯としたもので、高台部の内側全体が墨滴により黒ずんでいる。一部に筆先の痕跡がみられる。中央部は磨られて、滑らかになっており、おおよその範囲を破線で図示した。土器の底部内面側は、硯の場合、底部外面であるが、置かれたことにより、磨耗した部分がある。土器の色調は、かなり黄色味を帯びた灰色で、焼成は良好である。

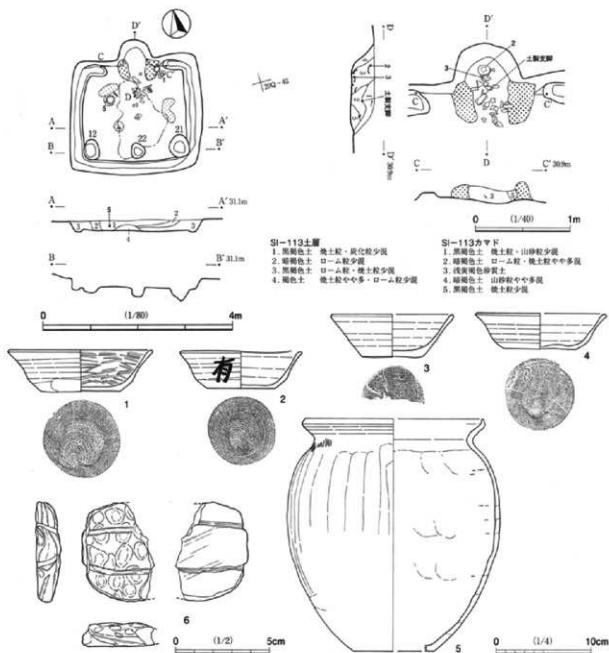
1は西壁際南西隅寄りの下層から横位で出土し、2は南東隅壁溝上部の下層から出土した。遺物量はやや少ないが、堅穴全体から出土している。図示しない土器片の点数は314点、重さは2.7kgである。その中に、武蔵型の土師器甕がみられるほか、千葉産の須恵器杯・甕、新治窯産の杯・高台付杯・甕、土師器常総型甕、土師器杯がある。また、奈良・平安時代の土器に混じって、ハケメをもつ古墳時代前期の土器が少量出土している。



第288図 SI-111

SI-113 (第289・471図, 図版69・268・319)

遺跡中央部中央の20Q区に位置する。2.4m×2.8mの方形をなし、深さは0.25mである。主軸はN-15°-Eである。北辺にカマドをもつ。壁溝は、カマド付近を除いて全周する。南壁際中央に出入口ピットをもつ。また、南壁両隅にピットがある。深さは、南東隅のものが21cm、南西隅のものが12cmである。ピット状の掘り込みであるが、小規模な竪穴であり、柱穴とは考えにくい。掘りかた底面と思われる。床面はソフトローム層中にとどまり、確認面からあまり深くない。出入口部からカマドに向かって硬化面が広がる。竪穴が浅いため、カマドの遺存はよくない。両袖の構築材は山砂主体であるが、下部はローム粒・黒褐色土を若干含む。両袖内側は赤く焼けているが、火床部の赤色化面は不明瞭である。堆積土中には、下層を主として焼土粒・炭化粒が含まれ、床面上では焼土が濃く分布する部分も認められた。遺物の出土状況を考慮すると、焼失よりも上屋が焼却された住居と思われる。



第289図 SI-113

図示した遺物は6点である。1～4は、ロクロ成形の上師器杯である。2は完形である。「有」の墨書が体部外面に正位で記されている。3は1/3程度の遺存であるが、被熱により底部外面から体部外面下位にかけて灰白色を呈する。1は口縁・体部の一部に欠損部がある。打ち欠きされているかどうかは断定しがたい。1・2・4の体部下端には、回転ヘラケズリが施されている。3の体部下端はヨコナデが施されている。2の器面は荒れており、火を受けたものと思われる。墨書「有」もやや薄れている。

5は「房総」型の上師器である。底部のほとんどと下部の一部を欠くが、口縁部から上半部はほとんど遺存している。外面に山砂が付着する。焼成の良好な土器である。

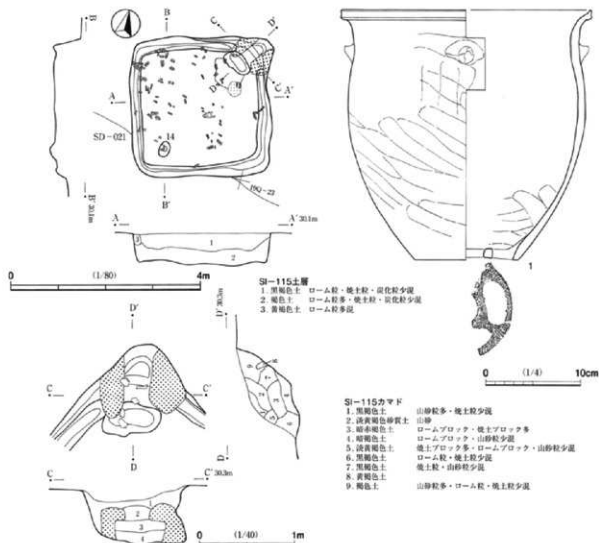
6は性格不明の上製品である。遺存している最大幅付近で毀損しており、欠損部分もかなり大きいと思われる。手捏の製品で、焼成は良好である。広い面の片削(中央上図)では、指頭による凹凸が著しい。裏面は、ほぼ平らである。2条の並行する筋が、中央上図の広い面から左図の側面、右図の広い面に連続している。右図の痕跡から、紐状のものが巻かれたと考えることが妥当であろう。また、それに直交して、側面にも筋が廻っており、側面にも巻かれたのであろう。

遺物の出土は、カマド内およびカマド前から中央にかけて多い。また、南壁側中央付近にも分布がみられるが、東西の壁際は少ない。2はカマド内から正位で出土した。上層出土であるが、まったく割れていない土器で、墨書もあることから、カマドをこわし、煙道部をふさぐ倉間で置かれたものと考えられる。3もカマド内から出土しており、支脚に転用されていたものと思われる。また、上製支脚(未実測)が横倒しで出土している。カマド堆積土中位の出土である。1はカマド右袖脇の床面から倒位で出土した。その近くからは千葉産の須恵器焼酎部が出土しているが、ほぼ底部だけの遺存のため、固化していない。5は土として上半部が、カマド左袖の斜め前方の床面から正位で出土した。また、下半部の破片がカマド前方の下層にやや散って分布しているが、この範囲には、4の破片も混在している。6は南壁東寄りの確認面近くから出土している。図示しない土器片の点数は120点、重さは1kgであり、少量といえる。

SI-115 (第290・471図、図版70)

遺跡中央部西寄りの19Q区に位置する。3m×2.9mの方形をなし、深さは0.68mである。北東隅にカマドをもつ。南西隅付近の壁上部は、溝状遺構SD-021によって切られている。南西隅部壁際に出入口ピットがあり、カマドの対角に位置する。出入口部の構造が、南壁側に向かって開いていたのか、西壁側か、あるいは南西隅部であるのか、検討課題である。遺溝は全周する。掘込みは深く、ハードルーム面を床にしている。硬化面は不明瞭である。カマド部分の床面は、壁溝が巡らない。また、両袖下部は、ややルームを掘り残してあり、当初からカマドを造る位置が決まっていたことがわかる。構築材は山砂主体であるが、若干のロームと黒褐色土を含む。袖上部は被熱により赤くなっている。火床部の赤色化面は不明瞭である。袖前側の床面が窪んでいるが、それほど深いものではない。灰のかき出し痕が掘りかたのくほみである。掘りかた底面は、南東隅近くと北西隅近くが中央よりも深く掘られ、とくに南東隅際の規模が大きい。また、出入口ピットのある南西隅もわずかに深い。堆積土中からは、炭化材が多く出土し、一部に焼土が多くみられる部分もあった。上層の塊却・片付けがあったものと考えられる。なお、堆積土の色調は、全体に黒色味が強いことから、その後は自然堆積と思われる。

図示した遺物は土師器(須恵器?) 瓶1点である。遺存はあまり良好とはいえない。口縁部から底部までの破片を接合して固化したものである。底部は明らかに五孔であり、須恵器的な作りである。把手は1か所遺存しているが、180度反対側にもう1か所存在するものと思われる。胴部との接合部分はやや丸み



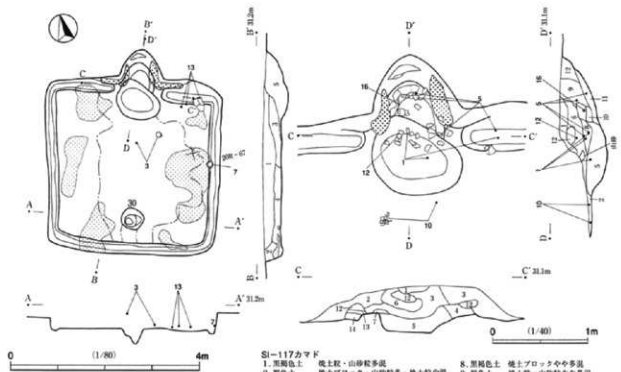
第290図 SI-115

をもち、頂部はややとがっている。方形の把手ではない。胴部上位外面に、平行タタキと思われる痕跡が斜方向にあるが、ヘラケズリの影響により、かなり不明瞭である。あるいは、ヘラケズリそのものの痕跡であり、タタキではないかもしれない。内面はヘラナデが施され、当て具の痕跡はうかがえない。胴部外面中位に黒斑がみられる。それ以外の色調は褐色、暗褐色である。以上、底部に須恵器的な様相がうかがえるが、土師器的な様相も強く、正確には双方の要素が融合した土器といえる。ただし、黒斑をもつことから、焼成が野焼きであることがわかる。その点を重視して、ここでは土師器として扱うこととした。

1はカマド前を中心として、中央部にまでやや散って出土した。出土層位は下層から上層におよぶが、中層主体である。また、本竈穴での出土遺物量は少量で、図示しない土器片の点数は109点、重さは1.7kgである。主として中央部から散在的に出土し、壁際からの出土は少ない。遺物は、堆積土が壁際に堆積した後の窪みに廃棄されたものであろう。

SI-117 (第291・292・471図, 図版71・72・268・307・308・312)

遺跡中央部南寄りの20R区に位置する。3.6m×3.7mの方形をなし、深さは0.4mである。主軸はN-18°-Eである。北辺中央にカマドをもつ。南壁際中央に出入口ピットをもつ。壁溝は全周する。床面の硬化部

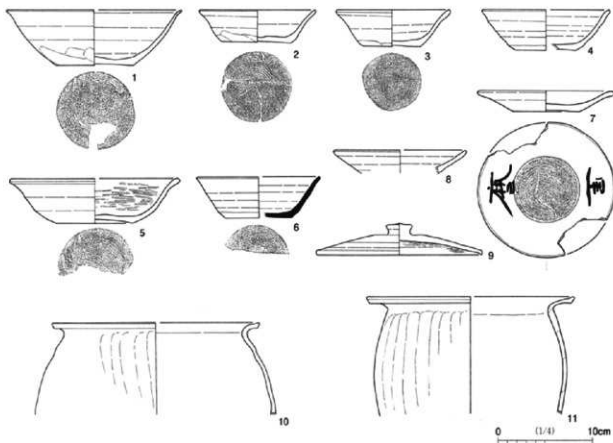


SI-117土層

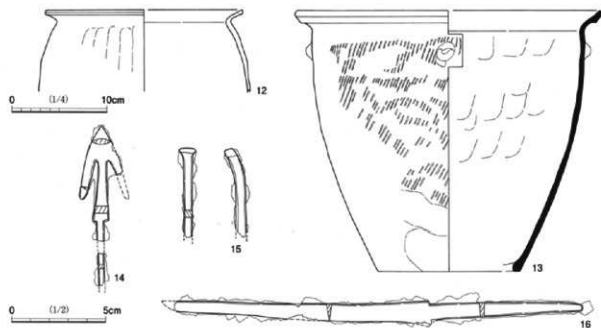
1. 黒褐色土 ローム粒・焼土粒少混
2. 褐色土 ローム粒・焼土粒やや多混
3. 暗褐色土 山砂粒多混
4. 暗褐色土 ローム粒やや多混
5. ロマド

SI-117カマド

- | | | | |
|----------|-------------------|------------|-----------------|
| 1. 黒褐色土 | 焼土粒・山砂粒多混 | 8. 黒褐色土 | 焼土ブロックやや多混 |
| 2. 褐色土 | 焼土ブロック・山砂粒多・焼土粒少混 | 9. 褐色土 | 焼土粒・山砂粒やや多混 |
| 3. 暗褐色土 | ローム粒・焼土ブロック少混 | 10. 灰白色土 | 灰層 |
| 4. 暗褐色土 | 焼土粒・山砂粒少混 | 11. 暗褐色土 | ロームブロック・山砂粒やや多混 |
| 5. 黒褐色土 | ローム粒・焼土粒・山砂粒少混 | 12. 山砂 | |
| 6. 暗褐色土 | 焼土粒・山砂粒少混 | 13. 山砂ブロック | |
| 7. 暗赤褐色土 | 焼土粒やや多混 | 14. 暗褐色土 | ロームブロック多混 |



第291図 SI-117 (1)



第292図 SI-117 (2)

分は中央からカマド前、出入口付近に広がり、とくに中央部が硬化している。カマドは方形プランから大きく突出する。構築材の遺存は悪く、突出部に両袖の一部がみられる程度である。構築材の山砂は両袖から左右の壁につづいている。突出部の両袖は、被熱により赤くなっている。火床部分底面は深く抉れている。灰のかき出しの結果が、当初の掘りかたのどちらか、またはその双方ともが考えられる。底面上層には、焼土の堆積もみられるが、火床中心部の被熱面は不明瞭である。掘りかた底面は、四隅および東西の壁側がやや深い。堆積土下層は焼土粒がやや多く混じり、東西壁側の床面に、濃い分布がみられる。カマドの遺存状況や遺物の出土状況から、上層の焼却が考えられる。ただし、炭化材の出土は少ない。焼土を多く含む層の上層は、黒褐色土で、ローム粒の包含が少なく、自然堆積と思われる。

図示した遺物は16点である。1～5はロクロ成形の土師器杯である。このうち、3はやや暗い赤褐色であり、須恵器の可能性もある。しかし、断定しがたいため、土師器としておく。比較的遺存のよい土器である。欠損部があるが、やや多く割れており意図的なものか断定しがたい。1・5は大型の土器である。5は火を受けて、器面が荒れ、また、一部が赤黒くなっている。6は千葉産の須恵器杯で、器面の色調が黒色、断面が褐色である。

7・8はロクロ成形の土師器皿である。7は回転糸切り難し後、無調整の土器である。欠損部からひびが入るが、割れてはいない。「麻呂」・「里」の墨書が、体部外面に正位で、対向する位置にみられる。墨書のない部分には、2か所の欠損部がある。ひとつは「里」にやや近く、もうひとつは「麻呂」にやや近い。切れ口は不整な弧状である意図的に打ち欠きされたものと考えられる。器面はかなり荒れている。色調は淡褐色であるが、一部赤くなっている部分があり、火を受けたものと思われる。8は上半部のみの遺存である。

9はロクロ成形の土師器蓋である。小片から図化したものである。

10～12は「房総」型の土師器甕で、いずれも小片から図化した。12は胴部外面に山砂が付着している。

13は千葉産の須恵器甕である。口縁部下の胴部外面に、不整円形状の把手が1か所遺存する。胴部内面

の当て具痕は、ナデによってかなり消されている。また、外面の平行タタキも、ナデによって消える部分がある。色調は灰黄褐色である。底部は五孔であるが、ブリッジ部分はほとんど遺存しない。

14～16は鉄製品である。14は鉄鏃である。鏃により割れているが、比較的遺存がよい。刃部は長三角形で、深い逆刺をもつ形態である。棒状部が短い短頭鏃で、寛被は明瞭な突起がなく、やや柄広がりとなっている。15は釘である。鏃によりやや不明瞭であるが、断面の形態は隅の丸い方形と思われる。頭部はやや厚みもち、あまり強く屈曲していない。頭頂部の形態は方形と思われるが、やや判然としない。16はほぼ完形の刀子である。刃間部分は鏃と欠損のため不明瞭である。

遺物の出土量は多量である。竪穴全体に分布するが、カマド周辺にやや多い。16はカマド内から出土した。カマド内および周辺から出土した土器のうち図示したものは、1・5・10・12であるが、完形に近い状態で遺存するものはない。カマド周辺以外の出土状況をみると、7が東壁階中央の下層から、正位で出土しており、3は中央とカマド右袖の中間的な位置の下層から正位で出土した。また、13の大形破片は北東階下層から出土した。図示しない遺物の出土層位は、床面から確認面におよぶが、床面・下層から出土する遺物が多い。図示しない土器片の点数は1,147点、重さは11.4kgである。

本竪穴出土遺物のうち、7は意図的に置かれた可能性がある。また、16もカマド廃棄の祭祀に関係するかもしれない。その他の遺物では、3に祭祀的な可能性が考えられる。

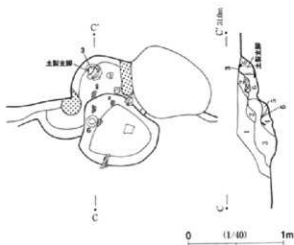
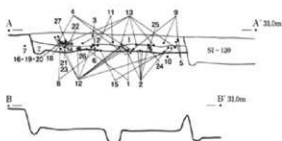
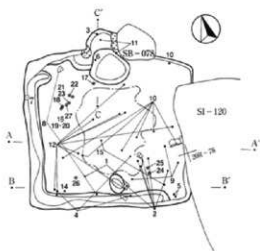
SI-118 (第203・294図、図版72・73・268・269・306～310・312)

遺跡中央部南寄りの20R区に位置する。3.1m×3.3mの方形をなし、深さは0.35mである。主軸はN-19°Eである。北辺にカマドをもつ。東壁側がSI-120と重複しているものの、出土遺物の棒相から本竪穴が新しく、SI-120が古い。また、カマド右袖側等が、SB-078に切られている。出入口ピットをもつが、4本柱の主柱穴は存在しない。壁溝は遺構の重複により東壁側周辺でみられないが、本来は全周するものであろう。床面中央部は硬化している。

カマド経道部から土製支脚(大淵図は木掲載)が直立して出土している。支脚の上部からは、土器片(土師器杯3)が覆いかぶさった状態で出土しており、支脚の下部にも土器片が敷かれていた。支脚は径のやや太いほうが上部の状態である。径の差がそれほど大きくないので、確実に倒位に置かれたとは断定しがたいが、その可能性が高いと考える。また、火床部上では、完形の須恵器杯(6)が、伏せた状態で出土した。この土器の近くまたは下部に別の土製支脚の基部があり、火床部に設置されたものであろう。3との位置関係が判然としないが、3は支脚の近くから出土したことは確実であり、支脚の上に置かれた可能性もある。このような出土状況から、以上の遺物群がカマド廃絶の祭祀に使用されたことを指摘できる。カマドはSB-078に切られて遺存がよくないが、重複していない左袖側の遺存もよくないことから、祭祀にあたって、かなり破壊されたものと思われる。

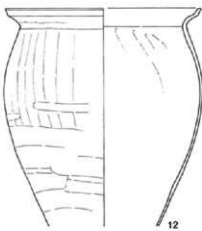
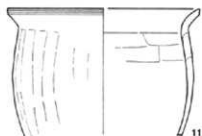
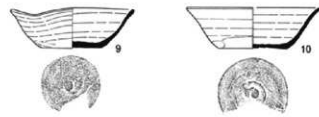
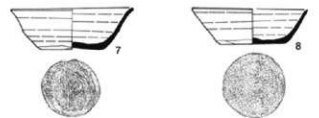
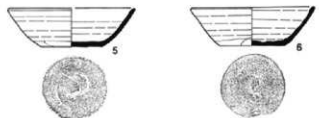
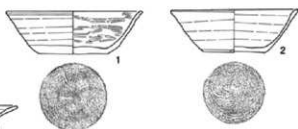
図示した遺物は27点である。1～3はロクロ成形の土師器杯である。1は口縁・体部の一部に打ち欠きの可能性のある部分があるが、他に欠損があり、断定しがたい。2は須恵器の可能性もあるが、黒斑があるので、土師器としておく。須恵器であるならば千葉産である。3は被熱痕跡が著しく、支脚の一部に転用されていた状況がうかがえる。暗灰白色・赤褐色に変色し、須恵器か土師器か判然としない。4はロクロ成形の土師器皿である。

5～10は千葉産の須恵器杯である。7は完形である。内外面の一部に剥離痕があり、火を受けたものと思われる。6も器面のひび割れが著しい。



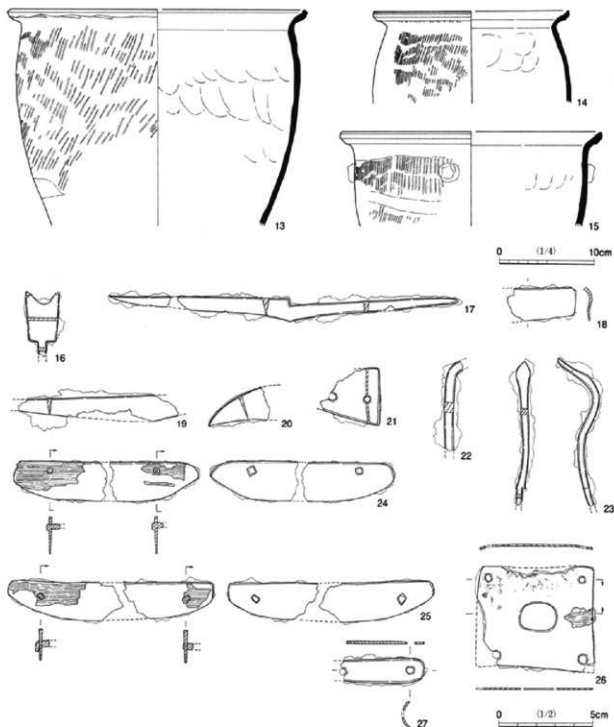
- SI-118土庫
 1 黒褐色土 ローム殻・焼土殻少混
 2 褐色土 ローム殻やや多・ロームブロック少混

- SI-118方マド
 1 暗褐色土 ローム殻・焼土殻少混
 2 黒褐色土 ローム殻・焼土殻・炭化殻少混
 3 黒褐色土 炭化殻多混
 4 赤褐色土 焼土
 5 黒褐色土 焼土殻やや多・ローム殻少混
 6 褐色土 ローム殻・焼土殻多混



0 (1/4) 10cm

第293図 SI-118 (1)



第294図 SI-118 (2)

11・12は「房総」型の土器器甕である。12は武蔵型の甕の影響を受け、器壁が薄い。

13・14は須恵器甕、15は須恵器甕で、いずれも千葉産である。

16～27は鉄製品である。16は鉄鏃で、刃部はほぼ遺存している。刃部は先端が二股に分かれた雁又状であるが、型式としては方頭斧箭式に近いといえよう。刃部から延びている部分は茎で、有舌の無頭鏃である。茎尻を欠損する。23も鉄鏃で、刃部から茎上部まで遺存する。刃部の型式は鑿箭式と思われる。全体に小振りの鉄鏃であるが、細身の長頭鏃といえよう。棒状部と茎の境も同様である。棒状部は大きく曲

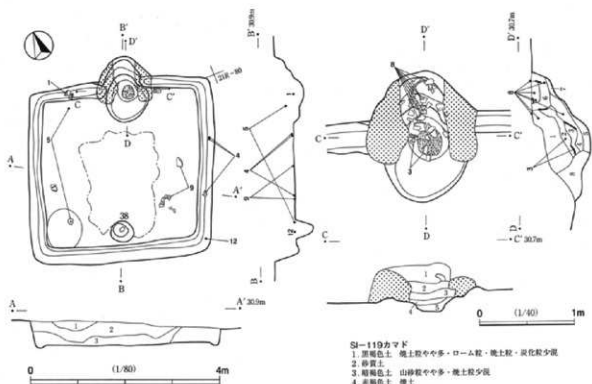
がっている。17・19は刀子である。17は刃部の一部を欠き、錆が著しいが、切先から茎尻まで遺存する。18はやや不明瞭であるが、徳柄み具の片側端部の破片と思われる。目釘があるように思われるが、目釘孔が判然としないため、断定しがたい。背側と端部が同じ方向に若干曲がっているのは、横柄のカーブに沿ったものであろう。24・25も徳柄み具である。ともに中央で割れて一部を欠損するが、遺存のよい個体である。ともに目釘の一部が遺存し、表側には釘の頭部がみられる。そのため、25はX線写真でも孔の形をみることができず、24もごく一部しかみえない。24・25の孔周囲には、横方向に木質が付着している。20は鎌の先端部分である。21は孔が3つある薄い板状の製品である。何らかの留め金具と思われるが、詳細な性格は不明である。やや不明瞭であるが、図示した下側は端と思われ、中間の孔部分は幅が狭くなる可能性がある。22は棒状の鉄製品であるが、図示した上部側が曲がっている。両端とも欠損している。性格不明である。26はくるる甕の使用にともなう扉の取り付け金具である。長方形の薄い板状の製品で中央に大きな孔と、四隅に目釘穴がある。図示した面には、木質が部分的に付着しており、扉の金具であれば、取り付けた表側にあたる。中央の孔はくるる甕の挿入孔、四隅の孔は扉に取り付ける鉄を差し込むための孔である。四辺の端は裏側から裏側にやや曲がっている。27は性格不明の鉄製品である。両端に孔があり、片側は孔の部分で欠損している。図示した状態で、長軸中央が高く、断面形が「C」字に近い形である。図の左右には曲がりがなく、直線状である。図の下側と右側の端部は、欠損していないと思われるが、図の上側の端は欠損している可能性もある。円筒状になるのかもしれないが、判然としない。

遺物量はかなり多い。竪穴全体から出土しているが、北東隅部の分布密度がやや低い。図示した遺物の垂直位置を見ると、床面・下層からの出土が多く、上層は少ない。ただし、壁際はやや埋まっていた可能性がある。図示した杯は遺存のよいものも多く、1・2・10は、床面付近から出土した。7は北西隅近くからほぼ壁面に接した状態で伏せられたように倒位の状態で出土しており、ほぼ壁面に接していた。竪穴・カマド既絶の祭祀にかかわる遺物の可能性がある。また、24・25・26も床面近くからの出土である。鉄製品や上記以外のものも、北西隅と中央との間から集中して出土しており、床面からやや高い位置である。図示しない土器片の点数は1,029点、重さは7kgである。

SI-119 (第295・471図、図版73・269・306・310・312)

遺跡中央部南寄りの20R区に位置する。3.8m×3.9mの方形をなし、深さは0.51mである。主軸はN-23°-Eである。北辺中央にカマドをもつ。南壁際中央に出入口ピットをもつ。南西隅部に大きいピットがあるが、掘立柱建物の柱穴の可能性もある。この柱穴は本竪穴よりも古い可能性がある。壁溝は全周する。床面はハードルーム層まで掘り込んで形成され、出入口部付近から中央にかけて、硬化面がある。耕作による擾乱が、北東側、北西側、南東側等の各所にみられる。カマドは、右袖の遺存が悪い。構築材は山砂主体であるが、下部はローム粒・暗褐色土を含む。両袖内壁は赤色化している。カマド前側は、擾乱が深く入っている。その影響によって、焼土等の堆積土は、下方に落ち込んでいるものと思われる。掘りかたは、コーナー部分が若干深い。

図示した遺物は11点である。1・2・4は千葉産の須恵器杯とした。このうち、4は黄色味を帯びる灰色・暗灰色の色調であり、確実に須恵器である。2は黄褐色の色調であるが、底部外面にヘラ切り痕が残り、色調も一部に灰色味を帯びることから、須恵器でよいと考える。1は褐色の色調であり、土師器の可能性もある。しかし、底部外面に残る痕跡がヘラ切りと思われることから須恵器とした。また、底部外面に「+」のヘラ書きがある。3はロクロ成形の土師器杯である。器面が荒れ、一部はずむ部分がある。

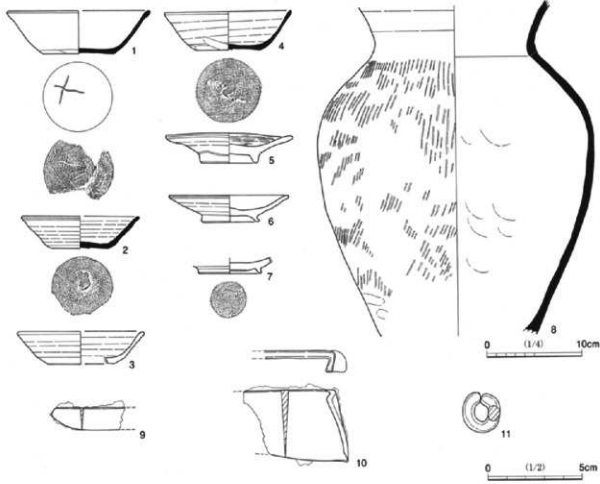


SI-119土層

1. 層褐色土 ローム粒少混
2. 赤褐色土 ローム粒・ロームブロック少混
3. 褐色土 ローム粒・ロームブロック多混

SI-119カマド

1. 層褐色土 焼土粒やや多・ローム粒・焼土粒・炭化粒少混
2. 赤褐色土
3. 層褐色土 山砂粒やや多・焼土粒少混
4. 赤褐色土 焼土
5. 層褐色土 山砂粒少混
6. 赤褐色土 山砂粒多混
7. 層褐色土 ロームブロック多混
8. 焼瓦



第295図 SI-119

火を受けていると思われる。4は比較的遺存がよい

5・6・7はロクロ成形の上師器高台付皿である。5は成形に近い遺存状態である。火を受けて、一部、赤褐色・黄白色に変色する部分がある。器面も荒れている。6は口縁・体部の一部が割れている。1か所欠損部があるが、ほぼ成形である。7も器面がかなり荒れている。

8は千葉産の須恵器甕である。色調は黄褐色・暗黄褐色である。火を受けて、器面全面が荒れている。胴部外面には、一部で山砂も付着している。

9～11は金属製品である。9は鉄製の刀子で、切先部分の破片である。10は鉄鎌の基部である。11は鉛を含むと思われる環状の製品であるが、性格は不明である。小型製品のわりに重さ感がある。色調は灰白色であるが、鉛が風化したものと思われる。耳環状の形態であるが、環状に曲げられた陶端部は密着しており、隙間がない。

その他、図示していないが、須恵器甕の胴部片が出土している。この甕の胴部外面上位には、暗緑色の釉が大きくかかっている。内面は細かい目の同心円文当てで具の痕跡がみられ、下部は若干の降灰釉がかかっている。色調はやや緑色味を帯びる灰色で、胴部外面下位はわずかにセピア色も帯びる。焼成は非常に硬質で、東海産と思われる。やや大型の器形で、短頸や把手付きの器種になるかもしれない。

出土遺物量は比較的多い。平面分布は竪穴全体におよび、出土層位も床面から上層までわたっている。図示した遺物のうち、5の主要部は南西隅近くの床面から正位で出土し、4の主要部は東壁南寄りの壁溝上から正位で出土した。また、12は4の主要部近くの南東隅部床面から出土した。4・5以外の図示した杯皿類は、それほど遺存がよくないが、7を除いて下層から出土している。そのうち、1は北壁西寄りの壁溝上から出土した。また、3はカマド内からの出土である。カマド部分からは、8が多数の破片となって埋道部の上層から出土している。その他、9の胴部片が、東壁側中央以南の床面から出土した。7・10・11は上層出土である。図示しない土器片の点数は754点、重さは5.7kgである。

SI-120 (第296・472図、図版74・263・312)

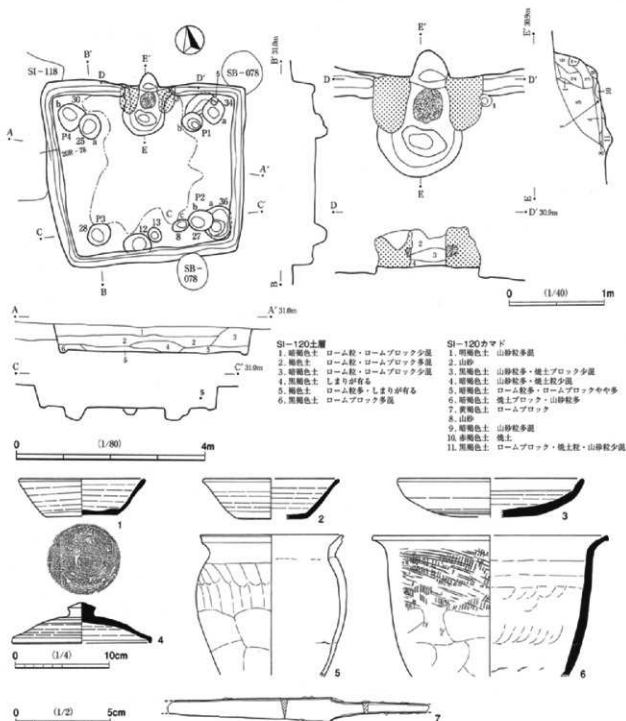
遺跡中央部南寄りの20R区に位置する。3.8m×4.2mの逆台形的な方形をなし、深さは0.53mである。主軸はN 11°Eである。北辺中央にカマドをもつ。西壁北側隅でSI-118と重複する。本竪穴が古く、SI-118が新しい。壁溝は全周する。土柱穴4か所と出入口ピットをもつ。土柱穴は南西隅のP3を除いて、2か所程度の掘込みがある。また、出入口ピットも2か所にみられた。土柱穴の深さは、P2の中央寄りのピットを除いて、30cm前後でまともまっている。このことと出入口部の様相から、建て替えの可能性のほうが、掘りかたや柱の抜き取りの結果よりも、高いと考える。床面は、柱穴間からカマド両脇まで、硬化面が広がる。カマドは、方形プランからの突出が少ない。構材材は山砂主体で、両内壁の一部は赤色化している。また、火床部も赤色化した範囲が明瞭である。床面との高さの差はない。火床面の手前が窪んでいるが、浅く、灰のかき出しの結果と考える。

図示した遺物は7点である。1・2は新治窯産の須恵器である。1の色調はやや黄色味を帯びる灰色であるが、火を受けて、かなり赤みを帯びる部分がある。3も新治窯産の甕である。1～3は白雲母を含む。4は須恵器甕である。色調はやや暗い灰色で、胎土は白色粒を含むが、白雲母は完全に溶けたためか、みられない。産地は確実ではないが、新治窯産としておく。

5は小型の上師器甕である。胎土は長石等の小石を多く含む。白雲母の含有もめだつ。胴部外面上部の調整はナデおよび弱いヘラケズリであるが、ヘラケズリは強い(ヘラ)ナデというほうが適切かもしれない

い。いずれにしても砂粒は沈められている。胴部外面下位は、一転して横位の強いヘラケズリが施されている。器壁は厚く、ずんぐりした作りである。胴部外面下位の調整がヘラミガキではなく、器形も小型であるが、胎土等の特徴から常総型の甕の一種と考える。なお、底部周辺以外はひびが入る程度で遺存するため、甕に転用された可能性があるかもしれない。外面上・中位は赤みが強く、内面上・中位はやや黒ずんでいる。

6は新治窯産の須恵器甕または甕である。胴部内面に指頭痕と思われる細かい連続した痕跡がある。三和底跡群産の須恵器とやや似た雰囲気調整であるが、あまり窪んではいない。なお、胎土に白雲母が多



第296図 SI-120

くみられることから、産地は新治窯としてよいと考える。

7は鉄製の刀子である。遺存がよい個体であるが、切先を欠き、茎尻もわずかに欠損していると思われる。茎は中央から茎尻側が曲がっている。

図示した遺物のうち、1は遺存がよく、口縁・体部の一部を欠損するだけである。カマド右袖皿の床面から正位で出土した。遺存部分は若干割れているが、出土時点では分離していない。欠損部が打ち欠きされているか断定しがたい。5も、底部周辺を欠損する以外は遺存する土器である。北東隅近くからやや上向きの斜位で出土した。出土層位については、図示よりも深い印象があり、むしろ下層出土としてよいと考える。7は中央西寄りの床面からの出土である。その他の遺物は、あまり遺存がよくなく、出土層位は概して中・上層である。遺物の平面分布はカマド周辺にやや多い。中央から南西側にかけて希薄な部分があるが、壁際はおおむね分布している。図示しない土器片の点数は469点、重さは3.7kgである。

SI-121 (第297図、図版74)

遺跡中央部南寄りの20R区に位置する。調査範囲は方形プランの北東隅付近であり、それ以外は調査区外にあたるため、一部の調査といえよう。竪穴の大きさは不明であるが、深さは0.44mである。カマド・出入口ピットは検出されなかった。主軸は不明である。壁溝は北壁と東壁南側で巡っている。東壁の北側では巡っていないが、わずかな痕跡を残す。浅く巡っているとみることもできる。竪穴内には2か所のピットが存在している。ひとつは北東隅壁直下に位置し、もう一つは北壁の壁溝に位置する。2つのピットの間隔は、1mである。北東隅のピットはSB-079の柱穴であり、もう一つのピットも掘立柱建物の柱穴であろう。SB-079との新旧関係は不明である。ピット間から中央にかけての床面が帯状にやや窪んでおり、攪乱を受けていると思われる。硬化面は不明である。壁際の堆積土はローム粒を多く含むが、上・中層はローム粒の含有が少なく、自然堆積と思われる。なお、一部は上層から攪乱を受けていると思われるが、肉眼では判然としない。

図示した遺物は1点だけで、1は千葉産の須臾器甔または甕である。色調は一部が褐色であるが、黒褐色の部分が多い。断面は褐色である。上層から出土した。遺物の出土は、北壁際でやや少ないが、その他は散って分布している。出土量は調査範囲が少ないため、少量であるが、調査区外を考慮すると、中量程度は出土するものと思われる。図示しない土器片の点数は207点、重さは1.8kgである。



第297図 SI-121

SI-122 (第298図, 図版75・269・308)

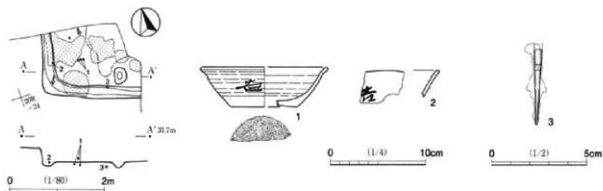
遺跡中央部南寄りの20R区に位置する。調査範囲は方形プランの南西隅付近であり、それ以外は調査区外にある。出入口ピットが南壁際にある。このことから、カマドは調査区外の北壁に位置することが確実である。主軸方位はN-17°-Eである。堅穴の規模については、出入口ピットが主軸の中軸線上にあると仮定すると、南辺の長さが3.3m程度と推測できる。正確な規模は不明であるが、小規模な堅穴であるといえる。深さは0.34mである。調査範囲内では、壁溝が巡っている。床面は平坦で、中央が硬化している。堆積土下層は焼土を多く含む土層が堆積している。また、ローム粒や山砂の含有も多い。一部に炭化材もみられる。上層は黒褐色土で、ローム粒・焼土粒の含有は少ない。下層は上層の焼却または焼失による焼土が多く堆積するが、その後は自然堆積と思われる。

図示した遺物は3点である。1・2はロクロ成形の土師器杯である。1は口縁部から底部まで1/3程度遺存している。体部外面に墨書「吉」が正位で書かれている。墨痕はかなり濃い。体部下部の調整は手持ちヘラケズリの可能性もある。内面はヨコナデによりロクロ目がかなり消されて、凹凸が少ない。器面はやや荒れている。2は口縁・体部の小片で、1と同様に、体部外面に「吉」の墨書が正位でみられる。墨痕は薄い。3は棒状の鉄製品である。かなり細い作りで、先端は尖っている。表面には、横位の筋が多くみられる。鉄鏃の茎または鎌、釘などが考えられるが、特定しがたい。

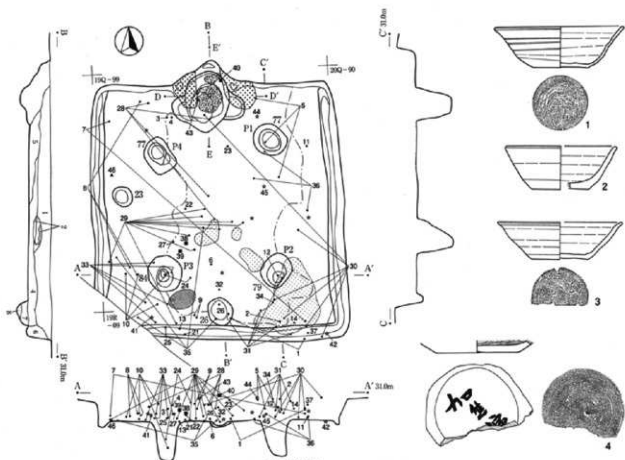
1・2・3はいずれも床面・下層から出土している。遺物は調査範囲内に万遍なく散って出土した。図示しない遺物の層位は、床面から上層にまでわたる。図示しない土器片の点数は131点、重さは1.2kgである。調査範囲が少ないため少量であるが、堅穴総体の遺物量は、分布状況から、規模にみあう中量程度が予測される。

SI-123 (第299～301図, 図版75・269・270・306～308・312・316・317・319・320)

遺跡中央部西寄りの19Q区に位置する。5.4m×5.4mの方形をなし、深さは0.51mである。主軸はN-4°-Eである。北辺にカマドをもつ。南西隅部のわずかな部分が、調査範囲外に入っているため、発掘していない。主柱穴4か所と、南壁際中央に出入口ピットをもつ。また、西壁際中央やや北寄りの位置にも、深さ23cmのピットがある。出入口部にふさわしい位置であるが、対向する東壁側にカマドの痕跡がみられないため、出入口部のピットとは異なり、本堅穴に伴うものかも不明とする。壁溝はカマドのある北壁で伴わないが、他は巡っている。床の硬化面が、東西の壁側を除いてみられる。中央から南東隅の床面にかけて、焼土の分布範囲がみられ、出入口ピットと南西側柱穴(P3)の間には、灰層が堆積している。焼土



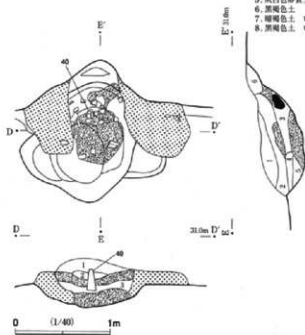
第298図 SI-122



SI-123土層

1. 黒褐色土 ローム粒・焼土粒少量
2. 赤褐色土 焼土
3. 黒褐色土 灰多・焼土粒少量
4. 褐色土 ローム粒多・焼土粒少量
5. 灰白色砂質土
6. 黒褐色土
7. 黒褐色土 ローム粒やや多・焼土粒少量
8. 黒褐色土 17-A粒少量・しまりが無い

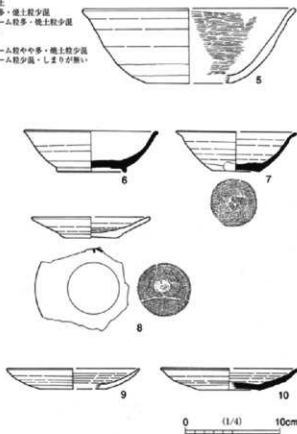
0 (1/80) 4m



SI-123カマド

1. 黒褐色砂質土
2. 黒褐色土 山砂粒多・焼土粒少量
3. 灰褐色土 山砂粒多・焼土粒・灰やや多量
4. 黒褐色土 山砂粒多量
5. 黒褐色土 山砂粒多・焼土粒やや多量
6. 黒褐色土 山砂粒・山砂ブロック多・焼土ブロックやや多量

0 (1/40) 1m



0 (1/4) 10cm

第299図 SI-123 (1)

層と灰層は、堆積土中層にも若干堆積している。掘りかた底面は、四隅が深い。

カマドは、構築材の山砂がかなり前方に流出しており、上部の遺存が悪い。残っている袖下部の構築材は、粘性のある山砂主体で、よくしまっている。右袖の下部は堅緻であるが、黒色味が強い。火床部奥側では、直立した土製支脚（40）が出土しており、現位置をとどめるものである。火床部上には、焼上が厚く堆積している。焼上層は山砂や灰を多く含む層（カマド3層）を間層として、上下の2層に分かれる。土製支脚の基部は間層中に位置し、最終的な火床面が、次第に上方に上がってきたことがわかる。しかし、カマド下部の底面は床面よりもかなり深くえぐれている。底面は灰のかき出しや、カマドの作り変えに伴って、深くなっていったのであろう。

図示した遺物は46点で、多量である。1～5はロクロ成形の土師器杯である。4・5は大型の土器である。4は底部外面に「加□（集カ）□」の墨書がある。墨痕が薄く、F2文字の判読が難しい。内面は黒色処理が施されている。1は80%程度の遺存であるが、他の土器は遺存が少ない。

6は灰釉陶器碗で、90%の遺存である。口縁・端部の2か所が不整な「V」字状に割れており、一方は接合するが、もう一方は欠けている。欠損部はそれだけである。2か所はほぼ180度離れて位置し、「V」の頂点を結んで割れが入り、主要部は2片に分かれる。「V」字状の割れが、意図的なものかそうでないか断定しがたい。底部内面はやや釉が剥落している。胎上は白色粒を多く含む。猿投産で、黒笹14号窯式と思われる。

7は須恵器杯である。色調は、外面がほぼ暗灰色、内面がやや暗い黄灰色で、千葉産の須恵器である。

8～10は皿で、8・9はロクロ成形の土師器皿である。10は黒色味の強い部分があることから、須恵器としたが、土師器である可能性も指摘できる。8は体部外面に墨書があるが、欠損部にかかり、残りがわずかであるため判読できない。

11～21はロクロ成形の土師器杯で、墨書のある破片である。11～20は口縁・体部の破片である。この中には、器種が皿となるものがあるかもしれないが、判然としない。墨書はいずれも体部外面に記されているが、判読できるものはない。正位に書かれているものとして、13・16・17・20・21があげられる。

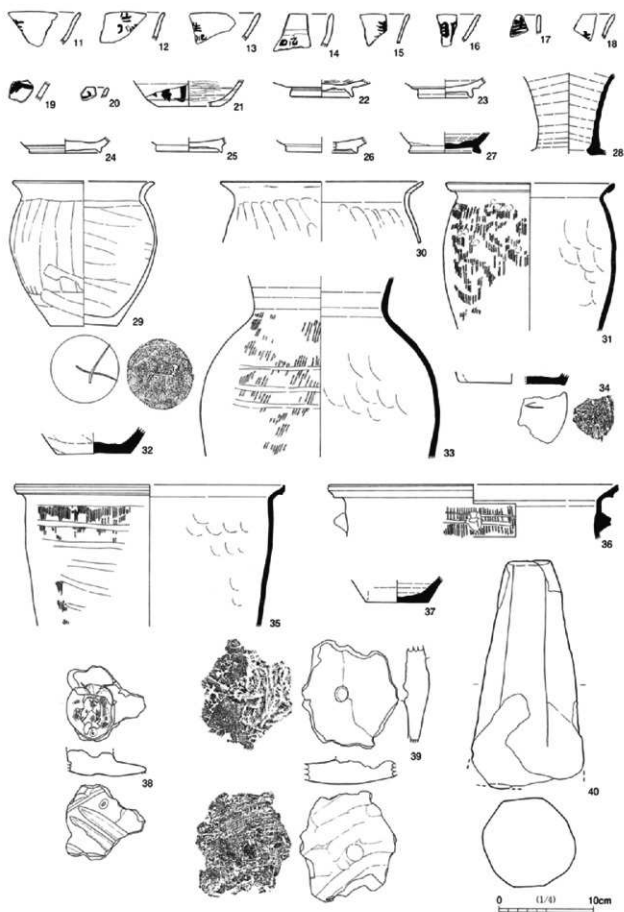
22～26はロクロ成形の杯（碗）皿類の高台部分である。22は皿、24は碗になると思われるが、その他は判然としない。また、いずれも土師器としたが、23は須恵器の可能性も否定できない。

27・28は須恵器長頸壺である。27は底部の破片で、色調は暗褐色、暗灰色である。底部内面に降灰釉の痕跡がみられる。28は頸部の破片で、色調は褐色、暗灰色である。外面の一部に灰緑色の自然釉が付着している。ともに猿投産等の東海産の須恵器と思われる。

29・30は土師器甕で、「房鉢」型の甕である。29はやや小型の甕で、比較的遺存がよい。30はやや大型で、器壁が薄い。29の底部外面には「+（×）」のヘラ書きがある。

31～34・37は須恵器甕、36は須恵器瓶である。35は須恵器甕、瓶双方の可能性がある。いずれも千葉産の須恵器である。色調は、34・35・37が灰色を基調とするが、31・32・36は褐色を基調とする。31はやや灰色味があり、36はやや深い色調である。33の色調は黒褐色である。34は底部外面にヘラ書きがある。2条線がみられるが、欠損部にかかるため、交差するかどうか不明である。36の把手は、方形がかなり崩れた形態である。

38・39は性格不明の土製品である。同一個体または同一の部材といえる土製品である。やや扁平で、不整形な形状である。色調は、片側が褐色、反対側は黒色で、焼成温度が低いように思われる。39の黒色側（凹



第300图 SI-123 (2)



第301図 SI-123 (3)

の上部)は、およそ半分強の面が平滑であるが、もう半分弱の部分は凹凸があり、布目痕がみられる。円形または五角形状の押圧痕が中央部にみられる。平滑な部分の端、布目痕部分に接するところにも位置している。反対側(図の下部)は、色調が暗黄褐色で、全体に滑らかであるが、筋状の痕跡が何条かみられる。ナデ調整または磨耗により、判然としないが、縄蓑タケキの痕跡かもしれない。38の図上部は、一段高い部分と、低い部分がある。高い部分は凹凸があり、39同様、布目痕

がみられる。低い部分は平滑である。この面は褐色の色調である。その反対側の面は、色調が黒色で、一部に強いナデがみられる。その部分以外は、やや細かい凹凸がある。縄状の痕跡が判然としない。39の状況から、瓦を意識した土製品であるように思われるが、断定しがたい。あるいは屋根の上ののせた土が焼けたものとも思われるが、憶測の域をでない。

40は土製支脚である。上部から基部まで遺存する良好な個体である。上部は不整な円柱状であるが、基部の一部が平たくなっており、断面が三角形である。

41~45は鉄製品である。41は鉄鏃である。比較的よく遺存するが、錆による表面の剝離が著しい。刃部は広身の長三角形の形態であるが、逆刺部分が裾広がりになると思われる。逆刺はやや深く、片側を欠損する。棒状部が短い短頸鏃で、茎の上部まで遺存すると思われるが、棒状部と茎の境が不明瞭である。42も鉄鏃で、棒状部と茎の破片である。柄の木質が茎を覆っている。茎は茎尻まで遺存すると思われる。茎がかなり短いため、棒状部も短い短頸鏃と思われ、刃部近くまで遺存している可能性がある。筈は突起がなく、裾広がり、または直角闊と思われるが、X線写真でも不明瞭である。43は紡錘車である。錆に覆われているが、X線写真で中央に円孔をみることができる。やや厚みのある作りである。44・45は刀子で、ともに刃部の破片である。44は切先をわずかに欠く。

46は砥石である。石材は流紋岩質凝灰岩である。

遺物量は多量である。竪穴全体から出土しているが、北西隅側の密度がやや低い。図示した遺物の出土は、南側にやや多い。垂直位置は、床面から上層にわたる。遺物の多くは、周囲から廃棄されたものであろう。カマド内では、直立した支脚40の奥から、もう1か所の土製支脚が横に倒れて、40の基部と同じ高さから出土した。上部を欠損する支脚で、実測図は掲載していない。また、上層であるが、43が出土している。その他、カマド内からは、土器片が多く出土しているが、図示したものは少ない。遺存のよい遺物の出土状況を見ると、1の主要部は南壁際中央の下層から横位で出土し、6は出入口部の先、P2・P3間の下層から、主に2片に割れているが、正位で出土した。図示しない土器片の点数は2,104点、重さは15.6kgである。

SI-124 (第302図, 図版76・270・271)

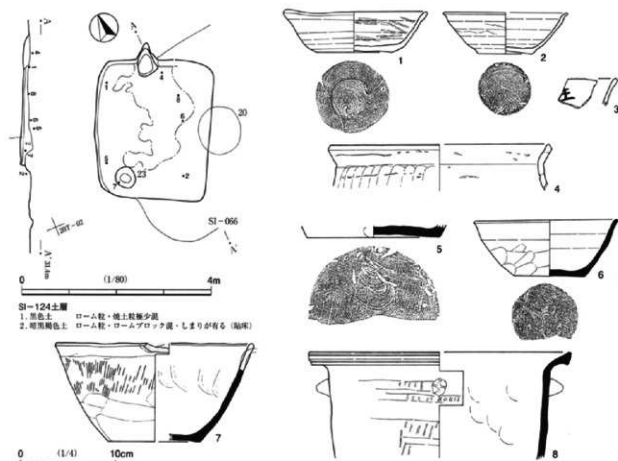
遺跡南部北東寄りの20S区に位置する。2.8m×2.1mの長方形をなし、深さは0.24mである。主軸はN-26°-Eである。北辺にカマドをもつ。弥生時代の竪穴住居跡SI-066を切っている。深さ23cmのピットが、カマドに向かって左側から検出された。出入口ピットの可能性もあるが、隅に寄っているため、断定

しがたい。また、東壁側中央と思われる部分が擾乱を受けている。床面の大部分は、SI-066の堆積土上に作られており、カマド前から中央付近が硬化している。床面を形成する土層はローム粒・ロームブロックを含むしまりのある土層である。床面は、住居構築時に、貼られた可能性もあるが、色調が暗黒褐色土であることから、SI-066の堆積土が居住に伴って硬化しただけかもしれない。塋溝は巡っていないが、SI-066の堆積土上に造られていることと、浅いことから、確実に存在しないか懸念がある。カマドは、木根の擾乱と浅いことによって、遺存が悪い。構築材の山砂は、右袖側では若干流出しているが、左袖側はまったく遺存していない。火床部上には、若干の焼土が堆積しているが、被熱した赤色面は検出されなかった。堆積土はローム粒の包含が少ない黒色土で、自然堆積と思われる。

図示した遺物は8点である。1・2・3はロクロ成形の土師器杯である。1の内面は粗いヘラミガキが施されている。底部は中央に回転糸切り痕が残るが、周縁は回転ヘラケズリが施されている。2は底部が遺存するが、口縁・体部の遺存は1/3弱程度である。底径は小さく、やや突出している。回転糸切り痕が全面に残り、その後は無調整である。2は重複するSI-066の出土遺物として取り上げられたが、明らかに本竪穴に関わる遺物であるため、本項で掲載した。ただし、遺物注記はSI-066のままである。3は口縁・体部の小片で、外面に正位の墨書がみられる。欠損部にかかっているため、判読不明であるが、「生」・「任」等の文字が考えられる。

4は「房瓮」型の土師器甕である。口縁端部がわずかに内湾気味である。

5は須恵器甕の底部周辺の破片である。径の大きい底部は須恵器の器形であるが、外面の成形・調整技



第302図 SI-124

法は、回転系切り後手持ちヘラケズリが施され、土師器的である。色調は赤褐色であるが、内面の一部に灰黄色の部分がある。遺存部が少ないが、黒斑はみられない。土師器的な様相もあるが、器形を優先し、千葉産の須恵器としておく。6は千葉産の須恵器杯である。7ほどではないが、若干口縁部が波打っており、やや作りが雑である。器高が深く、体部のヘラケズリも中位以上まで施されている点も7と似ており、やや鉢的な器形である。色調はぶい黄褐色を基調とするが、内外面の一部に灰色味を帯びる部分がある。7は須恵器片口鉢で、千葉産である。口縁部がかなり波打っており、やや雑な作りである。口縁部にやや突き出た部分があり、片口になると思われるが、その部分で破損している。内面の当て具の痕跡は、ナデ・ヨコナデにより、かなり消されている。底部外面は手持ちヘラケズリが施されている。色調は褐色・灰褐色である。体部下外部面・底部内面は、火を受けて黒ずんでおり、やや褐色味も強い。焼成は良好で、器面はあまり荒れていない。8は千葉産の須恵器甌である。胴部上位に頂部の尖った把手が添付されている。

遺物量は少ないが、堆積土が浅いことを考慮する必要がある。平面分布は、竪穴全体に散っており、著しい偏りはみられない。出土層位は、堆積土が浅いため、すべて下層である。図示した遺物はすべて破損しているが、1・6は比較的遺存がよい。図示しない土器片の点数は106点、重さは1.2kgである。

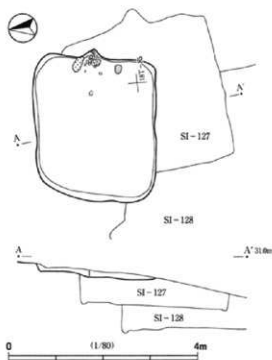
SI-126 (第303図、図版76)

遺跡南部中央やや西寄りの18T区に位置する。3m×2.6mの隅丸長方形をなし、深さは0.26mである。主軸はN-96°-Eである。東辺にカマドをもつ。SI-127・SI-128と重複し、それらを切っている。床面の多くは、SI-127の堆積土中に形成されているが、貼り床が施されず、硬化面もみられないため、重複部分の床面はやや不明瞭である。しかし、重複しないカマド左側の北東隅付近の床面は、ローム層中にあるため明瞭である。壁溝・出入口ピットは検出されなかった。カマドは、堆積土が浅いため、遺存が悪い。左袖は若干遺存するが、右袖は構築材が流出して失われている。火床部奥側の位置から、焼成粘土塊が出土している。調査時においては土製支脚の代用品とも考えられたが、非常に脆い性質であるため若干疑問も残る。

図示できた遺物はない。出土量は少量で、土器片の点数は137点、重さは0.9kgである。カマド内にやや多くみられるが、その他はまばらな状態で出土している。出土遺物のほとんどは、奈良・平安時代の土器片で、内訳は、土師器杯、「房総」型の土師器甕、常総型の土師器甕、千葉産の須恵器杯・甕・甌である。新治窯産の須恵器杯・甕もあるが、1～2点程度で少ない。比較的遺存のよい土師器杯の中に、回転系切り後無調整のものがみられる。

SI-127 (第304・472図、図版77・271・306・308・310)

遺跡南部中央やや西寄りの18T区に位置する。3.1m×3.2mの方形をなし、深さは0.79mである。主軸はN-83°-Eである。東辺にカマドをもつ。SI-126・SI-128と重複するが、SI-126よりも古く、SI-128



SI-126土層
1. 明褐色土、ロームブロックやや多、ローム粒・山砂粒少量、しまりが有る

第303図 SI-126

より新しい。SI-126が本竈穴の北側半分、カマドに向かって左側半分に存在するが、SI-126は浅いため、壁の上部と堆積上の一部を損なっているだけである。壁溝はカマドの左側から左壁の多くに巡るが、その他には検出されなかった。また、出入口ピットも見つからなかった。床面は、半分弱程度がSI-128の地積土中に作られている。床面を形成する上層は、ローム粒・ロームブロックを多く含む暗黄褐色土で、SI-128の堆積土上に、貼り床が施されたことがわかる。床面は、左側がやや高く、右側がやや低い。SI-128と重複した部分はやや沈んだ可能性があると思われる。硬化面は、壁際を除いて広範囲にみられる。カマドは袖部の遺存が悪く、とくに前側をかなり失っている。流失した山砂が左右の壁際にみられる。しかし、後天井はわずかに遺存している。火床部から袖内壁は全体に赤くなっているが、中央部がとくに火を受けて、硬化したロームブロックがみられる。その上部は焼土がやや多く堆積する。堆積土は、ローム粒・ロームブロックを多く含む土層もあるが、最下層の6・7層を除いて、暗褐色土・黒褐色土であり、自然堆積と思われる。

図示した遺物は8点である。1・2は千葉県産の須恵器杯である。色調は、1が黒色・黒褐色、2がやや黄色味を帯びた灰色・暗灰色である。1の断面内部は黄褐色である。

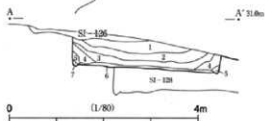
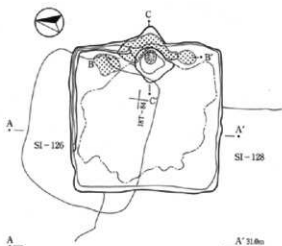
3は「房総」型の土師器甕である。胴部中位付近から底部までの一部が遺存している。底部外面は、ヘラケズリが施されている。4は千葉県産の須恵器甕である。断面内部の色調が複層となっている。1縁部は、中心が灰色で、その周囲がセピア色、さらにその周囲は器表面となり灰色である。胴部中位部は、中心がセピア色、周囲の器表面が灰色である。器面の色調はやや黄色味を帯びるところもあるが、灰色が強い。5は常総型の土師器甕である。胴部外面上位に接合痕と思われる痕跡がある。

6・7・8は鉄製品である。6は棒状の製品であるが、図示した上端の片割に厚みがある。頭部をL字形に折り曲げた釘、または鉄鎌と思われるが、釘の可能性が高いと考える。7は刀装具の可能性が考えられる。鞘の装具と思われるが、鞘を巻く楕円形の環状部分の一部が欠損している。環状部分の長軸中央の一方から、直線的に延びた部分がある。この部分は環状部の左右から90度近く折り曲げたものを、束ねていると思われる。途中で欠損しており、どこまで続くか不明であるが、この部分が装飾的なものであれば、あまり長くは続かないものと思われる。8は穂柄み具と思われる。左右どちらかの端部に近い破片である。頸部は遺存していないが、わずかな欠損と思われる。刃部中央は磨り減って凹んでいる。目釘および目釘孔は錆のため、判然としない。

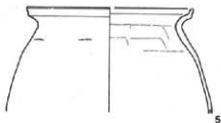
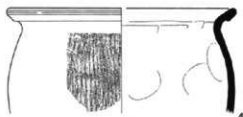
遺物は竈穴全体から出土しているが、分布密度はあまり高くない。図示した遺物は、いずれも破損しており、遺存の良好なものはない。しかし、3はカマド内からいくつかの破片が集中して出土した。近くから5が出土しているが、別個体の小片である。3・5以外に図示した遺物の出土層位は下層から上層におよぶ。しかし、下層から出土した2・6の場合でも、平面位置をみると中央部付近であり、壁際は埋まっていた可能性がある。図示しない土器片の点数は530点、重さは4.6kgである。

SI-128 (第305~308図、図版77・271・272・312・319・321)

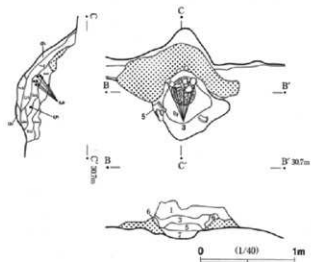
遺跡南部中央やや西寄りの18T区に位置する。5.5m×6.1mのやや横長の方形をなし、深さは0.71mである。主軸はNである。北辺中央にカマドをもつ。北東隅割で、SI-126・SI-127と重複し、それらに切られている。ただし、本竈穴はかなり深い遺構であり、重複部分でも、壁・堆積土の中位以下は遺存している。また、東壁南側で、弥生時代末~古墳時代前期の土坑と思われるSK-171と重複している。支柱穴が4か所検出されたが、出入口ピットは見つからなかった。壁溝は、東壁と南壁・西壁の大部分・北壁の



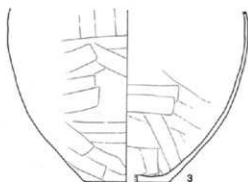
- SI-127土層
1. 暗褐色土 ローム殻・ロームブロック多・焼土殻少量
 2. 暗褐色土 ローム殻中多・ロームブロック・焼土殻・炭化殻少量
 3. 暗褐色土 ローム殻・ロームブロック多・焼土殻・炭化殻少量
 4. 暗褐色土 ローム殻・ロームブロック多・山砂殻少量
 5. 黒褐色土 ローム殻少量
 6. 暗赤褐色土 ローム殻・ロームブロック多・焼土殻少量・しまりが有る(陥床)
 7. 黄褐色土 ロームブロック多



0 (1/4) 10cm



- SI-127カマド
1. 暗褐色土 ロームブロック・山砂殻多・ローム殻・炭化殻少量
 2. 暗褐色土 ローム殻・焼土殻・山砂殻・山砂ブロック多
 3. 暗褐色土 焼土殻・炭化殻多
 4. 黒色土 炭化殻多・焼土殻やや多
 5. 暗褐色土 焼土
 6. 暗褐色土 焼土ブロック
 7. 赤褐色土 ロームブロック・焼土ブロック多
 8. 黒褐色土 ロームブロック多



0 (1/2) 5cm

第304図 SI-127

カマド右側で巡っている。南半部で二重になっており、建て替え、または壁の拡張が行われた可能性がある。市壁で途切れている部分は出入り口かもしれないが、かなり東側に寄っており、断定しがたい。北西隅側付近では不明瞭であるが、床面がやや低くなっており、浅いが巡るものと思われる。したがって、壁溝はほぼ全周すると思われる。床面は、柱穴間が硬化している。カマドの遺存はかなりよく、後天井がみられる。また、左袖から前天井にまわる部分も若干遺存している。右袖の前側は、残りが悪い。構築材は山砂を主体とし、内壁はやや赤色化している。火床部には、焼土が堆積している。底面は床面よりも深いが、灰のかき出しの結果であろう。掘りかた底面は南西隅部を除いて中央部よりもわずかに低いが、明瞭な掘り込みはない。堆積土は、ローム粒・ロームブロックを多く含む層もあるが、全体的には暗褐色土主体で、レンズ上に堆積する。下層の5層にローム粒が少なく、自然堆積と思われる。

図示した遺物は41点で、多量である。1～6は非ロクロの土師器杯である。すべての土器が内外面全面に赤彩が施されている。1は比較的器高があるが、2～6は扁平で、皿または盤状の器形をもつ土器である。1は器面の磨耗により、内外面の赤彩がやや落ちていいる。また、2・5も内面の一部が荒れて、赤彩が落ちている部分がある。

7～13は須恵器杯である。7～9以外では、10はかなり遺存がよい。11の胎土は、長石等の白色粒と若下の小石を含むが白雲母はみられない。ややしっとりとした質感で、色調は暗灰色である。底部の切り難し技法は回転ヘラ切りである。産地が新治窯と特定できるか、やや懸念がある。それ以外は、新治窯産である。7の色調は黄色味を帯びた灰色で、10の内面・口縁部外面は黒ずんでいる。13は器壁が厚く、底部には回転ヘラ切り痕が全面に残る。やや雑な作りである。また、9・10・12・13は、器面が荒れている。

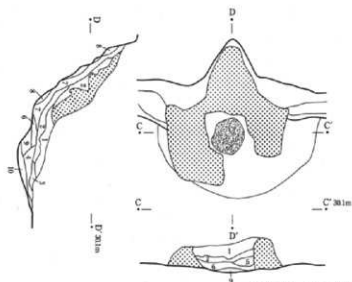
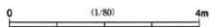
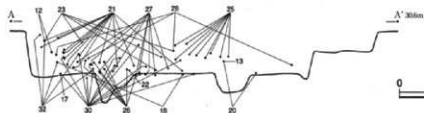
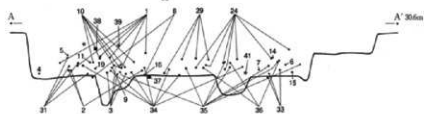
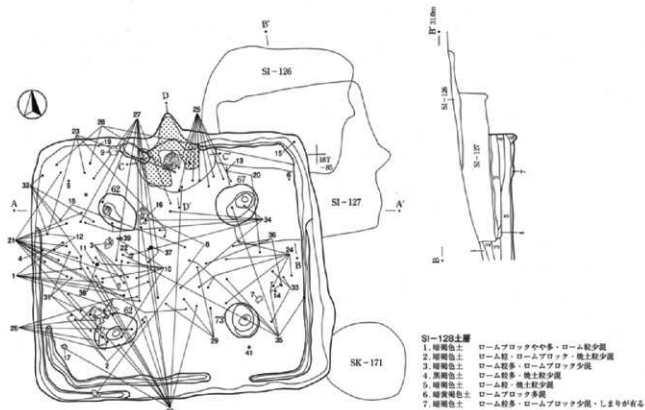
14～16は須恵器蓋である。いずれも新治窯産の須恵器である。14は1縁部が直角に近く折れ曲がり、15はかえりをもつ蓋である。16は蓋のつまみ部分で、中央が凹むやや大きめのものである。14・15よりも径の大きな蓋となると思われる。

17は、新治窯産の須恵器高台付杯を視または研ぎ具に転用したものである。上から見た形は、ほぼ円形で、口縁・体部の全周を除去している。割れ口は若干磨られているが、全体に尖った状態に加工されている。高台部に閉まれた底部外面には、数条の磨り痕または研ぎ痕がみられ、高台部を上にして使用されたことがわかる。胎土は白雲母や白色粒等の含有が多く、器面がざらつくため、あまり明瞭でないが、底部外面はやや滑らかである。一方、底部内面側にも筋状の痕跡が若干みられる。使用された可能性があるが、単なる傷かもしれない。平滑面の有無については、判然としない。

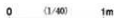
18・19は新治窯産の須恵器蓋である。同一個体と思われる。

20は土師器甕または鉢と思われるが、類例の少ない器形である。小片から復元して図化したものである。鉢的な形状を示している。口縁部の作りは後述する25と類似し、胎土は白雲母を多く含み、色調は淡褐色である。体部外面はヘラミガキ的なナデが施されており、滑らかである。また、内面はヘラナデ・ナデが施され、外面ほど滑らかではないが、比較的いい調整である。焼成は良好である。これらの点から常総型甕と似た製作技法であり、産地が同一とも考えられる。

21は新治窯産の須恵器甕で、バケツ形の甕である。胴部外面上・中位には横方向の平行タキが残り、下位は手持ちヘラケズリが施されている。内面の当て具痕はナデにより、ほとんど消されている。内面上位は、降り注いだ灰等の物質が付着している。なお、窯内の焼成温度が東海地方の窯ほど高温になっていないため、ガラス質にならずに固化しており、あまりきれいな状態ではない。底部外面には、一部粘土が



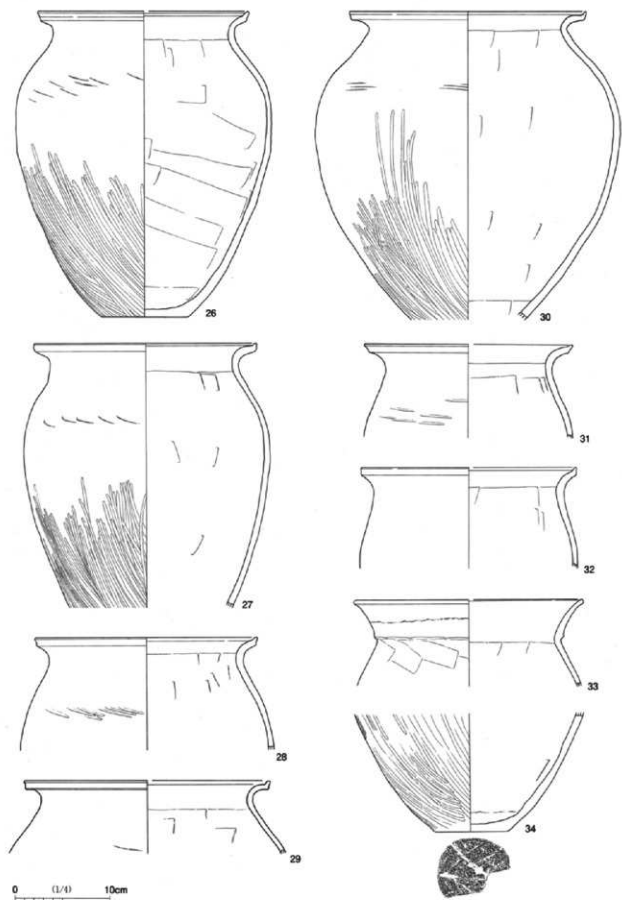
- SI-128カマド
1. 暗赤褐色土 山砂粒多混
 2. 灰青褐色土 山砂粒多混・焼土ブロック混
 3. 暗褐色土 山砂粒多混・ローム粒・ロームブロック・焼土粒少混
 4. 黒色土
 5. 灰青褐色土 焼土粒・山砂粒少混・しまりがある
 6. 暗赤褐色土 焼土・しまりがある
 7. 灰青褐色土 焼土ブロック多・山砂ブロック少混
 8. 暗赤褐色土 山砂粒多・ロームブロック・焼土粒少混
 9. 暗褐色土 焼土
 10. 黒褐色土 焼土粒・焼土ブロック混・しまりがある



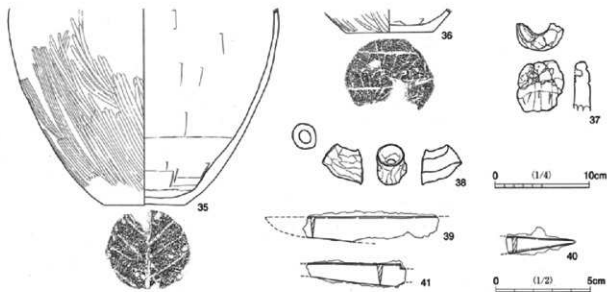
第305図 SI-128 (1)



第306图 SI-128 (2)



第307图 SI-128 (3)



第308図 SI-128 (4)

盛り上がって残り、砂目の部分のみられる。しかし、ナデが全体に施されており、比較的ていねいな調整である。色調は暗灰色で、焼成は良好である。

22は須恵器長頸壺の口頸部破片である。欠損部から下部は胴部となる。口縁部内面に灰緑色の自然釉がところどころに付着している。また、自然釉は、外面も口縁部から頸部下に向かって、一部分付着し、胴部との境では、濃く周回して付着している。色調は灰白色で、胎土は小石を含むが、緻密である。器表面には、黒色粒がみられる。焼成も堅緻である。湖西窯の製品と思われる。

23は「房縁」型の土師器甕で、小型品である。内面はかなり黒ずんでいる。

24~32・34~36は常総型の土師器甕である。比較的遺存のよい土器からみていくと、まず27は底部を欠くが、口縁部から胴部下位までの多くが残る土器である。25も底部を欠き、胴部下位の遺存も少ないが、口縁部の残りはかなりよい土器である。26は口縁部から底部まで、ほぼ1/2弱が遺存する土器である。30は口縁部から胴部上位の遺存はよい土器である。35は全体的には遺存がよいとはいえないが、底部はほぼ遺存する土器である。24は口縁部が2/3弱残り、28は口縁部が1/2強遺存している。28と31は同一個体となる可能性がある。上部と下部の組み合わせでは、24と34も質感が似ており、同一個体となる可能性がある。25と35は欠損部が補完するが、大きさが異なるように思われる。色調もやや違和感がある。口縁部破片の29・32については、底部破片の36を除いて、おのおの同一個体になるものはないと思われる。また、36については、24を除いて同一個体があるかどうか即断できない。常総型甕の中では、24・29・30がやや大型で、胴部のふくらむ器形である。ほとんどの土器の胴部外面上位に、周回するヘラの当たり痕がみられる。32もやや不明瞭であるが、当たり痕と思われる部分がある。当たりは水平のものもあるが、向かって左上が高く、右下が低い傾向が強い。30も図示していない別の面では、その傾きのものがみられる。

底部をもつものは、いずれも外面に木葉痕がみられる。底部外面周辺は、被熱により概して赤みが強い。36の外面は黒ずみもみられる。

33は武蔵型の土師器甕で、口縁部・胴部上部の一部が遺存している。もともとの色調は黄褐色であるが、山砂の付着および被熱により、内外面とも灰白色となる部分が目立つ。

37は籾の羽口片である。鍛冶炉に接続する先端部分が遺存している。先端部の色調は黒色で、外面は次第に暗灰色、灰色、黄灰色と色調が変わっていく。内面は先端部が黒色であるが、淡黄褐色の色調の部分が多い。

38は形象輪軸の一部と思われる破片である。混入品で上層から出土している。筒状となっているが、片側（右図断面図の左側）は剝離しており、より大きなものに接続していたことがわかる。

39・40・41は鉄製品である。39・41は刀子の刃部で、41は茎につづく関部分も遺存している。40は茎の破片で、遺存している部分の大きさから39と同一個体の可能性がある。なお、39は刃側の欠損が著しい。

遺物量は多量である。平面分布は中央部にやや集中し、南壁側は希薄である。他の壁側は、西壁側でやや多いが、隅部はやや分布密度が低い。出土層位は、床面から上層におよぶが、中・下層から出土する遺物が多い。ただし、垂直分布図の下の様相から、壁際が埋まった後に廃棄された遺物が多いと考える。比較的遺存のよい遺物で、土層・床面から出土する遺物は、2・3・7・8・9である。3はP3・P4間のP4寄りから正位で出土し、7はP2近く、やや北東側から正位で出土した。8は南壁際の南西隅寄りから正位で出土し、9は北壁際のカマド左袖近くから正位で出土した。2はいくつかの破片に割れており、P3周辺から出土した。須恵器高台付杯・杯用品の17は西壁側南寄りのところから、倒位で出土した。しかし、これは転用後を考えると正位とした方がよいかもかもしれない。また、22は頸部の破片で、遺存のよい個体ではないが、中央部で3に近いところから出土した。22の近くの中央部床面からは、籾の羽口片である37が出土した。しかし、本竅穴では、鍛冶炉は見つかっていない。図示しない土器片の点数は1,500点、重さは17kgである。

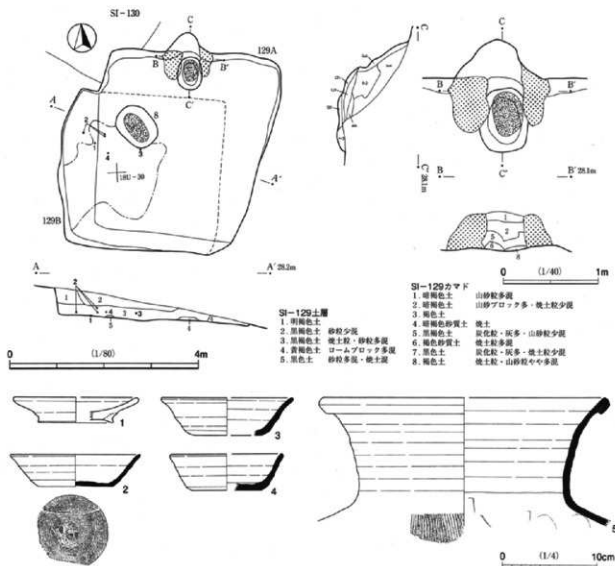
SI-129A・SI-129B（第309図、図版78）

遺跡南部南西端斜面部の18U区に位置する。1棟の竅穴住居跡SI-129として調査したが、2棟の竅穴住居跡が重複しているため、整理時点で、北側の竅穴をSI-129A、南側の竅穴をSI-129Bとした。新旧関係については、129Bのカマドの遺存が悪いことから、129Aの方が新しいと思われる。なお、129Aと129Bの遺物は区別しがたいため、注記は129のままである。また、SI-129Aの北西隅でSI-130と重複する。遺物の様相から、本竅穴が古く、SI-130が新しい。

129Aの規模は推定3.9m×3.8mの方形をなし、深さは0.54mである。しかし、南東側の遺存が悪く、壁と床面の一部を失っている。主軸はN-8°-Eである。北辺にカマドがある。壁溝は検出されなかったが、本来的に存在しなかったものであろう。床面は、やや凹凸があるが、129Bと重複する影響および斜面部に立地するためとも考えられる。129Bの床面とは、深さの差が明瞭にみられない。硬化面は、遺存のよい西側にみられるが、129Bに伴うものであろう。出入り口は検出されなかった。カマドは北壁中央に位置する。両袖の構架材は山砂主体であるが、下部はローム粒を、上部は暗褐色土を含む。内壁は赤色化している。火床部底面は、被熱による赤色化した面が明瞭である。火床部底面は、床面よりもくぼむが、深い掘込みではない。

129Bは、3.25m×推定3.4mの方形をなし、深さは0.53mである。なお、西側の遺存はよいが、東側が悪く、不明瞭である。西壁はゆるやかにカーブし、中央部がややふくらんでいる。主軸はN-6°-Eである。北壁側中央に火床痕跡があり、カマドの残存部と思われる。構架材は遺存していない。壁溝は検出されなかったが、有無は不明とする。硬化面が火床痕跡の南側から、西壁南側に広がっている。

堆積土の状況を見ると、1層と2層の境に129Aの壁が表れているように思われるが、その下部（3層）



第309図 SI-129A・SI-129B

は不明瞭である。全体に黒褐色土主体の土層であり、自然堆積と思われる。

図示した遺物は、129Aと129Bを合わせて5点であるが、遺存のよいものはない。1はロクロ成形の土師器高台付皿である。高台部は断面三角形状である。底部自体が突出し、外側からみた高台部はやや高いが、内側からは低い。底部の器壁は口縁・体部に比べて厚い。器面は内外面とも荒れている。

2・3・4は千葉産の須恵器杯である。色調は、2が黄灰褐色、3がわずかに黄色味を帯びる灰色、3が灰黒色である。2は底部外面に回転ヘラ切り痕が残り、底部の器壁は非常に薄い。色調は褐色味があるが、焼成も堅緻で、作りのよい土器である。3は外面に重ね焼きによる色調の違いがみられる。

5は千葉産の須恵器甕である。口頸部付近の一部の破片であるが、かなり大型の土器である。色調は器面が暗灰色、黒灰色、断面内部が褐色である。口頸部内面に「5」を逆さにしたような筋がある。ヘラ書きの可能性はあるが、やや弱い。製作時の傷としておく。

図示した遺物のうち、5以外の出土は図示したとおりである。129Aが129Bよりも新しい堅穴であるならば、3はその出土位置から129A内から出土した遺物といえる。1・2・4は推定する129Aの壁に近い位置からの出土である。4はやや内側に入っており、129A内の遺物の可能性があるが、1・2はどちら

とも決めがたい遺物である。なお、2がやや散っていることから、1・2・4については、出土する竪穴を厳密に考えても意味がないかもしれない。出土層位については、2の破片にやや高い位置のものもあるが、おおむね下層である。出土遺物はやや少量である。図示しない土器片の点数は129A・129B合わせて、247点、重さは2.4kgである。

SI-130 (第310図、図版78・272・312)

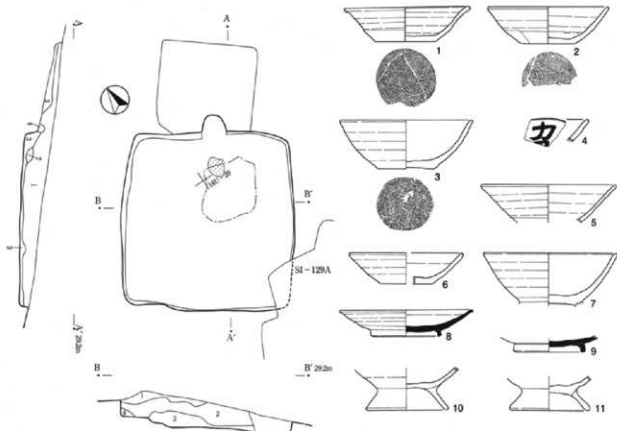
遺跡南部南西端の17U区に位置する。3.6m×3.5mの方形をなし、深さは0.59mである。主軸はN-35°Eである。北辺ほぼ中央にカマドをもつ。南東隅で、SI-129Aと重複する。遺構からは新旧関係が不明であるが、遺物の様相からは、本竪穴が新しく、SI-129Aが古い。また、北側に何らかの遺構がある。攪乱抜かれた新しい時期の遺構と思われるが、詳細は不明である。塹溝・出入口ピットは検出されなかった。南東隅側が降る斜面に立地しており、床面も北西側が高く、南東側が低い。しかし、南東側の床面はかなり低いため、掘り過ぎているかもしれない。中央からカマド・北東隅側寄りに硬化面がみられるが、範囲は狭く、一部の遺存であろう。カマドの遺存は、攪乱を受けたため、悪い。構築材の山砂が若干量みられるが、形をとどめていない。カマド前側の床面に、焼土を含む層が堆積し、その下部に被熱により赤色硬化した面がみられる。煙道部からかなり離れる点が気になるが、火床部の残りと思われる。堆積土は暗褐色土・黒褐色土主体であり、自然堆積と思われる。

図示した遺物は19点で、やや多い量であるが、遺存のよいものは少ない。1～6はロクロ成形の土師器杯である。1は遺存がよく、3も比較的遺存がよい。4は口縁・体部の小破片で、外面に突起があるが、判断できない。墨痕が非常に薄く、赤外線写真でも不明瞭である。図化した形は正確性に問題があるが、墨書の内容を示したものである。1は回転糸切り離し後、底部に回転ヘラケズリが施されるが、3・6は無調整である。3・6の器面はかなり荒れている。5は体部外面に粘土粒が1か所附着しており、やや雑な作りである。

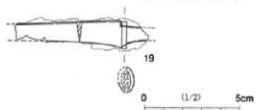
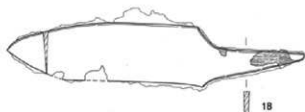
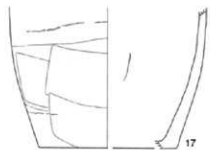
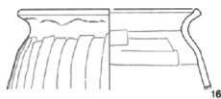
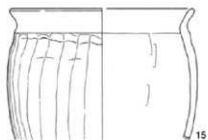
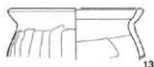
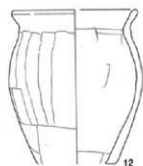
7・10・11はロクロ成形の上師器高台付杯(碗)である。7はほぼ高台部を欠損する。底部外面中央に回転糸切り痕がみられる。10・11は高台部付近の破片で、足高の高台である。7の内面は、粗いヘラミガキが施されている。10は器面がかなり荒れている。

8・9は灰釉陶器皿である。8は口縁部から底部まで、2/5程度が遺存している。口縁・体部内外面に灰緑色の釉がみられるが、底部内面・体部下端～底部外面にはみられない。高台はやや角張っている。内面に他の土器の高台部が一部着着しており、重ね焼きの様子がうかがえる。9も8と同様のものであるが、底部の1/2程の遺存である。釉の状態は8よりも悪く、高台はより角張っている。ともに猿投産で、8は黒甞90号窯式と思われる。

12～17は土師器である。14・17は底径が大きく、須恵器的な様相をもつ。14は回転糸切り離し後、手持ちヘラケズリが施され、ロクロで成形されたことがわかる。17も胴部外面上位にロクロナデの痕跡があり、ロクロ成形の壺である。また、ともに胴部外面下位のヘラケズリは大きく横方向に施されており、須恵器的である。14・17は須恵器的な技法をもつが、須恵器室で焼成されたかどうかは不明のため、土師器としておく。なお、胴部内面にはナデ・ヨコナデが施されており、明瞭な当て具の痕跡はみられない。12・13・15・16は「房総」型の甕である。いずれも器壁の厚いずんぐりした作りである。12・13はやや小型の土器であり、15は口径と胴部径の差が少ない器形である。12は図示したところまでが胴部の下端と思われる。13・16は口縁端部がやや内湾する。



- SI-130土層
1. 灰褐色土 山埴粒少混
 2. 灰褐色土 焼土粒少混
 3. 灰褐色土 焼土粒・山埴粒多混
 4. 灰褐色土 ローム粒・焼土粒多混
 5. 黄褐色土 ロームブロック多混



第310図 SI-130

18・19は鉄製品である。18は刀子である。刃部中央で筋彫れのため割れているが、完形である。刃部幅が広く、刃的であるのに対し、長さは短い。茎も短く、やや特異な形態である。鋸とも思われるが、刃部の刻み目がX線写真でも不明瞭のため、刀子としておく。茎には一部に木質が付着している。19は刀子で、切先と茎尻部を欠く。鍔の一部が遺存する。

出土遺物については、正確な平面位置が不明である。しかし、層位については、17以外は下層から出土したものである。遺物の出土量は中量で、図示しない土器片の点数は662点、重さは5.7kgである。

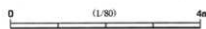
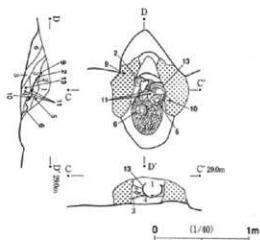
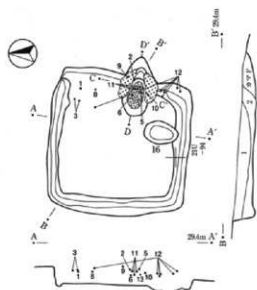
SI-131 (第311図、図版78・272・273)

遺跡南部東斜面の21U区に位置する。3.1m×3mの方形をなし、深さは0.4mである。主軸はN-99°Eである。東辺やや南(右)寄りにカマドをもつ。壁溝は南壁・北壁・西壁の3壁で通る。カマドのある東壁では、カマド右側の南東隅まで通るがカマド左側の北側はみられない。南壁(右壁)際のカマド寄りのところに、深さ16cmのやや規模の大きいピットがある。位置的に出入口ピットとは思われないが、この位置にあるとすれば、非常に特異な構造の建物である。性格不明のピットで、本壁穴に伴うかどうか不明とする。床面は、北西側が高く、南東側が低い。硬化面はみられない。カマドは前側の遺存は悪いが、土器の出土状況から、前側はかなり壊されているものと考ええる。構築材は山砂主体であるが、下部はローム粒を含む。両袖内壁は燻熱により赤色化し、とくに右袖が著しい。堆積土は、ローム粒・ロームブロックを多く含み、遺物の出土状況からも埋め戻されていると考ええる。

図示した遺物は13点で、ロクロ成形の土師器杯11点(1~11)、土師器甕2点(12・13)である。これらは、すべてカマド内およびその周辺から出土しているが、出土状況および遺物の状態から、多くがカマド廃棄に関わるものである。図示した土器以外の遺物は少量で、土器片の点数は199点、重さは2.1kgである。堆積土が埋め戻されているため、廃棄・流入した遺物は少ないといえよう。

カマド廃棄の様相をみてみる。まず、前天井等を壊し、カマドの機能を停止させている。壊したときに出る土などで、火床部から煙道部上を覆うように埋め戻している。縦断面の土器群の出土状況から、カマド内3層以下は埋め戻された土層と考える。埋め戻した土層の上に、倒位の土師器甕13を右袖内壁に接するような状態で置いている。この土器は口縁部から胴部上位までほとんど遺存するが、中位以下を欠いている。胴部の割れ口はほぼ水平であり、中位以下は意図的に除去されたものである。この甕の前側の割れ口部分に、土師器杯5が倒位で重ねられている。5の口縁・体部には、2か所打ち欠きと思われる部分が、ほぼ対向する位置にみられる。そのうち、1か所は甕と重なった部分である。ただし、この部分は接合しており、破損は甕13と土圧による影響かもしれない。なお、2か所ともあまり整然とした割れ口ではなく、2か所をつなぐび割れもあることから、この土器だけでは、打ち欠きと認めることが難しい。しかし、出土状況から、少なくとも1か所は打ち欠きされたものと考ええる。器面は荒れて、赤みが強い。火を受けた可能性が高い。13・5の近く、右袖上部から、土師器杯10が出土した。底部がすべて遺存するが、口縁部端部は1/4程度の遺存である。倒位か正位か不明である。

カマド内で、13・5の左横からは、土師器杯2・6・11が直線状に出土した。手前から奥に、6・11・2の順で、6・11は倒位、2は正位での出土である。6は口縁・体部の1か所が欠損するが、他は割れもなく、遺存している。欠損部の割れ口は不整な「W」字状で、打ち欠きされたものと考ええる。器面は全面荒れており、色調は赤みが強い。割れ口付近の内外面は黒ずみもみられるが、断面はみられない。火を受けていることは確実であるが、その後には割られたものと思われる。11も口縁・体部の1/3程度が欠損して

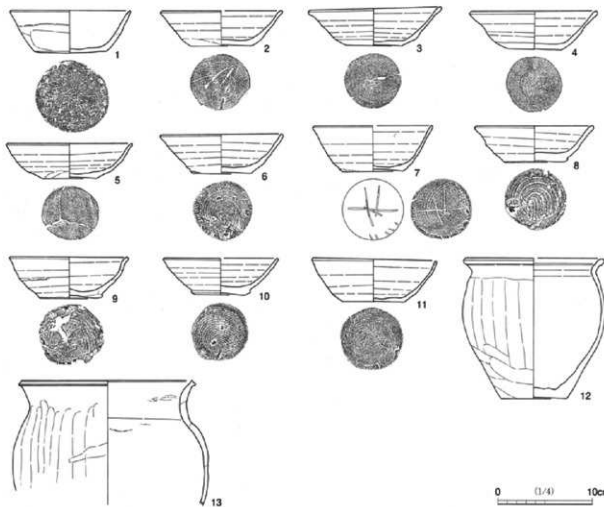


SI-131土層

1. 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多量
2. 暗黄褐色土 ロームブロック多量

SI-131カマド

1. 黒色土 炭化粒多・焼土粒少混
2. 黒褐色土 焼土粒・炭化粒多混
3. 黒褐色土 山砂粒多混・焼土粒・炭化粒少混
4. 黒褐色土 焼土粒・炭化粒多混
5. 暗黄褐色土 山砂粒・焼土粒多混・ローム粒混・しまりなし
6. 暗黄褐色土 山砂粒多混



第311図 SI-131

いる。その他の口縁・体部も割れているが、接合している。体部下部から底部は、割れもなく遺存している。口縁部の全周または3/4周程度が打ち欠きされたものとする。器面は磨れている。2は、口縁・体部の3/5程度が欠損するが、他は割れもなく遺存している。割れ口は弧状に連続しており、打ち欠きされたものとする。左軸上からは、土師器杯9が出土している。11縁・体部の1/3弱が欠損している。他は遺存するが、口縁部から底部の一部まで1/3強が割れて接合している。欠損部の割れ口は不整である。倒位か正位か不明である。色調は赤みが強く、内面がやや荒れており火を受けていると思われる。出土状況から、破損については手を加えられていると思うが、断面の割れ目に新しい部分があり、やや不明瞭である。底部外面に2条線のヘラ書きがある。

カマドの左側、左奥（北東）隅の中層から、土師器杯1・3・8が出土した。出土位置は、1が隅部寄り、3が左（北）壁際、8がカマド寄りである。1はほぼ完形に復元できたが、11縁部から底部まで、約1/2がやや細かく割れている。残りの1/2は割れていない。内面は黒ずみ部分が多く、外面も口縁部の半周弱で黒ずみがみられる。黒ずみの一部には光沢があり、灯明器と思われる。3は、11縁・体部の2か所が欠損している。1か所は整った弧状であり、打ち欠きされたものとする。もう1か所はあまり整っていないが、出土状況やほかの土器の状況から、打ち欠きの可能性はあると思われる。欠損部をつないで底部中心から2片に割れるが、これまで意図的かどうかは断定しがたい。器面はやや荒れている。8は割れない100%の完形品である。内面は、体部下部から底部まで、強く黒ずみ、外面も体部下部から口縁部の一部まで、強く黒ずんでいる。11縁部内面には黒ずみがほとんどみられないが、2か所細く上がってきているところがある。ただし、口縁部外面は、3/4周以上で黒ずみがみられず、底部外面も弱い。しかし、火を使用する行みに使われたことは確実であり、黒ずみの状況からほかの土器と重ねて使用されたものと思われる。灯明器である土師器杯4の上に重ねた場合に、うまく重なるので4と直接的なセットであった可能性がある。ただし、4の出土状況が不明のため、出土時点で8と4が重なっていたか不明である。8は、口縁部に黒ずみがありみられない点か、やや気にかかるが、4と重ねて使用されたならば、灯明器といってよい。土師器杯の中では、8だけ破損がないが、4と重ねて使用されたとなると、打ち欠き必要がなかったものと考えられる。以上、3点の出土状況は、正位か倒位か不明である。しかし、土器の様相から、カマド・堅穴廃棄の祭祀に関わる遺物と考える。中層から出土しており、堆積上はこの点からも埋められていると思われる。

4は、11縁・体部の1/4周が不整の「W」字状に欠損している土器である。他は割れもなく、遺存良好な土器である。油煙と思われる黒色物が、欠損部の内外面および断面に付着している。打ち欠きされた後に、灯明器として使用された土器である。カマド廃棄の祭祀に関わる土器の一つと思われるが判然としない。土師器杯7は、底部と口縁・体部の2/5程度が遺存する土器である。底部には割れないが、遺存する口縁・体部は割れて接合したものである。底部外面にヘラ書きがある。4条線が交差する「キ」に似た記号である。ヘラ書きがあることから、カマド廃棄の祭祀に関わる可能性もあると思われるが、断定しがたい。

この他、カマド右側上層を主体として、土師器杯12が出土した。口縁部から底部まで3/5程度が遺存する土器であるが、かなり細かく割れて接合している。被熱により、強く赤みを帯びている。とくに祭祀的な様相はみられず、カマド廃棄に関わるものかは不明である。

以上の土器群のうち、土師器杯については灯明器と思われるものを含め、すべての杯が火を受けている

とみられる。

個々の土器の様相については、出土状況とともに述べた部分が多いので、漏れた点について補足的に記述する。1~11の底部の切り離し・調整をみると、1・5の全面が手持ちヘラケズリ、2が回転ヘラケズリにより切り離し痕は観察できない。その他の杯には、回転系切り痕を観察できるので、1・2・5もその可能性が高い。3・4は回転ヘラケズリにより、系切り痕はわずかに残るのみである。6~11は回転系切り後無調整の杯である。この中では、11はていねいな作りであるが、8・9・10は底部が突出し、やや雑な作りである。

12は「房総」型の甕で、小型品である。底部外面が磨耗し、とくに周縁部では著しい。13も「房総」型の甕である。焼成は良好であるが、11縁部内外面などで、器面が波打ち、ざらついている。

SI-132 (第312・313図, 図版79・273・274・308)

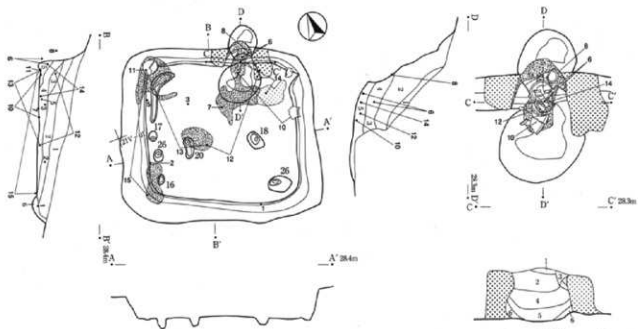
遺跡南部東斜面の21V区に位置する。3.6m×4.2mの方形をなし、深さは0.31~0.92mである。上軸はN-22°-Eである。北辺東寄りにカマドをもつ。カマドの右側は北東隅部である。壁溝はほぼ全周する。西壁際では一部二重になっており、拡張の建て替えがなされた可能性がある。深さのある北壁は、壁溝から垂直に立ち上がるが、確認面近くで傾斜が緩やかになって、やや広がっている。ほかの三壁はやや斜めに立ち上がる。床面には、6か所のピットがある。西壁際の3か所は、内側の壁溝につづく位置であるが、深さが北側から17cm、26cm、16cmと深いため、性格不明のピットとする。本堅穴と関係するものならば、掘りかたであろう。ほかの3か所のピットのうち、中央寄りの2か所のピットの深さは、東寄りのものが18cm、西寄りのものが20cmである。掘りかた底面が本堅穴に無関係のものである。南東隅部のピットは、深さ26cmである。出入りピットとも思われるが、隅に寄り過ぎており断定しがたい。掘りかたの可能性もある。本堅穴は南側緩斜面に立地するが、床面はほぼ平坦である。中央部の床面がやや硬化している。北壁の遺存はよいが、カマドの遺存はあまりよくない。とくに左袖は短く、前側の構築材をかなり失っている。両袖の中位は山砂主体であるが、上部は暗褐色土の含有が多く、下部はローム粒の含有が多い。煙道背後の壁はかなり急傾斜である。火床部底面はやや赤色化している。床面との高さの差はあまりない。火床部前側の床面はやや窪んでいる。カマド火床部前方の床面には炭化粒が堆積し、カマド右袖前の床面には焼土が堆積している。炭化粒の堆積は中央西寄りと北西隅・南西隅の床面にもみられる。堆積土は、下層でロームを多く含むが、おおむね黒褐色土主体であり、自然堆積と思われる。

図示した遺物は16点である。1~3は千葉産の須臾器杯である。1は底部外面に「+ (×)」の線刻がある。刻線は2重になっている部分が多い。2も底部外面に「| (×)」のヘラ書きがある。2の条線はかなり斜めに交差している。色調は、1が黄色味を帯びた暗褐色、2はやや黄色味を帯びた暗灰色、3は黒色である。断面内部は、いずれも黄褐色・褐色である。

4はロクロ成形の上脚器高台付杯（椀）である。とくに滑らかな面はみられず、転用されているかどうかは不明である。

5~12は十脚器甕である。5~10は「房総」型の甕、11・12は常総型の甕である。5は小型品である。6は鉢形の器形である。7は小片から復元した。11の胴部内面には当て具痕に似た弧状の痕跡が多くある。しかし、外面はていねいなナデが施されており、タタキ目はみられない。内面は直線的なヘラの当たりもみられ、ヘラナデも施されている。

13は千葉産の須臾器甕または甔、14・15は千葉産の須臾器甕である。15は接合しなかったため、図化し

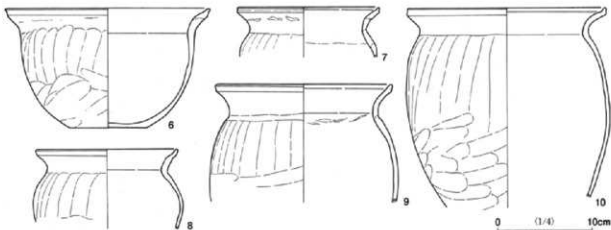
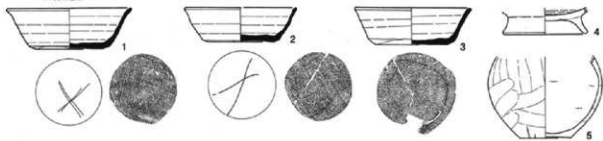


0 (1/80) 4m

- SI-132土層
1. 原褐色土 ロームブロック多量
 2. 原褐色土 ローム殻・ロームブロック多量
 3. 暗黄褐色土 ロームブロック多量
 4. 暗黄褐色土 ローム殻・ロームブロック多量
 5. 暗黄褐色土 ロームブロック多量
 6. 黄褐色土

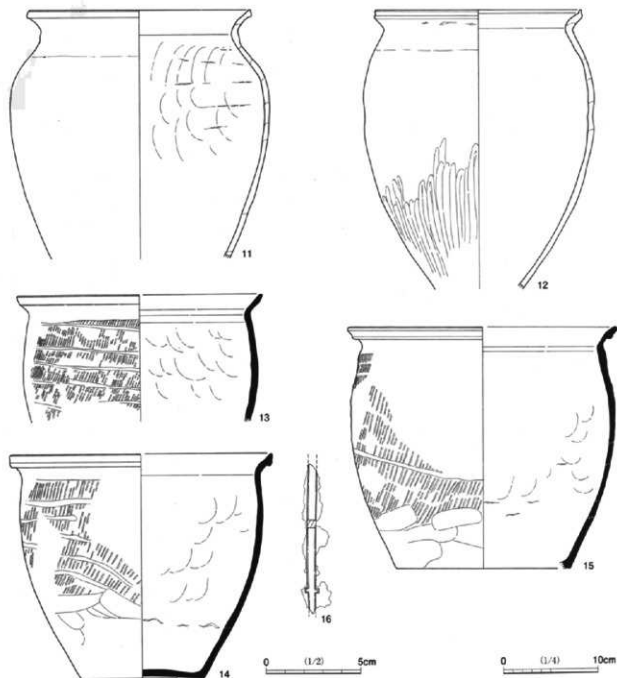
SI-132カマド

1. 原褐色土 炭化粒・山形粒多量
2. 暗黄褐色土 焼土粒・山形ブロック多量
3. 原褐色土 焼土粒・炭化粒多量
4. 原褐色土 焼土粒・炭化粒・山形粒多量
5. 暗黄褐色土 焼土粒・炭化粒・山形粒多量
6. 暗黄褐色土 焼土ブロック・炭化粒多量



0 (1/4) 10cm

第312図 SI-132 (1)



第313図 SI-132 (2)

ていないが、底部の破片もあり、甌ではない。色調はやや黄色味があるが、灰色が強く、焼成良好の土器である。13の色調は黒褐色・暗黄褐色、15の色調も黒褐色・黄褐色である。15の内面は黒色味が強い。15のタキ目は目が粗く、また、強くたたかれて凹凸が深くなっている。

16は鉄製品で、鉄鏃である。棒状部の多くと茎の上部が遺存する。篋被部分には、方形（棘状）突起がみられる。

遺物は、カマド内からまとまって出土している。カマド以外では散在的であるが、比較的遺存のよい遺物が多い。分布はカマド内外から西側にみられる。南東側は堆積土がやや浅いこともあって、希薄である。カマド内の遺物は、火床部から煙道部側にかけて高く積み重なって出土した。出土遺物は、下方の火床部

側から上師器甕10・12、須恵器甕14、上師器甕6・8の順である。このうち、10・12は底部を欠くが、口縁部と胴部の多くを遺存する土器である。10は割れて人形の破片が重なっている。また、東壁際や北寄りからも、大形の破片が出土している。12は10の破片の一部に重なって、その上から倒位で出土した。一部の破片が右袖上および中央部下層から出土している。6も胴部下と底部の一部を欠くが、その他は遺存する遺存良好な土器である。底部がはずれた状態で、12の奥側から倒位で出土した。また、8は口縁部・胴部上位が遺存するが、中位以下を欠く土器である。壁際でかなり上位のところから、口縁部を上にする斜めの状態で出土した。14は6と12の間から出土したが、破片であり、カマド右袖前にも散っている。12・6は倒位の出土であり、6の底部が出土時点で離れていることから、カマド内出土の土器群全体が、カマド廃棄の祭祀に関わる可能性がある。8の胴部中位以下も除去されているのかもしれない。

上記以外に図示した遺物の出土層位をみると、須恵器杯3は床面からやや高い位置で出土し、須恵器杯2も床面より若干高い感があるが、全体に床面・下層からの出土である。土師器甕11は、比較的遺存がよく、北西隅部から出土した。また、須恵器杯1・3も遺存がよい土器である。図示しない土器片の点数は520点、重さは5.7kgである。

SI-133（第314図、図版79・80・274・312）

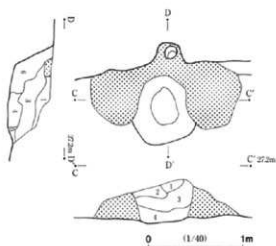
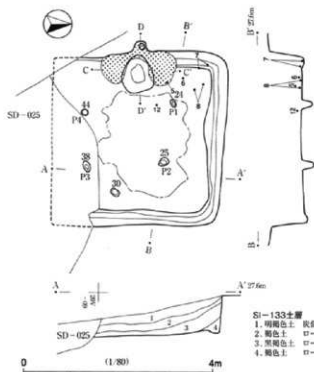
遺跡南部南東端斜面の20V区に位置する。3.7m×3.7mの方形をなし、深さは0.77mである。主軸はN87°-Wである。西辺中央にカマドをもつ。主柱穴4か所をもつ。また、東壁側やや南（左）寄りに出入口ピットをもつ。南（左）壁間はSD-025によって削られているが、主柱穴P3・P4はSD-025よりも深いため、上部の欠損にとどまっている。P3・P4は斜面側にあり、P1・P2よりも深い。壁溝の有無は、カマド左側で不明であるが、欠損部分を除いて巡っている。遺存する床面はほぼ平坦であり、中央部がやや硬化している。カマドの遺存はよい。後天井が残り、煙道部をくりぬいて発掘することができた。前天井は失われている。構築材は山砂主体で、下部はローム粒を含む。内壁は赤色化しているが、火床部の赤色化した面は不明瞭である。地階上土・中層はやや明るい色調であるが、下層は黒褐色土である。ローム粒・ロームブロックの含有は概してあまり多くなく、自然堆積と思われる。

図示した遺物は13点である。1～4はロクロ成形の上師器杯である。4は小片で、体部外面に黒書があるが、判読できない。3は比較的遺存がよいが、小片の接合からなる土器である。色調は黄褐色であるが、一部に暗い灰色味を帯びる部分がある。切り離し技法も不明であり、須恵器の可能性もあるが、断定しがたいため上師器としておく。1・2の底部外面には、回転糸切り痕がみられる。

5～7は千葉産の須恵器杯である。色調は、5が黒色・黒灰色、6が暗黄褐色・暗赤褐色、7が暗灰色である。5は接合で完形に近い土器であるが、口縁・体部の一部が口縁部周で2/5程度割れ・欠損している。割れ口は弧状である。その部分は、3片の小片に割れているが、2片は接合している。他の1片は発見できず、その部分が欠損部となる。その他に割れ・欠損はない。弧状部分は、出土時点で、小片が離れている。弧状の割れ口は打ち欠きされた可能性があると考ええる。7も5同様、欠損部がわずかである。6・7はいずれも2片に割れていたものである。

8はロクロ土師器高台付杯である。内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。器面は荒れて、口縁・体部外面は斑状の剥離が多くみられる。口縁端部も磨耗している。口縁・体部の一部が欠損するが、整った割れ口ではない。

9は千葉産の須恵器高杯の胴部片である。長方形一段の透かし孔をもつ。二方にもつと思われる。色調

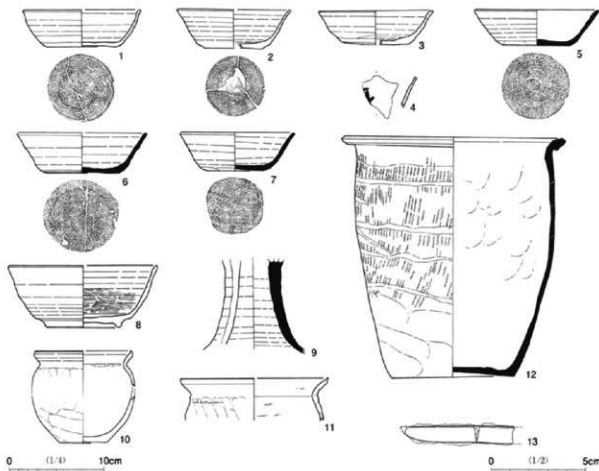


SI-133土層

1. 褐色土 灰化殻断少混
2. 褐色土 ローム粒・灰化殻少混・焼土粒断少混
3. 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック混
4. 褐色土 ロームブロック多混

SI-133カマド

1. 褐色土 山砂粒多混
2. 褐色土 山砂粒多・焼土粒少混
3. 褐色土 ローム粒・山砂粒少混
4. 赤褐色土 焼土・焼化山砂
5. 黒褐色土 灰化殻多混
6. 黒褐色土 焼土粒・灰化殻多混



第314図 SI-133

は赤褐色であるが、外面に若干暗灰色の色調を帯びる部分がある。焼成良好の土器である。

10・11は「房総」型の土器器甕である。10は小型品である。11は小片から復元図化した。

12は干葉産の須恵器甕である。底部付近を若干欠くだけで、ほかはほぼ遺存している良好な土器である。胴部径・底径の差が少なく、寸胴の器形である。やや長胴のバケツ形ともいえよう。外面の色調はやや黄色味を帯びる暗灰色・灰色である。胴部下部・底部周縁は褐色味が強く、火を受けた影響が考えられる。内面は暗灰色の色調を主とし、外面ほどの差はない。

13は鉄製の刀子で、刃部切先側の破片である。

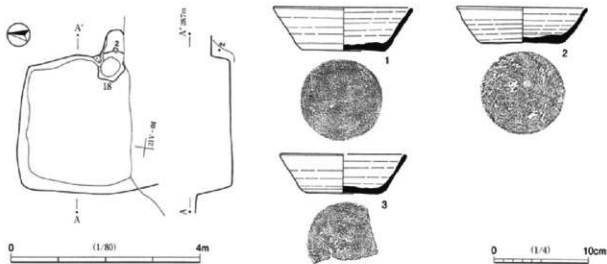
5・6・7・8・12の5点は遺存良好な土器であるが、カマド右側付近の床面・下層から出土した。5はカマド右袖前側から倒位で出土した。12は、5のすぐ前方から、つぶれた状態でまとまって出土した。6の2片はほぼ同じ位置から出土しているが、7・8の各破片はわずかに離れている。6・7は正位の出土であるが、8の破片は正位と倒位に分かれる。

図示しない土器片の点数は586点、重さは4.5kgで、中量である。出土状況の様相は不明である。

SI-134 (第315図, 図版80・274)

遺跡南部の東および南斜面の21U区に位置する。南壁側は崖近くとなるため、安全対策上、調査を行っていない。東西長が2.9mの方形プランであるが、南北長は不明である。カマドは東辺にある。右袖から右側を調査できなかったが、カマドの右側は隅部と思われる。深さは0.67mである。主軸はN-88°-Eである。出入口ピットおよび壁溝は検出されなかった。床面は軟弱であり、硬化面はみられない。調査した範囲のカマドは、遺存が悪く、左袖は壁側下部の構築材が若干残るのみである。火床部の赤色化した被熱面も遺存していない。火床部底面は床面よりもやや窪んでいる。堆積土下層はローム粒を多く含み、色調も暗黄褐色土等で、黄色味が強い。上層は黒褐色土であるが、ローム粒を多く含む土層である。中・下層には焼土粒の包含もみられる。

図示した遺物は須恵器杯3点で、いずれも新治窯産である。1・2は遺存良好な個体である。2は口縁部の2か所に欠損があるが、他には割れも欠けもない。欠損部の1か所はわずかに欠けた程度であり、もう1か所もあまり大きなものではない。断定しがたいが、打ち欠きされた可能性があると考える。1も口縁・体部の一部が、口縁部周でちょうど1/4欠けている。他には、割れも欠けもない。割れ口は不整な逆



第315図 SI-134

台形状であり、打ち欠きされた可能性がある。2は器面が荒れてざらつく。3は40%程度の遺存であるが、口縁端部の遺存はごく少ない。底部周縁から体部下端はやや丸みがある。

2はカマド内奥側の上位から正位で出土した。出土状況から、カマド廃棄の祭祀に関わる遺物と思われる。1も2とセットの可能性はあるが、断定しがたい。遺物の出土量は少量で、図示しない土器片の点数は88点、重さは1.3kgである。

SI-135 (第316図)

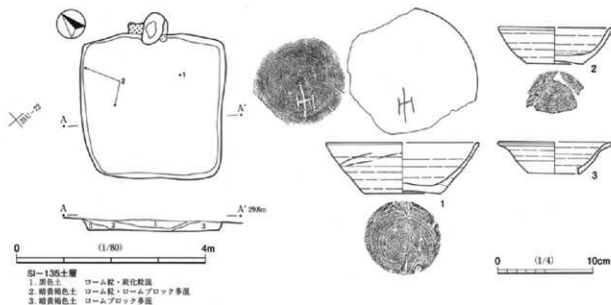
遺跡南部東斜面の21U区に位置する。3m×3.1mの方形をなし、深さは0.24mである。主軸はN-42°-Eである。北東辺にカマドをもつ。壁溝・出入口ピットは検出されなかった。あまり明瞭ではないが、中央部の床面がわずかに硬化しているように思われる。カマドの遺存は悪く、両袖の壁際下部が若干残のみである。カマド内の堆積土も、上層は若干の焼土を含むが、下層は黒褐色土で、焼土の包含が少量である。

図示した遺物はロクロ成形の土師器杯3点である。1はやや大型の杯である。底部は遺存するが、口縁・体部は1/4弱の遺存である。底部内面に「巾」に似た形の線刻があるが、左右の縦線は横線よりも上に出ている。文字ではなく、記号かもしれない。底部内面の体部寄りに刻まれているが、中央の縦線は土器の中心に達している。深い器形のため、線刻は口縁・体部の多くを除去した後に施されているかもしれないが、欠損部が意図的か断定しがたい。2・3は1と比べると小型の杯である。小片から復元図化した。1・2の底部技法は、回転糸切り離した後無調整である。3は口縁部が大きく外反する器形である。

1はカマド右前方から出土し、2は左壁側から出土した。出土遺物は非常に少なく、図示しない土器片の点数は10点、重さは40gである。

SI-137 (第317～319・472図、図版81・274・275・317)

遺跡南部東斜面の21V区に位置する。3.8m×3.7mの方形をなし、深さは0.94mである。北辺と西辺にカマドをもつが、西辺のもの(B)が古く、北辺のもの(A)が新しい。カマドに対応して、出入口ピットが南壁側と東壁側にある。東壁側が古く、南壁側が新しい。東壁側は1か所であるが、南壁側は、南壁中央直下とやや中央寄りの2か所にみられる。さらに中央寄りに凹みがあるが、これは4cm程度の深さで



第316図 SI-135

あり、位置的にも出入口ピットではない。床面からの深さは、壁直下のピットが16cm、やや中央寄りのピットが23cmである。東壁際中央のピットの深さは24cmである。建て替えられた住居であり、主軸方位は、建て替え前がN 68° W、建て替え後がN-22° Eである。壁溝は、南壁から東壁の2/3に回り、西壁も一部にみられる。西壁際は、カマド周囲で不明瞭であるが、詳細に観察するとかなり浅いもの巡っているように思われる。建て替え後の床面修復で、壁溝が作り出されたかと推測する。東壁際は、カマド周囲の床面が高まっているが、堆積土下層が黄褐色土であり、壁際はより黄色味が強い土が堆積したのであろう。また、北東隅部が深い。掘りかた底面を露呈していると思われる。カマドの左右には、壁溝が巡る可能性があり、壁溝は、カマド部分を除いて全周することも考えられる。カマドAの左側の壁は、中・上部が斜めに立ち上がるが、カマド部分から右側の壁はより垂直的である。左壁側上部が、やや掘り過ぎていると思われるが、判然としなない。床面は、中央部が硬化している。床面には、北西隅部などで、いくつかのピットがみられるが、性格不明である。

カマドは、新しい方のカマドAも遺存が悪い。壁の遺存はよいが、構築材はほぼ右袖下部の一部が遺存するのみである。右袖の構築材は白色粘土で、通常の山砂よりも粘性の高い土である。床面直下の地山が白色粘土層であることから、採取しやすい粘土を構築材に使用したものである。左袖部分はほとんど遺存していないが、基部が若干高まっており、白色粘土がわずかにみられる。また、右袖と左袖をつなぐような状態で、火床部奥側に白色粘土がまわっている。カマド下部が白色粘土で作られたことも考えられるが、床面の所々に白色粘土部分がみられることから、下部の地山層が露出したものと思われる。火床部底面中央には、被熱による赤色化層がみられる。

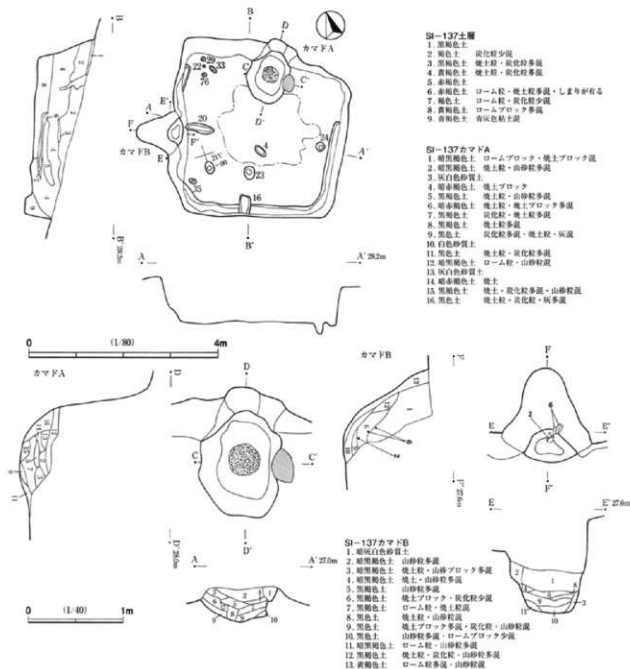
カマドBは、A使用時には、壁面より手前が削り取られている。カマド下部の窪みは、床溝・間仕切り溝状であるが、火床部等、カマド下部の窪みの残存であろう。なお、突出部が埋められたかどうかは判然としなない。

堆積土は全体にローム粒・ロームブロックの含有が多く、褐色味・黄褐色味が強い。また、中層を主体に、焼上程や炭化粒を多く含む層がみられる。なお、床面直下の土層が青灰白色粘土層であることから、下層は粘土の含有も多い。堆積土は埋め戻されているようにも思われるが、斜面に立地し、地山層も台地中央部のように立川ローム層が厚くないことから、人為的堆積か断定しがたい。

図示した遺物は30点で、多量である。遺存のよい遺物が何個体もあるが、完形品はない。量的にはあまり遺存のよくない遺物の方が多い。1～5はロクロ成形の土師器杯である。1～3は比較的遺存がよい。3の底部は、大きく回転糸切り痕があり、周縁にわずかに回転ヘラケズリが施されている。2は底径が大きく、4は箱形の杯であり、3よりも古い様相をもつ土器である。1・2・4の底部は全面にヘラケズリが施されている。また、1・5の底部には、粘土紐の巻き上げ痕と思われる痕跡がみられる。ヘラ切りの痕跡にも似ているが、質感から1・5は土師器と思われる。4の内面は黒色処理が施されている。

6～14は千葉産の須恵器杯である。6～8は比較的遺存がよい。6・14の底部外面には「+」(×)のヘラ書きがある。7の口縁部内面および底部内面の一部に、油煙が付着しており、灯明器として使われた土器である。11・13は器面がかなり荒れている。

15・16は千葉産の須恵器高台付杯である。15は高台部周辺のみ破片、16も体部下部分の一部から高台部の破片である。15の高台は強く「ハ」の字に開き、内面は稜をもって、鋭く屈曲している。また、全体に器壁が薄く、シャープな作りである。高台部外面には、火押痕がみられる。色調はやや暗い灰色で、一部

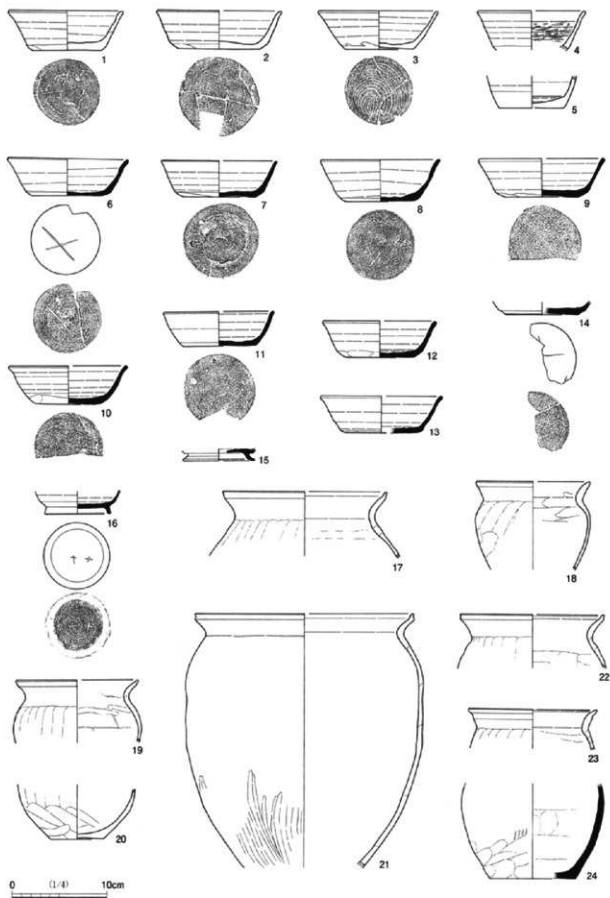


第317図 SI-137 (1)

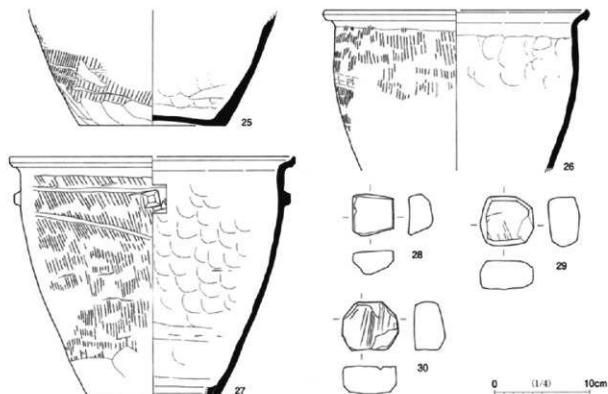
に黄色味を帯びる。16は底部外面に「++」のヘラ書きがある。「+」と「+」の間に、1字分程度の空きがある。

17~23は土師器甕である。17~20・22・23は「房総」型の甕、21は常総型の甕である。18~20・23は小型品で、22もやや小型の土器である。19・20は器面の色調や胎土から同一個体の可能性が高い。他は別個体である。17・18の口縁部はほぼ全周遺存し、20の胴部下部から底部もほぼ遺存している。17は焼けて、器面の荒れが著しい。

24~27は千葉産の須恵器で、24・25は甕、26は甕または瓶、27は瓶である。24は須恵器甕としては、小型品である。底部外面には、砂目痕がみられる。色調は暗灰色で、わずかに褐色味を帯びる部分がある。



第318图 SI-137 (2)



第319図 SI-137 (3)

断面内部の色調は黄褐色である。26の内面の凹みは、当て具ではなく、指頭による凹みと思われる部分が多い。一部に指紋もみられる。茨城県三和町三和窯跡群の製品ほど顕著ではないが、同様の技法と思われる。27は方形の把手が1か所遺存している。底部の孔は五孔式である。

28～30は砥石である。石材はいずれも細粒緑色凝灰岩である。29・30は厚さが同じであり、もとは同一個体と思われる。また、29・30より薄くなっているが、28も質感から同一個体の可能性がある。いずれも全面が使用されている。筋状の研ぎ痕もみられ、とくに30は図示した上面に多い。

カマドBの下層から、2・6が出土したが、2はほかにも広く散って出土している。図示した遺物の出土層位をみると、すべてが中層以上であり、下層から出土したものはない。遺物の出土量は比較的多く、竪穴全体から出土している。出土状況からは、8・9層を主体とする下層が埋め戻された土層で、中・上層は自然堆積土の可能性があるといえよう。図示しない土器片の点数は652点、重さは5kgである。

SI-138 (第320・472図、図版81・82・275・307)

遺跡南部西端の17T区に位置する。2.7m×3mの方形をなし、深さは0.36mである。主軸はN-33°Eである。北東壁中央にカマドをもち、南西壁際中央に出入口ピットをもつ。東側でSI-099に切られているが、本竪穴の方が深いので、壁下部から床面は遺存している。また、床面西隅に暗褐色土の楕円形プランがみえるが、詳細は不明である。土坑等の他遺構と思われるが、本竪穴の掘りかたかもしれない。壁溝は、カマドのある北東壁を除く三壁で巡っている。床面は一部の壁際を除いて、全体に硬化しているが、とくに中央部が顕著である。カマドはほとんど方形プランから突出しており、焚き口部が左右の壁に近い位置である。袖の構築材は山砂主体である。被熱による赤色化が著しく、内壁だけでなく、上部奥側まで赤色化している。火床部底面の赤色化も著しい。竪穴の堆積土は黒褐色土・暗褐色土主体であり、自然堆積と

思われる。

図示した遺物は4点である。1・2はロクロ成形の土師器杯である。1は一部が黒ずんでおり、器面は全面が荒れている。火を受けていると思われる。2は底部周辺の小破片である。底部外面に墨書があるが、欠損部にかかり、判読できない。

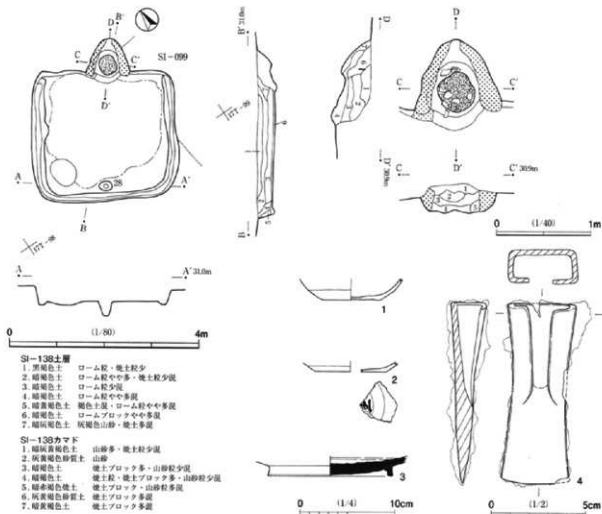
3は須恵器高台付盤で、新治窯産である。底部外面中央に赤色物質が付着しているが、非常に薄い痕跡である。転用碗として朱墨が擦られたか、朱書の痕跡と思われる。器面はざらついており滑らかな面はない。赤色物は線状の部分があり、朱書の可能性もあるが薄いため判然とせず、判読もできない。

4は鉄製品で、鉄斧である。完形で、やや細長い作りである。先端刃部は撥状に軽く開く形態である。柄の装着部は、鉄板を両側から折り返して袋状に作り出し、断面はほぼ長方形である。袋部の深さは約4.5cmで、全長の半分弱である。刃先の研ぎ出し範囲は、錆のため確認できない。

1の一部が上層から出土しているが、他は床面・下層からの出土である。3は右前隅からやや中央寄りのところで、倒れて出土した。4は右前（南）隅から出土した。遺物の出土量は少量で、散在的な分布状態である。図示しない土器片の点数は101点、重さは1.4kgである。

SI-139（第321・472図、図版82・275・276）

遺跡南部南西端の17U区に位置する。3.5m×3.2mの方形をなし、深さは0.38mである。主軸はN-52°



第320図 SI-138

Eである。北東壁中央にカマドをもつ。北側で大きくSI-140を切り、南側でもSI-142を切っている。なお、SI-140・SI-142とも本壁穴よりも深く、北西壁と南西壁の一部は、その影響で検出できていない部分がある。壁溝は、南東壁・南西壁と北西壁の半分に巡っているが、カマドのある北東壁と北西壁の北側は検出されなかった。しかし、北西壁の未検出部については、SI-140と重複する影響と思われる。存在する可能性があると考え。出入口ピットは検出されなかった。床面は広く硬化しているが、SI-140・SI-142と重複する部分は、硬化していない部分がある。なお、カマド前は一部掘り過ぎて、SI-140の床面が露出した部分がある。カマドは方形プランから大きく突出している。山砂はほとんどみられない。しかし、突出部の幅が狭く、内側が赤色化していることから、突出部の内側は、カマド内壁に近い状態と思われる。カマド構築にあたり、袖部にはそれほど多くの山砂が使用されなかったものと思われる。SI-140の堆積土中に構築した影響かもしれない。突出部底面のはば中央に、灰黄褐色の山砂ブロックがあり、支脚と思われる。その手前は赤色化していないが、硬化している。なお、床面中央部に焼けた部分があり、炉かもしれない。堆積土は暗褐色土主体で、ローム粒の包含が少ない。自然堆積と思われる。

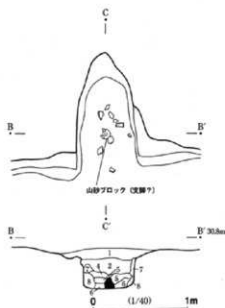
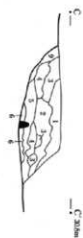
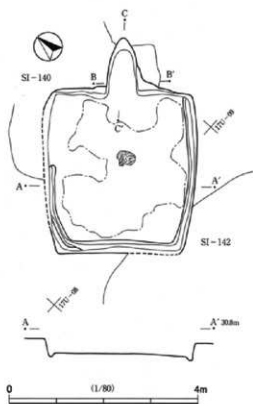
図示した遺物は9点である。1～6はロクロ成形の土師器杯である。1は遺存が悪く、細かく割れているが、底部内面に「日」に似た墨書がある。4は口縁・体部の2か所が欠損するが、欠損部はほぼ対向する位置にある。1か所は小破片が接合している。その他に割れはなく、欠損状況から打ち欠きされた可能性があると思われる。被熱により、内外面とも赤みをもつ部分が多く、底部内外面の一部は黒ずんでいる。6は接合して完形となった土器であり、2・3・5も欠損箇所があるが、比較的遺存のよい遺物である。土師器杯の底部は、5を除いて回転糸切り痕が残っている。1・2・4・6は、切り離し後、ほぼ無調整である。回転ヘラケズリが、3は底部周縁に、5は全面に施されている。

7～9は「房総」型の土師器甕である。7・8の口縁端部は内湾して、内内側に突き出している。9の底部外面には回転糸切り痕があり、ロクロを使用して製作されたことがわかる。周縁は手持ちヘラケズリが施されている。胴部外面のヘラケズリは、横方向および幅広で、須臾器的である。内面は強いナデが施されているが、一部に接合痕が顕著に残る。

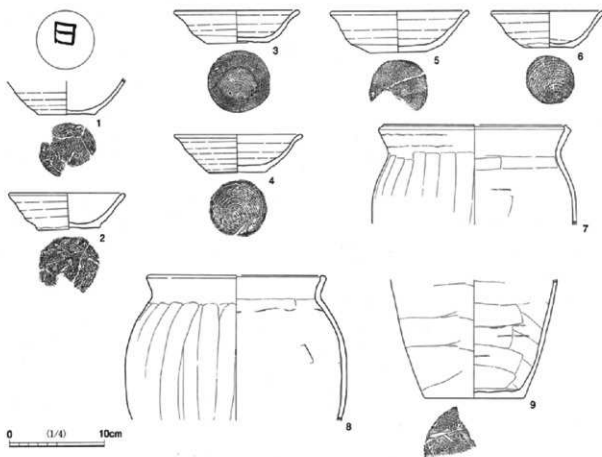
図示した遺物の出土層位をみると、4がやや低い位置での出土である。その他の遺物は接合破片の一部が下層から出土するものもあるが、概して、床面よりも高い位置での出土である。4はカマド前方から出土したが、正位か倒位か不明である。7・9の平面位置は床面中央の焼けた部分に近いが、層位は中・上層である。遺物の出土量はあまり多量ではない。平面分布は、壁際がやや少なく、中央部やカマド前方にやや集中する。図示しない土器片の点数は331点、重さは3.3kgである。

SI-140・SI-141 (第322・323図、図版82・83)

遺跡南部西端の17T区に位置する。SI-140は2.9m×3mの方形をなし、深さは0.46mである。上軸はN-51°-Eである。北東辺にカマドをもつ。SI-139に大きく切られているが、SI-140の方が深いため、重複部分でも壁下部・床面が遺存している。壁溝はカマドのある北東壁を除いて、三壁に巡っている。なお、左前(西)隅にピットがあり、その影響で壁溝がみられないが、本来は巡ると思われる。ピットは深さが50cmであり、掘りかたとするには深すぎる。ちょうど隅部に位置するが、周囲の状況から、掘立柱建物の柱穴と思われる。出入口ピットは検出されなかった。床面は、カマド前方から南西壁側にかけて、中央部が硬化している。カマドは、大きく方形プランから突出し、火床部が方形プランの奥側に位置する。構築材は山砂土体である。両袖内壁および煙道部側の壁下部は、被熱により赤色化が著しく、袖の中位は内側



- SI-139カマド
1. 暗褐色土 ローム粒やや多量
 2. 暗赤褐色土 ローム粒多量・山砂粒やや多量
 3. 灰黄褐色土 山砂主体
 4. 暗褐色土 焼土粒多量
 5. 黒色土 焼土粒多量
 6. 暗赤褐色土 ローム粒多量・焼土ブロック多量
 7. 暗褐色土 焼土粒多量・山砂粒多量・灰化粒少量
 8. 暗赤褐色土 焼土粒多量・ローム粒多量・山砂少量
 9. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土ブロック・山砂粒多量

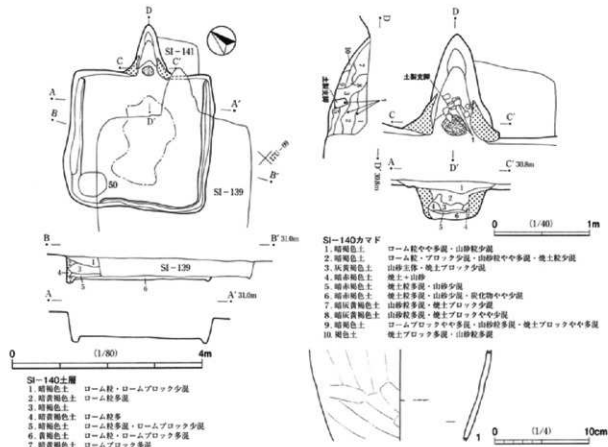


第321図 SI-139

だけでなく、奥まで赤色化している。火床部もやや赤色化し、非常に硬化している。火床部奥側の底面上に、土製支脚が立って残っている。原位置をとどめるものであろう。支脚の上部に土器片があるが、支脚周囲から土師器甕1の破片が何点か出土しており、支脚の高さ調節のためのものか、甕1の一部分が偶然上部にのつたものか判然としない。堆積土は、暗褐色土主体で、下層・壁際を除いてロームの含有が少ない。自然堆積と思われるが、重複が激しく、遺存が少ないため判然としない。

遺物の出土量は少量で、図示した遺物は「房総」型の土師器甕1点である。胴部下部の一部の破片であり、遺存は少ない。図示しなかったが、土製支脚は、側面が面取りされて多角柱状になっているものである。一部は稜が明瞭である。下部を欠損し、現存する上端も斜めであることから、もっとも上の部分が割られている可能性がある。図示しない土器片の点数は60点、重さは1kgである。

カマドの右外側に別の竈穴住居跡と思われる遺構(SI-141)があるが、カマド左外側部分のつながりが不明である。それは、SI-141が確認面から数cmの深さであることと、カマド左外側にSI-099・擾乱およびSI-138が存在することによる。SI-141は非常に浅いため、SI-140のカマド両脇に張り出した棚状の施設とも思われる。しかし、本遺跡では、カマド両脇の棚状施設の確認例がなく、断定しがたい。ただし、棚状部分は概して浅いことから、検出できていないことも考えられる。ここでは、別住居と棚状施設の双方の可能性を考えておく。独立した竈穴住居跡である場合、右奥隅の部分にあたる。一方、コーナー部分にピットが検出されているが、深さが不明である。柱穴程度の規模を有するものである。掘立柱建物の一部である可能性も考えられる。壁の向きは、SI-140・SI-139とほぼ同様である。それ以外はすべて不明である。他の遺物としては、「房総」型の土師器甕片1点が出土したが、小破片であるため図示する

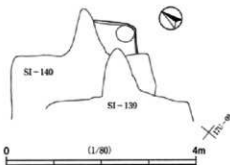


第322図 SI-140

ことは省略した。

SI-142 (第324図, 図版83・275・306・308・312)

遺跡南部西端の17U区に位置する。4.5m×4.7mのやや横長の方形をなし、深さは0.52mである。主軸はN-5°-Eである。北辺中央にカマドをもつ。主柱穴4か所と南壁際中央に出入口ピットをもつ。カマド部分が、SI-139の右前隔(南隔)に切られているが、本壘穴の方が深いため、下方部分が明瞭に残っている。壁溝は一部で途切れるが、全体的に巡っている。途切れる部分は出入口部分と南西隅付近、カマド右袖脇である。床の硬化範囲が、柱穴間を中心としてカマド両脇と南壁際東寄り部分にみられる。



第323図 SI-141

カマド両脇の構築材は山砂主体であるが、暗褐色土・ロームブロックを含む。内壁は被熱により、赤色化している。火床部は両袖前側間の中央がやや赤色化しているが、右袖前から火床部にかけて、攪乱を受けているため、弱い痕跡である。火床部底面は深く掘り込まれている。灰のかき出しによるものまたは掘りかたであるが、一部攪乱を受けている。堆積土は暗褐色土主体であるが、最下層・壁際を除いて、概してローム粒が少ない。しかし、上層の一部にローム粒を多量に含む層があるので、上層は埋め戻された可能性も考えられる。

図示した遺物は7点である。1は千葉産の須恵器杯である。色調はやや黄色味を帯びた灰色である。2は「房総」型の土師器甕で、小型品である。外面は赤みが強く、内面はかなり黒ずんでいる。

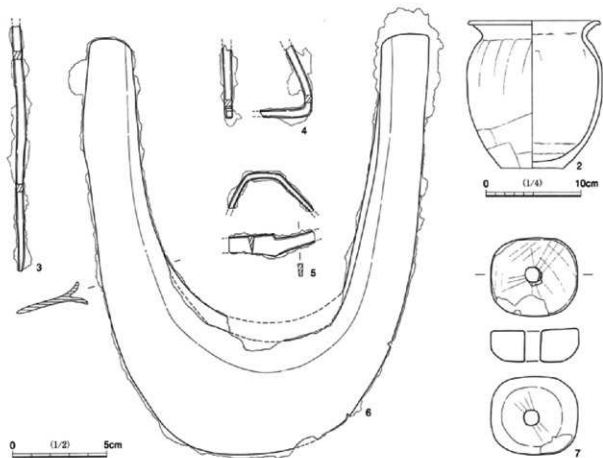
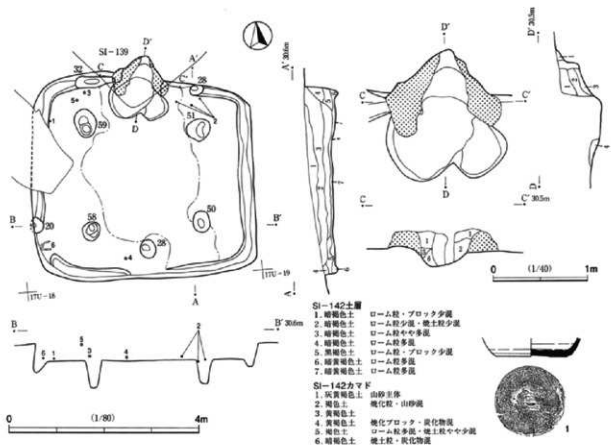
3～6は鉄製品である。3は棒状品で、図示した下端はそれ以上に続かない。長頸の鉄鎌、または紡錘具の柄などが考えられるが、特定しがたい。錆びて膨らんだ部分に方形(轆状)突起があるようにも思われるが、X線写真でも判然としなない。4も棒状のものであるが、大きく曲がっている。釘または鉄鎌の茎などが考えられる。5は刀子の破片で、2か所で大きく曲がっている。4・5は破損品を再利用するため、曲げられたものと思われる。6は鋤先で、平面はU字形の形態をもつ大型の鉄製品である。木質のスコップ部分を着装する部分である樋の一部を欠くが、遺存良好である。樋は一部に木質が付着している。

6は南西隔の下層から出土した。また、2はカマド右脇の床面・下層から出土した。図示した遺物の出土層位は、5を除いて、床面・下層である。遺物の出土量は中量であるが、遺存のよい個体は少ない。図示しない土器片の点数は712点、重さは5.6kgである。

7は石製紡錘車である。石材は流紋岩質凝灰岩で、かなり軟質の石材である。平面形は隅丸長方形であり、薄くなった砥石を転用した可能性がある。上面は平坦で、一部に欠損がある。下面と側面の間は丸みがあり、ほとんど稜をもたない。

SI-143 (第325・472図, 図版84・276・312)

遺跡南部西端の17T区に位置する。3.2m×3.5mの方形をなし、深さは0.33mである。主軸はN-21°-Wである。北辺中央にカマドをもつ。また、南壁際中央に出入口ピットをもつ。壁溝は検出されなかった。床の硬化範囲は、出入口部奥からカマド前にかけて広がっているが、とくに中央部は硬化している。なお、床面中央の一部が攪乱を受けている。カマドの遺存はあまりよくない。両脇の構築材は山砂に加えて、ローム粒を多く含む。袖内壁および煙道部壁は、被熱により若干赤色化している。火床部底面は硬化している部分があるが、赤色化範囲はあまり明瞭でない。堆積土は暗褐色土主体であるが、焼土粒をかなり含



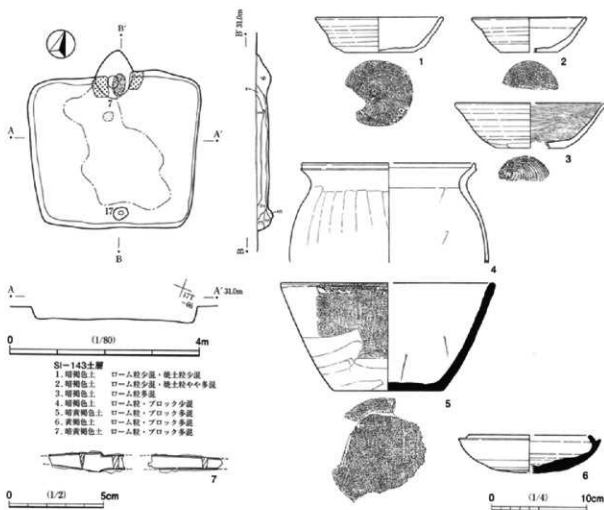
第324図 SI-142

む。カマド前方の床面に、被熱により赤色化している部分があるが、堆積土中の焼土に関係するものと思われる。

図示した遺物は7点であるが、6は古墳時代のものである。1～3はロクロ成形の土師器杯である。いずれも回転糸切りによって切り離されているが、1・2はその後回転ヘラケズリが施されるのに対し、3は無調整である。3は底径も小さく、内面は黒色処理されている。1は比較的遺存のよい土器である。火を受けており、器面は荒れて、外面の一部が赤みを帯びている。口縁・体部の一部が欠けているが、意図的なものか断定しがたい。他に割れがあるが、ほぼ接合している。2も火を受けており全体に赤みが強く、器面が荒れている。遺存は1/2以下でありよくない。

4は「房総」型の土師器甕である。5は千葉産の須恵器鉢である。形態は、甕の胴部下部以下と近似している。口縁端部の上部はやや平たい。外面上位は平行タタキが弱く残り、下位は横方向の手持ちヘラケズリが施されている。内面は、横方向のナデにより、当て具痕が消されている。底径は広く、外面はヘラケズリが施されている。色調は内面と胴部外面が黒色で、底部外面は赤褐色である。

6は古墳時代後期の須恵器杯身で、混入品である。胎土は白色粒・小石を多量に含む。底部外面に製作時の擦痕が多く残り、内面の凹凸も著しい。色調は灰白色で、わずかに黄色味を帯びる。焼成は良好であるが、やや雑な作りの須恵器である。



第325図 SI-143

7は鉄製品で、刀子である。錆による欠損のため、2片に分かれて接合しないが同一個体である。切先と莖尻を欠く。

1はカマド前方の被熱面近くの下層から出土している。1の被熱痕跡は、床の被熱面と関係する可能性がある。2は1よりもカマド寄りの床面から出土した。図示したその他の遺物は、床面からやや高い位置での出土である。遺物の平面分布はカマドのある北壁側にやや多く、中央から南東隅側にはやや密度が低い。図示しない土器片の点数は363点、重さは3.4kgである。

SI-144 (第326図、図版84・276)

遺跡南部西端の17T区に位置する。3m×3mの方形をなし、深さは0.58mである。主軸はN-12°Eである。北辺にカマドをもつ。南壁側中央に出入口ピットをもつ。壁溝は全周する。床面はハードローム層まで掘り込まれ、全体に堅いが、中央部はとくに硬化している。ただし、床面の中心部分が攪乱を受けている。カマドも攪乱を受けて遺存が悪い。とくに左袖部分は攪乱が深く入る部分がある。煙道部は、方形プランからあまり大きく突出していない。構築材は山砂主体であるが、下部はローム粒を含む。内壁は被熱により、強く赤色化しているが、火床部は赤色化範囲がみられない。攪乱の影響であろう。堆積土をみると、中位の3層が焼土を多量に含む。壁側および中央の床面に、堆積土が堆積した後、窪地に火が焚かれたものであろう。なお、4層はロームを多量に含むことから、4層以下が埋め戻された可能性もある。

図示した遺物は8点である。1は非クロロの上師器杯である。やや浅い皿形の器形で、全面に赤彩が施されている。内面の一部に黒色物質が付着し、一部に光沢をもつ部分がある。付着状況と黒色物質の様相から油煙や煤よりも漆ではないかと思われる。

2・3は新治窯産の須臾器杯である。2は遺存がよく、3も2ほどではないが比較的遺存がよい。しかし、ともに小破片の接合である。4も新治窯産の須臾器蓋である。宝珠形のつまみ周辺の破片である。

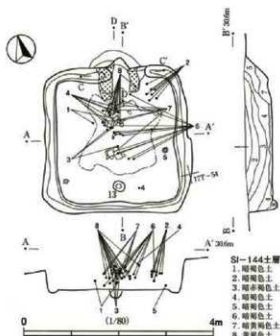
5は須臾器高台付杯である。1縁・体部のほぼ全周が欠損するが、底部周辺はほぼ遺存する。色調は内面と外面の一部および断面内部がやや黄褐色を帯びた暗灰色、外面の多くが暗赤褐色、外面の一部が黒色である。暗赤褐色・黒色は自然神の影響によるもので、黒色部分は一部ガラス質となり、光沢をもつ。胎土は若干の白色粒、少量の小石を含む。非常に硬質な焼成である。産地の推定が難しいが、東海産の可能性があると思われる。関東地方であれば、新治窯産や千葉産ではない。擦られた痕跡は残っていない。

6～8は常総型の土師器甕である。8は胴部下位以下を欠くが、比較的遺存がよく、口縁部は全周する。また、6も口縁部は一部を欠くのみである。いずれも、胴部外面上位に途切れ途切れに連続するヘラの当たり痕跡が周回している。

遺物の出土は、カマド前から出入口付近までみられるが、量は少ない。とくに西壁側から南西隅付近は希薄である。図示した遺物の出土層位は、中・上層が主体である。遺物の多くは、窪地に火が焚かれた時点以後に廃棄されたものである。なお、出土遺物自体に、とくに祭祀的な様相はうかがえない。図示しない土器片の点数は563点、重さは5kgである。

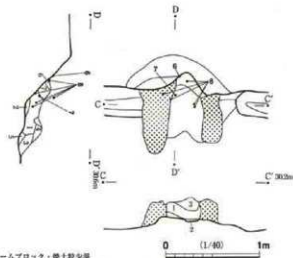
SI-147 (第327・328・472図、図版85・276・306・308・309・312・317)

遺跡南部西端の17T区に位置する。3.9m×4mのやや逆台形的な方形をなし、深さは0.77mである。主軸はN-13°Eである。北辺にカマドをもつ。西壁中央でSI-145と重複し、本壁穴が切切っている。主柱穴4か所をもつ。主柱穴P2・P3間のP2寄りに、深さ19cmのピットがある。径が小さいが、出入り口ピットと思われる。壁溝は全周する。西壁北側から、北西隅付近にかけて図示していないが、わずかに浅い溝



SI-144土層
 1. 暗褐色土
 2. 暗褐色土
 3. 暗赤褐色土
 4. 暗褐色土
 5. 暗褐色土
 6. 暗褐色土
 7. 暗赤褐色土
 8. 黄褐色土

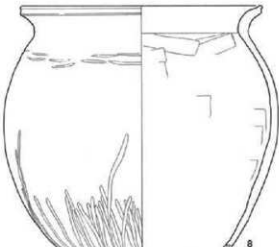
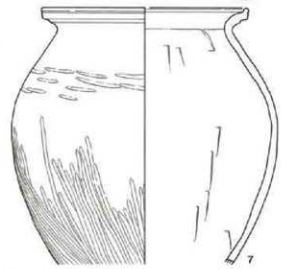
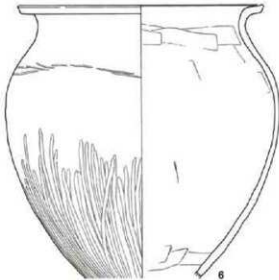
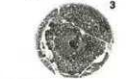
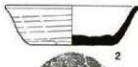
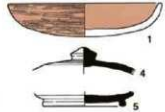
ロム殻・ロムブロック・焼土粒少量
 ロム殻・ロムブロック・焼土粒中量多量
 焼土粒多量・ロム殻・炭化粒少量
 ロム殻多量・ロムブロック・焼土粒少量
 ロム殻・ロムブロック少量
 ロム殻・ロムブロック多量
 ロム殻・ロムブロック多量



SI-144カマド

1. 暗赤褐色土
 2. 黄褐色砂質土
 3. 褐色土
 4. 暗褐色土
 5. 暗赤褐色土
 6. 暗褐色土
 7. 暗褐色土

炭化山砂ブロック多量
 山砂ブロック
 山砂粒多量
 山砂粒・炭少量
 炭土
 焼土
 山砂粒多・焼土粒中多



0 (1/4) 10cm

第326図 SI-144

状の窪みが認められる。西壁には、壁柱穴が3か所存在する。西壁側はSI-145との重複により、地盤が軟弱であるため、補強されたものである。床面はハードルーム層中に達しており、全体に硬質である。中央部がわずかに硬化しているように思われるが、壁側との差は不明瞭である。カマドの遺存はあまりよくない。構築材は山砂に加えて、暗褐色色を含んでいる。両袖内壁は被熱により、赤色化しているが、火床部の赤色化は不明瞭である。火床部底面は、床面よりもやや窪んでいる。堆積上は暗褐色土・黒褐色土主体で、自然堆積と思われる。

図示した遺物は16点である。1・2はロクロ成形の土師器杯である。2は接合しているが、口縁端部の一部を欠くのみで、ほぼ完形の土器である。

3・4は千葉産の須恵器杯である。3・4は接合して完形の土器である。色調は3がほぼ黒色、4は黒みが強い部分と、黄色味を帯びる暗灰色、褐色が混在する。4は2片の接合個体で、1片は口縁・体部の一部である。5は千葉産の須恵器高台付杯である。色調はやや黄色味を帯びる暗灰色である。

7は須恵器長頸壺の頸部付近の破片である。頸部内面には、暗緑色の自然釉が垂下して付着している。胎上は黒色粒・白色粒を含む。東海産と思われるが、関東の製品であれば、新治窯産・千葉産ではない。

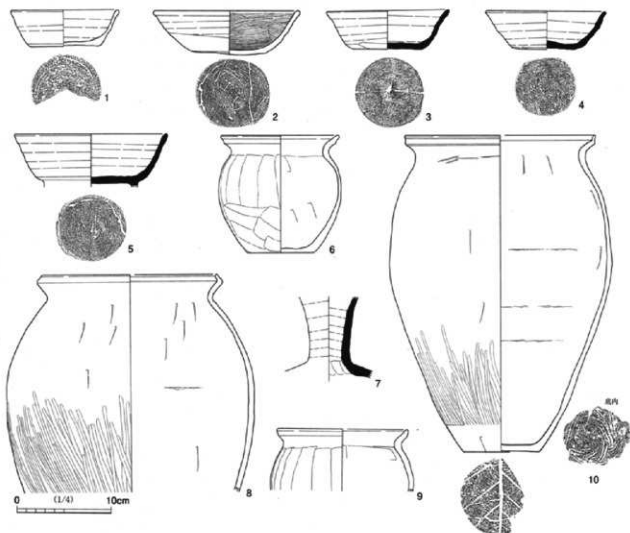
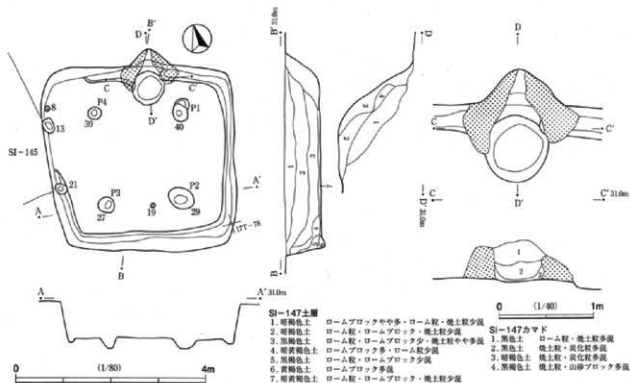
6・9は「房総」製の土師器甕で、小型品である。6は胴部中位から底部までの破損はない。口縁部から胴部上位の欠損部は意図的に割られた可能性がある。

8・10は常総型の土師器甕である。10は、底部周辺の破片が接合しないが、図上で復元した。胴部下位は縦方向のヘラミガキを切って、横方向のヘラケズリが施されている。底部内面の調整は木口状の工具と思われるものの端で、ナデが施されている。ハケメ状ともいえるが、ヘラナデの一種と考える。また、ヘラの当たり痕が、胴部外面上位から中位にかけて周回している。痕跡はやや薄い。

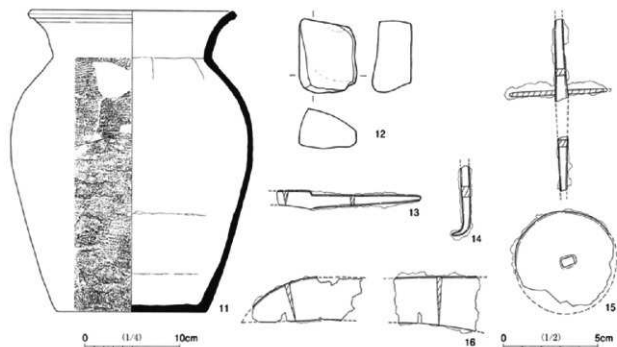
11は新治窯産の須恵器甕である。11は、甕としては非常に遺存がよく、口縁端部を多く欠くほかは、底部まで遺存している。内外面の磨耗が著しく、とくに外面は剥落箇所も多い。液体の貯蔵用として長期に使用されたと思われる土器である。ただし、底部外面の赤みが強いことから、火を受けたことも考えられる。

12は砥石で、石材は砂岩である。13~16は鉄製品である。13は刀子で、刃部の一部と茎が遺存する。14は先端が曲がった釘と思われる。頭部は欠損する。15は紡錘車である。紡輪は周縁を一部欠くが、かなり遺存がよい。紡輪の中心孔に紡錘が装着された状態で一部遺存している。他に紡錘の破片が1点ある。紡錘の断面は長方形である。16は鎌である。2片の破片で、接合しないが、大きさから同一個体とした。基部側は遺存しない。

遺物の出土は多量で、図示した遺物も比較的多い。須恵器甕11は、北西側柱穴P4の左隣の床面から正位で出土した。土器の状態と、P4または北西隅を意識したと思われる出土状況から、壁穴住居跡廃棄の祭祀のさいに置かれたものとする。この祭祀は火の使用を含むものであろう。須恵器杯3はカマド左隣の床面から正位で出土した。3の右隣には、土師器甕6の下部が横位で出土し、左隣からは、土師器甕10の一部が出土した。この3点は並んだ状態で出土した。断定しがたいが、11とともに、壁穴住居跡・カマド廃棄の祭祀に関わる可能性がある。6は、その出土状況から「V」字状に欠損している部分を強調して置かれたように思われる。3は二等分に割れているが、出土時点では離れていない。意図的な分割であれば、割ることのみに意味があったものである。しかし、土圧による自然の割れの可能性もある。10は破壊されているかもしれない。その他の遺物のうち、砥石12は南東隅の柱穴P2上部から出土した。祭祀的な



第327図 SI-147 (1)



第328図 SI-147 (2)

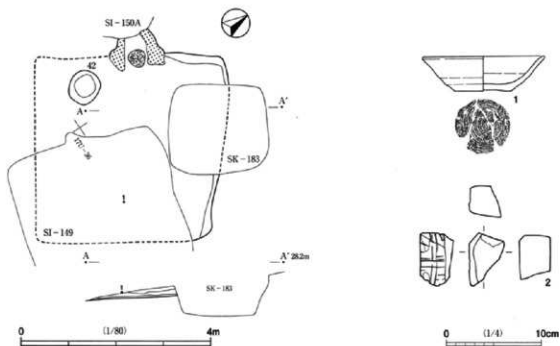
意図があるかどうかは即断できない。また、鉄製品の多くが床面・下層から出土しているが、出土状況に祭祀的な様相があるか不明である。

上述した以外に図示した土器は、須恵器長頸壺7を除いて、中・上層からの出土である。なお、6・10も一部の破片は、中・上層から出土している。図示しない遺物の平面位置は北壁側と中央よりやや南寄り、西壁側中央にやや多く分布し、西壁際を除いて、概して壁際には少ない。一部の遺物を除いて、窪地となった本竈穴に廃棄され続けた状況を示していると考え。図示しない土器片の点数は1,252点、重さは10.7kgである。

SI-148 (第329図、図版86・277・317)

遺跡南部南西端の17U区に位置する。およそ4m前後の方形プランと思われるが、確認面からの深さが浅いために一部の壁と床面しか遺存していない。深さはもっとも残りのよいところで0.31mである。北西辺にカマドをもち、主軸はN-60°-Wである。本竈穴の南東部分がSI-149を切り、カマド煙道部がSI-150Aに切られる。また、右壁(北東壁)カマド寄り部分がSK-183と重複するが、新旧関係は不明である。カマド左前部分に、深さ42cmのピットがある。主柱穴としてもよい位置であるが、他の3か所が不明である。重複の影響により検出できなかった可能性があるが、カマド左前のピットが本来柱穴でない可能性もあり、ここでは柱穴と扱わない。出入口ピットと壁溝は検出されなかった。カマドは、両袖下部のみの遺存である。両袖の構築材は山砂主体で、内壁は赤色化した部分がある。カマド内堆積土は、焼土・山砂を含む暗褐色土である。

図示した遺物は、ロクロ成形の土器器杯と砥石の2点である。1は比較的遺存がよいが、一部細かく割れている。回転糸切り難し後無調整の杯である。2は砥石の角部分の破片である。石材は流紋岩質凝灰岩である。4面は擦られて滑らかであるが、破損面はあまり使用されていない。左側面の狭い側には、線状の擦り痕が多くみられる。図示しない土器片の点数は517点、重さは4.8kgである。



第329図 SI-148

SI-149 (第330図, 図版86・277・314)

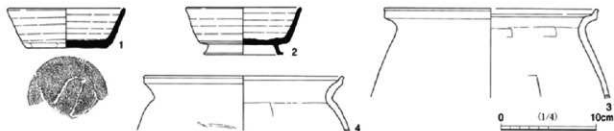
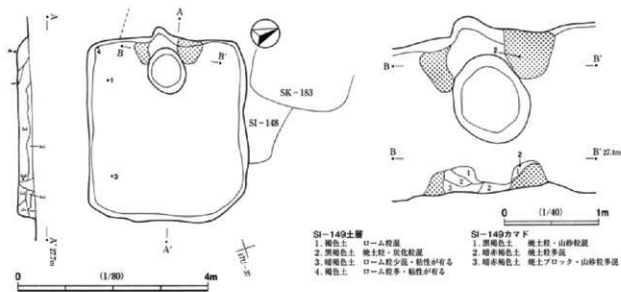
遺跡南部南西端の17U区に位置する。3.9m×3.4mの縦長の方形をなし、深さは0.39mである。主軸はN-69°-Wである。西辺にカマドをもつ。SI-148に切られるが、SI-148が浅いために、重複による影響は少ない。しかし、緩斜面に位置するため、上部の堆積土が流失していると思われ、堅穴自体の遺存があまりよくない。出入口ピットおよび壁溝は検出されなかった。床面は地形の影響を受け、北側から南側に下がっている。中央部が硬化している。カマドは両袖部前側の遺存が悪い。構築材は山砂主体であるが、下部はロームブロックを含む。右袖内壁はかなり奥まで赤色化する。火床部の赤色化範囲は不明瞭である。底面は両袖間からやや南方まで、若干窪んでいる。堆積土は黒褐色土・暗褐色土主体で、自然堆積と思われる。

図示した遺物は4点である。1は須恵器杯、2は須恵器高台付杯で、千葉産の須恵器である。2はかなり遺存がよく、1は1/2程度の遺存である。1の色調は黒灰色、2の色調はやや黄色味を帯びた灰色である。2は千葉産の須恵器の中では、シャープな作りである。3・4は常総型の土師器甕である。

2はカマド右袖上から横向きで出土した。1は南壁側西寄りの床面から出土した。図示しない土器片の点数は517点、重さは4.8kgである。出土量のわりに、図示した遺物は少ない。散在的に分布している。

SI-150A (第331図, 図版87・277・308・312)

遺跡南部南西端の17U区に位置する。3.5m×2.6mの不整な長方形をなし、深さは0.36mである。主軸はN-53°-Wである。西辺にカマドをもつ。SI-150Bと重複するが、新旧関係が不明である。また、カマド右袖前方の床面にSK-253があり、本堅穴を切っていると思われる。南側に向下る斜面に位置することから、南(左)壁の立ち上がりが低く、壁の把握にやや不安がある。しかし、カマドと南北(左右)壁のバランスおよび壁溝が南西隅部で南壁側に巡ることから、長方形プランでよいと思われる。壁溝はカマド側の隅部を除く北壁から、東壁側の南西隅部まで巡っているが、ほかは巡っていない。出入口ピットは検出



第330図 SI-149

されなかった。床面は北側から南側に向かって傾斜している。硬化面が中央部から東壁側にみられる。硬化部分南側の高さも、北壁際より低いため、床面は本来的に地形の影響を受けてやや傾斜しているといえよう。カマド構築材は山砂に加え、暗褐色土を多く含む。また、下部はローム粒を多く含む。袖内壁は赤色化し、とくに右袖の一部が顕著である。火床部に赤色化した面はみられない。火床部奥に土製支脚が正立して検出されている。原位置をとどめるものであろう。

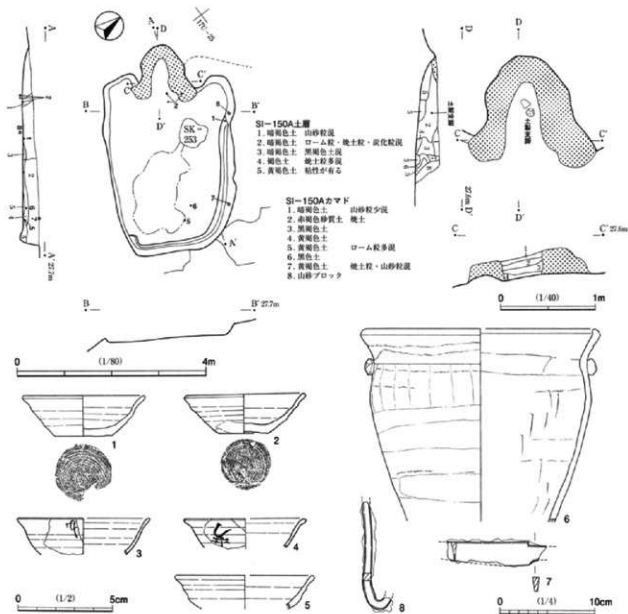
図示した遺物は8点である。1～5はロクロ成形の土器器杯である。2はかなり遺存がよく、1も2ほどではないが比較的遺存がよい。1・2は回転糸切り難し後無調整の杯である。2は器面全面が荒れている。赤色化した部分や若干黒ずむ部分もあり、火を受けたものと思われる。3・4は体部外面に墨書がある土器片である。3は正位の墨書であるが、判読できない。4は「口万」と思われるが、判然としない。倒位の墨書である。なお、ともに小片から復元図化していることを付記しておく。

6は土器器瓶である。口縁端部が内湾し、不整なボタン状の把手が貼り付けられている。遺存は一部であり、把手も1か所であるが、その反対側の位置にもう1か所存在すると思われる。

7・8は鉄製品である。7は刀子である。8は棒状品で、先端が大きく鈎状に曲がっている。用途を特定しがたいが、釣り針または、釘等の先端が曲がったものなどが考えられる。

1は北壁際やカマド寄りの下層から出土し、2はカマド右袖上およびカマド内の下層から出土した。5・6・8は床面・下層から出土し、7は上層から出土した。3・4は小片で、出土位置が不明である。

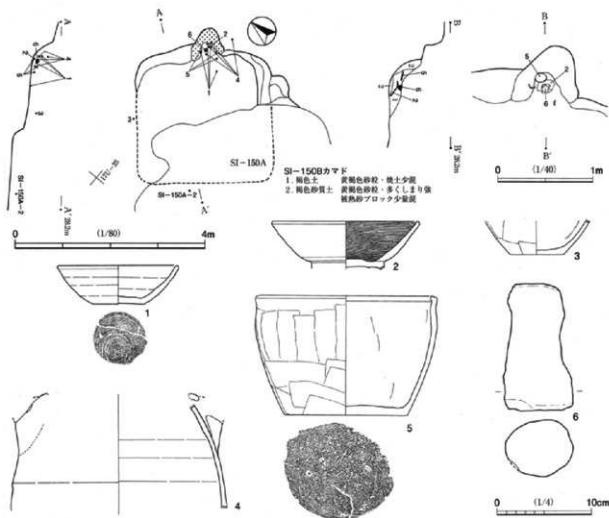
図示しない土器片の点数は405点、重さは3.9kgである。



第331図 SI-150A

SI-150B (第332図 図版87・277・316)

遺跡南部南西端の17U区に位置する。3 m弱の方形プランと思われるが、SI-150Aとの重複および南側に下る斜面に位置することから、南東側半分が損なわれている。深さはもともと残りのよい部分で0.51 mである。主軸はN-42°Eである。北東辺にカマドをもつ。SI-150Aとの新旧関係は不明である。また、本堅穴の図からは省略したが、南西壁側にSK-253があり、本堅穴およびSI-150Aを切っていると思われる。この土坑の存在により、本堅穴に出入口ピットがあったとしても、破壊されていると考える。壁溝は検出されなかった。床面については、北東壁側部分は遺存するが、SI-150Aの重複部分だけでなく、SI-150Aに近い部分も損なわれている。遺存する床面はやや硬化している。カマドの遺存は悪く、構築材の山砂が若干量残るのみである。火床部の赤色化した面はみられない。カマド内堆積土は被熱した山砂ブロックを少量含む。堆積土は暗褐色土主体で、少量の焼土粒を含む他は混じりけがない。



第332図 SI-150B

図示した遺物は6点である。1はロクロ成形の土師器杯で、回転糸切り離した後無調整の杯である。2はロクロ成形の土師器高台付杯（椀）である。高台は全体が突出し、体部側は高いが、底部外面と高台端部との高さの差は少ない。杯部内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。1・2は比較的遺存がよい。

3は「房総」型の土師器甕で、やや小型品である。焼成良好な土器である。

4は特異な形態の遺物で器形は判然としないが、置きカマドと思われる。甕を逆にしたようなものに把手と思われる部分を貼付している。把手部分の上面はやや不明瞭であるが剥がれている様相がうかがえ、さらに延びると思われる。把手は1か所の遺存であり、全体としても一部の遺存である。置きカマドであれば、反対側にもう1か所把手が付くものと思われる。なお、須恵器窯で焼成された可能性があると思われるが、色調が褐色・暗褐色であり判然としない。

5は土師器鉢である。口縁・体部の1/4と底部の大部分の遺存である。底径が大きく、口縁端部は内側に突き出し、上部は平坦な面がある。ロクロを使用して製作された土器で、底部外面に回転糸切り離し痕が残る。その後、一部にヘラケズリが施されているが、糸切り痕は全面にみられる。

6は側面がやや細くなっているが、ほぼ完形の土製支脚である。土製支脚としては、比較的焼成が良好である。

遺物の出土はカマド内に集中しており、図示した遺物のうち、3以外の5点はすべてカマド内を中心として出土している。2は火床部底面上の奥側から倒位で出土し、2の上からは6がやや傾いて出土した。6の基部は2の底部に接している。2の上部でやや堆積土をはさんで5の底部が出土している。なお、5は、口縁・体部の破片が近くから出土した。また、2・5・6の上部および周囲から、1・4の破片が出土した。2・6はカマド祭祀にともなう遺物とも思われるが、6の長さが短いことから、支脚の上部を高くするため2が下に置かれた可能性もある。他の遺物には、とくに祭祀的な様相をうかがえないことから、後者の可能性を強く考える。カマド以外はやや少量で、散在的な分布である。図示しない土器片の点数は256点、重さは2.9kgである。

SI-151 (第333・473図、図版87・277・316)

遺跡南部南西端の17U区に位置する。カマドが3基あり、その形態から2棟の重複とも思われる。しかし、出土遺物の様相に明瞭な時期差がうかがえず、形態も1棟と思われる部分があることから、連続した建て替えが行われた住居と考える。西壁側に2基のカマドがあり、一部で重複している。右側のものをカマドA、左側のものをカマドBとする。北壁側にもう1基のカマドがあり、カマドCとする。カマドA・Bを基軸にした場合の主軸方位はN-80°-W、規模・形態は3.9m×4mの不整な方形である。深さは0.56mである。カマドCを基軸とした場合の主軸方位はN-10°-Eである。北から南に下る緩斜面に位置し、南壁の遺存が悪い。椀溝・出入口ピットは検出されなかった。床面は中央部が硬化している。床面上には2か所のピットがあるが、支柱穴等、本壁穴にともなうピットではない。また、中央部やや南東寄りの床面に焼土が堆積する部分がある。

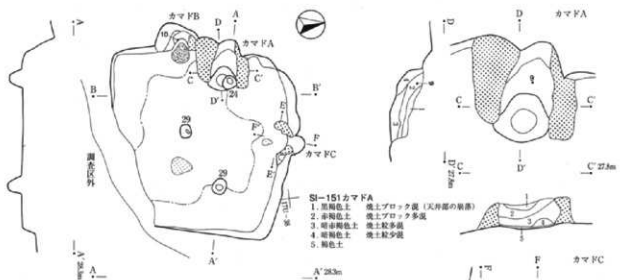
カマドはいずれもあまり遺存がよくない。カマドAは両袖部が遺存するように図示している。しかし、調査時の検討では、山砂の下部に、堅穴堆積土と考えられる暗褐色土層が堆積していることから、上部からの山砂流入の可能性があると考えられた。袖とした場合には、下部の構築材が暗褐色土を多く含むことになる。火床部底面はやや窪んでいる。火床部に深さが24cmのピットがあるが、堅穴との関係はないものと思われた。

カマドBは、本壁穴の床面精査段階で検出されたものである。突出した壁面に、よく焼けて赤色化した面が残り、突出部には右袖の一部も残存している。しかし、床面側には構築材が遺存せず、カマドの作り替えにさいして除去されている。火床部底面には、被熱により赤色化した面がみられる。その奥側に土製支脚10が正立して遺存しており、原位置をとどめるものと思われる。なお、新しいカマド使用時には、埋められて、新たな壁面が形成されたと考えられる。単なる遺棄ではなく、カマド神の封じ込めの一例といえるかもしれない。あるいは、堅穴住居廃棄に際し、旧カマドの火床部に意図的に置かれた可能性も考えられる。

カマドCについては、左袖の遺存がやや多く、右袖の遺存は一部である。構築材は山砂土体で、下部がわずかに暗いが、混じりけは少ない。壁際の袖下部の地山が、若干掘り残されて高まっており、堅穴掘削段階で、カマドの位置が決められていたことがわかる。遺存する袖部からはやや前方であるが、床面に焼けて赤色化した面がみられ、火床部と思われる。

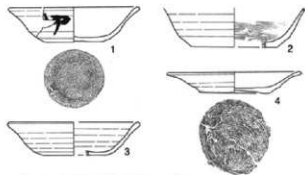
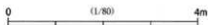
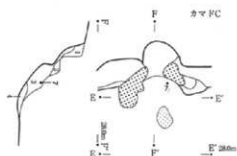
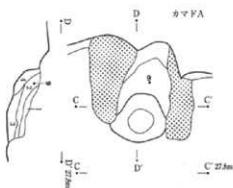
カマドA・B・Cの新旧関係についてみると、AとBはBが古く、Aが新しいと思われる。AとCについては難しいが、遺存状態からは、Aが古く、Cが新しいと思われる。

堆積土はローム粒を多量に含む黄褐色土・明褐色土を主体とする。黒色味が弱い、緩斜面に立地する



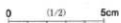
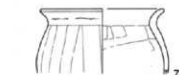
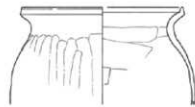
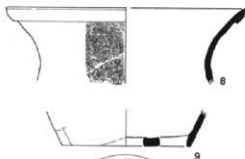
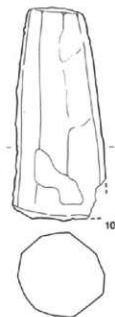
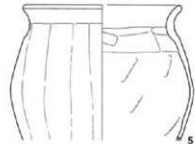
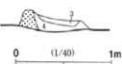
SI-151カマFA

1. 赤褐色土 焼土ブロック面 (天舟部の裏面)
2. 赤褐色土 焼土ブロック多量
3. 赤褐色土 焼土較多量
4. 赤褐色土 焼土較少量
5. 赤褐色土 焼土較少量



SI-151カマFC

1. 赤褐色土 山砂粒少量
2. 赤褐色土 山砂粒・焼土較少量
3. 赤褐色土 焼土較・炭化粒少量
4. 赤褐色土 焼土較・炭化粒少量



第333図 SI-151

ことから、自然堆積の可能性もあると思われる。

図示した遺物は11点である。1～3はロクロ成形の上師器杯である。1は体部外面に墨書があるが、判読できない。3は器面が荒れている。

4は接合してほぼ完形となるロクロ成形の土師器皿である。底部はやや突き出ており、回転せり離した後無調整の土器である。被熱により、外面の1/2以上は赤みが強い。また、底部外面は一部黒ずんでいる。

5・6・7は「房総」型の土師器甕である。7は小型品である。6の口縁端部は面取りされて上方に立ち上がるが、5・7は外反してそのまま立ち上がる。7は角張るが、5はやや丸みがある。

8は千葉産の須恵器甕である。頸部の長い甕で、色調は暗灰黄色である。9は千葉産の須恵器甕で、五孔をもつ。色調は淡褐色で、底部外面は手持ちヘラケズリ、ナデが施されるなど、土師器的な部分もある。

10は上製支脚である。下部の一部を欠くだけで、遺存のよい支脚である。断面は面取りされている。

11は灰釉陶器壺の把手と思われる。淡灰緑色の釉がかかっている。

図示した遺物はやや多いが、遺存のよいものは、4だけである。4はカマドC火床部近くおよびCから中央部寄りで出土したが、層位は中層である。カマドC部分からは2・5・7も出土した。2は底部外面に山砂が付着し、色調に赤みが強いことから、支脚に転用されたものと思われる。また、8は主としてカマドB内からの出土である。その他の遺物は、図示しないものもあわせて、カマドA・B・Cの前方や中央部寄りのところに多く出土した。図示した遺物の出土層位は、8を除いて、中・上層である。遺物の平面位置をみると、南壁側は堅穴の遺存が悪いこともあって、やや希薄である。図示しない土器片の点数は160点、重さは1.8kgである。

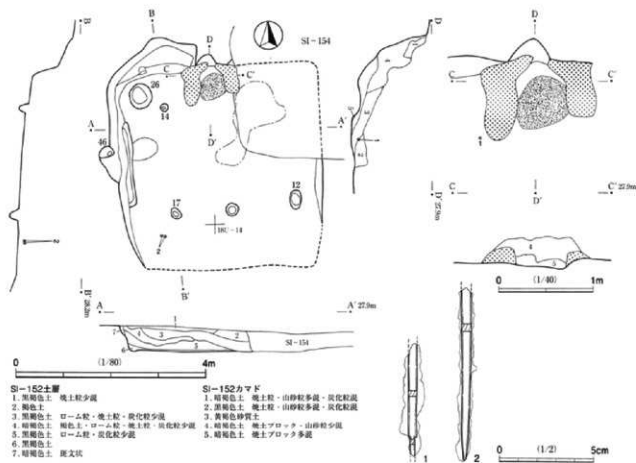
SI-152 (第334図、図版87・308)

遺跡南部南西端斜面部の18m区に位置する。推定4.8m×4.3mの方形をなし、深さは0.53mである。主軸はN-3°-Wである。北辺にカマドをもつ。北から南に下る斜面に位置し、南側の壁・床面の遺存が悪い。北東隅でSI-151と重複している。新旧関係についてみると、土層断面ではSI-154がSI-152を切っているが、床面の様相は逆の状態を図示している。出土遺物についてみると、本堅穴には遺存良好な土器がなく、図示していない。土器片をみると、須恵器に新治産が多く、千葉産の須恵器が多いSI-154よりも若干古いと思われる。以上の状況から、本堅穴を古、SI-154を新とする。床面については、本堅穴の方がSI-154よりもわずかながら掘込みは深い。主柱穴は3か所検出したが、北東隅が不明である。南側の主柱穴間にビットがある。やや中に入りすぎている点が疑問であるが、出入りビットの可能性はある。北西隅に深さ26cmのビットがある。貯蔵穴とすれば、時期的に珍しい例である。周囲にビットがあるので、本堅穴とは無関係な新しい時期のもの可能性もある。壁溝は、西壁中央にみられる。東壁から北東隅部にかけても存在するように思われたが、明確でないため図示は省略した。床面は地形の影響を受け、北から南に下っている。鈍化面が北東隅から中央にかけてみられるが、中央部にもさらに広がるように思われる。

カマドは、方形プランからの突出度が少なく、両袖および火床部は方形プラン内にある。袖の遺存はあまりよくない。構築材は山砂主体であるが、若干の暗褐色土を含む。暗褐色土は下部に多いところがある。火床部底面は、焼土ブロックが広い範囲でみられる。

堆積土は黒褐色土・暗褐色土主体であり、自然堆積と思われる。

出土した遺物は少量である。平面的な分布密度は低いが、西側に偏っている。図示した遺物は少なく、

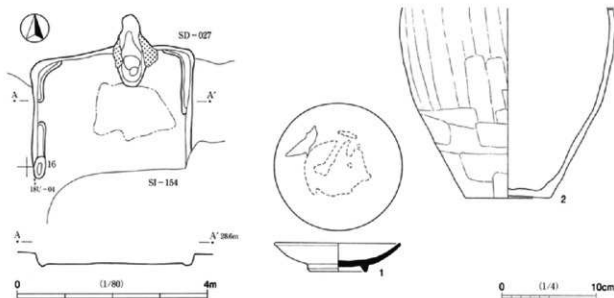


第334図 SI-152

鉄製品2点である。1は鉄鎌である。刃部を欠くが、棒状部と茎の一部が遺存する。筥被は直筥被で、直角に両開が作り出されている。カマド左袖近くの下層から出土した。2は棒状の鉄製品で、図示した下端はやや尖って終わっている。X線写真でも突起がみられないことから、鉄鎌ではないが、性格を特定したい。南西隅の下層から出土した。奈良・平安時代の土器片が出土しているが、図示したものはない。点数は193点、重さは2.3kgである。須恵器杯・甕は新治産物がほとんどである。千葉産もあるが、非常に少ない。土師器杯の中には内外面赤彩されたものがみられる。土師器甕は常総型が多く、「房総」型のは少ない。

SI-153 (第335・473図, 図版277)

遺跡南部中央やや西寄りの18T区に位置する。東西方向3.4mの方形をなし、深さは0.28mである。北辺にカマドをもち、主軸方位はNである。南側はSI-154と重複する影響で、南壁および付近の壁・床面の一部が失われている。SI-154との新旧関係は判然としない。また、北側の上部がSD-027に切られている。北から南に下る緩傾斜面に位置し、遺存する東西壁も、南側はやや残りが悪い。壁溝は東西壁の一部から北側の両隅にかけてみられるが、本来はカマド脇を除いて巡る可能性があると思われる。床面は北から南にやや下り、カマド前に硬化面がみられる。カマドはあまり遺存がよくない。袖内壁と火床部はやや赤色化している。カマド内堆積土下部は多量の山砂と焼土・灰・炭化物を多く含む層である。火床部底面は床面よりも窪み、一部南側でより深く窪む部分がある。堆積土は焼土粒・炭化物・ローム粒を含む暗褐色土



第335図 SI-153

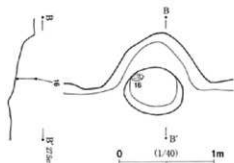
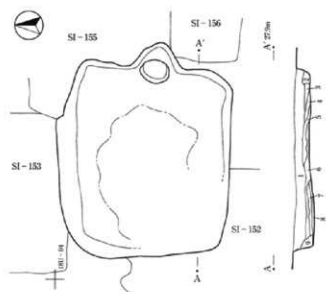
を主体とし、自然堆積と思われる。

図示した遺物は2点で、1は灰緑陶器甕、2は土師器甕である。1はわずかに欠けているが、遺存のよい個体である。内面底部（見込み）の軸はかき取られているが、一部口縁部から流れている。軸が施されない部分の端の一部に、赤色物質が付着している。朱墨の痕跡であろうか。外面の軸は口縁部から高台部外面まで施され、口縁部の一部は白色になっている。2は「房総」型の甕で、遺存はあまりよくない。1は北東隅の上層から出土し、2はカマド内および周辺の下層から出土した。図示しない土器片の点数は200点で、重量は3.7kgである。

SI-154（第336・337・473図、図版87・88・277・278・309・312・316）

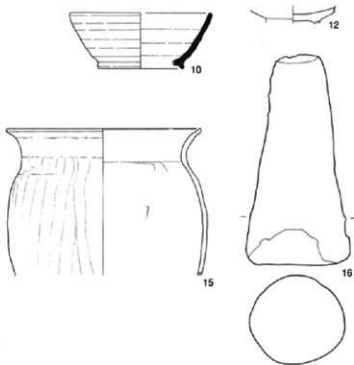
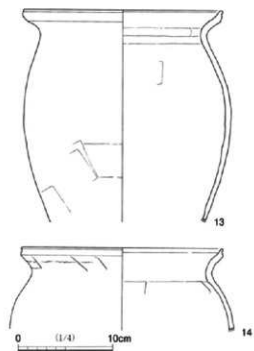
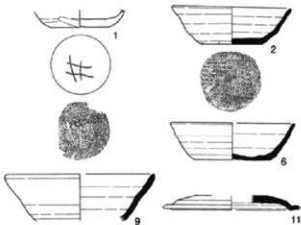
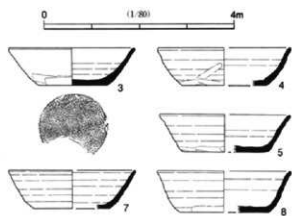
遺跡南部南西端斜面部の18U区に位置する。4.1m×3.5mの長方形をなし、深さは0.53mである。主軸はN-94°-Eである。東辺にカマドをもつ。南西側でSI-152を切っているが、その部分の床面の把握ができなかった。それは、SI-152の床面が本堅穴床面よりわずかに深いだけで、差が少ないことから、本堅穴の床面の検出が困難であったことによる。また、北側でSI-153、東側でSI-155・SI-156と重複する。SI-153との新旧関係は判然としなない。また、遺構の状況からは不明瞭であるが、遺物の様相をみると、本堅穴の方がSI-155・SI-156よりも古いと思われる。北から南に下る緩斜面に位置し、南側の遺存が北側に比べて悪い。床面も北から南に傾斜している。中央部に硬化面がみられる。壁溝・出入口ピットは検出されなかった。カマドの遺存は悪い。構築材の山砂が一部にみられるが、崩落したものである。火床部の奥に土製支脚16が立った状態で出土した。原位置をとどめるものであろう。火床部底面はわずかに窪む。堆積土は、1層が厚いのに対し、2層以下は細かく分かれており、やや不自然である。他遺構との重複が激しいことから、少なくとも一部は埋め戻されていると思われる。

図示した遺物は20点である。1はロクロ成形の土師器杯で、底部外面に「井」の線刻がある。2～9は須恵器杯である。5が新治窯産である以外は、千葉産である。遺存のよい土器は少ない。2が2/3程度、3が1/2強の遺存であるが、他は1/2を下回る。10は千葉産の須恵器高台付杯である。11は新治窯産の須恵器甕である。他の遺物よりも古い時期のものである。12は土師器高台付杯（碗）である。底部はやや突出

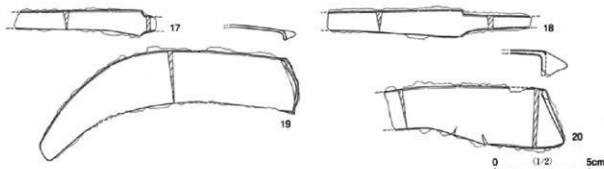


SI-154土層

1. 赭褐色土 焼土粒・炭化粒混
2. 褐色土
3. 赭褐色土 山砂粒・焼土粒・灰白色粘土混
4. 赭褐色土 山砂粒・焼土粒・黄褐色粘土混
5. 赭褐色土 ローム粒・焼土粒・炭化粒混
6. 赭褐色土 ローム粒・黄褐色粘土混
7. 赭褐色土 ローム粒少・黄褐色粘土多混
8. 赭褐色土 土量多含有
9. 黑褐色土 焼土粒混



第336图 SI-154 (1)



第337図 SI-154 (2)

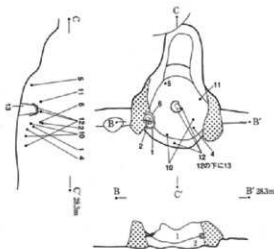
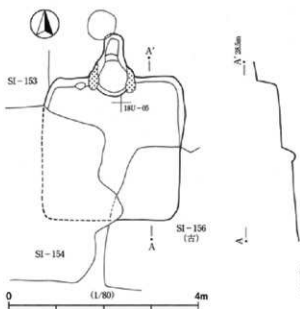
している。13～15は土師器甕である。13は口縁部の形態や器壁の厚さ、色調等に常総型の雰囲気がかがえる土器であるが、胴部下位の調整が横方向のヘラケズリであり、胎土も雲母や小石を含まず、緻密である点で違いがある。14は常総型の甕である。15は「房総」型の甕であるが、器壁が薄く、口縁部が長い等、武蔵型甕の影響を受けている。16はかなり大型の土製支脚である。底部際の一部を欠くだけで、ほぼ完形としてよいものである。17～20は鉄製品で、17・18は刀子、19・20は鎌である。19は小型の鎌である。錆のために中央で割れているが、ほぼ完形である。

3はカマド内から出土し、13・14もカマド内および周辺から出土した。図示した遺物の出土層位をみると、16以外のすべてが中・上層主体である。出土遺物の時期は、11以外にも新古の差がうかがえ、周囲の竪穴住居跡の遺物が混入している可能性がある。図示しない土器片の出土は多量で、点数は1,136点、重さは10.6kgである。竪穴全体に分布している。

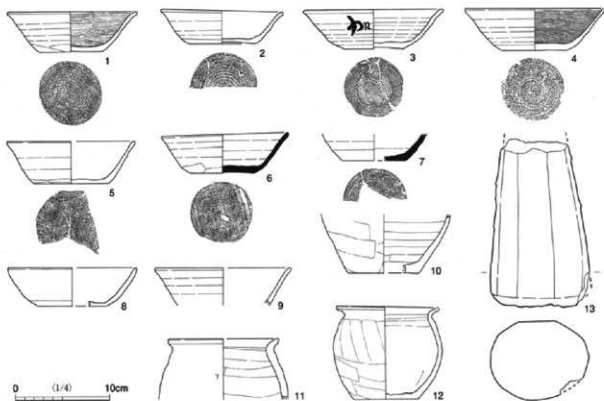
SI-155 (第338・473図、図版88・278・316)

遺跡南部南西端斜面部の18U区に位置する。推定3m×3mの方形をなし、深さは0.3mである。主軸はN-1°-Wである。北辺にカマドをもつ。南側でSI-154・SI-156と重複する。遺構の状況からは判然としないが、出土遺物の様相から、本竪穴の方がSI-154よりも新しいと思われる。SI-156との新旧関係は判然としない。壁溝は検出されなかった。また、他遺構との重複のため、出入口ピットも検出されなかった。床面は北から南にやや下っている。中央部がやや硬化している。カマド内底面中央部では、土製支脚13が立った状態で出土し、13の上には小型の土師器甕12がかぶせられていた。13は、図では上部が欠けているが、接合しない破片があることから、もともとは遺存していた可能性がある。12は、口縁部と胴部外面の色調が暗灰色・灰白色となる部分があり、また、胴部外面中位の器面の一部が剥離している等、長期に火を受けた様相がうかがえる。13の上部に置かれて支脚の高さを調節したものであろう。なお、12は一部の破片がカマド前側などに散って出土した。カマド内からは、3点の土師器杯(1・2・6)が、左袖内壁に接する同じ平面位置から正位で出土しており、カマド祭祀に関わるものと思われる。1・2・6は下から1、6、2の順で出土し、2と6は重なっているが、1の垂直位置は2・6からやや下方に離れている。12についても、遺棄された時点で、カマド神を封じ込める意図をもつ可能性がある。

図示した遺物は13点である。1～5・8・9はロクロ成形の土師器杯、6・7は千葉産の須恵器杯である。5はやや須恵器的な質感であり、6は色調に褐色部分があり、土師器的であるが、上記のように理解する。3は「加」の墨書が体部外面に正位でみられる。墨書部分を含め、細かく割れている。1・6は遺



SI-155カマド
 1. 黒褐色土 焼土粒少
 2. 灰褐色土 焼土粒・山砂粒・炭化粒・灰泥



第338図 SI-155

存がよく、割れていない部分が多い。欠損部は打ち欠きされた可能性があるが、あまり整然としたものではなく、断定しがたい。2はちょうど1/2の遺存で、2片が接合したものである。欠損が意図的か、1・6以上に不明瞭である。4の内面は黒色処理されている。8は小片であるが、被熱により赤変している。

10～12は土師器甕である。11・12は小型の甕で、10もあまり大型の土器ではない。10の底部外面は干葉産等の須恵器甕に似た質感である。また、10・11はやや判然としなが、内面の凹凸がロクロ目と思われる。12は口縁部から胴部中位付近まで黒ずんでいる部分があるが、支脚から離れていた箇所と思われる。

13は若干の横線を含むが、支脚としては硬質な焼成である。面取りされた側面の稜も磨耗していない部分がありある。

他遺構との重複の関係で、図示した遺物の出土位置は、ほとんどカマド内およびその周辺である。図示しない土器片の点数は185点、重さは2.15kgである。カマド以外は少量で、散在的な出土である。

SI-156 (第339図、図版88・278・309・312・319)

遺跡南部南西端斜面部の18U区に位置する。方形の形態で、副軸長は3m、深さは0.29mである。北から南に下る緩斜面に位置するため、南側の遺存が悪く、半分近く欠損している。主軸長は不明である。主軸方位はN-17°Eである。北辺にカマドをもつ。西側でSI-154、北西側でSI-155と重複する。SI-154を切るが、SI-155との新旧関係は判然としない。壁溝は、遺存しない部分を除いて巡っており、全周すると思われる。出入口ピットは遺存しない。遺存する床面は平坦である。カマド前が硬化しているが、西側はSI-155との重複のため、判然としない。

図示した遺物は5点である。1はロクロ成形の上師器杯である。内面にヘラミガキが施されている。2は皿である。底部外面にヘラ切りと思われる痕跡があり、須恵器としたが、色調は赤褐色部分が多く、ロクロ成形の上師器の可能性もある。色調は1縁部内外面にやや黒ずむ部分があり、器面はややざらついている。3は土製品で、輪の破片である。外面の一部が灰黒色に変色している。4・5は鉄製品である。4は小型の刀子である。切先部と茎尻部の2片の破片が遺存するが、両端が欠損しており、接合しない。茎には、柄の木質が多く付着している。5は鎌である。切先を欠くが、遺存のよい個体である。刃部は研ぎ減りして、幅が狭くなっている。

2・4・5はカマド左前および脇から出土している。2・4は下層出土であるが、5はやや上層からの出土である。1は西壁際で、SI-154のカマドと接する位置のやや上方から出土した。図示しない土器片の点数は161点、重さは2.7kgである。少量で、散在的な出土である。

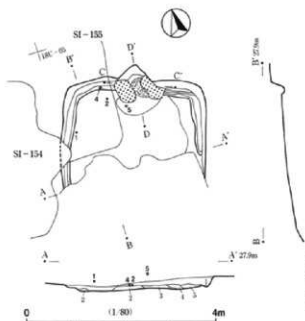
SI-157 (第340図、図版88・312)

遺跡南部南西端斜面部の18U区に位置する。主軸長が3.2mの方形をなし、深さは0.46mである。主軸方位はN-93°Eである。東辺北(左)寄りにカマドをもつ。北から南に下る緩斜面に位置し、南側が欠損する。副軸長は不明である。壁溝は遺存のよい北壁・北東(左奥)隅で巡るが、他は検出されなかった。出入口ピットは検出されなかった。床面は北側で遺存するが、南側はやや損なわれて低くなっている。ただし、地形がいちじるしく下り始めるところまでは、床面の雰囲気を残している。床面はハードルーム層に達しているが、緩斜面に位置するため、やや粘土質である。全体に硬質であるが、とくに遺存のよい北側が硬質である。堆積土は暗褐色土主体で、ローム粒の含有が少ない。自然堆積と思われる。

図示した遺物は鉄製品1点(1)で、刀子刃部の破片である。長軸方向に若干の曲がりが見られる。カマド内から出土した。図示しない土器片の点数は112点、重さは1kgである。少量で、散在的な出土である。土器片は上師器杯、常盤型および「房総」型の上師器甕、新治窯産の須恵器杯・蓋・甕である。須恵器杯片の中には、「業産」の存在が不明瞭である。しかし、土師器杯の底部片に回転糸切り無調整のものがある。相対的に、やや古い遺物が多いなか、新しい遺物が混じる。

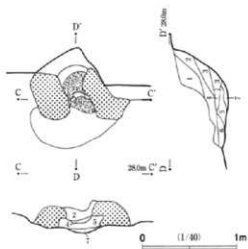
SI-158 (第341図、図版88・278・312)

遺跡南部南西端斜面部の18U区に位置する。カマドのある北壁側を調査したが、それより以南の多くが調査区外である。カマド前の床面が深く、カマド両袖中央部外側がやや浅い。2棟の重複またはカマド脇



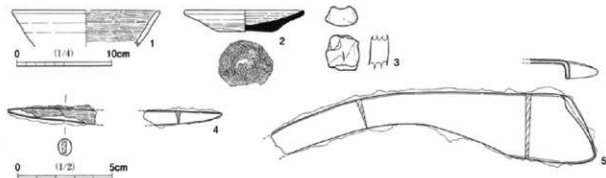
SI-154土層

1. 暗褐色土 ローム殻・堆土殻混
2. 黄褐色土 暗褐色土混
3. 黄褐色土 焼土殻・炭化殻混
4. 黒褐色土 炭化殻多混
5. 暗褐色土 焼土殻・山砂殻混

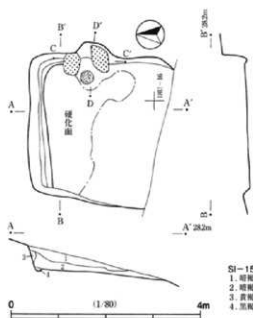


SI-156カマド

1. 黄灰色砂質土 炭化殻混
2. 暗褐色土 焼土殻・焼土ブロック混
3. 暗褐色土 焼土殻・炭化殻混
4. 暗褐色土 焼土ブロック・炭化殻混
5. 暗褐色土 ローム殻・焼土殻・炭化殻多混
6. 黒褐色土 炭多混
7. 暗褐色土 ロームブロック多混



第339図 SI-156

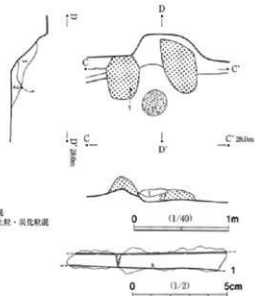


SI-157カマド

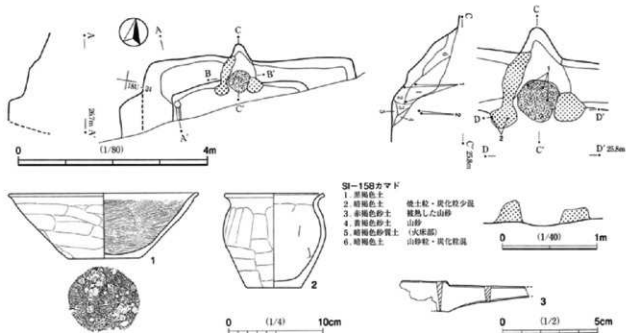
1. 暗褐色土 黄灰色砂質土混
2. 暗褐色土 ローム殻・焼土殻・炭化殻混

SI-157土層

1. 暗褐色土 ローム殻・焼土殻少混
2. 暗褐色土 褐色土混
3. 黄褐色土
4. 黒褐色土



第340図 SI-157



第341図 SI-158

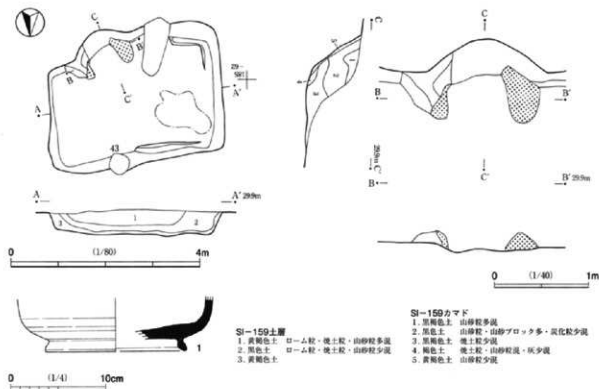
にテラスをもつ堅穴と思われるが、調査した部分が狭いため、不明瞭である。カマド前の深い部分の規模は、副軸長が2.9mであるが、主軸長は不明である。深さは0.7mである。カマド左袖脇はやや浅いが、右袖脇はかなり深い。主軸方位はN-11°-Wである。壁溝は、西壁で巡る様相がうかがえるが、北壁では検出されなかった。東壁・南壁は不明である。

図示した遺物は3点と少ない。1は大型のロクロ成形の土師器杯である。器面は荒れており、特に底部内外面に剝離痕がめだつ。カマド内下層から出土した。2は土師器甕で、小型品である。底部外面に回転糸切り痕が残り、ロクロを使用して製作されたことがわかる。器面は全体に荒れているが、糸切り後無調整である。遺存するカマド左袖上方から出土した。3は鉄製品で、刀子である。図示しない土器片の出土量も少量で、点数は95点、重さは1kgである。カマド内からの出土がやや多い。

SI-159 (第342図, 図版89・278)

遺跡南部北東寄りの18S区に位置し、北側に下る斜面寄りの台地肩部に立地する。2.8m×3.7mの不整な長方形をなし、深さは0.51mである。主軸はN-177°-Eである。南辺左(東)寄りにカマドをもつ。堅穴の形態がかなり横長であることと、カマドの設置壁が南側である点で、やや特異な堅穴である。出入口ピットは検出されなかった。出入口側は、通常であればカマドに対向する北壁側である。壁溝は右奥(南西)隅部と前(北)壁右側にあるが、他はみられない。床面はやや凹凸があるが、ほぼ平坦である。右前側が硬化している。また攪乱の影響を受けているが、中央部も硬化していると思われる。カマド両袖下は、地山を掘り残して、袖を作り出しており、当初から片側寄りの設置が意図されている。堆積土第1層はローム粒の含有が多く、埋め戻された可能性がある。

図示した遺物は、須恵器高台付盤1点である。遺存する部分は少ない。白雲母細粒を多く含み、新治窯産と思われる。色調は黄色味・褐色味のあるやや暗い灰色である。図示しない土器片も少量で、点数は150点、重さは1.3kgである。

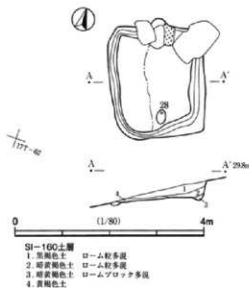


第342図 SI-159

SI-160 (第343図, 図版89)

遺跡南部西端の17T区に位置する。2.4m×2mの方形をなし、深さは0.23mである。主軸はN-21°-Wである。北辺にカマドをもつ。東から西に下る緩斜面に立地するため、西側の遺存が悪く、西壁はほぼ失われている。出入口ピットをもつ。壁溝は全周する。床面は東側が高く、西側が低い。西側はやや損なわれている可能性がある。東側床面がやや硬質であるが、遺存度の差と思われる。カマド左側は攪乱を受け、左袖は遺存しない。また、北東隅部も攪乱を受けている。堆積土はローム粒を多く含むが、遺存が悪く、緩斜面に立地する影響であろう。黒色味が強いことから、自然堆積の可能性の方が高いと思われる。

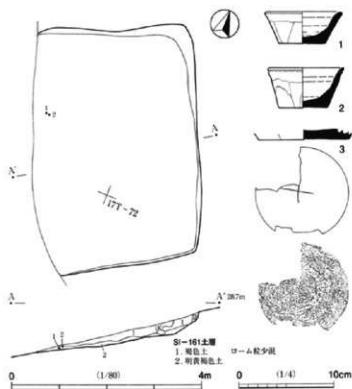
遺物はまったく出土しなかった。そのため、詳細な時期が不明であるが、形態・規模から奈良・平安時代の竪穴住居跡とする。



第343図 SI-160

SI-161 (第344図, 図版89・278・279)

遺跡南部西端の17T区に位置する。5.1m×3.5mの方形をなし、深さは0.24mである。東やや北側から西やや南側に下る斜面に立地し、西側は遺存しない。カマドと出入口ピットは遺存しないが、カマド設置壁は比較的遺存のよい東壁ではない。主軸方位が不明であるが、北壁にカマドが位置すると仮定すると、

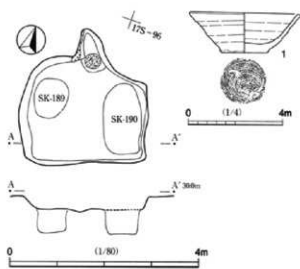


第344図 SI-161

須恵器甕に似ている。しかし、黒色処理を施した土師器にも似ており、土師器の可能性もあると思われる。3は千葉産の須恵器甕の底部片である。底部外面に「+ (×)」のヘラ書きがある。図示しない土師器片の出土量も少量で、点数は105点、重さは1kgである。

SI-162 (第345図、図版90・279)

遺跡南部北西端斜面の17S区に位置し、南から北に下る緩斜面に立地する。2.3m×2.6mの不整な方形をなし、深さは0.23mである。主軸はN-13°-Wである。北辺にカマドをもつ。堅穴内の西側でSK-189、東側でSK-190と重複する。本堅穴の周囲には土坑群が存在するが、SK-189・SK-190もそれらの土坑群と同様の性格の遺構と思われる。新旧関係については、遺物からは不明瞭である。しかし、SK-190が本堅穴の東側床面にほとんど収まり、SK-189もほぼ西壁際床面に位置することから、両土坑は本堅穴の窪みを利用して掘り込まれたものと推測する。この逆は不自然と思われ、本堅穴はSK-189・SK-190よりも古いと考える。壁溝・出入口ピットは検出されなかった。床面は地形の影響を受け、北側が低く、南側が高い。硬化面は判然としない。カマドは方形プランからかなり突出し、火床部はほぼ北壁の両側を結ぶ位置にある。遺存は悪く、左袖の一部が遺存するのみである。堆積土は土坑と重複するため、やや不明瞭であるが、若干のローム粒が混じる黒色土主体であり、自然堆積の可能性があると思わ



第345図 SI-162

れる。

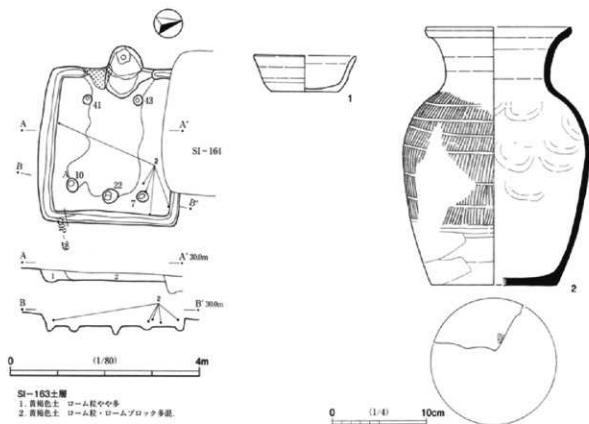
図示した遺物はロクロ成形の土師器杯1点である。底部の切り離しは回転糸切りで、その後無調整である。底部は小さく、やや突き出ている。出土位置は不明である。図示しない土器片の出土量は非常に少量で、点数は29点、重さは290gである。

なお、SK-189・SK-190が本堅穴の窪みを利用して掘られた場合、本堅穴が廃棄されてからあまり長い年月が経っていないことが考えられる。平安時代の土壌墓の可能性があると思うが、推測の域を出ない。

SI-163 (第346図 図版90)

遺跡中央部北寄りの20P区に位置する。3.3m×3mのやや縦長の方形をなし、深さは0.3mである。主軸はN-75°-Wである。西辺にカマドをもつ。北東隅を除く北壁側から北西隅部にかけての部分が、SI-164に切られている。主柱穴4か所と出入口ピットをもつ。カマド側の主柱穴が深さ40cm強であるのに対して、出入口側の主柱穴が7cm・10cmの深さであり、浅い。壁溝は切られる部分が不明なほかは、巡っている。幅が比較的広く、しっかりしており、全周すると考える。床面は、カマド前から主柱穴間にかけて硬化している。カマドは、左袖の一部に山砂が残っているが、全体に遺存状態は不良である。火床部の被熱面も遺存しない。火床部底面は若干窪んでいる。堆積土は全体にローム粒・ブロックを多く含む。また、出入口ピット付近に、多量の焼土と炭化材を含む土層がみられる。埋め戻されていると思われる。

図示した遺物は2点である。1はロクロ成形の土師器杯である。口縁・体部が1/3程度、底部が1/2強の遺存である。出土位置は不明である。2は千葉産の須恵器甕である。底部外面にヘラ書きがあるが、遺存する部分が少なく、判読できない。色調はやや黄色味を帯びた灰色である。右前(北東)隅側を主として、



第346図 SI-163

左(南)壁際中央部分まで広く散っている。出土層位は下層である。図示しない土器片の出土量は少量で、散在的に分布している。点数は75点、重さは1.4kgである。土器片の内訳は土師器杯、常総型の土師器甕、新治宮産の須恵器杯、千葉産の須恵器杯・甕・甗である。千葉産の須恵器甕と常総型の甕がめだつ。「房総」型の土師器甕の存在は不明瞭である。土師器杯の中には内面黒色処理されたものがある。

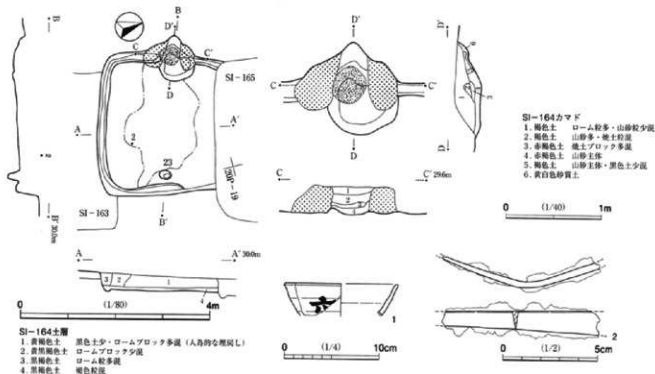
SI-164 (第347図, 図版91・279・312)

遺跡中央部北寄りの20P区に位置する。3.1m×推定2.9mの方形をなし、深さは0.29mである。主軸はN-72°-Wである。西辺にカマドをもつ。南側でSI-163を切り、北側でSI-165に切られている。東壁際中央に出入口ピットをもつ。壁溝は東壁北側(前壁右側)のみみられないが、その他は、SI-165に切られる部分を除いて巡っている。床面はほぼ平坦で、中央部が硬化している。堆積土はロームブロックを多く含み、埋め戻された土層である。

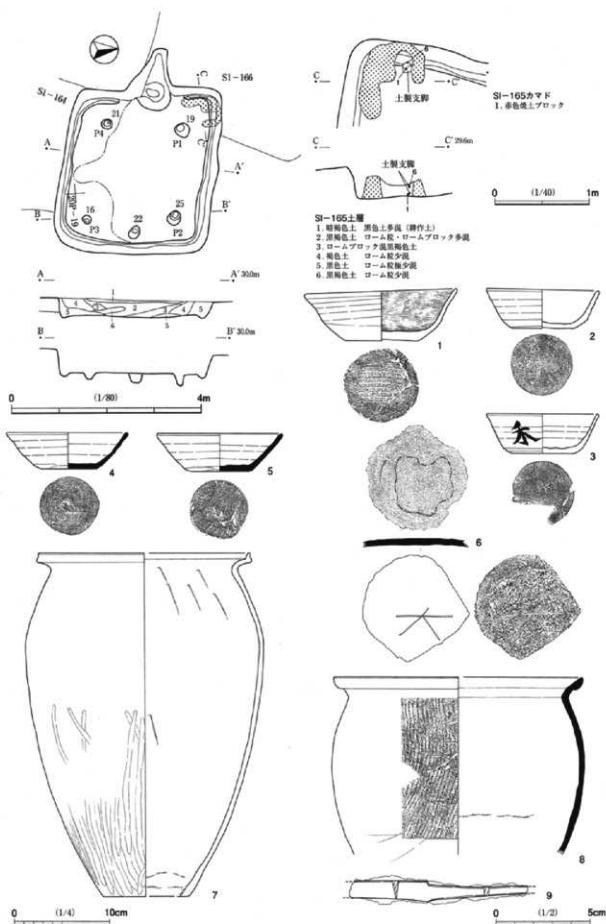
図示した遺物はロクロ成形の土師器杯1点と鉄製品1点の2点である。1は体部外面に正位の墨書があるが、欠損部にかかっており判読できるほどではない。遺存部分は「六」に似ているが、断定することはできない。墨色は比較的濃い。色調は外面がにぶい褐色、内面が灰黒色味を帯びており、千葉産の須恵器の可能性もある。2は刀子の刃部破片であるが、遺存する中央で折れ曲がっている。2の出土層位は、ほぼ確認面である。図示しない土器片の出土量は少量で、散在的に分布している。点数は91点、重さは750gである。

SI-165 (第348・473図, 図版91・279・312)

遺跡中央部北寄りの20P区に位置する。3.4m×3.3mの方形をなし、深さは0.4mである。形態はやや歪んでおり、平行四辺形的である。主軸はN-79°-Wである。西辺と北西隅にカマドをもつ。南側でSI-164を切り、北西側でSI-166を切っている。主柱穴4か所と出入口ピットをもつ。壁溝は全周する。床面は



第347図 SI-164



第348図 SI-165

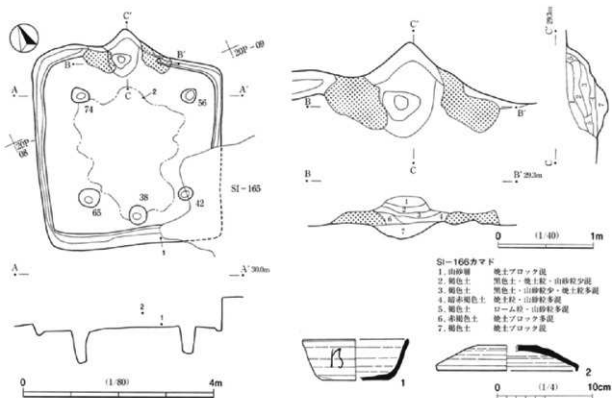
南東（左前）側がやや高く、北西（右奥）側がやや低い。また、やや凹凸がある。主柱穴P3・P4間付近から北（右）側全体が硬化しているが、中央部の一部がやや顕著である。西壁中央に設置されたカマドは、遺存が不良である。方形プランからかなり突出しているが、SI-166堆積土中に作られているため、煙出口側を掘り過ぎていていると思われる。赤変した山砂が下層に厚く堆積しているが、カマド構築材が崩れたものである。そのため、袖等の形状が不明瞭である。また、火床部の被熱範囲も不明である。火床部底面およびその前方がやや窪んでいる。西壁中央のカマドの右隣、北西（右奥）隅部の位置にカマドの袖が崩れたような状態で山砂がみられ、かなり赤変している部分がある。山砂に囲まれた中からは、土製支脚片（木実酒）が出土している。このことから、この部分に隅カマドが存在した可能性があるが、やや違和感もある。SI-166堆積土中に作られた煙道部の把握が不十分なことも理由の一つであるが、両袖と想定されている部分の下部では暗褐色土が堆積しており、もともと袖ではないことも考えられる。西壁中央のカマドが遺存不良であることから、構築材等を右隣の隅部に廃棄した可能性もあると考える。堆積上については、主体である2層にローム粒・ブロックが多く含まれることから、埋め戻されたものと思われる。ただし、壁際の4層・5層はローム粒が少ないことから、壁際については、自然堆積の可能性が強いものと思われる。

図示した遺物は9点である。1～3は口クリ成形の土師器杯である。1はかなり遺存のよい土器である。被熱により、赤みや黒みをもつ部分が口立つ。また、内外面とも荒れて、剥離も著しい。底部外面に残る糸切り痕が平行的であり、静止糸切りと思われる。この土器の器形・時期で静止糸切りは珍しい。2はまったく密れのない完形である。内外面とも剥離する部分がある。3は体部外面に正位で「木」の墨書がある。墨色がかなり濃い。4・5は千葉産の須恵器杯である。4は割れているが、かなり遺存がよい。6は千葉産の須恵器甕の底部片である。底部外面に漢字の「人」に似たヘラ書きがある。「大」とみた場合、書き順の1画目は同じであるが、2画目と3画目の順序が判然としない。底部内面は中央が滑らかであるが、通常の使用で平滑になったものでなければ、覆または研ぎ具に転用された可能性がある。おおよその範囲を破線で図示した。7は常総型の土師器甕である。胴部内面上位は強いヘラナデを施されているが、それ以下は凹凸が著しい。胴部外面中位以下は山砂が付着している。胴部最下位から底部は、黒色に変色する部分がある。8は千葉産の須恵器甕で、赤みの強い色調である。9は鉄製品で、刀子である。

出土状況を見ると、1は西壁中央のカマドに向かって右奥隅と右隅隅の下層を主体に出土した。2も右奥隅の下層から倒位で出土した。3は中央部から中・下位での出土である。6は右奥隅部の山砂堆積範囲に囲まれたところから出土している。出土層位は中層である。また、1の破片が6よりもやや低い近い平面位置から出土している。7と8はやや散って出土しているが、下層主体の出土である。8は1とやや似た出土状況である。図示した遺物は、全体に下層・床面からの出土が多いが、4は中層の出土である。また、5も床面からはやや高い位置である。図示しない遺物も含めた出土分布は、右（北）壁側と中央部がやや多い。図示しない土器片の点数は127点、重さは2.3kgである。

SI-166（第349図、図版92・279）

遺跡中央部北寄りの20P区に位置する。4.3m×3.9mの方形をなし、深さは0.35mである。主軸方位はN-23°-Eである。北辺にカマドをもつ。東壁南側から南東隅付近にかけて、SI-165に切られている。主柱穴4か所と出入口ピットをもつ。壁溝はSI-165との重複部分以外は巡っており、全周するものとみられる。床面は東側が西側よりもやや高い。主柱穴間が硬化している。カマドは遺存が悪く、左袖が不明瞭である。



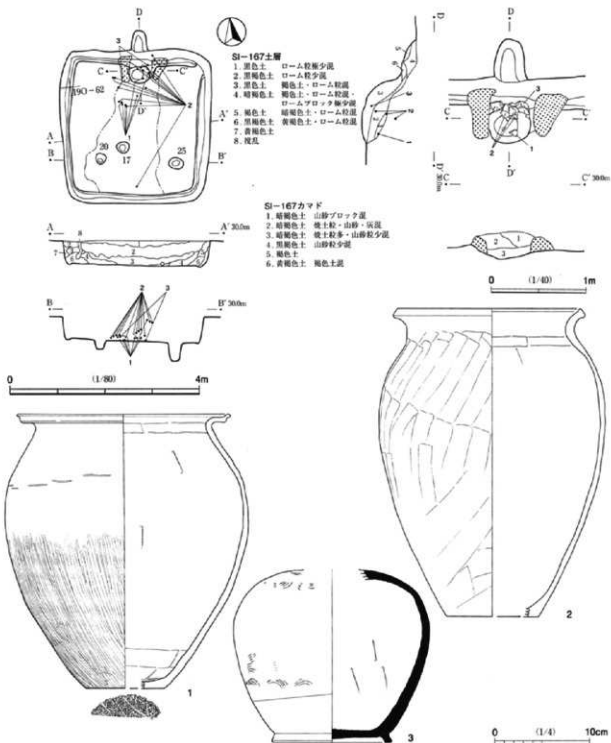
第349図 SI-166

また、右袖も前側が遺存しない。堆積土については、下層および壁際がローム粒の包含が少ない黒色土層であるが、中央部・上層はローム粒・ブロックを多量に含む黄褐色土層である。この黄褐色土層は黒色土層に一部もぐりこむような状態で堆積している。壁際は自然堆積の可能性があるが、中・上層は埋め戻されたものと思われる。

図示した遺物は、2点である。1は千葉産の須恵器杯で、体部外面に正位で「得」の墨書がある。また、外面の一部に火燗痕がみられる。色調はかなり黄色味を帯びた（暗）灰色である。南壁際東寄りの壁溝部分で、ほぼ床面と同じ高さから出土した。2は新治窯産の須恵器蓋である。カマド前方の中層から出土した。遺物の出土分布は散的であるが、北東隅部がやや多く、北西隅付近が希薄である。図示しない土器片の点数は274点、重さは1.5kgである。

SI-167 (第350図、図版92・279)

遺跡西部北東端の190区に位置する。3.3m×3mの方形をなし、深さは0.55mである。主軸はN-9°-Eである。北辺にカマドをもつ。壁溝はほぼ巡っているが、北東隅で途切れ、東壁南側部分でも浅くなる箇所がある。壁溝内は凹凸が目立つ。床面南側に3か所のピットがあるが、東壁と西壁寄りのものは、その位置から、支柱穴の可能性もある。しかし、北側では検出されていないので、疑問があり、可能性の指摘にとどめる。中間のピットの性格は不明である。出入口ピットは検出されなかった。床面は平坦で、カマド前から南壁際中央にかけてよく踏み固められて硬化している。その両側との硬さの差は顕著である。また南壁際中央はやや軟質で、その周囲が馬蹄形状に硬化し、わずかに高まっているように思われた。出入口部の特色を示すものと考え、カマド両袖は壁の中段から造りつけられている。煙道部はカマド底面から垂直に近く立ち上がり、上部で壁外に長く延びる。堆積土は黒色土・黒褐色土主体で、ローム粒の包含



第350図 SI-167

が少ない。自然堆積と思われる。

図示した遺物は3点である。1は常総型の土師器甕で、口縁部から胴部中位までは比較的遺存のよい土器である。2は「房総」型の土師器甕である。底部の遺存はわずかであるが、口縁部から胴部下位まで1/2近く遺存している。3は新治窯産の須恵器壺である。胴部外面は同心円文タタキ後回転ヘラケズリが施されている。タタキ目は所々に残るが、多くはヘラケズリに消されている。胴部外面にはカキ目状の痕

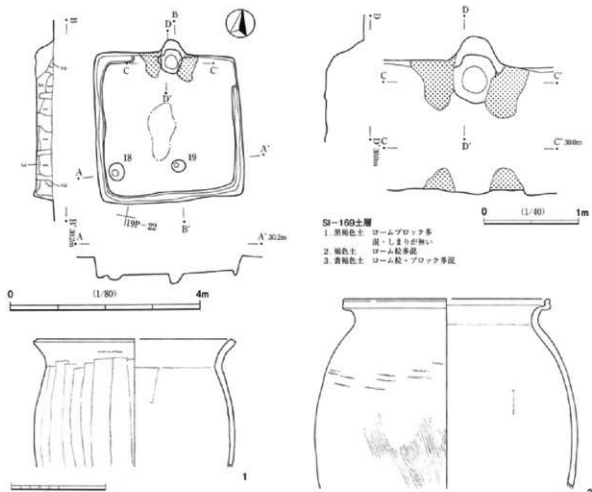
跡がある。また、底部内面も渦巻き状のカキ目痕がみられる。胴部内面はロクロナデの他、ヘラの当たりと思われる痕跡がみられ、ヘラナデが施されたものと思われる。

出土状況を見ると、1～3はいずれもカマド内外から出土している。1はカマド内からも出土しているが、分布はカマド前方の方が多い。一部が上層から出土するが、下層出土の破片が多い。2はカマド内外にやや広く分布し、出土層位は下層から上層にわたる。3はカマド内底面と、左袖上であるが下層からの出土である。カマド内の破片は正位での出土である。出土遺物は1～3が主体である。図示しない土器片の出土分布は散漫で、空白域が多い。点数は130点、重さは440gである。

SI-169 (第351・474図、図版93)

遺跡中央～西部境界付近の19P区に位置する。3.1m×3.1mの方形をなし、深さは0.37mである。主軸はN-12°-Wである。北辺にカマドをもつ。出入口ピットをもつ。耕作機械による擾乱を縦横に受けている。壁溝は北東隅を除いて巡っているが、耕作の影響を受け、やや不明瞭である。床面の南西隅にピットがあるが、本竪穴に關係するものか不明である。床面はほぼ平坦で、中央に硬化面がみられる。範囲が狭いのは、耕作による影響である。堆積土はロームブロックを多く含むが、耕作による影響であろう。黒褐色土主体であることから、自然堆積の可能性の方が高いと思われる。

図示した遺物は少なく、土師器甕2点である。ともに遺存はあまりよくない。1は「房総」型の甕で、内外面に煤が付着している。2は常総型の甕である。1はカマド内上層の出土である。2は北西隅付近か



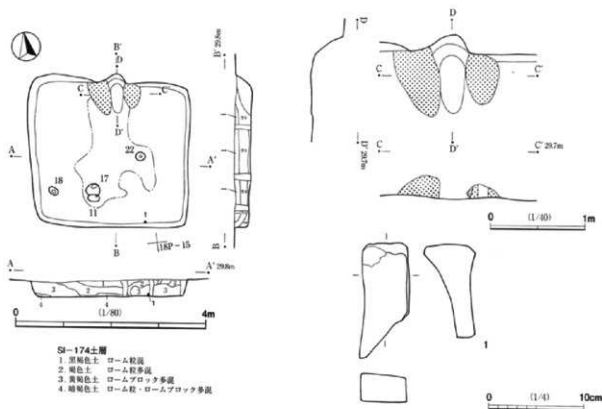
第351図 SI-169

ら中層主体に出土した。図示しない土器片も少なく、点数は79点、重さは1kgである。分布密度は低く、散漫に出土している。

SI-174 (第352図, 図版95・317)

遺跡西部中央の18P区に位置する。3.1m×3.4mの方形をなし、深さは0.34mである。主軸はN-20°-Eである。北辺中央にカマドをもつ。耕作機械による攪乱を縦横に受けている。東壁は壁に沿って、耕作の溝が入るため、本来の壁面が損なわれているが、溝幅が10数cmであることから、若干削られた程度である。壁溝は検出されなかったが、東壁部分に存在したとしても、耕作の溝で破壊されている。出入口ピットが南壁側西(左)寄りのところにある。二つのピットが接したような状態であるが、中央側がやや深く、南壁側がやや浅い。床面には他にも2か所にピットがあるが、本壁穴に伴うものか不明である。出入口ピットに関しては、二つのピットで一連とみる場合、他にピットがあることから、1か所は無関係とみる場合、建て替えに際して位置をややずらしたとみる場合などが考えられる。床面はほぼ平坦で、硬化面が出入口ピットからカマド前にかけての中央部にみられる。

図示した遺物は砥石1点である。石材は流紋岩質凝灰岩である。長側面は4面とも磨られて磨耗している。研ぎ減りして薄くなった部分で割れているが、その部分も磨られて比較的滑らかである。端部の小口面はあまり使用されていない。南壁際石寄りの床面から出土した。図示しない土器片の点数は178点、重さは1kgである。出土位置はカマドの前方に集中している。土器片の内訳は、「房総」型の土師器甕、武蔵型の土師器甕、新治窯産の須恵器杯・甕、千葉産の須恵器甕、土師器杯である。土師器甕が多く、他は少ない。土器片からみた本壁穴の時期については、特定が難しいが、9世紀代と思われる。

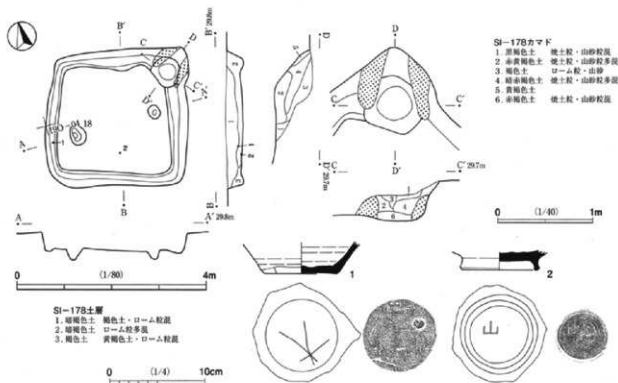


第352図 SI-174

遺跡西部北東端の190区に位置する。北東隅にカマドをもつ竪穴である。床面内には2か所のピットがあるが、西壁際のピットが出入口ピットの可能性がある。東壁際のピットはカマドに近く、出入口ピットとは思えない。ただし、出入口ピットが検出されない竪穴も多いので、2か所とも無関係であり、南壁側が出入口部である可能性も若干残ると思われる。平面プランは南北方向が2.9m、東西方向が3mの方形をなし、深さは0.4mである。主軸方位は、西壁側が出入口部とすると、N-103°-E、南壁側が出入口部とすると、N-13°-Eである。壁溝は全周する。床面は東壁際のピット付近から中央部東側がやや低い。その部分の床面は若干黒色土がみられ攪乱を受けていると思われる。硬化面が不明瞭であるのは、その影響であろう。堆積土は、下層にローム粒の包含が多いが、全体に暗褐色土主体であり自然堆積と思われる。

図示した遺物は2点である。1は新治窯産の須恵器杯である。底部は残るが、口縁・体部の多くを欠いている。底部外面には大きく3本の線が交差する線刻がある。線は弱く、「大」を意図したように思われる。また、口縁・体部は打ち欠きされたものかもしれない。2は新治窯産の須恵器高台付杯である。南壁側中央の床面から正位で出土した。底部外面に「山」の線刻がある。底部は欠損がないが、口縁・体部は高台部際を除いて、全周遺存せず、打ち欠きされた可能性がある。転用品とも思われるが、器面がざらつており、判然としなない。

1は西壁際南寄りの下層から正位で出土し、2は南壁側中央の床面から正位で出土した。1の近く、南西隅部の下層からは、図示していないが、新治窯産の須恵器杯の底部破片が出土している。これも打ち欠きされた土器かもしれないが、断定しがたい。図示しない土器片の出土点数は258点、重さは1.1kgである。1・2などのやや大形の破片が南側に点在しているが、位置を記録された遺物が少ないため、全体の出土傾向は不明瞭である。



SI-178カマド
 1. 赤褐色土 磁土粒・山砂粒多量
 2. 赤褐色土 磁土粒・山砂粒多量
 3. 褐色土 ローム粒・山砂
 4. 暗赤褐色土 磁土粒・山砂粒多量
 5. 黄褐色土
 6. 赤褐色土 磁土粒・山砂粒多量

SI-178土層
 1. 暗褐色土 褐色土・ローム粒多量
 2. 暗褐色土 ローム粒多量
 3. 褐色土 黄褐色土・ローム粒多量

第353図 SI-178

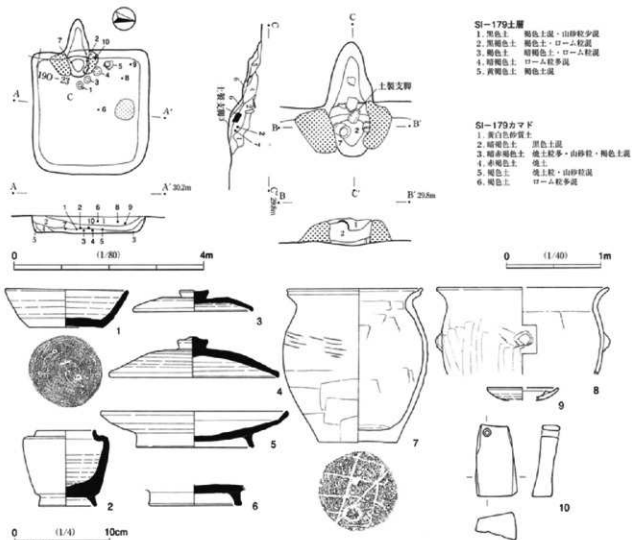
遺跡西部北東端の190区に位置する。2.7m×2.5mの方形をなし、深さは0.38mである。主軸はN-102°-Wである。西辺にカマドをもつ。カマドは西壁に向かって左寄り位置する。壁溝・出入口ピットは検出されなかった。床面は平坦で、とくに硬化した面はみられない。

図示した遺物は10点であるが、そのうち、9は近世の灯明皿であり、後世に混入したものである。1～6はすべて新治窯産の須恵器である。1は須恵器杯である。口縁端部に小さな欠損部が2か所ある他は、欠損部がなく、完形に近い土器である。1か所の欠損部際の口縁部内面には、若干の黒色物質が付着しており、油煙と思われる。欠損は灯芯を固定するための打ち欠きで、灯明器として使われたものである。もう1か所の際には油煙がみられないが、形状から同様のものである。底部内面は磨られて滑らかである。また、新治窯産の須恵器としては緻密な胎土であり、その他の器面も比較的滑らかである。灯明用に精良な須恵器が選ばれたのかもしれない。口縁・体部の一部が2片に割れて接合している。2片あわせて口縁部周りで1/2弱の大きさであり、整然とした割れ目である。他の部分と同じ場所から出土している。出土状況から、意図的に割られたものと考えられる。2は小型の短頸壺である。口縁部は短く立ち上がり、1/2が欠損する。また、高台部も小さく2か所欠損している。その他には欠損のない個体である。3・4は蓋で、3はやや小型、4はやや大型の上器である。ともにまったく割れもない完形品である。3はやや黄色味を帯びた色調で、内外面に火燂の痕跡が顕著である。5は高台付盤である。口縁・体部の3/5強を欠損する。打ち欠きされているか、遺物からは判然としない。6は高台付杯である。口縁・体部は全周が欠損しているが、断面がていねいに磨かれており、視等に転用されたものである。器面がざらつくため、磨られた範囲は判然としない。高台部の一部が欠損しているが、遺存部分には割れがない。

7は常規型の上器器甕で、小型品である。口縁端部をわずかに欠くだけで、ほとんど完形である。胴部下位はヘラミガキではなく、横方向のヘラケズリが施されている。しかし、胴部上位には、横位・斜位のヘラの当たり痕が周囲し、底部外面には木炭痕が全面に残るなど、大型品と共通する製作技法がみられる。8は上師器甕で、やや小型の上器である。把手が胴部上位に2か所遺存するが、土器径を四等分する位置に4か所あると考えられる。須恵器甕に付く把手に似た部分もあるが、かなり崩れており、貼り付けも雑である。

9は近世の灯明皿で、志戸呂窯の製品である。10は砥石である。石材は流紋岩質凝灰岩である。携帯用の提げ紙で、粗通しの穴がある。両側から穿孔されている。図示した表面の広い面はあまり磨られていないが、他は平滑である。部分的に複数条の線状の研ぎ痕がみられる。

以上の遺物のうち、4点の土器がカマド右袖の斜め前下層から直線状に並んで状態で出土した。カマド前から西壁(奥壁)側に向かって、1・3・4・5の順である。土器の様相をみると、1・5は伏せた状態であり、3・4もつまみを下にした状態である。すべて傾位であるが、突縁として3・4の蓋を1と同じ傾位の上器と扱ったかどうかは、検討を要すると思われる。しかし、いずれにしても意図的に置かれた土器群であることは確実である。カマド内からは、2・7が出土した。2は右袖側から、7は左袖側からの出土である。2は横に傾いて出土し、7はかなり傾いているが、口縁部を上にして出土した。その間のやや奥側からは、遺物実測図を図示していないが、上製支脚が横向きに倒れて下層から出土した。上部は不明瞭であるが、下部は欠損している。カマドが左側に寄っていることから、右側は当初から、土器保管等の場所であった可能性がある。しかし、1・2などの出土状況から、以上の土器群は、カマド座の



祭祀に関わるものと思われる。

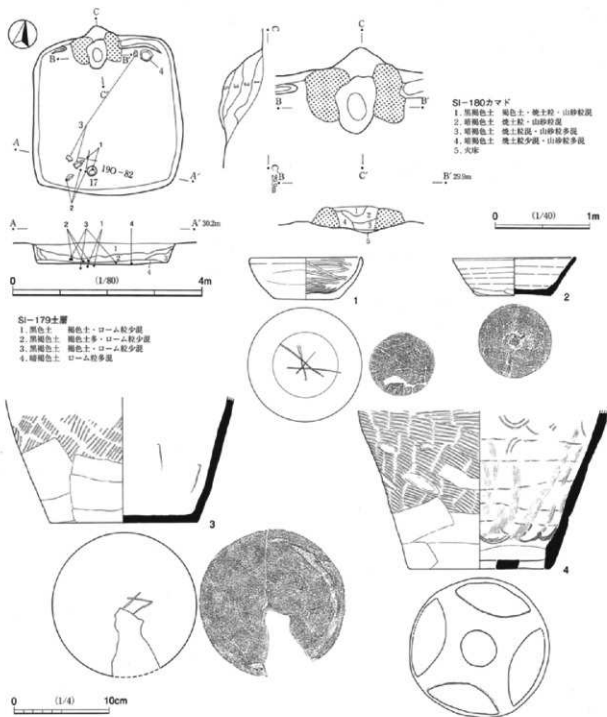
その他の遺物のうち、10はカマド右袖上からの出土であるが、カマド廃棄に関わるものかどうかは疑問である。また、6・8は上層出土であり、カマド廃棄とは関係ないと考える。1・3・4・5は、堆積土3層上面から出土しており、3層以下は埋め戻された土層と考える。その上層の1・2層は黒色土・黒褐色土であり、自然堆積と思われる。図示しない土器片の点数は86点と少なく、重さは1.3kgである。その他、カマド内から新治窯産の須恵器残片が出土している。

SI-180 (第355図, 図版98・99・280)

遺跡西部北東端の190区に位置する。3.4m×3.1mの方形をなし、深さは0.44mである。主軸はN-9°-Wである。北辺中央やや西(左)寄りにカマドをもつ。南壁側やや西(左)寄りに出入口ピットをもつ。竪穴の掘りかたが壁際を除く中央部で広く窪んでおり、その上に黒色土・ロームブロック・褐色土の混合土を充填して、貼り床が構築されている。このため、床面を正確に確認することは難しい。特に掘りかたの深い中央部で著しい充填が認められた。掘りかたのあり方としては、四隅や壁側が深い事例が多いが、本竪穴は逆に中央部が深くっており、類例の少ないあり方である。竪穴の掘削方法としては、四隅を深く

掘って床面を決めていく方が自然と思われる。本堅穴の中央部がなぜ深く掘られたのか、疑問が残る。壁溝はカマドの両脇でみられるが、その他は軟弱な床面であったため不明である。西壁の一部および南東隅にも廻ると思われる点があるが、不明瞭である。本来は全周またはかなり廻るものと思われる。以上のような検出状況であったため床面の硬化範囲は判然としない。堆積土は黒色土・黒褐色土主体で、最下層以外はローム粒の包含が少なく、自然堆積と思われる。

図示した遺物は4点である。1は非ロクロの土師器杯である。底部外面に4条線が交差する線刻がある。そのうちの2条はしっかりと一直線状に刻まれているが、他の2条は概して雑な線刻である。2は新治席



第355図 SI-180

産の須恵器杯である。4片に割れているが、遺存のよい土器である。3は須恵器甕である。底部外面中央にカタカナの「カ」に似たヘラ書きがある。色調は灰黄色で、褐色の強い部分もある。胎上がやや密着で、小石等の含有が少なことから千葉産と思われる。4は須恵器甕である。胴部から胴部上位を欠くが、胴部下位から底部が遺存する。胴部内面下位には、同心円文の当て具痕跡が残り、その上部には縦方向にヘラナデ痕がある。ハケメ的な痕跡であり、本口の端部を使用した可能性がある。内面は接合痕が多く残り、痕跡は一部で顕著である。ヘラナデは粘土紐のつなぎをよくするために施されており、当て具痕をかなり消している。胴部外面は、タタキ目の下位に指ナデの痕跡がみられる。指ナデ痕は非連続で半周以上廻っている。一つの指ナデは右ややドから左やや上の方向にナデ上げられている。その部分に接合痕がみえる場合があることから、つなぎをよくするために施されたことがわかる。色調は褐色味が強いが、長石・白雲母等の砂粒や小石を多く含み、新治窯産と思われる。

1は出入口ピット上およびその近くから出土している。出土層位がやや不明瞭であるが、床面または出入口ピット内と思われる。2も出入口ピットのすぐ左側の下層から出土した。3の一部も1・2近くの出入口ピット左側から出土し、一部は隠れたカマド右袖脇から出土した。出土層位はともに下層である。4は3の右側、北東隣近くの床面から正位で出土した。図示しない土器片の点数は121点、重さは1.5kgである。カマド内と西壁際中央がやや希薄である以外は、ほぼ全体的に出土している。出土層位は床面から上層にわたる。

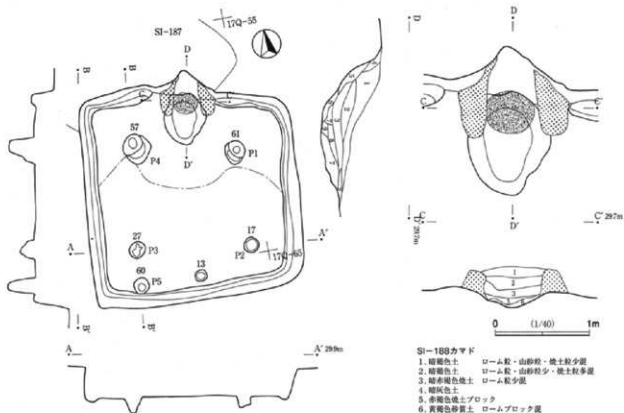
SI-188 (第356・473図、図版101・280・281・321)

遺が西部南よりの17Q区に位置する。4.3m×4.5mの方形をなし、深さは0.65mである。土軸はN-6°Eである。北辺にカマドをもつ。北西側で弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴住居跡SI-187を切っている。壁溝は全周する。主柱穴4か所と出入口ピットをもつ。また、南壁際内寄りに深さ60cmのピットがある(P5)が、主柱穴P3・P4の延長上に位置することから、補助柱穴と思われる。P5の深さは、近くのP3がやや浅いのに対して、北側の主柱穴P1・P4と同等である。南東側の主柱穴P2もかなり浅いが、その南にはピットがみられない。床面はほぼ平坦である。硬化面はP1・P4から南側に広がっているが、中央部は地よりやや硬化している。堆積上は床面際を除いて、ローム粒の包含がやや少ない黒褐色上土体であり、自然堆積と思われる。

図示した遺物は9点である。1・2はロクロ成形の上師器杯である。1は器壁の薄い土器である。3・4は千葉産の須恵器である。4はやや暗灰青色を帯びるが、褐色の強い色調である。5は上師器高台付杯である。6は上師器高台付皿である。色調はやや暗い赤褐色で、若干黄色味を帯びる部分もある。外面はややざらつき、千葉産の須恵器の可能性もある。皿部は割れているが、欠損は一部で遺存がよい。扁平で、内面はヘラミガキが施されている。高台部は剥がれて遺存しない。

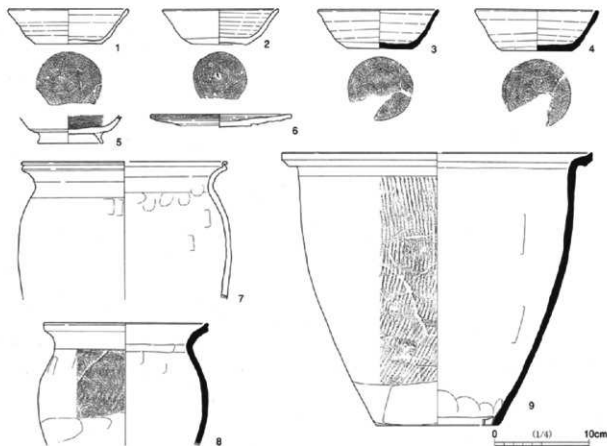
7は常輪型の土師器甕である。8は千葉産の須恵器甕である。胴部外面のタタキ目は痕跡的で、ナデによりかなり消されている。また、内面もナデに消されて、当て具の痕跡は不明瞭である。色調は黄色味を帯びた明るい褐色で、土師器的である。胴部外面には、少量の山砂が付着している。9は千葉産の須恵器甕で、甕としてはかなり大型の土器である。色調はかなり暗い赤褐色である。

以上の出土遺物のうち、2・5・6は上層出土である。それ以外の遺物は下層出土であるが、9の一部と3は床面からやや高い位置である。平面位置は、甕・甗類の7・8・9がカマドの左側を主体として、近い位置関係で出土している。1はカマド右側の床面から、3・4は南壁側下層からの出土である。図示



SI-187のカタド

1. 緑褐色土 ローム殻・山砂粒・焼土粒少量
2. 緑褐色土 ローム殻・山砂粒少・焼土粒多量
3. 緑赤褐色焼土 ローム殻少量
4. 緑褐色土
5. 赤褐色焼土ブロック
6. 黄褐色砂質土 ロームブロック量
7. 黄褐色砂質土 焼土粒少量
8. 黄褐色砂質土 焼土粒少量
9. 黄褐色砂質土 ロームブロック量

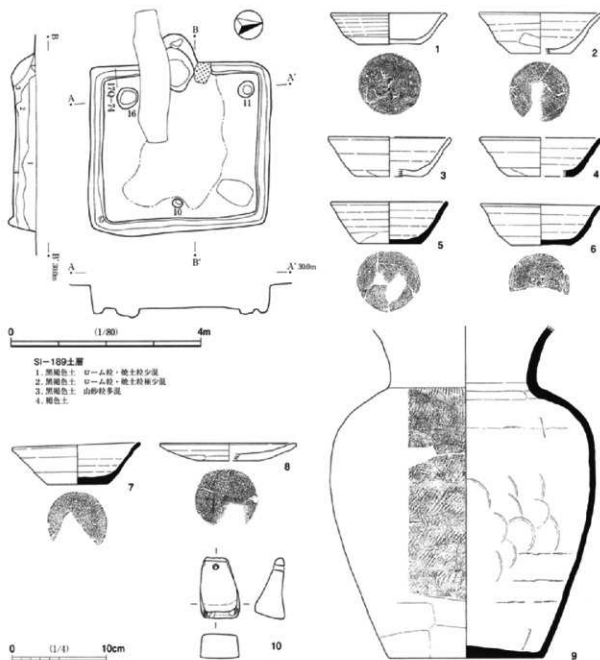


第356図 SI-188

しない土器片の量は多く、点数は819点、重さは7kgである。竪穴全体から出土している。その他、図示していないが、軽石小片が2点出土している。

SI-189 (第357・474図、図版102・281・317)

遺跡西部南よりの17Q区に位置する。3.5m×3.9mの方形をなし、深さは0.47mである。主軸はN-85°-Wである。西辺中央にカマドをもつが、カマドの左側から中央部にかけて攪乱が入っている。東壁際中央に出入口ピットをもつ。壁溝は全周する。西壁側の両側にピット状の浅い窪みがあるが、掘りかたに充填された床面の土を発掘したためと考える。出入口側にピットがないため、支柱穴とは思えない。南西(左奥)隅部の床面がやや暗い色調であるが、ピット部分はより黒みのある土が貼られたのであろう。床面は平坦で、硬化面が出入口ピットからカマド前までの中央部に広がっている。カマドは遺存が悪く、右袖も



第357図 SI-189

短い。火床部底面はやや窪み、若干の焼土が堆積している。堆積土は黒褐色土主体で、ローム粒の包含が少ない。自然堆積と思われる。

図示した遺物は10点である。1～3はロクロ成形の土師器杯であるが、3は色調がやや黒ずむ部分があり、千葉産の須恵器の可能性もある。底部切り離しが回転ヘラ切りかと思われる点もあるが、判然としない。また、2は褐色の色調で、ややざらつきのある質感である。須恵器の可能性はあるかもしれないが、これも判然としない。1は口縁・体部の一部が「V」字状に欠損するほかは、ひびが入る程度で割れていない土器である。欠損部は打ち欠きされた可能性があるが、断定はしがたい。口縁・体部に細い沈線状の筋がらせん状に周回している。側面からみて4～5条の線である。内面の一部に剥離およびひび割れがあるが、全体的に荒れているわけではない。4～7は千葉産の須恵器杯である。杯類の遺存は、1の他、2もやや良好であるが、3～7はあまり良くない。8はロクロ成形の土師器皿である。内面はやや荒れている。

9は千葉産の須恵器甕である。1/2程度の遺存であるが、底部はかなり遺存している。底部外面は2/3位の部分で、器面の剥離が著しい。色調はやや黄色味を帯びた灰色である。

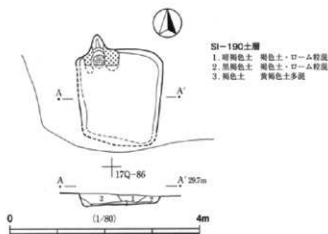
10は砥石である。石材は流紋岩質凝灰岩である。研ぎ減りして薄くなった部分に穿孔され、携帯用の持ち紙に再利用されている。筋状の複数条の研ぎ痕が、小口の両角および長側面の広い面の片側にみられる。

図示した遺物の出土位置は南側半分に偏っている。カマドを奥にした場合は、左側半分である。10だけが、北（右）壁際からの出土である。出土層位をみると、1・2・3・6・7・10が床面・下層で、4はやや高い位置である。1は南東（左前）隅の下層から伏せた状態で出土した。8・9は下層から上層にわたっている。9はカマド周辺から出入口周辺まで広域に散って出土し、8も南（左）壁際でやや散って出土した。図示しない土器片の点数は334点、重さは4.2kgである。分布は中央部にもみられるなど、図示した遺物よりもやや広域である。

SI-190 (第358図、図版102)

遺跡西部南よりの17Q区に位置し、北から南に下る緩傾斜面に立地する。2.2m×1.7mの不整形な方形をなし、深さは0.24mである。北壁西（左）寄りにカマドをもち、主軸方位はN-7°-Eである。カマド左袖脇はすぐ北西隅である。西側北寄りおよび南側は擾乱を受けて、壁が不明瞭であるが、想定されるプランを図示した。壁溝・出入口ピットは検出されなかった。床面は平坦で、硬化面はみられない。カマドは擾乱により、両袖前側が壊されている。両袖内壁は被熱により赤色化し、右袖は一部で硬化している。堆積土は暗褐色土・黒褐色土主体で、自然堆積と思われる。

図示した遺物はない。図示しない奈良・平安時代土器片の点数は3点、重さは30gである。内訳は、新治窯産の須恵器杯1点、常総型の土師器甕2点である。他に縄文土器片が1点出土している。



第358図 SI-190

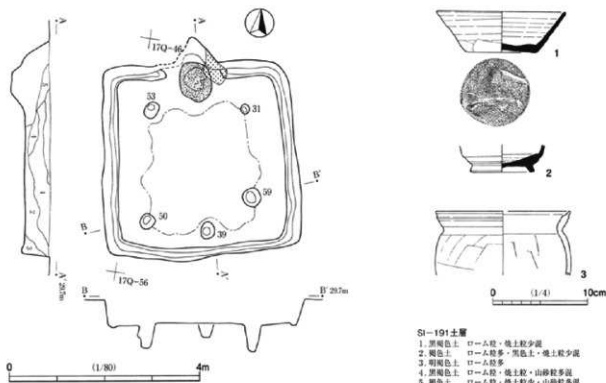
SI-191 (第359・474図, 図版103・281)

遺跡西部南よりの17Q区に位置する。4m×4.2mの方形をなし、深さは0.54mである。主軸はN-10°-Wである。北辺中央にカマドをもつ。主柱穴4か所と出入口ピットをもつ。壁溝は全周する。床面は平坦で、主柱穴・出入口ピット間が広く硬化している。カマドは攪乱を受け、左袖が遺存しない。カマド以外にも、上層で攪乱を受けた部分がある。カマドは、右袖も前側の遺存がよくない。火床部分は床面と同じ高さから10数cm低い位置に焼土が厚く堆積する層があり、この部分が直接の火床である。その下部も10cm程度深く、大きく掘り込まれており、暗褐色土・ロームブロック・山砂・焼土等の混合土が堆積している。灰のかき出しだけではなく、当初から掘りかたが深かったのかもしれない。あるいはカマドの作り直しも考えられる。堆積土は下層でローム粒が多いが、上・中層は黒褐色土で、ローム粒の包含はやや少量である。自然堆積の可能性の方が高いと思われる。

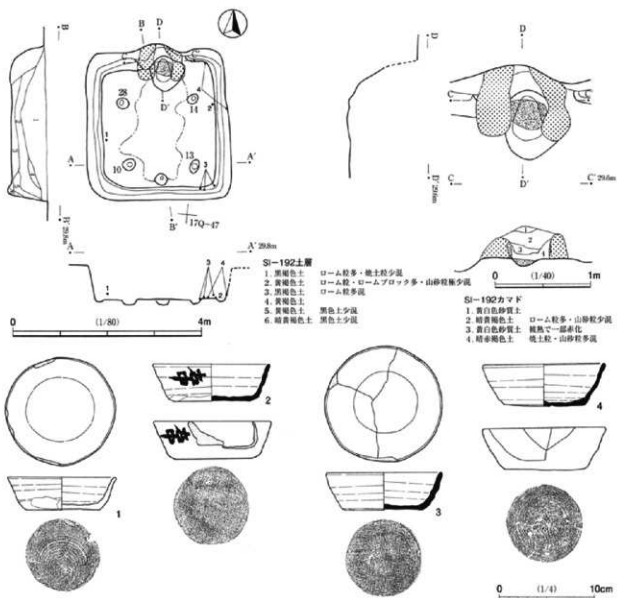
図示した遺物は3点である。1は新治窯産の須恵器杯である。比較的遺存がよい土器であるが、遺存部分は5片が接合したものである。2は新治窯産の須恵器高台付杯である。口縁・体部の多くが欠損している。1・2の欠損部が意図的であるか不明である。3は「房籠」型の土器器甕で、小型品である。外面は剥離が著しい。内面は黒ずんでいる。2は床面からの出土であるが、1・3は中・上層から出土している。図示しない土器片の点数は186点、重さは2.1kgである。竪穴の遺存がよいことを考えると、やや少ない。分布は図示した1～3を含め、北東側にやや多く、出土層位は、床面から上層にわたる。

SI-192 (第360図, 図版103・104・281)

遺跡西部南よりの17Q区に位置する。3.2m×3mの方形をなし、深さは0.75mである。主軸はN-6°-Wである。北辺にカマドをもつ。竪穴は攪乱によって、カマドから南東隅周辺までの東側部分が、確認面から壁の上位～中位の深さまで破壊されている。しかし、竪穴がかなり深いため、壁下位から床面は全面が



第359図 SI-191



第360図 SI-192

遺存している。壁溝は全周する。支柱穴4か所と南壁際中央に出入口ピットをもつ。床面は平坦で全体に硬質であるが、出入口ピットからカマド前まではより硬化している。カマドは、上部が破壊されているが、両袖の遺存は比較的良好である。とくに遺存のよい左袖の上部は壁際で、床面から50数cmの高さであり、カマドの袖上部は50cm以上の高さをもっていたことが理解できる。堆積土は黒褐色土主体である。ローム粒・ブロックの含有も目立つが、ハードローム層を他の堅穴よりもやや深く掘り込んでいることと、黒みのある土が主体であることによると思われ、自然堆積の可能性の方が高いと考える。

図示した遺物は杯4点で、1がロクロ成形の土師器杯、2～4は千葉産の須恵器杯である。いずれも遺存がよく、1は口縁端部の所々がわずかに欠けている他は、割れもないほぼ完形の杯である。欠けている部分の1か所は、周囲の内外面が黒ずんでおり、火にかけられた可能性がある。2は口縁・体部の一部が不整形に欠損する他は、割れない杯である。欠損部の近くの体部に、「右中」と書かれた横位の墨書がある。墨書に向かって、欠損部は右側の位置である。欠損部は打ち欠きされたもので、墨書は打ち欠きに

関係すると考える。墨書と打ち欠きの前後関係は不明であるが、打ち欠きの後に記入されたとみ方が自然であろうか。3は3片に割れていたが、接合してほぼ完形となった杯である。1片は口縁部から底部まで1/2強、2片は残りの1/2強と1/2弱の大きさの破片である。わずかな欠損は、割れのある口縁部端部の2か所である。土器はももとの色調に黒褐色部分が多いが、二次的に黒ずむと思われるところがあり、やや光沢もあることから、灯明器の可能性があると考える。3片は近くから出土しており、土圧等、自然に割れた可能性もあるが、土器の状態と他の土器の様相から、意図的に割られた可能性が高いと考える。欠損部は割られた時に破片となった部分であろう。4は口縁・体部の一部がやや不整な弧状に割れているが、接合して完形に近く、欠損部はわずかな土器である。割れている部分は打ち欠きされたものと考えられる。2・4は内外面に火樺痕がみられる。また、黒ずんでいるため不明瞭であるが、3も内面の一部に火樺痕がみられる。

1～4の出土状況を見ると、層位はいずれも床面またはほぼ床面である。平面位置は、1が西壁際中央、2が東壁際やや北寄りである。3は南東隅から出土した。4の主要部は2に近い位置にあり、壁濶上で東壁にもたれかかるように出土した。また、割られた部分は北東隅から出土した。1・2・3は壁溝際であるが、内側の床面から出土し、4の破片も同様と思われる。土器の状態を見ると、1・2は傾きのない正位である。また、3の1/2強の破片および4の主要部も傾いているが、上向きの正位である。なお、2の墨書と欠損箇所は南側を向いている。

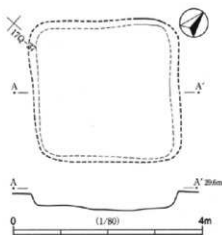
以上の出土状況から、1～4の土器は、竪穴住居廃棄の祭祀により、床面に置かれたものと考えられる。1・2は供物等、何らかのものが盛られた可能性があり、4も同様かもしれない。1・3は、廃棄時点が判然としなが、火に関係した土器と思われる。とくに3は灯明器の可能性があると考える。3は廃棄時点で、器の機能を完全に断たれた可能性がある。

図示していない土器片の出土点数は、379点、重さは3.4kgである。竪穴が深いため、やや多量であるが、密度が高いかどうかはわからない。位置を記録した遺物の出土位置には大きな偏りがみられないが、やや点数が少ないため、詳細な傾向は不明である。出土層位は床面から上層にわたる。

SI-193 (第361図, 図版104)

遺跡西部南寄りの17Q区に位置する。遺存状況はきわめて悪く、大半の部分が攪乱によって壊されている。破線は形態の推定線である。一辺3m程度と思われる方形をなし、遺存する部分の深さは0.35mである。カマド・出入口ピットは検出されなかった。カマドの設置壁は不明であるが、周囲の竪穴住居跡の状況から、北西壁に位置した可能性がもっとも高いと考える。その仮定からみた主軸方位はN-43°-Wである。床面は遺存する部分が北隅付近等、一部であり、硬化面は不明である。遺存する部分の堆積土をみると、黒色土主体で、ローム粒の包含は少ない。自然堆積と思われる。

出土遺物はごく少量で、図示したものはない。土器片の点数は12点、重さは115gである。内訳は、ロクロ成形の土師器杯、千葉産の須恵器杯・甕、常総型および「房総」型の土師器甕である。土師器杯の中には内面黒色処理されたものがみられる。また、出土数は千葉産の須恵器甕がもっとも多い。時期的には、おおむね



第361図 SI-193

平安時代前期に属するものと考え、遺物が少量のため強い根拠ではないが、本壜穴もこの時期に属するものと考え。

SI-194 (第362・474図、図版104・281・314・318)

遺跡西部南東寄りの18Q区に位置する。3.7m×4.2mの方形をなし、深さは0.51mである。主軸はN-86°-Wである。西辺中央にカマドをもつ。攪乱のため東壁右側部分が壊されている。出入口ピットはカマドに向かって前(東)壁際左(南)寄りに位置し、カマドの正面方向からややずれる。壁溝は一部損なっているが、全周するとしてよい。支柱穴は4か所にあるが、各所が複数ピットとなり、建て替えの根拠となろう。なお、右前(北東)側が1か所であるが、隅側にあつたものが、攪乱により壊されたと考え。右奥(北西)側は3か所で、図示したようにP1a~P1cとする。左前(南東)側は2か所で、P3a・P3bとする。左奥(南西)側も2か所で、P4a・P4bとする。中央側に位置する4か所の柱穴は深さもあり、形作る空間も歪みが少なく、組になるものと考え。隅側の柱穴は内側の柱穴よりも浅く、隅側同士で組になると考えられる。なお、右奥側がP1b・P1cと2か所あることから、建て替えが2回あつた可能性も考えられる。床面はほぼ平円で、硬化面が中央側の支柱穴および出入口ピット間にみられる。四隅周辺は深さ15cm~20cm程度の貼り床が施されている。掘りかたは、四隅が深く掘られ、中央部の貼り床は薄いか、ほとんどないタイプである。なお、カマド周辺は深く、左(南)壁側中央付近もやや深く掘り込まれていると思われるが、カマド部分は作り替えや、灰のかき出しの影響も考えられる。堆積土については、壁側以外の多くが黒褐色土主体で、ローム粒・ブロックの包含は若干量である。自然堆積と思われる。

図示した遺物は10点であるが、10は古墳時代中期の石製模造品であり、混入したものである。1~4は千葉産の須恵器杯である。1・3は底部外面に同様の形のヘラ書きがみられる。残りのよい3をみると、片仮名の「リ」をつなげて書いたような形で、書き順も「リ」と同様である。色調をみると、1はやや黄色味を帯びた暗灰色、3の内面は黒褐色、外面は暗灰黄色、2・4は灰褐色である。5は千葉産の須恵器高台付盤である。小片から復元図化したことを付記しておく。口縁端部は尖っている。また、高台部の脚端部も接地部に筋状の線が1条巡っており、端整な作りである。色調は口縁部内外面に褐色部分があるが、内面は黒色部分が多く、外面も高台部周辺から底部は黒灰色である。1~5の遺存状態はあまりよくない。

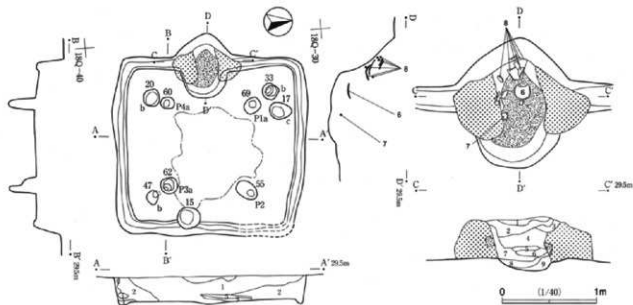
6・7は千葉産の須恵器盤である。6は比較的遺存のよい土器で、口縁・体部の一部が欠損しているが、他は割れていない土器である。欠損部は台形状であり、出土状況から、打ち欠きされたものと考え。底部外面には、ていねいな回転ヘラケズリが施され、施されていない部分との間に稜がみられる。内面はかなりざらついている。7も同様の作りで、遺存がやや悪いが、6と近似する大きさである。1~7は、千葉産の須恵器としては古い方であり、5~7はこれまでに類例の少ない器種である。

8は「房総」製の土師器である。底部を欠くが、比較的遺存のよい土器である。武蔵型甕の影響を受けた土器で、形態が似ている。また、器壁も薄い。武蔵型甕ほどには薄くない。外面のヘラケズリの方向も縦方向主体である。胴部内面はヘラナデが強く施され、ヘラによる筋が多くみられる。

9は携帯用の砥石で、石材は流紋岩質凝灰岩である。組通し用の孔が縦横にみられるが、孔部分で割れている。割れている部分を除く5面は、すべて平滑な面である。

10は剣形の石製模造品で、石材は滑石である。

遺物の出土状況を見ると、6がカマド内火床部奥側の下層からほとんど傾きのない正位の状態出土し



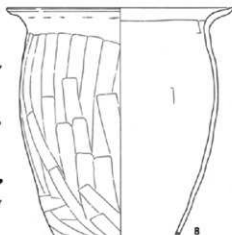
0 (1/80) 4m

SI-194土層

1. 黒褐色土 ロームブロック少・焼土粒極少
2. 黒褐色土 ローム多・焼土粒少
3. 黒褐色土 ローム粒少
4. 暗褐色土 ローム粒少
5. 黄褐色砂質土



0 (1/4) 10cm



SI-194カマド

1. 黒褐色土 ローム粒
2. 赤褐色土 焼土粒・山砂粒・ロームブロック少
3. 赤褐色土 ローム粒・焼土粒・山砂粒少
4. 暗褐色土 焼土粒・山砂粒・ロームブロック少
5. 黄褐色砂質土
6. 灰・しまりが無い
7. 黄褐色土 ローム粒・焼土粒・焼土ブロック
8. 赤褐色砂質土 焼土ブロック・しまりが無い
9. 黄褐色土 ロームブロック多



0 (1/2) 5cm

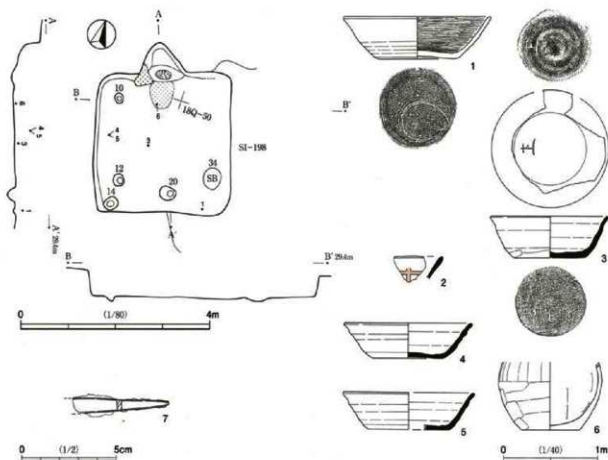
第362図 SI-194

ている。支脚があってもよい位置であるが、カマド廃棄の祭祀に関わる土器とした方が妥当と考える。8はカマド内およびカマド前方から中央部にかけてやや広く出土した。カマド内は煙道上部の位置から多く出土している。断定するまでには至らないが、カマド廃棄の祭祀に伴い、煙道をふさぐ意図で置かれた可能性がある。その他、カマド内からは、7も出土している。図示しない土器片の点数は415点、重さは4.7

kgである。出土分布には、大きな偏りはみられず、出土層位も床面から上層までわたる。

SI-195 (第363図, 図版105・282・312・321)

遺跡西部南東寄りの18Q区に位置する。2.9m×3mの方形をなし、深さは0.55mである。主軸はN-16°-Wである。北辺中央にカマドをもち、南壁際中央に出入口ピットをもつ。東側でSI-198と大きく重複し、SI-198を切っている。また、南東隅側の一部で、SB-090の柱穴の一つと重複する。さらに、全体に攪乱を受け、とくに南壁の多くが失われている。調査時点では、カマドの遺存状況からSI-198の方が新しいと考えられたが、調査終了の時点では本竪穴のカマド右袖の消失はSI-198のためではなく、溝状の攪乱によることが判明した。また、SI-198のカマド左袖部分には、本竪穴の堆積土と思われる土層が確認できた。したがって、本竪穴の方がSI-198よりも新しい。さらに、本竪穴の床面部分では黒色土の含有が多く、これも根拠となろう。床面の深さは、SI-198と大きな差がないが、床面に黒色土が多いのは、やや掘り足りないか、掘りかたがSI-198よりも深い状況のどちらかであろう。壁溝は明確には検出されなかった。南壁・西壁には巡るようにも思われる。床面には、出入口ピット以外に、ピットが3か所ある。そのうち、南西隅側のを除く2か所は支柱穴としてもよい位置にある。しかし、東側が不明であることと、竪穴の規模を考慮し、可能性があるという指摘だけにとどめたい。支柱穴が存在した場合、南東隅側のもはSB-090に切られていると考える。また、北東隅側のもは、浅いこととSI-198と重複する影響で明確に把握できる状況ではなかった。床面は中央部が硬化している様相が若干うかがえるが、不明瞭である。堆積土は黒褐色土主体で、やや多量のローム粒・ブロックを含む。ロームが多いのは、攪乱と



第363図 SI-195

重複の影響によると思われ、自然堆積の可能性が高いと考える。なお、堆積土下層には若干の焼土がみられる。カマド前方と中央部に分布する。

図示した遺物は7点である。1はロクロ成形の上師器杯である。口縁部部の数か所をわずかに欠くが、ほぼ完形品である。内面に暗文風の1条線がみられる。土器の色調は橙褐色であるが、線は暗褐色の色調で、体部中位から体部と底部の境付近に蛇行、一部重複しながら廻っている。

2～5は千葉産の須恵器杯である。2は口縁部の破片で、体部外面に朱書のような痕跡がある。欠損部にかかっているが、現状で十字のものである。この輪郭は暗灰色の細い線で線取られている。墨書かもしれないが、判然としない。朱書と思われる部分はやや暗く、ベンガラ的な色調であるが判然としない。土器の色調はやや黄色味を帯びた灰色・暗灰色である。3は色調が褐色で、土師器とまぎらわしいが、やや暗灰色を帯びた部分があること、ざらつく質感から、須恵器とした。底部内面に「土」のへら書きがある。「土」に点の付いたものであるが、意味は「土」と理解できる。このへら書きも須恵器とするのに有利であろう。4・5は小破片から同化したもので、大きさにやや不安がある。

6は「房籠」型の上師器甕で、小型品である。7は鉄製品で、刀子の葉の破片である。葉尻は遺存する。出土状況を見ると、3は中央の下層から出土し、6はカマド前方の下層から出土した。1・4・5の出土層位は中・上層で、1は南東隅近くから倒位で出土した。図示しない土器片の数は418点、重さは5.1kgで、多量である。竅穴全体から出土し、層位は床面から上層にわたる。その他、図示していないが、軽石小片が1点出土している。

SI-196 (第364・474図、図版105・106・282)

遺跡西部南よりの17Q区に位置する。3.2m×3.4mの方形をなし、深さは0.45mである。主軸はN-24°-Wである。北辺にカマドをもち、南壁側中央に出入口ピットをもつ。東壁側中央部等、一部で若干の攪乱を受けている。壁溝は全周する。壁溝内の南半分側から、計11か所の小ピットが検出された。床面は平坦で、硬化面が出入口ピット周辺からカマド前まで縦に長くみられる。カマド両袖の遺存は比較的良好で、内壁の一部が被熱により、赤色化および硬化している。堆積土は下層でローム粒の包含が多いが、上層は黒褐色土であり、おおむね自然堆積と思われる。カマド前方の下層には若干の焼土もみられる。

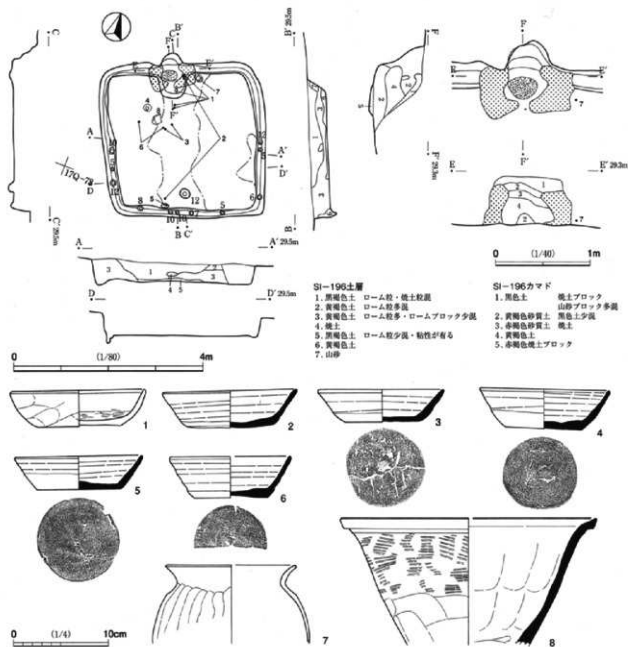
図示した遺物は8点である。1は非ロクロの上師器杯である。遺存部分は若干割れて接合しているが、比較的遺存がよい上器である。

2～6は新治窯産の須恵器杯である。6が1/2程度の遺存である以外は、遺存がよく、3・5はほぼ完形品である。3はほぼ1/2に割れた破片が接合したものであるが、5は割れない個体である。2・4は口縁・体部の一部のみの欠損品であるが、4は欠損部以外には割れていない。欠損箇所近くの内面側は、滑らかでロクロ目が消えており、磨かれているように思われる。また、欠損部は打ち欠きされた可能性があると思われるが、やや所定しがたい。2は小破片が数点あるが、大きく2片に割れて接合した個体である。2・3は白雲母の包含が目立ち、4・5は小石を含む。3は白雲母が溶けたため、目立たない。若干の小石を含むが、かなり滑らかな質感である。

7は「房籠」型の土師器甕で、やや小型の器形である。器壁はやや薄く、焼成がよい。胴部中位から下部を欠くが、口縁部は全周遺存する。

8は新治窯産の須恵器甕で、バケツ形の器形である。白雲母を多量に含む。遺存は一部である。

7はカマド右袖部の床面から正位で出土した。本竅穴に伴う遺物であろう。カマド廃棄に伴い、胴部中



位以下を除去された可能性の他、何らかの台として使用されたことも考えられる。1は一部の破片がカマド右袖上のやや高い位置から出土したが、その他は床面・下層からの出土で、そのうちの一部はカマド前床面から正位で出土している。その他の土器は、3の一部が下層から出土しているが、おおむね中・上層からの出土である。4は倒位の状態であり、5もかなり傾いているが南壁際から倒位で出土した。2の一部はカマド右袖上から、一部は南壁側で、5の近くから出土した。杯に遺存のよい遺物が多いが、堅穴やカマド廃棄など、本堅穴に関わる遺物かどうか、出土状況や堆積土の状況からは判断できない。欠損部が打ち欠きされたものであったとしても、全体に他所から廃棄されたことも考えられる。

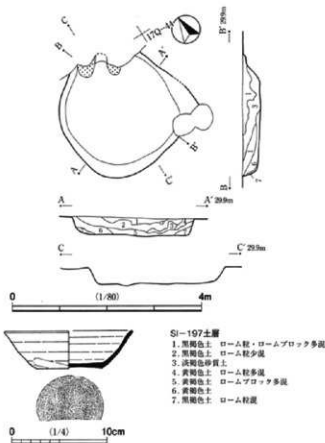
図示しない土器片の点数は92点、重さは1.7kgである。図示したものと併せて、分布は西側に偏っており、とくに中央部に集中か所がある。また、南壁側もやや集中する。出土層位は下層から上層にわたるが、上

層がやや多いと思われる。

SI-197 (第365図, 図版106)

遺跡西部南よりの17Q区に位置する。2.5m×2.6mの不整な隅丸方形をなし、深さは0.39mである。北側が攪乱を多く受け、南東隅部分もSB-086・SB-089と重複する。カマドが北側に所在するが、攪乱のため遺存不良である。山砂が多く遺存する部分を袖としたが、両袖とも、下部が黒色土主体の土層である。また、火床部も不明瞭である。竪穴の形態とカマドの形態には違和感が残る。竪穴の形態は攪乱と他遺構の重複により不明瞭であるが、隅丸方形プランで、カマドは北壁に位置すると思われる。出入口ピット・壁溝は検出されなかった。床面はやや凹凸があるが、高低差は少ない。ハードローム層に達していないため、全体に軟質で、硬化面はみられない。

図示した遺物は千葉産の須恵器杯1点である。底部外面に、重ね焼き痕が明瞭にみられる。遺存はあまりよくない。出土位置は不明である。図示しない土器片の数は8点、重さは70gと非常に少量である。



第365図 SI-197

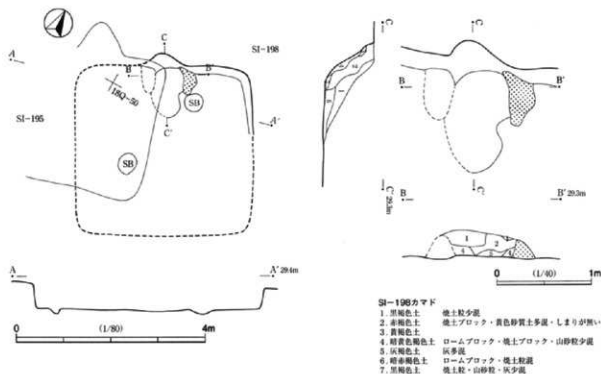
SI-198 (第366図)

遺跡西部南東寄りの18Q区に位置する。西側で大きくSI-195に切られるが、全体に攪乱を受け、遺存する部分は一部である。また、2か所でSB-090と重複する。竪穴の形態・規模は一部に残っていた壁や隅部から想定したものである。推定する規模・形態は3.6m×3.8mの方形で、深さは0.5mである。北辺にカマドをもち、主軸はN-28°-Wである。壁溝・出入口ピットの有無は不明である。床面はカマド前から北東隅にかけて遺存する部分があるが、南東隅側は大きく破壊され、南西隅側もやや削られている。遺存する床面はハードローム層に達し、硬質であるが、カマド前方は硬化していると思われる。カマドも遺存が悪く、左袖はSI-195に切られるが、右袖の下部は一部遺存している。堆積土の様相は、攪乱が著しいため、不明である。

図示した遺物はない。出土した土器片は14点、重さは305gと、きわめて少量である。内訳は、ロクロ成形の土師器杯、千葉産の須恵器杯・甕、新治産の須恵器杯である。出土数は千葉産の須恵器が多く、時期的には、おおむね平安時代前期に属するものと考えられる。SI-195の時期が9世紀中葉くらいに考えられるので、本竪穴の時期は、9世紀中葉およびそれ以前である。

SI-199 (第367・368・474図, 図版106・282・316)

遺跡西部南東寄りの18Q区に位置する。3.3m×2.9mの方形をなし、深さは0.38mである。主軸はN-

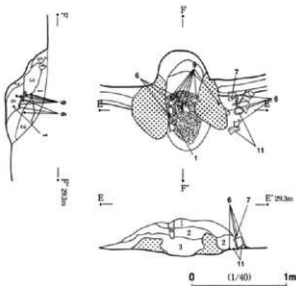
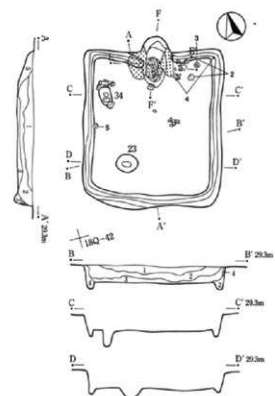


第366図 SI-198

16°Eである。北辺中央にカマドをもつ。壁溝は全周する。かなり深い壁溝で、カマド左側は、袖の下部、火床部近くまで存在する。南壁側西寄りのところにピットがあるが、西壁側に寄りすぎており、出入口ピットの可能性は低いと考える。西壁際北寄りのところにもピットがあるが、本壁穴に伴うものか不明である。床面の硬化範囲はやや不明瞭であるが、中央部が若干硬化していると思われる。カマド左袖は、上部の遺存が悪いため、山砂の含有が少なく、褐色土混じりである。堆積土は黒褐色土・暗褐色土主体であり、自然堆積と思われる。

図示した遺物は11点である。1はロクロ成形の土師器杯である。内面は全面にヘラミガキが施され、器面が滑らかである。焼成が良好な土器である。2・3は千葉産の須恵器杯である。3はひびが入っただけで、割れていない完形品である。2は口縁・体部の約3/4周が割れて、そのうちの一部が欠損するが、比較的遺存がよい土器である。底部から約1/4の口縁・体部は一続きの破片である。欠損部分際の外側他、数か所がやや黒ずんでいるが、灯明器とは断定しがたい。

4・5はロクロ成形の土師器皿である。5は底部全体が突出し、底部の端部はさらに外側に突き出るなど、高台付皿ふうの土器である。「雲司」と書かれた墨書が体部外面に正位でみられる。口縁・体部の一部が欠損しているだけで、他は割れない遺存のよい土器である。割れ口は整った弧状であり、打ち欠きされたものとする。割れ口断面は磨れているが、器面全体が荒れていることから、自然の磨滅かもしれない。しかし、祭祀的な墨書文字と、土器の状態から、人為的な可能性があると考える。また、器面の荒れおよび色調から火を受けた可能性もある。4は底部外面に焼成前の筋状の痕跡、口縁部内面に焼成後の筋状の痕跡があるが、ヘラ書きか線刻であるか判然としない。土器の遺存は良好で、欠損部は口縁・体部の1か所だけである。遺存部分は、口縁・体部の一部に割れて接合する部分があるが、他には割れていない。欠損部と接合部分は打ち欠きされた可能性があると考える。

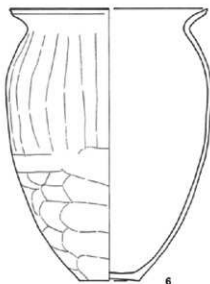
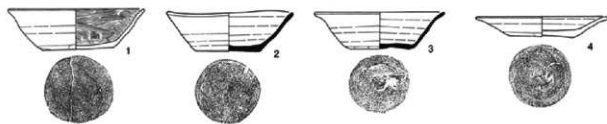
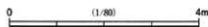


SI-199土層

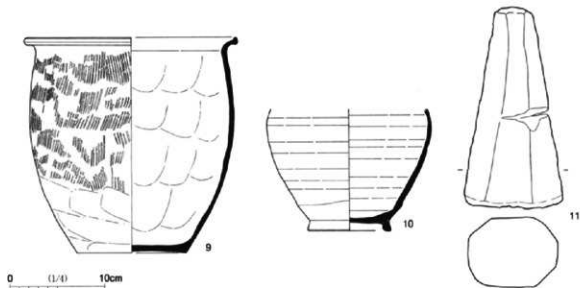
1. 黒褐色土 褐色土混、ローム粒極少混
2. 暗褐色土 褐色土・ローム混
3. 褐色土 ローム粒、ロームゾロツタ混
4. 褐色土 黄褐色土混
5. 暗褐色土 ローム粒・砂粒混

SI-199カマド

1. 暗褐色土 褐色土混・焼土粒、山砂粒少混
2. 暗褐色土 褐色土・焼土粒、山砂粒少混
3. 暗褐色土 焼土粒、山砂粒、灰混
4. 褐色土 山砂粒多・焼土粒少混
5. 褐色土 焼土粒、山砂粒混
6. 暗褐色土 焼土粒、山砂粒、灰混
7. 暗褐色土 ローム粒、山砂粒多混、しまりが有る



第367図 SI-199 (1)



第368図 SI-199 (2)

6・7は「房総」型の土師器甕で、7は小型品である。ともに比較的遺存がよい。6は器壁がやや薄い。胴部外面中に器面の剥落が著しい部分がある。また、所々に山砂が付着している。7は被熱により、全体に黄灰褐色の色調であるが、胴部中央は焦げて黒ずみの強い部分がある。8は常総型の土師器甕である。胴部外面に指紋または掌紋がみられる。

9は千葉産の須恵器甕である。須恵器甕としては、比較的遺存のよい土器である。底部は一部のみの欠損で、口縁部は1/2周強が遺存する。

10は須恵器長頸壺である。胴部下位から底部には欠損がない。底部外面中央に回転糸切り痕がある。また、高台の接地面に直線状の凹みが数条みられる。幅は数mmである。灰緑色・灰黄色の自然釉が底部内面および胴部外面上位と高台外面の一部にみられる。色調はやや黄色味を帯びた灰色で、硬質な焼成である。胎土は小石を多量に含む。東海産と思われる。

11は土製支脚である。中央部で2片に割れて、一部に欠損があるが、遺存のよい支脚である。また、焼成も良好である。側面は幅広に面取りされて、多角柱状である

遺物の出土状況を見ると、まず、5は西壁際中央の下層から、内面を上にしての状態で出土した。下層ではあるが、堆積土が壁際に若干堆積した後に廃棄されたものである。カマド内またはカマド右袖外側の北東隅を主体として、多くの遺物が出土した。1はカマド内の下層から正位で出土し、6はカマド内およびカマド右袖脇の下層を主体に出土した。また、9はカマド内を主体として北東隅、中央、南東隅と広く散っている。層位は下層～中層である。カマド右袖外側から出土したものは、2・3・4・7・11である。出土層位や土器の状態を見ると、2の主要部分は下層から正位、3は上層から傾いた倒位、4の主要部分は中層から正位、7は中層、11は床面・中層である。

図示した遺物のうち、6・9・11は本竈穴に伴う可能性があると考えるが、その他は不明瞭である。5は祭祀的な黒書土器と打ち欠きがあるが、意図的に置かれたものとは断定しがたい。他の杯皿類も遺存のよいものが多いが、他所から本竈穴に廃棄されたとみる方が自然である。本来、一括性の高い遺物群であるかどうか判然としない。図示しない土器片の点数は203点、重さは2.5kgである。分布はカマドのある北

側から中央部に多く、壁際は少ないといえる。出土層位は床面から上層にわたる。

SI-200 (第369・474頁、図版107・283・308)

遺跡西部南東寄りの18Q区に位置する。3.7m×3.9mの方形をなしており、深さは0.57mである。主軸はN-5°-Wである。北辺中央にカマドをもち、南壁際中央に出入口ピットが検出されている。壁溝は一部に攪乱を受けているものの全周する。中央西寄り部分に攪乱を受けた部分がある。床面は平坦で、硬化面が出入口ピットからカマド前まで広がっている。カマドはほとんど方形プランから突出して作られている。袖下部はロームブロックを多く含む。堆積土は全体にローム粒・ロームブロックが多いことから、その一部が埋め戻しされた可能性もある。

図示した遺物は10点である。遺存のよいものは、1と10だけである。1はロクロ成形の土師器甕、2はロクロ成形の土師器高台付皿である。1の欠損部は口縁・体部の一部だけである。内面は底部を主として思っている。2は高台部がほぼ欠損している。3・4は千葉産の須恵器杯である。4は底部外面中央に「本」のヘラ書きがある。「奉」の略字であろう。「火」の下の「キ」の書き順は横棒の後に縦棒である。5は千葉産の須恵器片である。杯と思われるが、器壁が厚いため、甕の可能性もある。小片であることと、焼成があまく、器面がやや荒れているため、判別が難しい。底部外面に「+ (×)」の線刻がある。6は千葉産の須恵器瓶底部片である。図示した左側が中央部の円孔、右上が瓠州の五孔の一つである。底部外面にヘラ書きがある。図示した状態で、「又」を逆にしたような形である。文字の可能性があるかもしれないが、記号と理解しておく。

7・8は常総型の土師器甕である。同一個体の可能性があるが、出土状況からは判然としない。8の内面は胴部下位から底部にかけて、器面の剥落が著しい。底部外面は細かい凹凸があり、木葉痕はみられない。須恵器甕の底部外面とやや似た質感である。9は千葉産の須恵器甕である。

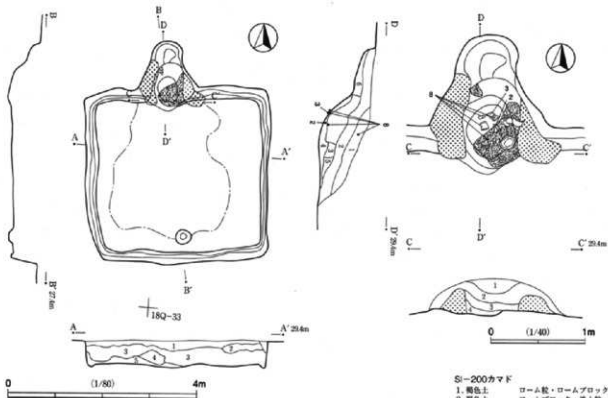
10は鉄製品で、鉄鍔である。細身の長頸鍔で、刃部から茎の上部まで遺存する。刃部の形態は鬚筒式である。棒状部と茎の境は直角に閔が作り出されていると思われるが、わずかに裾込がりになるかもしれない。また、茎が細く、四面閔と思われるが、錆のために判然としない。

図示した遺物のうち、2・8はカマド内を主体として出土する。3はカマド内および南壁際から出土し、広く散っている。8は本堅穴に伴う可能性があるかもしれないが、その他は不明である。図示した遺物の出土層位は、中・上層主体である。破片の一部が下層から出土するものもあるが、別の接合破片は中・上層から出土している。図示しない土器片の点数は664点、重さは9.5kgと多量である。出土遺物は、図示したのもを含めて、下層から上層まで万遍なく出土しており、平面分布も堅穴全体である。多くの出土遺物は、堅穴の廃棄直後から埋没に至るまで、廃棄され続けたものと思われる。

結果的にみれば、その一部が人為的な堆積であるにせよ堆積土に多量の遺物が含まれていたことは、継続的に土器等の廃棄があったことを物語るものである。堆積土はやや暗い色調であり、その大部分は自然堆積の可能性の方が高いと考える。

SI-201 (第370頁、図版107・283・309)

遺跡西部南東寄りの18Q区に位置する。2.8m×3.2mのやや横長の方形をなし、深さは0.27mである。主軸はN-63°-Eである。北東辺中央にカマドをもち、南西壁際中央に出入口ピットをもつ。攪乱によって破壊された部分があり、とくに中央からカマドおよびその右側と、南隅付近は床面まで及んでいる。壁溝は全周する。床面はほぼ平坦で、硬化面が出入口ピットからカマド前までの中央部にみられる。カマド

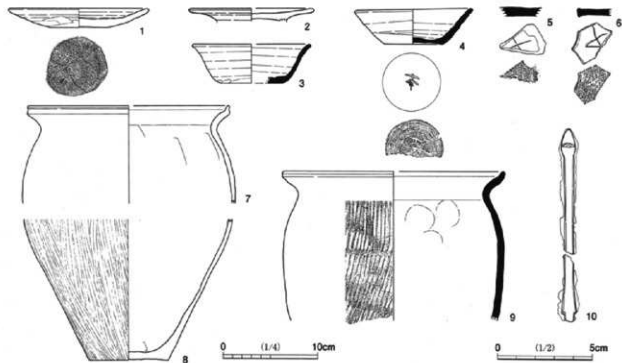


SI-200土層

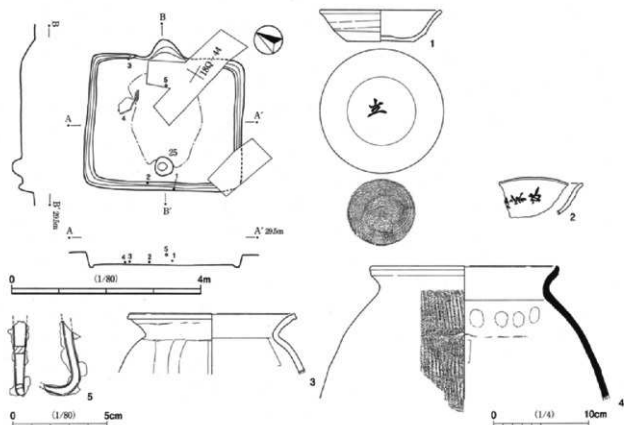
1. 褐色土 ローム粒少混
2. 褐色土 ローム粒・焼土粒少混
3. 褐色土 褐色土・ローム粒・ロームブロック・焼土粒混
4. 褐色土 ローム粒・ロームブロック・山砂ブロック・焼土粒混
5. 褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土粒混

SI-200カマド

1. 褐色土 ローム粒・ロームブロック・山砂混
2. 褐色土 ロームブロック・焼土粒・山砂少混
3. 灰白色砂質土
4. 赤褐色砂質土 焼土
5. 褐色土 ローム粒・焼土粒・山砂粒混
6. 黄褐色土



第369図 SI-200



第370図 SI-201

は煙道側の壁しか遺存しない。その部分には、山砂と焼土粒を多く含む暗赤褐色土層が堆積している。堆積土はローム粒・ロームブロックが混じる暗褐色土で、一部に炭化材がみられる。攪乱のために不明な部分も多く、とくに中央部で顕著である。自然堆積と思われるが、やや不明瞭である。

図示した遺物は5点である。1・2はロクロ成形の土師器杯である。1は底部外面に「立」の墨書がある。2は口縁・体部の一部の破片である。外面に「□家坏」と書かれた横位の墨書がある。1はいくつかの破片が接合した個体であるが、口縁・体部のわずかな部分が欠損するだけで、遺存のよい土器である。3は「房総」型の土師器甕、4は千葉産の須恵器甕である。ともに小片から図化したものである。5は鉄製品である。性格を特定しがたいが、釘の先端が曲がったものや釣り針などが考えられる。

出土位置をみると、1・2は南壁際中央で、1は下層、2は床面からの出土である。3はカマド左側の床面、4は中央左寄りの下層から出土した。さらに下部の床面から、千葉産の須恵器甕の胴部片が出土している。かなり大型の破片であるが、一部の破片のため、図示していない。4の色調が黄褐色であるのに対し、黒褐色の色調であった。また、器壁も厚く4よりも大きい個体となる。5は攪乱部分からの出土である。図示しない土器片の点数は144点、重さは2.5kgである。分布に大きな偏りはないが、出入口ピット付近にやや集中する。

SI-202 (第371・372・475図, 図版108・283・284)

遺跡西部南東寄りの18Q区に位置する。4.3m×3.9mの方形をなし、深さは0.45mである。北辺中央と東辺中央にカマドをもつ。東カマド(カマドA)の遺存がよく、北カマド(カマドB)から東カマドに付け替えられたことがわかる。北カマドでの主軸方位はN-12°-E、東カマドでの主軸方位はN-105°-Eであ

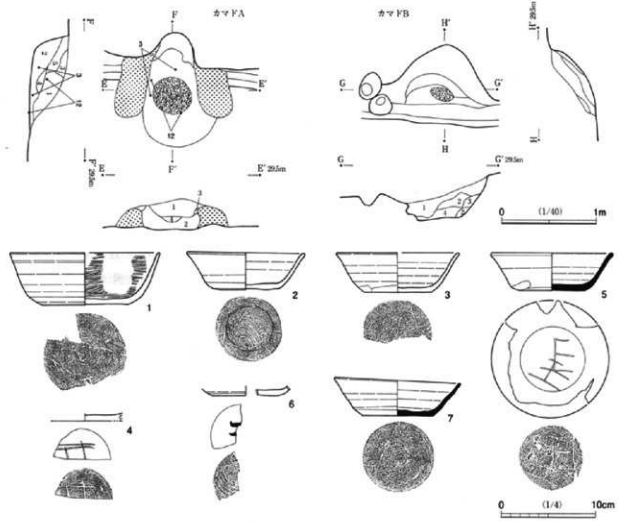
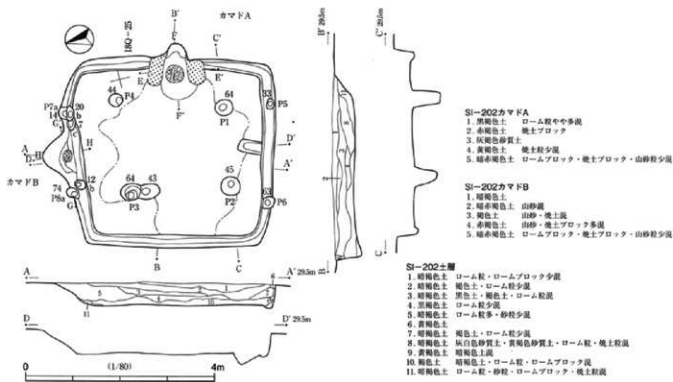
る。主柱穴は4か所ある。P3は二つのピットが連接しているが、柱位置が移動したこと、柱抜き取りに際して脇が掘られたことのとおりが考えられる。他は広がっていないので、他の柱位置は動かなかったものと思われる。古い北カマドに伴う出入口ピットが南壁際中央にある。新しい東カマドに対応すると予想できる西壁際中央には、出入口ピットが検出されなかった。出入口位置が変わらなかったのかもしれないが、それは、奈良・平安時代の竪穴住居としては一般的なあり方ではない。かなり深さのある竪穴でも、出入口ピットが検出されない場合があることから、西壁側に出入口部があった可能性があると考えられる。壁溝は全周する。南壁の壁溝内に2か所の壁柱穴がある(P5・P6)。P5は主柱穴P1・P4のほぼ延長線上にあり、また、P6もP2・P3の延長線上に近い位置にある。ともにかなり深さもあり、上層を支える補助柱穴である。若干内側になるが、北カマド両側の壁溝内にもピットがあり(P7a・b・c、P8a・b)、P5・P6に対応して、北側の屋根構造に関わるものであろう。各位置に2〜3のピットが近接しているのは、カマド部分であるので作りを重厚にしたことも考えられるが、カマド移設に関連して柱が建て替えられた可能性の方が高いと考える。床面は平坦で、南北の壁側を除いて、硬化面が広くみられる。東カマドは、被熱により内側の赤色化・硬化が著しい。袖の構架材は山砂主体である。北カマドの構架材は、移設のときに削除されて、残存しない。堆積土下層はローム粒・ブロックの含有がやや多いが、上・中層は少量である。自然堆積と思われる。掘りかた底面については、椽相が不明瞭であるが、南北両壁側床面では黒褐色土の混入が認められたため、四隅を含むこの部分は中央よりも深く掘られていたものと思われる。

図示した遺物は18点である。1〜3・6はロクロ成形の土師器杯、4はロクロ成形の上師器高台付杯である。2はやや遺存がよいが、1はあまり遺存がよくなく、4・6は小破片である。4は底部外面に数本の線が交差する線刻がある。間を置いて平行する2条線と直交する条線は間隔の依り2条線である。その外側の線は崩いが、他の線は深く刻まれている。欠損部まで続くものであり、「斗」の可能性があると思われる。6の底部外面にも罫書がある。釈読の断定ができないが、「万」になるかもしれない。1・4の内面は黒色処理が施されている。

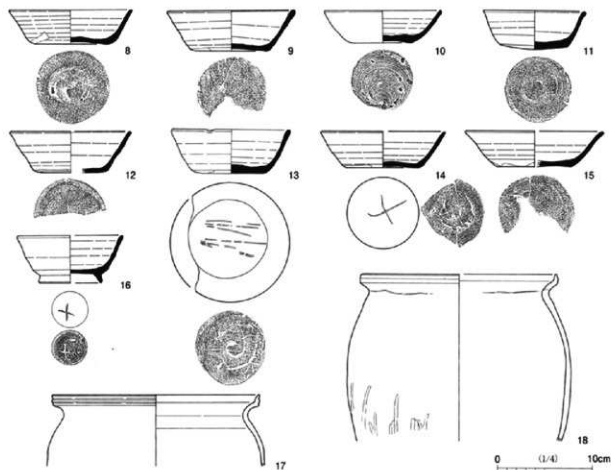
5・7〜15は須恵器杯である。10は底部切り難し技法が回転糸切りで、その後無調整である。色調は灰色で、硬質の焼成である。胎土は小石を含むが、滑らかな質感である。若干の白色針状物を含み、南北企産と思われる。口縁・体部の一部を欠くが、比較的遺存のよい個体である。10以外は千葉産である。11はやや小型の上器で、完形である。8も口縁・体部の一部を若干欠損する他に割れもなく、遺存のよい土器である。欠損部の割れ口はやや不整な「U」字状であり、意図的な打ち欠きとも思われるが、断定しがたい。その他、5・7・9・13もやや遺存がよい。ただし、5・7・9はやや細かく割れている。5は底部外面に線刻がある。「E」と「+ (×)」を組み合わせたような形の記号である。13・14は底部外面にヘラ書きがある。13は6〜8条程度の平行線であり、中央にやや間を置いている。ヘラケズリ痕とも思われるが、意図的に付けられた可能性が高いと考える。14は「+ (×)」である。16は千葉産の須恵器高台付杯である。底部外面に「+ (×)」のヘラ書きがある。

17・18は常盤型の土師器甕である。ともに小片から復元同化したものである。18は胴部外面に若干の山砂が付着している。

出土位置をみると、13・16が南壁際で、下層からの出土である。5・7もやや低い位置であるが、5は壁から離れており、壁際はかなり埋まっていたものと思われる。7も13・16よりはやや高い。それら以外



第371図 SI-202 (1)



第372図 SI-202 (2)

は、中・上層からの出土である。図示しない土器片の点数は768点、重さは9kgと多量である。竪穴全体から出土している。出土層位は下層もあるが、中・上層の方が多い。図示した遺物と同様である。

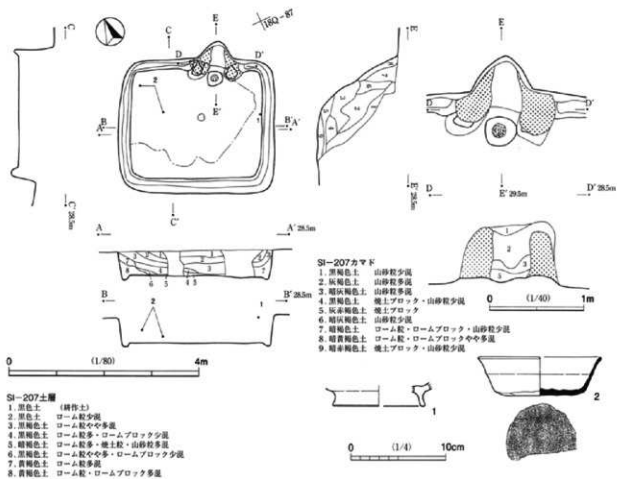
SI-207 (第373図, 図版110・313)

遺跡西部南東寄りの18Q区に位置する。2.9m×3.2mの方形をなし、深さは0.57mである。主軸はN-27°-Eである。北辺東寄りにカマドをもつ。南東隅近くの部分など、一部に床面まで達する攪乱を受けているが、四壁の遺存はよく、壁溝は全周する。出入口ピットは検出されなかった。床面はほぼ平坦である。深く掘り込まれて、ハードルーム層中に作られているため、全体に硬質であるが、中央部が他より若干強く硬化している。カマド袖下部の構築材は山砂主体であるが、上部と外側は黒色土が混じっている。両袖下の底面は、他の床面よりも高く掘り残されており、カマドの位置が当初から決められていたことが理解できる。右袖の外側は北東隅部である。堆積土は下層と壁際にローム粒・ロームブロックがやや多いが、黒色土・黒褐色土主体であり、自然堆積と思われる。

図示した遺物は2点である。1はロクロ成形の土師器高台付杯、2は千葉産の須恵器杯である。ともに遺存は悪い。1は上層、2は中層からの出土である。図示しない土器片の点数は85点、重さは870gで、少量である。

SI-208 (第374・475図, 図版134・284)

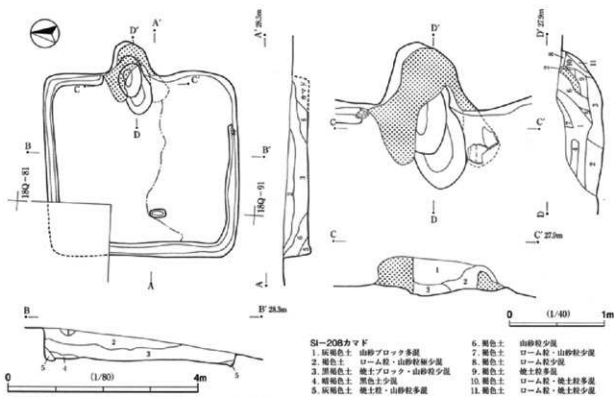
遺跡西部南東寄りの18Q区に位置する。北から南に下る緩傾斜面に立地する。3.9m×4mの隅丸方形



第373図 SI-207

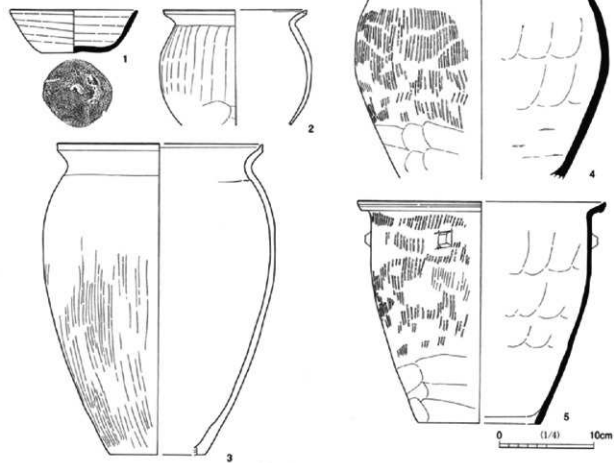
をなし、深さは0.47mである。主軸はN-85°Eである。東辺中央にカマドをもつ。旧石器時代の確認発掘区と重複したため、左前(北西)隅部分を掘り抜いている。壁溝は右奥(南東)隅周辺で不明であるが、他は左前隅付近を除いて巡っている。左(北)壁・前(西)壁部分の状況から、左前隅部分にも巡るものと思われる。前壁側のピットは出入口ピットの可能性があるが、中央に寄っていること、深さや形状という点から、やや断定しがたく、可能性の指摘に留める。カマドは右袖が削平されており、右袖が存在したと思われる部分から、大形の土器片が2点出土した。煙道側の上には、山砂が多くみられるが、天井部の構築材が崩落したものである。堅穴の掘りかた底面は凹凸があるが、その上に平均約10cm程度の厚さで、貼り床が施されている。貼られた土はローム粒・ロームブロック・山砂および焼土が混じったものである。床面は中央から左(北)側が硬質で、右(南)側がやや軟質である。

図示した遺物は5点である。1は千葉産の須恵器杯である。外面に山砂が付着しており、支脚に転用された可能性も考えられるが、カマド位置からは離れている。貼り床の土層に混じっている山砂の影響かもしれない。2は「房総」型の土師器甕で、小型品である。胴部内面は一部で剝離が著しい。3は常総型の土師器甕である。胴部下部から底部の多くを欠失するが、それ以外は遺存のよい土器である。山砂が胴部外面の各所と口縁部内面の一部に付着している。口縁部内面は剝離の著しい部分もある。4は千葉産の須恵器甕、5は千葉産の須恵器甕である。ともに遺存は悪い。5は方形の把手が1か所みられるが、貼り付けるさいの切り込みが顕著である。



- SI-208土層
- | | | | |
|---------|-----------|----------|---------------|
| 1. 黒褐色土 | ローム殻極少混 | 4. 暗黄褐色土 | ローム殻やや多混 |
| 2. 暗褐色土 | ローム殻少混 | 5. 黄褐色土 | ローム殻多混 |
| 3. 暗褐色土 | ローム殻やや多 | 6. 暗褐色土 | ローム殻やや多 |
| | ロームブロック少混 | | ロームブロック・山砂粒少混 |

- SI-208カマド
- | | | | |
|---------|--------------|---------|------------|
| 1. 灰褐色土 | 山砂ブロック多混 | 6. 褐色土 | 山砂粒少混 |
| 2. 褐色土 | ローム殻・山砂粒少混 | 7. 褐色土 | ローム殻・山砂粒少混 |
| 3. 灰褐色土 | 焼土ブロック・山砂粒少混 | 8. 褐色土 | ローム粒少混 |
| 4. 暗褐色土 | 黒色土少混 | 9. 褐色土 | 焼土粒多混 |
| 5. 灰褐色土 | 焼土粒・山砂粒多混 | 10. 褐色土 | ローム殻・焼土粒多混 |
| | | 11. 褐色土 | ローム殻・焼土粒少混 |



第374図 SI-208

図示した遺物の出土層位をみると、2・3の一部は床面・下層からの出土であるが、一部は中・上層から出土している。5は下層からの出土であるが、遺物のよい土器ではない。1・4も床面からは離れた位置である。平面位置は2がカマド付近から多く出土しているが、遺存がそれほどよくない。2を含め、図示した遺物が本竈穴で使用されたものか断定しがたい。図示しない土器片の点数は223点、重さは3.2kgである。竈穴全体から出土している。

SI-209 (第375図、図版134・284・318)

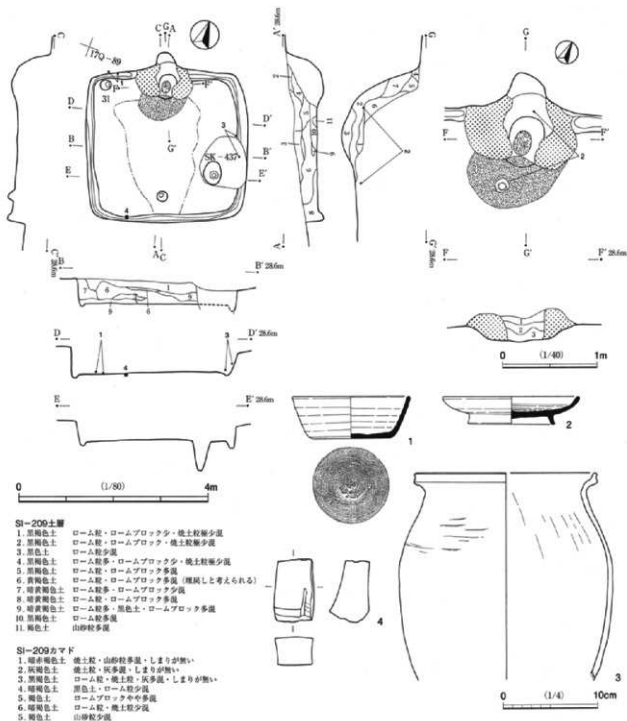
遺跡西部南寄りの17Q区に位置する。3.2m×3.4mの方形をなし、深さは0.47mである。主軸はN-160°-Eである。北辺中央にカマドをもち、南壁際中央に出入口ピットをもつ。東壁側南寄り部分が、SK-437に切られている。壁溝は全周する。竈穴内には、出入口ピット以外に2か所のピットがあるが、どちらも本竈穴に伴うものか不明である。一つはSK-437内にある。床面はほぼ平坦で、東西壁側を除いて、出入口部からカマド前まで硬化している。カマド構築材は山砂を主体とするが、下部はローム粒を含む。被熱により、竈内壁だけでなく、かなり袖の中まで赤色化する部分がある。構築材の山砂は調査の過程で、ドーナツ状に出土し、掛け口部分がそのまま落下した状況がうかがえる。カマド前の床面は、カマドから流出した焼土が堆積している。堆積上中・下層はローム粒・ロームブロックを多く含むことから、上層を除いて埋め戻された可能性が考えられる。

図示した遺物は4点である。1は千葉産の須恵器杯である。口縁・体部の一部を欠損するだけであり、遺存のよい土器である。遺存部分は、口縁部から底部まで6:4程度の割合で割れた2片が接合したものである。欠損部は打ち欠きされた可能性があると考えられる。2は千葉産の須恵器高台付鉢である。口縁部にはあわせて1/2周程度の欠損があるが、比較的遺存のよい個体である。遺存している口縁部は一部割れて接合している。器面はざらついており、内面はやや荒れている。色調は灰褐色であるが、一部黒ずんでいる。内面はやや黒ずみの強い部分がある。出土状況から、欠損部は打ち欠きされたことも考えられるが、断定はしがたい。3は「房総」型の土師器甕である。遺存はあまりよくない。器面は荒れており、胴部外面中に、剥離する部分がある。4は砥石である。石材は流紋岩質凝灰岩である。図示した上側の小口面はあまり磨かれていない。下側の小口面はほぼ2面の状態を呈し、若干磨かれている。他の4面はよく磨かれて滑らかである。広い小口面の角から一方の広い側面にかけて、深く切り込まれた筋ぎれがある。

出土位置をみると、2はカマド左袖前の床面から伏せた状態で出土した。また、口縁部片の一部がカマド内から出土している。主要部分はカマド前に置かれた可能性が考えられる。1はカマド左側、北西隅近くの床面から出土した。2とともに置かれたのかもしれない。図示しない土器片の点数は125点、重さは2.7kgである。分布はカマド周辺と中央部にやや多い。

SI-300 (第376図、図版111・285)

遺跡東部南端の22S区に位置する。北東から南西に細長く延びる台地の先端部に立地する。4.3m×4.5mの方形をなし、深さは0.53mである。主軸はN-23°-Eである。北辺にカマドをもつ。SB-100に所々切られる他、東壁中央で攪乱を受けている。主柱穴4か所をもつが、出入口ピットは検出されなかった。SB-100と重複している影響かもしれない。壁溝は北西隅部付近を除く隅部付近で途切れている。しかし、浅いため、本来は全周する可能性も考えられる。床面はほぼ平坦で、中央部がやや硬化している。カマドの遺存はあまりよくないが、両袖内側は被熱により赤色化し、火床部の赤色化した面も明瞭である。堆積土は全体的にローム粒・ロームブロックの含有が多い。SB-100や攪乱の影響とも思われるが、埋め戻さ



SI-209土層

1. 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック少・焼土粒極少混
2. 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土粒極少混
3. 黒色土 ローム粒少混
4. 黒褐色土 ローム粒多・ロームブロック少・焼土粒極少混
5. 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多混
6. 黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多混(類似しと考えられる)
7. 暗黄褐色土 ローム粒多・ロームブロック少混
8. 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多混
9. 暗黄褐色土 ローム粒多・黒色土・ロームブロック多混
10. 黒褐色土 ローム粒多混
11. 褐色土 山砂粒多混

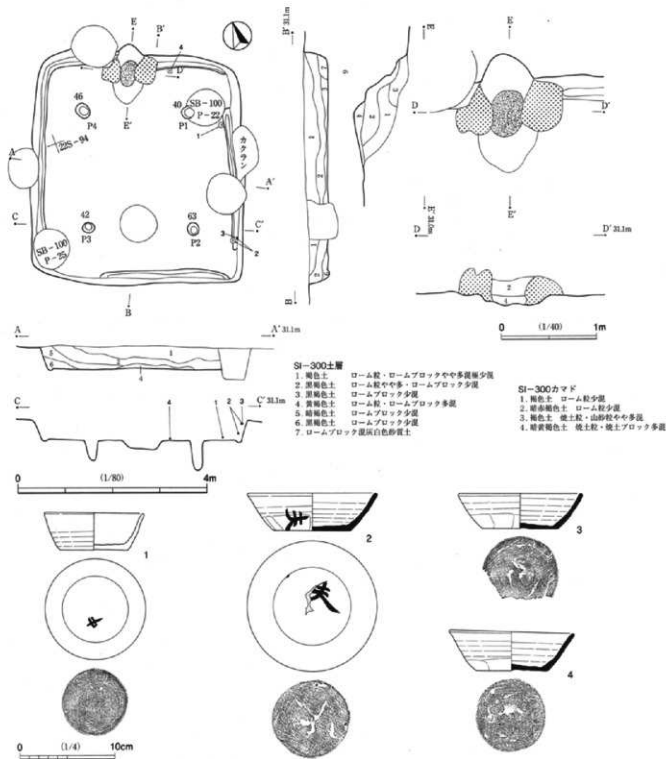
SI-209カマド

1. 暗赤褐色土 焼土粒・山砂粒多混・しまりが無い
2. 灰多量土 焼土粒・灰多量・しまりが無い
3. 黒褐色土 ローム粒・焼土粒・灰多量・しまりが無い
4. 暗褐色土 黒色土・ローム粒少混
5. 褐色土 ロームブロックやや多混
6. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少混
7. 褐色土 山砂粒少混

第375図 SI-209

れた可能性も考えられる。

図示した遺物は4点である。1はロクロ成形の土師器杯である。底部外面に「中」の墨書がある。口縁端部がわずかに欠けるが、ほぼ完形である。口縁・体部の一部が2片に割れているが、接合している。やや焼成があまく、器面は荒れている。色調は淡褐色を基調とするが、外面にやや褐色味の強い部分があり、火を受けた可能性がある。2・3・4は新治窯産の須恵器杯である。2は体部外面と底部に「夫」の墨書がある。体部外面は横位の記載である。遺存がよいが、かなり細かく割れている。3は1/2強の遺存で、



第376図 SI-300

これもやや細かく割れている。4は口縁・体部の一部が、口縁部周で2/5周程度欠損している。欠損部はやや大きい。他に割れない土器である。

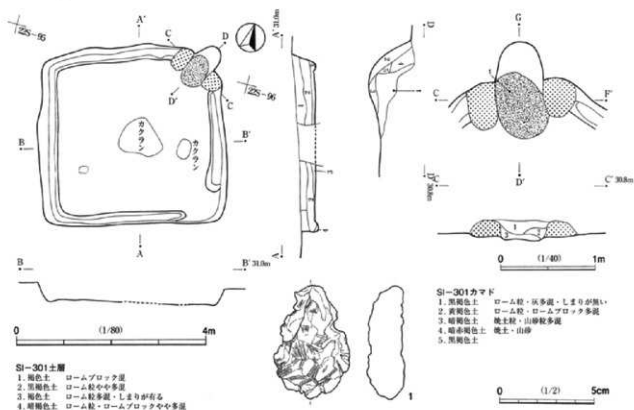
2・3は東壁際南寄りの中・上層から出土した。2は、出土時にはほぼまともに出土した。1は、SB-100と東壁下に存在する壁溝に接して検出され、4はカマド右袖の東から検出された。1・4はともに床面付近から出土しており本壁穴に伴うものと思われる。1・2・4は出土時の形が記録されている

が、正位か倒位か判然としない。ただし、あまり大きく傾いてはいない。1～4はカマド付近および支柱穴P1・P4の延長上やP2・P3の延長上の近くに位置するため、カマド・竈穴廃棄の祭祀行為に伴う可能性がある。2・3は中・上層からの出土であるが、堆積土がかなり埋め戻されているとすれば、廃棄された、または流入した遺物ではない可能性もある。やや不明瞭であるが、1・4は床面に置かれ、2・3はある程度埋め戻した段階で置かれた可能性が考えられる。なお、4の欠損部は打ち欠きされた可能性もあるが、やや断定しがたい。図示しない土器片の点数は63点、重さは875gと少量である。分布はまばらに散っているが、壁際には少ない可能性がある。

SI-301 (第377図, 図版111・320)

遺跡東部南端の22S区に位置する。細長い台地の緩斜面に立地する。3.8m×3.9mの方形をなし、深さは0.41mである。北東隅にカマドをもつ。中央部付近が若干の攪乱を受けている。出入口ピットは検出されなかった。南壁側または西壁側が出入口部と思われるが、周囲の竈穴住居跡の様相から、南壁側の可能性が高いと考える。南壁側を出入口部と仮定すると、主軸方位はN-16°-Wである。壁溝は南東隅を除いて巡っている。床面は地形の影響を受け、北西側が高く、南東側が低い。攪乱の影響のためか、硬化面は不明瞭である。カマドの遺存はあまりよくない。両袖下部はハードローム粒を多く含む。

図示した遺物は、土製品1点である。繊維を多く含み、もろい焼成である。壁・屋根等の材料、または土製支脚と思われる。出土した土器片の点数は61点、重さは1.9kgである。まばらな分布であり、とくに偏ったあり方はみられない。土器片の内訳は、新治窯産の須恵器杯・大型の甕、常総型の土師器甕、「房総」型の土師器甕、武蔵型または「房総」型の土師器甕である。常総型土師器甕の量がもっとも多い。出土土器の時期は9世紀代かと思われるが、不明瞭であり、竈穴の時期は断定しがたい。

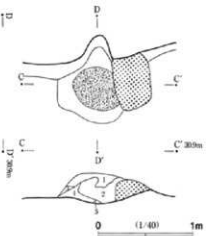
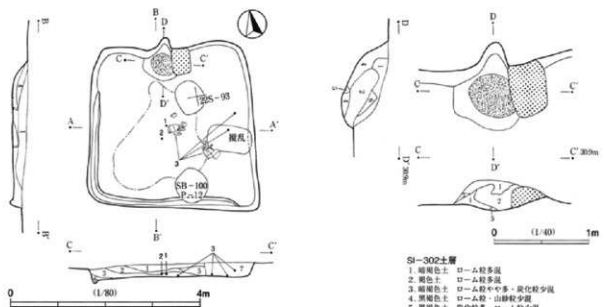


第377図 SI-301

SI-302 (第378図, 図版112・285)

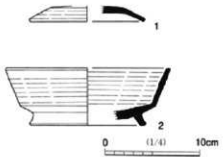
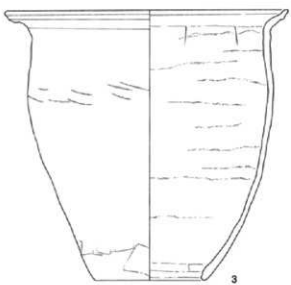
遺跡東部南端の22S区に位置する。細長い台地の西側に立地する。3.5m×3.5mのやや不整な方形をなし、深さは0.31mである。北辺中央にカマドをもつ。主軸方位はN-7°-Eである。出入口ピットは検出されなかった。壁溝は南壁と西壁の大部分に巡っているが、北壁と東壁にはみられない。床面は地形の影響を受け、東側が高く、西側が低い。中央に硬化面がみられる。カマド前と南壁際にSB-100の柱穴があるが、硬化面を切っており、本壁穴の方が古い。ただし、確認面ではSB-100を検出できなかった。東壁側中央は攪乱を受け、そこから南側はやや掘り過ぎている。カマドの遺存は悪く、左袖は削平されている。右袖は若干遺存するが、被熱により多くが赤色化している。

図示した遺物は3点である。1は須恵器蓋である。色調は黒灰色で、胎土は白色粒・黒色粒を多く含む。焼成は良好で、かなり硬質である。内面には灰黄色のガラス化していない釉が附着している。新治窯産に含まれる須恵器かもしれないが、やや趣が異なる。色調は、SI-013の20等に似ている。2は新治窯産の



- SI-302土層
1. 褐色土 ローム粒多量
 2. 褐色土 ローム粒多量
 3. 褐色土 ローム粒やや多・炭化粒少量
 4. 褐色土 ローム粒・山砂粒少量
 5. 褐色土 炭化粒多・ローム粒少量
 6. 褐色土 ローム粒多量
 7. 褐色土 ローム粒多量・しまりが無い

- SI-302カマド
1. 褐色土 ローム粒・山砂粒やや多・焼土粒極少量
 2. 褐色土 ローム粒・焼土粒・山砂粒多量
 3. 褐色土 ローム粒・山砂粒やや多量
 4. 褐色土 ローム粒
 5. 褐色土 ロームブロック
 6. 灰褐色土 山砂粒多量



第378図 SI-302

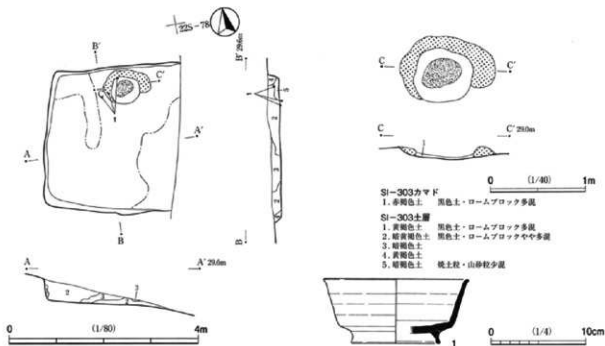
須恵器高台付杯である。3は常総型の土師器瓶である。比較的遺存のよい土器である。単孔で、胴部内面下端は、工具で切られて鋭い稜がみられる。胴部外面は上位から下位までナデが施されているが、ヘラミガキはみられない。底部際は横方向のヘラケズリが施されている。胴部外面上位には、横やや斜めの筋状の圧痕が、断続的に周回している。胴部内面はヘラナデが施され、一部にヘラの当たりが顕著に残っている。また、粘土組の接合痕も上位から下位までみられる。色調は淡褐色で、胎土は長石等の白色粒・白雲母を多く含む。ヘラミガキがみられない以外は常総型甕と同様の技法・質感の土器である。

3は主として、中央および中央やや東側の床面の2か所から、まとまって出土した。東側部分は攪乱に接しており、攪乱がなければ、もっと遺存がよかった可能性がある。1・2も中央部のはは床面から出土した。図示しない土器片は34点、重さは590gと少量である。主として北東側から出土した。西壁側・南壁側の遺物分布は希薄である。

SI-303 (第379図, 図版112・285)

遺跡東部南端の22S区に位置する。細長い台地の緩斜面に立地する。斜面に位置するため、東壁側を欠損する。形態は不整形な方形で、規模は主軸長が3.1m、副軸長は現存で2.8m、深さは0.29mである。北辺にカマドをもち、主軸はN-10°-Eである。出入口ピット・壁溝は検出されなかった。床面は、地形の影響で西側がやや高い。東側は低いが、それ以上に損なっている部分がある。硬化面が北西隅付近と東側を除いてみられるが、不整形な形態である。カマドは少量の山砂がみられるだけで、遺存が悪い。煙道部は方形プランからの突出がなく、カマドおよびこの付近の北壁の様相が不明瞭である。

図示した遺物は新治窯産の須恵器高台付杯1点である。色調はやや黄緑色を帯びた暗灰色で、白雲母を多く含む。ややシャープな作りの土器である。カマド付近の床面・下層から出土した。図示しない土器片は21点、重さは400gで、少量である。カマド付近にやや多い他は、まばらな出土である。

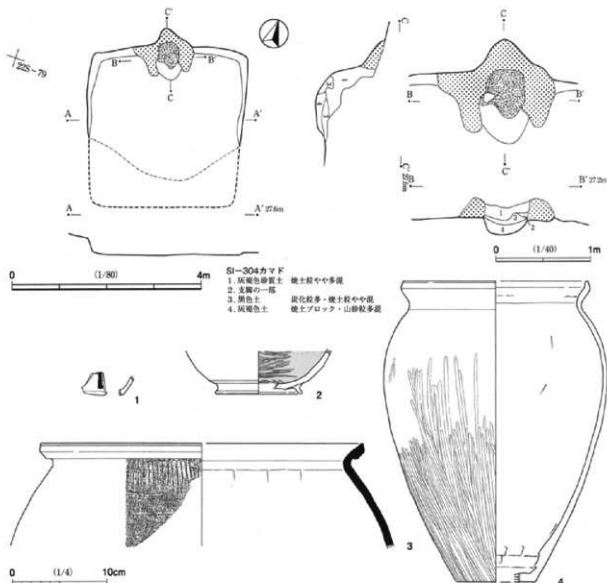


第379図 SI-303

SI-304 (第380・475図, 図版112・113・285)

遺跡東部南端の22S区に位置する。細長い台地の緩斜面上に立地する。形態は方形である。規模は副軸長で3.3m、深さは0.34mである。北辺中央にカマドをもち、主軸はN-13°-Wである。地形はカマドのある北側が高く、南側が低い。そのため、南側が失われている。壁溝と出入口ピットは検出されなかった。本竪穴の床面下は、約20cmで灰白色の粘土層に達する。その上部は厚さ15cm程度の暗褐色土層であり、これも地山層と思われる。その上部の厚さ6cm~7cm程度の土層が床面を構成する土層である。暗褐色土に多量の白色粘土が混じっており、貼り床が施されたものと思われる。床面の色調がやや暗く、粘土混じりであるため、検出が難しく、南側床面と西壁南側の一部を掘り過ぎている。床面の硬化部分は確認されなかった。カマドの奥壁部は山砂が厚さ10cm~20cm貼り付けられている。火床部分の底面は床面よりもかなり深く、粘土層に達している。

図示した遺物は4点である。1はロクロ成形の土師器杯の小片である。体部外面に墨書があるが、判読できない。2はロクロ成形の土師器高台付杯である。内面に黑色処理が施されている。3は千葉産の須恵



第380図 SI-304

器蓋である。2・3は小片からの復元実測であることを付記しておく。4は常総型の土師器蓋である。I
緑部・脚部上位の遺存は比較的よい。

4はカマド付近を主体として出土した。出土層位は床面から上層にわたる。図示しない土器片の点数は
263点、重さは1.8kgである。カマド付近を主体に出土しており、とくにカマド右側に多い。図示した2・
3もこの部分から出土している。中央から南側はまばらであるが、堆積土の遺存が少ないことによる。

SI-305 (第381図、図版113・285・286)

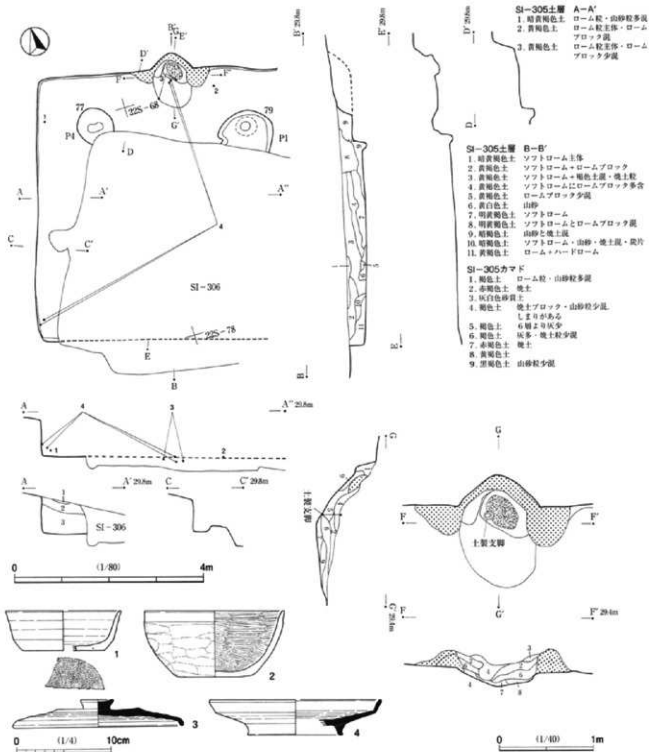
遺跡東部南側の22S区に位置する。細長い台地の緩斜面に立地する。形態は方形である。規模は主軸長
で5.6m、深さは0.5mである。北辺中央にカマドをもち、主軸方位はN 15° Eである。SI 306に多くの部
分を切られている。また、斜面のため東壁側を失っている。壘溝・出入口ピットは検出されなかった。出
入ロピットは存在したとしても、SI 306に切られて消滅したとみられる。主柱穴のうち、北側の2か所
(P 1・P 4)は旧石器時代の確認調査において検出されたものである。主柱穴の堆積土は、床面の上層
と大差がなかったであろう。なお、SI-306の出入口ピットは、その位置から本竈穴の南東側主柱穴の
可能性もあるが、前者の可能性の方が高いと考える。カマドの遺存はあまりよくないが、土製支脚が立っ
た状態で出土した。上部が欠損していると思われるが、脆くかなり崩れているため判断としない。やや左
側に寄っているが、本束の位置であることも考えられる。なお、細片となってしまったため図化してい
ない。

図示した遺物は4点である。1はロクロ成形の土師器杯である。胎土に褐色粒と黒雲母粒の含有が目立
つ。2は土師器鉢である。深い碗形の器形である。端然な作りであるが、非ロクロの上器と思われる。I
緑端部の一部に欠損があるが、他は遺存する。欠損部を境に大きく2片に割れ、さらにその一方が2片に
割れて接合する。3は須恵器蓋で、扁平な器形である。色調は天井部外面のつまみから平坦面付近は灰色
味があるが、他は褐色である。千葉産の須恵器と思われる。4は須恵器高台付蓋である。色調は全面褐色
であり、土師器の可能性もあるが、器形とざらつく質感から須恵器とする。須恵器であるならば、千葉産
である。

3はカマド内底面、2はカマド右袖端の床面から出土した。1は西壁北寄りの下層から出土した。4は
カマド内底面と南西階下層に広く散っている。図示しない土器片については、SI-306と混在しているた
め、正確な数量が不明である。SI-306と合わせた数値は414点、重さは3.6kgであるが、重複の状況から、
SI 306に含まれる遺物の方が多いといえよう。なお、本竈穴およびSI 306・SI-363の出土遺物はすべ
て、本竈穴の出土遺物として取り上げている。

SI-306 (第382・475図、図版113・285・286)

遺跡東部南側の22S区に位置し、立地はSI-305と同様である。形態は方形である。規模は副軸長で4.7
m、深さは0.43mである。西辺中央にカマドをもち、主軸方位はN-63°-Wである。SI-305・SI-363と重
複し、双方を大きく切っている。SI-305同様、東壁側を失っている。主柱穴を4か所もつが、西側のP 1・
P 4は隅部に近い位置である。東側のP 2・P 3も隅部・東壁に近いとするならば、プランはカマドに向
かってやや横長の方形となる。主軸長はおおよそ4.4mと推定する。P 2・P 3間のピットは内側に入り込
んでいるが、中軸線上に位置することから、出入口ピットと考える。壘溝は西壁と北壁に巡っている。東
壁・南壁は不明であるが、本束は存在する可能性があると思われる。床面は一部で東側が低いが、おおむ
ね平坦である。硬化面は不明瞭である。カマド左袖はまったく遺存せず、右袖も奥の一部のみの遺存であ



第381図 SI-305

る。煙道部の上部には山砂がみられるが、構築材が流出したものである。火床部分の底面は深く窪んでいるが、ローム粒主体の土層が堆積している。焼土を多く含む土層は床面とほぼ同じ高さである。

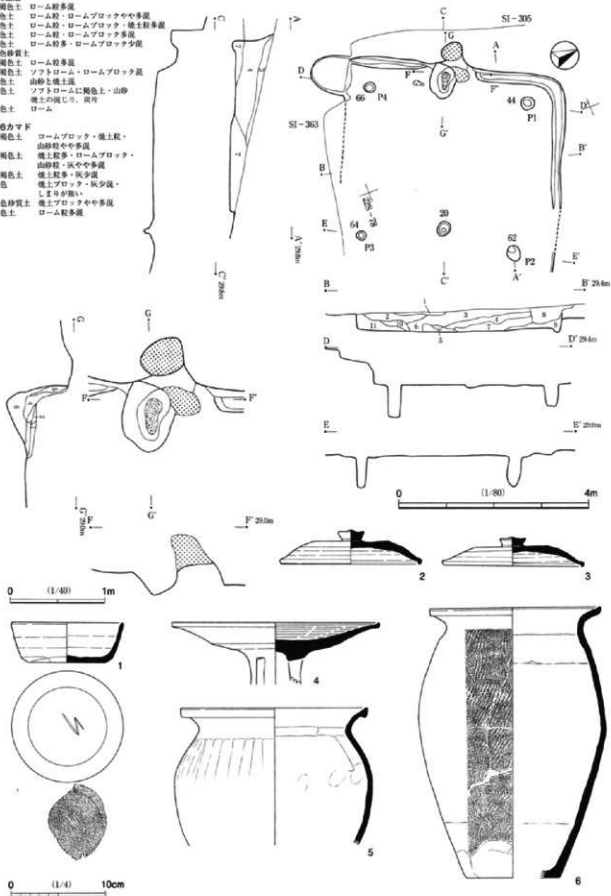
図示した遺物は6点である。1は千葉産の須恵器杯である。底部外面にヘラ書きがある。形を縦にみると、「リ」を続けて書いたような形であり、横にみると、「Z」を反転させたような形である。文字ではなく、記号と思われる。2・3は新治窯産の須恵器壺である。ともに硬質な焼成で、胎土に白色粒・小石を

SI-306土層

1. 緑黄褐色土 ローム粒多量
2. 黄褐色土 ローム粒・ロームブロックや中多量
3. 黄褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土粒多量
4. 黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量
5. 黄褐色土 ローム粒多・ロームブロック少量
6. 黄白色砂質土
7. 明黄褐色土 ローム粒多量
8. 明黄褐色土 ソフトローム・ロームブロック混
9. 緑褐色土 山砂土・焼土混
10. 緑褐色土 ソフトロームに黄褐色土・山砂
焼土の混じり。炭屑
11. 黄褐色土 ローム

SI-306力マF

1. 灰黄褐色土 ロームブロック・焼土粒・
山砂粒や中多量
2. 暗黄褐色土 焼土粒多・ロームブロック・
山砂粒・灰や中多量
3. 暗黄褐色土 焼土粒多・灰少量
4. 灰褐色土 焼土ブロック・灰少量・
しまりが無い
5. 灰褐色砂質土 焼土ブロックや中多量
6. 黄褐色土 ローム粒多量



第382図 SI-306

含む。また、ともに火輝痕がある。4も新治窯所の須恵器高甕である。脚部は3方に方形の透かしを有する。焼成はややあまく、表面は粉状の質感である。胎上に白雲母を多く含む。5・6は千葉産の須恵器甕である。5は胴部にふくらみがあり、土師器變的な器形である。胴部が最大径であるが、口径との差は少ない。6はやや長胴であるが、これも土師器變的な器形といえよう。最大径は胴部で、若干張りがある。かなり遺存のよい土器で、欠損部は胴部下位から底部の大部分と口縁部の一部である。5は胴部外面には縦方向に平行タタキが施されるが、ナデによってほぼ消されている。胴部内面は当て具痕による凹凸がみられ、とくに上位で著しい。6は、胴部外面の平行タタキがナデによって薄れているが、5よりもよく残っている。しかし、下位はかなり消えており、底部際はヘラケズリが施されている。胴部内面の当て具痕はナデによってかなり消されている。

図示した遺物はカマド周辺から多く出土している。1・4・5・6はカマド内および周辺から出土し、2も1点がカマド周辺から出土している。2のもう1点はSI-305に散っているが、3と質感が似ており、本堅穴の遺物として扱う。3はカマド左のやや南西隅側寄りのところから出土した。出土層位は、4と5の一部を除いて床面からやや浮いている。しかし、カマド内・周辺から出土した遺物は、本堅穴に近い時期の可能性があり、とくに6は本堅穴で使用されていた遺物かもしれない。

図示しない土器片については、SI-305と混在しており、正確な数量は不明である。分布はカマド周辺に多いが、堅穴全体にみられる。SI-305と合わせた数値は414点、重さは3.6kgで、本堅穴に含まれる遺物の方が多いといえよう。なお、本堅穴およびSI-305・SI-363の出土遺物はすべて、SI-305の出土遺物として取り上げられており、遺物の注記もSI-305のままである。

SI-307 (第383~387図, 図版113・286・287・308・313・314)

遺跡東部南端の22S区に位置する。細長い台地上で、南東側にやや下る緩斜面に立地する。6.4m×6.4mの方形をなし、深さは0.8mである。奈良・平安時代の堅穴住居跡としては、かなり人型の堅穴である。主軸方位はN-57°-Wである。北西辺中央にカマドをもち、南東壁端中央に出入口ピットをもつ。主柱穴が4か所あり、やや内側に位置する。深さは1m前後で、かなり深い。壁溝は全周する。床面は全体的に貼り床が施されている。貼り床の厚さは数cm~20cmで、2層に分かれる。上層はローム小粒・黒色土・焼土粒が混じった暗褐色土であり、硬質の土層である。薄い層で、踏みしめられた状況を加味する必要があるが、壁際に続く部分がある。下層は上層より、ローム粒・焼土粒が大きく、炭化物を多く含む。また、山砂も混じっている。上層より厚い層であるが、しまりがやや弱い。床面上はおおむね平坦であるが、南(左前)隅部周辺はやや低い。硬化面が主柱穴間からカマド左側にかけてみられる。カマドは方形プランからかなり突出している。遺存はあまり良好でなく、とくに前側がかなり失われている。袖内壁および奥壁は被熱により赤色化している。焼土量が多く、燃焼箇所と思われる部分だけではなく、前側・奥側に広く堆積している。カマド内からは、土器が多量に出土した。そのなかには、須恵器甕の大形破片が側位で両袖内壁に接した状態でみられた。中央部カマド寄りの床面上には炭化粒が堆積し、堆積土も全体的に焼土を含んでいる。堅穴住居廃棄にあたり、建物が焼却され、その後、埋め戻されたものと思われる。

図示した遺物は44点で、多量である。1~17はロクロ成形の土師器杯皿類である。9は皿、10は高台付杯であるが、他の15点は杯である。12は底部の小破片であるが、他の土器とは別個体である。外面に「因」と書かれた墨書がある。11・13・14も底部外面に墨書がある。11は一部消えているが、12と同じ「因」であろう。14は遺存が一部で、不明とするのが妥当であるが、これも「因」かもしれない。13は漢字の「工」

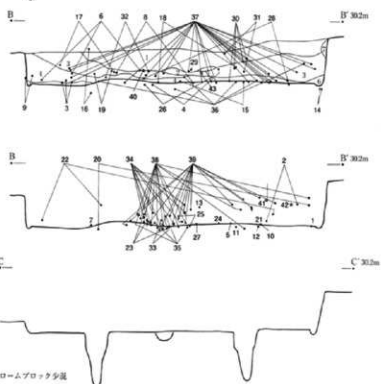
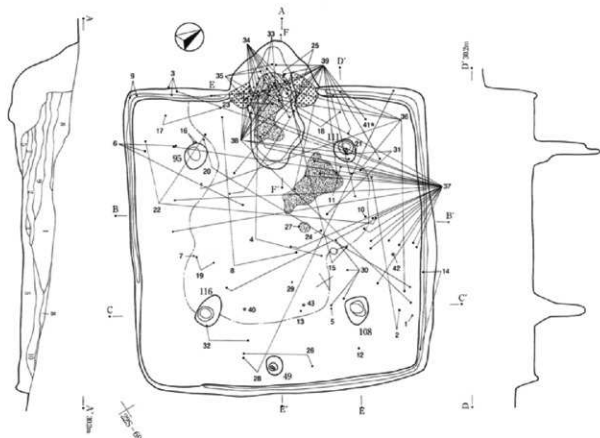
または片仮名の「エ」に似た形である。上部が欠損しているため、この部分にも文字があるかもしれない。上の横棒が一部かすれており、「十」などの可能性も考えられるが、文字種不明とする。10は底部外面にヘラ書きがある。片仮名の「ヤ」を裏返したような形であるが、「11(X)」の変形と考える。巻いている線がまっすぐな線を切っている。やや判然としなが1の底部外面にも、ヘラ書きと思われるものがある。ヘラ書きとみた場合、「方」とも思われるが、記号とする方が妥当である。1・12・15・16は内面にヘラミガキ、黒色処理が施されている。10・17も内面ヘラミガキ調整の土器であるが、黒色処理は施されていない。遺存状態は様々であるが、完形に復元できるものではなく、欠損部以外にも割れている。器面は概して荒れているが、17は荒れが顕著であり、5もやや顕著である。

18～32の15点はすべて千葉産の須恵器杯である。24は口縁・体部の一部が「V」字状に欠損する以外は割れない遺存良好な土器である。他の土器は欠損のほかには大小の割れがある土器である。そのうち、23・27・28はかなり遺存がよく、29・30もやや遺存のよい土器である。19は重みのある土器であり、口径鎖がもっとも大きい部分で反転凶化されている。やや大きい土器であるが、最小の口径値は円を下回るものである。15点の須恵器杯は全体に器面が荒れており、23・26は火を受けた様相が顕著である。

33は「房総」型の土師器甕で、小型品である。器壁がかなり薄い。胴部外面に黒斑がある。34・35は常総型の土師器甕である。34は底部が遺存しないが、口縁部から胴部下位までよく遺存する土器である。やや細かく割れて、胴部に若干の欠損があるが、口縁部は全周する。甕に転用された土器とも思われるが、別目的で底部を抜かれた可能性もあり、断定しがたい。胴部外面のヘラミガキが上位にまでおよぶ。上位のヘラミガキは密ではなく、不整に施される。胴部内面はヘラナデが施されているが、ヘラの当たりが一部で顕著である。胴部外面下位は赤く変色し、器面の剥落が著しい部分もある。35は口縁部が半周程度遺存する土器である。

36・37は千葉産の須恵器甕。38・39は千葉産の須恵器甕である。36の遺存は一部であり、甕の可能性もあるが、把手がみられず、復元形の大きさが37と似ることから、甕としておく。37は遺存がかなりよく、胴部中位から下位の一部を欠損するほかは、口縁部が若干欠ける程度で、底部はほぼ遺存する。内面は横方向のナデにより当て貝の痕跡が消される部分が多い。被熱により、胴部中位から下位はもともとの色調以上に褐色化している。38・39は大型の甕である。38はやや小胴の器形、39は深みがあるが、やや開くバケツ形の器形である。ともに比較的遺存のよい土器で、大型の土器であるが、口縁部から底部まで接合している。しかし、底部の五孔をつなぐ橋状部は、ともに欠損している。大きさは39の方がやや大きい。器高の差は少ない。胴部外面上位には、土器径を四等分する位置に平面方形の把手が配されている。ともに3か所遺存しており、どちらも整った把手である。調整手法もほぼ共通している。胴部外面には横方向の平行タキが施されているが、下位にいくにつれてやや斜位となる。甕が縦方向であるのと比べ、対照的である。胴部外面下位は横方向およびやや斜方向のヘラケズリが施されており、この点は甕と同様である。内面にはナデが施され、当て具痕をほぼ消している。38は縦方向のナデが目立つ。横方向にも施されたかもしれないが、仕上げは縦方向である。39は方向が顕著でないが、横方向と縦方向のナデがみられる。こちらも仕上げは縦方向の可能性はある。色調はともに灰黄褐色である。38は色調の変化が少ないが、39は被熱により、下位を主体にやや褐色化の強い部分がある。

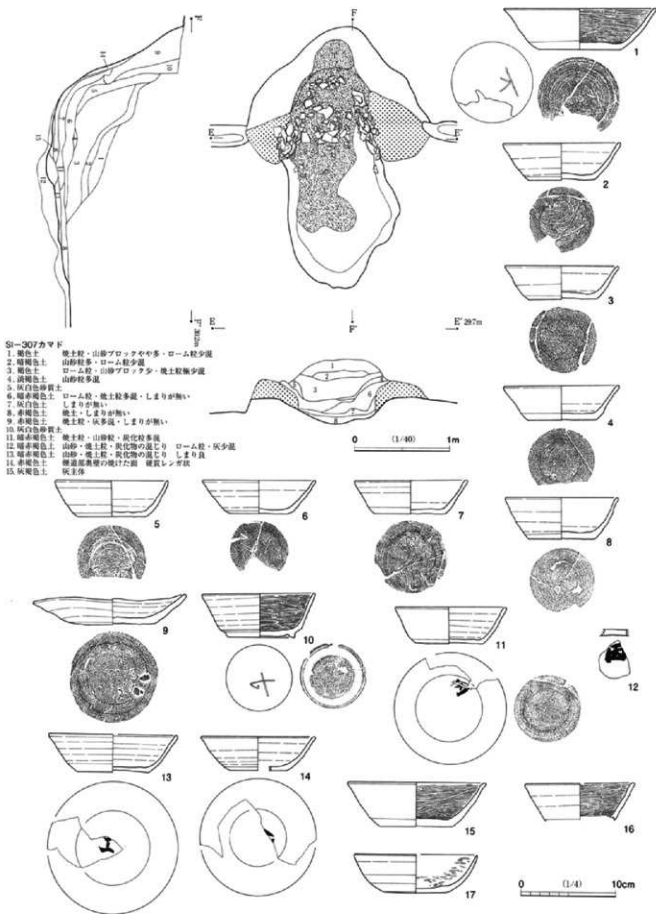
40～43は鉄製品である。40・41は刀子である。42は鉄鎌である。細身の長頸鎌であるが、小振りの鉄鎌である。刃部から茎の上部まで遺存している。刃部の形態は鑿鑿式である。棒状部と茎の境は直角閃と思



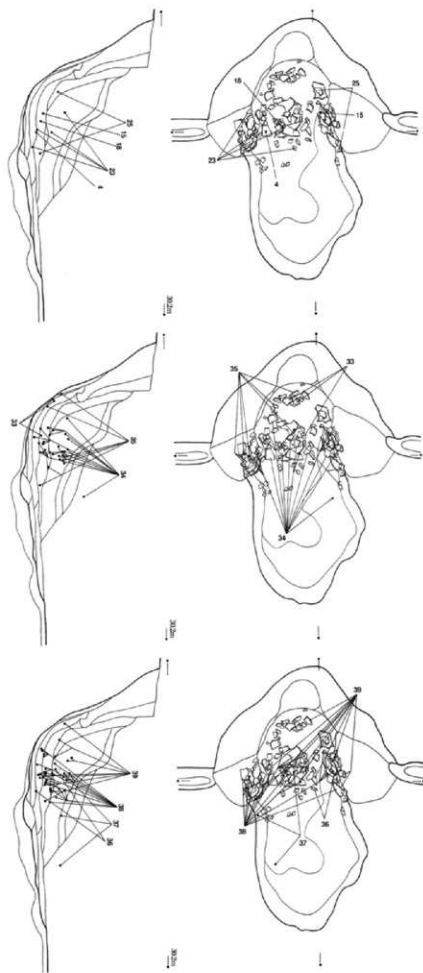
SI-306土層

- | | |
|------------|----------------------------|
| 1. 暗黄褐色土 | ローム粒・焼土粒多・ロームブロック少混 |
| 2. 明褐色土 | 山砂粒多混 |
| 3. 黄褐色土 | ローム粒・ロームブロック・焼土粒多・焼土ブロック少混 |
| 4. 黄褐色土 | ローム粒・ロームブロック・焼土粒多・焼土ブロック少混 |
| 5. 明黄褐色土 | ツブシローム |
| 6. 明黄褐色土 | ロームブロック多混 |
| 7. ロームブロック | |
| 8. 至褐色土 | ローム粒・焼土粒少混 |
| 9. 暗黄褐色土 | 焼土粒・粘濁粒多混 |
| 10. 黄褐色土 | ロームブロック少混 |

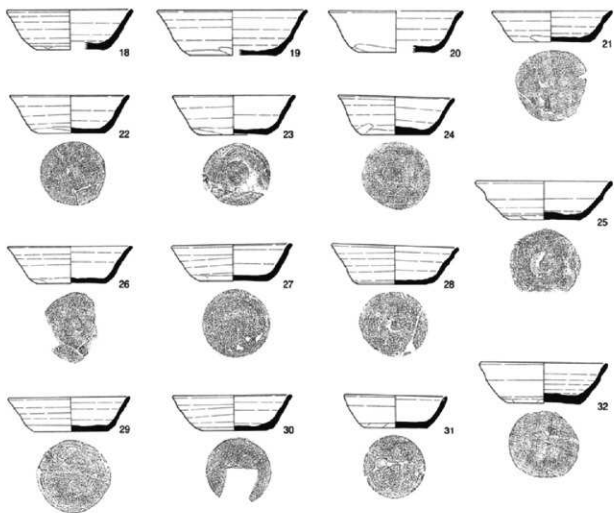
第383図 SI-307 (1)



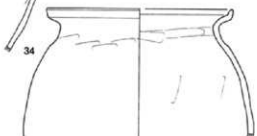
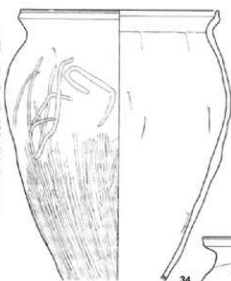
第384図 SI-307 (2)



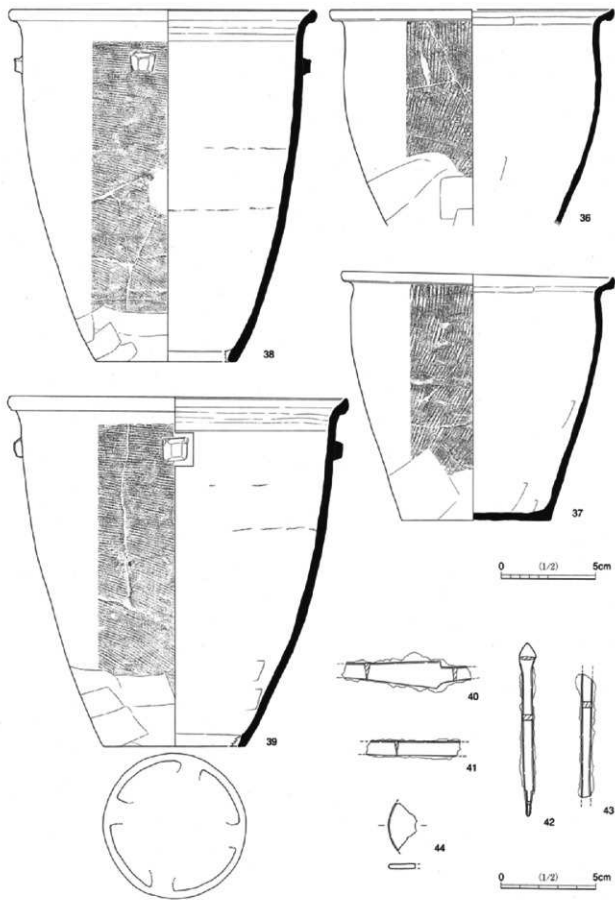
第385图 SI-307 (3)



0 (1/4) 10cm



第386图 SI-307 (4)



第387图 SI-307 (5)

われるが、錆のために片側の関は不明瞭である。蓋は細く、欠損していると思われる。43は棒状品である。鉄製の棒状部と思われる。不明瞭であるが、図示した上部は刃部に近く、下部は葉に近いように思われる。44は石製品で、有孔円板の破片である。石材は滑石である。古墳時代遺物の混入品である。

遺物の出土状況について記述する。カマド内から多量の土器が出土しているが、まず、須恵器甌・甕類の出土状況をみってみる。甌38は左袖内側を中心に、甌39は右袖内側を中心に、ともに倒位で出土した。出土状況は似ており、ともに11縁をもつ大形破片の内面を袖内壁に向けている。38の破片はカマド内中央や右袖側にもみられ、39もカマド内中央や左袖側に散っている。また、38・39ともカマド外からも出土し、38は右奥側や右壁際前寄りに広く分布し、39もカマド前方や右奥側に散っている。甕37はカマド内だけでなく、右壁側からも多く出土し、さらに中央から左壁側まで広域に分布している。甕36も37・38とやや似ており、カマド内だけでなく、広域に散っている。カマド内遺物は38・39を主体として、袖の保護材の可能性はある。

土師器甕33・34・35はカマド内の出土であり、他からは出土していない。遺存のよい34はカマド内中央および左袖・右袖側から万遍なく出土している。その出土状況はことおりに解釈できる。一つは、38・39とともに袖の保護材として使われたものが、中央にも散ったというもの。もう一つはカマド中央に遺棄されたが、破片は両袖側にも散ったというものである。なお、この場合には、単なる遺棄に加えて、カマド廃棄の祭祀に伴い、破壊された可能性も考えられる。須恵器甌・甕群と土師器甕群の出土状況を比較すると、須恵器甌・甕群はカマド外からも広域に出土するのに対し、土師器甕群はカマド内のみであり、その点は対照的なあり方である。

カマド内からはいくつかの土師器杯・須恵器杯も出土している。土師器杯は4・15、須恵器杯は18・23・25である。このうち、23はかなり遺存がよいが、他は欠損部も多い。15・25は右袖側から、4・23は左袖側から出土した。15・25は39を、4・23は38を補充する役割を果たした可能性がある。18は中央からの出土で、カマド右側にも散っている。

以上、カマド内の遺物の出土状況をみてきた。出土のあり方の理解として、両袖の保護材という一案を示したが、すべてが保護材というわけではなく、一部は単なる遺棄・廃棄という見方もあり得る。また、カマド保護材とカマド廃棄の祭祀遺物の混在も考えられる。さらに、そうではなく、すべてカマド廃棄の祭祀に伴うものという見方も考えられる。この場合、須恵器甌・甕群がカマド内だけでなく、広域に分布することから、カマドだけでなく、竪穴全体に対して廃棄の祭祀が行われた可能性がある。

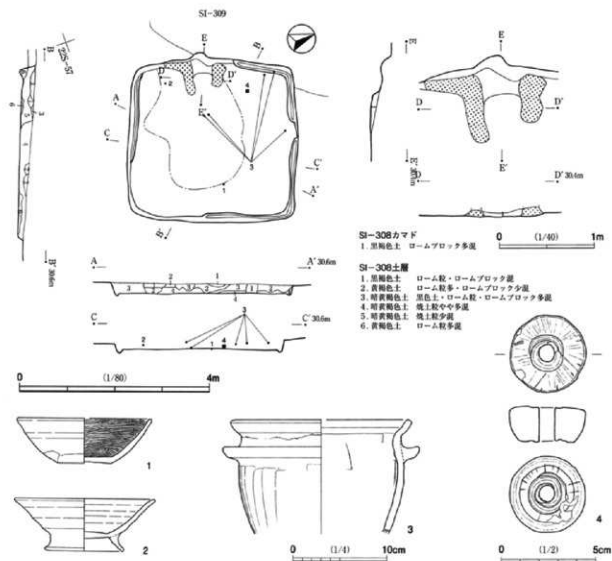
カマド以外の遺物の出土状況をみってみる。床面・下層から出土した遺物をあげると、土師器杯1・5・7・10・11・12・14、須恵器杯24・26・27・28がある。26の遺存はそれほど良好ではないが、他の須恵器杯はかなり遺存がよい。土師器杯の遺存は須恵器杯ほどではないが、14と墨書のある小片12を除いて、比較的遺存がよい。なお、10・11・14も文字・記号をもつ土器である。以上の遺物の平面位置は中央から右側に多く、広く散っているもの(28)もある。出土状況に意図的なものがあるか、断定しがたい。

図示しない土器片の点数は2,867点、重さは24.6kgであり、非常に多い。分布は、南(左前)隅側が少なく、堆積層が薄いことが影響している。その他では多く、とくに右壁側に目立つ。図示した遺物を含め、中・下層から多く出土しており、上層は少ない。竪穴住居焼却にあたり、廃材とともに遺物も廃棄され、その後上層まで埋め戻されたものと考えられる。

SI-308 (第388図, 図版114・287・288・314)

遺跡東部南端の22S区に位置する。細長い台地上の平坦面に位置する。3.4m×3.5mの方形をなし、深さは0.29mである。主軸はN-70°-Wである。西辺やや南(左)寄りにカマドをもつ。カマド部分から北西(右奥)隅付近にかけてSI-309と重複し、本竪穴が切っている。壁溝は南東(左前)隅周辺を除いて、ほぼみられる。出入口ピットは検出されなかった。床面は左前隅でやや低いが、その他はほぼ平坦である。全体的によく固められているが、カマド前から中央部がとくに硬化している。カマドは上部が失われ、床面上10cm程度しか遺存していない。火床部に、赤色化した面はみられない。

図示した遺物は4点である。1はロクロ成形の土師器杯である。底部はヘラケズリが施されているが、底径が小さい。内面はヘラミガキ・黒色処理が施されており、光沢がある。2はロクロ成形の土師器高台付杯である。高台は「ハ」の字状に開き、やや高めである。色調は淡褐色を基調とするが、杯部はやや暗い。3は土師器羽釜である。口縁部はほぼ遺存し、罫(羽)部分も所々で欠損するが、比較的遺存がよい。罫は胴部最上位に貼り付けられたもので、やや歪んで一部に接合痕が目立つものの、よく接着している。罫部を除くと、口縁部が最大径である。器壁は厚く、ずんぐりした作りである。胴部外面は縦方向のヘラケ



第388図 SI-308

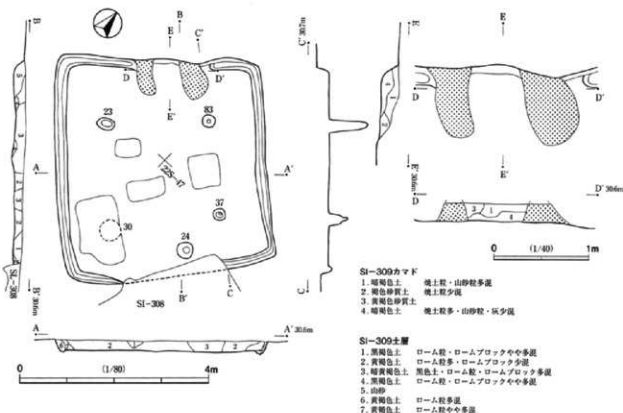
ズリが施され、胴部内面はヘラナデが施されている。口縁部内外面は黒ずみの強い部分が多い。また、口縁部内外面と胴部内面の一部に、ひび割れ・剥離がみられる。4は石製紡錘車である。石材は滑石である。上面・下面の孔周囲は、円を描いて浅く凹んでいる。その外側は放射状の線が多くみられる。側面は丸みをもち、とくに下面側に顕著である。多くの擦痕が全面に周囲している。

1・4は床面からの出土である。2・3は床面からやや浮いているが、堆積土が浅いので、下層出土といえる。図示しない土器片は214点、重さは2.7kgである。図示した遺物を含めて、分布は中央から西側に多いが、堆積土の遺存が西側に厚いことによる。

SI-309 (第389図, 図版114)

遺跡東部南端の22S区に位置する。4.4m×4.4mの方形をなし、深さは0.27mである。主軸はN-44°-Wである。プランは南西(左)壁が長く、やや台形となる形態である。北西辺中央やや北(右)寄りにカマドをもち、南東(前)壁際中央やや右寄りに出入口ピットをもつ。前壁中央部分がSI-308により切られている。また、中央から南(左前)隅隅にかけて、所々に攪乱がみられる。主柱穴が4か所ある。左前側のものは、攪乱によって多く破壊されているが、底部はしっかりしている。主柱穴は竪穴住居跡の中央寄りに位置し、柱穴と壁の間がやや広い。壁溝は全周する。床面はほぼ平坦である。攪乱の影響もあって、硬化面はやや不明瞭であるが、カマド前から中央が若干硬化しているようである。カマドは方形プランからほとんど突出していない。床面まで浅いため、上部は若干、壁を掘り込んでいると思われるが、袖のほとんどは方形プラン内である。袖の内壁はやや赤色化している。火床部もいくつかの焼土ブロックがみられるが、赤変した面の広がりはみられない。

図示した遺物はない。出土した土器片の点数は106点、重さは1.8kgである。位置を記録した遺物は多く



第389図 SI-309

ないが、分布に大きな偏りはない。土器片の内訳は、ロクロ成形の土師器杯、新治窯産の須恵器杯・甕、千葉産の須恵器壺、常総型および在地の土師器壺である。量的には、常総型の甕と新治窯産の須恵器甕が多い。出土遺物から、本堅穴の時期を絞ることは難しい。

SI-310 (第390号、図版114・287・288・316・320・321)

遺跡東部南端の225区に位置する。3.4m×3.7mの方形をなし、深さは0.2mである。主軸はN-53°-Wである。北内辺中央北(右)寄りにカマドをもつ。壁溝は途切れる部分もあるが、ほぼ巡っている。南西(左)壁南隅寄り部分は、巡っていないように図示しているが、写真を見ると、浅くなっているものの、巡っていることがわかる。出入口ピットは検出されなかった。床面の南(左前)隅側は攪乱を受けている。また、床面には3か所のピットがあるが、支柱穴になるものではなく、これらも後世の攪乱と思われる。床面は南側でやや低いが、ほかは比較的平坦である。硬化面は不明瞭である。中央部が硬質であるが、西(左奥)隅や右壁際中央など壁際も硬質であり、範囲をとらえられない。カマドは方形プランからかなり突出している。両袖は遺存しない。

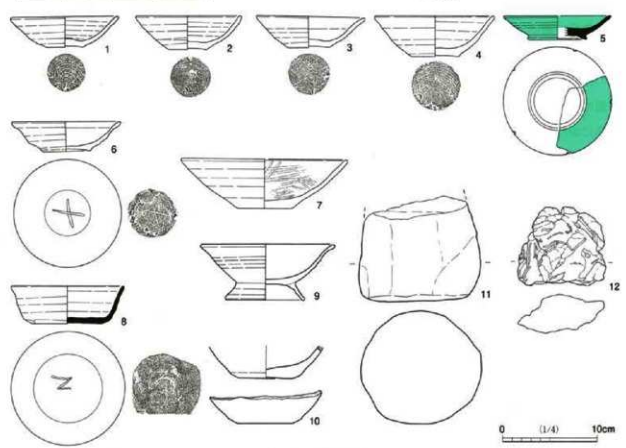
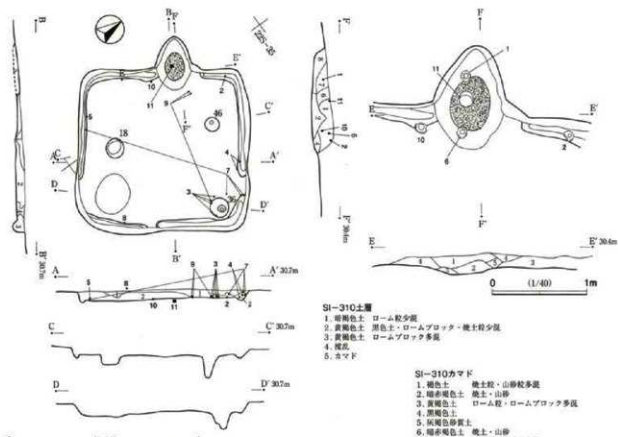
図示した遺物は12点である。1~4・6・7・10はロクロ成形の土師器杯である。1~4・6は底径が小さく、回転系切り難し後無調整の技法で共通する。1~3・6は小振りであるが、4は一回り大きい。7はやや大型の杯である。10も底径がやや大きく、7と同等の大きさかもしれないが、欠損のため不明瞭である。口縁部がごくわずかに遺存している可能性があるが、被熱による器面の荒れが著しいため、判然としない。1・2の口縁・体部はやや内湾している。1・3・4も底部からの立ち上がりは内湾するが、口縁部は、4が直線的、1・3は反外する。遺存のよい土器が多く、1はひび割れがあるだけで、完形である。2は口縁部を小さく2か所欠くが、その他は遺存し割れも少ない。3も口縁部の一部を欠き、遺存部分は細かく割れている。6は口縁部を1/2弱欠くが、遺存部分は割れていない。4は口縁部を1/2程度欠き、遺存部分はやや細かく割れている。6は底部外面に「× (+)」のヘラ書きがある。7はやや大型の杯であるが、口縁部のわりに底径は小さい。7・10の底部は回転系切り難しの後無調整と思われるが、器面が荒れているため、不明瞭である。10は口縁・体部の全周またはほぼ全周を欠損する。体部下位から底部にかけては割れもなく遺存する。欠損部には比較的水平的な部分もあるため、打ち欠きされていると考える。打ち欠きにより、廃棄時点では1~3・6と同様の大きさにされたものと思われる。

5は緑釉陶器輪花小甕である。口縁部周で1/4程度の破片である。口縁部には、小さな凹みが1か所みられる。凹みは本来5か所あると思われる、五輪の輪花である。内面は底部と体部を画す1条の樹線が巡っている。高台内側の底部外面に回転系切り痕がみられる。緑釉は、高台部の内面を除いて、施されているが、一部高台接地部から底部外面にまで及んでいる。断面の色調はやや暗い灰色である。胎土は緻密で、硬質の焼成である。

8は千葉産の須恵器杯である。底部外面に「乙」に似た形のヘラ書きがある。もともとの色調は褐色・一部黒褐色であるが、内面に顕著な赤変・黒ずみがみられ、二次的に火を受けていると思われる。

9はロクロ成形の土師器高台付杯(甕)である。いわゆる足高高台の杯である。杯部・高台部とも一部に欠損があるが、比較的遺存のよい土器である。杯部はやや細かく割れている。

11は土製支脚である。中央から上部を欠損するが、基底部は遺存する。かなり大きな支脚である。12も土製支脚の破片と思われる。繊維を含む粘土塊が焼成されたもので、壁材・屋根材にこのようなものがあるかもしれない。しかし、11も若干の繊維を含むことから、その上部破片と考える。



第390図 SI-310

11はカマド火床部内やや奥側から立った状態で出土した。使用時の原位置をとどめる可能性があるが、カマド構築材が遺存しない状況を考慮すると、カマド廃棄の祭祀に伴い、掘え直されたことも考えられる。この支脚の周囲から、4点の土師器杯(1・2・6・10)が出土している。1は、支脚の後方、火床部のもっとも奥側から出土した。正位か倒位が不明である。2はカマド右袖の外側、壁面上から正位で出土した。11縁部の2か所の欠損は打ち欠きされたものとする。6は火床部前側から正位で出土した。底部外面にヘラ書きがあり、遺存部分が割れていないことから、欠損部は打ち欠きされたものとする。10はカマド左側から、正位で出土した。袖が遺存しないため、カマドとの位置関係が不明である。袖を壊して、その部分に置いたことも考えられるが、2がカマド右袖外側に位置することから、左袖外側のすぐ脇の位置と考えておく。

4点の土師器杯の他に、カマドの右前側床面からは、足高台杯9が出土している。9は11縁・体部の全周が割れているが、体部下部から底部の破片は、カマド前側から出土した。口縁部破片の一部が右前側床面から出土しているが、一部の破片が底部近くから出土しており、意図的な出土状況が断定しがたい。ただし、2・6と似た上器である3も右前側床面から出土している。そのため、9の一部破片と3は、ともに意図的に置かれた可能性も考えられる。なお、3の口縁・体部は細かく割れており、意図的な破壊からしれないが、断定しがたい。

4点の上器器杯はカマド廃棄の祭祀に伴う遺物であるが、9はそのセットに加わる可能性があり、3もその可能性があるかもしれない。

その他の図示した遺物には、とくにカマド廃棄の祭祀に関わる様相はうかがえない。なお、縁軸陶器片5は左壁際奥側床面から出土した。図示しない遺物の点数は390点、重さは2.7kgである。図示した遺物の分布が少ない中央から左前側部分にも分布している。そのほか、図示していないが、軽石が1点出土している。

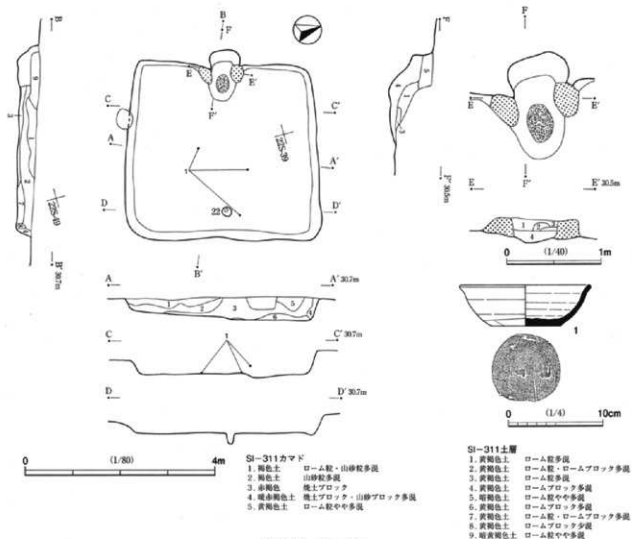
SI-311 (第391図、図版115・288)

遺跡東部南端の22S区に位置する。3.7m×3.9mの方形をなし、深さは0.44mである。主軸はN72°Wである。西辺中央にカマドをもち、東壁際中央に出入11ピットをもつ。壁直下が窪んでいる部分はずわかにあるが、壁溝はほとんど検出されなかった。床面はやや凹凸があり、東側で低い部分がある。ハードルーム層に達し、全体に硬質であるため、とくに顕著な硬化範囲はみられない。カマドは方形プランからの突出がやや弱く、袖と火床部はプラン内にある。袖の遺存は悪く、前側が失われている。また、袖は全体にやや赤色化している。火床部中央は赤変して硬化している。

図示した遺物は、千葉産の須恵器杯1点である。11縁部は1/3弱割の遺存である。口縁・体部はやや細かく割れて接合する。中央から東側の床面・中層から出土した。図示しない上器片の点数は279点、重さは3.9kgである。とくに偏った出土傾向はうかがえない。

SI-312 (第392・475図、図版115・288.313)

遺跡東部南端の22S区で、幅の狭い台地の西側に位置する。主軸長3.3mの方形をなし、深さはもっとも遺存のよいところで、0.76mである。主軸はN36°Eである。西方は緩やかな谷部となるが、地形は本堅穴の右奥側から左前側に向かって下る状況である。SI-338と大きく重複する。北東辺中央にカマドをもつが、若干の山砂がみられる程度であり、崩れている。遺構の状況からは、本堅穴がSI-338を切っていると思われる部分があるが、副軸方向の堆積土の遺存が少なく、やや不明瞭である。カマドの遺存も悪く、



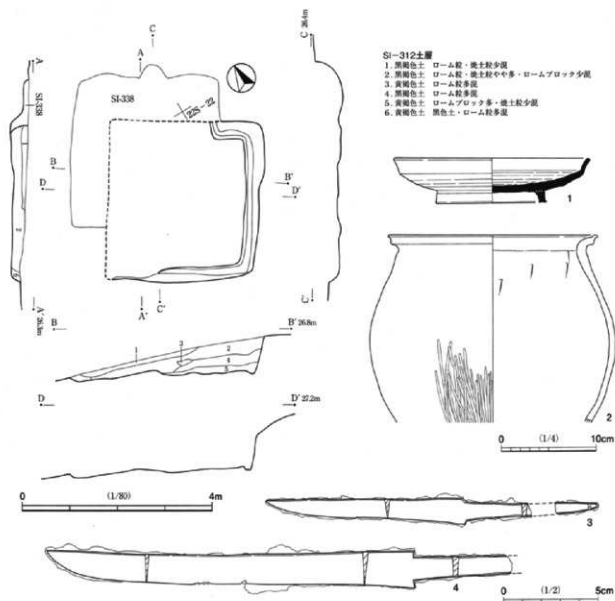
第391図 SI-311

新旧関係は断定しがたいが、本堅穴の方を新しい可能性の高い遺構としておく。

なお、当初はSI-338の1棟分とみでの調査であったが、進捗に伴って2棟と判明したものである。そのため遺物は、すべてSI-338出土の取り扱いをしている。したがって、ここで図示した遺物の注記もSI-338のままである。なお、2棟の出土遺物については、時期差のある2群を認めることができなかつた。両住居の時期差は、あまり大きくないといえる。

本堅穴の遺存は右(南東)壁側と前(南西)壁右寄り、右奥隅部分であり、奥(北東)壁の大部分と左(北西)壁は不明瞭である。壁溝は、壁が遺存する部分は巡っており、全周する可能性がある。出入口ピットは検出されなかつた。床面の深さはSI-338とほとんど差がない。重複の影響でやや凹凸があるが、傾斜はなく、構築当時は比較的平坦であつたと思われる。硬化範囲は不明である。

図示した遺物は4点である。新旧関係が明確でないため、SI-338内に廃棄されたが流入した可能性もある遺物である。1は新治窯産の須恵器高台付盤である。口縁部の数か所を欠くだけで、遺存のよい土器である。1か所から出土したが、やや細かく割れている。2は常輪型の土師器甕である。口縁部外面下部は粘土紐の接合に粗い部分がある。胴部内面上位の所々に、器面の剥離がみられる。胎土は白雲母を多量に含む。



第392図 SI-312

3・4は鉄製品で、3は刀子、4は小刀である。ともに刃部を遺存する良好な個体である。また、切先もともに尖っている。3は茎の一部を欠くが、茎尻は遺存する。4は茎尻を欠損している。4は薄い作りで、一部に錆跡があるが、刃側もおおむねよく遺存する。

図示した遺物の出土層位については、3が床面、1・2・4は中・上層主体である。図示しない土器片については、SI-338と合わせて235点、重さは2.7kgである。本堅穴が新しいとみた場合、遺物の分布は、カマド周辺と中央部にやや多いとみることができる。

SI-313 (第393・394図, 図版115・288・289)

遺跡東部南東端の23S区に位置する。北西から南東に下る緩斜面に立地する。堅穴本体の深い部分は5.7m×6mの方形である。北辺中央にカマドをもち、カマド後方の北辺部分には、張り出した棚状部分がある。その部分まで含めた主軸方向の長さは6.6mである。深さは最深部で1.4mであるが、南東隅は斜面のため流失している。主軸方位はN-17°-Wである。西辺北側がSI-367に切られている。また、張り出し

の隅部分ではSI-314と接し切られている。主柱穴4か所をもつ。出入り口ピットは検出されなかったが、斜面にかかることに起因するものと思われる。壁溝は流矢部分が不明の他は、巡っており、本来全周したものであろう。床面はほぼ平坦である。南壁際から南東隅にかけて、やや下っているが、斜面部でも平坦に構築されていたものと思われる。棚状部分の奥行きは70cm～80cmである。棚状部の底面は確認面からの深さが15cm、床面からの高さが1.2mである。カマド右後方に深さ18cmのピットがある。主柱穴P1・P2の延長上に位置することから、補助柱穴と思われる。しかし、カマドの左後方からは未検出である。竪穴は、カマド側の遺存がよい。煙道部の奥壁は直線的で急傾斜となる。袖の構築材は山砂主体であり、内側は赤色化している。堆積土は、ローム粒・ロームブロックの包含もみられるが、全体的に暗褐色土・黒褐色土主体であり、自然堆積と思われる。

図示した遺物は16点である。1～6は新治窯産の須恵器杯である。1は底部外面に「不」のヘラ書きがある。3はかなり遺存がよい。口縁部の2か所を欠き、そこから大きく2片に割れて接合する。7は須恵器蓋である。灰白色の色調で、ややあまい焼成である。新治窯産と思われる。

8は土師器台付甕である。外面には山砂の付着がみられる。内面はヘラナデが施され、ヘラの当たりが顕著である。器面は褐色味が強く荒れている。

9・10は須恵器高盤（高杯）である。9は白色粒・小石を多量に含み、新治窯産である。10は9よりも緻密な胎土であるが、白色粒・白雲母を含むことから新治窯産と思われる。

11は土師器杯で、非ロクロの製品である。深い椀形の器形であり、須恵器杯群よりも古い遺物の可能性がある。口縁・体部の一部を欠く程度で、遺存がよい。

12は須恵器小型短頸壺である。内面のロクロ目はシャープであるが、胴部外面は消されて平滑である。また、口縁部の器壁が薄く、端整な作りである。胎土には黒色粒が多く、焼成は堅緻である。東海産と思われる。

13は在地の土師器甕で、小型品である。外面は荒れている。また、胴部内面は黒色味が強い。

14は新治窯産の須恵器高台付杯である。底部を遺存するが、口縁・体部は高台際を除いて全周が遺存しない。硯等に転用された可能性が考えられるが、平滑な面はみられない。小石や白雲母を多く含む胎土のためとも思われるが判然としない。

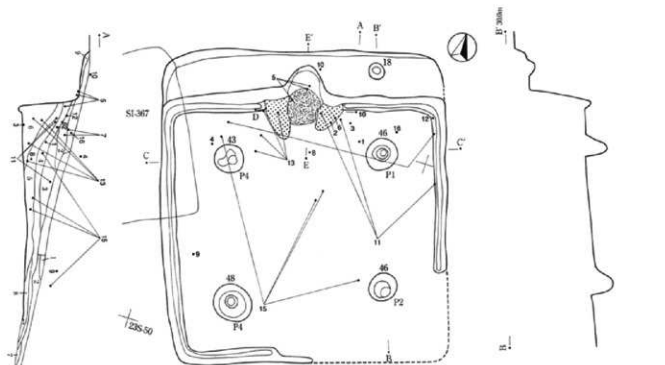
15は新治窯産の須恵器蓋である。胴部内面下部は接合痕が顕著である。底部内面は凹凸が著しい。

16は灰釉陶器耳皿である。折り曲げられた耳部は片側の一部が遺存するが、片側は皿を折り曲げる部分で欠損する。袖は皿の内面と、折り曲げられた耳の外面に掛かっている。底部外面には回転糸切り痕がみられる。胎土は緻密で、色調はやや黄色味を帯びた灰色である。東海産と思われる。

図示した遺物の出土は、カマドのある北側に偏っている。堆積土が厚いことが影響しているが、カマド周辺部には、当初から遺物が多いことも考えられる。出土層位をみると、3が床面、8が下層である。その他の遺物は、13がやや低い位置であるが、概して中・上層からの出土である。3は遺存がよいが、8・13の遺存はよくない。図示しない土器片の数は792点、重さは13.1kgであり、かなり多い。分布の傾向は図示した遺物と同様であるが、北東隅側がやや多い。

SI-314（第395図、図版115・116・289）

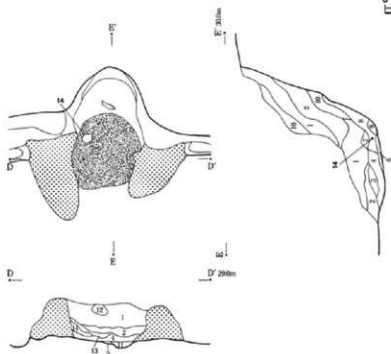
遺跡東部南東端の23S区に位置する。主軸長3.4mの方形をなし、深さは遺存のよいところで0.35mである。主軸方位はN-55°-Eである。北東辺にカマドをもつ。南東側が谷に下る傾斜面のため、流失してい



SI-313土層

1. 厚層色土 ロームブロックやや多量
2. 暗褐色土 ロームブロックやや多量
3. 灰褐色土 山砂粒多量
4. 暗褐色土
5. 褐色土
6. 暗褐色土 ロームブロック・山砂粒やや多量・しまりが有る
7. 黄褐色土 ローム粒多量・しまりが有る
8. 暗色土 ローム粒多量・しまりが有る
9. 明褐色土 ローム粒・山砂粒少量

0 (1/80) 4m

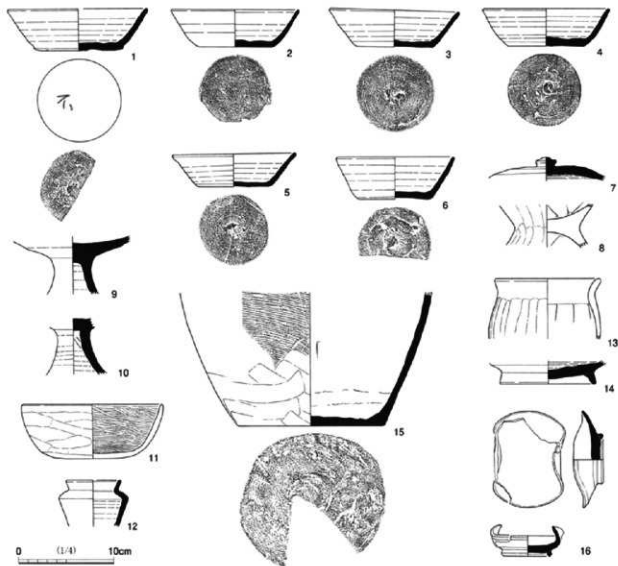


SI-313カマド

1. 灰白色砂質土
2. 暗灰白色砂質土
3. 灰白色砂質土
4. 暗灰白色砂質土
5. 暗褐色土 炭化粒多量
6. 黄土
7. 黄土ブロック
8. 暗灰白色砂質土 黄土ブロック多量
9. ロームブロック・黄土ブロック
10. 灰褐色土 黄土粒・山砂粒多量・しまりが無い
11. 灰褐色土 黄土粒・山砂粒多量・しまりが無い
12. ロームブロック
13. 山砂ブロック
14. 黄土ブロック

0 (1/40) 1m

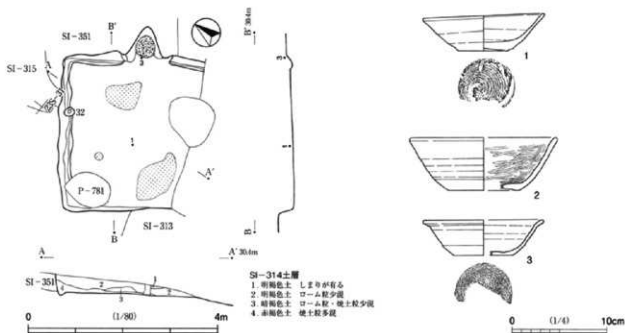
第393図 SI-313 (1)



第394図 SI-313 (2)

る。北東辺側でSI-351を切っている。北隅付近では、SI-315と接する程度の重複があると思われるが、SI-351が間にあるために、不明瞭である。遺構の状況からみて、本堅穴の方が新しい。また、南側でも、SI-313の張り出した棚状部分隅部と接し、本堅穴が切っている。堅穴内の左前（西）隅部にP-781があり、切られている。その他、右（南東）側にも攪乱がある。出入口ピットは検出されなかった。壁溝は、壁の遺存が悪い前（南西）壁側ではみられないが、壁が比較的遺存する奥（北東）壁・左壁で巡っている。左壁の壁溝の中央から北寄りに深さ32cmのピットがある。SI-315に近い位置であり、地盤が軟弱であることから設置された壁柱穴と考える。このピットの北側にもやや浅い窪みがみられたが判然としない。深さ32cmのピットとセットとなる壁柱穴の可能性もある。床面は全体に硬質であるが、中央部が壁側よりもやや硬化している。カマドは方形プランからかなり突出している。袖は壁に山砂が貼り付いている程度しかみられず、遺存が悪い。火床部は赤色化した面がみられる。堆積土下層は焼土粒を多く含み、部分的に集中範囲がある。また、所々に山砂もみられる。

図示した遺物は3点で、いずれもロクロ成形の土師器杯である。1の底部は回転糸切り離した後無調整で

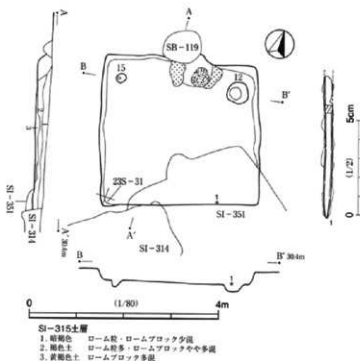


第395図 SI-314

ある。2・3は回転ヘラケズリが全面に施され、切り離し痕跡が消えている。出土位置は、1が中央部の下層から出土し、3はカマド内の確認面上から出土している。図示しない土器片の点数は198点、重さは1.9kgである。左奥（北）隅から中央にかけての部分が他よりやや多く分布するが、堆積土の遺存に左右される面も考えられる。

SI-315（第396図、図版116・308）

遺跡東部南東端の23S区に位置する。3.2m×3.4mの方形をなし、深さは0.3mである。主軸方位はN-20°-Wである。北辺中央やや右寄りにカマドをもつ。南側でSI-351を切っているが、SI-351の方が深い。調査当初、SI-351を検出できなかったため、本竪穴南側の床面・壁を検出できていない。また、南壁西側でSI-314と接する程度に重複するが、その間にSI-351があるため、重複状況が不明瞭である。SI-314の様相から、本竪穴の方が古いと考える。また、カマド煙道側の一部が、SB-119の柱穴によって切られている。出入口ピットは検出されなかったが、SI-351と重複するためであろう。壁溝は巡っていない。北側の



第396図 SI-315

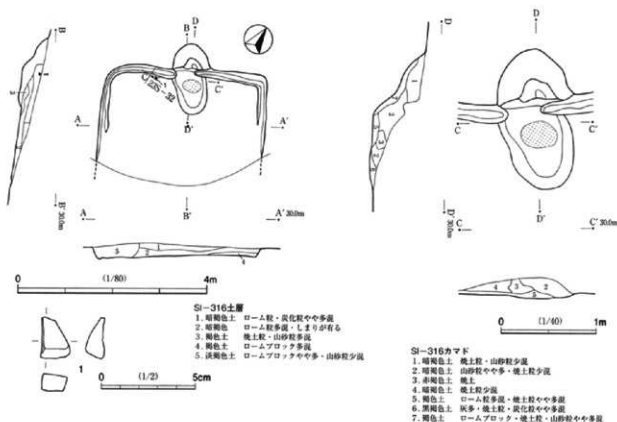
両隅にピットがあるが、主柱穴とは思われない。周囲に掘立柱建物の柱穴等があることから、本竈穴に伴うものか不明である。床面は平坦で、全体にやや硬質である。とくに顕著な硬化部分はみられない。カマドは遺存が悪く、右袖はまったく失われ、左袖も下部が残るのみである。両袖の底面は床面が掘り残されて高まっており、カマドの位置を規定している。火床部は赤色化した面がみられない。

図示した遺物は、鉄製品1点である。棒状の製品で、図示した下端はやや尖っており、そこで終わっている。性格を特定しがたい。想定される南壁際から出土しており、SI-351に伴う遺物の可能性もある。図示しない土器片の点数は189点、重さは1.7kgである。位置が記録された遺物の分布は南側にややまとまってみられるが、SI-351と重複する影響であろう。土器片の内訳は、ロクロ成形の土師器杯・高台付杯、「房総」型・武蔵型・常総型の土師器甕、千葉産の須恵器杯・甕、新治窯産の須恵器杯、東海産の須恵器甕である。土師器高台付杯の中には、足高のものがある。

SI-316 (第397図, 図版117・318)

遺跡東部南東端の23S区に位置する。副軸長3.5mの方形をなし、もっとも遺存がよい部分の深さは0.47mである。主軸方位はN-30°-Wである。北西辺中央にカマドをもつ。北西から南東に下る緩斜面に立地するため、南東側が失われており、出入口ピットは検出されなかった。壁溝は、遺存がよい部分では巡っている。谷部側は壁が流出しており確認できなかった。床面は、北西側から南東側を下っているが、地形の影響を受けており、南東側をやや損なっていると思われる。硬化面は不明瞭である。カマドはきわめて遺存が悪く、両袖とも遺存しない。構築材の山砂は、堆積土中に少量の小ブロックがみられただけである。火床部では顕著な赤色硬化面がみられる。その手前には、灰が多く堆積している。

図示した遺物は、砥石1点である。石材は流紋岩質凝灰岩である。平面図の上部は薄くなって、欠損し



第397図 SI-316

ている。裏面はあまり使用されていないが、他の面は使用されて滑らかである。小口面などに筋状の研ぎ痕もみられる。カマド左側の中層から出土した。図示しない土器片の点数は145点、重さは930gである。内訳は、ロクロ成形の土師器杯、常総型・「房総」型の土師器甕、千葉産の須恵器杯・甕、新治産の須恵器杯である。千葉産の須恵器杯にやや大形の破片がある。また、ロクロ成形の土師器杯の内面に黒色処理されたものがあるなど、9世紀代に属する遺物がみられる。分布に大きな偏りはない。

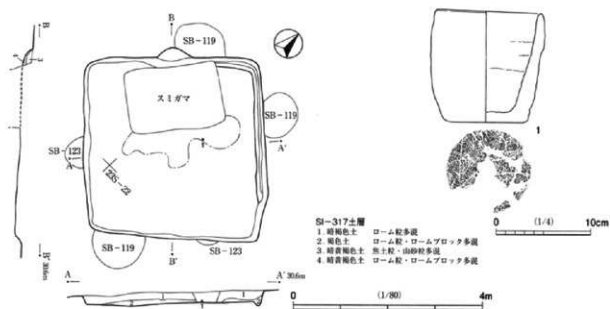
SI-317 (第398図, 図版117・289)

遺跡東部南東端の23S区に位置する。3.8m×3.8mの方形をなし、深さは0.26mである。主軸方位はN-45°-Wである。北西辺中央にカマドをもつが、後世の炭焼窯により破壊されている。また、SB-119・SB-123と重複する。SB-119との新旧関係は不明であるが、土層断面の観察からは、SB-123よりも新しいと思われる。なお、SB-119の底面の高さ和本堅穴の床面の高さは前後している。柱穴は堅穴内にもあるが、床面は遺存している。出入口ピットは検出されなかった。壁溝は北側の壁で巡っているが、南側の壁にはみられない。床面は、カマド周辺が大きく破壊され、前(南東)壁側も掘立柱建物の柱穴の影響を受け、やや凹凸がある。硬化面が中央にみられるが、他遺構の影響で範囲が狭くなっている。床面の高さは、北側から南側の下っている。現地形も北西側から南東側になるが、本堅穴の位置は、まだ傾斜が緩やかな部分である。カマドは方形プランからの突出部分がわずかに遺存する。

図示した遺物は、手捏土器1点である。寸胴の器形で、粘土紐の積み上げ痕が体部内外面に顕著に残っている。底部外面には、木葉痕がみられる。中央部の床面から出土した。図示しない土器片の点数は50点、重さは560gと少量である。堅穴全体から散的に出土している。手捏土器以外の土器の内訳は、ロクロ成形の土師器杯、常総型の土師器甕、千葉産の須恵器杯、東海産の須恵器甕のほか、古墳時代の杯や高坏もみられる。遺物が少量であり、詳細な時期を決定しがたい。掘立柱建物との重複関係や周囲の堅穴住居跡の様相から、古墳時代に属する可能性は低いと考える。

SI-318 (第399・476図, 図版117・289・307・316)

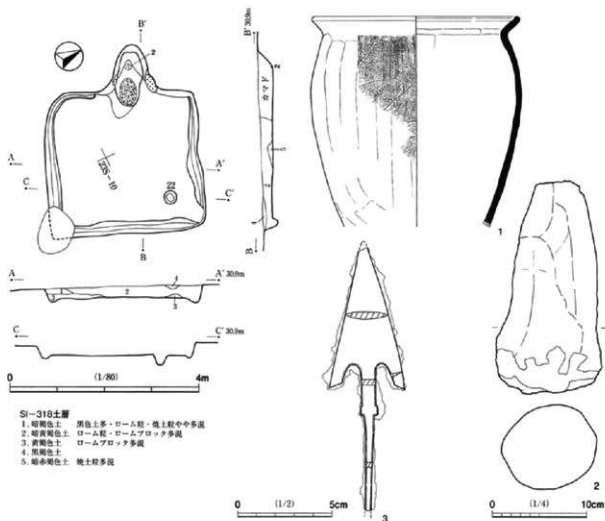
遺跡東部南東端の23S区に位置する。細長く延びる台地上の平坦面に立地する。3m×3.3mの方形を



第398図 SI-317

なし、深さは0.3mである。主軸方位はN-66°-Wである。北西辺にカマドをもつ。SB-115と重複するが、新旧関係は明確でない。別のピットにより、左前(南)隅部分が切られている。壁溝は、カマド右側と東隅部を除いて、巡っている。床面内、右前(東)隅側に深さ22cmのピットがある。主柱穴にふさわしい位置であるが、他の3か所の柱穴がみられない。また、小型の竅穴であるため、竅穴内に主柱穴が存在しない可能性が高い。小柱穴は隅側に寄り過ぎているのが難点であるが、本竅穴に伴うものならば出入口ピットであろう。床面はほぼ平坦である。ハードルーム層に達し、全体に硬質である。カマド前方にSB-115の柱穴があるため、硬化面が不明瞭である。カマドは方形プランからかなり突出している。両袖の遺存は悪く、左袖は痕跡的、右袖も一部が残るのみである。しかし、火床部は赤色化した面が残っている。

図示した遺物は3点である。1は須恵器甕である。胴部外面に縦方向の平行タタキが施されているが、縦方向のヘラケズリにより、ほとんど消されている。また、胴部内面の当て具の痕跡もナデによって消されている。内面のナデの方向は横方向を基調とするが、縦方向もみられる。色調は赤褐色で、器形・調整技法とあわせて、土師器的な土器である。窯で焼成されたものならば、千葉産の須恵器である。2は土製支脚である。基部の一部を欠くが、ほぼ完形で、焼成も良好である。側面は面取りされて、一部に稜が残る。3は鉄鏃である。茎尻側と刃部先端をわずかに欠くが、遺存がよい。広身の短頭鏃で、刃部が長大である。刃部の平面形は長三角形で、深い逆刺をもつ。逆刺は四角形状に突出し、外側の先端がやや尖る。



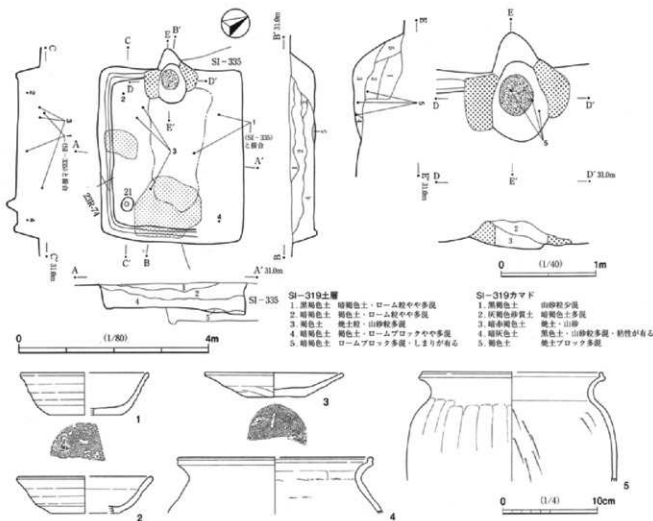
第399図 SI-318

刃部から続く棒状部は短い、茎は欠損部を考慮するとかなり長い。方形（絨状）突起は錆の影響を受けているが、X線写真で観察できる。やや長さがあり、両側ともみられる。

2は火床部奥の底面から立った状態で出土した。1はその周囲を中心にほぼカマド内から出土した。3は左（南西）壁際下層とカマド前方床面から、やや散って出土した。図示しない土器片の点数は345点、重さは4.15kgと、やや多量の遺物が出土している。竪穴全体から出土しているが、カマド周辺が多い。

SI-319 (第400図, 図版118)

遺跡東部東寄りの23R区に位置する。3.6m×3mの縦長の方形をなし、深さは0.55mである。主軸はN-58°-Wである。北西辺にカマドをもつ。右（北東）側で、大きくSI-335と重複し、切っている。ただし、同時に発掘調査を行ったため、右側の壁については、土層断面でしか把握できなかった。壁溝は壁を検出できなかった右側を除いて、巡っている。本来、全周するものとする。左前（南）隅部に深さ21cmのピットがある。隅部に位置することが難点であるが、前（南東）壁間中央にピットがないので、出入口ピットの可能性がある。通常的位置にみられないのは、SI-335と重複する影響かもしれない。SI-335と重複する部分は、SI-335の堆積土上に床面が形成されている。その部分はやや硬化しているが、それだけでなく、ロームブロックが敷かれていると思われる（堆積土5層）。床面は右側がやや下がっているが、その理由として、床面の色調が暗く、やや掘り過ぎの可能性があること、床面が沈んだことの方が考えられる。



第400図 SI-319

本来は、より平坦であったと思われる。硬化面が、カマド前から前壁側にかけてみられる。カマドは遺存があまりよくなく、とくに右前は多く失われている。しかし、両袖内壁の赤色化は著しい。火床部もやや赤色化している。堆積土はローム粒も混じるが、全体に黒褐色土・暗褐色土主体であり、おおむね自然堆積と思われる。ただし、焼土が前壁側中央と左壁側中央に堆積している。焼土は廃棄または焼却に伴うものであろう。

図示した遺物は5点であるが、遺存のよい遺物はない。1・2はロクロ成形の上師器杯である。1の底部割修は回転糸切り跡後、無調整である。2の底部は遺存が悪いが、回転ヘラケズリが施されている。1・2とも火を受けて、赤色化し、1は内面のひび割れが、2は外面の剥離が著しい。3はロクロ成形の上師器皿である。器面はやや荒れている。4・5は常総型の上師器甕である。

図示した遺物には、床面から出土したものはなく、いずれも廃棄されたものが、流入したものである。図示しない土器片の点数は402点、重さは5.8kgである。分布に大きな偏りはみられない。

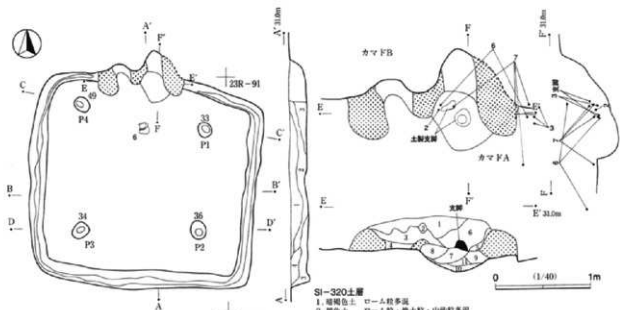
SI-320 (第401・402・476図、図版118・289・307・313)

遺跡東部東寄り23R区に位置する。4.4m×4.7mの方形をなし、深さは0.4mである。プランはやや横長で、西辺が東辺よりも長い形態である。また、西辺はやや丸みがある。主軸はN-5°-Eである。北辺にカマドをもつ。主柱穴4か所をもつが、出入Lビッドは検出できなかった。主柱穴の位置をみると、P4が北西隅部に近く、髻穴のプラン以上にいびつである。柱穴外の空間は、西壁側よりも東壁側の方がやや幅が広い。壁溝は全周する。床面はほぼ平坦で、硬化面はみられない。

カマドは北壁に存在するが、袖が3か所に存在する。東側部分をA、西側部分をBとすると、Aが本髻穴カマドの上体部分である。Aは使用されたことが明白であるが、Bはカマドとして使用されたか不明である。Aの使用痕跡としては、右袖内壁と中央の袖が赤色化していること、その両袖間に焼土が堆積していること、通常の形態をしており、煙道も十分に機能したと考えられること、土製支脚が立った状態で遺存していること、火床部底面が灰のかき出し等に伴い、床面よりも深くえぐれていること、等があげられる。それに対し、Bは方形プランからの突出がわずかであること、火床部分が伏いこと、床面から凹んでいないこと等によって、カマドとして使用されたかどうか疑問である。実用ならば、Aの付帯施設、実用でないならば、カマド祭祀に伴う施設等と考えられる。もし、カマドとして使われたとしても、使用頻度は少ないと考える。また、BからAへ作り替えたが、何らかの理由があってBの一部を残したこと、逆にAからBへの作り替えを企てて中止したことも考えられるが、Bの位置が中央から西隅部に寄ることが難点である。なお、Aの最終使用時の底面は土製支脚底面の高さと考えられる。

図示した遺物は9点である。1～4は新治産産の須恵器杯である。3・4は17縁・体部の一部が欠損するだけで遺存がよい。1・2は1/2以下の遺存で、やや細かく割れている。5・6・7は上師器甕で、5は常総型、6・7は「房総」型の甕である。6はやや遺存がよい、胴部中位の器壁が薄くなること、底径が小さい器形など、一部に武蔵型との共通点がかがえる。7はやや寸胴の器形である。11縁端部はつまみ上げられている。8・9は鉄製品である。8は袋状の鉄斧で、ほぼ定形品である。やや小型の製品である。先端刃部は撥状に軽く開く形態である。柄の装着部は、鉄板を両側から折り返して袋状に作り出し、断面はほぼ長方形である。袋部の深さは約4.5cmで、全長の半分強である。刃先の研ぎ出し範囲は不明瞭である。9は刀子で、刃部の破片である。

6・7はカマド周辺から出土した。主要部分はカマド前方の床面からの出土である。3はカマドA右袖

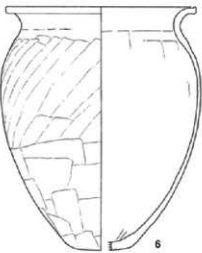
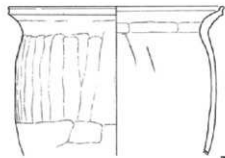
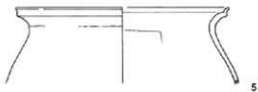
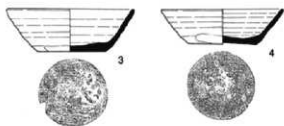
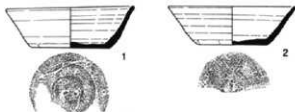
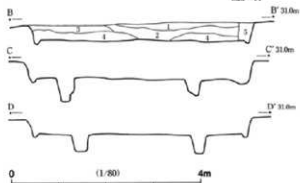


SI-320土層

1. 暗褐色土 ローム粒多量
2. 褐色土 ローム粒・焼土粒・山砂粒多量
3. 暗褐色土 ロームブロック少量
4. 褐色土 焼土粒多量・ローム粒・ロームブロック少量
5. 黒褐色土

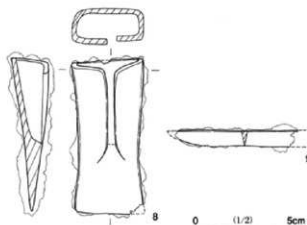
SI-320カマド

1. 暗褐色土 黒色土・焼土粒・山砂粒少量
2. 暗赤褐色土 焼土
3. 黄白色砂質土
4. 灰褐色砂質土
5. 赤褐色土 焼土
6. 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒や中量
7. 褐色土 焼土粒少量
8. 褐色土 炭土粒・炭化粒多量
9. 褐色土 炭化粒多量
10. 褐色土 ローム粒多量
11. 暗赤褐色土 焼土・しまりが無い



0 (1/4) 10cm

第401図 SI-320 (1)



第402図 SI-320 (2)

外側から、4はカマドB左袖周辺から出土した。8は南壁際中央の床面から出土した。1・2・5はやや散って出土している。2の破片の一部は床面・下層からの出土である。2の一部と1・5・9は床面からやや離れた高さからの出土である。図示しない破片の点数は796点、重さは6.5kgである。堅穴全体から出土し、大きな偏りはみられない。

SI-321 (第403図, 図版118・289・290)

遺跡東部南西寄りの22R区に位置する。一辺が推定2.6mの方形をなし、深さは0.13mである。主軸はN-6°-Eである。北辺にカマドをもつ。南

側でSI-365と重複する。調査時にはSI-365よりも新しいと考えたが、出土遺物の状況から、逆とする。床面まで非常に浅いため、重複する部分の壁を検出できなかった。また、西側でSB-105およびP-851と重複し、P-851に切られているが、SB-105との新旧関係は判然としない。西壁も検出できなかった。出入口ピットも見つかっていないが、仮に存在したとしても、SI-365との重複により、確認は難しいと思われる。壁溝は壁が遺存する北壁・東壁で巡り、本来全周することも考えられる。床面は平坦で、硬化面がカマド前から南壁側中央までみられる。浅い堅穴のため、カマドは両袖下部のみの調査である。とくに、左袖は壁側だけの遺存である。右袖内側はやや赤色化している。カマド内には、土製支脚が立った状態で遺存しており、使用時の位置と思われる。火床部はやや凹んでいるが、あまり深くない。赤色化した面はみられない。堆積土は少量のローム粒を含む黒褐色土層である。

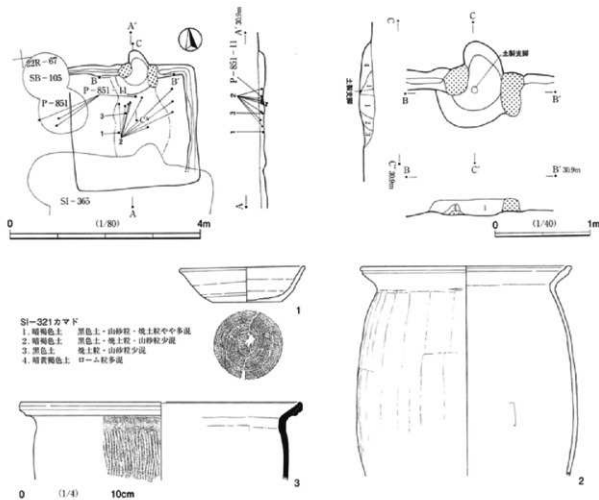
図示した遺物は3点である。1はロクロ成形の土師器杯である。体部下端と底部外面に回転ヘラケズリが施され、底部の切り離し痕はみえない。2は「房籠」型の土師器甕で、胴部がやや寸胴となる器形である。遺存はあまり多くない。3は千葉産の須恵器甕である。二次的に火を受けており、内外面とも赤みが強い。小片で、復元図の大きさに不安がある。

1は中央部床面から出土し、2はカマド前方から中央、北東隅側やや広く散っている。P-851の11は本堅穴のカマド前からも出土しているが、土器様相と出土状況からP-851の遺物とした。堆積土が薄いので、遺物の出土層位は床面から下層である。

P-851からは、比較的多量の遺物が出土しているが、調査時に本堅穴の遺物として取り上げている。両者の遺物は、出土状況および遺物の様相から、区分される必要があると考え、図示した遺物については、本項記載時に分離した。しかし、遺物の注記は調査段階のままであり、図示しない破片については分けていない。また、SI-365の土器片も同様である。土器破片点数はそれらの3遺構分を合わせて435点、重さは3kgである。なお、出土状況からP-851出土遺物をもっとも多い。

SI-322 (第404・475図, 図版119・290・310・314)

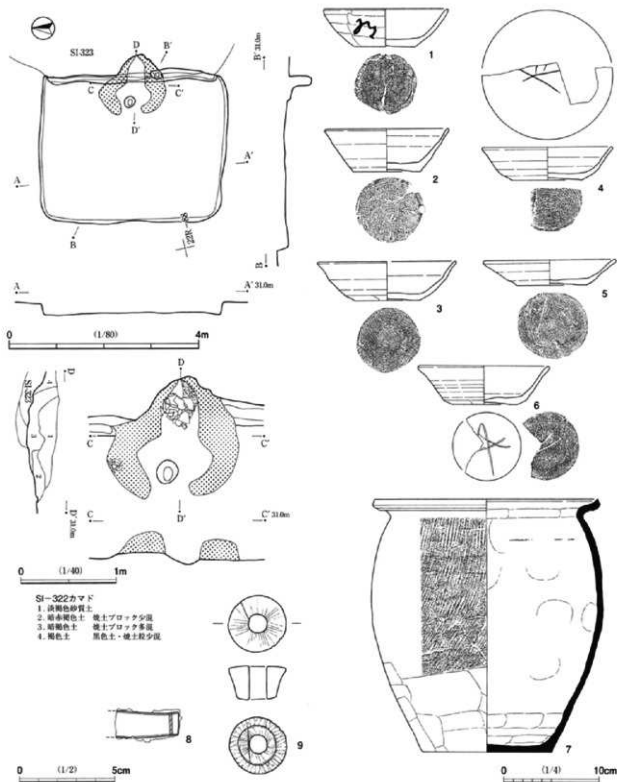
遺跡東部南西寄りの22R区に位置する。3.3m×4mの長方形をなし、深さは0.2mである。主軸方位はN-91°-Eである。東辺にカマドをもつ。東側がSI-323を切っている。出入口ピットは検出されなかった。壁溝は重複する東壁下にみられるが、他壁には巡っていない。SI-323の床面は本堅穴の床面よりも深い



第403図 SI-321

が、東壁の壁溝はSI-323の床面よりも深く掘り込まれている。東壁の壁溝は、壁外がSI-323の堆積土で、軟弱なため、壁を保護する目的で深く掘られたものである。壁溝はカマド下にもみられ、カマドはいったん壁溝が掘られた後、構築されたものである。床面はほぼ平坦である。硬化面は不明瞭であるが、中央が若干硬化しているように思われる。カマドはあまり遺存がよくない。煙道には構築材が崩落したと思われる焼土の大ブロックがみられる。火床部底面は床面よりも深くえぐれている。焼土はその部分には少なく、その上層に多い。火床部に赤色化した面はみられない。堆積土はローム粒を含む褐色土である。竹の根による攪乱が著しい。

図示した遺物は9点である。1～4・6は土師器杯である。1は口縁端部を除いて外面の全面に手持ちヘラケズリが施されており、非ロクロの杯と思われる。1以外はロクロ成形の土師器杯である。1は割れているが、ほぼ完形である。2の遺存は1/2強であるが、3・4・6は1/2以下である。1は「為」と書かれた墨書文字が、体部外面に正位でみられる。また、4は底部内面にヘラ書きがある。文字ではなく、記号と思われる。6も底部外面に記号があるが、焼成前のヘラ書きと焼成後の線刻が混在している。切られている方がヘラ書き、切っている方が線刻である。ヘラ書きは図示した上部で逆V字形の形となっているが、左側の線の下部はヘラ書きをなぞって、刻んでいる可能性がある。「× (+)」のヘラ書きに「× (+)」または1条の線刻を加えたものである。1以外の底部調整をみると、3・6は回転糸切り後、周縁に手持



第404図 SI-322

ちヘラケズリが施され、2・4は回転糸切り後無調整である。3は底部内面の剥離が著しい。5はロクロ成形の土師器皿である。口縁・体部の一部を欠くだけで、遺存がよい。底部は回転糸切り後、周縁に回転ヘラケズリが施されている。

7は千葉産の須恵器甕である。色調は、一部に灰色味を帯びる部分もあるが、褐色の部分が多い。

8は性格不明の鉄製品である。薄い作りで、図示した下側が刃側かと思われるが、不明瞭である。穂柄み具の可能性が考えられるが、判然としない。孔はX線写真でも観察できない。9は石製紡錘車である。石材は滑石である。

7はほぼカマドからまともに出て出土したが、1点中央部に散っている。その他に図示した遺物は、竪穴内の各所から出土している。図示しない土器片の点数は339点、重さは4kgである。分布は、中央から東壁側にやや多い。出土層位は、4・9が床面であるが、確認面から床面まで浅いため、他の遺物もおおむね下層出土としてよいと思われる。

SI-323 (第405・476図、図版119・290・313)

遺跡東部南西寄りの22R区に位置する。4.5m×4.3mの方形をなし、深さは0.4mである。西側壁がSI-322に切られている。北西壁中央部分の床面がわずかに赤色化しており、カマドはこの部分に存在したが、SI-322によってほとんど破壊されている。出入1ピットは検出されなかったが、北西壁にカマドがあるので、南東隅側が出入1口であろう。主軸方位はN-51°-Wである。主柱穴を4か所もつ。壁溝は全周すると思われる。床面はほぼ平坦で、中央が硬化している。堆積土下層は褐色味が強く、上層は黒色味が強い。ローム粒の包含は上層もやや多い。

図示した遺物は8点である。1～3は新治窯産の須恵器杯である。2の底部外面には、「キ」に似た形の2条線と1条線が交差する線刻がある。非常に弱い線刻であり、1条線は底部中央にあるヘラ切り痕が盛り上がっているため、その手前で止まっている。ヘラ切り痕の向こう側は欠損しているため、線刻が繞るかどうかわからない。3点とも、ロクロ目が概して弱い。とくに3は平滑である。4は新治窯産の須恵器盤である。底部中央まで遺存していないが、つまみがあるとなれば調整の痕跡が残ると思われる。器形とあわせて、蓋ではなく無台の盤とした。

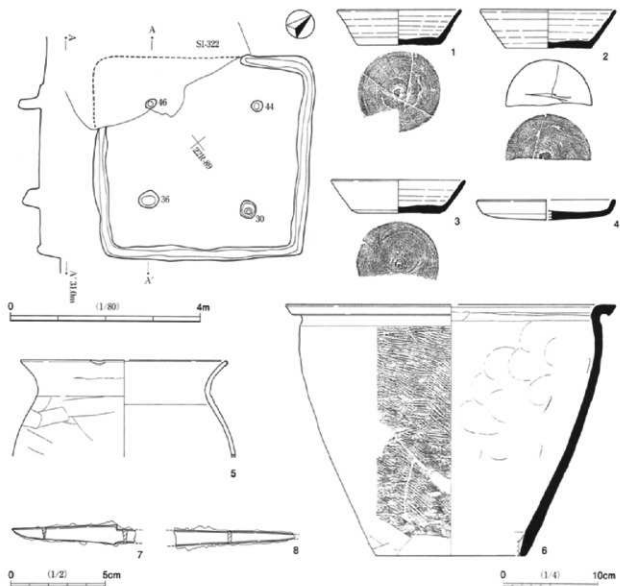
5は土製型製の土師器である。口縁部は1/2弱遺存する。6は新治窯産の須恵器碗である。1/2程度遺存するが、二つのまともに分かれて接合はしない。内面はヘラナデ・ナデが施されて、当て具の痕跡が残っている。

7・8は鉄製品で、刀子である。7は切先から関付近まで遺存する。8は茶部分である。8がやや長い。7と8は同一個体かもしれない。

図示した遺物のうち、6は竪穴内に広く散っている。その他の遺物は竪穴内の各所から出土している。出土層位は、概して床面よりも高い位置である。破片の一部が床面から出土しているものもあるが、他の破片は浮いている。7と8は出土の高さが同じであるが、平面位置は離れている。図示しない土器片の点数は593点、重さは5.7kgである。図示した遺物と合わせて、竪穴全体から出土し、大きな偏りはない。

SI-324 (第406図、図版119・290)

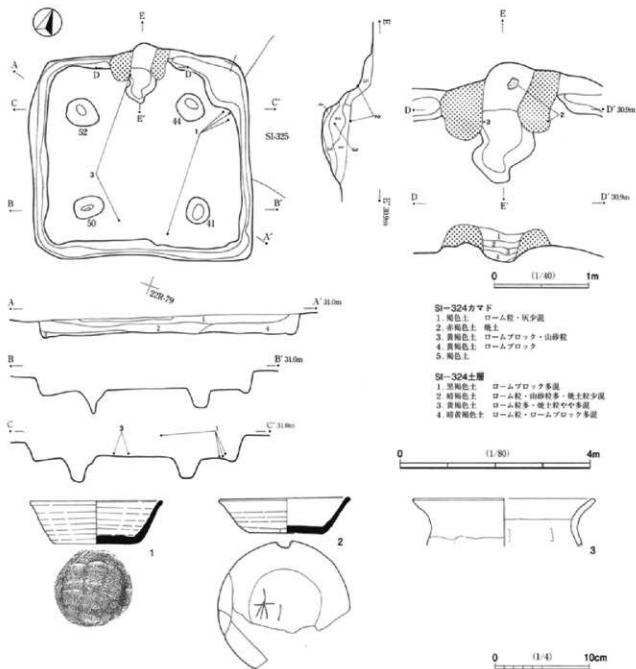
遺跡東部南西寄りの22R区に位置する。4.3m×4.6mの方形をなし、深さは0.32mである。主軸はN-28°-Wである。北西隅にカマドをもつ。北東側でSI-325と重複する。調査時にはSI-325よりも新しいと考えたが、遺物の様相からは明確に断定することはできない。主柱穴4か所をもつ。出入1ピットは見つからなかった。壁溝は全周する。北東隅部の壁溝が広がっているが、深い掘りかた底面を露呈した影響であろう。実際の壁溝はより幅が狭く、床面が広がる。本竪穴の隅部は、竪穴掘削に際して、中央部よりも深く掘り込まれ、その上に貼り床が施されて、床面が形成されている。そのため、隅部床面の把握が難しく、北西隅・南西隅も中央より低く発掘されている。隅部の床面も本来は中央と同程度の高さで、床面は



第405図 SI-323

平坦と思われる。床面中央は硬化しているが、範囲がやや不明瞭である。カマドは方形プランからあまり突出していない。両袖内壁は赤色化している。火床部下の底面は、掘りかたや灰のかき出しのため深い。焼土を多く含む層は底面よりも高い位置に堆積している。

図示した遺物は3点である。1・2は新治産産の須恵器杯である。1は比較的遺存がよいが、やや細かく割れている。2は底部外面に線刻がある。図示した左側のものは「木」に似た形であるが、文字ではなく、条線の交差を意図した記号と考える。その右側のものはヘラケズリによる線の可能性があるが、線刻の可能性の方が高いと思われる。遺存は比較的よい。大きく遺存する破片の口縁端部が小さく欠けているが、出土状況を考慮すると、打ち欠きされたものと思われる。さらに大きな破片から続く2片の破片も接合部が弧状を呈しており、打ち欠きされた可能性がある。しかし、欠損して遺存しない部分については、当初からのものが断定しがたい。なお、線刻は割れ口の手前で止まっているように思われるが、欠損部にかすかにつづいていくようである。割れ口付近が擦れているため判然としにくい。



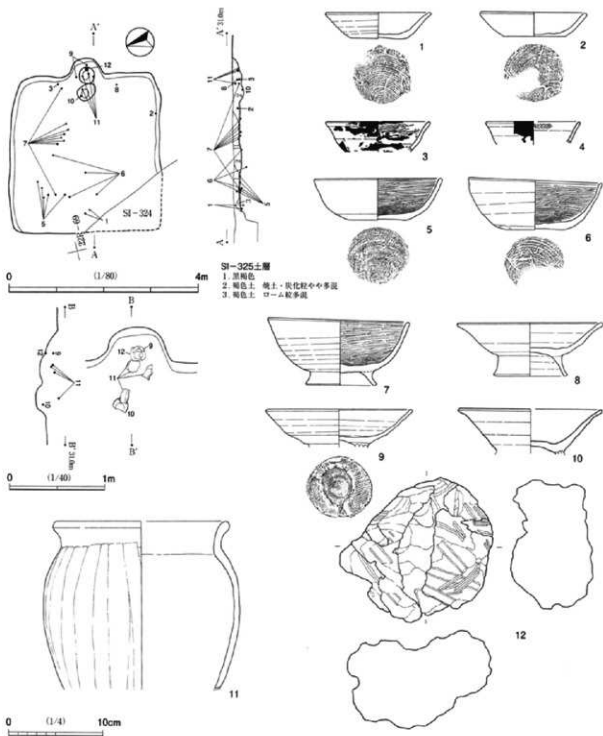
第406図 SI-324

3は武蔵型の土師器甕である。口縁部の小破片を復元・図化したものである。内面に数条の筋があるが、砥石転用の痕跡か後世の傷か判然としない。

2はカマド奥壁の上位から正位で出土した。カマド祭祀関係の遺物と思われる。1・3はともに広く散って出土した。1の出土層位は下層から上層におよび、3は下層である。図示しない土器片の点数は724点、重さは5.5kgである。

SI-325 (第407図、図版120・290・291・320)

遺跡東部南西寄りの22R区に位置する。3.3m×3.1mの方形をなし、深さは0.15mである。主軸はN-102°-Eである。東辺にカマドをもつ。南西(右前)隅側でSI-324と重複する。出土遺物の様相から、本



第407図 SI-325

竪穴の方が新しいものと考えられる。重複部分の床面・壁等は検出できなかった。壁溝・出入口ピットも検出されなかった。床面はやや凹凸があるが、おおむね平坦である。中央がやや硬化していると思われるが、やや不明瞭である。カマドの両軸はまったく遺存していない。火床部底面は突出部とその手前に2か所の凹みがみられるが、赤色化面は不明瞭である。

図示した遺物は12点である。竪穴の規模・堆積土の薄さを考慮するとかなり多い。1～6はロクロ成形の土師器杯であるが、1・2は小皿ともいえそうな小型のやや浅い土器である。逆に5・6は大振りの器

形で、口縁・体部が丸みをもつ碗形の上器である。1・2と5・6は口径や器高に差があるが、底径で差は少ない。いずれも底部調整は回転糸切り難し後無調整である。3・4は小型の土器と思われるが、小片から復元図化したものである。漆容器または漆パレットとして使用されたもので、漆が内外面に付着している。3～6は内面に黒色処理が施されている。1・2・5・6は比較的遺存がよい。5・6の内面は部分的に黒色ではない部分があり、二次的に火を受けて炭素が飛んだのであろう。外面もかなり黒ずんでいるが、当初はもっと黒い部分が多かったと思われる。

7～10はロクロ成形の上器器高台付杯である。7は高台の高さが低く、杯部は碗形である。8・9・10は足高高台の杯である。杯部の体部は直線的であるが、8・10は口縁端部で外反する。なお、9・10は高台が欠損するが、8と同タイプであろう。高台部が剥離した10の杯部底部外面には、回転糸切り痕が口縁まで残っている。高台が貼り付けられた後は、ヨコナデが施されるため、8・10の底部外面には、糸切り痕がみられない。7も糸切り痕がみられないが、同様の状況であろう。7は内面にヘラミガキが施され、滑らかであるが、10の器面は荒れている。

11は「房輪」型の上器器甕である。器壁が厚く、重量感のある作りである。口縁端部は肥厚している。胴部内面の一部にロクロ目状の凹凸があり、ロクロ成形された可能性も考えられる。胴部外面にタタキ目の痕跡はみられない。色調は赤褐色である。

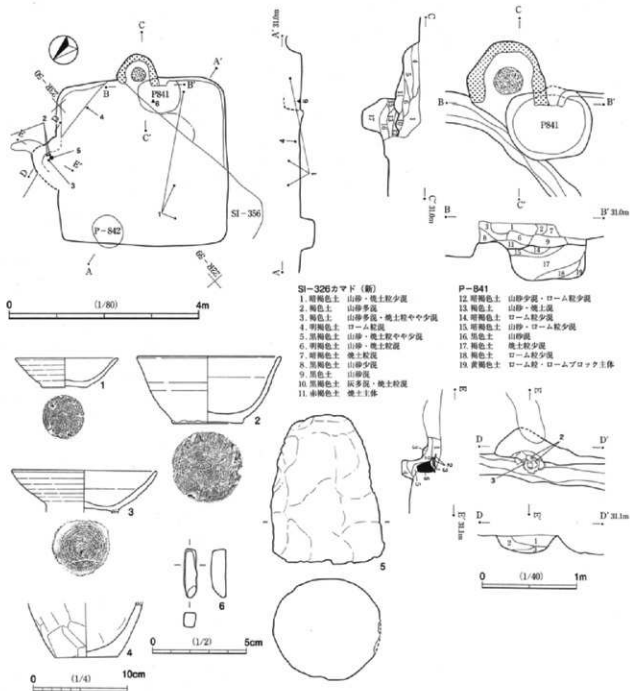
12は土製品である。焼成された粘土塊で、繊維を多量に含む、大きなかたまりであるが、欠損部があると思われる。現状ではやや不整な形であるが、カマドから出土しているため支脚とする。

9～12はカマド内から出土している。12は突出部奥側から出土し、9の主要部分は12の上から、倒れて出土した。11は12の手前から出土し、10は11の一部破片の16cmから正位で出土した。カマド周辺では、8がカマド右側の床面から、3はカマド左側の床面から出土した。その他の遺物は、出土位置不明の4を除いて、竪穴内の各所から出土した。7はかなり広く散っている。図示しない土器片の点数は395点、重さは2.8kgである。確認面から床面まで浅いため、出土遺物はすべて下層出土といえよう。

SI-326 (第408図、図版120・291・318)

遺跡東部南西寄りの22R区に位置する。3.6m×3.6mの方形をなし、深さは0.15mである。南東辺中央と北東辺中央にカマドをもつ。遺存状況から、南東カマドが付け替え後の新カマド、北東カマドが旧カマドである。カマド付け替え後の主軸方位はN129°E、付け替え前の主軸方位はN39°Eである。SI-356と大きく重複し、本竪穴が切っている。SI-356の床面は本竪穴よりも深く、本竪穴の床面はSI-356の堆積土上に形成されている。しかし、本竪穴の平面図はSI-356とともに図化したため、重複部分の床面・壁等を図化していない。ただし、SI-356発掘前の写真を撮影したため、ある程度の様相をうかがうことができる。また、P-841・P-842と重複し、P-841を切っている。P-842との新旧関係については、本竪穴の方が新しいと思われる。出入口ピットは検出されなかった。壁溝を図示していないが、写真や土層断面図を見ると、左(北東)壁の大部分と前(北西)壁の一部に存在すると思われる。断定しがたいが、重複部分も地盤が弱いため、壁溝が存在した可能性が考えられる。床面はほぼ平坦で、中央に硬化面がみられる。また、壁側の床面も中央ほどではないが、やや硬化している。床面は中央部を主体として、ローム粒・ロームブロックの含有が多く、貼り床が施されている。貼り床層はP-841の上部にもみられる。

新カマドは方形プランからほとんどの部分が突出している。遺存は下部にとどまるが、山砂が突出部壁の内側に連続した状態でみられる。内壁は赤色化しており、火床部も良く焼けた面がみられる。なお、カ



第408図 SI-326

マドの右前方には、P-841があるが、カマドはその上に構築されている。旧カマドは付け替え時の撤去により、まったく遺存せず、山砂が堅穴内にわずかにみられる程度である。方形プランから大きく突出するが、SI-356と重複する部分は検出されていない。堅穴の堆積土はローム粒・ロームブロックを多く含む暗黒褐色土である。

図示した遺物は6点である。1・2はロクロ成形の土師器杯である。1は中世以降のカワラケと近似している。小型の杯で、底径も小さい。底部調整は回転糸切り後無調整である。そのため、底部はやや突き出ている。2は深い器形であり、椀または鉢的な土器であるが、広い意味で杯としておく。底部は全体的

に突出している。回転糸切り痕が残るが、ナゲおよび器面の磨耗のため、薄れている。器面は底部だけでなく、全体に荒れており、色調もやや褐色味が強い。3はロクロ成形の上脚器高台付杯である。高台部は、一部の杯底部際を除いてほぼ欠損している。杯部はほぼ遺存するが、口縁・体部の一部が欠けている。打ち欠きされた可能性があるが、上器がもろくなっているため、断定しがたい。器面は荒れており、外面は赤色化している。二次的に火を受けた痕跡が明瞭である。

4は「房籠」型の土師器甕である。底部周辺の破片で、やや小型の甕である。胴部外面のヘラケズリが粗く、器壁の厚さが不均一である。

5は土製支脚で、完形である。径が大きく、重量感がある。焼成は良好で、あまりもろくない。

6は用途不明の石製品で、石材はチャートである。方柱状の形態で、図示した左図の両側面を除いて研磨され、平滑である。研磨された面の色調は黒色である。両側面も比較的平坦であるが、研磨が十分でなく、黄灰色の部分が多い。

旧カマドは遺存状態がよくないが、遺物は比較的良好に遺存するものがみられる。出土状況を見ると、5はカマドの奥側から倒位で出土している。5の上には3が正位で乗り、その上からは、2も出土している。3の被熱状況および2・3の出土状況から、2・3は支脚に転用されたもので、5とセットであった可能性がある。しかし、5が倒位であることから、2・3・5が支脚のセットであったとしても、納め直されて、最終的にはカマド祭祀に使われたものと考えられる。

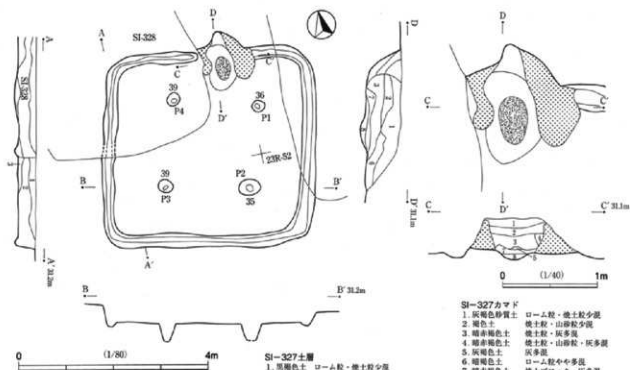
1はやや広く散って出土した。床面からの出土ではないが、堆積上が薄いため、下層出土としてよい。6は床面出土であるが、平面位置はP-811内であり、P-841に関わる遺物の可能性もある。なお、図示した遺物のうち、1・6を除く4点はSI-356出土遺物として取り上げられたものであるが、土器の示す年代観から、本竈穴の出土遺物とした。とくに2・3・5は本竈穴で使用されていたものが、旧カマドから新カマドへの付け替え時または竈穴の廃棄時に遺棄されたものである。ただし、遺物の注記は調査時のままであることを断っておく。図示しない土器片の点数は297点、重さは2.7kgである。分布に大きな偏りはないと思われるが、そのなかには、SI-356出土遺物がある程度混じっている。

SI-327（第409・476団、図取120・291・318）

遺跡東部東寄りの23R区に位置する。4.2m×4.5mのやや横長の方形をなし、深さは0.35mである。主軸はN-9°-Eである。北辺にカマドをもつ。北西側がSI-328に切られている。また、東壁際から北東隅部にかけて、攪乱を受けている。この攪乱は比較的新しいものと考えられたため、後世の攪乱としておく。壁溝は全周する。主柱穴4か所をもつが、出入口ピットは見つからなかった。主柱穴内の面積は狭く、擁壁の空間が広い。床面はほぼ平坦である。硬化状況は不明である。カマドは北壁のやや右（東）側に位置する。左軸はSI-328に切られて、遺存が悪い。両軸内壁は赤色化する部分がある。カマドの下方、軸と8層の下には、ローム粒・ロームブロックを含む黒褐色土が10cm～20cm程度堆積している。カマドの作り替えに伴って埋めた土層か、掘りかたを埋めた土層である。堆積土は黒褐色土主体で、床面際を除いて、ローム粒の包含も少ない。自然堆積と思われる。

図示した遺物は7点である。1・2は非ロクロの土師器杯である。器形は異なるが、ともに内面にヘラミガキが施されている。1は外面も比較的滑らかであるが、2の外面はやや荒れている。

3は新治窯産の須恵器甕である。遺存がよく、欠損部は口縁部の一部にとどまる。接合しているが、その反対側の口縁部の一部が割れている。その他には割れていない。その部分の近くの天井部外面に、線刻

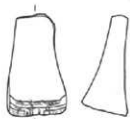
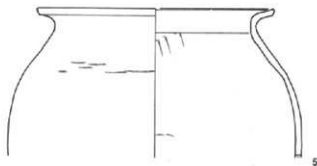
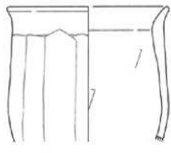
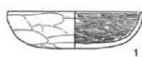


SI-327土層

1. 黒褐色土 ローム粒・焼土粒少混
2. 黒褐色土 ロームブロック多混
3. 黒褐色土 ローム・ローム粒多混

SI-327カマド

1. 灰褐色砂質土 ローム粒・焼土粒少混
2. 褐色土 焼土粒・山砂粒少混
3. 暗赤褐色土 焼土粒・灰多混
4. 暗赤褐色土 焼土粒・山砂粒・灰多混
5. 灰褐色土 灰多混
6. 暗褐色土 ローム粒中多混
7. 暗赤褐色土 焼土ブロック・灰多混
8. 赤褐色土 焼土・焼土ブロック混



0 (1/4) 10cm

0 (1/2) 5cm

第409図 SI-327

がみられる。線刻は中心側から1線に向かう3条線と、そのうちの1条にはほぼ直角に接する1条線である。その1条線は2条の刻線と交差して、外側の刻線に続く意図があったと思われる。しかし、交差する意図があった刻線は、回転ヘラクスリによる砂粒の動きのためにできた沈線にかかって、刻まれない部分がある。線刻は割れて接合した部分と近く、その部分と欠損部は、打ち欠きされた可能性があると考えられる。

4・5・6は土師器甕である。4・6は「房総」型の甕で、4は小型品、6もやや小型の土器である。6は口縁部と胴部のくびれが少ない寸胴の器形である。5は常総型の甕である。

7は砥石で、石材は流紋岩質凝灰岩である。研ぎ減りして薄くなった部分で割れて、上部は欠損する。その部分の小口面の再使用は判然としない。他の面は使用痕が明瞭で、側面は滑らかである。厚い小口面は筋状の研ぎ痕が縦横にみられる。筋状の研ぎ痕は、左上側の裏面にも斜方向にみられるが、小口面より浅い。

図示した遺物のうち、3は右溝部のほぼ床面から出土した。正位か倒位か不明である。2・4・6はカマド右側周辺から出土している。2・6は下層出土であるが、遺存のよい土器ではない。4は大部分が上層出土で、平面位置はカマド右袖上である。7は下層出土である。1・5の一部は上層から出土している。図示しない土器片の点数は44点、重さは400gで少量である。

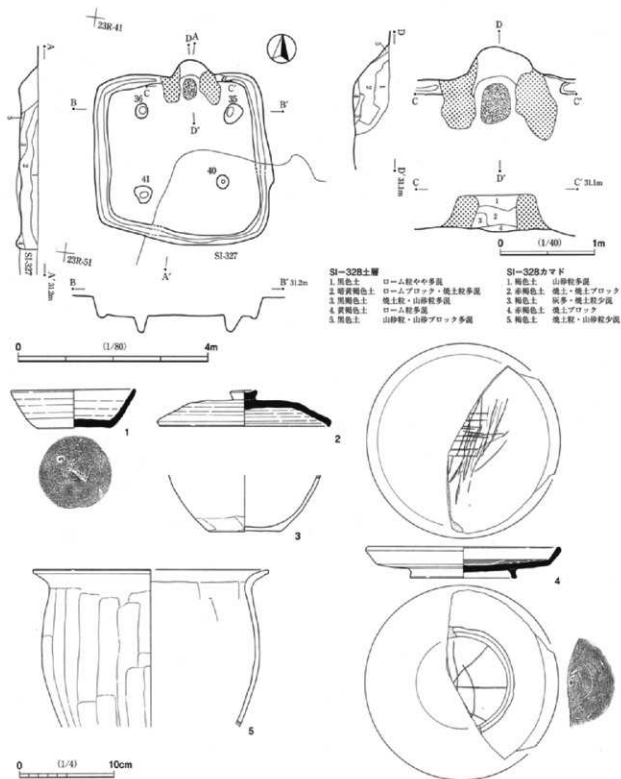
SI-328 (第410・476図、図版120・291)

遺跡東部東寄りの23R区に位置する。3.6m×3.7mのやや不整形な方形をなし、深さは0.35mである。土輪はN-11°-Wである。北辺にカマドをもつ。南東側がSI-327を切っている。壁溝は全周する。主柱穴4か所をもつが、出入口ピットは検出されなかった。主柱穴間はやや台形的な形態である。南東側の主柱穴はやや北側に寄っており、南東隅部とは距離がある。南東隅部がやや張り出しているの、逆行する位置関係である。床面はほぼ平坦である。硬化状況は不明である。カマドはやや右(東)側に寄っている。両袖内壁は、かなり赤色化している。

図示した遺物は5点である。1・2・4は新治窯産の須恵器で、1は杯、2は蓋、4は高台付盤である。1は底部が遺存するが、口縁・体部の遺存はやや少ない。2・4の遺存もあまり多くない。2は天井部外面に火押痕がみられる。4は底部内外面に線刻がある。底部内面のもは、多数の条線が縦横に交差している。全体に深い刻線ではないが、図示した横方向のものはやや強く、縦方向の一部はやや弱い。縦線は、とくに外側部分が、引っかき傷のような状態になっている。線刻は欠損部分に続き、底部内面が広く使われたのであろう。いわゆる九字切りと類似する線刻である。底部外面は5条の線がみられる。不整だが、五芒星を意図した可能性がある。

3・5は「房総」型の土師器甕である。3は器壁がやや薄い点で武蔵型の甕的である。また、胴部外面の調整は、下位部分であるが、ナデにより砂粒が沈められている点で常総型甕と類似性が認められる。やや折衷的な様相であるが、小振りで丸みのある器形や、胴部外面・底部外面のヘラクスリ調整から、「房総」型の甕と考える。

図示した遺物のうち、4はカマド左側の中間層から出土した。堆積土が埋め戻されていれば、出土位置に祭祀的な様相も考えられるが、判然としない。4も含め、図示した遺物の遺存はあまりよくなく、出土層位もおおむね床面からは浮いている。図示しない土器片の点数は198点、重さは2kgである。出土遺物は、概して廃棄されたか、流入したものとと思われる。



第410図 SI-328

SI-329 (第411図, 図版121・291)

遺跡東部東寄りの23R区に位置する。3.4m×3.7mの方形をなし、深さは0.4mである。主軸はN-59°-Wである。北西辺中央にカマドをもつ。主柱穴4か所をもつが、出入口ピットは見つからなかった。壁溝は全周する。東(右前)隅部がピット状の遺構により切られているが、床面までは達していない。床面はほ

は平坦である。中央部がやや硬化しているが、壁脚との差はそれほど顕著ではない。カマド両側の構築材は山砂主体である。右袖内壁は赤色化した面が残る。火床部底面も赤色化した面がみられ、その奥側からは上製支脚が立った状態で出土した。原位置をとどめるものである。堆積上はロームブロックを含むが、黒褐色土主体であり、自然堆積と思われる。

図示した遺物は3点である。1は新治窯産の須恵器杯である。底部外面にヘラ書きがあり、欠損部に続くが、現状では片仮名の「キ」または「サ」に似た形の記号である。「キ」の向きでみた場合、縦線が横の2か所線を切っている。なお、記号は焼成前のヘラ書きと思われるが、焼成があまく、焼成後の線刻との区別がやや不明瞭である。

2は「房総」型の上師器甕である。I線部から胴部上位までは比較的良好に遺存する。内面はひび割れや剥離が著しい。また、全体に赤みも強い。

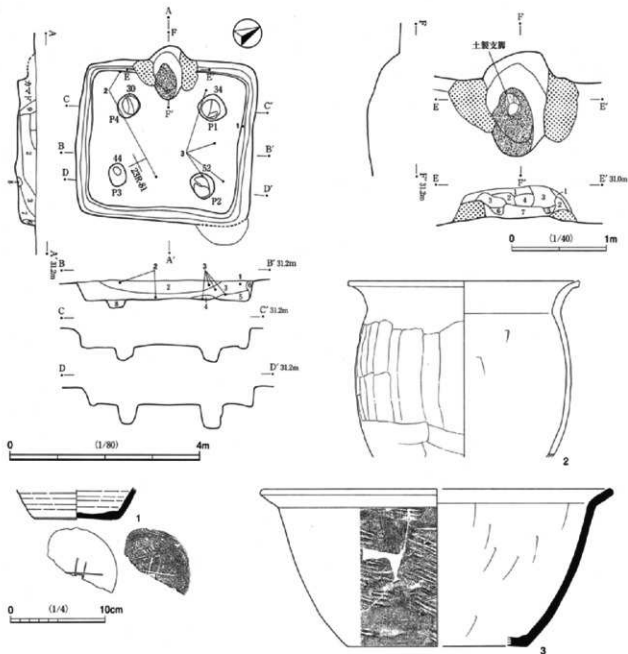
3は新治窯産の須恵器甕である。バケツ形の甕であるが、口径が大きい割に器高が低く、かなり扁平な器形である。胴部外面には、横やや斜め方向に粗い平行タタキが施されている。胴部内面はヘラナデ・ナデが施され、当て具痕がかなり弱まっている。

図示した遺物のうち、2の主要部分は前側の支柱穴P2・P3間の床面から倒位で出土した。1の出土層位は上層、3は床面から上層にわたり、ともに廃棄されたものであろう。2もほぼ床面から出土しているが、廃棄されたものと思われる。図示しない土器片の点数は393点、重さは3.2kgである。壁穴全体から出土しており、分布に大きな偏りはない。

SI-330 (第412図、図版121・291)

遺跡東部東寄りの23R区に位置する。3.1m×3.4mの方形をなし、深さは0.34mである。軸軸はN-45°-Wである。北西辺やや右寄りにカマドをもつ。支柱穴4か所と出入口ピットをもつ。東(右前)隅部がSB-126とわずかに重複している。新旧関係は明確でなかった。壁溝は全周する。床面は前側が奥側よりもわずかに低い。なお、南東方向に谷があり、確認面も南東にやや下る。床面中央部はやや硬化している。カマド両側の構築材は山砂主体である。火床部底面は顕著に赤色化した面はみられず、床面からはそれほど凹んでいない。堆積上はローム粒を多く含むが、暗褐色土主体である。ロームの包含が多いのは、地形の影響かもしれない。

図示した遺物は3点である。1は新治窯産の須恵器杯である。大型で深い器形である。主要な欠損部はI線・体部のほぼ対向する2か所である。1か所はやや小さく、もう1か所はやや大きい。底部は遺存する。遺存部分の片割半分は細かく欠け、片側は大きく遺存する。破損状況が意図的である可能性も若干考えられるが、断定しがたい。2・3は手捏土器の範疇に入るが、ややいいない作りの土器である。手捏土器の下に器種名をあてはめるならば、2は杯または椀、3は鉢となる。2はI線・体部の一部が欠損するが、比較的良好に遺存する。欠損部の割れ口は不整な蓮台形状である。遺存部分は2片の接合からなり、1片は大きく、もう1片は小さい。小さい方の割れ口は「U」字状で、欠損部から続く。3はやや粗かく割れて、欠損部分もやや多い。2・3とも口縁・体部外面に接合痕がみられる。2の底部はヘラケズリが施され、3の底部はナデが施されている。ともに木葉痕はみられない。3の外面は凹みがあるが、内面はヘラナデが施されて、比較的滑らかである。2は器面全面が荒れて、剥離も多い。色調は全体に赤みが強く、黒ずみも底部・体部下位外面の一部にみられる。また、外面の一部はやや灰色味を帯びている。火を長期に受けたものと思われる。

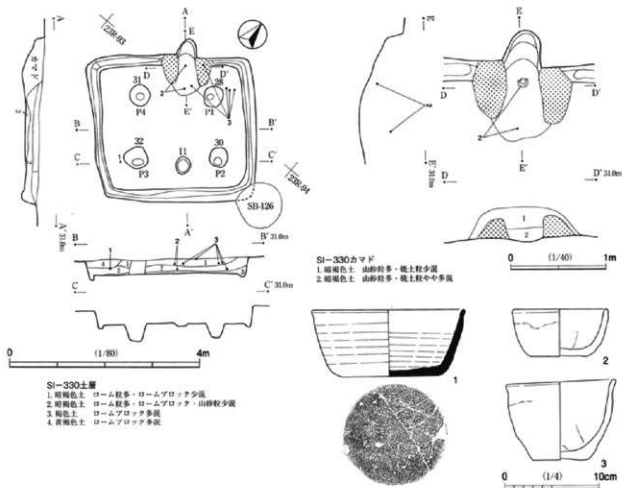


- SI-329土層
1. 褐色土 焼土粒極少
 2. 黒褐色土 ロームブロック・炭化粒やや多量
 3. 黒褐色土 ロームブロック・焼土粒多量
 4. 褐色土 ローム粒・焼土粒多量
 5. 黒褐色土 ローム粒・焼土粒少
 6. 黄褐色土 ローム粒多量
 7. 黒色土 焼土粒多量
 8. 黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量
 9. 黒色土 焼土粒・山砂粒・炭化粒やや多量

- SI-329カマド
1. 褐色土 ローム粒・焼土粒極少
 2. 褐色土 山砂粒多量
 3. 褐色土 焼土粒多量
 4. 黄褐色土 ロームブロック多量
 5. 褐色土 焼土粒少
 6. 灰色土 灰多・焼土粒少
 7. 黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量・しまりが無い

第411図 SI-329

2はカマド火床部中央の下層から正位で出土した。被熱痕が顕著であり、支脚転用品と思われる。土器の状態および出土状況から、欠損部は打ち欠きされており、最終的には、カマド廃棄の祭祀に使用されたものとする。1はP3脇の中層から出土した。3はカマド右側周辺から中・上層主体で出土した。右奥(北)隅周辺およびP1周辺の位置でもある。堆積土が埋め戻されているならば、1・3もカマドや堅穴住居廃棄の祭祀に関わる可能性が若干あると思われる。しかし、根拠が弱く、可能性の指摘だけにとどめ



第412図 SI-330

たい。図示しない土器片の点数は53点、重さは400gで、少量である。図示した遺物と合わせて、カマド周辺から中央部に散在的に分布する。その他は希薄な分布である。

SI-331 (第413図、図版122・291)

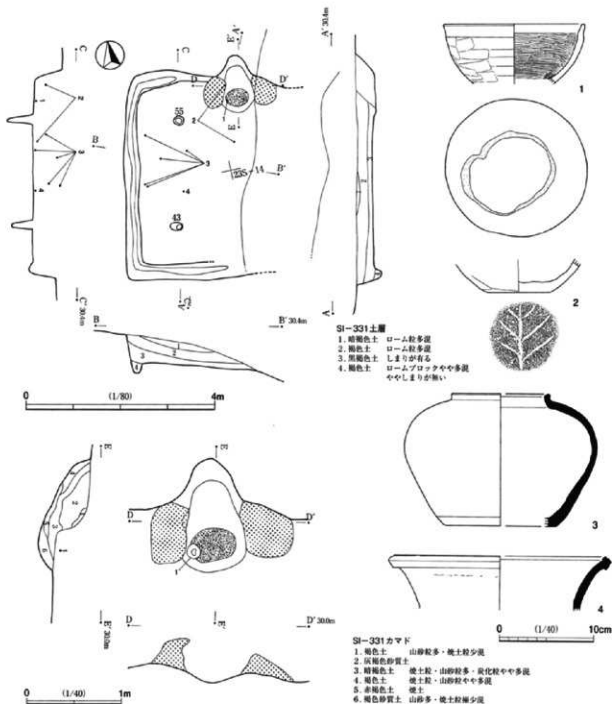
遺跡東部南東端の23S区に位置する。南東側を下る緩斜面に位置する影響で、東側の壁と床面が流失している。主軸長4.4mの方形をなし、深さは0.38mである。主軸方位はN-16°-Eである。北辺にカマドをもつ。主柱穴のうち、西(左)側の2か所は遺存しているが、東(右)側の主柱穴2か所は失われている。出入口ピットも流失したのであろう。壁溝は壁の流失部分を除いて巡っており、全周する可能性がある。床面は、遺存する西壁側ではほぼ平坦である。東側はやや下っているが、若干損なっていることも考えられる。硬化面の有無は不明である。カマド構築材は山砂主体で混入土は少ない。両袖内壁は赤色化している。天井部は崩落しているが、あまり流失していない。堆積土はローム粒を多く含む。ロームの包含が多いのは、緩斜面に位置する影響かもしれない。

図示した遺物は4点である。1は非クロクの土師器杯である。体部が丸みをもち、深い椀状の器形である。底部が大きく欠損しているが、他は割れがなく遺存しており、穿孔されたものとする。口縁端部外面の一部が黒く焦げていることから、火を焚く行為に使用されたことがわかる。ただし、黒ずみはその部分だけであり、灯明器かどうか判然としない。器面は荒れて、やや赤みや淡黄色を呈する部分がある。

2は「房籠」型の土師器甕で、底部周辺の破片である。底部外面に木葉痕がみられる。胴部外面は手持ちヘラケズリが施されている。内面は器面の剥落が著しい。

3は新治窯産の須恵器短頸壺である。遺存は一部である。口縁部内面の稜はやや鋭い。外面の器面はかなり荒れている。4は新治窯産の須恵器甕である。一部の破片であるが、口縁部は2/5程度遺存する。やや軟質の焼成で、白雲母を多量に含む。

1はカマド左袖寄りの火床部上下層から正位で出土した。土器と出土の状況から、本壱穴のカマド祭祀に関わる遺物と考える。2もカマド周辺から出土したが、遺存が少ない。図示しない土器片の点数は193



第413図 SI-331

点、重さは2.5kgである。広く分布するが、北西側が多く、南西隅付近はやや希薄である。

SI-332 (第414図, 図版122)

遺跡東部南西寄りの22R区に位置する。3.1m×2.6mの長方形をなし、深さは0.32mである。主軸はNである。北辺にカマドをもつ。出入口ビット・壁溝は検出されなかった。台地西側に位置し、地形は緩く南西方向に下っている。確認面のプランは明瞭であったが、床面の把握はやや不明瞭である。南北方向の床面は平坦であるが、東西方向は西側が低い。硬化面はみられない。カマドは方形プランから大きく突出している。若干の山砂と焼土がみられるが、崩落・流失により、原形をとどめていない。堆積土上層は黒褐色土主体で、自然堆積と思われる。下層はソフトローム粒の含有が多く、床面との差がやや不明瞭である。

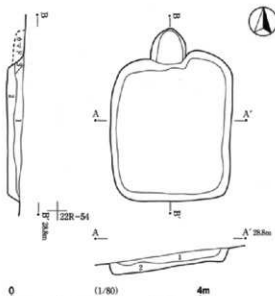
図示した遺物はない。出土した土器片の点数は72点、重さは600gである。散在的に分布し、大きな偏りはみられない。土器片の内訳は、ロクロ成形の土師器杯・高台付杯、「房総」型の土師器甕、千葉産の須恵器杯・甕、新治産の須恵器甕である。ロクロ成形の土師器高台付杯は、小さな高台部に内面が黒色処理された杯部をもつものである。土師器甕は、口縁端部が内湾して内側に突き出るタイプの破片が目立つ。

SI-333A (第415・416・476図, 図版122・123・291・292・307・308)

遺跡東部東寄りの23R区に位置する。4m×4mの方形をなし、深さは0.6mである。主軸はN-29°-Eである。北東辺中央にカマドをもつ。壁溝は全周する。主柱穴4か所と出入口ビットをもつ。各柱穴は、中央から放射する方向にやや長い楕円形を呈する。床面は平坦で、全体によくしまっている。中央がわずかに硬化していると思われるが、壁側との差は少ない。カマド両軸は比較的良好に遺存し、内壁の赤色化が著しい。火床部も赤色化した範囲が広い。堆積土は、概してローム粒・ブロックの包含が多いが、台地の東縁辺寄りに位置する影響が考えられる。埋め戻されているかどうかは断定しがたい。

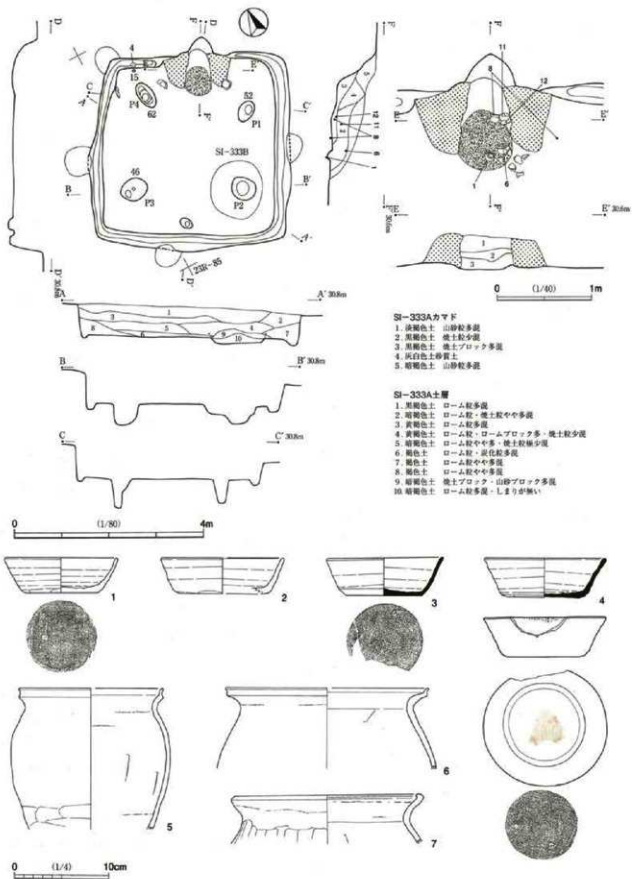
南(右前)隅の主柱穴P2上に土坑SI-333Bがあり、底面はP2の下位まで達している。出土遺物の様相から、本堅穴よりも新しい遺構である。ただし、土層断面では、本堅穴を切っている状況を把握できなかった。なお、P2上に位置するのは、P2の凹みを利用したことも考えられるが、とくに必然性はなかったと思われる。本堅穴周囲には、いくつかのビットがあり、各所で重複しているが、新旧関係は不明である。また、南方にはSB-126がある。

図示した遺物は15点である。1・2はロクロ成形の土師器杯である。1は完形である。底部内面に「+」と思われる条線が2か所あり、線刻の可能性もある。単なる傷とも思われるが、内面には他にも傷と思われる痕跡がいくつかあることから、断定しがたく可能性の指摘にとどめる。なお、図化は省略した。2の遺存はあまりよくないが、1よりも大振りになると思われる。1・2は胎土に赤色粒・塊、淡黄緑色塊を多く含む。

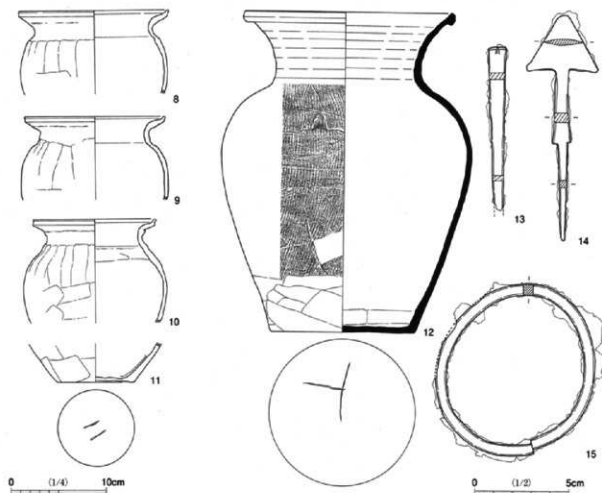


SI-332土層
1. 黒褐色土 ローム粒少量
2. 黄褐色土 ローム粒多量
3. 黒褐色土 焼土粒・山砂粒やや多量

第414図 SI-332



第415図 SI-333A (1)



第416図 SI-333A (2)

3・4は千葉産の須恵器杯である。3の底部は比較的良好に遺存するが、口縁・体部の遺存は少ない。4は口縁・体部の一部が欠損しているが、他は割れもなく遺存する土器である。欠損部の割れ口はやや不整な弧状であり、打ち欠きされたものと考えられる。色調はやや黄色味を帯びた暗灰色であるが、欠損部に近い口縁・体部外面には、褐色物質が附着している。すぐ脇から出土した環状鉄製品15の錆が附着したものである。また、底部外面中央には赤色物質が附着している。赤彩、それとも朱墨の痕跡であろうか。口縁端部が赤褐色に変色する部分が、欠損部からほぼ対向する位置と、そこからやや離れた位置の2か所にみられ、火を受けたものと思われる。

5～11は土師器甕である。5・6は常総型の甕、他は「房総」型の甕である。5は常総型の甕としてはやや小型であるが、6は通常の大きさのうちに収まる。8・9・10は小型品である。7は口縁端部が内側に突き出る形態である。口縁部は全周遺存する。8も口縁部がほぼ全周し、9も口縁部は3/4周の遺存である。また、10の口縁部は1/2周遺存する。11は胴部下位・底部の破片であり、底部は全面が遺存する。底部外面は全面に手持ちヘラケズリが施されている。中央に2条の平行線がある。焼成前のもので、周囲のケズリ痕よりも太く、深いことからヘラ書きとした。しかし、周縁にも太い条線があるため、断定しがたい。周縁のものはややハケメ的で、回転糸切り痕とも思われるが、断定しがたい。ケズリ痕としておく。11と同一個体の可能性のあるものは7だけと思われる。

12は千葉産の須恵器である。須恵器として、遺存が良好な個体である。胴部上位でやや欠損部が日立つが、底部周辺は全周遺存し、口縁部も比較的遺存がよい。底部外面に2条線のヘラ書きがある。「人」に似た形であるが、記号とした方が無難である。わずかに交差しており、図示した状態でみた場合、横線が縦線を切っている。色調は灰黄褐色で、焼成は良好である。内面の当て具痕はナデによりかなり弱っており、内面の凹凸があまり日立たない。全体にいい作りである。

13～15は鉄製品である。13はノミと思われる。短冊形の棒状部の先端に刃が付くもので、やや薄い作りである。幅を減じる葉との境にわずかな間がみられる。刃部の長さは3.5cmである。先端は刃を研ぎ出しているように思われるが、錆のため不明瞭である。小型のノミであり、木材の細工に使われたものであろう。14は鉄鍬で、完形品である。広身の短頭鍬で、刃部の形態は三角形である。逆刺はほとんどみられない。寛披には突起がなく、わずかに裾広がりとなっている。葉はやや細く、棒状部との境は四面圍に作り出されている。葉反側は欠損しない状態で若干曲がりがあるが、当初からのものとは思われない。15は環状の形態で、性格不明である。棒状の鉄製品を丸めたもので、やや楕円形を呈する。長径の外径は9.3cm、内径は8.1cm、短径の外径は8.3cm、内径は7.1cm、厚さは5mm～6mmである。断面形は方形であるが、錆のために角が明瞭でない部分がある。

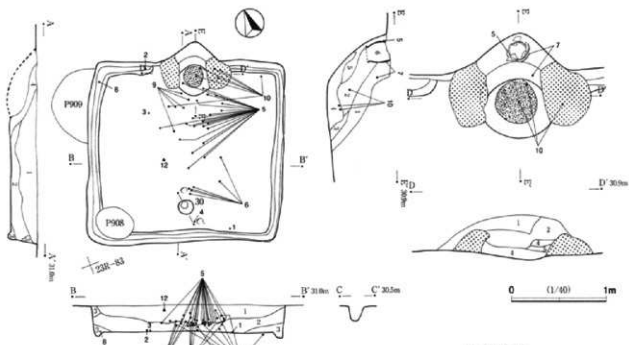
完形の土師器杯1は、カマド火床部底面前側から正位で出土した。また、打ち欠きされた須恵器杯4は、西（左奥）隣近くの壁溝上から出土した。4の脇からは、15が床面に密着した状態で出土した。1・4はカマド・竪穴庵祭の祭祀に関わる可能性があり、15も同様かもしれない。11はカマド内下層から、6もカマド内中層から出土した。カマド内からは、8・12も出土しているが、8はカマド前から北（右奥）隅隅にかけて分布し、12はカマド前から西（左奥）隅隅にかけてやや広く散っている。8は比較的下位からの出土である。その他、カマド周辺からは、2・3・7・13が出土し、やや離れるが、カマド左側の壁際から4・10が出土した。

図示しない土器片の点数は797点、重さは8.7kgである。堆積土が厚いこともあり、かなり多量である。竪穴全体から出土するが、カマドのある北東隅から多く出土する様相がうかがえる。この傾向は図示した遺物出土状況から理解できよう。

なお、本竪穴を切っているSI-333Bの遺構番号は整理段階で付与したものである。そのため、本竪穴についても、調査時のSI-333からSI-333Aとした。しかし、両者の遺物注記はSI-333のままである。SI-333Bの出土遺物は多量とは思われないが、図示した遺物以外に土器片等が存在した場合、本竪穴の出土遺物と混在している。

SI-334（第417・418間、図版123・292・318）

遺跡東部東寄りの23Rに位置する。3.9m×4.1mの方形をなし、深さは0.59mである。主軸はN-24°-Eである。北東辺中央にカマドをもち、南西隅中央に出入口ピットをもつ。左（北西）壁北隅寄りでP-909と、左前（西）隅部でP-908と、右前（南）隅部付近でP-948と重複する。P-908は床面よりも深い。P-948は床面に達していない。壁溝は全周する。床面は地形同様、東側がわずかに低い。平坦といえる範囲内である。全体にしまっており、硬化範囲は判然としない。カマドは煙道部の位置から土師器壺（7）が倒位で出土した。胴部下位で確認面となるため、上部を失っているが、胴部下位のところに他の土師器壺の口縁部（5）が倒位でみられ、2個体以上を重ねたものと思われる。これらについては、カマド祭祀の可能性もあるが、底部をくりぬいた土師器壺数個体を重ねて、煙道を形成したものと思われ

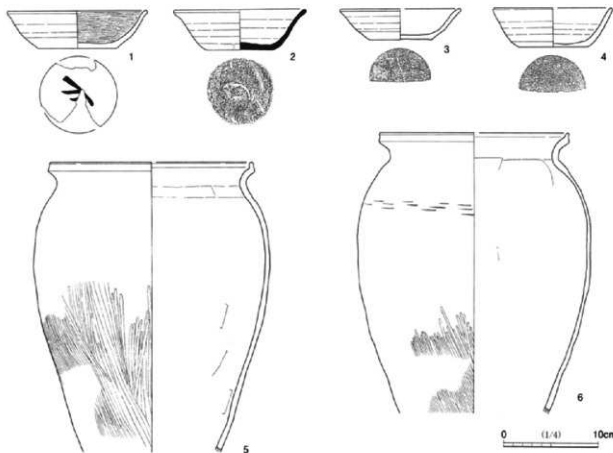


SI-334土層

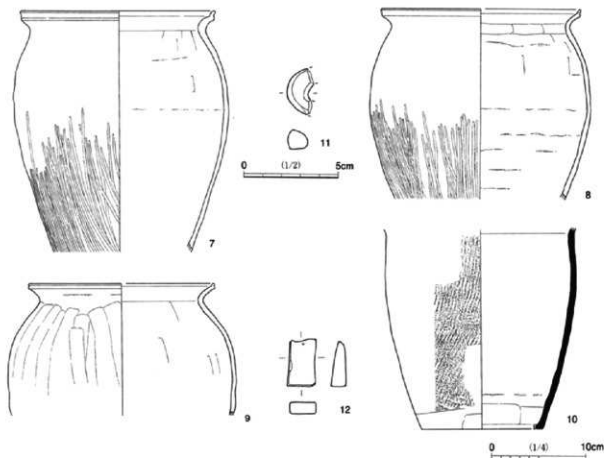
1. 暗黄褐色土 ローム粒やや多・粘土質・炭化粒少混
2. 暗黄褐色土 ローム粒・粘土粒少混
3. 暗黄褐色土 ローム粒多混・しまりが無い
4. 暗黄褐色土 ローム粒やや多・山砂粒少混

SI-334カマド

1. 褐色土 山砂粒多・ロームブロック少混
2. 暗灰褐色砂質土
3. 灰褐色土 黒褐色土少混
4. 赤褐色土 山砂粒少混
5. 黒褐色土 焼土ブロック多混
6. 暗灰褐色土 茶色土やや多混



第417図 SI-334 (1)



第418図 SI-334 (2)

る。左袖内壁は被熱のため赤色化した部分がよく残り、火床部底面も赤色化した面がみられる。

図示した遺物は12点である。1・3・4はロクロ成形の土師器杯である。1は底部外面に墨書がある。欠損部にかかってやや不明瞭であるが、「万」と思われる。内面は体部下位から底部にかけて薄い剥離が多くみられ、外面も体部下位・底部に若干の剥離がある。3・4も器面が荒れており、とくに4は顕著である。4は所々に煤も付着しており、火を受けた痕跡が明瞭である。2は千葉産の須恵器杯である。この土器も器面の荒れが著しい。

5～9は土師器甕で、5～8は常総型、9は「房総」型の甕である。7は底部を欠くが、口縁部から胴部中位まではよく遺存し割れも少ない。胴部内面は比較的滑らかであるが、剥落痕が中位から下位の一部で目立つ。5も比較的遺存がよいが、やや歪んだ作りである。6・8の遺存は部分的である。6は器面の荒れが著しく、中位から下位の内外面はかなり黒ずんでいる。胴部外面中・下位は山砂が多く付着している。9の遺存も一部である。焼成は良好である。10は千葉産の須恵器甕である。底部外面はかなり擦れている。

11は土製品である。現状の製品で1/2弱の遺存である。人物埴輪の耳飾りであろうか。12は砥石である。石材は流紋岩質凝灰岩である。図示した上部は薄く、折れたか、意図的に折られたものである。図示した広い面の上部に小さな穴があるが、貫通していない。携帯用の砥石に加工するため、穿孔を開始したが、穿孔箇所付近まで新たに欠損したため、中止したと思われる。欠損部を除く5面が研ぎ面として使

用されており平滑である。

遺物の出土層位をみると、杯類の1・2・3は床面から出土している。

一方、土師器杯4を含むが、5・6・9・10等、多くの甕・甕が1層と2層の境付近に集中している。これらは、短い期間のうちに堆積したといえよう。堆積土をみると、2層はロームの包含が少なく、1層はレンズ状に堆積することから、2層以下は自然堆積と思われる。この挿鉢状となった門みに、遺物が多く廃棄されたものであろう。このうち、5はカマドの前方にやや広く分布するが、口縁部は7の上部に位置して、煙道部を構成すると思われるものである。広く散っているのは廃棄する時点で不要となった、または当初から不要であった多くの胴部片が、9等の破損した土器とともに凹みに廃棄された状況を示すと思われる。なお、1層はローム粒を多く含むので、5や9等の廃棄の後、埋め戻されていることも考えられるが、本堅穴の所在地の場合、地形の状況でロームを多く含むことも考えられるので、断定しがたい。

図示しない土器片の点数は944点、重さは12.2kgと多量である。それらを含めて出土遺物の分布をみると、カマド前方に多いものの、それ以外にも広く分布している。

SI-335 (第419・420・477図、図版292・293・313)

遺跡東部東寄りの23R区に位置する。4.3m×5mの横長の長方形をなし、深さは0.81mである。主軸はN-24°-Eである。北東辺中央にカマドをもち、南西隅際中央に出入口ピットをもつ。SI-319に南側が大きく切られているが、本堅穴の方が深いので、壁下部および床面が遺存している。また、一部でSB 128と重複するが、これも本堅穴の床面に達していない。壁溝は全周する。主柱穴4か所をもつ。各主柱穴の規模が大きく、柱の抜き取りまたは柱位置の移動があったと思われる。前壁側の主柱穴P2・P3は、前壁にかなり寄っている。床面はほぼ平坦で、主柱穴間に硬化面が広がっている。カマドはかなり規模が大きい。両袖前側の遺存はそれほどよくないが、後方は遺存がよい。両袖内壁はかなり赤色化しているが、赤色化した部分は煙道部奥壁上部まで続いてみられる。

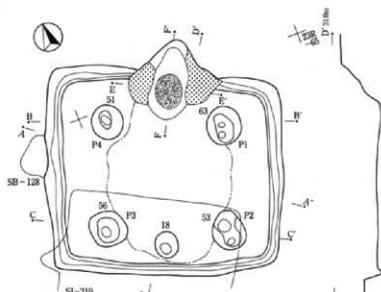
図示した遺物は12点である。1～5は須恵器杯である。3は水田・不入窯産の須恵器と思われる。口縁・体部のロクロ目はヨコナダにより消されて、器面は凹凸が少ない。底部外面もいねいな回転ヘラケズリが施されている。内外面に火焼痕がみられる。色調はやや黄色味を帯びた灰色で、焼成は良好である。3以外は千葉産の須恵器である。1は底部外面に「×(+)」の線刻がある。5は底部の小片で、外面に「大」のヘラ書きがある。書き順も漢字の「大」のとおりである。2は内外面に火焼痕がある。

6は武蔵型の土師器甕である。11層部から底部まで接合している個体である。胴部下位の欠損がやや目立つが、口縁部から胴部中位までの遺存がよく、正確な口径値のである甕である。器壁が薄く、軽量である。器面は内外面とも荒れている。7は土師器甕の底部付近の破片で、小型品である。底部外面に木葉痕がある。長石等の白色粒を多く含む、常盤型の甕と思われる。

8・9は千葉産の須恵器甕である。8の色調はやや暗い灰色で、わずかに黄色味を帯びている。焼成は良好である。9は底部片で、外面に「大」のヘラ書きがある。2画目・3画目が弱く、やや不明瞭であるが、5同様、書き順が「大」のとおりと思われる。色調は外面が褐色、内面が黄灰色である。

10～12は鉄製の刀子である。12は基灰を欠くが、遺存がよい。10・11も関部分が遺存する。10は長軸方向にゆるやかに湾曲している。11は切先側が欠損しており、刃部の遺存が少ない。

図示した遺物は、概して中・上層からの出土である。11がやや下位での出土であるが、床面からは浮いている。堅穴内の各所から出土し、4・6・8は広く散っている。図示しない土器片の点数は485点、重

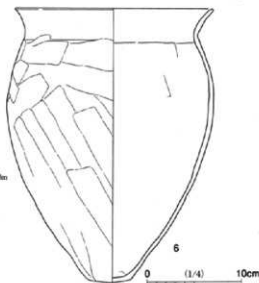
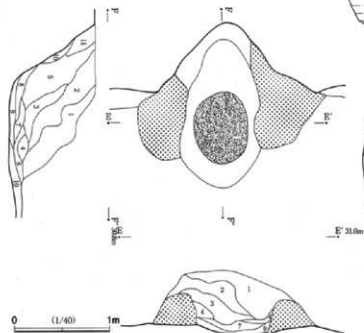
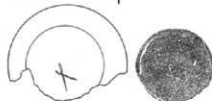
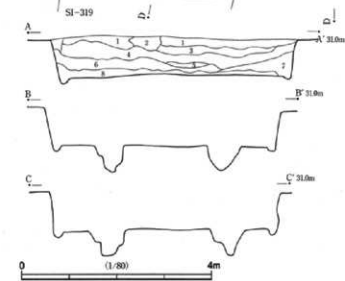


SI-335土層

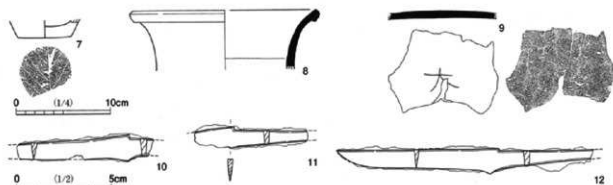
1. 暗褐色土 褐色土・ローム散やや多量
2. 褐色土 灰白色砂質土多量
3. 暗褐色土 褐色土やや多・ローム粒少量
4. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックやや多量
5. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック・山砂粒やや多量
6. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックやや多量
7. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量
8. 褐色土 ローム粒・ロームブロック多量

SI-335カマド

1. 褐色土 焼土粒・山砂粒少量
2. 暗褐色土 山砂粒多・焼土粒多量
3. 褐色土 焼土粒多量・しまりがある
4. 赤褐色土 焼土
5. 灰褐色砂質土
6. 赤色土 炭化粒・灰多量
7. 赤褐色土 焼土粒多
8. 赤色土 焼土・炭化粒多量
9. 褐色土 山砂粒多量
10. 赤褐色土 焼土ブロック多量
11. 赤褐色土 焼土



第419図 SI-335 (1)



第420図 SI-335 (2)

さは5.9kgである。図示した遺物とあわせて、平面分布は南側にやや少ないが、SI-319に切られる影響もあろう。

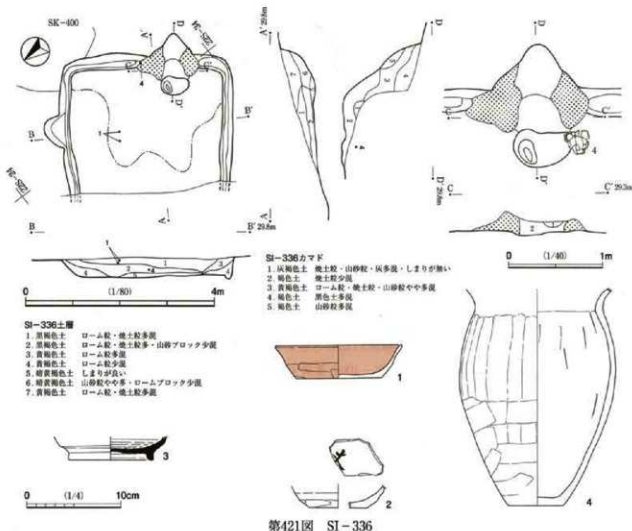
SI-336 (第421図, 図版123・293)

遺跡東部南端の22S区に位置する。副軸長3.7mの方形をなし、深さは0.39mである。北西側は斜面部にかかるため、遺存していない。東隅側でSK-400と重複する。本竪穴が切られていると思われる。カマドは付け替えられており、遺存状況から、北東壁東寄りものが旧カマド、南東壁南寄りものが新カマドである。いずれもカマドのある壁に向かって右寄りに位置する。出入口ピットは検出されなかった。北西壁側に存在した場合は失われていると思われる。おのおののカマドに対面する側の壁に出入口があるとすると、新カマドからみた主軸方位はN-126°-E、旧カマドからみた主軸方位はN-35°-Eである。壁溝は欠損箇所を除いて巡っており、全周する可能性がある。床面は新カマドのある南東壁側は平坦である。新カマドの前から中央部を主体に硬化している。新カマドの左袖内壁は赤色化した部分が遺存しているが、右袖は遺存が少なく、赤色化した部分も一部分である。火床部も赤色化した面がみられない。旧カマドは、構築材が遺存していない。

図示した遺物は4点である。1・2はロクロ成形の土師器杯である。1は内外面全面が赤彩されている。底部外面の糸切り痕は中央部に若干みられる程度で、手持ちヘラケズリによってかなり消されている。底部の欠損と赤彩もあって不明瞭であるが、静止糸切りと思われる。2は底部から体部下位までの小片である。欠損部にかかるが、底部内面に「丈」と思われる墨書がある。3は新治窯産の須恵器高台付杯である。底部内面に2条の筋があるが、1条は新しい傷のように思われる。もう1条も単なる傷の可能性があり、線刻か断定しがたい。

4は「房総」型の土師器甕である。やや小振りであるが、高さがあるので中型品とした方がふさわしい大きさである。口縁部から胴部上位を1/2前後欠き、底部も若干欠損するが、比較的遺存のよい土器である。底部外面はヘラケズリが施されている。胴部外面中位から下位の一部に、山砂が付着している。また、胴部内面も全体に山砂が付着している。内面は胴部中位を主体に黒ずんでいる。

4はカマド右袖前のほぼ床面上から、つぶれた状態で出土した。破片の一部は左袖上部にも散っている。1は中央付近上層からの出土である。図示しない土器片の点数は210点、重さは2.6kgである。遺物は新カマド周辺からの出土が多いと思われる。

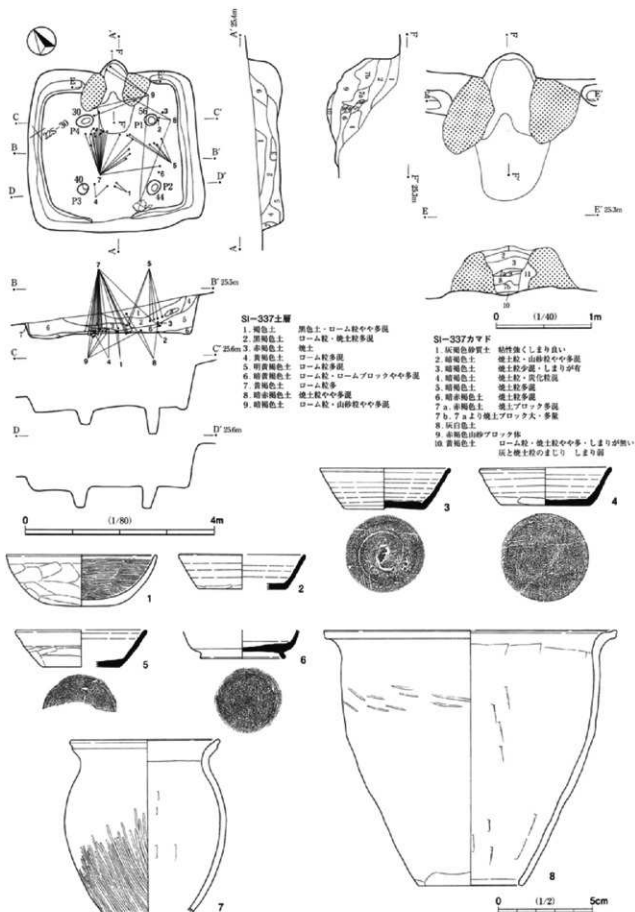


SI-337 (第422・423図, 図版124・293)

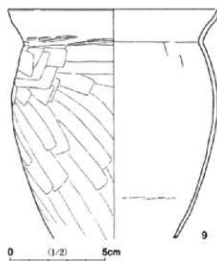
遺跡東部南端の22S区に位置する。3.4m×3.6mの方形をなし、深さは0.5mである。主軸方位はN-35°-Eである。北東辺中央にカマドをもつ。壁溝は南西(前)壁際中央を除いて巡っている。出入口ピットは見つからなかったが、壁溝が途切れる部分が入出口部と思われる。主柱穴4か所をもつ。柱穴は細いが、やや深い。P3は中央側に向かって、やや斜めに掘り込まれている。床面中央はほぼ平坦であるが、左(北西)壁側がやや低い。地形も東から西に下っている。床面は全体に硬質であり、とくに硬化が顕著な面はみられない。カマドは両袖の遺存がよく、内壁は赤色化が著しい。構築材は山砂主体であるが、袖外側はローム粒を含む。火床部上にも多量の焼土ブロックが堆積し、その上部には灰層が厚く堆積する。さらに、灰層の上部には、天井部等の構築材が崩れた、焼土の大形ブロックが多量に堆積している。また、カマド前方の床面にも焼土・炭化粒が広がっている

図示した遺物は9点である。1は非ロクロの土師器杯である。底部は平底の丸底で、底部と体部の境は不明瞭である。外面のヘラケズリはかなり乾燥した段階で施されたと思われる、段状の痕跡が連続するところが多い。

2～5は須恵器杯である。2・4は新治窯産である。2は部分的な遺存であるが、4は口縁部の所々を欠くだけで、遺存のよい個体である。3は体部下位から底部の色調が、黄色味を帯びる灰色であるが、口



第422図 SI-337 (1)



第423図 SI-337 (2)

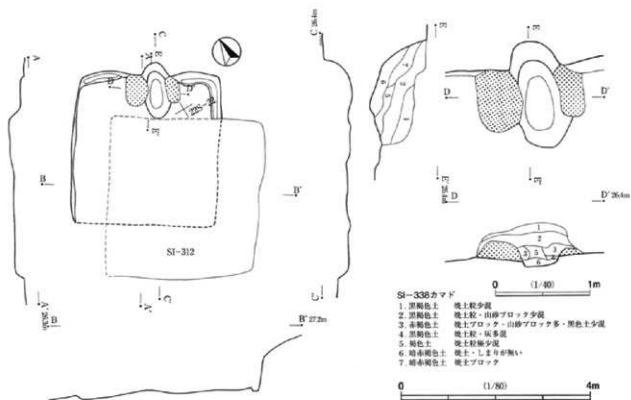
縁部から体部上位は褐色味の強い色調である。しかし、白雲母を多く含むこと、底部内面の体部際が窪むことから、新治窯産と思われる。5の色調は暗灰色である。胎土は白色粒を多く含むが、白雲母はあまりみられない。産地はやや不明瞭であるが、新治窯産としておく。6は新治窯産の須恵器高台付杯である。口縁・体部のほぼ全周を欠くが、底部は遺存している。底部内面はやや滑らかで、転用碗とも思われるが、断定しがたい。底部外面の高台部内側寄りのところには、断続的な筋状の圧痕がほぼ周回している。おのおのの圧痕の長さは5mm～8mm程度で、円周に対して斜めの状態のものが多く、一部で円周に沿っている。ヘラ書きではなく、土器製作時の痕跡と考えられ、おそらく、高台貼り付けにともなう爪の圧痕または何らかの工具の痕跡と思われる。

7は常総型の土師器甕で、小型品である。底部付近を欠くが、かなり遺存のよい土器である。とくに口縁部はほぼ全周する。胴部内面はかなり黒ずんでいる。8は常総型の土師器甕である。底部の孔は単孔である。胴部外面上位には、ヘラの当たり痕が断続的に周回しているが、この製作技法は堯と同様である。胴部外面はナデが施され、ヘラミガキはみられない。ナデ調整ではあるが、砂粒の動きが若干みられ、土器の下から上に動いている。甕のヘラミガキ調整が土器を倒位にして行われたものであるならば、この土器も同様と思われる。胴部下端、孔部分の内外面はヘラケズリが施されている。接地面も同様である。内面はヘラナデが施され、ヘラの当たりが顕著である。色調はやや灰色味を帯びる黄褐色で、焼成は良好である。9は武蔵型の土師器甕である。底部を欠き、胴部の遺存もあまり多くないが、口縁部は3/4周以上遺存する。器面は荒れて、剥離する部分もやや多い。胴部外面中位に山砂が付着する。

図示した遺物の出土層位をみると、1・2・4・9は床面・下層から出土している。7は下層から出土する破片が多いが、一部は中層からの出土である。その他の遺物は、一部の破片が下層から出土するものもあるが、概して床面からは浮いている。平面分布をみると、中央部周辺から出土するものが多い。したがって、下層から出土しても、壁際はかなり埋まっていた可能性がある。9は前壁際からカマドまで広く散っている。図示しない土器片の点数は169点、重さは2.1kgである。図示したものとあわせて、平面分布は中央部に多く、壁側に少ない。遺物は、壁際が埋まりかけた段階の窪み中央に、多く廃棄されたものであろう。

SI-338 (第424図、図版124)

遺跡東部南端の225区に位置する。幅の狭い台地西側に位置する。副軸長3.1mの方形をなし、深さはいもとも遺存のよいところで、0.64mである。主軸はN-36°-Eである。北東辺にカマドをもつ。SI-312と大きく重複する。やや断定しがたいが、堆積土の観察からは、SI-312に切られていると思われる。当初は本竈穴1棟とみでの調査であったが、進捗に伴って2棟と判明したものである。遺物は、すべてSI-338出土の取り扱いをしており、SI-312で図示した遺物の注記もSI-338のままである。2棟の出土遺物については、とくに時期差のある2群を認めることができなかった。両住居の時期差は、大きくないものと思われる。本竈穴の遺存はカマドのある北東(奥)壁側と北西(左)壁側であるが、左壁の遺存は



第424図 SI-338

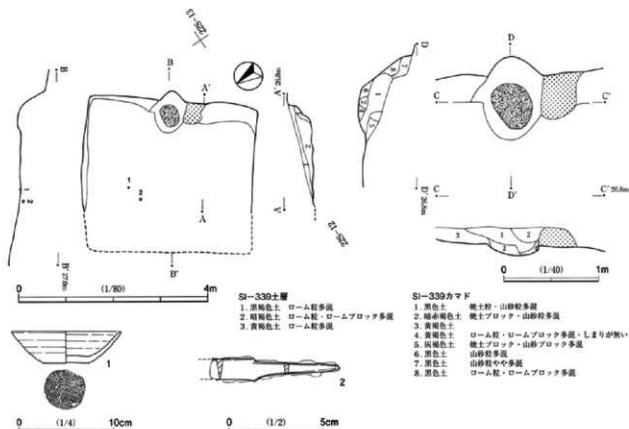
わずかであり、床面もやや損なわれている。壁溝は、カマド両側および東隅付近にみられ、確認面から床面まで深い部分には巡っている。左壁側は不明瞭である。出入口ピットは検出されなかった。床面の深さはSI-312とほとんど差がない。硬化範囲は不明である。カマドは右袖の遺存が悪い。袖の構築材は山砂主体である。両袖の内側は焼土ブロックが多く、やや脆くなっている。火床部には、赤色化した面がみられない。カマド前の堆積土は、ローム粒を多く含む黒褐色土である。

図示した遺物はないが、SI-312で図示した遺物は、本堅穴内に廃棄または流入した可能性もある。図示しない土器片については、SI-338と合わせて235点、重さは2.7kgである。本堅穴が古いとみた場合、遺物の分布は、カマド左側前方から多く出土するといえる。逆の場合は、カマド周辺と前壁側に多いことになる。

SI-339 (第425図、図版124・313)

遺跡東部南端の22S区に位置する。副軸長推定3.6mの方形をなし、深さは0.5mである。南東辺にカマドをもち、主軸方位はN-128°-Eである。斜面に位置するため、カマドのある南東壁側以外は遺存が悪い。北西(前)壁は遺存せず、北東(左)壁と南西(右)壁の大部分も遺存しない。出入口ピットは検出されなかった。床面の遺存部分はほぼ平坦である。硬化面は判然としない。カマドは左袖がほぼ遺存せず、右袖は下部の遺存である。構築材は山砂を含むが、ローム粒の含有が多い。

図示した遺物は2点である。1はロクロ成形の土師器杯である。小型の土器で、底径も小さい。底部外面の調整は回転糸切り後無調整である。2は鉄製品で、刀子である。切先側を欠くが、刃部の途中から茎尻まで遺存する。1・2とも中央部やや左壁寄りの床面から出土している。堆積土が薄い部分であり、流入したことも考えられるが、1と図示しない土器片との間に時期的な差はない。図示しない土器片の点数



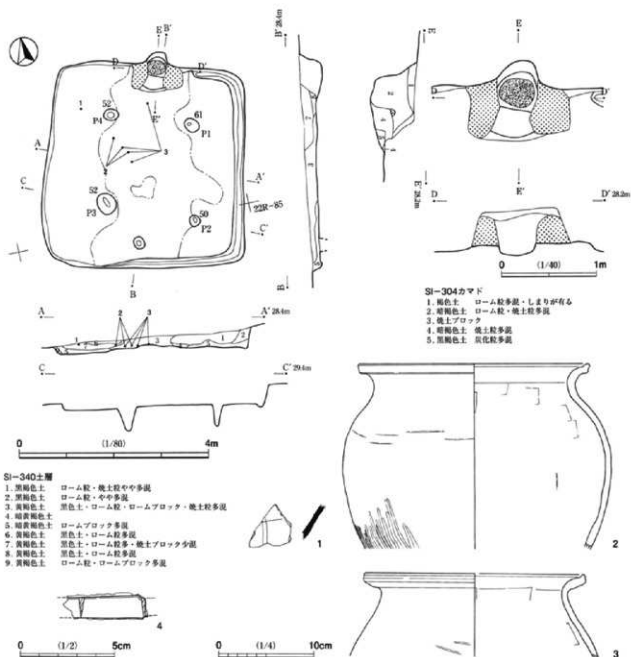
第425図 SI-339

は331点、重さは1.7kgである。この中のロク口成形の土師器杯の中にも、底径が小さく、回転糸切り後無調整のものが数点ある。また、土師器甕も口縁端部が幅広く、内面側に突き出るタイプのものがみられる。遺物分布はカマド周辺にやや多いが、堆積土が遺存する部分からも出土している。

SI-340 (第426図、図版125・293・313)

遺跡東部南西寄りの22R区に位置する。4.3m×4.1mの方形をなし、深さは0.38mである。南西側に下る緩斜面に立地するため、西側の壁の遺存が悪い。北辺にカマドをもち、南壁際中央に出入口ピットをもつ。主軸方位はN-13°-Eである。主柱穴を4か所もつ。このうち、南東側のP2が隅部にやや寄るため、柱穴間のプランが壁穴のプランに対してややいびつである。主柱穴はほぼ50cm～60cmの深さである。この深さに比べ、出入口ピットが1m近い深さにまでおよんでいたが、植物根等の影響も考えられ、深さについて判然としない。壁溝は東側では巡っているが、西側ではみられない。床面も西側の下っているため、当初から西壁側に巡らないか不明である。床面は凹凸が著しい。硬化面が、東西の壁側を除いて、カマド周辺から出入口ピット周辺まで広がるが、中央部の硬化がやや強い。カマドは両袖の遺存がよく、内壁は赤色化が顕著である。構築材は山砂主体である。

図示した遺物は4点である。1は新治窯産の須恵器杯である。体部の破片で、外面に線刻がある。横1条、縦2条がほぼ直角に交差する記号である。横線は左側の欠損部に続き、縦線は2か所とも上下の欠損部に続く。2・3は常総型の土師器甕である。2は胴部下位から底部を欠くが、口縁部から胴部上位の遺存がよい。とくに口縁部はほぼ遺存している。胴部上位のヘラの当たり痕は、遺存のよい部分では、上下に2段みられる。胴部内面には、白色物質が付着している部分が、わずかにみられる。3の器面は荒れて



SI-304カマド

1. 褐色土 ローム粒多量・しまりが有る
2. 褐色土 ローム粒・焼土粒多量
3. 焼土ブロック
4. 褐色土 焼土粒多量
5. 褐色土 炭化粒多量

SI-340土層

1. 褐色土 ローム粒・焼土粒やや多量
2. 褐色土 ローム粒・やや多量
3. 褐色土 褐色土・ローム粒・ロームブロック・焼土粒多量
4. 褐色土 褐色土
5. 褐色土 ロームブロック多量
6. 褐色土 褐色土・ローム粒多量
7. 褐色土 褐色土・ローム粒多・焼土ブロック少量
8. 褐色土 褐色土・ローム粒多量
9. 褐色土 ローム粒・ロームブロック多量

第426図 SI-340

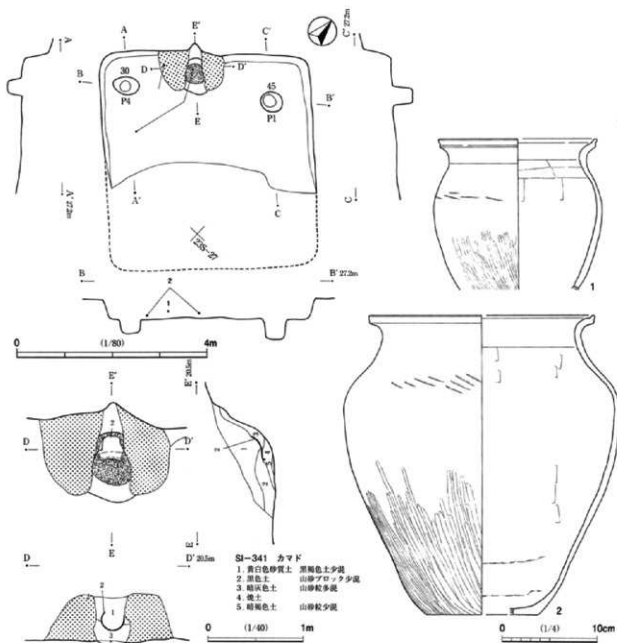
いる。胎土は白色粒・小石だけではなく、白雲母の含有が多い。外面にヘラミガキを施した胴部中下位の破片もあるが、接合しない。4は鉄製品で、刀子である。切先側と茎のほとんどを欠損するが、関部分は遺存している。

1は北西隅寄りのところから出土した。床面からはやや高い位置である。2は中央部P3・P4間の床面から出土した。割れているが、かなりまとまった状態での出土である。3も2と近接する場所から出土した他、一部はカマド前に散っている。図示しない土器片の点数は181点、重さは2kgである。散在的な出土であるが、南西隅側から出入口付近がとくに希薄である。

SI-341 (第427図、図版125・293・294)

遺跡東部南東端の23S区に位置する。副軸長4.5mの方形をなし、深さは0.58mである。北西辺中央にか

マドをもち、主軸方位はN-45°-Wである。南東側に下る斜面に位置するため、中央から南東側が遺存していない。また、本竪穴は黒色土中に掘り込まれているが、堆積土はローム粒の含有が地山層より若干多い程度である。そのため、壁・床面の検出が難しく、カマド左側の壁をやや掘り過ぎてしまった。支柱穴が存在するが、カマド側2か所（P1・P4）の遺存である。南東（前）壁側の2か所（P2・P3）は遺存せず、出入口ピットも失われたと思われる。P4は西（左奥）隅に近い位置にあり、柱穴の位置は竪穴住居のプランに対していびつである。壁溝は検出されなかった。床面はほぼ平坦である。硬化面は判然としない。カマドは方形プランからの突出が少なく、袖部分はほぼプラン内に入る。両袖の遺存は良好である。外側は堆積土の影響もあって、黒色土を含むが、内側は山砂主体で、混じり気が少ない。構架材はやや白みが強く、粘土質である。両袖内壁は焼けて赤色化した部分がよく残っている。火床部も赤色化した面がみられる。堆積土は黒褐色土主体で、自然堆積と思われる。



第427図 SI-341

図示した遺物は常総型の土師器甕2点である。1は小型品、2は通常の大サイズの範囲に入るが、胴部上位の張りが大きい。1・2とも胴部外面上位にヘラの当たり痕が巡っている。1は上下に巡る部分が少ないが、2は張っている部分の上側にあり、ややずれながら、上下に多重に巡っている。また、張り部分の下側から中位にかけても、ヘラの当たりと思われる部分があり、その一部は1cm前後の間隔で5か所を数える。しかし、これらの傾きは上部の当りの傾きと逆であり、巡ってもいない。また、多い部分の幅が広い。調整時の正位・倒位の違いがあるのかもしれない。底部の遺存は少ないが、外面には木葉痕が明確に残っている。

2の主要部分はカマド内から横倒しの状態で出土している。胴部の欠損部分を上にした状態である。底面からはやや浮いているが、この上器の下側が最後の火床面の可能性がある。比較的大形の破片であるので、本堅穴で使用されていたものかもしれない。なお、カマド廃棄の祭祀に使用されたとまでいえるかどうかは判然としない。1もカマド周辺からの出土であるが、左袖外側の上側からで、床面からはやや高い位置である。図示しない土器片の点数は67点、重さは1.7kgである。カマド前から右側にかけて散った分布状態である。左側部分にもみられるが、希薄である。

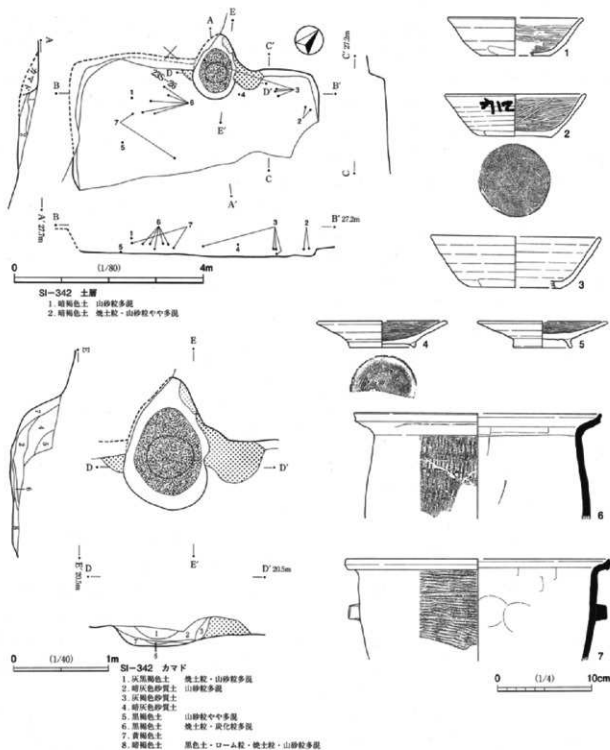
SI-342 (第428図、図版125・294)

遺跡東部南東端の23S区に位置する。副軸長5.2mの方形をなし、深さは0.53mである。北西辺やや北(右)寄りにカマドをもち、主軸はN 40° Wである。南東側を下る斜面に位置するため、中央から北西側1/2弱の遺存で、南東側の多くを失っている。また、西(右奥)隅周辺からカマド左側の壁が、攪乱を受けて欠損している。出入口ピットは南東壁側に存在したと思われるが、失われている。壁溝は検出されなかった。床面はほぼ平坦で、硬化面は判然としない。カマドは攪乱のため、左袖のほとんどと左壁が欠損している。左袖は下部の一部分のみの遺存である。右袖も前側の遺存が悪いが、壁側が遺存し、内壁から奥壁にかけて赤色化している。火床部も赤色化している面が広い。

図示した遺物は7点である。1～3はロクロ成形の土師器杯である。2は口縁部直下に正位で「加」の墨書がある。口縁・体部の一部を欠損するだけで、遺存のよい土器である。欠損部からは半分が割れ、そのうちの1片の口縁部が一部割れて接合する。計3片の接合個体である。「加」は欠損部や割れた部分からはやや離れている。器面は内面の一部に剝離痕があり、外面もやや荒れている。また、口縁部内面の所々が凹んでおり、焼成に伴うものでなければ、二次的な被熱痕と思われる。欠損や割れ方が意図的である可能性は若干あると思うが、断定しがたい。3は被熱により、内外面とも、荒れて剥落が著しい。山砂の付着もみられ、支脚に転用されたことが考えられる。

4・5はロクロ成形の土師器高台付皿である。4の底部は突出しており、高台内側からの高台の高さが低い。5の底部内面には擦痕がみられる。擦痕は、ロクロ目の内部が輪状に擦れた部分と、それを貫く1条のやや太いものである。土器の利用に伴い、自然に生じたものか意図的なものか、判断しがたい。その1条の擦痕に対して、斜めに入る弱い筋がみられる。擦痕を利用して「× (+)」を意図した線刻の可能性はあるが、単なる傷とも思われ、線刻と断定しがたい。そのため、図化していない。

6・7は千葉産の須恵器で、6は甕または瓶、7は甕である。6の内面はヘラナデが施されて、当て具痕がほぼ消えている。器面の色調は黒色、断面内部の色調は褐色である。7は一部の遺存であり、復元図の大きさに不安がある。胴部外面に横方向の平行タタキが施されている。把手は整った方柱状の作りである。外面の色調は暗灰色、内面は黄色味を帯びる灰色で、焼成は良好である。



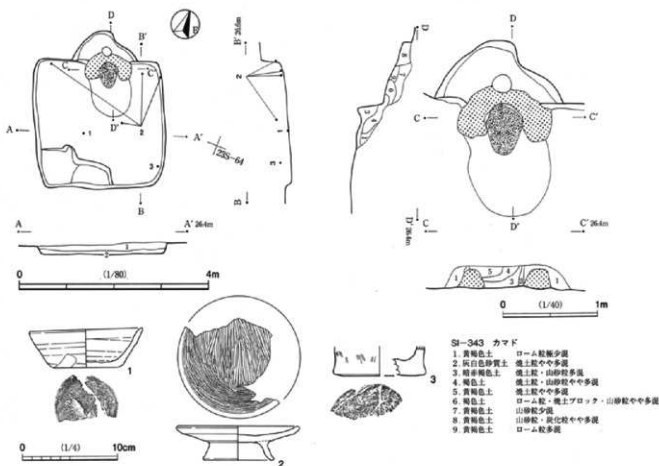
第428図 SI-342

図示した遺物の出土層位は、堆積土の薄い部分が多いので概して下層であるが、床面に接しているものは5だけである。遺存のよい2は北（右奥）隣近くから出土した。正位・倒位等の状況は不明である。3はカマド内および右袖脇から出土した。図示しない土器片の点数は255点、重さは2.4kgである。遺存している竪穴内全体から出土している。

SI-343 (第429図, 図版126・294)

遺跡東部南東端の23S区に位置する。2.7m×2.8mの方形をなし、深さは0.5mである。主軸方位はN-20°-Wである。北辺やや右寄りにカマドをもつ。南側に下る斜面に位置し、南壁の遺存が少ない。また、南壁側中央から南西隅周辺が攪乱を受け、床面をやや損なっている。出入口ピットは検出されなかったが、攪乱により失われたことも考えられる。壁溝も巡っていない。床面も地形同様に北から南に下っている。全体が均一にしまっており、とくに硬化した範囲はみられない。

カマドは上部を多く失っているが、下半部の遺存は比較的よい。構築材の山砂が両袖から続いて、奥壁に貼り付けられており、その背後には、煙道と思われる径20cm弱の平面円形で黒褐色土が充填した部分を確認することができた。両袖内壁は赤色化している。火床部底面も焼土塊が堆積し、堅くしまっている。カマド焚き口前方の床面には、焼土と炭化物の広がりがみられる。カマド本体の背後には、床面から高く、確認面からは低い張り出しの棚状部分が発出された。棚状部分の奥壁は、カマドの突出部分と比例する弧状の形態であり、方形プランと接する部分の幅は1.35m、構築部・煙道からの奥行きは20cm弱～35cmである。底面は北側からカマド本体に向かって緩やかに下っており、高さの差が最大で17cmある。床面から棚状部の端部までの高さは30cm、確認面からの深さは北側で15cmである。この棚状部分は、SI-313にみられる張り出し部と比べると、床面からの高さが低く、カマド本体上部の方が高くなると思われる。カマド本体の後方施設として、そのままの状態でも機能したか疑問であり、掘りかたの一部として、埋められたことも考えられる。



第429図 SI-343

図示した遺物は3点である。1はロクロ成形の土師器杯である。底部外面は全面に手持ちヘラケズリが施されている。切り難し痕がやや不明瞭であるが、凹んだ部分に回転系切りと思われる痕跡がうかがえる。2はロクロ成形の土師器高台付皿である。皿部は扁平で、高台部の高さがやや高い土器である。3は手捏土器の可能性もあるが、弥生土器とも思われる底部である。底部外面に残る木炭痕は、蕨脈の形状が細部まで明確にあらわれている。

1は中央部の床面から出土した。2は北側から広く散って出土した。壁際の破片は床面であるが、中央のものはやや高い位置である。3も床面からはやや高い位置での出土である。図示しない土器片の点数は343点、重さは4kgである。中央から北側での出土が多く、とくに北西隅周辺はやや集中している。南壁は希薄である。出土量の多寡は堆積土の厚さに比例している。

SI-344 (第430図、図版126・294)

遺跡東部南東端の23S区に位置する。3.5m×3.3mのやや縦長の方形をなし、深さは0.7mである。北西辺にカマドをもち、主軸方位はN-25°-Wである。SI-348と重複し、南西(左)壁中央から西(左奥)隅部が切られている。北西から南東に下る緩斜面に立地するため、南側の遺存が悪い。南東(前)壁はわずかに下部が残るだけで、多くが失われている。また、左壁はまったく遺存しない。出入口ピット・壁溝は検出されなかった。床面はカマド前がやや平坦であるが、南側は地形同様下っている。硬化面はみられない。

カマドは、煙道部の壁が方形ブランから若干突出しているが、構築部分はほとんど遺存していない。壁際下部に床面よりも高まる部分がある。この部分についてカマド部分長軸の土層断面をみると、壁下部は地山の粘土層が露出しており、地山層の一部を掘り残した可能性も考えられる。右側の高まりが右袖の位置と思われるが、左側は高まりが近接して2か所ある。左側の高まりの方が大きい。こちらを左袖とすると、右袖との距離がありすぎるようである。中側の方を左袖と仮定するとバランスがよい。構築材が遺存しないため、特定することが難しい。右側の高まりも確かに右袖の基部といえるかどうかは判断できない。カマド前方の床面に粘土の堆積がみられるが(網点部分)、カマド構築材が流失または破壊後に廃棄されたものであろう。木炭穴のカマド構築材はやや粘性の強いものと思われる。

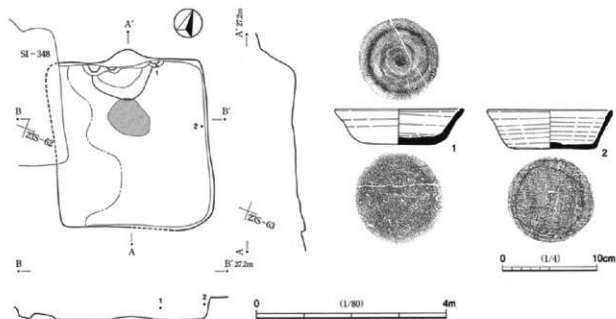
堆積土は、主として下層が黒褐色上、上層が黄褐色土であるが、全体的に淡黄色粘土粒が混じっている。この粘土粒は地山の粘土層から混入したものである。上層は黄色味が強いが、高位から流れてくるローム等の含有が多いのであろう。自然堆積と思われる。

図示した遺物は、新治煎産の須恵器杯2点である。1は比較的遺存のよい土器である。口縁・体部の欠損部を境に2片に割れて接合する。底部内面周縁部には爪形と思われる圧痕が、一部分で放射状にみられる。どのような目的で付いたものか判然としないが、製作に関わるものと思われる。焼成があまく、器面が荒れている。2は口縁部の一部を若干欠損するだけであり、遺存がよい。遺存部分は、やや大きな破片の他に数片の小片が接合している。1・2とも欠損部・割れ方が意図的か不明である。

1はカマド右袖付近の中層から出土した。2も中層からの出土で、平面位置は東(右)壁際中央部である。ともに正位・倒位等の状況は不明である。図示しない土器片の点数は256点、重さは3kgである。位置を記録した遺物が少ないが、中央からカマド側に多く出土していると思われる。

SI-345 (第431・432図、図版126・294・308)

遺跡東部南東端の23S区に位置する。主軸長4.3m、深さは0.7mである。南東側に下る斜面に立地し、



第430図 SI-344

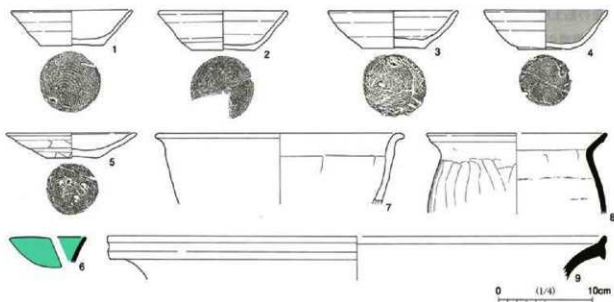
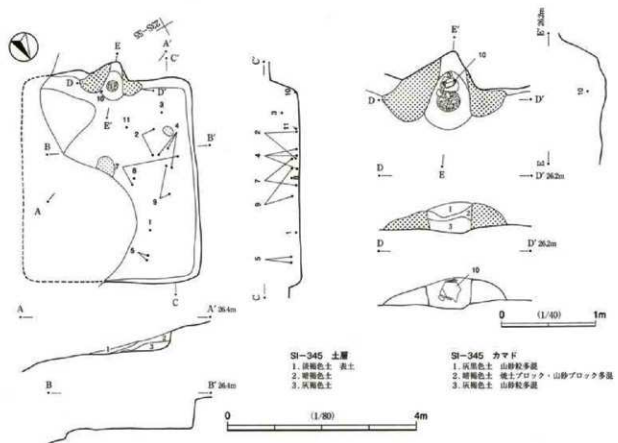
左（東）壁側が多く失われている。副軸長は不明であるが、カマドがほぼ中央に位置するならば、3.5m前後であり、長方形の形態である。南辺にカマドをもつが、カマド位置が周囲の竪穴住居と比べ、特異である。主軸方位はN-153°-Wである。出入口ピットは検出されなかった。壁溝も巡っていない。一部、青灰色の粘土層に掘り込まれており、壁・床面の一部に粘土層が露出している部分がある。遺存のよい右（西）壁側の床面はほぼ平坦である。硬化面はみられない。床面には、焼けて焼土化した部分が2か所みられる。カマド袖部は上部と前側の遺存が悪いが、下半部は構架材の遺存がよく、内壁が赤色化している。火床部も中央に赤色化した面がみられる。

図示した遺物は13点である。1～4はロクロ成形の土師器杯である。4は内面にヘラミガキ・黒色処理が施されている。底部調整については、2が回転糸切り後、周縁に手持ちヘラケズリが施されているが、1・3・4は回転糸切り後無調整である。4は底径が小さく、やや突出している。体部下部が丸みをもつ器形である。3・4はやや遺存がよい。5はロクロ成形の土師器皿である。底部外面は回転糸切り後、周縁に手持ちヘラケズリが施されている。

6は緑釉陶器碗の口縁部片である。胎土は緻密で、釉を除く胎土の色調は黄白色である。

7は土師器甔と思われる。色調は、外面が黒褐色、内面が褐色である。調整は、外面がヘラケズリ、内面がヘラナデである。外面はヘラケズリの前にタタキが施されているようにも思われるが、不明瞭である。外面の色調から、須恵器の可能性も考えられるが、判然としないため、土師器とする。

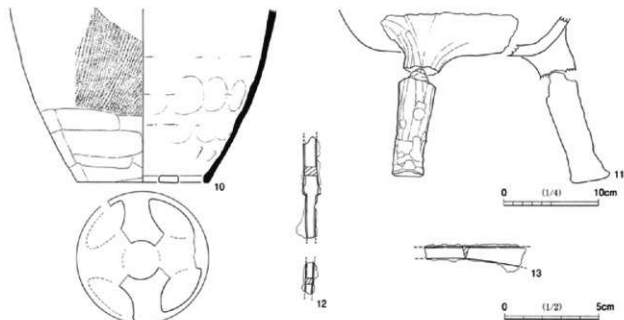
8は須恵器甕である。胴部外面の一部に平行タタキと思われる箇所があるが、ヘラケズリのためほとんど消されている。胴部内面もヘラナデにより当て具痕は残っていない。色調は黄褐色である。須恵器としたが、焼成は須恵器甕でないかもしれない、土師器との区別が難しい。手法に土師器的なところも多い。須恵器甕の焼成であれば、千葉産の須恵器といえるものである。9は須恵器甕で、大型品である。外面の色調は黒灰色であるが、やや褐色味を帯び、一部は強い暗赤褐色である。内面はやや黄色味を帯びる暗灰色で、一部に褐色味を帯びる。胎土は白色針状物・白色粒を多く含む。産地は南比企窯産であろうか。



第431図 SI-345 (1)

10は千葉産の須恵器甗である。胴部中位から底部までの一部の遺存であるが、底面周縁は1/2周以上遺存する。器面の色調はほぼにぶい褐色であるが、断面内部は暗灰色である。

11は火舎である。遺存は、火鉢の体部下位から底部までの一部破片と獸脚1か所である。火鉢の底部外面から脚部が延びているが、別作りの獸脚部を接合する部分で破損している。獸脚は火鉢部分の脚部上部にソケット式にはめ込まれるが、遺存している獸脚ははめ込む部分から下部の遺存である。はめこむ部分



第432図 SI-345 (2)

は手指で山形に作り出されている。表面の一部に指頭痕がみられる。脚部端部の爪先部分は手でひねり出され、一部に指頭痕が残る。端部を除く脚部は断面が不整な円形で、表面は縦方向にヘラミガキ的なナデが施されている。上部にも指頭痕が残る箇所がある。遺存している2片が本来接合するものと思われるが、接合部の表面を欠損するため接合しない。脚部は他に少なくとも2か所存在すると思われる。火鉢部分の内面はナデ、外面はヘラナデ・ナデが施されている。色調は外面が褐色で、黒ずむ部分も多い。内面はにぶい褐色である。焼成は土師質であるが、土師器か須恵器か断定しがたい。

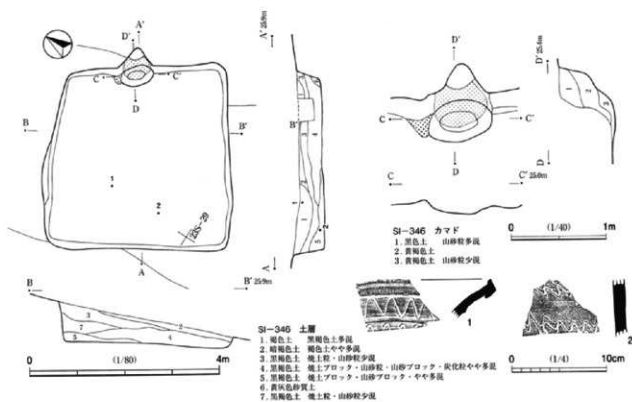
12・13は鉄製品である。12は鉄鎌の棒状部・茎である。茎部分は途中で欠損して2片となる。笠被部分には、低い方形(棘状)突起が作り出されていると思われるが、突起の片側は不明瞭である。突起はかなり崩れており、裾広がりとなるタイプに近いといえよう。

13は刀子である。刃部の破片で、切先を欠く。

図示した遺物のうち、10はカマド内から出土し、11は中央部カマド寄りのほぼ床面から出土した。10は倒位の状態で出土したものである。出土状況の側面図を図示したが、平面の状況が不明瞭であり、出土位置のみ示した。周囲からも土器片が出土しており、図示できない小片となったロクロ成形の土師器杯や常盤型の土師器壺片等が含まれていた。その他の破片資料のなかに、どれくらい10と同一個体となるものがあるか不明瞭である。カマド祭祀に関わる可能性も考えられるが、断定しがたい。なお、10と、その周囲から出土した土器群の一部は被熱により、赤色化および器面の荒れが著しく、支脚に転用された可能性がある。その他の遺物の出土層位をみると、1・2・4が床面・下層からの出土である。図示しない土器片の点数は241点、重さは5.8kgである。遺存する竪穴内全体から出土している。

SI-346 (第433図, 図版127)

遺跡東部南東端の23S区に位置する。4.0m×3.8mのやや不整な方形をなし、深さは0.8mである。北東辺にカマドをもち、主軸方位はN-57°-Eである。北東(奥)壁がやや短く、台形的な形態である。東側に向かう斜面に位置するため、北西(左)壁側の遺存はよいが、南東(右)壁側の遺存が悪い。出入口ピット・



第433図 SI-346

壁溝は検出されなかった。床面は比較的平坦であるが、右壁側がやや低い。床面は全体的に硬質ではないが、カマド前方から南西（前）壁側中央までの部分がわずかに硬化していた。本堅穴は砂層中に掘り込まれているため、確認面でのカマドの確認が不明瞭であった。構築材は壁や堆積土に含まれる砂質粘土よりもやや黄色味が強い程度の土質である。左袖については、わずかに壁側の基部を確認できたが、右袖はみられなかった。確認が難しいものの、袖部構築材の多くは流失していると思われる。火床部奥側の底面から後方の壁は、被熱により赤色化している。堆積土は山砂や焼土粒をやや多く含む土層があるが、暗褐色土・黒褐色土主体であり、自然堆積と思われる。

図示した遺物は、須恵器大型甕2点である。1は口頭部の破片である。折り返された幅広の口縁部に、1条の溝描波状文が横位で、上下に2帯施されている。波状文間は横位の隆起線で区画されている。2は頸部の破片で、1同様、横位の溝描波状文が上下に2帯みられる。波状文は下部が2条、上部はやや不明瞭であるが、3条と思われる。波状文間の区画はない。1・2とも、内面には、降灰による自然軸がかかっている。また、胎土は白色粒・黒色粒・小石を含み、焼成は良好である。2は粒径の大きい小石も含む。色調は、1が明灰色で、2がわずかに暗く青みがかった灰色である。ともに東海産と思われる。

図示しない土器片の点数は174点、重さは2.4kgである。ほとんど奈良・平安時代の土器片であるが、須恵器杯は新治窯産が多く、千葉産が少ない。須恵器甕は、東海産・新治窯産・千葉産が混在している。須恵器甕は新治窯産である。土師器杯はロクロ成形されたものがほとんどで、内面黒色処理のものや回転糸切り痕をもつものがある。土師器甕は常総型が多く、武蔵型が少ない。本堅穴の出土遺物は、1・2を含めて時期的に混在している。本堅穴の時期は、奈良・平安時代としてよいと考えるが、詳細な時期を特定しがたい。遺物分布は散在的で、大きな偏りはないと思われる。

SI-347 (第434図)

遺跡東部南東端の23S区に位置する。東側に下る斜面に、カマド火床部と床面の一部のみが検出された住居である。規模は不明である。竪穴の形態は方形と思われるが、明確に把握できなかった。カマドは北側の壁に設置されたものであり、主軸方位は北側を指向するものと思われる。なお、近くに所在するSI-346は北から大きく東に振れている。カマド袖部は遺存していない。

出土遺物はなく、そのために時代が不明であるが、周囲の様相から、奈良・平安時代の竪穴住居跡の可能性がもっとも高いと思われる。



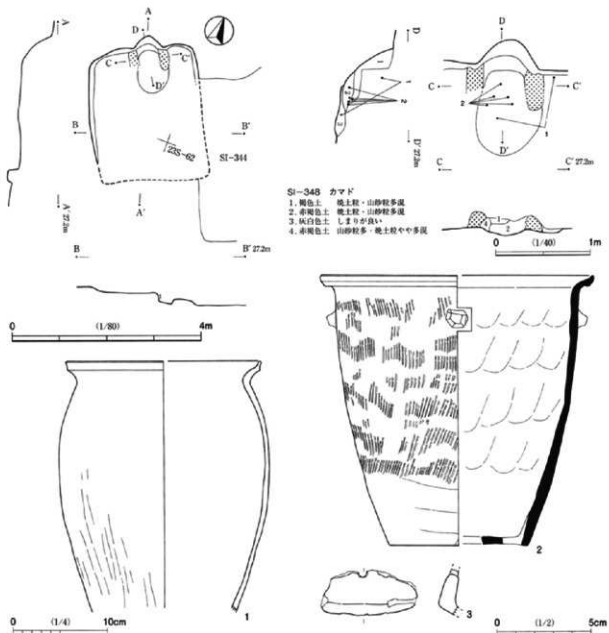
第434図 SI-347

SI-348 (第435・477図, 図版126・294・321)

遺跡東部南東端の23S区に位置する。2.9m×2.4mの長方形をなし、深さは0.7mである。北西辺にカマドをもち、主軸方位はN-25°-Wである。北東(右)壁側でSI-344を切っている。北西から南東に下る緩斜面に立地するため、南側の遺存が悪い。また、粘土質の土層中に掘り込まれているが、堆積土も粘土を多く含むため、床面・壁の確認が困難であった。そのような条件下のため、南東(前)壁については確認できず、プランの想定線を図示した。また、右壁側についても、重複している影響が加わって、不明瞭である。出入口ピット・壁溝は検出されなかった。床面については、カマドの下端を床面の高さと同みして発掘した。硬化面は判然としなない。床面はSI-344の床面よりも高く、SI-344の堆積土下層中に形成されたと思われる。SI-344の堆積土下層は淡黄色粘土層を多く含む黒褐色土であるが、より多く粘土を含む層が本竪穴の貼り床層と思われた。カマドは方形プランからの突出が少なく、袖部はほぼプラン内にある。遺存はあまりよくない。なお、左袖前側と右袖の一部については、床面を把握するため、地山層を掘り抜いたときに削除してしまった。構架材は山砂主体であるが、右袖は褐色土を多く含む。堆積土はローム粒や暗褐色の粘土を含む土層を主体とする。上層は明るく、下層は暗い色調を呈する。

図示した遺物は3点である。1は常総型の土師器甕である。底部周辺を欠くが、上半部はほぼ遺存し、胴部下位も比較的遺存がよい。胴部外面上位の凹圧痕は一部にみられるが、弱い痕跡である。ナデにより消されたか、もともと弱いのであろう。胴部外面中位付近から下位はやや黒ずんでおり、胴部内面下位は荒れている。2は千葉産の須恵器甕である。胴部上位は1/2弱程度遺存する。方柱状の把手は、1か所の遺存である。把手から1/4周の位置にないので、円周を2等分する位置に2か所付けられたものと思われる。側面がやや細かく面取りされている。器面は荒れており、被熱により、赤みが強くなった部分や黒ずむ部分がある。3は用途不明の土製品である。径4mmの焼成前穿孔が施されているが、穿孔部分で割れて、一部の遺存である。穿孔部分の厚さは5mm、周縁近くの厚さは7.5mmである。周縁近くで屈曲する。屈曲した先も欠損しているが、薄くなっている部分が多く、端部に近いと思われる。色調は褐色で、胎土は砂粒を含む。焼成はややあまいが、土師器的な焼成である。香炉蓋の一部とも思われるが、孔が口縁端部に近すぎるため断定はできない。

1は主としてカマド内下層から出土した。2もカマド内を主体に出土しているが、一部の破片が中央部に散っている。出土層位は下層が多いが、上層に浮く破片も何点ある。図示しない土器片の点数は223点、重さは2.6kgである。位置を記録した破片はカマド周辺と中央部南側にやや多い。

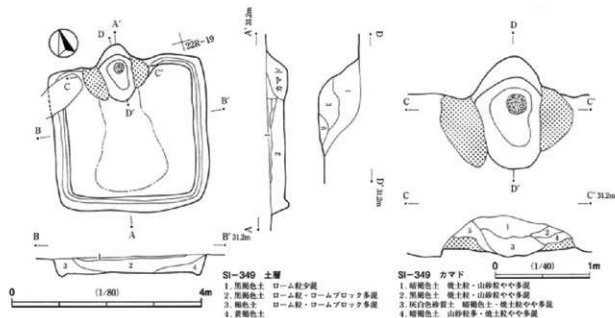


第435図 SI-348

SI-349 (第436図, 図版127)

遺跡東部南西寄りの22R区に位置する。3.3m×3.2mの方形をなし、深さは0.39mである。北辺にカマドをもち、主軸方位はN-13°-Eである。壁溝は全周する。出入口ピットは検出されなかった。床面は平坦で、カマド前から南壁際中央にかけて硬化している。なお、攪乱により、北西隅付近の床面から西壁北寄り部分が破壊されている。カマドの遺存はあまりよくなく、袖下部の遺存である。袖部はほぼ方形プラン内に入っている。火床部底面には、赤色化した面はみられるが、中央よりもやや後ろ側に位置する。堆積土は黒褐色土主体であり、自然堆積と思われる。

図示できるような遺物は検出されなかった。出土遺物は非常に少なく、奈良・平安時代の土器片8点、重さは50gあまりである。このため本竪穴の時期は明確ではないが、奈良・平安時代とすることが妥当と思われる。



第436図 SI-349

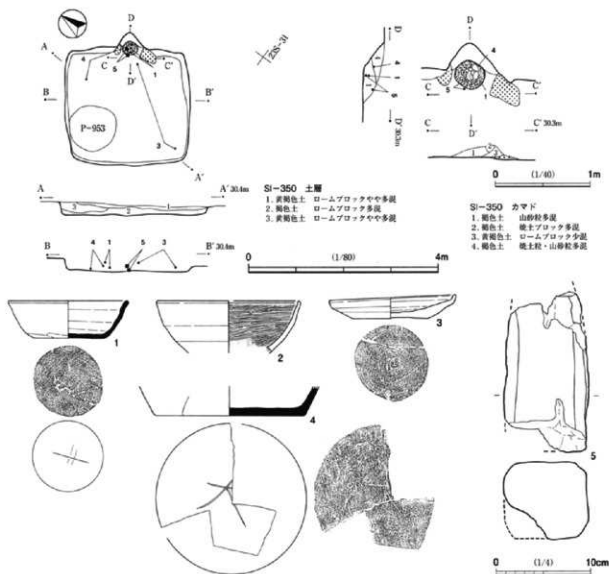
SI-350 (第437図, 図版127・294・316)

遺跡東部南東端の23S区に位置する。2.5m×2.7mの方形をなし、深さは0.22mである。北東辺にカマドをもち、主軸方位はN-55°-Eである。西(左前)隅付近でP-953と重複する。新旧関係は不明であるが、本竪穴の床面よりも深い遺構である。出入口ピットは検出されなかった。壁溝は、カマドのある北東(奥)壁と南東(右)壁にはみられない。北西(左)壁と南西(前)壁については、壁際がやや低くなっており、固化していないが、浅い壁溝が巡っていると思われる。床面は、東側がわずかに低く、地形の傾きと同様である。硬化の違いはみられない。カマドは、両側とも壁側部分の一部のみの遺存である。火床部からは、土製支脚(5)が立った状態で出土し、原位置の可能性はある。

図示した遺物は5点である。1は千葉産の須恵器杯である。やや細かく割れているが完形である。底部調整は回転ヘラ切りした後、2~3方向の手持ちヘラケズリが施されている。そのケズリ痕の筋に直交する形で、1条の線刻がみられるが、ケズリ痕を利用して、「+」または「キ」状の記号を意図したものと思われる。図では、利用したと思われる2条の平行するケズリ痕を図示した。なお、1条線は線刻と思われるが、浅く弱いため、ヘラ書きかもしれない。内外面に火痺痕がみられる。色調は橙褐色およびかなり黄色味を帯びた灰色である。器面は荒れている。2はロクロ成形の土師器杯で、椀形の器形である。遺存は一部分である。内面はヘラミガキ・黒色処理が施されているが、黒色処理は外面口縁部にも影響している。3はロクロ成形の土師器皿である。口縁端部は屈曲して立ち上がり、底径がかなり広い。小型であるが、無台の盤的な器形である。遺存はややよい。体部外面から底部にかけて、1条の筋があるが、器の中心に対して、斜めに入っている。線刻か単なる傷か判然としない。

4は千葉産の須恵器甕である。底部周辺の破片で、底部は1/2弱の遺存である。底部外面に「大」と書かれたヘラ書きがある。漢字の「大」と同じ書き順である。

5は土製支脚である。側面は大きく面取りされて、断面は角の取れた方形である。劣化が激しく、調査時点では、取り上げられない部分もあった。本来は、上部から下部まで遺存していたことが考えられる。

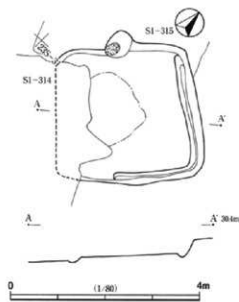


第437図 SI-350

5の右脇上部からは、1がかなり傾いた倒位の状態出土した。また、支脚の後ろ側からは、4が傾いた倒位で出土した。4の一部は左奥隣近くの床面からも出土している。1は支脚補助として転用された可能性が考えられ、4のカマド内土器も同様かもしれない。しかし、ともに線刻・ヘラ書きがあることから、カマド廃棄の祭祀に関わる可能性の方が高いと考える。1は出土時点で、口縁・体部の一部が割れて、はずれているが、割れ方からは意図的と断定しがたい。3はカマド前と右前隅に散って出土したが、やや高い位置からの出土である。図示しない土器片の点数は13点、重さは170gで、ごく少量である。堆積土が薄いことを考慮しなければならないが、少なくとも下層では、カマド周辺を除いて、遺物の包含が少ないといえよう。

SI-351 (第438図)

遺跡東部南東端の23S区に位置する。南東側に谷を臨む緩斜面に立地する。主軸長3m×副軸長推定3mの方形をなし、深さは0.36mである。北西辺にカマドをもつ。主軸方位はN-46°-Wである。北西辺側をSI-315に、南西(左)辺側をSI-314に切られている。床面の深さは、SI-314の方が深いため、左壁



第438図 SI-351

側を失っているが、SI-315よりも深いため、北西（奥）壁側の下部は遺存している。出入口ピットは検出されなかった。壁溝は、右（北東）壁と前（南東）壁側の大部分に巡っている。奥壁にはみられないが、遺構重複による影響の可能性がある。斜面側に巡っていることから、本来全周するものと考えられる。床面はほぼ平坦で、中央部に硬化面がみられる。カマドは方形プランからかなり突出している。カマド袖はまったく遺存しないが、火床部は赤色化した面がみられる。火床部の位置は左右の壁を結んだ位置上にある。堆積土はローム粒を多く含む褐色土・黒褐色土である。上層は下層よりもやや明るい土層である。

図示した遺物はない。土器片の点数は85点、重さは0.8kgと少量である。土器片の内訳は、ロクロ成形の土師器杯、常総型および「房総」型の土師器甕、千葉産の須恵器杯・甕、

新治窯産の須恵器杯である。須恵器は新治窯産がごく少ない。土師器杯の中には内面が黒色処理されたものがある。

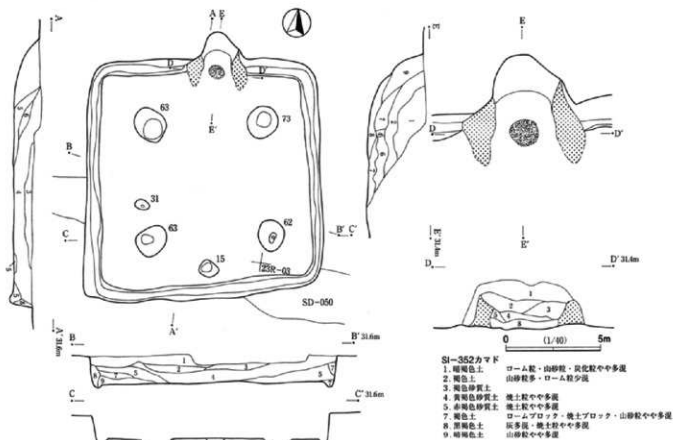
SI-352（第439・477図、図版128・294・295・313）

遺跡東部東寄り23Q区に位置する。5m×4.9mの方形をなし、深さは0.65mである。西壁がやや長い。北辺中央からやや東（右）寄りにカマドをもち、南壁際中央に出入口ピットをもつ。主軸方位はN-8°-Wである。壁溝は全周する。支柱穴が4か所あり、四隅の対角線上に位置する。柱穴の規模は大きく、深い。P3・P4間のP3寄りには深さ約30cmのピットがあるが、本堅穴に伴うものか不明である。床面は平坦で、中央部は硬化している。カマド構築材は山砂と褐色土・ローム粒の混合土である。下部はロームブロックの含有が多い。袖前側は山砂の含有が少なかったため、当初、袖として認識できず、若干掘り過ぎていた。したがって、袖前側については、山砂の残りや硬さ、床面の状況および残存部の形状から判断して、推定線を図示した。両袖内壁は赤色化した部分がみられ、とくに左袖はやや顕著である。火床部底面も中央に赤色化した面がみられる。堆積土は厚く堆積する4層に、ローム粒の含有が少量であり、自然堆積と思われる。

図示した遺物は7点である。1・2は新治窯産の須恵器杯である。2は底部外面に「+（×）」の線刻がある。図示した横線の左側は2条になっている。1の色調は、口縁部内外面が灰黒色で、体部・底部は黄色味を帯びた灰色である。

3・4は常総型の土師器甕である。3は胴部上位にヘラの当たり痕がまわっている。当たり痕は、斜めではあるが、比較的横位に近い傾きである。一部に平行タタキかと思われる点もあるが、判然としない。4は口縁部外面、端部から屈曲する部分に斜位の当たり痕が多くみられる。胴部上位の当たり痕と傾きの方向が逆であり、調整時の正位・倒位の違いがあるものと思われる。

5は須恵器長頸壺の頸部片である。外面の一部にガラス化していない黄緑灰色の釉の付着がみられる。色調もやや黄色味を帯びた灰色である。胎土は黒色粒・白色粒を含み、焼成は良好である。東海産と思われる。

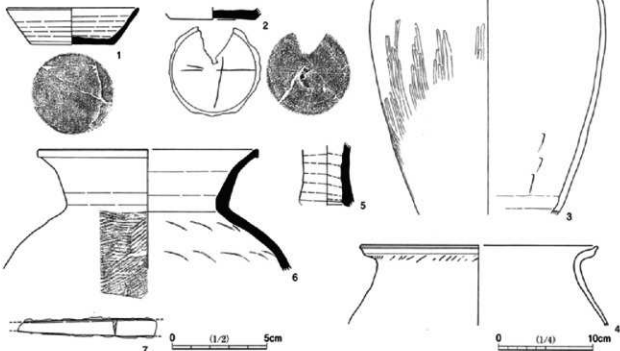


- SI-352の方で
- 1. 暗褐色土 ローム粒・山砂粒・炭化粒やや多量
 - 2. 褐色土 山砂粒多・ローム粒少量
 - 3. 褐色砂質土 焼土粒やや多量
 - 4. 黄褐色砂質土 焼土粒やや多量
 - 5. 赤褐色砂質土 焼土粒やや多量
 - 6. 暗褐色土 ロームブロック・焼土ブロック・山砂粒やや多量
 - 7. 暗褐色土 炭多量・焼土粒やや多量
 - 8. 暗褐色土 山砂粒やや多量
 - 9. 暗褐色土

0 (1/80) 4m

SI-352土層

- 1. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒やや多量
- 2. 暗褐色土 焼土粒・山砂粒やや多量
- 3. 暗褐色土 ローム粒少量
- 4. 暗褐色土 ローム粒・炭化粒少量
- 5. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒やや多量
- 6. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒やや多量
- 7. 暗褐色土 ローム粒少量
- 8. 暗褐色土 ローム粒多量
- 9. 暗褐色土 ローム粒やや多量



第439図 SI-352

6は新治窯産の須恵器甕である。胴部上位の当て具痕は強く残っている部分もあるが、ナデが強く施されて、弱まっている部分もある。口縁部外面のヨコナデもかなり強いが、内面はていねいにヨコナデが施され、器面は比較的滑らかである。色調は灰色で、焼成は良好である。

7は鉄製品で、刀子の刃部破片である。遺存する切先側の端が7mm程度、完全に折り曲げられている。なお、その部分は原形を想定して図示した。

図示した遺物の出土層位は、概して中・上層である。5が下層の出土であるが、遺存のよい個体ではない。平面位置は中央からやや南側に多く、壁際は少ない。3はやや広く散っている。図示しない土器片の点数は816点、重さは12.6kgである。堆積土が厚いことを考慮しなければならないが、多量の遺物量である。カマド周辺から北東側が希薄である他は分布しているが、西側はやや密度が薄い。遺物は概して他所から廃棄されたものや流入したものであり、壁際や床面がある程度埋まった段階から多く廃棄されていったものと思われる。

SI-353 (第440図、図版128・295・313・316)

遺跡東部南端の22S区に位置する、2.9m×3mの方形をなし、深さは0.38mである。西辺中央から南(左)寄りにカマドをもつ。主軸方位はN-77°-Wである。SB-106と重複し、一部を損なっている。出入口ピットについては図示していないが、東(前)壁側中央にある浅く窪む部分に、その可能性がある。ただし、北(右)壁側にも窪む部分が存在するため確実性に欠ける。壁溝は前壁と左壁の大部分では、しっかりとした溝が伴う。その他は図示していないが、右壁の大部分とカマド右側では、わずかに浅い部分のみみられた。均一ではないが、全周に近いと理解できる。床面は比較的平坦で、中央がやや硬化していると思われる。カマドは堅穴の規模同様に小規模である。両袖は下部の遺存で、ローム粒・ブロックを多く含む。内壁はやや赤色化している。火床部底面には、土製支脚(9)が立ったまま遺存していたが、原位置を留めるものであろう。周囲からは被熱した何点かの土器が出土している。堆積土はローム粒を多く含む黄褐色土であるが、台地先端部に立地するため、埋め戻されているとは断定しがたい。右前隅部の床面に焼土が堆積している。

図示した遺物は10点である。1・4・5・7はロクロ成形の土師器杯である。7は底部内面に「+」の線刻がある。4は比較的遺存がよい。5・7の底部は回転糸切り痕が大きく残り、5の周縁は回転ヘラケズリ、7の周縁は手持ちヘラケズリが施されている。4の底部は全面に回転ヘラケズリが施され、切り離し痕は残っていない。1は底部の遺存が少ないが、手持ちヘラケズリが全面的に施されていると思われる。2は非ロクロの土師器杯と思われる。口縁部を除いて、手持ちヘラケズリが施されている。かなり遺存がよいが、細かく割れている。3はロクロ成形の土師器高台付杯である。高台部は剥がれており、遺存しない。6はロクロ成形の土師器高台付皿である。底部調整は回転糸切り後無調整である。底部はやや突出している。

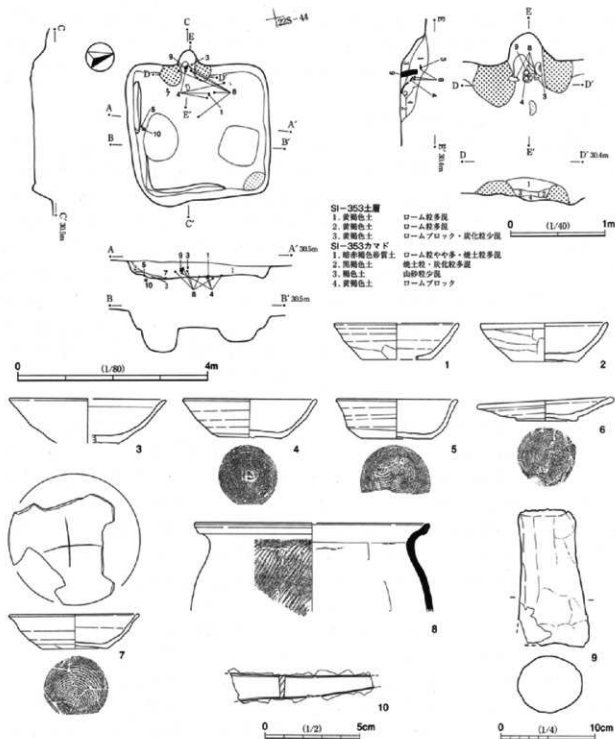
8は千葉産の須恵器甕である。胴部の遺存が悪いが、口縁部は1/2程度遺存する。胴部内面の当て具痕はヘラナデ・ナデが施されて、かなり消えている。

1~8の土器は概して赤みが強い。また、所々に黒ずむ部分もみられる。黒ずみは、とくに、5に顕著である。器面も荒れて、剥離がみられるものも多く、すべて火を受けたものと理解できる。

9は土製支脚である。やや短い。上部から下部まで遺存している。下部は使用に伴い欠損した部分を修繕して使用しているのかもしれない。

10は鉄製品で、刀子である。基の破片であるが、図示した左端は刃部に近いと思われる。

9の周囲からは、3・4が倒位の状態で出土し、8の破片もみられる。4の破片はカマド右袖前方床面に散っている。また、8もカマド右袖前方や中央の床面に散っている。カマド周囲からは、1・7も床面から出土した。5・10は左壁際中央床面から出土した。支脚近くから出土した3・4は強い被熱痕跡が認められ、支脚補助として転用された可能性が高い。また、1・7もその可能性が考えられ、何枚か重ねられていたのかもしれない。なお、3・4は最終的にカマド廃棄の祭祀に使用されたことも考えられる。



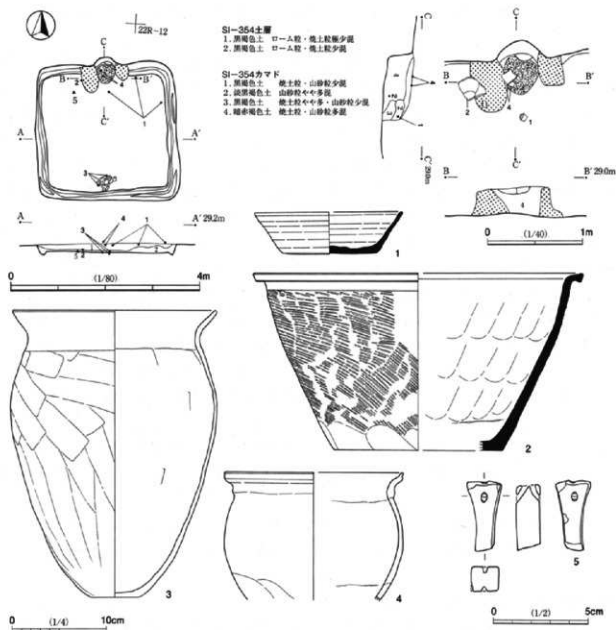
第440図 SI-353

図示しない土器片の点数は231点、重さは2.6kgである。図示した遺物を含めた分布は、カマド周辺に多いが、他からも散在的に出土している。出土層位は床面・下層だけでなく、中・上層もある。

SI-354 (第441図, 図版128・295・313・318)

遺跡東部南西寄りの22R区に位置する。2.9m×2.9mの隅丸方形をなし、深さは0.21mである。北から南に下る緩斜面に位置し、壁の遺存は全体によくない。北辺にカマドをもつ。主軸はN-4°-Wである。出入口ピットは見つからなかった。壁溝は全周する。前側の両隅部など、一部二重になっている部分がある。床面は平坦である。中央部がわずかに硬化しているようであるが、壁側との差は少ない。カマドは右袖の遺存が悪い。火床部底面は、やや赤色化し、中央に若干の焼土ブロックがみられる。堆積土はローム粒の含有が少ない黒褐色土で、自然堆積と思われる。

図示した遺物は5点である。1は新治窯産の須恵器杯である。遺存は少ない。2も新治窯産の須恵器甕



第441図 SI-354

で、バケツ形の器形である。ややあまい焼成である。内面の当て具痕は、ナデと器面の荒れのため、下位でやや消えている。外面の一部に黒色物質が付着している。

3は武蔵型の土師器甕で、器壁の厚さを考えると、かなり遺存がよい。とくに口縁部はほぼ遺存している。やや長胴の器形で、口縁部から底部まで接合する。底部は小さく、やや丸みをもつため、自立しない。口縁部外面は黒ずむ部分がやや目立つ。外面下位は、器面の剥落が多い。内面中位以下は、灰白色物質が付着している。4は常総型の土師器甕で、小型の土器である。胴部外面下位には、横位のヘラケズリが施されている。胴部外面上位には、ヘラの当たり痕が痕跡的に間回している。

5は灰石で、石材は流紋岩質凝灰岩である。縦通しの孔があり、携帯用のものである。孔は厚い側にか所開けられている。小口面に2か所、広い長側面に2か所で、小口面の2か所は連接している。小口面の孔を通して、両方の側面に縦通しされたものである。側面間を貫通するよりも、穿孔作業が軽減されたのであろう。小口面や孔周囲はややざらついているが、その他は滑らかである。孔と反対側の小口面は滑らかではなく、あまり使用されていない。孔が厚い側にあることから、携帯用のまま、薄い部分から片側も存在したのかもしれない。

3は南壁際中央の床面から、つぶれた状態でまとまって出土した。4はカマド内上層から出土し、2はカマド左袖脇の下層、5はそのやや外側の床面から出土した。1はカマド前方から北東隅周辺にかけて、上層から出土した。図示しない土器片の点数は81点、重さは200gと、少量であり、まばらな出土である。

SI-355 (第442図、図版129)

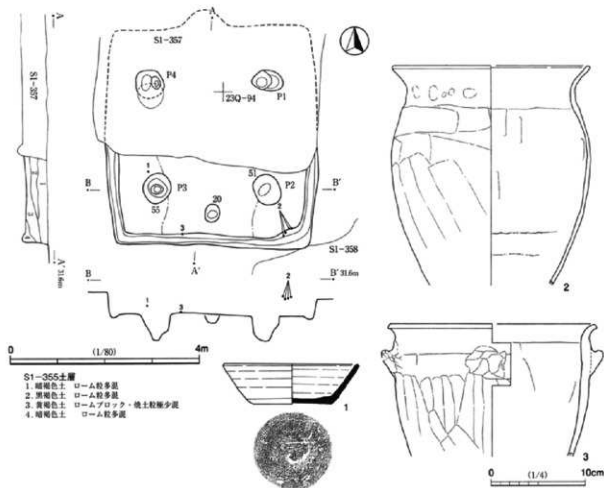
遺跡東部東寄りの23Q区に位置する。副軸長4.5mの方形をなし、深さは0.45mである。北側の半分強がSI-357に切られている。南壁際中央に出入り口ピットがあり、カマドは北壁に位置したことが確実であるが、SI-357に破壊されて存在しない、主軸方位は北となる。主柱穴4か所をもつが、北側2か所の上部はSI-357に切られる。主柱穴と遺存する壁から、失われたプランを想定した。主軸長は推定4.5mである。壁際は遺存する壁には巡っており、全周すると思われる。床面は、東側がやや低いが、地形の傾斜と同様である。中央から出入り口ピット周辺が硬化しているが、硬化は本来主柱穴間が顕著であろう。堆積土はローム粒の含有が少なくないが、中層が黒褐色土であり、自然堆積と思われる。

図示した遺物は3点である。1は新治産の須恵器杯である。底部が遺存するが、口縁・体部の遺存は少ない。2は武蔵型の土師器甕である。口縁部から胴部への屈曲部に指頭痕と思われる凹痕が連続して付いている。屈曲が和らぎ、「コ」の字状口縁を指向し始める形態といえよう。胴部外面下位には煤が付着している。上位もやや黒ずむが、中位には黒ずみがみられない。3は「房総」型の土師器甕である。遺存は把手部分を含む一部である。把手は不整な山形で、雑な作りである。口縁部から胴部上位の内面は縦方向にヘラナデが施され、一部ハケメ的な様相である。その下部は比較的ていねいなナデ・ヘラナデ調整で、横位の方向もみられる。

3は床面からの出土であるが、遺存のよい個体ではない。1は中・下位、2は上層からの出土である。図示しない土器片の点数は218点、重さは1.8kgである。遺存する竪穴全体から出土し、大きな偏りはみられない。

SI-356 (第443図、図版129・295・316)

遺跡東部南西寄りの22R区に位置する。4.2m×4.5mの方形をなし、深さは0.34mである。北辺中央にカマドをもつ。主軸方位は、N-11°-Wである。SI-326に大きく切られている。しかし、木竪穴の方が若

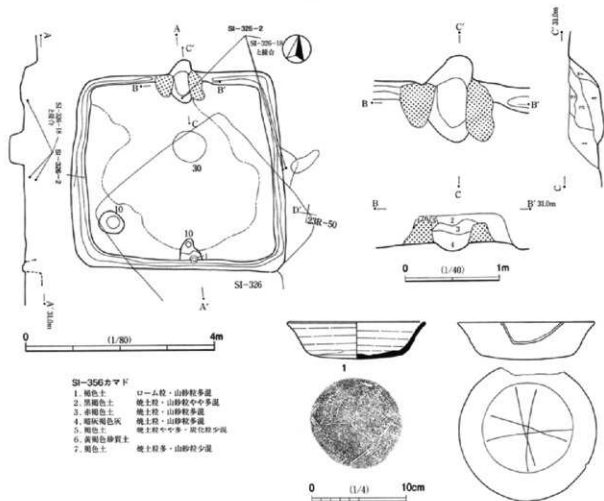


第442図 SI-355

干深いため、重複する部分の壁を若干失う以外は、遺存している。中央付近にP-842があるが、新旧関係は不明である。また、P-841が南壁の南東隅寄りのところでもわずかに重複する。新旧関係は不明である。壁溝は全周する。南壁際中央に出入口ピットをもつ。南西隅側床面に深さ10cmのピットがあるが、他の隅側にはみられない。このピットも隅に寄り過ぎているため、支柱穴とは思われない。周囲にP-841・P-842があることを加味して、このピットも本堅穴とは別の遺構であり、支柱穴は存在しないと考える。床面は東側が西側よりもわずかに高い。硬化面は中央からカマド左側に広がっており、範囲外との差がかなり顕著である。

カマドは両袖が方形プラン内にあり、あまり強く突出していない。構築材は山砂主体で、内壁は赤色化している。堆積土中のローム粒・ロームブロックの包含は下層でやや多い部分があるが、全体的には黒色土・黒褐色土主体である。

図示した遺物は新治窯産の須恵器杯1点である。底部外面に4条線が交差する線刻がある。「+ (×)」の変形というよりは星形(五芒星)を意識しているかもしれない。いずれにしても呪術的な記号である。口縁・体部の一部が逆三角形状に欠損するが、他は割れもなく、遺存する土器である。欠損部は打ち欠きされたものとする。色調は、口縁・体部外面が黒色、他はやや黄色味を帯びた灰色である。色調は元々のものであるが、黒と灰の対照が際だっている。この色調のために、祭祀的土器として選ばれたのではないだろうか。



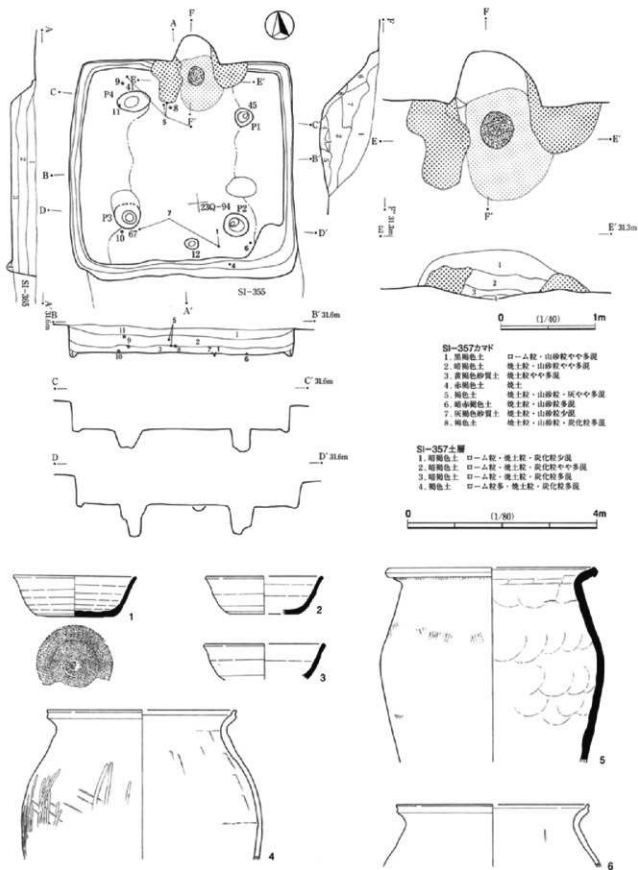
第443図 SI-356

須恵器杯1は出入口ピットと壁溝間の床面・壁溝上から、正位で出土した。本壜穴廃棄時の祭祀によって、出入口部に置かれたものと考えられる。図示しない土器片の点数は73点、重さは1.4kgである。分布傾向は散在的で、大きな偏りはないと思われる。ただし、SI-326出土遺物が若干混じっていると思われる。

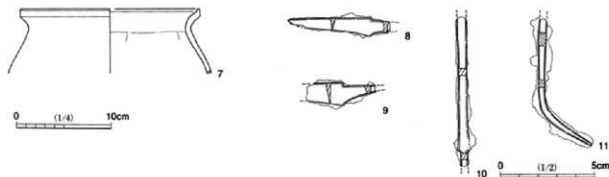
SI-357 (第444・445図、図版295・308・309・313)

遺跡東部東寄りの23Q区に位置する。4.6m×4.7mの方形をなし、深さは0.51mである。北辺やや右(東)寄りにカマドをもち、南壁際中央からわずかに右寄りに出入口ピットをもつ。主軸方位はN-6°-Eである。主柱穴4か所をもつ。壁溝は全周する。南東隅部で広がっているのは、掘りかた底面を露呈させたものであり、本来は溝状である。他三隅部の床面をみると、色調が暗く、暗褐色土を充填して床面を形成したことがわかる。床面を作るさい、まず四隅が深く掘削され、その上に貼り床が施されている。床面は東壁側でわずかに低いものの、ほぼ平坦といつてよい。主柱穴間を主体として硬化している。中央から南側で大きくSI-355と重複し、本壜穴が切っている。本壜穴の床面で、SI-355の北側の主柱穴が確認された。カマドは右袖前側の遺存が悪い。構築材は山砂主体であるが、底面際は暗褐色土を含む。火床部底面中央部には、赤色化した面が明瞭にみられ、周囲に焼土も散布している。堆積土はローム粒の含有が多いが、おおむね暗褐色土である。やや断定しがたいが自然堆積と思われる。

図示した遺物は11点である。1・2・3は千葉産の須恵器杯である。内面の色調は黒色、外面も黒色味



第444図 SI-357 (1)



第445図 SI-357 (2)

が強く、いわゆるくすべ焼成の須恵器である。2・3は遺存が少ない。4・6・7は常総型の土師器である。4は胴部内面中位に、細かい凹凸が多々みられる。粘土継の接合箇所上部に多く、接合に伴う指頭の爪痕であろう。5は須恵器甕である。胴部外面の平行タタキは、ナデによりほとんど消され、一部に弱く残るのみである。胴部内面の当て具痕は、口縁部近くと下位はナデ・ヘラナデが施され、弱まっているが、上位はナデが弱く、よく残っている。色調は、外面が褐色、内面が暗褐色である。やや常総型寛的な器形・調整であるが、千葉産の須恵器と思われる。

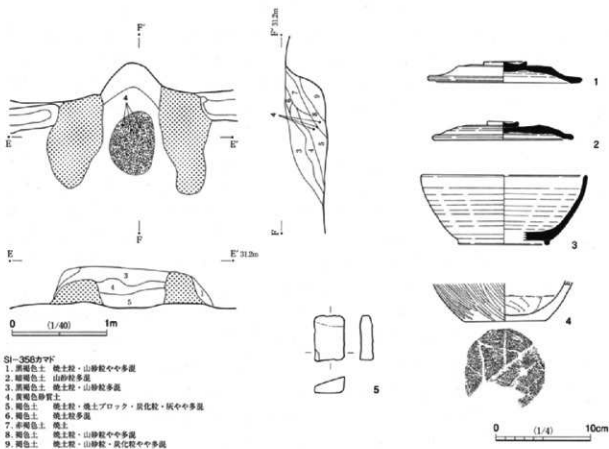
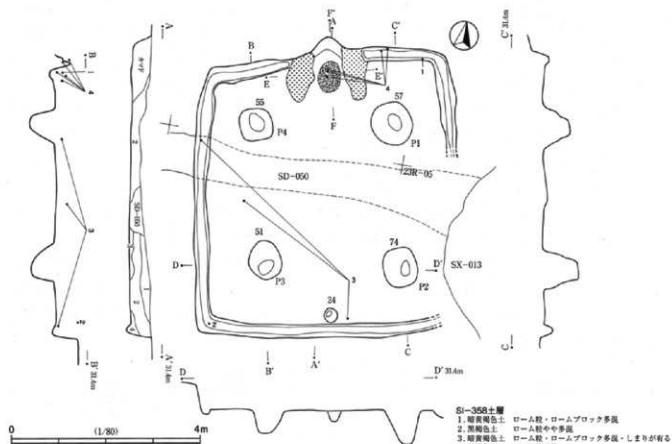
8～11は鉄製品である。8・9は刀子である。8は小型品で、切先も遺存する。9の刃側は錆のため、やや不明瞭である。10は鉄鏝である。長頸鎌の棒状部・茎の破片である。棒状部の茎との境は、わずかに裾広がりととなる。11は棒状品が曲がったものである。図示した下端はやや尖って、そこで終わっている。性格を特定しがたいが、上部が下部よりも幅が広いことから、釘と思われる。

5はカマド左袖前方周辺から出土している。出土層位は中層である。図示した遺物のうち、比較的遺存のよい1の出土状況は、南壁際右寄りの床面である。その他の遺物の出土層位は、床面から中・上層にわたる。図示しない土器片の点数は619点、重さは6.4kgである。比較的多いが、堅穴の規模や堆積土の厚さ、周囲の環境を考えると自然な遺物量であろう。遺存のよい遺物が少なく、土器破片等が周囲から廃棄され、流入し続けた状況を示すと考える。

SI-358 (第446図, 図版130・295・318)

遺跡東部東寄りの23R区に位置する。6m×5.5mの方形をなし、深さは0.36mである。北辺にカマドをもち、南壁際中央に出入口ピットをもつ。主軸はN-11°-Wである。主柱穴4か所をもつ。SD-050により、中央部が東西に切られている。また、東側に所在するSX-013にも切られている。本堅穴は、東側に下る緩斜面に立地するため東壁の遺存が悪いが、重複遺構の影響も加わり、東壁は中央から南東隅近くまで遺存しない。なお、SD-050よりも本堅穴の方が概して深いため、床面と西壁下部は遺存している。壁溝は壁が遺存しない部分を除いて巡っており、本来は全周するものと考えられる。床面はやや損なっている東壁際中央から南側を除いては、ほぼ平坦である。硬化の違いは判然としない。カマドは突出度が弱く、両袖と火床部はほぼ方形プラン内にある。右袖内壁はやや中に入った部分が赤色化している。火床部底面の赤色化した面は明瞭である。堆積土はローム粒の含有が多いが、2層の黒褐色土が厚く、自然堆積と思われる。

図示した遺物は5点である。1・2は新治窯産の須恵器甕である。寸法は、1が大、2が小であるが、外径で1.5cm程度の差であり、あまり大きくない。1の色調は褐色味が強いが、2の色調はやや黄色味を



第446図 SI-358

帯びる程度の灰色である。寸法・色調に違いがあるが、その他はおおむね似ている。天井部外面上部は回転ヘラケズリが施されて平坦であり、釜形の器形をなす。また、口縁部は水平に並び、かえり内面の一部を突出させることで作り出したものである。1のつまみは扁平なボタン状であるが、大きいため、リング状に近い雰囲気をもつ。2は1のつまみを小さくしたような形態である。胎土は白雲母・白色粒を多く含む。3も新治窯産の高台付杯である。杯部は器高が高く、口縁・体部がやや内湾する碗形の器形である。色調は、内面が灰色、外面は灰黒色である。白雲母・白色粒を多量に含む。ややあまい焼成である。

4は常総型の土師器である。胴部下位から底部の破片で、底部外面には木葉痕が残っている。内面は接合痕が顕著である。強いヘラナデが施されている。

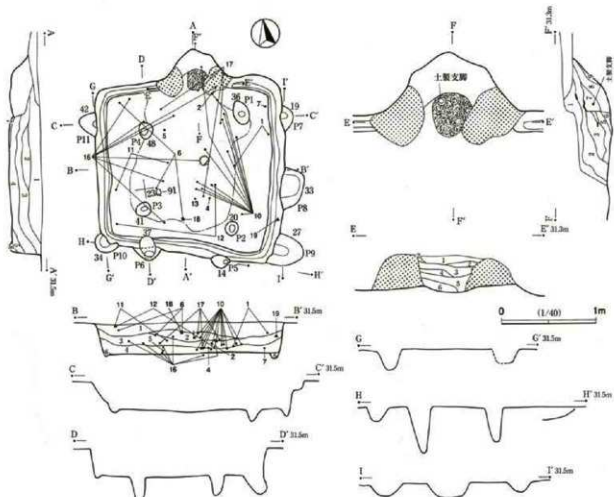
5は砥石で、石材は流紋岩質凝灰岩である。左図の上面は滑らかであり、両方の狭い長側面も比較的平滑である。しかし、左図の裏面と小口面は平滑ではなく、使用頻度が少ない。

4はカマド内下層および右袖脇壁際の下層～中層から出土している。1は北東隅部からの出土で、層位は床面からやや浮いている。2は南西隅部上層の出土である。3は広く散っている。一部が床面出土であるが、他は浮いている。図示しない土器片の点数は271点、重さは5.4kgである。現状では、堆積土が薄い東側側の分布が希薄である。

SI-360 (第447・448号、図版131・295・296・313・314・321)

遺跡東部東寄りの23Q区に位置する。3.4m×4m×4mの台形的な方形をなし、深さは0.66mである。東壁が長く、西壁が短い形態である。北辺にカマドをもつ。主軸方位はN-4°Eである。上柱穴を4か所もつ(P1～P4)。柱穴間の形は竪穴プランに比例する台形である。出入口ピットは見つからなかった。壁溝は全周する。床面は平坦で、主柱穴間からカマド前が硬化している。カマドは方形プランからかなり突出し、火床部の奥側も方形プランから出ている。遺存状態は、右袖が無く、左袖もやや不良である。右袖下部には、床面を掘り残した部分がある。左袖内壁と火床部から煙道部に立ち上がる壁には、赤色化した部分が見られる。火床部奥側や左袖部分から土製支脚が立った状態で出土した。底面はあまり赤色化していないが、被熱により硬化している。堆積土はローム粒を多く含む層もあるが、暗褐色土主体であり、自然堆積と思われる。

本竪穴の壁は、カマド側を除く三壁に、ピットがある(P5～P11)。このピット群については、掘立柱建物という見方と、本竪穴に伴うという見方、また、一部は本竪穴に伴うが、一部は掘立柱建物である、という三つおりが考えられる。そこで、深さを見ると、P5・P6の深さが、他の五穴よりもかなり深い。ピット群が掘立柱建物の柱穴であれば、P5・P6は中間のものであるが、中間の柱穴が隣の柱穴よりも深くなることは、あまり考えられない。したがって、ピットのすべてが、一つの掘立柱建物跡であるという考えは否定される。そこで、P5・P6の位置を見ると、P6は上柱穴P3・P4の延長上にあり、P5は、P1・P2の延長上からはわずかにずれる位置にある。また、P6はP3に近い深さであり、P5はやや浅いが、P2に近い深さである。なお、図に記載した深さは、P5・P6が床面から、他の五穴は確認面からの深さである。以上から、P5・P6は本竪穴に伴う可能性が高く、補助柱穴か、または、P2・P3に代わる上柱穴であることも考えられる。次に、他の五穴を見ると、P7・P11は浅いが、P1・P4の延長上に近い位置にある。また、P9・P10は本竪穴前側の両隅にかかっている。それらのあり方から、他の五穴も本竪穴に伴う可能性があるようにも思われる。しかし、本竪穴の周囲には掘立柱建物が多く、また、完全に竪穴内に位置する柱穴がある場合、本竪穴が深いことから、確認できていない

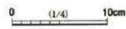
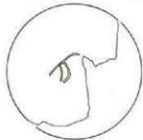


SI-360土層

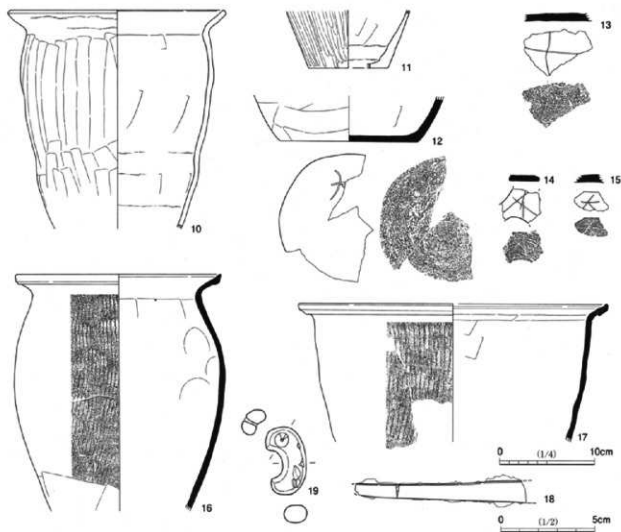
1. 暗褐色土 ローム粒やや多量
2. 暗褐色土
3. 褐色土 ローム粒・焼土粒・炭化粒多量
4. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒・炭化粒多量
5. 褐色土 ロームブロック少量
6. 黄褐色土 ローム粒やや多量
7. 灰白色砂質土

SI-360方D

1. 褐色土 焼土粒・山砂粒やや多量
2. 褐色土 焼土粒・山砂粒・山砂ブロック少量
3. 褐色土 山砂粒
4. 褐色土 焼土多・山砂粒少量
5. 黄褐色土 灰多・焼土粒・山砂粒少量
6. 灰白色砂質土 焼土粒やや多量
7. 暗褐色土 山砂粒多・焼土粒少量
8. 暗褐色土 山砂粒やや多・ロームブロック少量
9. 褐色土 山砂粒やや多量



第447図 SI-360 (1)



第448図 SI-360 (2)

と思われる。本竪穴の一部と他遺構の双方の可能性があるが、別の掘立柱建物の可能性の方が高いと考えておきたい。

図示した遺物は19点である。1はロクロ成形の土師器杯である。内面はヘラミガキの後黒色処理されている。底部内面のヘラミガキは放射状に施されている。

2～9・15は千葉産の須恵器杯である。7・8の色調はやや赤みが強いが、その他の土器の色調は黒色・灰黒色を呈するもので、いわゆるくすべ焼成の須恵器である。5・9はやや小振りの形態である。ただし、9は体部下位・底部が遺存しないため、やや小さく復元している可能性がある。7は比較的遺存がよく、口縁・体部の一部を欠くが、他はひび程度で割れていない土器である。体部外面には、「有」とみえる横位の朱書がある。朱書の存在と土器の遺存状態から、欠損部は打ち欠きされた可能性が高いと考える。朱書は欠損部から約3cmの距離にある。また、7は赤みの強い部分があり、火を受けた可能性がある。朱書と打ち欠きをもつ土器が、火を使用する祭祀行為に使われたと思われる。6の底部外面にも「万」とみえるヘラ書きがある。上の横線は中央で止めて、再度引かれている。そのさい、次の横線の入りが上にやや飛び出したため、「方」と思われる点もある。しかし、飛び出しはわずかであり、「万」を意図したものと考える。8はやや赤みを帯び、器面が荒れていることから、火を受けたものと思われる。15は底部片

である。外面に「大」の線刻がある。図の下側は欠損部につづく。書き順は不明である。

10は「房経」型の上師器甕である。最大径がI緑部にある。胴部は上位から下位にかけて、やや直線的にすぼまっていく形態である。内面のヘラナデ調整は、ヘラの当たりがかなり大きく、一部ハケメ的である。小口の端が利用されたと思われる。I緑部内面にも縦に施され、部分的に深いハケメ状の筋がみられる。この調整は、I緑部を屈曲させる器形に関わる可能性も考えられる。11は常総型の上師器甕である。底部外面は手持ちヘラケズリが施されており、木葉痕はみられない。

12~17は千葉産の須恵器で、先述した15が杯である以外は壺・甕である。12・13・16は甕、14が甕、17は甕または壺である。12の色調はやや黄色味を帯びる黒色、16の色調は内外面黒色で、くすべ焼成の須恵器である。12は底部周辺の破片で、外面には「大」のヘラ書きがある。1画目・2画目は漢字の「大」と同じである。3画目は浅く、順序は不明である。13・14も記号をもつ土器片である。13は底部片で、外面に「+ (×)」のヘラ書きがある。直線的な線が曲がった線を切っている。四方向とも欠損部につづくため、かなり大きな記号である。14も底部片で、外面に交差線のヘラ書きがある。交差線は4条で、孔側に向かうもの以外は欠損部につづく。4条の順序をみると、図の左上~右下の線が4番目、右上~左下の線が3番目である。縦線2か所は右側が浅いことと、接しているため、順序は不明である。縦線2か所と右上~左下の線の接点は1点である。孔は、図の下が中心の円孔、左右が周縁の楕円孔である。16は底部周辺が遺存しないが、他はよく遺存しており、割れも少ない。I緑部は全周遺存する。胴部外面はやや赤みも帯びる。胴部外面中位から下位にかけて、部分的に周回するヨコナデがみられる。胴部内面は上位に、当て具痕が顕著であり、中・下位はナデにより弱まっている。ナデは横方向だけでなく、縦方向にも施され、部分的にやや強い。胴部外面上位から中位にかけて山砂を付着する部分が多い。下位も一部付着している。17の色調は暗灰色である。胴部内面は当て具痕がみられるが、上位にヘラの当たりと思われる痕跡がある。

18は鉄製品で、刀子である。刃部の破片で、切先と側面を欠くが、切先近くまで遺存している。

19は石製勾玉である。石材はめのうである。古墳時代遺物の混入品である。図示した表面側からの片側穿孔で、貫通時に図示した上面備が広がっている。

上製支脚については、図化していないが、上部が遺存し、下部が欠損するものである。上部からは16cmの長さがあり、他に下部の破片がある。支脚としては、焼成が良好である。

16は主要部分が床面中央から倒れて出土した。上部となった胴部下位の破片は広く散っており、出土層位も中・上層である。16については、底部が破損したため遺棄されたという見方と、堅穴住居廃棄の祭祀に伴い、底部が除去されて床面に据え置かれたという二とおりが考えられる。なお、16の一部破片の出土状況は意図的ではなく、他の遺物の出土状況から、自然に破損して散ったものと思われる。7は北東隅の下層から出土した。正位、倒位等の状況は不明である。遺物の状態から、16と運動して堅穴住居廃棄の祭祀に使用された可能性があると考えられる。図示したその他の遺物の出土状況は、堅穴内各所から出土し、6・10・12・17は広く散っている。出土層位は、概して中・上層で、広域分布のものはレンズ状に堆積している。図示しない土器片の点数は896点、重さは7.3kgである。埋積土が厚いが、かなり多い量である。図示した遺物と合わせて、多くのものが、不要物として廃棄された状況を示しているといえよう。

なお、モモと思われる炭化した種子が1点出土している。これについては、第6章で取り上げているので参照されたい。その他、図示していないが、軽石が1点出土している。

遺跡東部中央の22Q区に位置する。3.9m×3.6mの方形をなし、深さは0.44mである。北西(奥)辺にカマドをもち、南東(前)壁際中央に出入口ピットをもつ。主軸方位はN-55°-Wである。南西(左)壁側でSI-364と重複し、切っている。壁溝は全周する。左壁の両隅に床面からの深さが30cm前後のピットがあるが、SI-364との重複で地盤が弱く、壁や建物の強化のため、設置されたものである。なお、左壁際中央部にもピットがあるが、これは、SI-364の主柱穴である。床面は中央部が硬化している。硬化面は弱い起伏があるが、よく踏みしめられている。それに対し、四隅は軟質で、若干色調が暗い。やや深く掘り込まれた掘りかた底面の上に、黒色土を含む土で貼り床されたためである。なお、南(左前)隅部の色調はあまり暗くない。掘りかたが浅いか、ローム粒・ブロックを多く含む土で貼り床されたためであろう。カマド側の壁側がやや低いが、床面上部を若干削除していると思われる。

カマドは両袖前側が崩れて流出しているが、全体としては比較的良好に遺存している。袖構築材は山砂主体である。火床部底面には、灰主体の層が堆積し、その上部に焼土層がみられる。両袖内壁は赤色化し、奥壁もかなり赤色化している。火床部のやや奥側には、土製支脚が立ったまま遺存している。堆積土は焼土粒を多く含む土層である。土器の被熱状況と合わせて考えると、堅穴住居廃棄に伴い、焼却等の火を使用する行為が行われたのであろう。以上の点と、中層がローム粒を多く含むことから、少なくとも中・下層は埋め戻されていると思われる。

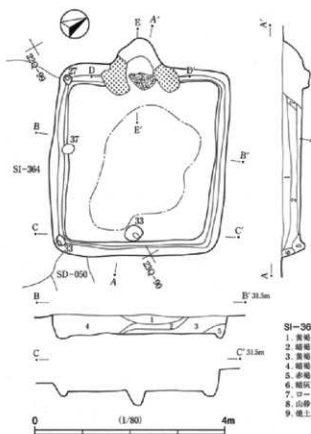
図示した遺物は12点である。1～3はロクロ成形の上層器杯である。1はほぼ完形である。口縁・体部の一部が小さく逆三角形に割れ、さらに2片に割れている。その三角形の下頂部から、割れが延びて、主要部は65:35程度の割合で割れている。被熱により、内面の多くと、口縁・体部外面の一部が赤褐色に変色している。所々に直線的な煤が付着し、器面は全体に荒れている。2は60%程度の遺存であるが、土器の状態は1とよく似ている。3は口縁部の破片で、「大」の墨書が外面に正位でみられる。器面は荒れ、直線的な煤が付着する。墨痕は薄い。1・2と同様の被熱によるものと思われる。

4～7は千葉産の須恵器杯である。4は完形で、割れもひびも入っていない。5は口縁・体部の一部を逆三角形に欠くが、かなり遺存がよい。口縁・体部の一部がやや細かく割れて接合している。4・7は黒褐色、5はやや暗い黄褐色、6は灰色の色調である。

8～10はロクロ成形の上層器高台付皿である。8はやや遺存がよい。被熱により、内面が連続して剥離している。10も高台部外面の一部に煤が付着し、周囲の色調もやや煤けている。いずれも、器面が荒れ、とくに8・9は顕著である。また、いずれも胎土に、粒径の大きい赤色粒を含む。

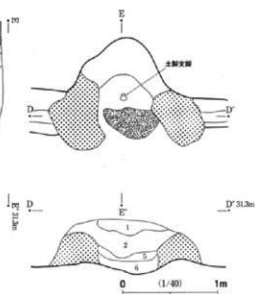
11・12は須恵器甕で、11は小型品である。口縁部形態から須恵器としたが、不明瞭であり、須恵器甕で焼成されていないかもしれない。外面の調整はナデである。タタキ目の痕跡はまったくみえない。内面もナデ・ヘラナデ調整で、当て具痕はみえない。色調は赤褐色であり、被熱痕跡が明瞭である。12は底部周辺部の破片である。11と同一個体の可能性がある。内面の質感にやや違和感があるが、11の被熱痕跡によるものかもしれない。底部外面に「+ (×)」のヘラ書きがある。弱く、やや雑なものである。11同様、底部外面は被熱により、赤みが強い。

1は接合する2片の小片の出上位置が不明であるが、主要部分は出入口ピットからわずかに前壁寄りの中層から出土した。また、5の主要部分が1と同一地点から出土している。ともに、正位、倒位等の状況は不明である。さらに、5は接合する小破片の1点がほぼカマド内から出土している。ほかに接合する小



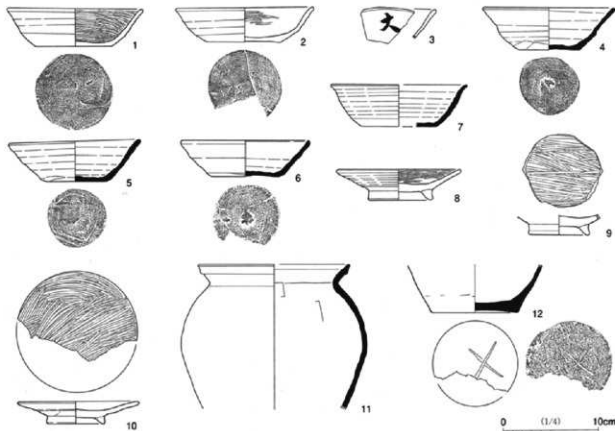
SI-361カマド

1. 黄褐色砂質土
2. 黄褐色土 山砂粒やや多・炭化粒極少量
3. 黄褐色砂質土
4. 黄褐色土 炭土粒・焼土ブロック・山砂粒やや多
5. 赤褐色土 焼土多・炭粒多
6. 暗褐色土 灰多・焼土粒・炭化粒やや多
7. ロームブロック
8. 山砂ブロック
9. 焼土ブロック



SI-361土層

1. 褐色土 ローム粒少量
2. 褐色土 ローム粒少量
3. 褐色土 ロームブロック・焼土粒少量
4. 褐色土 ローム粒・焼土粒多
5. 黄褐色土 ローム粒多
6. 黄褐色土 ローム粒少量
7. 暗褐色土 山砂粒やや多



第449図 SI-361

片が2点あるが、出土位置は不明である。以上から、1・5の小さな割れ目や欠損部は打ち欠きされた可能性が高く、1・5は竪穴住居・カマド廃棄の祭祀に使用されたものと考えられる。なお、主要部分の割れについては、当初からのものか土圧等による後のものかの判断が難しい。完形の杯4は1・5の近く、前壁際石前隅寄りの下層から出土したが、正位、倒位等の状況は不明である。4は1・5とセットの可能性が高い。また、右壁際中央下層のほぼ同じところから出土している9・10も1・5とセットかもしれない。正位か倒位か不明である。割れ方・欠損は意図的か断定しがたいが、10の強い被熱状態は、1との共通点がある。ヘラ書きをもつ12も、祭祀に関わる遺物かもしれないが、11と同一個体とすると、合わせてカマド周辺から出土するのは自然であり、断定しがたい。

その他の遺物では、2・11がカマド内から出土している。2は杯であり、カマド祭祀に関わるかもしれないが、断定しがたい。6・7・8は上層出土である。図示しない上器片の点数は648点、重さは8kgで、多量である。竪穴全体から出土している。その他、図示していないが、軽石が1点出土している。

本竪穴の出土遺物の中には、竪穴住居廃棄の祭祀行為に伴うものがある。その祭祀行為は、火を使用するものであり、建物解体・焼却に関わると思われるが、大きな炭化材がみられない点がやや気がかりである。なお、祭祀行為に関わるか判然としないう層出土の上器群も火を受けていると思われる。それらも焼却に伴って廃棄されたものであり、上層まで埋め戻されているのかもしれない。

SI-362 (第150図、図版132・297)

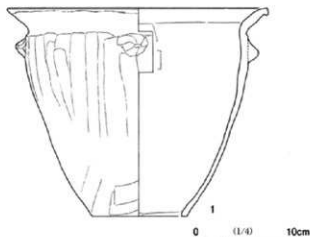
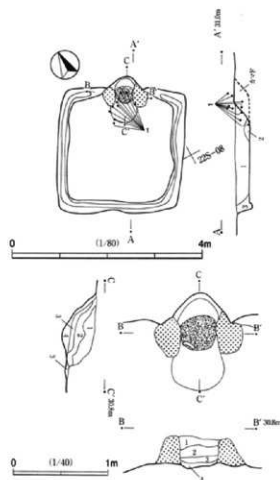
遺跡東部南西寄りの22R区に位置する。2.6m×2.6mの方形をなし、深さは0.3mである。北東辺にカマドをもつ。主軸はN-S1°Eである。壕溝は全周する。出入口ピットは検出できなかった。しかし、南壁中央部分付近は若干攪乱を受けているようであり、判然としないう。床面は平坦である。全体にしまっており、硬化の違いは判然としないう。カマド両袖は比較的遺存がよい。構築材は山砂主体であるが、下部はやや黒色土を含む。火床部底面は赤色化している。

図示した遺物は土師器皿1点である。比較的遺存のよい土器で、口縁部は一部分の欠損だけで、全周に近い。胴部上位も多く遺存するが、下部は1/4程度の遺存である。胴部最上位にみられる把手は土器径を4分割して貼り付けられ、4か所全部が遺存している。把手の位置は、土器径を正確に四等分した場合、3か所はほぼ均等な位置にあるが、1か所だけ若干ずれている。把手はいずれも不整な山形のもので、あまり大きなものではない。底部は単孔のもので、端部内面はヘラにより切られて面取りされている。胴部外面は比較的ていねいなヘラケズリ、内面はヘラナデ後、縦方向にヘラミガキが施されている。胴部外面の一部には、上位から下位まで黒斑がみられる。

1はカマド内から前方にかけて出土し、倒位は床面から上層におよぶ。図示しない上器片の点数は51点、重さは0.6kgである。竪穴が小規模であり、遺物量も少量といえる。まばらな分布であるが、1と合わせて、カマド周辺に多い。1以外の上器片は、新治窯業の須恵器杯・高台付杯・甕、非ロクロの上師器杯、常総製および武蔵型の上師器甕である。

SI-363 (第151図)

遺跡東部南端の22S区に位置する。SI-305・SI-306の調査中に検出されたものであり、SI-306に切られて、南東隅部分しか遺存していない。方形プランの竪穴住居跡と思われる。大きさは不明で、深さは0.46mである。出土遺物はごく少量と思われるが、SI-305・SI-306と混在しており、本遺構の遺物として取り上げられたものはない。遺物の注記はSI-305のままである。



SI-362土器

1. 褐色土・黒色土・ローム粒・ロームブロック多・焼土粒少
2. 灰褐色土・山砂粒多
3. 灰褐色土

SI-362カマド

1. 暗褐色土・山砂粒多
2. 灰褐色土・焼土粒・灰多・しまりが強い
3. 暗褐色土・焼土ブロック多
4. 赤褐色土・焼土ブロック・山砂粒多

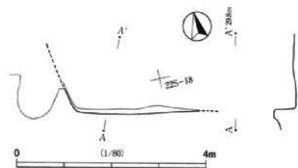
第450図 SI-362

本遺構は奈良・平安時代の竪穴住居跡かどうか不明であるが、その可能性がもっとも高いと考えて、本項で掲載した。

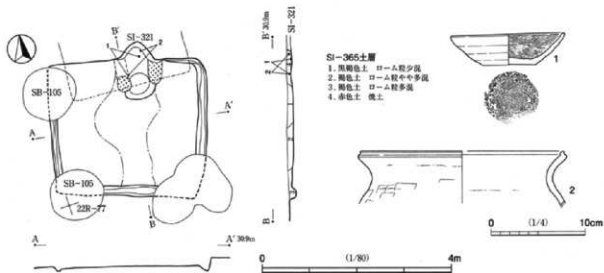
SI-365 (第452図、図版132・297)

遺跡東部南西寄りの22R区に位置する。2.9m×3.3mのやや横長の方形をなし、深さは0.22mである。主軸はN-17°-Eである。北辺にカマドをもつ。北側でSI-321と重複する。調査時では、本竪穴の方が古いと考えたが、遺物の様相から逆とする。また、SB-105と重複し、北西隅・南西隅周辺を損なっている。新旧関係は不明である。南東隅周辺も掘乱を受けて破壊されている。出入口ピットは検出されなかった。壁溝は他遺構との重複部分を除いて、東西南の三壁には巡っている。北壁が不明瞭であるが、本来全周することも考えられる。床面はほぼ平坦で、SI-321よりもわずかに低い。カマド前から南壁際中央まで帯状に硬化している。カマド部分はSI-321と重複しているが、カマド袖の下部が一部遺存している。袖間は前側がやや凹んでいる。赤色化した面はみられない。堆積土は少量のローム粒を含む黒褐色土層主体である。

図示した遺物は2点である。1はロクロ成形の土師器杯である。やや小振りの土器で、底径も小さい。



第451図 SI-363



第452図 SI-365

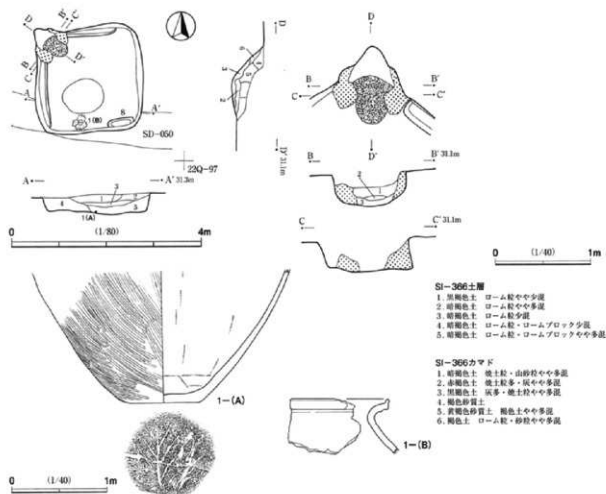
底部調整は、回転糸切り後無調整である。被熱により、内外面とも剥離の著しい部分がある。また、暗灰色に変色した部分もある。2は「房総」型の土師器甕である。小片で、復元図の大きさに不安がある。

1・2はカマド内から出土した。1は被熱の状況から、支脚に転用されたものと思われる。この状況と、1がSI-321の1よりも新しいと思われることから、本堅穴の方がSI-321より新しいと考えられる。図示しない土器片は数点であるが、SI-321出土遺物として取り上げたものの中に、本堅穴内の遺物が含まれている。ただし、堆積土が薄いことと分布状況から、本来少量である。分布はカマド周辺に若干みられる他は、希薄である。

SI-366 (第453図, 図版133・297)

遺跡東部中央の22Q区に位置する。2.2m×2.2mの方形をなし、深さは0.35mである。北西隅にカマドをもつ。出入口ピットは見つからなかったが、出入口は南壁側か、東壁側のどちらかである。南壁側にある場合、主軸方位はN-3°-W、東壁側にある場合、主軸方位はN-93°-Wである。南壁側でSD-050と重複し、壁上部を損なっている。新旧関係は、遺構からは判然としませんが、SD-050に切られている。また、径90cm×70cmのピットにより、中央から南壁寄り部分が切られている。壁溝は北壁・西壁に巡っている。南壁は南東隅付近でみられるが、重複遺構の影響があるため、本来はその部分にも巡っていると思われる。東壁下にはみられない。床面はほぼ平坦で、中央は硬化しているが、若干の凹凸が認められる。カマド両袖の構築材は山砂主体である。袖内壁および火床部底面の顕著な赤色化はみられない。堆積土は暗褐色土主体で、自然堆積と思われる。

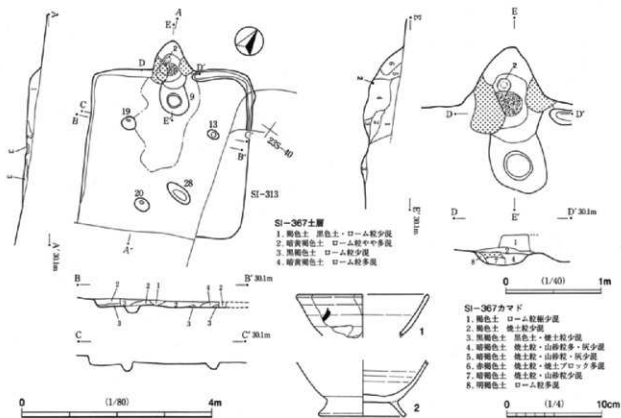
図示した遺物は常総型の土師器甕1点である。胴部下位から底部の遺存がよいが、胴部中位以上の遺存が少ない。同一個体と思われる口縁部片を図示した。底部外面には、2枚の木葉痕がみられる。胴部外面のヘラミガキは密で、ていねいである。内面のヘラナデも密に施され、ヘラの当たりが多く残っている。内面はやや荒れており、また、底部外面周縁もかなり擦れている。胴部内外面の一部に黒ずむ部分がある。胴部中・下位～底部の主要な破片は、南壁際やや左(西)寄りの下層からつぶれた状態の正位で出土した。図示しない土器片の点数は23点、重さは0.3kgであり、少量の出土である。土器片のうち、須恵器杯はすべて新治窯産である。



第453図 SI-366

SI-367 (第454図, 図版133・297)

遺跡東部南端の22S区に位置する。副軸長3.4mの方形をなし、深さは0.25mである。北西辺中央にカマドをもつ。主軸はN-29°-Wである。北西から南東に下る緩斜面に立地し、南壁側が遺存しない。北東(右)壁側が、SI-313を切っているが、本竪穴の床面・壁については、一部を除いて確認できなかった。壁溝は北(右奥)隅付近に巡っているが、カマド左側の壁や南西(左)壁にはみられない。しかし、斜面に位置するため、本来巡らないか不明とする。竪穴内にはいくつかのピットがあるが、カマド前を除く北側の2穴は主柱穴の可能性がある。しかし、南側の2穴は主柱穴・出入口ピットではない。北側の2穴が浅いため、南側のものが確認できていないことも考えられるが、右奥側のピットがやや中央部に寄っていることから、主柱穴が存在しない可能性もある。不明瞭であるが、主柱穴はない可能性の方がやや高いと考える。床面は、奥側から中央部までは、比較的良好に遺存しているが、前側は失われている。遺存のよい部分の深さは、地形同様、北隅付近が高く、他はやや低い。しかし、傾斜はかなり緩やかである。中央部はかなり硬化している。カマドは方形プランからの突出が大きく、火床部は左右に壁をみる位置にある。袖の遺存は悪く、構築材はかなり崩れている。火床部底面はやや赤色化している。なお、カマド前方の床面に浅いピットがある。カマドに関係するものであれば、灰のかき出しによるものと思われるが、ややカマドから離れるため、床面の軟質部を掘っただけかもしれない。堆積土は遺存が少ないため、自然堆積が埋め



第454図 SI-367

戻されたものか、判然としない。

図示した遺物は2点である。1はロクロ成形の土師器杯または高台付杯となろう。小片のため図上復元したものである。体部外面にわずかではあるが墨書がみられる。欠損部にかかり、遺存が少ないため判読できない。被熱により、内外面にひび割れがあり、とくに内面が著しい。また、内外面に山砂が若干付着している。2はロクロ成形の土師器高台付杯である。高台は「ハ」の字状に貼り付けられ、やや高さがある。底部外面中央には、回転糸切り痕がみられる。口縁部は全周遺存しないが、体・底部は高台の一部を欠く他は遺存している。被熱により杯部内外面の一部は赤みを帯び、器面が全体に荒れている。荒れは外面よりも内面がやや顕著である。また、杯部外面や高台部に、若干の山砂が付着しているが、山砂は杯部の破断面にもみられる。

2はカマド内火床部の奥側底面から正位で出土した。土器の状態と合わせて、土製支脚に転用されたことは確実である。なお、1の出土位置は小片のため不明であるが、強い被熱痕跡からカマド内の可能性もある。1と2がセットであれば、2は最終的に1とともにカマド廃棄の祭祀に使われたことも考えられる。なお、破断面の山砂付着から、2は支脚転用時に、口縁部が除去されたと思われるが、あるいはカマド祭祀の時点であったかもしれない。カマド祭祀に使用されたかどうかは確実ではないため、ここでは、前者の可能性が高いと考えておく。図示しない土器片の点数は95点、重さは0.8kgである。

SI-371 (第455・477図, 図版134・297・313・318)

遺跡西部南東寄りの18Q区に位置する。2.9m×2.8mの方形をなし、深さは0.75mである。北辺にカマドをもつ。主軸はN-30°-Eである。南側に下る緩斜面に立地するため、北壁側に比べて南壁側の遺存が少ない。壁の傾斜がややゆるやかである。出入口ピットは検出されなかった。壁溝は北西隅付近でみられ

るが、その他は巡っていない。床面も、地形同様、北側から南側やや下っている。全体にしまっており、とくに硬化した面はみられない。カマドは北壁の高さがあるわりに、あまり遺存がよくない。袖橋素材は山砂に加えて、やや多量のローム粒とやや少量の黒褐色土を含む。遺存が少ないのは、構架材の流出とともに混合土の多さによるものであろう。両袖内壁はやや赤色化しているが、火床部底面はほとんど赤色化していない。カマド前側の床面には、炭化粒の多い範囲がみられる。煙道部は他のカマドと比べて、幅が狭い。堆積土は下層でローム粒の含有が多いが、暗褐色土主体であり、自然堆積と思われる。

図示した遺物は9点である。1は非ロクロの土師器杯である。遺存は少ない。灯明に使われた痕跡はみられない。2は千葉産の須恵器杯である。完形で、割れも欠けもない土器である。体部外面に縦4条、横1条の刻線が交差した線刻がある。縦線の状況から、体部下位から口縁部側に刻まれたことがわかる。刻む作業を容易にするためのだけの目的かもしれないが、倒位の記号と理解しておく。倒位にみた場合、横の線は左側で強く、右側では弱くなり、もっとも左側の縦線にかかる部分は痕跡的である。一部で2条に重なっている。横位の線は、左手で口縁部を持って、土器を横にして、右手で刻んでいると思われる。縦の線は左側が強いが、他の3か所は深く刻まれている。深く刻むため、刻む作業が何度か繰り返されたと思われる。左から2番目の線やもっとも右側の線は、下部（口縁部側）でそれと2条になっている。色調はやや暗い灰色で、外面は若干黄色味も帯びる。3は新治産の須恵器杯である。油煙が付着しており、灯明器として使われた土器である。油煙は2か所にみられるが、1か所は口縁部に付着したものである。内面側を主とするが、外面側にも若干及んでいる。口縁部が1/2程度欠損しているが、欠損した部分の内面にも、油煙がみられる。その油煙は破断面にもかかっていることから、口縁部を打ち欠き、その後も灯明用に使っていると思われる。しかし、外面側に油煙がみられないことから、破断面の油煙は後に付着したものであり、欠損後は使用していないことも考えられる。しかし、欠損が体部下位に及んでいないことから、前者の可能性がやや高いと考える。口縁の欠損以外はほぼ遺存するが、一部に半月状の接合部分がある。打ち欠きされた可能性があるが、他に割れもあることから、断定しがたい。器面は荒れている。胎土は白雲母を多く含み、色調は明るい灰色である。

4は土師器甕で、小型品である。口径が最大径である。器壁が厚く、寸法のわりに重量感のある作りである。調整は比較的いいねいで、胴部外面はヘラケズリの後、一部にハラミガキもみられる。胴部内面も下位はややハラミガキ的なつやがあるが、乾燥が進んだ時点での調整と思われる。底部と胴部内面の接合はやや雑である。5は武蔵型の土師器甕である。底部を欠くが、比較的よく遺存し、とくに口縁部は部分的な欠損である。胴部内面はいいねいなナデ・ハラナデ調整で、器面は滑らかである。

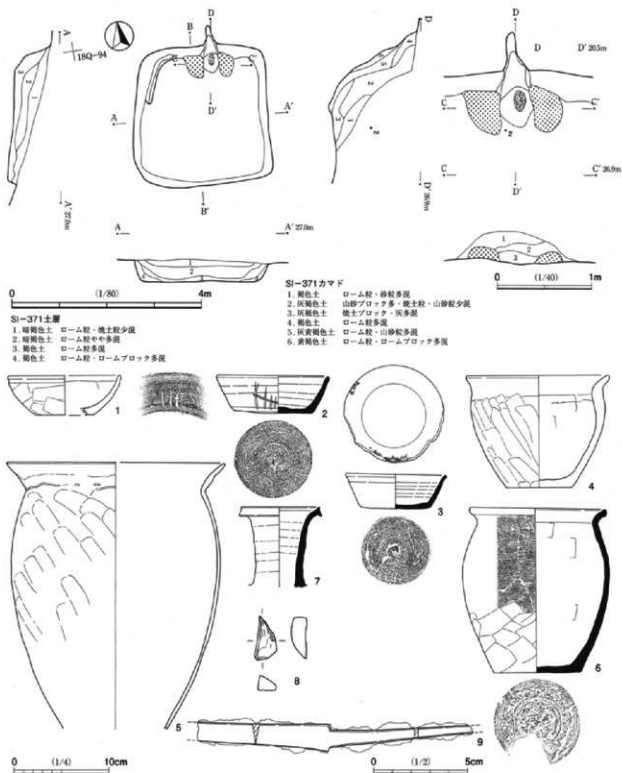
6は千葉産の須恵器甕で、小型品である。比較的遺存がよい。胴部外面のタタキは横位である。内面の当て具痕はナデ・ハラナデによりかなり弱まっている。縄を巻いたものの上で製作されたと思われ、底部外面には、同心円状の痕跡がみられる。色調は内外面とも灰褐色であるが、被熱により、底部外面の多くの部分とつづく胴部下位の一部が黒色に変色している。黒斑と思われる点もあるが、千葉産の須恵器としておく。

7は須恵器長頸甕の頸部である。色調はやや緑色味を帯びる暗灰色である。内外面に、暗緑色の自然釉が付着している。胎土は黒色粒・白色粒がみられる。東海産と思われる。

8は砥石の破片である。図示した平面図からみて、上面の一部と左側面が研ぎ面であるが、他は欠損している。一部に筋状の研ぎ痕も残る。石材は、流紋岩質凝灰岩である。

9は鉄製品で、刀子である。比較的遺存がよいが、切先と茎尻を欠く。

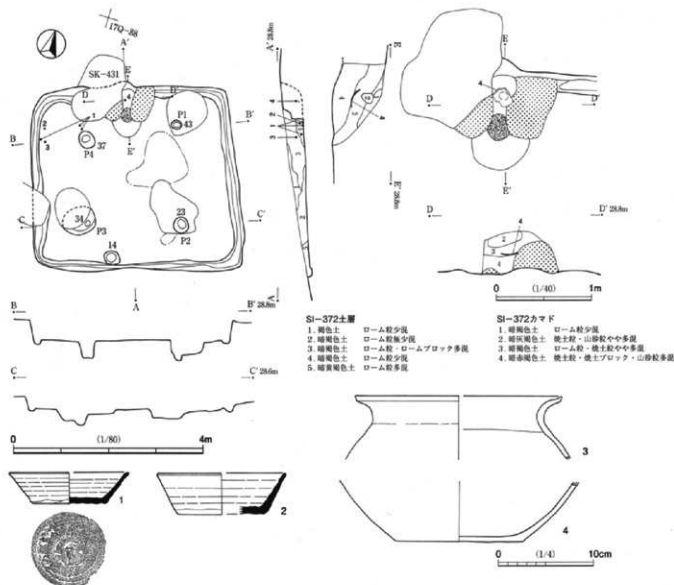
2はカマド左袖近くの前側から出土している。カマド上に置かれた、祭祀に関わる遺物の可能性がある。正位か倒位か不明である。その他の出土遺物は、全体的に中央に偏在している。図示した遺物は右側に多く、5・6はやや散っている。出土層位をみると、1・3は下層で、5も多くの破片が下層出土である。4は一部の破片が床面・下層であるが、一部は上層出土である。7は中層、6・8・9は上層出土である。



第455図 SI-371

遺物出土の層位は床面・下層もあるが、中央に集中していたため壁際は多くの遺物が廃棄される時点でかなり埋まっていた可能性がある。図示しない土器片の点数は276点、重さは3kgである。竪穴の規模が小さいので、図示した遺物と合わせると多量である。遺物は、中央部の窪みに廃棄され続けたものと思われる。SI-372 (第456図, 図版135・297)

遺跡西部南よりの17Q区に位置する。3.9m×4.2mのやや横長の方をなし、深さは0.45mである。北辺中央やや左寄りにカマドをもち、南壁際左寄りに出入口ピットをもつ。主軸方位はN-18°-Wである。南に下る緩斜面に立地し、南壁側の遺存が少ない。壁溝は全周する。主柱穴4か所をもつ。北東側のP1はやや北壁に寄っている。SB-141と重複し、所々を切られている。また、カマド左側にSK-431があり、本竪穴はSK-431に切られている。SD-058が本竪穴を東西に横断しているが、浅いため、上部を切るだけで、床面には達していない。さらに、西壁南寄り部分も、現代の掘乱によって切られている。床面は比較的平坦であるが、北から南にわずかに下っている。床面はほとんどが土間のように踏みしめられた状態であり、やや黒みが強い。中央P1寄り部分に、他よりやや硬化した面が残っている。カマドは方形ブラ



第456図 SI-372

ンからの突出が少ない。左側はSB-141・SK-431によって破壊されて遺存が悪く、左袖前側が残っているだけである。袖構築材は山砂主体である。内壁は赤色化しているが、遺存のよい右袖では中まで及んでいる。火床部底面もよく赤色化した面が残っている。堆積土は、ローム粒を多く含む土層もあるが、緩斜面に立地することと、他遺構の重複が多いため、埋め戻されたものか、自然堆積か、判断しがたい。

図示した遺物は4点である。1・2は新治窯産の須恵器杯である。2は小片から図化したため、大きさに不安がある。2の底部外面には、黒ずむ部分があり、煤が付着したのと思われる。

3は常総型の土師器壺である。4は常総型の土師器壺の一種と思われるが、典型的な常総壺とは若干異なる点がある。3は口縁部・胴部上位の破片である。口縁部は1/2弱の遺存である。胴部外面上位の調整はヘラケズリ後ナデで、ケズリ痕はあまり残らない。4は胴部下位・底部のやや大形の破片で、底部はすべて遺存している。底部は、常総型の壺としてはかなり大きく、外面は全面に大きく二方向のヘラケズリが施されている。中央にヘラケズリとは異なる片痕がわずかにみられ、木葉痕と思われるが判然としない。胴部外面下位はヘラミガキがみられず、右から左への横位・斜位のヘラケズリの後、ナデが施されている。内面もナデが施されるが、胴部下位・底部内面は器面が荒れて剥離する部分もある。色調はぶい褐色で、胎土は白色粒を多く含む。大きな白雲母は含まれない。焼成とナデによる質感から、常総型に含まれると考えるが、底径の大きさや、底部・胴部外面のケズリ調整から、須恵器や「房総」型の壺の影響を受けている可能性がある。3と4は同一個体の可能性があるが、大きさの整合という点で断定できない。常総型の壺は質感が似ている場合も多いため、可能性の指摘にとどめる。

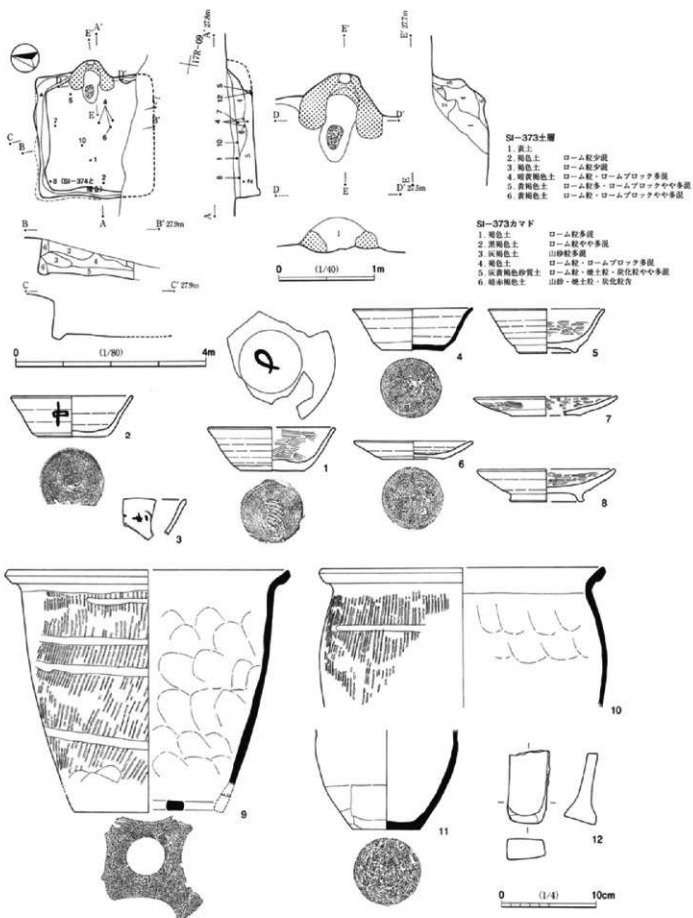
4はカマド火床部やや奥壁の中層から正位で出土し、3はやや離れた西壁際北寄りの中層から出土した。1・2は北西隅周辺の床面・下層からの出土である。図示しない土器片の点数は321点、重さは2.8kgである。遺物は堆積土の遺存が少ない南東側を除いて偏りなく分布し、層位も床面から上層にわたる。

SI-373 (第457図、図版135・297・298・318)

道跡西部南よりの17Q区に位置する。上軸長2.6mの方形をなし、深さは0.7mである。東辺にカマドをもつ。下軸はN-78°Eである。南(右)壁側がSD-041に切られて、欠損している。遺存する壁には、壁溝が巡っている。地形は北から南に下っているが、南壁側も巡っていた可能性がある。壁はオーバーハンドしている部分もかなりみられる。出入口ピットは検出されなかった。床面は、北(左)壁際から中央までは、わずかに下るものの、比較的平坦である。全体にしまっており、とくに硬化の違いはない。カマドはやや小規模である。両袖の構築材は山砂主体である。内壁は若干赤色化しているが、火床部は赤色化した面がみられない。堆積土はローム粒を多く含むが、緩斜面に位置することから、埋め戻されたものか、自然堆積か、判断しがたい。

図示した遺物は12点である。1～3はロクロ成形の土師器杯である。1は底部内面に墨書がある。「L」の小文字のような形で、記号であろう。墨痕が非常に薄くしか残されていない。底部外面も可能性があるが、墨書と断定するまでには至らなかった。2も「中」と読める墨書が体部外面に正位でみられる。1同様、墨痕が薄い。1は底部が遺存し、2の底部も残りがよいが、口縁・体部はともに1/5程度の遺存である。2は内外面の一部が黒ずんでいる。3は口縁・体部の小片である。「二寺」と読める墨書が、体部外面横位にみられる。内外面とも器面が荒れている。

4は千葉産の須恵器杯である。二次焼成により、内外面とも赤褐色の部分が多い。とくに、内面は顕著である。本来の色調は暗灰色色と思われる。口縁・体部の一部を欠くほかは遺存している。遺存部分は右



第457図 SI-373

片の接合である。

5はロクロ成形の土師器高台付杯である。口縁部の多くを欠くが、その他は遺存している。二次的な被熱により、器面は荒れ、内面は剥離も目立つ。色調も赤みを帯びる部分があり、とくに外面は顕著である。また、内面は黒ずむ部分があるが、黒色処理ではなく、被熱によるものである。高台は低く、貼り付けはやや雑である。底部外面中央に、回転糸切り痕が若干残っている。

6・7はロクロ成形の土師器皿、8はロクロ成形の土師器高台付皿である。6は数点の破片が接合したものであるが、完形である。器面がざらつき、色調にもぶい褐色であることから、千葉産の須恵器の可能性もある。底部外面は回転ヘラケズリが全面に施され、切り離し痕がみえない。胎土は赤色粒・黒色粒・白色粒を含む。7は遺存が少ない。8は1/2弱の遺存である。褐色の色調であるが、内面は黒色部分が多い。4・5同様、火を受けている。

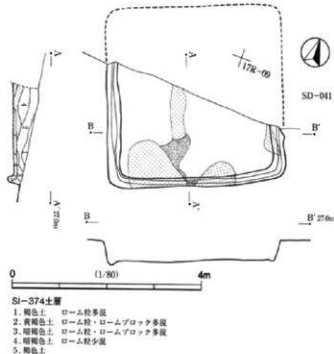
9は千葉産の須恵器甔である。底部の破片と口縁部～胴部下位の破片に分かれ、接合しない。底部は五孔式で、中心の円孔が遺存する。円孔の径は4cmで、ほぼ正円の平面形である。内面の当て具痕はよく残り、一部で鋭い。色調はかなり暗い灰色である。10・11は千葉産の須恵器甔である。10は広口の器形で、遺存は一部である。色調は暗赤褐色である。11は小型品である。底部外面には砂目状の痕跡が残り、大・中の須恵器甔と同様の製作台上で製作されている。しかし、胴部内面には、ロクロ目が顕著に残り、ロクロを使用して成形されたことがわかる。胴部外面下位はその後、横位の手持ちヘラケズリが施されている。色調はかなり暗い灰色である。

12は砥石である。石材は流紋岩質凝灰岩である。研ぎ減りして、かなり薄くなっており、途中で割れている。割れた面以外はよく使用され、滑らかである。小口側はかなり厚い。

図示した遺物は、5・12が床面・下層である以外は、概して中・上層からの出土である。図示しない土器片の点数は271点、重さは3.7kgである。堅穴全体に分布するが、前壁側に多い。

SI-374 (第458図、図版135)

遺跡西部南端斜面部の17R区に位置する。一辺が3.7mの方形をなし、深さは0.5mである。南壁の長さを計測できるが、主軸側か副軸側か不明である。防空壕(SD-041)に切られて、北側を半分程度失っている。カマドは北壁か東壁のどちらか失われた部分に位置するが、出入口ピットが検出できなかったため設置壁は不明である。もっとも近くに所在するSI-373は東壁に位置するが、その北側のSI-372は北壁に位置するなど、周囲の堅穴のカマド設置壁が一つの傾向にまともでない。カマドが東壁に位置する場合、主軸方位はN-68°-E、北壁に位置する場合、主軸方位はN-22°-Wである。北から南に下る緩斜面に立地するため、南壁側の遺存がやや悪



第458図 SI-374

い、遺存する壁には、壁溝が通っている。斜面側の南壁にもみられるため、全周すると思われる。床面はほぼ平坦である。全体にしまっており、とくに硬化した面の存在は認められない。床面上には、厚さ約10cmの焼土・炭化物が堆積している。当初、防空壕に伴うものと判断し、多くを除去したため、図示したのはその一部であるが、実際は全面に堆積していた。良好な遺物の出土がないため、家塚の焼却によるものと思われる。その上層はローム粒を多く含むが、緩斜面に位置するため、埋め戻されたものか自然堆積かは判断しがたい。

図示した遺物はない。出土した土器片の点数は103点、重さは0.9kgである。土器片の内訳は、ロクロ成形の土師器杯、千葉産および新治窯産の須恵器杯・甕、常総型および武蔵型の土師器甕である。須恵器は千葉産が多く、新治窯産は少ない。

SI-375 (第459・477図、図版136・298・318)

遺跡西部南よりの17Q区に位置する。3.6m×3.7mの方形をなし、深さは0.68mである。南西辺にカマドをもつ。主軸方位はN-115°-Wである。カマドを上にしてみた場合の平面形が、やや逆台形である。出入口ピットは見つからなかった。カマド左側から左(南東)壁中央にかけて、SD-059と重複するが、SD-059の方が浅いため、上部の欠損にとどまる。また、右(北西)壁隅が若干の擾乱を受けている。壁溝は、右奥(西)隅付近が擾乱の影響により不明瞭であるが、本来は全周すると思われる。床面は右前(北)隅付近が高く、左奥(南)隅付近が低い。しかし、中央部は比較的平坦で、やや硬化している。カマド両袖は遺存が悪く、床面に下部がわずかに残るのみである。火床部奥側底面から土製支脚が出土している。直立した状態で出土しているが、平面位置がやや奥に寄りすぎていると思われる。火床部底面は全体に凹んでいる。

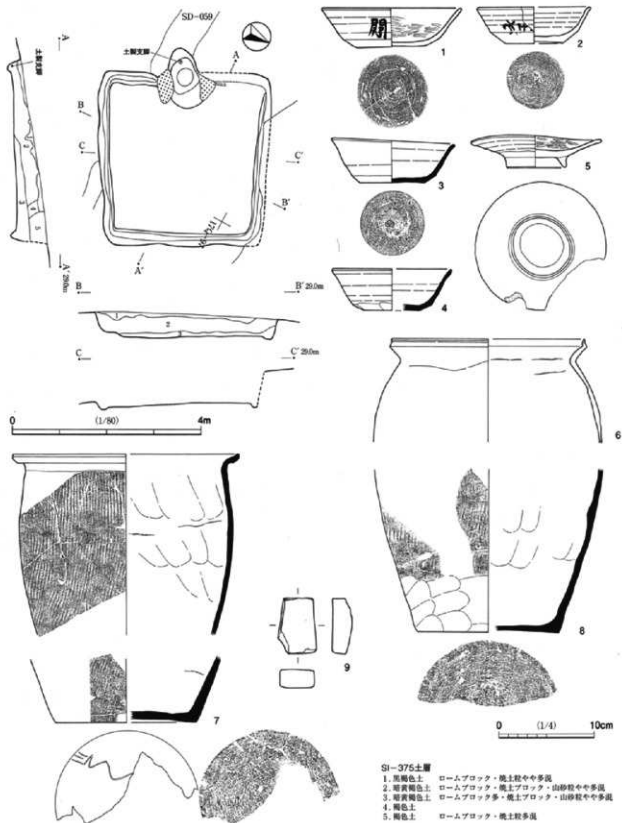
図示した遺物は、9点である。1・2はロクロ成形の土師器杯である。1は口縁・体部の一部を欠損するが、その他は遺存する。欠損部の割れ口は弧状であり、遺存部分はその最下部から2片に割れたものの接合胴体である。2片の比率は7:3程度である。口縁・体部外面に円筒形の墨書文字が正位でみられるが、それ以上は不明である。墨書は欠損部からやや離れた位置である。全体に器面は荒れ、口縁部内面や外面の稜は磨耗が著しい。また、外面の一部にかなり赤みを帯びる部分がある。欠損部は打ち欠きされた可能性があると考えられる。2は口縁・体部の1/2強を欠損する土器である。口縁・体部外面に横位の墨書がある。「少千カ□」とみえるが、「千」と思われる2字目のところで欠損部にかかる。3字目と思われる文字がわずかにみられるが、2字目の一部の可能性もあり、判断しにくい。

3・4は千葉産の須恵器杯である。3は割れもひびもない完形品である。色調は黄暗灰色であるが、外面の一部が、赤褐色である。二次被熱ではなく、焼成に関わるものである。2は一部を遺存で、色調は黒色である。

5はロクロ成形の土師器高台付皿である。口縁・体部の2か所に欠損があるが、その他は割れもひびもなく、比較的遺存がよい土器である。欠損部の1か所は口縁部周で1/4弱を欠き、割れ口は弧状である。もう1箇所はかなり小さいもので、大きな欠損部からわずかに離れた位置にある。ともに打ち欠きされた可能性があり、とくに小さい欠損は、口縁部内面から外面に向かって打撃が加えられたように思われる。高台部は遺存しており、やや窪に貼り付けられている。

6は常総型の土師器甕である。胴部の凹凸が著しい。胎上は小石・白雲母を多量に含む。

7・8は千葉産の須恵器甕である。7は口縁部・胴部中下位と胴部下位・底部の2片に分かれ、接合し



第459図 SI-375

ないが、質感・出土地点から同一個体と思われる。底部外面には、ヘラ書きの記号がある。「W」または「M」のアルファベットが崩れたような形の端は欠損部につづく。もう一方の端は横1条、縦3条の線がみられ、底部の端となる。8は当て具痕が胴部内面下位まで顕著である。7の色調は概して暗黄灰色、8

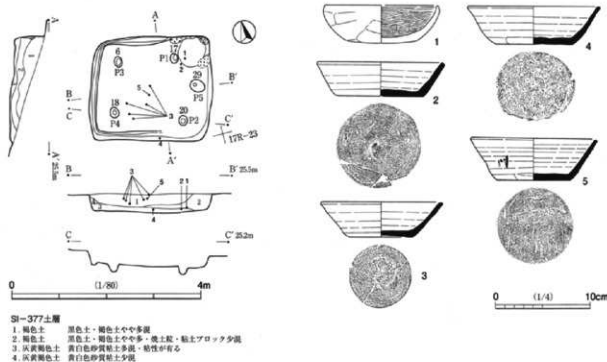
はにふい褐色である。

9は砥石で、石材は流紋岩質凝灰岩である。欠損した部分を除いて、全面が使用されている。図示した上部の小口面と左側の狭い長側面には、筋状の研ぎ痕が顕著にみられる。

図示した遺物のうち、3は中央部やや前寄りの床面から出土した。正位・倒位等の状況は不明である。7はカマド周辺から出土した。出土層位は床面から中層にわたる。3以外では9が下層出土であるが、その他は、概して床面から浮いている。平面分布をみると、4・8は広く散っている。図示しない土器片の点数は322点、重さは3.9kgである。図示したものと合わせた平面位置は、竪穴全体にみられるが、左右壁の奥側がやや薄いと見える。

SI-377 (第460図, 図版136・298)

遺跡西部南端斜面部の17R区に位置する。南北2.2m×東西2.6mの長方形をなし、深さは0.65mである。北東隅にカマドをもつ。北から南に下る斜面に立地し、北壁側の遺存はよいが、南壁側の遺存が悪い。しかし、流失は床面までは達していない。壁溝は、北壁・西壁および南壁西側に巡っているが、南東隅から東壁にはみられない。床面には5か所のピットが検出されたが、このうち、北東側のP1はカマドに近い。主柱穴か疑問がある。しかし、P2・P4は対角線上に位置し、P1・P3も対角線上からややずれる程度であることから、P1～P4は主柱穴としてよいであろう。P1はもう少し北東隅寄りに位置する方が竪穴プランとのバランスがよいが、カマドを若干避けて設置されたものと思われる。カマドの右脇、東壁際中央にもピット(P5)がある。出入口ピットとしてはあまり例をみない位置であり、可能性の指摘にとどめる。カマドが隅カマドであり、出入口側も断定し難いため、主軸・副軸は判然とし難い。仮に東壁側から西壁側に向かう方向を主軸とすると、方位はN-73°-Wである。なお、南壁側が出入口であった場合、南壁から北壁に向かう方位は、N-16°-Eである。床面は比較的平坦である。壁下部から床面は、やや黄白色の山砂や灰白色粘土混じりの土層となる。床面は全体に若干しまっているが、とくに硬化した



第460図 SI-377

面はみられない。カマドは平面的にはプランからの突出が少ないが、隅部の壁を掘り込んで構築されている。奥壁の下半部は地山の灰白色粘土層が露出している。奥壁中位はかなり強く赤色化している。両袖は壁際にみられる程度で、遺存が悪い。火床部底面は床面よりも窪んでおり、赤色化した面はみられない。堆積上は周囲の地山構成土を含む土層がレンズ状に堆積し、自然堆積と思われる。

図示した遺物は5点である。1は非ロクロの土師器杯である。I縁部の遺存は少ない。器面は荒れており、とくに内面の磨耗が著しい。I縁・体部外面の一部が黒ずんでいる。胎土は赤色粒と淡灰緑色土を多く含む。2～5は須恵器杯で、2・4・5は新治窯産、3は千葉産である。5はひびが入るものの、割れていない完形の土器である。体部外面に正位と思われる墨書があるが、判読できない。墨痕はやや薄く、上部は磨滅していると思われる。2もI縁部をわずかに欠くだけで、非常に遺存がよい土器である。I縁・体部から底部にかかる一部が逆台形状に割れて接合している。断定しがたいが、出土状況を加味すると、打ち欠きされた可能性があると思う。3・4は底部の遺存がよいが、I縁部は1/4弱の遺存である。4・5は白雲母や白色粒等の小石を多量に含むが、2にはあまり含まれず、とくに白雲母は肉眼ではほとんどみられない。しかし、形態や色調から、新治窯産としてよいと考える。2・4・5とも、器面は磨耗している。3の色調はやや暗い灰黄色である。

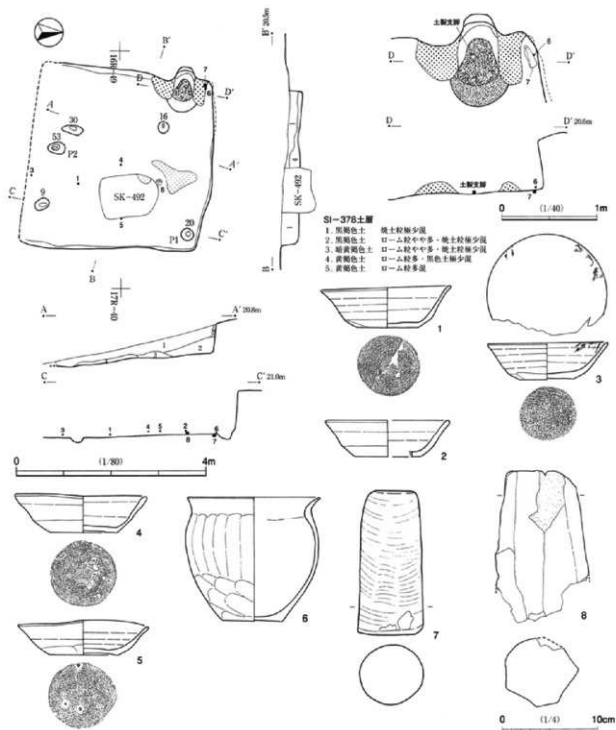
遺存のよい2はカマド前または床面からの出土である。正位、倒位等の状況は不明である。1は2の近くの下層、4は南壁際下層からの出土であるが、良好に遺存する土器ではない。3・5は中央部中・上層からの出土である。図示しない上器片の点数は14点、重さは300gであり、図示したもの以外の出土は少ない。出土遺物のうち、2は断定しがたいもののカマド廃棄の祭祀に関わる可能性がある。3・5はかなり堆積が満ちた時点で、廃棄されたか流入したものであろう。

SI-378 (第461図、図版137・298・316)

遺跡西部南西端斜面部の16R区に位置する。東西長3.75mの方形をなし、深さは0.45mである。立地する斜面は北から南にドっており、南(左)壁際の壁・床面が遺存しない。カマドは西壁にあるが、北西(右奥)隅際に位置しており、隅カマドに近いあり方である。出入口側が判然としないが、カマドを基準に、西壁側を奥側、東壁側を前側、南壁側を左側、北壁側を右側とする。中央前寄りの床面にSK 492があり、本竪穴を切っている。

床面上には5か所のピットがあるが、4本柱の主柱穴に該当するものは存在しない。北東(右前)隅に位置するもの(P1)はカマドに対向する位置にあり、出入口ピットの可能性がある。しかし、隅部に位置するため、出入口ピットとしてあり得るか疑問もある。また、左壁際中央にあると思われるもの(P2)も、かなり深い。平面位置から出入口ピットの可能性がある。カマドに対向する位置ではないが、隅カマドの場合でも、通常では出入口ピットが隅部に位置しないため、位置的にはあり得る。深すぎるのが難点であるが、地山層が台地上の立川ローム層上層ではないため、植物根等の影響も考えられる。ただし、周囲に他のピットがあることから、P2についても断定しがたい。P1・P2とも決定的ではないが、出入口側は南壁か東壁のどちらかであると思われる。南壁側である場合、主軸方位はN-83°-W、東壁側である場合、主軸方位はN-87°-Wである。壁溝は検出されなかった。床面はやや粘性の高い土層に構築されている。全体にしまりがよいが、とくに硬化した面はみられない。南側の床面は地形と同様に低いが、やや損なわれていると思われる。

カマドについては、当初は確認できず、かなり掘り下げた段階で確認した。そのため、カマド内堆積土



の土層断面図は省略した。両袖の遺存状態はあまりよくなく、下部のみの遺存であった。構築材は山砂主体であるが、若干のローム粒を含む。内壁はやや赤色化している。右袖脇はすぐ右壁であり、わずかな空間しか存在しない。火床部もやや赤色化しており、中央からは土製支脚片が出土した。それとは別に、完形の土製支脚（7）が右袖と右壁の間の床面上から出土した。火床部前側の突き口あたりには、炭粒粒の分布範囲がみられる。

中央右寄りの床面上からは、山砂が焼土化したと思われるブロックが検出された。右壁からは離れてお

り、壁に設置されたカマドではない。表面の凹凸が著しく、状態は右(北)から左(南)側に傾斜していた。厚さは10cm~20cmであり、本堅穴の堆積土に乗っている。平面的には馬蹄形の半分側のような形状である。焼土ブロックの左(南)側の床面上からは、土製支脚(8)が直立状態で出土した。また、支脚の左側にはSK-492があるが、支脚はSK-492と接する位置での出土である。支脚は下部が破損しており、かろうじて立っている状態であった。焼土ブロックと支脚は位置関係から、ともに使用されたものと思われる。また、SK-492内には焼土がみられるので、SK-492もこの焼土ブロック・支脚と関係する可能性がある。しかし、支脚の位置が不安定のため、一連のものが断定しがたい。支脚の破損も後にSK-492の影響を受けたためかもしれない。以上、焼土ブロック・支脚については、本堅穴の堆積土がある程度堆積した時点で、構築された遺構と思われる。SK-492についてはやや不明瞭であるが、焼土ブロック・支脚と一連の可能性が高いと考えておく。

堆積土は黒褐色土主体であり、自然堆積と思われる。

図示した遺物は8点である。1~5はロクロ成形の土師器杯である。3は口縁部内面の2か所に油煙が付着しており、灯明用に使われた土器である。被熱により、やや暗い赤褐色の色調で、器面は荒れている。5は完形で、割れもひびもない。1・4も口縁・体部の一部を欠くだけで、非常に遺存がよい。3も比較的遺存がよい。3ほどではないが、他の土器も、器面が荒れている。

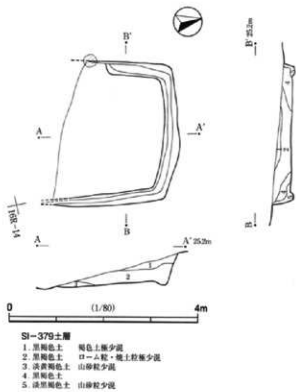
6は土師器甕で、小型品である。底部付近の一部を欠くが、他には割れもひびもない土器である。器面は荒れている。

7・8は土製支脚である。7は円柱状の製品で、ほとんど欠けていない完形品である。側面は滑らかで、稜はまったくみられず、ていねいな作りである。被熱により、赤褐色の色調であり、表面は荒れている。8は上部が遺存している。側面は大きく面取りされている。径も上部から下部にかけて大きくなるもので、7とは異なる形態である。

図示した遺物は、すべて床面・下層から出土している。6・7はカマド右袖と右壁間の床面から出土した。これらは、本堅穴で使用されていた可能性が高いと考える。1は中央左寄り、3は左壁際、4は中央、5は前壁側中央から出土した。いずれも、正位、倒位等の状況が不明である。これらは、本堅穴に直接伴うものか、近い時期の遺物群といえよう。図示しない土器片の点数は192点、重さは2.7kgである。中・上層から出土する遺物もあるが、比較的下層から出土する遺物が多い。

SI-379 (第462図, 図版137)

遺跡西部南西端斜面部の16R区に位置する。地形は北から南に下っており、南側の床面・壁が遺存しない。西辺にカマドの痕跡をもつ。出入口ピットは検出されなかった。東側から西側への方角を主軸とすると、主軸長3mの方形プランで、



第462図 SI-379

深さは0.65mである。主軸方位はN-70°-Wである。壁溝は壁が遺存しない部分を除いて巡っている。本堅穴の壁下部・床面の地山層は立川ローム上部層ではなく、やや硬質の砂層を掘り込んで、構築されている。床面は地形同様、南側が低いが、やや損なっていると思われる。東西方向は平坦である。床面の土層はやや粘りもあり、全体的にしまっている。しかし、とくに硬化した面はみられない。カマドはほとんど流失しているが、西壁中央部に若干の焼土が遺存しており、痕跡をとどめるものである。堆積土は黒褐色土主体であり、自然堆積と思われる。

図示した遺物はない。出土遺物は土器小片が1点、その重さは30gであり、極めて少量である。ロクロ成形の上師器杯や千葉産の須恵器甕片があるが、本堅穴の時期を決定できる遺物ではない。時期は不明であるが、堅穴が小規模であること、立地の傾向から、時代は奈良・平安時代でよいと考える。

SI-380 (第463図、図版137・298・299・313・314)

遺跡西部南寄りの17Q区に位置する。2.5m×2.5mの方形をなし、深さは0.6mである。北東隅にカマドをもつ。出入1ピットは検出されなかった。出入口側は南壁、西壁のどちらかと思われる。隅カマドで、出入1側も特定できないため、主軸方向の決定はひかえない。南壁側から北壁側に向かう方位はN-15°-E、西壁側から東壁側に向かう方位はN-103°-Eである。壁溝は全周する。土柱穴4か所をもつ。北東側のP1が中央寄りに位置するが、これは近くにあるカマドから遺されたためである。そのため、南東側のP2も南壁寄りに位置する。連動してP3・P4も通常的位置からはずれており、柱穴間のプランは堅穴プランに対して傾きがある。床面は北側から中央まではほぼ平坦であるが、南側はやや低い。全体にロームを踏みしめた硬質な面であり、とくに顕著な硬化面はみられない。カマドは煙道部出口部分が方形プランから突出している。両袖は奥壁に貼り付けられており、床面側には張り出していない。

図示した遺物は7点である。1は非ロクロの土師器杯である。底部から体部下位内面のヘラミガキ調整は、ミガキ痕が顕著でなく、ナデに近い調整である。色調は内外面とも、黒みの強い部分が多い。

2・3は新治窯産の須恵器杯である。2は接合しているが、ほぼ完形の土器である。カマド左袖脇の壁溝1から出土しているが、正位か倒位か不明である。口縁・体部の三か所が細かく割れている。そのうちの2か所は口縁部を2等分する位置にあり、逆三角形の形である。このうち、1か所は端部が割れた程度のごく小さなものである。もう1か所はそれよりもやや大きな形で、数片が接合するものである。主要部分も、この2か所の下頂部をつなぐ状況でほぼ二等分に割れて接合している。この2か所の逆三角形部は、その出土状況から、主要部分と離れずに出土したものである。このため、上記の割れ口は、後に割れた可能性も考えなければならぬが、遺物取り上げ後に、割れたものとは思われない。主要部分の割れ方は土圧等によるものかもしれないが、少なくとも、やや大きな三角形部分は、当初から傷程度は付けられていたと考える。割れた部分が離れていないことから、倒位の出土状況かとも思われる。3か所の割れのうち、もう1か所は主要部分から離れて出土した。位置を特定できないが、カマド内からの出土である。割れ口は緩やかな弧状である。口縁・体部の割れのうち、少なくとも、弧状のものやや大きな逆三角形の2か所は、打ち欠きされたものと思われる。色調はやや暗い黄灰色である。胎土は白雲母も含むが、長石の大粒を多く含む。3は口縁・体部の1/2弱を欠くが、底部は遺存している。色調は灰色で、胎土に白雲母が口立つ。

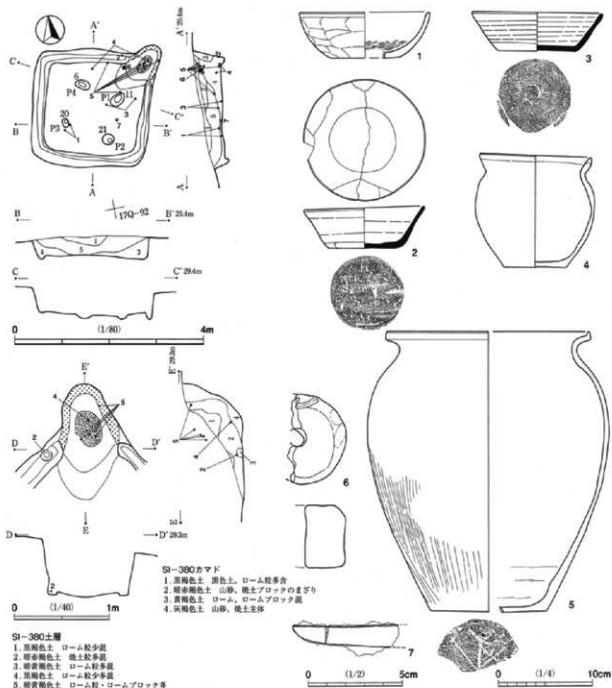
4は小型の土師器甕で、かなり遺存のよい土器である。被熱痕跡が著しく、底部を除く外面と口縁部内面は荒れ・剥離が顕著である。色調も褐色味が強い。底部および胴部外面はヘラケズリが施されているが、

胴部は剥離のため、かなり不明瞭である。5は常総型の土師器甕である。口縁部が全周遺存し、底部まで連続して接合するが、胴部の遺存は少ない。胴部外面のヘラミガキは上位の最大径近くまで及ぶ。

6は土製紡錘車である。孔を境にほぼ1/2の遺存である。径の差がなく、上面・下面の区別が判然としない。やや丸みを帯びる方(図の上側)が下面であろうか。手製の製品であるが、表面はナデが施され、焼成も良好である。胎土には赤色粒の含有が目立つ。

7は鉄製品で、刀子の刃部である。切先はX線写真では遺存していると思われるが、錆跡が著しいため、やや不明瞭である。

2は出土状況と遺物の破損状態から、カマド廃棄の祭祀に関わるものと思われる。2以外の出土状況で



SI-380カマド
 1. 灰褐色土 黒色土、ローム粒多量
 2. 暗赤褐色土 山砂、焼土ブロックのまじり
 3. 灰褐色土 ローム、ロームブロック多
 4. 灰褐色土 山砂、焼土主体

SI-380土器
 1. 灰褐色土 ローム粒少量
 2. 暗赤褐色土 焼土粒多量
 3. 暗赤褐色土 ローム粒多量
 4. 灰褐色土 ローム粒少量多
 5. 暗赤褐色土 ローム粒・ロームブロック多

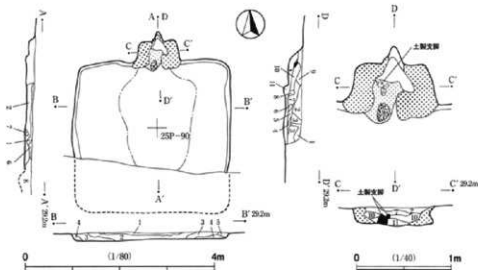
第463図 SI-380

は、4・5がカマドから出土している。4は北壁中央にも散っており、5もカマド前や北壁寄りのところに散っている。4は下層出土であるが、5は上層主体の出土である。ただし、5はやや大型の土器であり、カマド内からの出土が多いので、4とともに本竪穴で使用されていた可能性がある。1・3・7は床面・下層からの出土である。図示しない土器片の点数は102点、重さは1.1kgである。カマド周辺から中央部を主体に分布する。南壁側は希薄であり、西壁側もやや希薄である。

SI-381 (第464図、図版138)

遺跡東部東端の24P区に位置する。副軸長3.4mの方形をなし、深さは0.15mである。北辺中央にカマドをもつ。主軸は北である。擾乱を受けて、南側の壁・床面が遺存しない。出入口ピット・壁溝は検出されなかった。出入口ピットは南壁際に存在したが、失われたと思われる。床面は、北から南にわずかに下っている。カマド前から南壁側中央にかけて硬化面がみられる。カマドは方形プランから大きく突出して作られ、袖部はほとんど床面側に張り出さない。構築材は山砂主体で、左袖内壁は赤色化した部分が遺存している。袖は全体に堅くしまっている。火床部のやや奥側では土製支脚が出土した。数片に割れているが、使用時の位置と思われる。火床部底面上には、山砂や焼土粒を多く含む褐色土が堆積しているが、堅くしまった土層である。火床部前側では若干量の灰も堆積している。また、カマド前方では炭化材小片が分布している。堆積土は暗褐色土主体であり、自然堆積と思われる。

出土遺物は少量の土器片で図示した遺物はない。土器片の内訳は、常総型の土師器甕、ロクロ成形の土師器杯である。常総型の甕は東壁側中央からまともに出て出土したが、胴部の破片だけであり、図化に至らない。堆積土が割平されず、遺存が良好であれば図化可能な甕となったであろう。その他は、カマド周辺からごく少量出土した程度である。堆積土下層には、概して遺物の包含が少なかった。出土遺物が少ないため、本竪穴の時期を特定することが難しいが、カマドの形状等から奈良・平安期としてよいであろう。



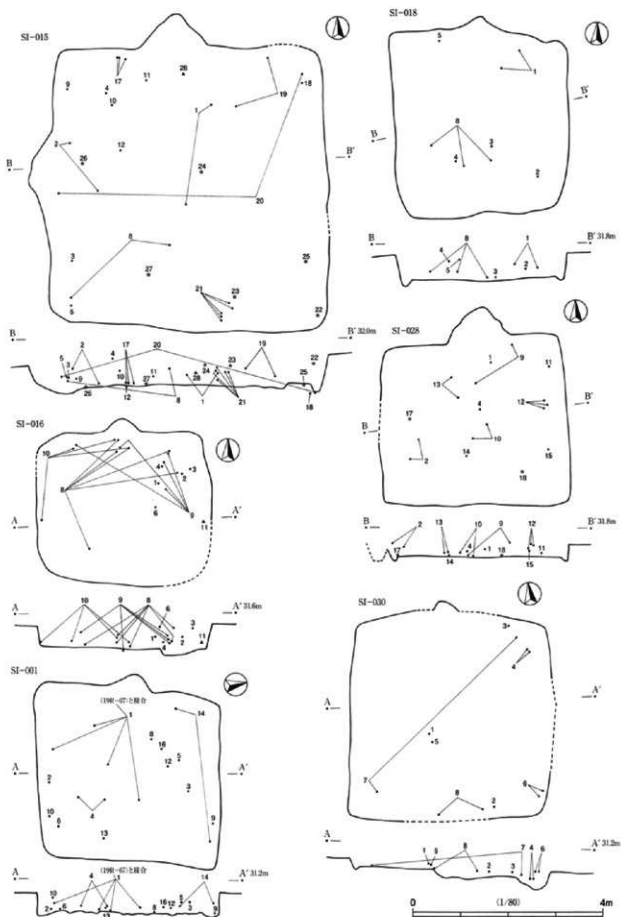
SI-381土層

- | | |
|----------|-------------------------|
| 1. 暗褐色土 | ローム粒・焼土粒やや多量・しまりが有る |
| 2. 暗褐色土 | ローム粒・ロームブロック多量・しまりが有る |
| 3. 暗褐色土 | ローム粒多量・炭化材少量・しまりが有る |
| 4. 褐色土 | 暗褐色土・ローム粒やや多量・しまりが有る |
| 5. 暗黄褐色土 | ローム粒・ロームブロックやや多量・しまりが有る |
| 6. 暗褐色土 | ローム粒多量 |
| 7. 暗黄褐色土 | ロームブロック多量・しまりが有る |
| 8. 褐色土 | ローム粒少量・しまりが無い |

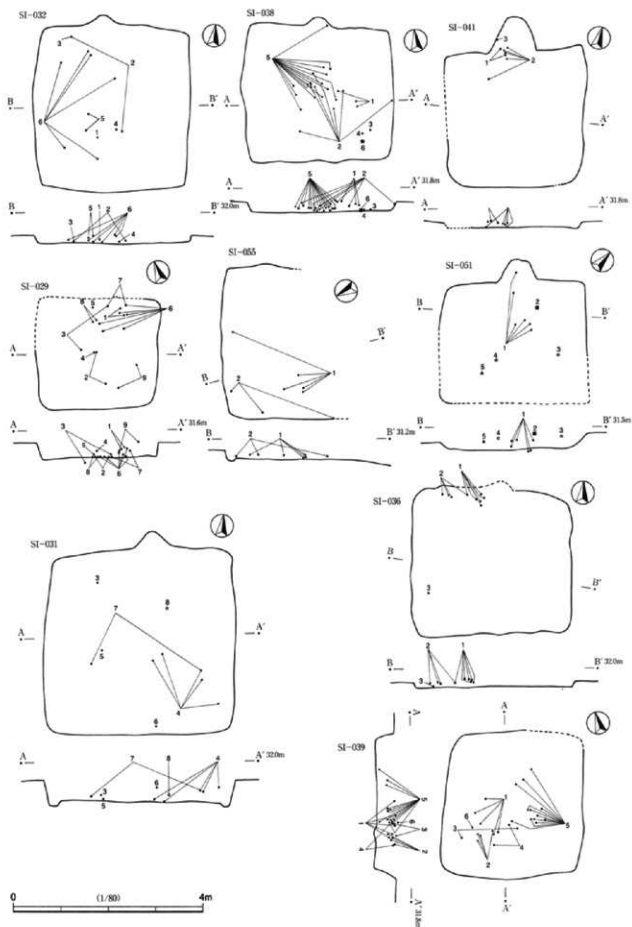
SI-381カマド

- | | |
|-----------|------------------------------|
| 1. 黄褐色土 | ローム粒・ロームブロック多量・暗褐色土少量・しまりが無い |
| 2. 褐色土 | ローム粒・焼土粒・山砂粒少量・しまりが無い |
| 3. 黒褐色土 | 焼土粒少量・しまりが無い |
| 4. 褐色土 | 焼土粒・山砂粒少量・しまりが無い |
| 5. 黒褐色土 | 焼土粒少量・しまりが無い |
| 6. 褐色土 | 焼土粒少量・しまりが無い |
| 7. 黄褐色土 | ローム粒少量・しまりが無い |
| 8. 暗黄褐色土 | 焼土粒少量 |
| 9. 淡褐色砂質土 | 焼土粒含 |
| 10. 暗褐色土 | 焼土粒含 |
| 11. 赤色土 | |

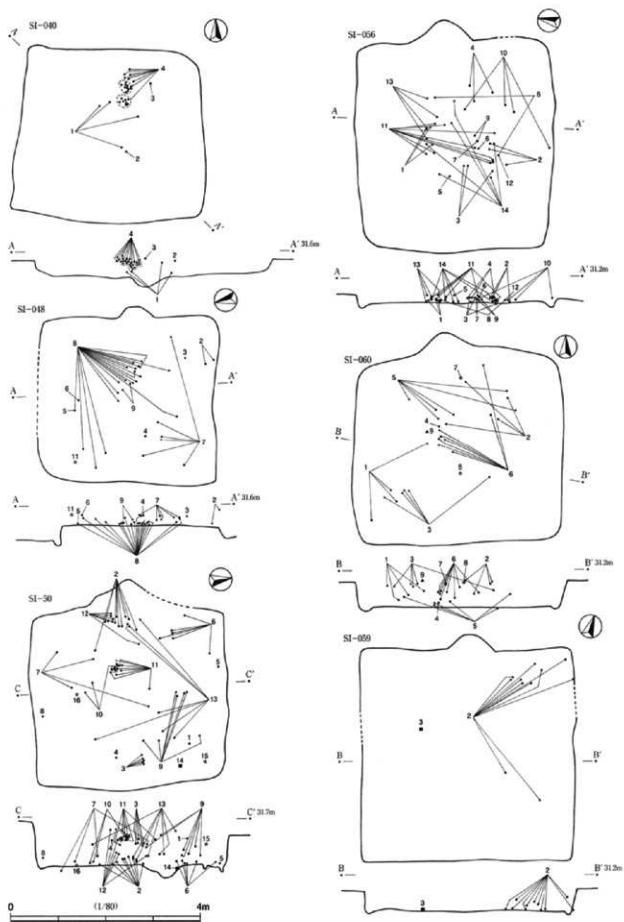
第464図 SI-381



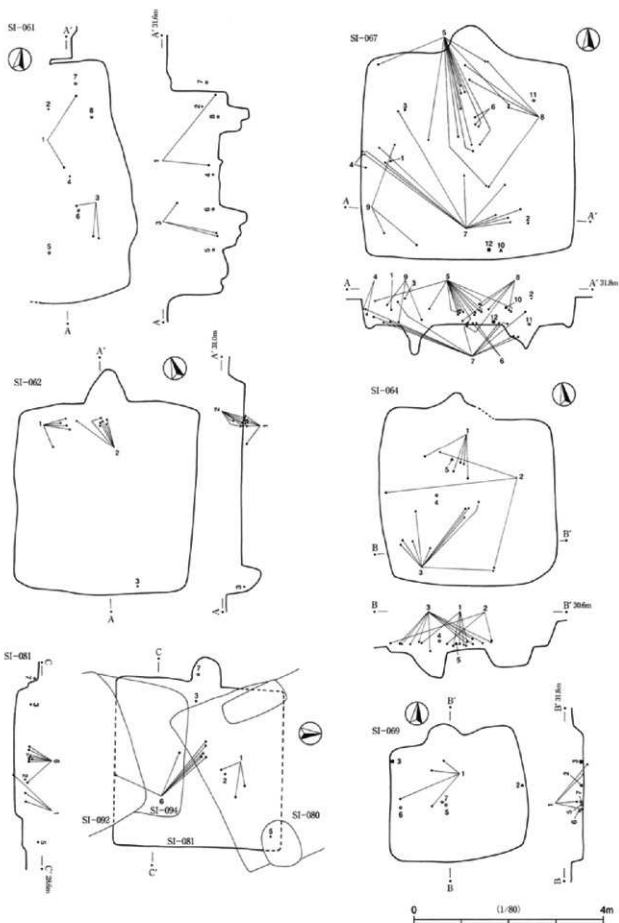
第465図 奈良・平安時代整穴住居跡遺物分布状況 (1)



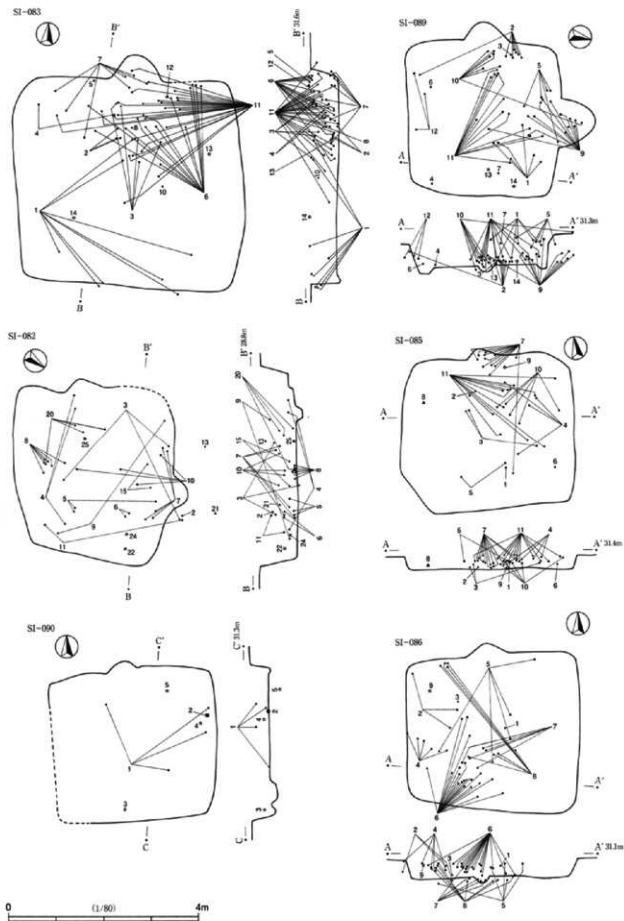
第466圖 奈良・平安時代壱穴住居跡遺物分布状況(2)



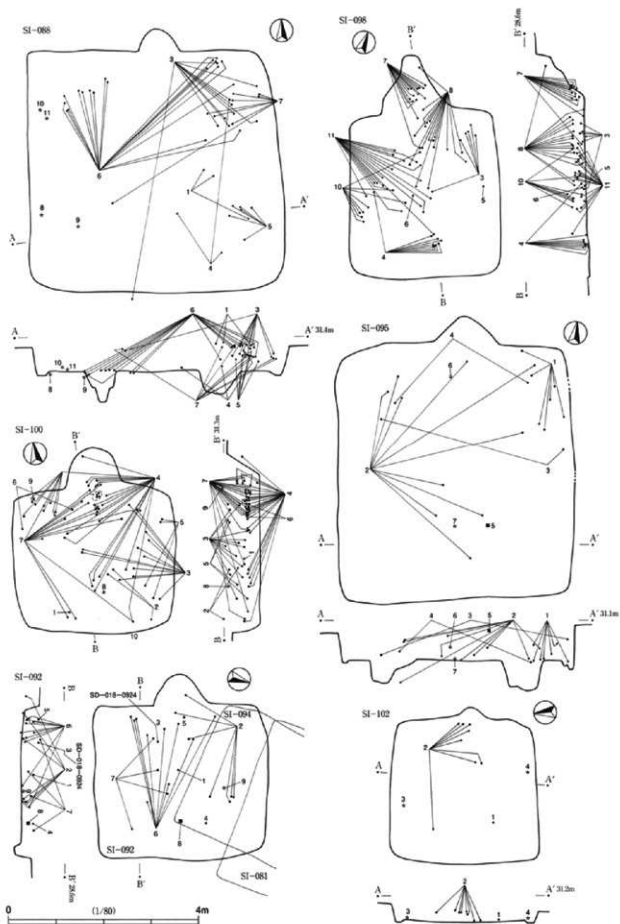
第467圖 奈良・平安時代堅穴住居跡遺物分布狀況 (3)



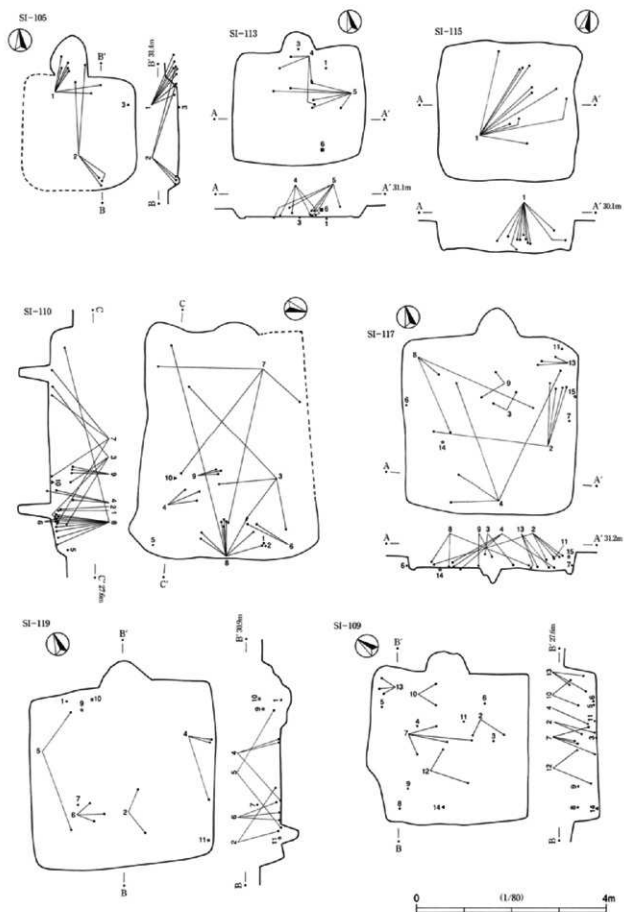
第468図 奈良・平安時代竪穴住居跡遺物分布状況 (4)



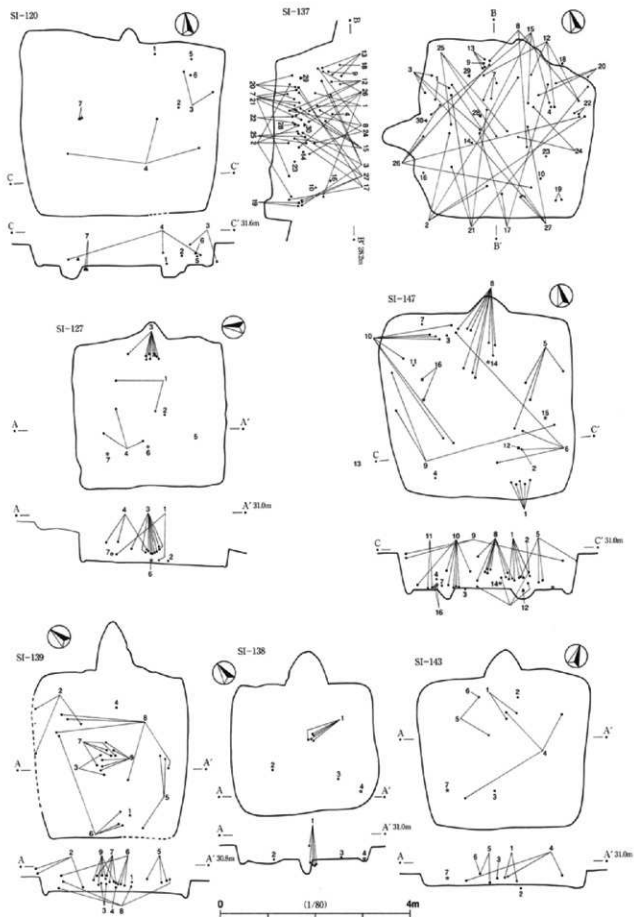
第469図 奈良・平安時代整穴住居跡遺物分布状況 (5)



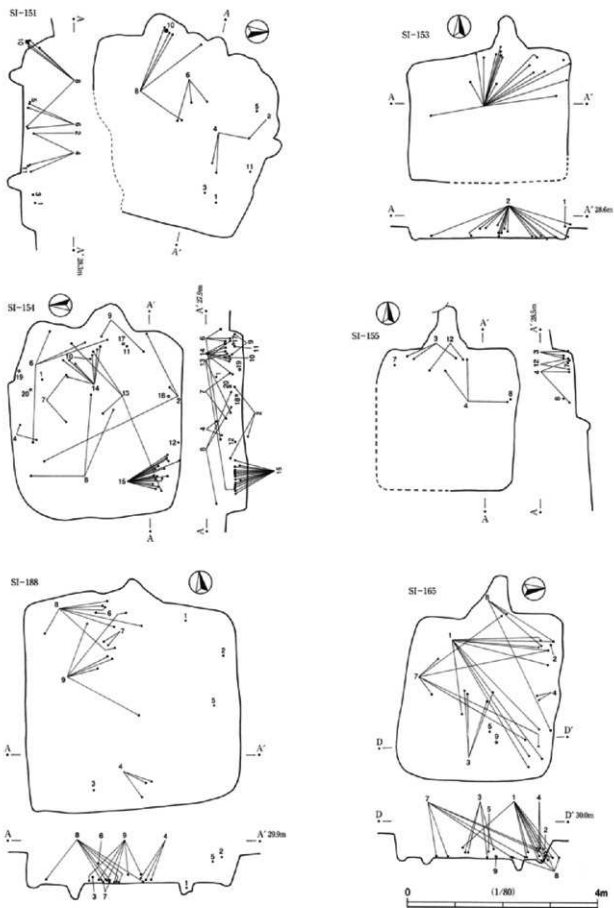
第470図 奈良・平安時代整穴住居跡遺物分布状況 (6)



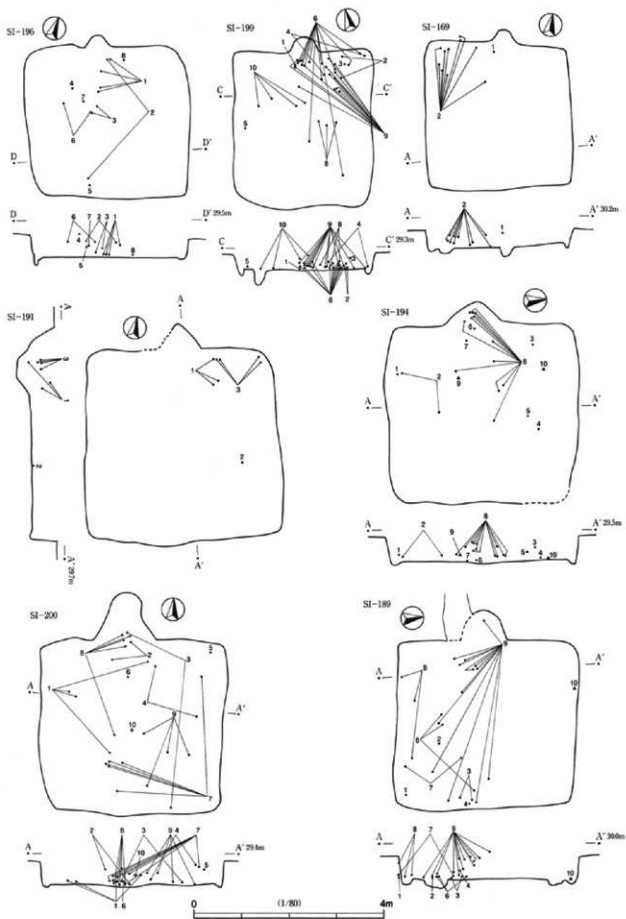
第471图 奈良・平安時代竖穴住居跡遺物分布状况 (7)



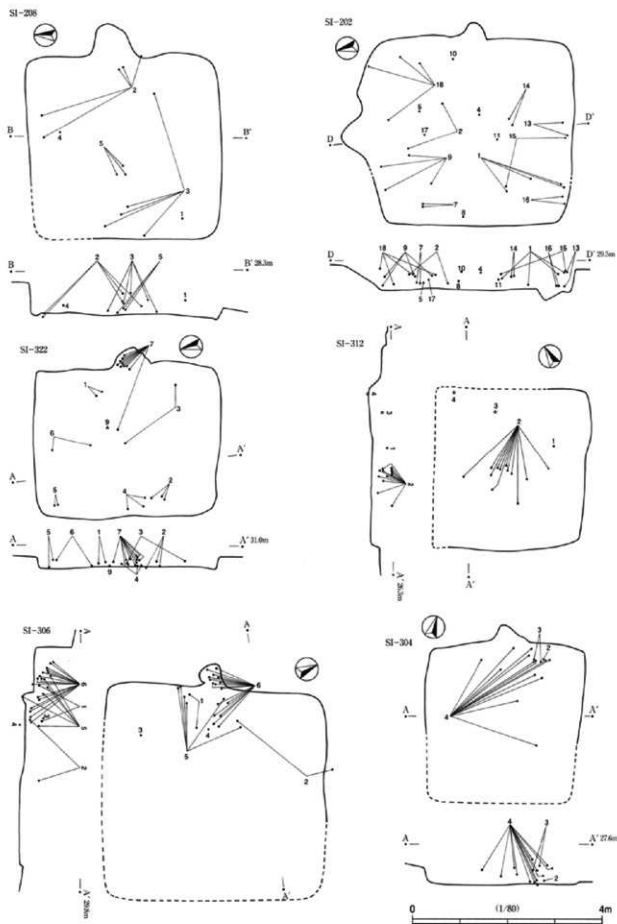
第472圖 奈良・平安時代竪穴住居跡遺物分布狀況 (8)



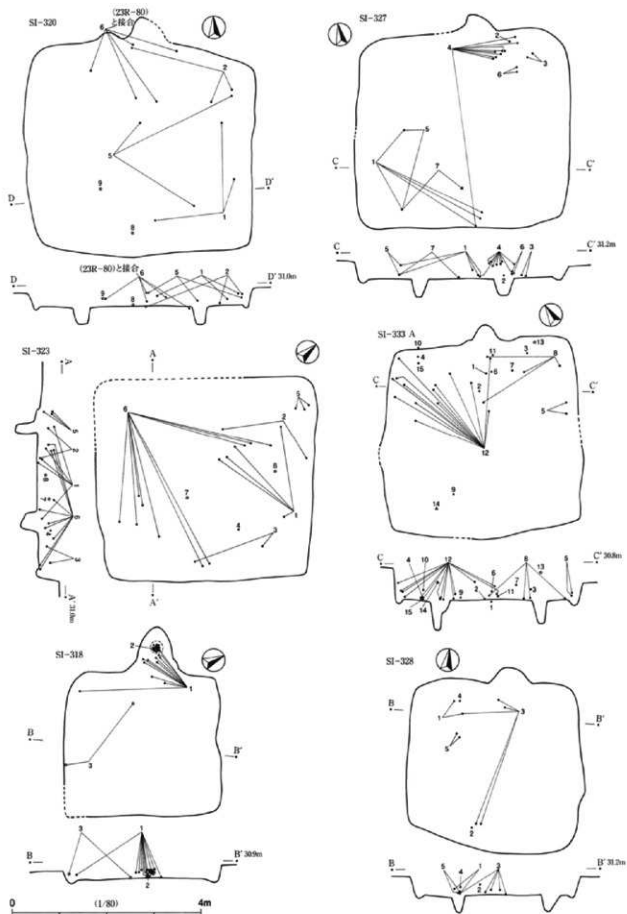
第473図 奈良・平安時代竪穴住居跡遺物分布状況 (9)



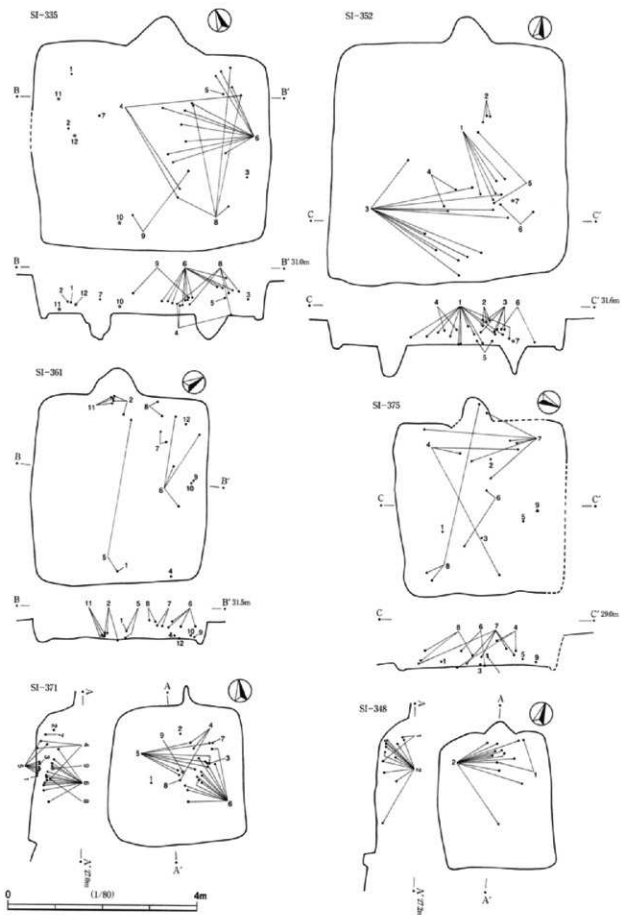
第474圖 奈良・平安時代竪穴住居跡遺物分布狀況 (10)



第475圖 奈良・平安時代整穴住居跡遺物分布狀況 (11)



第476図 奈良・平安時代竪穴住居跡遺物分布状況 (12)



第477図 奈良・平安時代整穴住居跡遺物分布状況 (13)

千葉県教育振興財団調査報告第557集

四街道市小屋ノ内遺跡(2)

- 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ -

[第2分冊]

平成18年10月2日発行

編 集 財団法人 千葉県教育振興財団
文化財センター

発 行 独立行政法人 都市再生機構
財団法人 千葉県教育振興財団
千葉県四街道市鹿渡809番地の2

印 刷 株式会社 正文社
千葉県中央区都町1丁目10番6号
